泡鳴全集

第十三巻

目次

悲劇

魂迷月中刄

一名桂吾良

序幕

(一)慈善病院二階の場。
(二)おなじく役員休息室の場。
(三)公園小山の場。

返へし

(一)大淨寺本堂の場。
(二)おなじく墓場。

二幕目

(一)宮城官宅應接室の場。
(二)看護婦雪子部屋の場。
(三)澁屋本宅玄關の場。

返へし

(一)森子爵屋敷の場。
(二)おなじく桂勉强室の場。

三幕目

(一)澁屋本宅坐敷の場。
(二)大淨寺墓場の場。
(三)澁屋本宅雪子部屋の場。

返へし

(一)暗夜大淨寺途中の場。
(二)おなじく書齋の場。

四幕目

(一)森子爵門前の場。
(二)宮城町醫居宅の場。
(三)森子爵門前の場。
(四)森邸内民子檢屍の場。

五幕目

林中夜半の場。(一)。(二)。

役名

桂吾良。
宮城純。 } 始めは軍醫。
山口進。
軍醫、赤木此馬。
子爵、森定行、(桂の叔父)。
大淨寺の和尚。
おなじく小僧、誘善。
豪商、澁屋繁太郎。
入れずみ勘太(山口の子分)。
淺見政信(赤木の友、宮城の書生)。
軍人、田邊政信(山口の友)。
家令、澤田辰之進。
寺男、莊平。
警察署長、日高秀太郎。
病人二三名、他の軍醫數名、賊數名。博徒三名、仕出し數名、其他。
看護婦、上田浪子。
おなじく澁屋雪子。
森民子。
侍女、お松。
定行妻、瀧子。
繁太郎妻、お鶴。
女中、お鍋。
看護婦長。
老婆二名、其他。
浪子の靈。
姉の靈。

序幕

(一) 慈善病院二階の場

(本舞臺、上手より煉瓦造りの二階の一室、二三人の病者寢臺に寢て居る、その一人の傷を、いま、上田浪子がくゝりかへやうとして居る。夜半、電氣の月光さし入る。この模樣よろしく幕開く。)

浪子　さア、お起きあそばせ。よくくゝりかへてあげませう。

病人　ありがたう御座りまする。まことに馬鹿な喧嘩をいたしまして、こんなにうづき出しまして、この夜中にまた御厄介をかけまする。

浪子　いえ、なアに?——何んと申しても、おつむりですから、……

病人　へエ。

浪子　それで、すこしいたみはきびしう御座りませう。

病人　へエ、左樣で御座りまするか?

(繃帶をくゝりかへてしまふ。)

浪子　さア、これでよろしう御座りませう。

病人　左樣で御座りますか、ありがたう御座りまする。
浪子　これでおやすみあそばして、またいたみますれば、……
病人　はァ、ありがたう御座りまする。
（病人もとの如く横たはる。浪子明いてゐる窓のもとなる椅子にもたれる、舞臺うす暗らくなり、どろ〳〵、すべて寢臺を引き拔き、あとに姉の靈あらはる）、
靈　浪子〳〵。
浪子　（身を起す）、まァ、姉さん、どうしていらッしやッたの？――あなたはほんにあの世で、おとッさんやおッかさん兄さんと御一所だから、わたしやうらやましうてねェ、――ひとりのこるわたしは、もう、うらみなはこのからだ。たとへ、この廣ろいあめつ地が消えうせても、いま更らおそろしうは御座りません。いッそ、死んでしまッたら。この苦勞も無くなるものを、それではまた、この世にうまれた甲斐なければこそ、かうしていつもつとめて、人を助けて居ますが、わたしや人にかほを見られるのがねェ、いやでたまりませんよ。
靈　いもとゝしたことが、まァ、うらめしいわいのう。さう匿くさずにいッたとて、あねでや無いか、何んの耻ぢ？　たゞ一とことと、桂さん慕たッて居ると……
浪子　あら、姉さん！　おッかさんもおッしやッたでせうに。――「血のけがれたこの家、どうせこの世のうもれ木、おまいもよめに行ッたとて、またあねのやうに捨てられ、うらみ死にをさすが悲しい。」

――「いえ、もう、わたしは決してよめ入りはいたしません。おッかさん、それは心配してくださんな」と、あなたのうらみ死にがわかッたあとで、ふたり泣いてちかひましたを、もう、あなたもお聴きなさッたでせうに。それに、どうして、桂さんお慕たひ申されませう？

靈　だが、まァ、しのびがたきはこのかよわひをなごのむね、世のなさけにほだされ、いなまれぬ義理もある。

浪子　あら、まだ姉さんはうたぐッて！　たとへ、わたしャ桂さん愛して居ても、それはね、あなたを愛してるのとちッともちがやャしませんわ、兄弟のやうにしてェるのですから。いち度、わたしャ身のうへはなさうとおもッても、こればかりはどうしてもいひにくゝッて。

靈　あゝ、浪子！　かうしたあねのうらみも、たゞ血すぢの腑甲斐なさ。これがもとで、おまいもまた未來までも……

浪子　えゝ？

靈　かなしや、またうらみがのこるぞよ。

浪子　それャ何んと？

（大どろ〳〵、幽靈消ゆ、あと、もとの如く月皎々、浪子椅子にもたれて目のさめたこなし。）

浪子　いまのはゆめであッたか？――お慕たはしき君ゆゑ、こころはひとり焦がれても、まことつらいはこの身のうへ、何んたる神のさだめか、けがれ果てた血のすぢ。「これがもとで、おまいもまた

未來までも」とは、早やいまからうらめしい恥ぢ持てるこのからだ。（窓より、下を覗きつゝ）その樹かげに御座るこひしき兄うへ、何にをひとりで思案のふちに沈むみこゝろ、おなさけ深かいあなたは、わたしゃゆめにもうつゝにも決してわすれませぬ。たとへ、わたしはわけあッて、全くつらきまじはり絶ッては居りますれど、どうぞ、桂さま、（手を合はす）このいやしいわたしをながくいもとゝおもッてくださりませ。

（奥より、澁屋雪子。）

雪子　上田さん。

浪子　はい。

雪子　どうして、窓をあけたり？

浪子　ひとり言をいッてたの。

雪子　ひとり言？　（窓によりかゝる。）まァ、この月、いゝことね！　こころから冴えわたッては、なかなか、居寐むッたりする人のまねは出來ませんよ。

浪子　それでこそ、あなたはわたしのいもと。

雪子　さうですとも。（かたわらの椅子を以ッて來て、これに倚る。）どうもいゝ月なこと！　考がへてると、ちッとも寐むたくはありませんよ。

浪子　それはさうですが。

雪子　當番はたび〳〵だっても、こんな月は無いことね。
浪子　まァ、めづらしいことですとも。
雪子　うれしいやら、かなしいやら、まァ、どうしたらいゝのでせう？
浪子　どうもしませんわ。
雪子　それでも、こんな時にはなしでもしなけれきァ……
浪子　わたしはいまゆめを見たの、病人を看護してェたとおもったら亡くなった姉さんに逢った。
雪子　そんなら、やっぱり寐むってたんでせう。
浪子　それきァ、わたしだって寐ますわ、だが、氣がかり。
雪子　どんなゆめ？
浪子　いえ、なァに、何んでも無いの。
雪子　いってもいゝでありませんか？
浪子　聽いたって、仕かた無いでせう？
雪子　それでも、聽きたいもの。
浪子　そんなら、見たとしとけばよろしい。
雪子　だって、寐むったり、あの人に見られたら、不勉強だといはれるに。
浪子　どうして居るやら？

雪子　ほゝゝ、わからないッて！　きッとあの樹陰で考がへていらッしゃいますわ。（立ちあがつて窓に倚る）呼んで見やうか？

浪子　これ、馬鹿な、およしなさい。

雪子　まさかわたしャ馬鹿でも、そんなことを？――あなたのやうにしャべッてよく耻づかしく無くってまァ。（もとへもどる。）

浪子　わたしだッて、いつどこで、どんなことしャべりました？　わたしはいまゝで、あの人のことそんなにしャべッたおぼえは御座りません。

雪子　ほゝ、なにも、そんなにおこらなくッてよう御坐んす。

浪子　それでも、そんなにいふから。

雪子　はい、御免なさい。

浪子　澁谷さん。

雪子　はい。

浪子　あなた、なぜ、またそんなに――ほゝ、ふくれなくッてねェ。

雪子　ふゝッ！　ふくれて居ませんわ。

浪子　いまおこッたからすが、また出て吹き出したわ。――あの、澁屋さん。

雪子　なに？

浪子　あの、宮城さんはね、……

雪子　なに？

浪子　あの、いやな人ですねェ、奥さんを持ちながら？

雪子　さう、いやな人！あの、きのふ、わたしの部屋へ來てね、――失敬では御座いませんか、――なんぼ馬鹿だって、あなたを。――馬ァ鹿！欲しいっていってくれって、そうすると、自分もわたしの兄だからと。

浪子　えゝ、そんなこと？――馬ァ鹿！――して、あなたそのときどういって？

雪子　どういってゝ、わたしゃ腹が立ったし、耻づかしかったし、あきれたから、だまってた。

浪子　だまって？

雪子　いえ、わたしゃぢきおもひ切ってね、そんなこと知りませんといってやったの。

浪子　氣味がいゝわ。――きのふもね、切斷室に居たら、だまってわたしの手を握ぎらうとしたのよ。

雪子　そんなこと、まァ、ほんとにあったんですか？　まァ、こわいこと。――うか〳〵しては居られませんねェ？

浪子　若しいふ通りになったなら、わたしをどうするつもりだらう？

雪子　わたしゃこわくってよ、胸がどき〳〵するわ。

浪子　そんなに卑恐な人なら、もう、たよりにしません。なぜをとこらしく無いだらう？

雪子　それでも、宮城のやうなわるいものがあるもの。
浪子　世間にでたら、なほ更らけがらはしいことばかり。
雪子　あゝ、もう、交際はたゞ三人。
浪子　互ひのむね開らけて、一點のくもりのこさず、……
雪子　さえ渡る月のうち、……
浪子　はゆると聽く桂の……
雪子　その名きよき人こそ、……
浪子　ふたりが身の兄うへ。
雪子　あ、その兄上のもの、これを。（懷中より一通。）
浪子　なに？
雪子　さア、あげませう。
浪子　あなた、いつ賴まれて？
雪子　お晝ごろ。
浪子　さう？　ありがたう。
（讀み終って、椅子にもたれる。）
流屋さん。

雪子　はい。

浪子　あなた、赤木さん知ってゝ？

雪子　（はッと胸に堪へたこなしで）それ知ッたッて、――ねェあなた、いまの手がみは何んです？　どうぞ見せて。（取らんとする。）

浪子　いゝえ、これは。（押しかくす。）

雪子　どうぞ。（また取らんとする。）

浪子　いけません、この子は！

雪子　そんならよろしい、御勝手になさい。わたしひとりのけもの。よろしいです、わたしは。

浪子　またふくれていらッしゃい。

雪子　それでも、そんなに。――あなた、あのう、それ、赤木さんは、ねェ、

浪子　はい。

雪子　なぜ、そんなにとぼけて？

浪子　何んの、とぼけますものか？

雪子　それでも、あなたは。――あのう、あの人は、あの、どんな人でせう？

浪子　澁屋さんのおしたひなさるおかた。

雪子　また、そんなこと、あなたは。どうですよ？

浪子　それは、あなた、桂さんのお友だちですから、活潑なおかたですとも。軍人軍醫の常として、つるぎ帶びるすがたはひかりいともいさましく、むねにこもるなさけはみどり深かき愛の川。
雪子　それゃ神かけて……
浪子　お墓たはしき……
兩人　人じゃなァ。（隣室にて病人のうめく聲。）
浪子　また目が覺めたかして。
雪子　早やく行っておやんなさい、苦るしんでますよ。
浪子　わたしは、あさって、休暇を取りますよ。
雪子　なぜ？
浪子　よそへ行くから。
雪子　そんなら、いまの手がみが、……
浪子　まア、かういって來ましたの。（手紙を出して、之を讀む）「明後日は父の十周忌に付、墓參致すつもりに候間、御身も休暇を取つて、一所に御つき合ひ下されてはいかがに候や、御話し申し度事はいろいろ有之候。桂吾良。上田浪子樣。」
雪子　わたしも行きたいわ。
浪子　そんなに行かれますものか？（またうめく聲）あれ、苦しさうに。早く行ってやりませう。また、

あとで。（立つ）

雪子　わたしも見まはッて來ますから。

（木のかしら、兩人入る、またゝめく聲にて、道具廻はる。）

（二）おなじく役員休息室の場

（本舞臺、上手より休息室、下手よきところ壁、がらす窓二つ三つ、廊下を越えて下手、他の室の窓を見せる。室の正面、上手へよって戸びら、下につゞいて帽子掛、帽子外套などかゝッて居る。軍醫甲乙丙丁、立てるもあり、椅子なるもあり。）

甲　（ポッケットより時計を出して見て。）もう四時だ。

乙　諸君・さァ・歸いらう。

丙　さァ・歸いらう。

丁　しかし、けふの議論・なか〳〵愉快だッたなァ？

甲　この病院で、あんなことァはじめてゞあらうよ。

乙　さうさ、院長もおどろいて居ッた。

丙　なる程、桂は獨逸まで行ッて來た甲斐があるやつだ。

丁　院中で、きゃつはなか〳〵氣骨ある男子・人物だて。

甲　氣ちがひのやうな人間だが、ちっともおそれないやつだわい。

乙　それにしても、位地からいへば、上に立ッて居る宮城が、なぜ飛んでも無い診斷したのだらう。

丙　矢張り、ほんとの學問やッて來たものにャかなはんて。

丁　あんなに哲學をすきなものに、バクテリヤの道理なぞァわかりさうも無いが。——あゝいふ腦髓が欲しいて。

甲　きみャいつも桂びいきだが、爲めに免職食らッてャならんぞ。

丁　はゝゝゝ！

丙　ならうなら、誰れも長官のさじ加減はうかゞひたく無いのさ。

乙　今日は至たるところ、自分のあたま叩たいて、平氣で食らッてる世界だ。

丁　どうしたッて、この官吏社會、上に諂つらッてるやつァ、しもに對して意張るんだ。

甲　お互に、その意張るやつに意張られるのが、何によりなさけない。

乙、丙　しッ！（奥より宮城純、みな禮する。）

宮城　お歸へりですか？

みな　はい。

宮城　御一所にまゐりませう。

甲　左樣ですか？

（宮城は外套を着、帽子をかぶる、あとの者は、うしろ指をさしたり、服を引き合ったり。）

乙　すこし天氣はくもッて居りませんか？

丙、丁　なァに、上天氣。

宮城　さァ、まゐりませう。

甲　どうぞ、お先きい。

甲、乙　どうぞ。

丙、丁　さァ。

宮城　それでは、失敬。（奥より赤木此馬。）

赤木　いまお歸へりですか？

五人　失敬。（五人入る。）

赤木　（ひとり椅子に倚る。）不斷意ばるあの宮城、けふに限ぎッてすごすごして行くは、なる程、けさ桂とあの議論、こ堪へたのに相違ない。あんなやつは好まないが、しかし、あれもわが長官。

（奥より桂吾良。）

やァ、まだ歸いらなかッたか？――けさの宮城、どうだッた？

桂　（椅子にもたれる。）まァ、すこし懲らしたら、よくも成るだらうよ。

赤木　しかし、まるで何にも知らん。

桂　無學なことは、いま更ら知つたことでやァあるまい。

赤木　よッぽどつよくこ堪へたと見える。

桂　さうだらうて。

赤木　いま歸いッたが、すご〳〵して居たわい。

桂　（おも入れ。）父のかたき、これしきでは置かぬぞ。――赤木君僕あす一日の休暇をもらった。

赤木　どこか行くか？

桂　あすは父の周忌なんだ、墓へまゐる。

赤木　どこかね？

桂　父の墓は大淨寺にある。

赤木　あゝ、大淨寺か？　（下手より澁屋雪子、廊下を通り過ぎる。）

桂　きみ。（指さす。）

赤木　あれが澁屋浪子だな？

桂　（微笑）きみャァ知ッてるでャァないか？　（赤木まのわるさうなこなし。）上田とは親たしい。

赤木　だが、きみ、ほんとかねェ、上田孃を慕たッてるのは、………

桂　誰れが？

赤木　宮城がさァ？

桂　なァに、それャあうそだらうて、きみ。向ふで、よし、慕たッたとてさ、きみ、――まァ、よく考がへて見たまへ、妻がある身で無いか？

赤木　さうさ、僕はたゞ人より聞いた通りいッたのだ。

桂　それャァ、きみ、上田孃には見識があるわい。

赤木　しかし、宮城が自分のつまをきらッてるのはほんとだ。

桂　きらッたにしろ、嫌らはんにしろさ。(時計を出して見て)公園をすこし散歩して歸いらう。(立つ)

赤木　それがよからう。(立つ。)何んしろ、けふの議論(木のかしら)

兩人　愉快だッた。

(兩人外套帽子を取る見えにて、道具まはる。)

(三)　公園小山の場

(本舞臺すべて木の繁げッた小山の體、腰かけ二つ三つ。仕出し三人腰かけて居る。)

一　どうも、こゝろ持ちがいゝ、毎日苦るしい目をして、ここいやッて來ると、さッぱりすらァ。地獄から極樂へでも飛び脫けたやうだ。

二　ちげェねェ。お上もなか／＼氣がきいて來たわい。

三　しかし、このごろの不景氣にャァ平口だねェ？

一　しかし、こちとはくちがあるから、いゝでャアねェか？
二　まア、どうやら、斯やら、まごつかねェが。
三　けエツて、かゝアにがみ〳〵いはれるにャア平口だ。
一　それャア手めェばかりさ。、おいらァぐづ〳〵ぬかせャア、ぢきに一とつ食らはせてやらア。
三　やツぱり、となり近處の厄介でャアねェか？　喧嘩の駄賃でも取れゝャアいゝが。
二　かゝアを瞞づいておわしが取れゝャア、これほど氣樂なこたァねェ。
一　まさか、こじき坊主の木魚でャアあるめェし。
三　これャアおもしろい。
みな　はゝゝ
（下手より軍醫山口進、軍人田邊政信、かたわらの腰かけにかける。）
一　それャアさうと、おい、けふの女は花だなァ？
二　ぞッとするほど、器量がいゝや。
三　あれャアさうさ、慈善病院のすてきなやつだ。
一　あゝいふをんなが抱いて見たいて。
二　それャアあわびのかた思ひさ。
三　あすこァお上の建てた病院で、貧乏人はたゞで入院させてくれらア。

一　それャアあり難てェが、あの女にいち度看護してもらいてェな。

三　馬鹿ァいゝねェ。こちとのやうな貧乏人を、助けてくれる女がみとおもへ。

一　そんなら、「がンけのつゝじ」だな。

二　「および無きゆゑ、……

皆　見てくらす」だて。

山口　きみ、暫らく逢はなかつたが、どうして居る？

田邊　矢張り、相變らずだ。

一　さァ、もう、けェらうよ。

二　のろけてェても仕かたがねェ。

三　けェッて、かゝァでも胴づく方が、よッぽどましだ。

（三人捨ぜりふにて下手へは入る。）

田邊　きみの病院のうはさでャアないか？

山口　さうさ。困まるんだて。

田邊　あゝいふやつァ、もう、仕かた無いもんだて。

山口　さうさ、駄目ださ。

田邊　どこにでも、あるもんだが。

山口　こればかりは、さじ加減ではいかないし。

田邊　僕のやうなものァましてだ、劍を振りまはしたって仕かたがない。

山口　やッぱり、道德家にまかさうか？

田邊　さうさ、それが十九世紀の分業法さ。

（下手より、入れずみ勘太、竊かに山口を招く、山口向ふへ行けといふこなし。勘太まくった腕をたゝいて、この入れずみを見よがしの意氣）

勘太　おやかた。

山口　これァ、何んだと？――きみ、ちョッと失敬。（田邊にことろして、立って行く。）うぬ、向ふへ行け、馬鹿野郞！

勘太　ヘン、そッちがさうなら、こッちも入れずみ勘太だ、いくらァいまァ出世したって、もとァおれのおやかたでャアねェか？　昇ぼる落ちるもおれのくち次第だ。そッちの爲にもおもッてやれャアすこしャアこッちの賴みも聽いてくんねェ。――おやかた、こないだから賴んだかねャアどうだね？

山口　それャア、やらねェでもねェが、いまァ持ってるもんか？

勘太　そんなら、いつくれるんだ。

山口　あすの夕かた來るがいゝ。

勘太　うそでャアねェか？

山口　そとこだ。――早やくけェれ。

勘太　それでャア、きッともれェに行きますぞ、おやかた。――わッちもおやかたの爲めェおもって、何にもいはねェのだから。

（勘太下手へは入る、山口もどる。）

山口　失敬しました、田邊君。仕かたが無いッて、あんなものァ。

田邊　何んだね？

山口　あれか？　あれはね、僕が東京へ來たはじめ、召しつかッたものさ。いつも無心にャア困まるッて。

田邊　義理も何にも知らんやつァ、どこい行ッても厄介だて。――それはさうと、山口君、桂吾良とかいふ人物は、ちかごろ獨逸から歸いッて、きみの病院ではなか／＼學者ださうだし、きびしいてねェ？

山口　なァに、あれャア、哲學だとか、へちまだとか、何んとかかんとかひねくッて、くち先きだけ立派だわい。あんな氣ちがひが居ては、きもだまちく／＼さゝれるやうで、困まる。

田邊　しかし、あの風采、氣質で、なか／＼猛けしい。

山口　あれもそんなの爲めださ。

田邊　そんなの爲めで？

山口　それァきみ、、柔弱(にうじやく)なやつもいつはッて、をんなの氣嫌取る爲め。活潑に見せる、それァ丁度、ぬすとなどが出世して、まじめになるのとおなじことよ。

田邊　えらい精はしいねェ?

山口　何にがさ?

田邊　何んしろ、そんなら、いろがあるんだね。

山口　さうさ。

田邊　しかし、桂にァいひ名づけがあるんだぞ。

山口　そんなことァ知らんが、おもひおもはれてるんさ。

田邊　きみ、何んといふをんなだ?

山口　いまのうはさのやつよ。

田邊　誰(た)れだ?

山口　上田浪子といふやつ。

田邊　なに、上田?

山口　きみァ知ッてるのか?

田邊　もち論、あれァ、きみ、桂といぬねこのやうな宮城が惚れてるでァ無いか?

山口　なに、宮城が?――それァ、きみ、どこでそんなこと聞た?

田邊　僕ァある人から聞いた。あれのあねは、きみ、子爵片桐へ行ってる。
山口　片桐！――それァ、きみ、僕が居ったところだ。それでァ、きみ、あいつもかったいだぞ。
田邊　癩病？　どうして？
山口　それはかうだ。僕があすこに居ったとき、あれがあねなら癩病で、それが主人にわかってさ、――それも、兄がフランスでくづれたから、知れたんだが、――出來た子まであはせて座敷牢に押しこめられ、つひにうらみ死にをしてしまった。
田邊　それだから、あれも美人なんだね。――しかし、きみがあすこに居ったとは奇妙だねェ？
山口　なぜ？　僕も人間ださ、どこにもちがったとこァ無い。（いやにからだを見まはす。）
田邊　はゝゝゝ
山口　しかし、きみ、宮城が惚れてるのァほんとか？
田邊　ウン、それァちがい無い。
山口　却って中に居る僕らは、ちッとも知らねェが、――しかし、いゝ議げんのたねだなァ。
田邊　なに、いゝ懺悔だ。
山口　いやさ、いゝ訕謗をされたものだて。
（向ふ揚幕より桂吾良と赤木此馬。）
赤木　きみ、かうしん〳〵してゐるとこはこゝちがいゝねェ？しんとする。上野の奥も閑靜だが。

桂　しかし、いまにどれもこれも俗化してしまうから。

（すゝむ。）

山口　やつて來たぞ。

田邊　うン、やつて來た。（桂赤木舞臺に來たる。）

山口　やツ、きみ、日本のレツシング君。

赤木　失敬。

山口　桂君、まァこし掛けたまへ。

（兩人はとなりの腰かけ。）

桂　きみ、まァ、向ふを見たまへ。

赤木　けふはよく晴れてるねェ。

山口　格別ですなァ？

赤木　よく見える。

山口　桂さん、けふはなか／＼あつぱれでした。

桂　ふン！

山口　何んしろ、宮城はまるでわからん。

赤木　まァ、兩虎相たゝかつたのだ、これで、あとの人らが目をさませばいゝ。

山口　ふゝン、乞ふ、槐よりはじめだ。
赤木　なに？
山口　いやさ、兎角人はくちが早やいて。
赤木　きみがか？
山口　誰れでもいゝ、ほっとけ。人が柔弱になったのも、かったいのをんなにまよってる馬鹿っつらにくっつくからだ。
赤木　山口君、それァなにを？
山口　何んでもいゝさ。――さァ、田邊君、歸いらう。
田邊　さァ、歸へりませう。（立つ。）
赤木　お歸へりですか？
山口　こゝで、おさまたげはいたすまい。（立つ。）
田邊　失敬。
桂、赤　失敬。
山口　これァ失敬。さァ、歸いらう。（すこし行いて振りかへる。）あとで、おのれ、へこたるな。（兩人は花道へかゝる。）
桂　あんなあくた見たやうなものァ、相手にしないがいゝ。

赤木　それやア、きみ、しかし、まア、同僚だからねエ。

（向ふ揚幕より、森民子と侍女お松、花道にて、山口、田邊とすれちがふ。）

田邊　きみ、見たか？　あれが、きみ、桂のいひ名づけださうだ。

山口　あれが？――ウン、またいゝ訕謗のたねが。

（兩人はあげ幕へ、兩人は舞臺。）

お松　あら、吾良さんが、おほゝ、誰れかとおもったら。

桂　おゝ、民子さん、どこへ行ったの？

お松　これはおめづらしいこと。いま、あなたのお父さまのお墓へお詣りいたしまして、歸りがてら お嬢さま、お氣ばらしに、こゝまでおいであそばして。

桂　それは御苦勞でした。まア、お掛けなさい。

お松　はい、ありがたう、おそくなりますと、おッかさまが御心配あそばしますから。

桂　わたしも、あす、詣ります。

お松　あの、お墓へ？

桂　詣りに。

お松　あ、左樣ですか、それでは、お父さまも草かげで、さぞおよろこびあそばされませう。

桂　民子さん、勉强しますか？

民子　いえ。（ほろり、うらみのこなし。）

お松　お嬢さまは、このごろ、すこしおふさぎあそばして。

桂　それはどうして、民子さん？　をんなは胸がちいさいから、あまり心配せんのがいゝ。

お松　それでも。をなごですから。――さァ、お嬢さま、歸いりませう。――あなたはどうぞ御ゆっくり。

桂　歸いりますか？

お松　御免あそばせ。左樣なら。（民子、お松について蹬して、上手へは入る。）

赤木　誰れかね？

桂　あれか？　あれは僕のをぢの子だ。

赤木　そんなら、きみのいと子だね。

桂　僕ァちゝのゆゐ言があるんで、桂の家を繼いでるものは、僕でァなくってあれなんだ。あれが桂民子と名のってる。

赤木　それァまた、どうしたことだ？

桂　それにはいはれないわけがあるのさ。――何んしろ、いまの山口、人のまへではあんなこともいへるが、宮城のまへゝ出たら、きみ、ぐっともすッともいへぬかへるだ。

赤木　しかし、まァ、同僚だからねェ。

桂　こゝに、おもしろいはなしがある、どこかの或役者だが、たぬきのおどりで大あたりさ、ところが、きみ、その興行、世に害ありと禁ぜられ、そのすぢに泣きついて見たら、豈圖らんやで、まへの金たま切り去ッてしまへとの御命令であッた。きみ、いまの世間は、みなおほきなはち丈じきをぶら〳〵、提げそこなッたら失敗さ。それを、横から助け荷なッてやる山口だ。

赤木　それャア、どうせ、馬鹿なやつさ。

桂　赤木君もすこし、宮城にャア注意したまへ。

赤木　それャア、きみ。

桂　ふンあれャアドラマのたねにャア持ッてこいだ、人の父を毒殺したかたき。

赤木　それくらゐの惡人に仕くんでやッてもよからうよ。——ところで、きみ、戯曲(ぎきよく)なぞァ、世に限りないたのしみ與へてくれるもんだねェ？

桂　それャアもち論、大俗中の大聖とでもいふべきもの、その根どろにはびこッて、毫もけがれにそまらず、天風のあしたほころぶはちす淸きその花。人よろしくその氣をむねひろげて呼吸せよ、手にこれを取らんとせば、忽ちどろにおぼる。その深かきすがた、餘情、さぐり入れば入るほど、矢張りわからなくなる。天地(てんち)のこゝろいづくに求べきか、この人生！　うかり〳〵食らッてる世間の人を目さまし、おのが身をかみくだくくちを、きみ、持たしたいでは無いか？

赤木　それャア、その慷慨(かうがい)、きみはいつも尤もだ。

桂　何にも、これが慷慨でも何んでもないさ、思想家に。

（入相の鐘。）

あれは入相の鐘。無常のひびきひろがるなみ輪のやうに、智識も限りなくばよかつたに。

赤木　きみ、もう、歸いらう、入相ひのかねにさそはれて、とでもいふのかねェ？（立つ。）隨分、ながくはなしたわい。

桂　（立つて、ゆび指す。）きみ、あの一とつぼしを！　見たまへ、ちいさく一とつひかつてる。

赤木　あれか？　しろくぴか〱、見えたりかくれたり。

桂　かゝる自由のたましひに……

赤木　なりたき（かほ見合はすを木のかしら）

兩人　世の中じゃなァ。

（入相のかねにて、幕、ぢき、引ッ返へす。）

返へし

（一）大淨寺本堂の場

（本舞臺の本堂、正面佛檀の書き割り、下手玄關、和尚、小僧誘善に孟子を讀ませて居る體にて、幕明く。）

和尙　おぼえたら、もうおかつしやれ。

誘善　よく、もう、おぼえました。

和尙　そんなら、やすまつしやれ。

誘善　はい、お茶でも入れて來ませうか？

和尙　きのふ買うて來たのを。

誘善　はい。――しかし、女人はわるいものといふても、あの、それ、桂さまのおいと子、森の民子さまはよいおかたで御座りますなア。

和尙　あれはおとなしい子じや。

誘善　むかし亡くなつた叔父さんまだおわすれなさらず、お詣りに來ると、わたしやいつもられしうて。

和尙　うン、おまいはまだ知らんが、あの桂のおや御さまは人に毒を飮まされ、お殺ろされなされたのじや。

誘善　えゝ、ほんと？

和尙　ほんとじやからおや御さん、家は民子さんにゆづり、桂さんにかたきを取れとゆゐ言なされた。しかし、その時分はまだ子どもであつて、民子さんのうちであづからしやつた。あれはお醫者の修業して居たゆゑ、それから、獨逸まで行つて來られたが、今度何にかの御思案なされさうなものじやと

民子さんのうちでは御心配さしゃってなァ。

誘善　それでも、かたき討ちは出來ません、自分も殺ろされませう？

和尚　さァ、それは、いま、どこでも、裁判所といふものがあって、證據さへたしかなら、向ふはいつでもいつでもつみに落ちる、證據さへたしかなら。

誘善　桂さまは、まァ、どうするおつもりでせう？

和尚　それには、いろ〳〵込み入ったことがあるのじゃわい。――しかし、まァ、もうおいでの筈じゃが。

誘善　えらいおそう御座りますなァ？

和尚　けふはすこし氣を引いて、見て、はげましてやりませう。（下手より桂洋服で、上田浪子と共に玄關に來たる。）

桂　頼む〳〵。

誘善　どうれ？（出る。）

桂　和尚さんは居ますか？

誘善　はい。（もとへ返へる。）桂さまが來られました。

和尚　こゝへお通し申しとけ。

誘善　はい。（和尚入る、誘善はまた玄關。）

どうぞ、こちらへ。

桂　御免。（二人あがる。）
誘善　これをお敷きなされい。
浪子　ありがたう御座りまする。（二人敷物にすはる。）
桂　誘善さん、何を讀んでますか？
誘善　えゝ？
桂　何の書物です？
誘善　孟子といふ本をならうて居ります。
桂　おもしろいかね？
誘善　あの、和尙さんから、ならうて居ります。（始終まのわるさうにして、はいる。）
浪子　かわいゝ子ですねェ？
桂　ウン。
浪子　これは何んといふお寺でせう？
桂　大淨寺さ。
浪子　大淨寺？　かういふところへ來ると、氣がしんとしますねェ？
桂　それャア、あなた、耶蘇(やそ)のおてらはどうですか？
浪子　あなた、いつも、わるくちばッかり。敎會は神聖なものです。

桂　しかし、あほたら經の讃美歌はとなり近處か迷惑です。

浪子　ほゝ、それァ、また、あなた、神をたゝへますふしがいくらおかしくっても、——それゃあ、あなた、うはべはちっともかまやァしませんわ、こゝろさへ潔白なれば。

桂　潔白な人は耶蘇教のほかにもある。

浪子　それでも、聖書（せいしよ）は、あなたゞって讀んでるでャありませんか？

桂　讀んだら、それが何んです？　あれもぢきにくづ屋に賣らうとおもってる。

浪子　そんなことを！　あなた、あんまり無茶（むちや）をいってャいけませんわ。

桂　ふン、まァ、人のこゝろ、なか／＼わかりにくい。あたりまへの人のやうに、うはべばかり聞いてれャアやすいことさ、しかし、まァ、いやしくも自分といふものがあるを知ったなら、その自分が考がへねばならん。それで無けれャア、なか／＼のむねのかなしみ、苦しみはわからない。

浪子　それャア、さうですとも。誰れだって、自分のまごころが無けれャア、おもひやりもありませんとも。

桂　をんなのこゝろは別段（べつだん）あさいから、もっとしっかり勉強しなけれャアいけませんです。

浪子　わたしもあなたにすすめられて、して居ますが、毎日せわしいばかりで。それで、部屋い歸いッて書物を見ても、つひ寝むたくなって。

桂　それャア、まだ、ちゃんと定めて居ないから、人はこゝろ一とつです。これをやらうとおもへば、

なんでも出來んことはない。（微笑しながら）ねむたいなぞといふのは、自分がつくつたくせでせう？

浪子　（うつむく。）そんなら、わたしもこれから、もつと勉強いたしませう。

桂　何にも、むづかしいなどとおもへば、なほむづかしい。わたしとちがつて、何にも、ひろく深かくやらうといふわけでァないし、わづかにをんなとして立つなら、先づ自分身づから考がへて、求めた信仰なら信仰、智識ならまた智識と、何んでも、人のいふことにしたがつてうごかない見識、——これが何により必要です。まさかかつたいでァないし、くせはなほる。あなたが、よし、一週間に一時間でもいゝから、うか〳〵しないこゝろ掛けなら、必らず勉強は出來る。人はこゝろが第一です、意ぢきたなくいぢけず、また、身づからつまらないもんは相手にせんで、人のしなを落とさないやうにしなければァならない。

（奥より和尚）

和尚　これは失禮いたしました。——これ〳〵、誘善、早やくお茶をもて來い。（すわる。）これは失禮いたしました、桂さん。よく、まァ、おいでくださりました、いち度、お尋づね申さねばならん筈ですが。

桂　いや、どういたしまして？

和尚　御親父さまには、この坊主もいかい御厄介になりまして、そのお子あなたさまですから、もう御歸朝後、せめていち度お尋づねまをす筈ですが、このとほりの見ぐるしいもので御坐りますから

つひ〳〵御無沙汰ばかり。

桂　いや、わたくしこそ。

和尚　どうもすみませぬなァ、はゝゝゝ！――それはさうと、まァ、あなたはさぞおつとめ御多忙で居さッしゃるでせうなァ！

桂　いや、もう、どうも、俗務多忙で、なほ更ら、かゝる閑靜なところが慕たはれます。

和尚　はゝゝゝ！（誘善茶を入れて來る。）いや、もう、こんな寺には、こじき坊主が居ります。

桂　いや、世間こそこじきで。

和尚　（茶をのみつゝ）この御婦人はどなたで？

桂　これはわたくしの友だちで、上田孃といはれます。

和尚　あ、桂さんの御朋友で居さッしゃるか、まァ、それはようおいでくださりました。どうぞ、お茶でも。

浪子　ありがたう御坐りまする。

和尚　桂さん、あなたさぞ、このごろは、おさとりが開らけませう？

桂　いや、なァに？

和尚　（浪子に）あなたさまは、いま、何んといふ學校へ行かッしゃるか？

桂　このかたは、わたくしどもの病院で、看護婦をなさッて居られます。

和尙　あ、左樣ですか？――さういへば、桂さん、宮城はいまどういたして居りませう。

桂　相變らず、平氣で。

和尙　あのう、看護婦といま變なことがあるさうに聽きましたが、ほんとで御坐りますか？（氣を引くこなし。）

桂　看護婦と？（浪子とかほ見合はせる。）いや、なァに、なにも、それは何んでもないことでせうて。向ふでつまらんことろがあっても、こっちでそれャ許るしません。あゝいふやつはわたくしども決してかまひませんから、不見識なものばかりが居るのでャ御坐りませんし。

和尙　はゝゝ、いくら宮城でも、まさかそんなことはありますまいさ。しかし、あなたも、まァ、お人のいゝ。

桂　馬鹿とは？

和尙　いや、さうでは御坐りません。しかし、あなた、ぐづ〳〵、まア、何にをして御坐る？　いくら待つもあの證據、出ないものは出ないでせう？　たゞ訴たへて見たなら、せめてすこしでも、この日ごろの遺恨が晴れャゥもの。おや御さまの……

桂　ふン、和尙さん、却ッてこちらの耻ぢをさらします。

和尙　それャァ、あなた、おや御さまの遺言をま守って、あの軍醫を殺すなら、あなたもまた死なねばならんのを、それを、せめて訴たへて、あれがつみに落ちるなら、おや御さまに對してもいひわけ

が立ちますぞ。――いや、それより、まア、香でもおたきなされい。

桂　ちョッと。(佛檀の前に行いて、香をたく。)

和尚　あなたさまは桂と御こいぎで居さッしャるか?

浪子　はい、わたしはお親しくいたして居ります。

和尚　(小聲になり)あの、何にかいふて居りますか、おやのことを?

浪子　いえ、何にも。

和尚　はなしませぬか?

桂　わたしは何にも存じて居りませぬ。

和尚　さうですかなア?

(桂立つと、浪子さきに行く。)

桂　いつも、佛寺の構造には幽玄を感じますわい。(もどる。)

和尚　これも遁世をいつはる俗人のすみか。(小ごゑになり)桂さん、早やく訴たへなされよ。

桂　しかし、事は、和尚さん、かろく出來ませんから。

和尚　しかし、あなたいつまでお考がへなされたとて、まァぐづ付くのが高倘では御坐りますまい?あなたのをぢさんをばかりか、民子さんはどのくらゐ御心配か知れませんぞ。

桂　あれァ仕かたありません。(浪子もどる。)詣ツて來ませうか?

浪子　さうですね。

桂　そんなら、和尚さん、ちョッと詣ッて來ます。

和尚　それでは、お待ち申して居りますぞ。

桂　そんなら。

浪子　ちョッと詣ってまゐります。（兩人は玄關を下りる、横手より寺男莊平。）

莊平　これは、おまゐりで御坐りますか？

浪子　はい。

和尚、莊平　どうぞ、お早やく。

桂、浪　はい、ぢきに。（下手へは入る。）

和尚　莊平、ちョッといて、あたらしい菓子でも買うてこい。

莊平　かしこまりました。（横手へは入る。）

和尚　（もとへもどる。）あゝ、あのありさまでは、この坊主がいふ言葉もはげましにはならぬか！　桂がかたみのやいば、あのむねに礪ぎ入れて、どうか、こゝのむすぼれ、眞ッぷたつに絕たしたい（木のかしら）ものじャなア。

（道具まはる。）

（二）おなじく墓場

（本舞臺いち面大淨寺のうら手、墓場の體。眞中に「男爵正國之墓」と記せる石塔。上手より老婆二人、おのおの手桶をさげていで來たる。）

一　人と申せば、誰れしもはかないもので、きのふまでぴんぴんして居た子どもが、けふは早や地のした。こんなところ來るのはいやで御坐りますなァ。

二　いやでは御坐りますが、また人としたことが、どうせ、いち度は死にますもの、仕かたが御座りませぬ。

一　さうですとも。きのふも、となりの子が亡くなって、わたしゃ孫のむかしがおもひ出され、何んとなくおいのなみだが出ましてねェ。けふは氣ばらしがてら、まゐりにまゐりました。

二　それは、まァ。年がよっては、お互ひに大體なことでゃ御坐んせぬ。わたしもむかしのつれ合ひのはかへまゐり、そのついでに親類のまで頼まれましてねェ。

一　いや、もう、こしが曲がりましては、もう生きて居るのが耻ぢです。

二　さうで御坐りますとも。

（兩人、桂が墓前に立ちどまる。）

このお墓は、まァ、あなた、よほどふるう御坐んすが、どうしたわけか、ちかごろお姫さま見

たやうな子が、奇麗(きれい)ななりで、たび〳〵詣りに來るさうで御坐ります。

一　それは、まァ、おいとしいこと。なにかむすめ氣のおもひ出し、つらい事でも御座んせう。

二　へゝゝ、むすめのときがいち番氣樂でよろしい。

一　さァ、おそくならぬうちに歸いりませう。

二　左樣。また、よめにがみ〳〵……

一　いはれぬうち、……

兩人　歸いりませう。

（兩人は下手へは入る。向ふより、桂は手桶、浪子は花を以っていで來たる。）

桂　しかし、あなた、あの和尙(をしやう)、和尙としてはめづらしい。

浪子　それでも、わたしは何んだかすごくって。

桂　なァに、あれは、すこし考がへるものにャアあたりまいのことです。（歩み出す。）

浪子　あなたのお言葉だって、いつもわたしにャアわかりまんわ。

（舞臺の墓前に來たる。）

桂　浪子さん、この墓です。

浪子　まァ、こゝですか？　大きな草が。

（兩人。花や手桶を置いて、よこ手の草をむしる。）

なか〳〵はへてるでヤァありませんか？

桂　どうして〳〵？　ながくほッとくと、なか〳〵はへるもので。

浪子　さうですとも、霜にさへ堪へるくさ木ですなら、人にしてもしぶとく、しかし、それで無ければ、ほんとの事は成せません。

桂　いや、ありがたい御教訓。

浪子　ほゝ、隨分生へて！
（桂は引き捨てた草を、はたきにしてあたりを掃く。）

浪子　しかし、誰れか詣るか、前への方だけは掃じが出來てますねェ。

桂　きのふ、わたしのいと子が來た筈ですから。

浪子　勝手ないと子ですねェ、こゝいらの草は一本もぬかんで？

桂　をんなだから。

浪子　あら、さう？

桂　さァ、そのくらゐでよろしい、水がかゝりますから。

浪子　もう、このくらゐで。（わきへひかへる。）

桂　よろしい。（石塔に水をかける。）
ほね若しいのちあらば、つべたく感じさめやうに、……

桂　ゆめの如きこの十年、むなしく去った時無常。しみ渡たっては、この一身、（身を振はせる）あゝ、置きどこが無いわい！

（倒ふれんとして、われに返へる、この時、水浪子のすそにかゝる。）

浪子　あなた、どうしたんですねェ。つべたい！（ハンケチを出して、これをふく。）あゝ、これは失禮。

桂　たんとかゝりましたか？

浪子　いゝえ。あなた、まァ、どうして、倒ふれやうとしてェましたよ？

桂　つひ、知らずに。

浪子　まァ、ひどくふるへたりおしなさって。

桂　あァあ、むかしおもひ出して、ぞっとしました。

浪子　まァ、あなた、氣をしっかりなさいまし。

桂　（また、あたりへ水をふりまいて。）さァ、これで大丈夫。――あなた、その花をどうぞ。

浪子　わたしがいけてあげませう。（花を指す。）これでいゝでせう？

桂　何流ですね？

浪子　ほゝ、何流でもよろしいは。

（桂あらたまって墓前に拜す、次に浪子これに習らふ。）

桂　これが十年前亡くなった父で御坐ります。

浪子　それに就けても、和尚さんがさっきの御話し、わたしャ何んだか氣になって。

桂　さァ、そのこと、これをあなたにはなしたり、またあなたの御履歴をゆっくり聽きたい爲め、けふ、御一所にまゐったのです。まァ、これにお掛けなさい。

浪子　わたしもはなしたいと、つね〴〵おもってましたの。――このいし、庭いしにいゝですねェ？

（兩人傍の石に腰かける。）

桂　神を信ずるあなたは、ほかのものはもち論をがむのでは無いでせう、わたしとてもおなじと、いし木など拜するので御坐いません。然し、湧いて來ますうたがひ雲のたとへもおろか、こゝろのそらいち面まっくらとなる時にも、考がへるこのおのれがまよひまよふ好まず、ひろくまなぶこの學問、深かくおもふわがむねに、いよ〳〵入る苦るしみ、ます〳〵狂るふわがたま。人はこれを氣ちがひなどいひますが、まァ、あなた、よく考がへて見るなら、世間に誰れが氣ちがひで無いのです？

浪子　それャ、あなた、いくら、あなた、わきから何んといってもよろしいわ。一とつのことを一心にすれば、誰れでもすこしはさう見えますもの。

桂　しかし、人をよく知ってるなら、氣ちがひが却って深情のある證據かも知れません。

浪子　それは、あなた、わたしがよく知ってますわ、いつも、あなたの御親切なこと、雪子さんもいッ

てます。

桂　笑らへばそれが滑稽家、泣けばそれが氣ちがひ、そんなあさはかな判斷で、深かいことはわからない。――わたしとても、わけ無く苦るしんどるんで御坐りません。あなたはまだちッとも御存じなけれど、こゝに寢むる父うへ、たゞの病氣にかゝッて亡くなったので無いのです、あまり嫉まれた爲め、毒殺(どくさつ)されました、宮城から。

浪子　えゝッ！――そのことで御坐りますか、和尙さんは？

桂　これがもとでこの一身、いつも苦るしんで居ます。これを世に訴たへるも、證據無ければ水のあわ、父のゆゐ言に從がひ、かたき討つはやすいが、殺ろしてまた何んになる？　からだあるが、早や社會(しやくわい)、こゝろ持つが、早や法律。うき世の中むなしく觀じて見ても、やッぱり、十年のゆめは開悟せず。くち果てたるこの墓前、來たッて拜すもなんの爲め？　うらみむねにむすぼれ、ほどけがたきうたがひ、恰も魔がわがきもじり〳〵食らふ如く、ほねに徹してくるしい。しかし、これは誰れにもはなさないですから、あなたのほか知ッてもらふ友だちは無いのです。

浪子　ありがたう。――しかし、あなた、さう御心配あそばさんでも、神のいますかぎりは、……

桂　いやそれがわかるなら。

浪子　それでも、お道引(みちび)きくださりますよ。

桂　それがわかりますなら、何にもまよふことは無いのです。

浪子　あなたは、まゝ、おうたがひなさりますの？　わたしはさう信じて居ますから、わるいものは必らずほろびますよ。

桂　それです、それがわかりますなら、決してまよひませんが。

浪子　それでは、かみがいまして、世のをはりに必らず罪民をさばき給ふこと、うそで御坐りますか？

桂　いや、それは、また、あなた。あなたのおこゝろで信ずることは、あなたのまたおこゝろでしかと信じて居るがよろしい。

浪子　それでも、理に二つは御坐りません。あなたはあんまりお考がへなさらんで、わからんことはそのまゝ神にまかし、いのってお置きなさいな。

桂　そのおこゝろざしがわたしのいのちです。たとへむねはちがっても、このふたりの交はりながく續づけたいものです。

浪子　それをわたしゃつね〴〵神にいのって居ますの。

桂　いつかあなたの御履歴を聽いて見たいと、いまゝで聽くことが出來ませなんだが、かまはないなら、どうぞ、聽かしてください。

浪子　あの、赤木さんのこと知ってゝ？

桂　知ったら、どうです？

浪子　（微笑）いえ、どうも。――だが、宮城さんはいつも、赤木さんには丁寧ですねェ？

桂　（すこし不興のこなし。）ふン、へえ〱いへばよろこばう。――大罪人！　またとはねたみ殺されんぞ。――さァ、あなた、どうぞ、懸くさずに。

浪子　あの、わたしはあの手がみを無くなしましたよ。

桂　無くなした？　それだからいかん、うか〱と。

浪子　だつて、知らんまに落としたのですもの。

桂　もとより、落としたつて、かまんのはかまん、何にもわるいことでャ無いし、一所に寡まゐりをしやうといつたゞけだから。

浪子　それャ、さうですとも。――わたしははなしたいこと澤山ありますが、まァ、くちへ出ませんわ、何にからいへばいいことやら。

桂　あなたのおとつさんといふのは、いつ亡くなりました？

浪子　それは、わたしがまだ四つのときでしたが、十五のとしに、兄が佛蘭西で不意の病氣で亡くなり、あねも御坐りまして、華族のうちへかたづいてましたが、その子どもまで、無殘な！　主人は一とまに押入れ、ちつとも出してくれず、うらみ死にをしまして。

桂　それャ誰れです？

浪子　いえ、なに、別に知られたお方で御坐りません。――初めはまるで知らんで居ましたが、あと

でこれがわかって、わたしはこの世がはかなくなり、決してわたしゃこれからよめ入りはしないと、母と泣いたことさへ御坐りますの。

桂　それはまた、あまりせまい了見でせう？

浪子　でも、人のこゝろは知れませぬものゆゑ。——それに、また、母うへ、ぢき先き立たれまして、殘こる身はあぢ氣無く、みやこに來たもひとり。あの病院には入ってからは、雪子さんばかりがつらい中のたのしみ、看護のつとめせわしくつとめますも、この世に、せめて生まれた甲斐ばかり。

桂　あなたのおこゝろざしは、かねて人に聽きましたが。

浪子　それに、あなた、（恥づるこなし）あすこに來ましてから、知らぬ人の手がみがたび〳〵まゐりますが、わたしは、もう、つらきまじはり絕って居りますから、——こののちとて、おちから賴むはあなたひとり。

（見あぐる浪子、見つむる桂、急に桂は浪子の手を取る。）

桂　浪子さん。

浪子　（身をふるはせて）はい。

桂　あなた、わたしのこゝろ知ってくださりませぬか？

浪子　えゝッ！（急にむねのいたむこなし。）

桂　どうしました？

浪子　すこしむねが。

桂　いたみますか、どれ？

（これより、捨せりふにて介抱す。）

桂　どうです？

浪子　すこしよくなりました。

桂　それでは、先づ寺までまゐりませう。

浪子　それでは。（兩人立つ、木魚のおと。）

桂　和尙が待ちかねて、おつとめをはじめました。

浪子　そんなら、早やう。（木のかしら）

兩人　まゐりませう。

（浪子かなしみの情よろしく、からすの啼にて、幕。）

二幕目

（一）宮城官宅應接室の場

（本舞臺すべて宮城軍醫應接室の體、眞中にテエブル、上にいけ花。宮城純、赤木此馬、淺見政信、椅子によッ

赤木　いまのやうな次第ですから、小使なり、何んなり、おこゝろ當たりの御坐いましたら、お世話を願ひます。

淺見　どうぞ、お願ひ申します。

宮城　はい、わたしもこゝろ掛けて見ませう。

淺見　ありがたう御坐ります。

宮城　何んとかおッしやァたな、お名まいは？

淺見　はい、淺見政信と申します。

宮城　政信？（赤木に向ひ）きみ、政信とはときどきある名だねェ、山口の友人に、田邊政信といふものがある。

赤木　あ、それに會ひました、二三日前、公園で。

宮城　さうですか、どうして？

赤木　なに、山口と散歩してェたんでせう、田邊といッて居ましたから。

宮城　そんなに中がいゝのかねェ？

赤木　どうか知りませんが、あれァどういふ人間です？

宮城　どういふて、まァ、あゝいふ通りさ、――「說明はこの限ぎりにあらず」だ。

赤木　はァ、これにャァ帝國議會も平口しました。

宮城　はゝ！　しかし、澁屋のおやぢ、なか〳〵やるでャァないか？

赤木　長者議員としては、やり手でせうて。

宮城　きみャァあの澁屋雪子としたしいてねェ？

赤木　いや、別にしたしいって、知っては居ります。

宮城　どうだい、上田のやうなア、メンやさう麵でャァないだらう、もらってャァ？

赤木　はゝゝ（奧より、書生。）

書生　山口さんが來ました。

宮城　こっちい通せ。

書生　はい。（書生入る。赤木の目くばせにて、淺見うしろの折りを出す。）

淺見　これははなはだ失禮なもので御坐りますが。（差し出す。）

宮城　いや、それはいかん、わけも無いに物を貰ふ、そんなことがあるものか？

淺見　へゝ、實に粗末なもので御坐りますが。

宮城　それャァ、いかん〳〵。

赤木　淺見君、それでは、それは引ッ込め給へ。

淺見　あ、左樣で御坐りますか、まことに粗疎をいたしました。

（まのわるさうに引ッ込める）

宮城　なァに、若し都合がわるけれァ、こゝに來て、書生をしてェてもかまはんから。（おくより、山口進。）

山口　御免を。——今晩は。

宮城　さァ。お掛けなさい。

赤木　掛け給へ。（自分の椅子をゆづッて、ほかのにうつる。）

山口　今晩はにぎやかですなァ？

宮城　そこの緣日（えんにち）だから。

赤木　僕もあッちを通て來ました。

山口　赤木君。きみャァいつ來たんだ？

赤木　僕ァすこし先きに。——きみャァ何にかはなしがあるのかね？——僕が居たらわるいんでャァないか？

山口　なァに？

宮城　何にかあるんですか？

山口　はい、すこしはなしが。

赤木　そんなら、わたしはもう歸いります。（淺見に）きみ、歸いりませう。

淺見　さァ。
宮城　もうお歸へりですか？
淺見　はい。
赤木　それでは、いまのことはどうか。
淺見　どうぞ、よろしうお願ひ申します。
宮城　承知いたしました。
赤木　お邪魔いたしました。――山口君、失禮。
山口　失敬。
淺見　御免くださりませ。
（宮城兩人を送くッて入る、あとに山口ひとり、懷中より一封を出して見て、またしまふ。宮城もどる。）
宮城　失敬しました。
山口　いやどうして？――もう、わかいものは仕かたが無いものですなァ？
宮城　どうして？
山口　どうしてゝ、どれもこれもつやだらけで。
宮城　まさか、淨瑠璃かたりでャァあるまいし。――して、きみャァ、そんなら、ぢいさんかね？
山口　年はまだ取らんでも、滋昆などにャァ、もう惚れませんさ。

宮城　なッに、惚れてもいゝさ、ほんとなら。
山口　しかし、そんなことでもあれァ、あの赤木の泣くざまが見たい。
宮城　ふン、あれァどうでもなるんだ、遠ざけてしまやァ。――なる程、雪子の方はどうだらう？
山口　矢張り、さうでせうさ。
宮城　あれのおやは僕とこいぎだから、たび〳〵あれの身の上の注意は賴むのだから。
山口　上田とはむやみにしたしい。
宮城　あれァだめだ。上田なぞにァ誰れが惚れるもんがあるか？
山口　しかし、美人でせう？
宮城　それァ、美人でも。あれァ桂のやうなあを二才にくッつくつもりだらうよ。
山口　しかし、をんなだから、また氣がかはッて……
宮城　え、桂と離れたか？
山口　いや、なか〳〵離れるどころでァ御坐いません、ふたりで休暇を取ッて、一所に墓詣りに行ッたり。
宮城　むゝ、それで、けふ、やすんだんだな。
山口　もち論でさ、まァ、これを御覽じろ。（以前の一封をわたす。）
宮城　「上田浪子さま」「桂吾良」。むゝ、中はなにかね？

山口　まァ、御覽じろ。

宮城　（手がみを出して默讀して、おもひ入れ。）おもひまはせば、早や一むかし。――きみ、これァおとゝひ送くて、けふ行って來たんだね。

山口　さうですとも。一體、あなた、きゃつは剛情で、長官に對してもきのふのやうな無禮なことをやって、そのうへ、おまけにからですもの、病院に居るゝれ〲軍醫の體面にかゝはります。

宮城　もとより僕は、役員が身づからこんなことをやるは好まん。病院を何んとおもふ？――しかし第一、をんなといふものァいけないもんだね。

山口　しかし、あなた、誰れでも、あんなをんなは手に入れたいものです。

宮城　ふン、なんぼこッちで惚れたって、向ふで承知しなけりれァ、たゞあわび同然さ。

山口　しかし、をんなだから、また氣がかはッて來ないもんでも御坐いますまい。

宮城　いや、あればかりは貞節なのだらうよ。

山口　なァに、あなた、そんなにおとぼけなさらんでも？

宮城　何にャゥとぼける？

山口　えへゝ、わたくしは遠からよく存じて居りますぞ。

宮城　何にを存じて居るか、さッぱりわからん。

山口　あなたあの上田を……

宮城　ころが高い。

山口　はい。（あたりを見まはす。）

宮城　實は、きみ、あれを欲しかったんじゃて、いまの妻はもうひまをやるつもりだから、何にもこれがめかけにしやうといふのでァないし。

山口　いよ〳〵白狀なさったか？

宮城　しかし、承知してくれなければァ仕かたが無い。

山口　なァに、それには、承知さす手段をつくせばいゝでせう？

宮城　手段といってさ？

山口　なァに、たゞ一とつです。

宮城　何にも、さうりきまんでもよからう？

山口　はゝ、りきみはしませんが、どうです、一方を追ひのけてァ？

宮城　それャァ桂を免職さすは易すいが。

山口　わたくしはそれがいち番手ぢかゝとおもひます、第一桂が居ては、われ〳〵軍醫の體面をけがします。

宮城　もち論、そのことさ、何にも、をんな日照りでもあればこそ、立派によめにしようといふものヌ上田ばかりでャァあるまいし。

山口　さうですとも、あとを慕たって行けャア、それャア、もう、仕かたありません。
宮城　何んしろ、病院の體面に關することは、根から絕ってしまはんけれャいかん。
山口　しかも、桂にャア、いと子でいひ名づけがあるんです。
宮城　それャア、森子爵のむすめだらう。
山口　さうですとも。
宮城　若し、院長などと相談のうへ、免職にでもなれャア、つまり、その叔父のところい引き取られるのさ。
山口　さうなれば、なほ都合がいゝでせう？
宮城　どうだか？　しかし、桂は無念だらう。實はね、いち度浪子にほのめかして見たんだが、聽きさうにも無いんじゃて。
山口　今度はきびしく出たら、いゝでせう。——いや、へたな長談議をいたしました、もう、御免被ぶります。
宮城　まァ、はなせばいゝ、何にも無いが、一杯やらう。
山口　はい、ありがたう。それでは、ちョッと御免を。
（山口入る、宮城は呼びりんをならす、奥より書生。）
宮城　酒の用意をいひつけてくれ。

書生　はい。（は入る。）

宮城　（ひとり）どうか、うまく行けばいゝが。――聽かねェ、おのれ、あたら花を散らすは惜いが、こゝに癩病になるくすりがあるぞ。いかな桂だッて、くづれた上は惚れても居まい。――にッくい浪子！　聽かねェ、ざま見ろ！　こじきにでもなり果て、ちんば手無しに抱かれて、――それが何によりか、本望であらう。

（道具廻はる。）

（二）看護婦雪子部屋の場

（本舞臺、病院看護婦部屋の體、澁屋雪子、ランプのもと、小机にもたれて、おも入れ。）

雪子　どうしたことか浪子さん、桂さまにも見せず、ひとり泣いてるのは？　つねの病氣とはちがつて、どうやら、むねに心配なことが出來た樣子。それにしても、したしいわたしに、なぜうちあけてはくれぬ、ちッとも？　あゝ心配なこと！

（奥より、看護婦長。）

長　澁屋さん。

雪子　はい。

長　何にを、また、お考へなされますか？

雪子　何にも考がへてませんわ。
長　わたしはよく知ってます。
雪子　あなた、また、そんなことを！
長　赤木さんはねェ、あなた、よいおかた。
雪子　うそですよ、あなたまでがそんなことおッしゃッて。
長　そんなら、もう、これから、いひますまいねェ。――それにしても、まァ、あなた、あの上田さんの御病氣、どうかしておあげなさッたらいゝでせう？
雪子　どうと申して、仕かたが御坐いません、休暇をもらッて、おとゝひ、出ましたとき冷えたか、さし込んで歸いりまして、そのまゝ寢たッきりですから。
長　誰れかに見せたら、いゝでせう？
雪子　それが、なぜだか、ちッとも見せんで、人にも逢ふのがいやだといッて、泣いてばかり居ますから。
長　それは困ります。なぜに見せなさらぬ？
雪子　あれは隨分神經質ですから、何にか一とつこゝろでおもひ込むと、なか〳〵人のことも聽きません。たとへ自分はどうなッても、人にからだを見せないといひ張りまして。
長　しかし、何んとかしておあげなされば？

雪子　わたしも心配ですから、あたし、おとッさんに賴み、うちいつれて行って、ゆッくり養生さすつもりですが。

長　おしたしいあなたですから、どうぞ、左樣なされてくださりませ、わたしまでがお氣の毒で。

雪子　ありがたう御坐ります、あねにかはり、わたしがお禮申します。

長　それでは、もう、おやすみなされませ、あなたもけふは御非番で。

雪子　ありがたう御坐りました。

長　おやすみなさりませ。（看護婦長は入る。）

淨瑠璃。「あと見おくッて澁屋雪子、さすがあねとも呼ぶ友の、月に對して人をこひ、人に向へば人をおそる、あはれ浪子のちら〳〵、くだけて散れといはゞこそ！　しほにゆられてゆるぐ身の寢まきのひもゝ解けかけて、あわたゞしげにはせ來たる。

（奥より、上田浪子。）

浪子　雪子さん！

雪子　えゝ、そのなりは？

浪子　あゝ、くやしい！（うつ伏す。）

雪子　まァ、そのなり、あなた、どうしたんですねェ？

浪子　くちにも何んにも、ちェえゝ！　いへたことでャ御坐りません。

雪子　いはなければァ、それでも、わからないでせう？

浪子　はあゝ！

淨瑠璃。「わッと泣き出す浪子をば、じッとながめてなみだぐみ。

雪子　あなたは、まァ、よく氣をおしづめなさって、それはどうしたことやら、どうぞ、はなしてください。

淨瑠璃。「いかにあさましの世とはいへ、かうした恥ぢは浪子のすがた、身をつくろってすゝみより。

浪子　どうぞ、まァ、聽いて澁屋さん、下さりませ、くやしい！何んといっていいものやら、わたしゃわかりません。

雪子　だって、はなさなけれァ、なほ更らわからないでせう？

浪子　そんなら、まァ、あなた、どうぞ聽いてくださりませ。恥づかしいことですが、あゝッ！あのいま、宮城さん、わたしゃ賴みもせんに、見てやらうとは入ッて來て、いゝてことわるのも聽かないで、無理にわたしの手を引き出して、まァ、あなた、脈見るまねしたり。まだそのうへ、わたしのむね見せよといはれたそのこわさに、からだもこゑも立ちませなんだ。をなごの身はかよわいもの、いつどんなことが起らうも知れませんゆゑ、わたしはちッとも油斷せず、宮城さんが自分で見やうとするので、わたしゃぢきに飛び起き、にげやうとしましたのに、にがすまいとあとから抱かへますから、ふりはなし〳〵、やうよで助かりました。

雪子　宮城さんが、まァ？

浪子　こんなこと人に聞かれましたら、どッいたしませう、なさけ無い！

淨瑠璃。「せめてこの身がゆるされてわがものならば、井戸にでもうみへでも身を投げて、消えて入りたい、わすられたい！

雪子　まァ、あなた、御病氣だのに、なさけない人といッたら。

をなごとして、これほど、世に、まァ、耻づかしいことは御座りません。

浪子　あゝ、もう、人のこゝろ、わたしはこわくッて。

雪子　そんなら、あなたは、まァ、わたしにそれが卑怯だといッたを早やわすれましたか？

浪子　いゝえ、おぼへて居ますが、却ッて、わたしは、もう、何ごともわすれたう御坐んす。

雪子　まァ、なぜ、そんな氣になッたでせう？

浪子　わたしはもう、これから、誰れにももうあひません。

雪子　どうして？

浪子　どうしてゝ、それぱかりはもう聽いてくださるな。

雪子　だッて、まァ、あなたは、そんなに急に？

浪子　あゝ、もう、——さう聽かれては、なほ更らかなしうなります。

雪子　それでも、あなた、世間は、宮城のやうなものばかりでは御坐いませんし、ねェ、あなた、ま

た、桂さんのやうないいおかたも居らッしゃるに。

浪子　いえ、もう、誰れも、わたしは信じません。

雪子　えゝ？　あなたは、まァ、そんなら、桂さままで！

浪子　あゝ、もう、わたしの身に、どなたも無いもので御坐ります、おや兄弟(きやうだい)みな亡くなり、ひとりのこるこの身は、このまゝ死にうせてもいとひませぬわいなァ！

淨瑠璃。「わツとまた泣くかささぎの渡たせる橋は天なりと、人をいとひ身をかこつこゝろは知らず、しろたへの雪子にうつるはら〳〵なみだ。

雪子　あゝ、わたしまでかなしうなッて來ました、あなたは、まァ、わたしのたよッてるかたゞのに。

浪子　おうれしう存じますけれど、わたしはもう無いものとおもふてくださりませ。

雪子　すれゃあんまりな、ま、どうして！　假令(たとへ)どこへ御坐ッても、わたしゃあなたと一所に居たう御坐んすものを。しかし、まァ、あなたがいまの御病氣、何んと申すも不從なこと、なほるまでは、どうぞ、まァ、わたしのうちへ――わたしゃ父にたのみますから、――どうぞ、來てくださりませ。わたしゃおそばに近う看護したう御坐んすわいなァ！（泣き伏す。）

淨瑠璃。「そのお言葉はありがたく、千代(ちよ)にちかひてちゝはゝにたぐへてわすれ申さねど、むねにいはれぬこのかなしみ。

浪子　たとへ病氣はなほつても、わたしはあま同然の身、どうぞ、わたしにかまはず、よくつとめて

くださりませ。

雪子　（頭をあげる。）すれば、あま同然とおッしやるのは？

浪子　いま更らでないあまの身、人に見られますのも、もういやでたまりません。

雪子　すれば、あなたがよめ入りせぬといつもおッしやるのは、なにか深かいわけがありませうが、それはまた聽くことといたしても、まア、さしあたり、御病氣のなほるまでは、わたしや父にたのみますから、どうぞ、わたしのうちへ來てくださりませ。

浪子　はッあ！　御親切なそのおこと葉、母がまだこの世に御坐るやうで、そんなら、御厄介になりまするぞ。

雪子　どうぞ、さうなさッてください、わたしもおそばに居られて、うれしう御坐んす。

浪子　それでも、まことにすみません。

雪子　いゝえ、どうして？　あなたはわたしの姉さん、いまにはじまッたことでも御坐いません。しかし、まア、あなたはなぜ桂さんお見切りなさッたのでせう？

淨瑠璃。「と問はれて浪子のむねのうち、人こそ知らね、しら糸のこゝろぼそきは血のすぢをあかさうものか、あかそまい、この親切も無にされぬ、思案さだめて雪子に向かひ。

浪子　どうぞ、澁屋さん、許るしてくださりませ、いまゝでかくしましたつみ、實は、わたくしは血のすぢけがれて居りますもの。

雪子　えゝッ！
浪子　びッくりなさるも、御もッともで御坐ります、これを知らんで、これまで、まじはッてくださッた御親切、あねやいもとのやうにうれしうおもふて居ましたに。――さぞ、あなたはおいやにおなりなさッたでせう？
雪子　あゝ、何んで、まァ、そんなことが、一旦、兄弟とちかうたもの、何んであなたがそんなことを？
浪子　あゝッ！　このからだにけがれあれば、こゝろまでがこのやうにくさるのか、なさけ無い！
淨瑠璃。「何んのつみとがある爲めに、こひしき人をうたがひのうみに見すてゝ、われもまた、うらみの舟にただよふぞ！
これ灘屋さん、（手を合はす）あなたがたゞひとりのおちから！
雪子　あゝ、勿體ない、あなたは！　（浪子にすがる。）わたしゃ決してこのこと人にははなしません。どうぞ、わたしを、こののちも、いもとゝおもふてください。
淨瑠璃。「互にすがりすがられて、乙女ごころのつたかづら、根は異なれどおひ立ちて、姉をちから、いもとをちから。まつはり解けぬぞあはれなり。――浪子はやう／＼なみだをぬぐひ。
浪子　しかし、お氣の毒なは桂さまの御免職。
雪子　えゝ？

浪子　それも、宮城がさせたので御坐いませう、いまもわたしにはなしました。
雪子　しても、まア、にくい宮城！
浪子　それに、桂さまには、おいと子でいひ名づけが御坐るとのこと。
雪子　えゝ、ほんと？
浪子　ほんとで御坐いませうとも、それを、まア、お見切りなさらうとあそばしたのも、つみはみなわたくしがあるゆゑ。どうぞ、あなたは、これから、わたしのことはなしてくださりますな。
雪子　そんなら、桂さまには、もう、お目にかゝらぬつもりですか？
浪子　このけがれた、賤しいわたしが、どう、まア、再たびあはれませう？――おもへばこないだのゆめ、まさゆめであったか！
雪子　わたしもまたかなしうなりましたわいなア。
淨瑠璃。「折から、けふの宿直の山口進いで來たる、さまも無禮の意ばりづら。
山口　宮城君がこれを。
浪子　わたくしにですか？
山口　左樣。
浪子　何んで御坐ります、それは？
山口　くすりでせう。

浪子　えゝ、誰れがそんなもの賴みました？
山口　誰れか知らん、まァ、宮城にたづねなさい。
浪子　そんなら、こちらで入りませんから。
雪子　そんなことを？
浪子　どうぞ、あなた、お返しくださりませ。
山口　なぜです？
雪子　いえ〳〵、わたしがうけ取ります。
山口　それでは、たしかに。
雪子　（うけ取って）はい、おうけ取り申しました。（山口入る。）
浪子　えゝ、わたしはそんなくすり飮みませんよ。
雪子　まァ、なぜです？
浪子　なぜッて、けがれて居ます。
雪子　けがれて？　なぜ？　まァ、そんなにいはなくってもよろしい、おくすりには、何にもつみは御坐いまんわ。
浪子　うけたがわるいのです。
雪子　そんなら、返いして來ます、——あなたの爲めなんだのに。

浪子　なに、よろしい、わざ〳〵返いすにはおよびません。
雪子　それ、御覧なさい。
浪子　ちよいと、見せてください。
淨瑠璃。「くすりを取つて、看護婦のなれし浪子はつく〴〵ながめ。
浪子　何んだか變なくすり！
雪子　どれ？（のぞく）何にも變でありませんわ。
浪子　その水はいゝの？
雪子　あい、よろしい。（机上の瓶を取つてやる。）
淨瑠璃。「雪子はひとへにやまひをばいやさんとしてつぎ入るゝ、水にうかびしくすりこそ浪子がするの不幸なりけり。
雪子　それでおやすみなさい、わたしやぢきに行きますから。
浪子　そんなら、待つて居ますぞ。（立つ。）
おもへばはかない（木のかしら）
兩人　身のうへじやなア。
（浪子うらみの情よろしく、道具まはる。）

（三）澁屋本宅玄關の場

（本舞臺澁屋やしきのうち、玄關先の體。男女二人掃除して居る。）

男　さァ〳〵、けふは、もう、これでおことしョ、おかみさんも、もう、おかッしャれ。毎日朝から、くさぬきは大體なことでャないに、十錢や十五錢儲けたって、飮んでしまへば、かすほども殘こらぬ。

女　おまいさんたちは、まァ。ひとりもんじャといへば、それでもすもが、わたしたちはつま子のある身、毎日〳〵かうして働らくのも、何にかならうちの助けにせねャならぬ。

男　おかみさん。あぢなことといふぜ。おまいも毎晩、さし向ひで飮むときは、「これ、こちの人」などいふのでないか？

女　なか〳〵そんなところでャ御坐んせぬ。子どもが病氣で、お醫者にかゝればおあしが入る、おあしが入るにも。このごろの不景氣では、うちの人も澤山取れぬ、それで、わたしはこんなこともするのじャわいなァ。

男　それは感心〳〵。とても、わしらの出來ることでャない、もとよりをんなではないからな。――それはさうと、このお宅へ、このごろ病人のお客が來て居るさうじャが、一向醫者のやうな人も見えぬなァ？

女　さうです、なぜだか？　こんなお家にこそ、おかねは湧くといふもの、ひとりやふたりのお客

ぐらゐ、わたしらの身分でいへば、米つぶ一とつに足らぬ道理。どんなにかるうても、病氣のお客をどうしたわけやら？　まァ、そのむすめさんがお氣の毒。

男　なァに、だめよ。いくらかね持ちといはれるやうになりあがっても、もとが紙くづ買ひの旦那さん、いまではあきうどのおや玉だが、矢張り根性が、ぐづ〳〵して居る。それでなけャァ、こっちにもさッぱりと、十錢や十五錢で無く、いちどきに一圓も二圓もくれるがいゝ。あまりけち〳〵すると、げぢ〳〵虫になってしまはァ。

女　あんまりわるくち敲たくと、聽こえますぞえ。さァ、あちらへ行きませう。

男　さうだ〳〵。早やくやすまうか？

（兩人横手へは入る、向ふより桂吾良、さッぱりした書生風、ステッキ。）

桂　この遠きみちをわざ〳〵尋づねて來て、おとゝひも逢はれず、きのふもまたおなじこと。どうしたことか知らんが、あの健康だッたからだで、不意にひどいわづらひ、若しや墓ではなしたことをわるく聽いて取ッた爲め、あのやさしいむねが急におどろいたのであるまいか？　それなら、いくえにもわびもする。どうぞ、けふは、逢ふて見たいものだなァ。

（舞臺に來たり、玄關の呼びりんを引く、奥より、女中お鍋。）

お鍋　何に御用で御坐ります。

桂　雪子さんはお宅ですか？

お鍋　はい、いらッしゃいます。あなたどなたさまで？
桂　桂といッてくだされば、わかります。
お鍋　えゝ、あなたが桂さん？――あの、それでは、――いえ、いま、いまの先きお嬢さまは、――あの、あいにくですねェ、お出かけなさりました。
桂　はゝァ、お留守ですか、いつもわるいところへ。
お鍋　ほゝゝ、お氣の毒ですねェ、まァ、おあいにくに。
桂　それでは、お留守でも、ちョッと上田さんにお目にかゝりたいのですが。
お鍋　あのおかたですか？　あのおかたは御病氣で、お醫者が誰れにもあはれん、逢ふといけないと申して、どなたさまもおことわり申しますので。
桂　その病氣なのは知ッて居りますが、さほどひどくッては、仕かた御坐いません、それでは、はばかりですが、どうぞ、雪子さんがお歸いりなさッたら、上田さんの御病狀をお手がみでくださるやうに。
お鍋　なに、そんなに御心配なさるほどでも御坐りません。――もう、お歸へりですか？
桂　これは失禮。
お鍋　左樣なら。

（桂は花道へかゝッて、おも入れ。）

お鍋　あんななりで、まァ、よくこゝへ來られたもんだ。こゝなお孃さんが、來たら、醫者が人にあはれんといったと、ほどよくことわってくれといったは、尤ものこと。――あばよ！（は入る。）

桂　いまのものゝこと藥といひ、雪子がまた留守、さほどひどい病氣なら、あの親たしい雪子が、看護もせずに出て行く筈は無いが、――はて、合點が行かぬ。

（向より宮城軍醫、官服のまゝ、花道にて、桂と行きちがうて、ちき舞臺。玄關のりんを引く、奥より男。）

宮城　主人は居ますか？

男　はい、お通りなさりませ。

（兩人入る、桂いかりのこなし、また舞臺へかけ來たる。本釣鐘。）

桂　さては、浪子！　をんなだなァ！宮城如き非人めにだまされたか、あさましい。われはひろきこの世界、あかす友も無くなった。天邊かけって鳴く鳥の、吐き出すねはこのむね、つゝみがたき血のたま。これゃわがこひは（木の頭）絕ちきったぞ。

（幕、ぢき、引ッ返へす。）

返へし

（一）森子爵屋敷の場

瀧子　いま申しあげます通り、おやに取りては、むすめを持つほど苦勞御坐りませぬ。

定行　それはさうさ、こッちだッて、こゝろはちがッて居ない。

瀧子　さうおッしヤッても、世に澤山ためしが御坐んすものを、おやがときといふものまうしなはし、わが子の行くすゑをくるはすのが、まア、何によりのかわいさうで。ほどよいあひてが御坐りますなら、早やくそはせたいのがおやの念。

定行　それヤァきまり切ッたことさ、おれだッて、ゆるさんでも無いが、見ろ、まア、桂を。あの考がへが氣にくはん。

瀧子　それはさうでも御坐んせうが、あの子も早や十七で、ものゝあはれ知りそめ、若し吾良さんでなければ、誰れにしてもいやだといひ張りますも尤も。いひ名づけといふまでも、かたき討ちがいまどき出來やうは無いもの。たとへ吾良さんの氣ではどうおもふて居るか知れませんが、上田とかいふむすめはたゞ友だちであッたを、もう、尋ねに行くこともよしたとのこと。

定行　それやァ何んでもいゝ、ほッとけ。仕かたが無い桂だ。かたきの手でぐづ／＼こき使はれ、もうよい加減といふとこで、免職されたざま見ろ。をひとおもッて世話してやッた、甲斐はどこ行ッた。洋行までして、ぐづ氣ちがひですむのか、いつまで人の厄介になるつもりだ、ばからしい！　あれだから、定行は民子をそはせないんだ。

瀧子　すれヤ尤もで御坐んせうが、桂としたおかねには、またやさしいところを民子は見て居ります。ど

うそ、いち[illegible]

定行　うン、桂さへよくなれば、いつでもゆるす。

瀧子　そんなら、いち度、吾良さんのこゝろを聽いて見まする。――それにしても、あの子は、矢張こひの爲めゆゑ、お墓へまゐりましたが、も早や歸いりさうなもの。――あゝ、おとがする。――誰れ？　民子かえ？

民子　（奥にて）わたしです。（侍女お松と共にいで來たる。）

兩人　たゞいま。

瀧子　くたびれはしないかえ？

民子　いゝえ、却いッて氣ばらし。

お松　いつも、まア、お孃さまのおかげで、わたしまでがなぐさみになりまして。

瀧子　うちでふさいでゐるより、いゝだらう。

民子　しかし、おッかさん、誘善さんのおはなしでは、吾良さんがあの日に、ふたりづれでお詣りあそばしたと。

お松　をなごのおかたと御一所に。

瀧子　そんなら、上田であッたらう。

定行　そんなことするから、免職になるんだ。

瀧子　それでも、あれはまた宮城のさせたのにきまって居ります。
定行　それは別なはなしだ。
民子　あゝ、もう、わたしゃ宮城の名をさへ聽けばかなしうなります、今も、わたしゃお墓でひとり泣いて來ましたの。
瀧子　それも誰れの爲めだか？
民子　あら、おッかさん！（母の膝にあたる。）
瀧子　なに、いゝよ、おや子の仲だものを。
民子　だッて、まだわからないでせう？
お松　お孃さまはこのごろ、ほんに、まァ、吾良さまがおいであそばしてから、お氣がうきうきなりまして。
民子　おまいまでがそんなことを！
お松　いゝえ、ほゝゝ！
瀧子　わたしもおとッさんに賴(たの)んでたのさ。
民子　それでも、また、これには吾良さまのおむねも……
瀧子　それさ、知らねばならんよ。おまい、吾良さん呼んでおいで、けふは、ゆッくりはなして見るから。

民子　いらしやるか

瀧子　あゝ、居るよ。

民子　そんなら。（立つて行く。）

瀧子　すぐとおいよ。――お松は、まア、着物でも。

お松　はい、着かへますから、御免くださりませ。（兩人は入る。）

瀧子　わが子ほどかわいゝもの、どこにも御坐りませぬ。

定行　こつちだつておなじことさ、そはせたいはむね一杯、だが、桂の了見次第。

瀧子　いかにおや御のゆゐ言とは申して、民子が、まア、どうしてひとり、あと取りの吾良さまを措いて、桂家をついで居られませう？　どうともして、ふたりが仲むつまじう、夫婦にさせたいばかり。

定行　それでサア、みんなおまいに委かす。

瀧子　ありがたう御坐ります、そんなら、けふは、ほどようすゝめて見るで御坐りませう。

定行　しかし　おれが居つては、却つて邪魔。（立つ）瀧子、そんなら、あとはまかしたぞ。

瀧子　よろしう御坐ります。（定行は入る。）あゝ、吾良さんのこゝろ、しかとわかればよいに。いまに世話かけながら、よもやすげ無うはいはれまい？　しても、苦勞なことじやなア。（民子もどる。）

民子 おッかさん、ちきいらッしゃるよ。
瀧子 さうかい？
民子 わたしゃどうしやう？
瀧子 そこにおいでよ。
民子 それでも、……
瀧子 耻づかしくはないから。
民子 それでも、なんだか……
瀧子 いゝよ、何んでも無いやうして居れば。
(奥より桂。)
桂 ほとゝぎす、
こゑや こほり の
血 一魂
ほとゝぎす、
こゑや こほり の
血 一魂
民子 あなた、何てかいゝ句をあそばして？

桂　はゝァ、なァに？

ほとゝぎす、

こゑや　こほり　の

血　一魂

瀧子　まァ、おすはり。

桂　これャ、どっこい。（あぐらかく。）

民子　こゑが血の一魂とは、まァ、何にでせう？

桂　はゝゝァ！　戀を絶ち切ッて吐き出したら、なま血のたましひばかり。

瀧子　何にをおしなさってたの？

民子　あなたは、まァ、勉強家ですねェ？

桂　いや、なに、人が書物讀むのは、あたりまへのことです。

民子　それでも、あなた？

桂　何んです？

民子　あまりあそばすと、あたまがわるくなりますよ。

桂　なっても、いゝでャァないかね？

民子　ほゝゝゝ、そんなにおっしャったら。

桂　なに、をばさん、あまり民さんをやすませてはいけませんよ、なまけてしまう、大淨寺へばかり行ったって、まさか、お墓が學校でもあるまいし。
民子　あら、あんなことを！
瀧子　それでも、あなたのおとッさんのこと心配ばかりしますから、氣がふさいでて。——しかし、あなただって、まア、もうすこしいへのこともおもはんと。——いまも、この子は詣って來ました。
民子　あ、おッかさん！　いゝもの忘れて居た、おみやげがあったのだのに。
瀧子　さうかい、何んだえ？
民子　お菓子よ。
瀧子　丁度いゝ、持ッておいで。
民子　それでも、すこしだもの。
瀧子　すこしだッて、恥づかしいことは無いよ。持っておいで。
桂　ありッたけでいゝからね。
民子　ほゝ、そんなら。——だって、こゝろばかりですよ。（は入る。）
瀧子　あなたももういゝとし、いつまでひとりでは居られまい、どうせ、いち度は、およめは取るでせうに。
桂　いや、もう、わたしは一生涯、決してつまは持ちません。

瀧子　それさ、まァ、急にどうしたわけで？

桂　何にも。急でも何んでも無い。

瀧子　どうして、おまい、まァ、そんな氣におなりなさった、よくまァ、考がへて御覽、桂のいへを繼ぐもの、あなたの外誰れがあらう？　民子があと取ツて居ましても、あれはをなご、あなたのお時が來るを待ッて居ました。それに、あなた、むざ〳〵、家はどうするつもり？

桂　おやは家をつげとはいはなかった。

瀧子　そんなら、おまい、かたきを討ちましたか？

桂　さァ、それは……

瀧子　討ちましたか？

桂　さァ、それは……

瀧子　討たないでせう？

桂　それは……

瀧子　さァ？　桂。　さァ……

瀧子　さァ？　おほゝ！　あなた、何にもそれにはおよばないでせう、家さいお繼ぎなされば？

（民子茶と菓子を以ッてくる。）

以ッて來たの？

民子　まァ、お茶でも。（茶を入れなどする。）わたしは、いま、お墓から歸つて。
瀧子　この子はいつ詣つたつて、草も取らないのだもの。
民子　あら、取りますよ！　わたしだつて、取らないで？――しかし、あなた、まァ、大層、お墓が奇麗になつて居ましたよ。
桂　さうでせう、こないだ、わたしも詣つたから。
民子　横手の草が取れて、なか〳〵さつぱりいたしました。
桂　はゝゝ！
瀧子　おとッさんもあのお墓で、御心配あそばして御坐るだらうに。――吾良さん、あなた、おあとは繼がねばなりませぬぞ、たゞひとりのあと取り。
桂　はゝゝ！　死んだあと繼げァ、お墓のしッぽだ。
瀧子　吾良さん！　それでは、おまい、通りません、家を絶つは、先祖に對しても不孝です。
桂　いや、おばさん、わたしは決してをんなは持ちません。
瀧子　そんなら、大淨寺へお行き。
桂　それさ、ぽこ〳〵〳〵。
民子　あなた、それさ、まァ、何にをあそばす！
桂　これは殺ろしたこひのおとぎさ。

民子　ほゝゝ、こひにからだが御坐りますか？
桂　（おもひ入れ）無いに死んだが、なほかなしい。
瀧子　まア、おまい、なぜそんな氣になったどらう？　そんなら、いよ〳〵家はつがないつもりだね？
桂　をばさん、わたしゃ氣ちがひだ、ほッときなさい。
民子　そんなことを、あなた、なぜ、まア、御自分でそんなことおっしゃります？
桂　いや、民子さん、これからも、桂のいへは矢張りあなたのものですから。
瀧子　それでも、この子ひとり捨てゝ置くおつもりか？　うちのをぢさんだッてもね、あまり御心配あそばし、腹をたてゝ御坐る。
桂　それャア、これまで受けました御恩にそむくわけでは御坐いませんが、どうしても、仰せには従がへません。——ちゝうへも、わたしに家をつげとはいひませなんだ。
瀧子　そんならさ、かたきを討ちますか？
桂　さア、それは……
瀧子　討ちますか？
桂　さア、それは……
瀧子　「さア、それは」でャア、わからないだらう……
桂　それは、實は、むねに一とつ、學問したものでなければャア、知れないことがあるんです。——こ

れさ、どッこい！

（立つ、奥より、定行いかつていで來たる。）

定行　これゃ、桂ぐづつきめ！　樣子は聽いたぞ、氣ちがひ！　かたき討たねさァ、そのかはり、おやのあとはつぐ筈、これが、貴さま、わからんか？　わからねさァ、でて行け！——これさ、をぢの恩さへわすれて、そんな木石同然なら、こゝには置かん、出て行け！　出て行け！

（桂をつき飛ばす。）

民子　あゝどうぞゆるして、ちェえゝ、くださりませいなァ！

（民子父にすがりて泣く。）

桂　ほとゝぎす、

こゑや　こほり　の

血　一魂！　（桂入る。）

瀧子　民子、あれでは、おまい、見きらねゃならぬ。

民子　いえ、わたしはどうなツても、見きられませぬわいなァ。

定行　これゃ、馬鹿もの！　何んだといふ？　あんなものを慕たッたとて、いつらちがあくものか、手まへも出て行きたいか？

民子　はあゝ！

瀧子　もう、泣いても、仕かたないよ。
民子　わたしゃ、そんなら、死にたう御坐んす。
定行　よくいッた、馬鹿ものめが！――おのれ死なしてよけれァ、こんな苦勞はせないわい。
民子　えゝ、かたじけなう（木の頭）
民、瀧　御坐んすわいなァ。
（見えよろしく、道具まはる。）

（二）おなじく桂勉强室の場

（本舞臺森邸内の一室、下手に窓、そとは高き杉の木、桂窓下の机によッて、ハムレットを開らひたまゝ、おも入れ。床の間に一劍。）

桂　樹の葉はしづんで、いしが浮く、うき世はげにむなしいゆめに相違あるまい。かくも亂だる娑婆世界、必竟、つくッたぬしあらば、萬物備はッた人間に、なぜまざ〳〵あらはれん？　人をなやみくるしめ、これをあざけッとるなら、なぜわれをうました？　はじめ無くんば、わが身もまたをはり無かッたのに、思想以ッてうまれ來たり、思想以ッてこのわずらひ。人は限ぎり脱せぬか、限ぎり脱し能はぬか？　智識得れば得るほど、智識のくるしみあり、からだあればある爲め、からだのくるしみあり。絕ちきられぬこの煩惱！　治しがたきこの苦痛！

すくひ給ふ神ありと信じがたきこのからだ、これも一とつのかたき、討つはやすいが、しかし、考がへば考がへるほど、他人も他人でなければ、われまたわれにあらず。懷疑はむねに一ぴきの虫あツて產み出すのか？　めがみ戀ひしたツたのは、このちりの形骸なるか？（書に目をそゝぐ）讀んでこゝに至れば、いつも讀み去りかねる。何にが、かゝる高尙なおそれ、恐怖に堪へて居るだらう？（これを誦する。）

「死のか、死のまいか、一思案、
　どち貴ッとかろ、はげしき
　世の　矢だま　堪へるの　と、
　自さつ　なして　この苦海
　そむき去る　と？」

あゝ、ハムレット、われも死は短刀一と刄にあり。

「だが、死ッだあとで一とつ、
　歸いッて來た　もの　は　無い
　冥途　の　こと　が　氣がゝり。」

しかし、氣、意志、これ、また、くらげの目だまばかり？　ゆめのゆめのまたゆめ、何にもわからんこの人類、たゞたゞよひ浮かぶも、水たちまち引き去って、身は落ち入らん九壑の死かげの谷小

ぐらく、樹だまさますもおそろしいわれは戀とうたがひ、二つをいのちとして生くるもののやみた
なァ。（書を閉ぢる。）
こんなとこに居るほど、苦惱は增さるばかりだ、何にも知らんをぢをば、毎日わづらはしい。宮城如きやつばら討つはやすいが、しかし、殺ろしてまた何んになる？ それに、これにだまされ、そゝのかされた浪子、病氣だから、たび〳〵尋ね行くを、何ゆゑ押し歸へした、ふらちな！ おもへばにツくい雪子、宮城といひたくみて、われとの仲絕つのか？
いや、さうで無い、浪子孃、きみがやさしいおもかげは、わがさびしいたび路を照らす花であツてくれ。（微笑）つたないわが身なれば、粗相なこともしたらうが、――われも醫者だ、何ゆゑ（日も引きつる）病氣見せぬ？ 馬鹿軍醫、馬鹿宮城の胴根性に、さじの加減があるのか？――大魔神！
はゝゝゝ！

（民子、奥のふすまをなかば明ける。）

民子　あなた、お客さまが。
桂　なにい！
民子　赤木さまが。
桂　また、人殺ろしをつれて來るか？
民子　すれァ、まァ、あなた？

桂　向かふい行け！（お松もかほを出す。）

お松　あなた、お客さまがおいであそばしたので御坐ります。

桂　ほツて置け。

お松　それでも、あのまゝお歸いし申されませぬ。お通し申しませうか？

桂　どうでもいゝ、來るな。

お松　そんなら、いま、お通し申します。

（ふすまを立てる。）

桂　（ひとり）かくもつまらんうき世に、なぜわれは生まれた？　かれ木の山いち面神の火をつけたやうに、もえあがツたわが思想、いち度九天に達しても、たちまち九泉にくだる。いらぬ限きりつけられ、いかにもがきもがくも、人はすべてむしけら、矢張り土中をはツて居る。煩悶また焦心、身づからどろ以ツて塗らふどろの世、けがれを脫せんと欲して、脫することが出來ない。むらがツてくる過去未來、おしせまるこのほだし、してもまた、のがれ難い世の中だな。

（奥より赤木此馬。）

赤木　桂君。

桂　やア、きみか？

赤木　失敬。（すはる）

桂　どうだ？

赤木　このごろは、どうしてェるね？

桂　達者だ、いし地藏（ちざう）にでも……

赤木　これャまけぬと？

桂　はゝゝゝ！

赤木　きみャァ相變らず・きざんだ像が笑らッてるやうだ。

桂　それァ、をんなでも、ギリシャのやうな裸體美人であツたなら、月のひかりうつツても・毫も耻づるいろ見えず、情無くして、して・情つきない。かくの如くなッてこそ、美の精いたれりつくせりだ。ところが、きみ・皮肉芝居のざま見よ・まツぱだかにでもなツてさ、おどらねャァ、見物のお氣に入りたてまつらぬのだ。はゝゝゝ！

赤木　きみはよく、出しぬけにいひ出す人間だなァ、もッと、おちついたらどうだね？

桂　ふン、これが落ちついとるのさ。（お松茶を以ッていで來たる。）御苦勞さん。

お松　いらツしャいまし。――何にも御苦勞でャァ御坐いませんよ。（茶を入れる。）あなたはいつか・公園（こうゑん）でお目にかゝツたおかた？

赤木　さうです、いち度お目にかゝりましたねェ。

お松　しぶ茶で御坐りますが。（茶を出す。）桂さまはいち日・つくゑにお向かひあそばし・おさむしさ

うでいらっしゃいますから、あなたはどうぞ、たび／＼、おあすびに來てあげてくださりませ。

赤木　ありがたう。——あの、きみ、僕は、けふ、お別れに來たんだ。

桂　何んでだ？

赤木　僕は佛蘭西へ行く。

桂　え、何んの爲め？

赤木　つとめの都合で、どうやら、宮城が世話してくれたらしい。

桂　宮城がか？（おも入れ。）

お松　それは、まァ、おなごりおしいことを、折角おなじみにならうとしまして。——まァ、それでは御ゆッくりおはなしあそばしませ。

赤木　ありがたう。

お松　御免くださりませ。（は入る。）

赤木　きみ、お名ごりおしいよ。

桂　それやァ、不意だからね。

赤木　僕も何んだかわかれたく無い。

桂　して、澁屋にあッたか？

赤木　ウン、きのふ、わかれて來たんだ。

桂　浪子はどうして居るね？
赤木　あれァ、なぜか知らんが、誰れにも逢はんといってる。
桂　きみァ逢ツたんか？
赤木　いや〳〵、醫者にもかゝらなくツて、やう〳〵、きのふ、宮城に見せたばかりさ。
桂　なァに、きのふでァあるまい？
赤木　いや、きのふさ。それが、まァ、きみ、聽いたら、病人はいやといふのを、うちで無理に見せたんだ。宮城は、きみ、ちかごろ、雪子のおやに大變もてなされて居るぞ。
桂　そんなら、きみ、病氣だけはほんとだね？
赤木　それァ、きみ、實は、きみ、癩病だとよ。
桂　うゝッ！
赤木　さア、おどろくだらうて。知らなんだが、雪子には、まへからはなしてあツたさうだし、きのふ、宮城の診斷でわかツた、うちのものには。ちすぢ血統のわるいんだもの、實に氣の毒でァ無いか？
桂　あゝ、天！　何んぞわれらをなやます！
赤木　きみも尋づねたさうだが、もう、誰れにも逢はないよ、また、耻ぢて、逢はれまいよ。
桂　これで、僕もわかツたが、をんなはあはれなもの、浪子のむねがおもひやられる。だが、僕も

また、恰もいち明鏡(めいきやう)に血ついた如く、わが戀、一點のうらみはのこる。

赤木　きみに對しても、また、實、氣の毒なこと、どうしても、決してわすれられまい。

桂　きみを遠くこれからおもふ如く、浪子は、僕が生きてるあいだは、決してわすれられない。

赤木　若しものことがあツたら、雪子もまたかなしまう。きみには逢へなくなる、僕は暫らく居らない。ふたりの身に取ッたなら、をんなだもの、かなしからう。

桂　僕はあすから、大淨寺の書齋(しよさい)を借りる。

赤木　それでは、なほ更らよく、しづかに、考がへ給へ、手がみはどうぞ、これから、たび〳〵。

桂　きみもまた。

赤木　それさア、きみ。

桂　おわかれでもしやうか？

赤木　けふはよしてくれ、まだ行くとこがあるから。

桂　そんなら、あすでも。

赤木　どうせ、あす、もういち度逢ふから。失敬。

桂　まア、いゝでアないか？

赤木　いや、あす、またゆッくりはなししやう。

桂　さうか、失敬。

赤木　失敬。（兩人立たんとする、奥より松、湯を以ッてくる。）

お松　おや、もう、お歸いりですか？

赤木　はい、もう歸いります。

お松　あまりお早やう御坐りませぬか？

赤木　用がありますから。

お松　それでは、またいらッしやいまし。

赤木　ありがたう。（桂、赤木を送くッては入る。）

お松　（茶椀などかたづけつゝ）桂さまはどうするおつもりだか、うちのお孃さまばかりに心配させて？横から見て居ても、自分までが氣が落ちつかぬ。このお茶の飲みやう！丁度、御自分のおいへにおかまいあそばさぬのとおなじこと。――こゝにもこぼれて。

（お松疊をふく、桂もどる。）

あなた、あまりお早やいお歸いりで御坐りませぬか？――御勉强あそばしませ。（茶道具を以ッて、入る。）

桂　（ひとり）月は照らさんと欲して、またもくもるわがむね、いのちはそのあまぐも、湧いてかゝるやみぞら。わからぬことには、また、分らぬことかさなる。うとましいは（木のかしら）このひとりだなァ。

（幕）。

三幕目

（一）澁屋本宅坐敷の場

（本舞臺すべて澁屋本宅の奥間、繁太郎妻お鶴と宮城軍醫とはなしの躰にて、幕あく。）

お鶴　けふは、かったいはどうで御坐りまする！

宮城　相變らず、何んとも手のつけどころが無い。

お鶴　さうです。まァ、あのくさいこと、近處に居ても、變ににほってくるやうでねェ。

宮城　もう、ながいことはあるまい。

お鶴　さうですか、何んとも困まったもの、何んぼ雪子だって、はじめから癩病と知ってれば、つれ込んでも來なかったどらうに。あれが馬鹿なんですよ、うちでは、もう、あなたに診察してもらう前から、なんだか變だといってたんですものを。第いち、見てもらうのがいやで、雪子がすゝめても聽かないし、やうよのことであなたに見せたんでせう？　それに、あなたのおくすりも飲まず、癩病だといはれてから、まァ、御覽なさい、あのこわいかほをして、ねェ、おほゝ、まァ、おこぜか何んかのやうに。

宮城　しかし、まァ、かわいさうでァ無いか？　醫者ならばこそ見せるが、誰れだって、自分のつま先の

傷さへ人に隱くすものだのに、まさか、人にかゝったいぐすりを飮まされたのでさァ無し・先祖代々の血すぢがくさるんだもの、雪子さんにもはじめははなさなかったのは尤もさ。
お鶴　尤もだって、こっちの迷惑でさァ。
宮城　しかし・雪子さんはやさしいから・たとへはなされても、それをしほにことはりは成されまい。
お鶴　馬鹿だから・人に賴まれると、あとでの厄介も知らんで、「さァ〳〵おいでなさい」とつれて來るんですとも。――いや、しかし・人のおよめにならうとおもやァ、あゝすなほで無くってさァいけないですよ、舅なぞが居て御覽なさい。しかし・あなたはおひとりだから。
宮城　さうです、舅もなけれさァ、何にもない・二代目の六無齋のやうだ。
お鶴　でも、おかねは御坐りませう、おほゝゝ！
宮城　無いかも知れん。――こないだまでは、した役に山口といふ厄介ものがあったが、それも追ひ出してしまったし、まァ、わたしぐらゐ氣樂なものァなからうて。
お鶴　雪子があなたの奥さんのあとへ行けば・あれもそんなら氣樂でせうよ・おほゝゝ！（奥より繁太郎。）
繁太　どうだ、お鶴、見てもらったか？
お鶴　まァ・ちょいと、浪子はもうながいことは無いとさ。
繁太　それでさァ、もう、助かる見込みは御坐りませんか？

宮城　ありませんね。
お鶴　いッそ、死んでしまふなら、早やく死んでしまッたらかたづくに。
繁太　そんなことがあるものか、まァ、雪子もいまゝで世話になッてたものだらう？
お鶴　だッて、どうせ死ぬなら、早やく死ぬが浪子に取ッて氣がねがない。
繁太　それも壽命だから仕かたが無いが、うつくしかッたものが急にあんなになるもおしいものだ。
宮城　いや、もう、運といふものは無情なもので、あたら花を散らしますわい。
繁太　もう、雪子もおもひ切らねばならぬか、くすりを飲めばいゝに、すこしも飲もともせず。
お鶴　剛情といへば、まァ、あの雪子もどうしてあんなに剛情だらう、宮城さんを知らないでいやがッたり？
宮城　いや、どうせ、ぢゝいのことですから、おいやといはれゝァ、無理におすゝめはくださるな。
お鶴　今夜、きびしういッて見るだらうでャァ御坐いませんか？
繁太　おまいから、よく得心させて見るがいゝ、あまりおこらさないやうに。
お鶴　(宮城に)あなたは、まァ、御ゆッくりなさりませ、何にも御坐りませんが、(繁太郎に向ひ)ねェ、あなた、………
繁太　それがよからう。奥の間で………
お鶴　そんなら、一杯(木のかしら)

三人　催しませう。

（道具止まる。）

（二）　大浄寺の墓場

（本舞臺、すべて序幕返へしの通り。入相のかねにて、下手より博徒三名。）

一　おい〳〵、この墓だ、この。

二　ウン、いゝいし。男爵、華族のだな。

三　こいつうこわせャア、勝負ァ手のひら。

一　から毎日しくじってャア、なかまにつらも出せねェや。

二　誰れもさ。あの勘太、なか〳〵あやかりものめ！

三　何にさ、今夜こそいち番、運はこッちい向ひて來らァ。

一　今夜こそ、勝たねェで置くものか？

二　このいしせェ缺ェで以ってれャア、聖天さまもおよばねェ信心だ。

三　かわいさうだなァ、立派のを？

一　なァに、から缺くのだ。

二　なか〳〵かてェぞ。

三　これさ、こんなにもろく。

一　もろくとァ、緣喜のわりい。

二　いやさ、蒙碌にャァまだならねェ、――さァ、けェた。これで、さいは立派においらのものだ。

三　何んだ、手めェばかりしめる氣か？

（上手より、桂背負おも入れして出てくる。）

桂　あなたがたは何にをするのです！

一　へェ、何にもしては居りやせん。

桂　なぜ、そこに居る？

二　何のわけでも御ぜェやせん、へェ。

三　旦那、うめェはなしは御ぜェやせんか？

桂　これさ、そこのけ！

一　何んだ、したから出れャァ、つけャァがって？

二　こゝに居るのが……

三人　何んでわりい？

桂　（欠いたいしに氣がついたこなし。）そのいしは何んだ？　あッ！　人の墓を缺いたり。

一　人のなら、そんなおどしはよしねェ。

二三　おまいさんに關したことでやァねェし。

桂　これはわたしのおやだ。

三人　へえ、おまいさんのおやで御ぜェますか？

（三人すこし引け味のついたこなし。下手より、大淨寺の和尚〕

和尚　みなさん、何にをして御坐る？

桂　いま、墓のいしを缺いたりするやつ！

和尚　お前さんたちか來て、いしを缺くから、こちらでたびたび迷惑します。これから、こゝの墓は

ひかへてくだされ。

一　和尚さん、もう、これからやッて來ませんから。

二、三　わりいことをやりました。

和尚　もう、來てはなりませんぞ。

一　へェ、もう、來ません。――さァ、けェらうでやァねェか？

二、三　さァ、けェらう。（三人捨ぜりふにて、上手へは入る。）

桂　馬鹿なやつもあるもの、のらくらと三人づれとァ、何んの爲めに墓のいしを缺いたり、馬鹿馬鹿

しい。何んになる！

和尚　いや、あれはみなばくち打ち、墓の石を持ッて居ると、勝負に負けぬといふので御坐ります。

桂　はゝア、なる程、そんなはなしがありますか？――ばくち打も、かたき討ちも、死人ではおなじ墓のいし。

和尙　いや、大部缺いて行きましたぞ、仕かたが無いごろつき！

桂　つき日立つは早やいもの、それも知らず、うか〳〵過ぎるものゝ氣が知れん。

和尙　實に、おや御さまがお亡くなりなされてから、もう十年。

桂　いつまで待ったらいゝのか、こゝろのうち？

和尙　和尙はお察し申しまする。

（下手より寺男莊平。）

莊平　さァ、御膳が出來まして御坐ります。

和尙　それでは、桂さん、まゐりませう。

桂　いや、わたしはちョッと水でも手向けますから。

莊平　それでは、手桶は向ふに乾して御坐ります。

（三人下手へは入る。本釣鐘、上手より山口進、下手より入れずみ勘太、共に頰かぶり。）

勘太　おやかた。

山口　勘太。（共に頰かぶりを取る。）

勘太　今夜、いよ〳〵だな？

山口　ウン、いよ〳〵。溢屋といふ倉ァざく〳〵あるからね。
勘太　それで、わっちャァなかまをぬけて來た。
山口　これから行って、しのばうさ。（墓を見てびックくり。）「男爵桂正國之墓」、これァ、おいらが讒言して、免職させたもののおやだ。
勘太　讒言？　さすがァおやかた、どこい行ってもぬかりャァねェ。
山口　こんなとこにあるんかい？　今夜は入る倉にャァ、これのせがれが惚れてる、浪子といふをんなも居らァ。かったいで、寐てェるだらうよ。
勘太　きたねェもんの居るとこでャァねェか？
山口　いくらきたねェって、こっちの仕ごとにャァかまはねェ。
（下手より、手桶をさげて桂。）
桂　山口？
山口　桂か、南無三！　（兩人上手へにげては入る、桂、不審のこなし。）
桂　あれがもとの山口？　たとへいまはあのなりでも、もとはおなじ軍醫、同僚。われに耻ぢて、何にもにげるにもおよぶまい？　何をして居るやら、あゝ、人は落ちぶれば、落ちぶれる（木のかしら）ものだなァ。
（石塔に水をかける見えにて、道具まはる。）

（三）　澁屋本宅雪子部屋の場

（本舞臺、上手より常足の二重、椽つきの奥坐敷、下手飛石、雪子、ランプのもと、机にもたれて、おも入れ）

淨瑠璃。「ふけて行くやみ夜に迷ふふたみちの、雪子がおもひ亂だれがみ、うらみをつゝむまゝ母にそむき去らんか、いかにせむ、浪子のうへのおもはれて？　身をまかせんか、いかにせむ、こゝろは遠くしのびかねイ　かぜにさはらぬ女郎花、なびきかねたる風情なり。

雪子　つらいことはたゞ人の身のうへとばかりおもって居たに、いまはわが身におぼえられる。若し、ほんとの母さまが居てくださったら、どうして、まア、こんなことがあらう？　いかに無慈悲な母様でゝとて、いやなものを無理によめにやる、そんなつれないことはされまいもの、宮城さんのやうな人に行けとは、あんまりといへばあんまりな。ええッ！　父上もどうしたこと、とめろとはせず、毎日、一所になって行かそとは！　そんなにわたしが邪魔なら、いッそ、親たしい浪子さんと、たとへかほはふくれて來ても、からだはくされてしまっても、一所に死んでしまいたい。

淨瑠璃。「どう、まア、これがしのばれうと、そで食ひ切ってしのび泣く。折から、いづる下女お鍋。

お鍋　雪子さん。あら、まア、どうしてお泣きなされます？　えゝ？　まア、あなた、うれしいことが御坐りますぞ。

雪子　知ってる。

お鍋　それに、どうしてお泣きなさる？

雪子　うれしくも何んとも無い。

お鍋　だって、宮城さんのお嫁におなんなさるは、おうれしうは御坐りませぬか。

雪子　あゝ、けがらはしい！　そっちい行っておくれ。

お鍋　まァ、そんなにおゝこんなさらんでも。いま、旦那やおかみさんと一所に、三人で御酒をあがッて御坐ります。（は入る）

浄瑠璃。「あと見送くってたゞひとり、むね一杯のかなしみをこらへかねてやはら〳〵なみだ。ぬぐふにいとまあら磯のいはにくだけておもひ入る。折から、奥より母お鶴、いづるすがたもよそ〳〵しく。

お鶴　お雪、まだ寐ないの？　どうして泣いたり？——おまいは、まァ、なぜおやのいふことを聽かぬ。え、おとッさんがあのくらゐすゝめるのに？　おまいの不爲めならばこそ、誰れも、自分の子ののち〳〵をおもはぬものァ、あれしャァしないよ。世間に澤山をとこはあっても、浪子の見たやうないくお無しもあるだらう？　それに、おまい、宮城さんのやうなおかたは、お役といひ、おなさけといひ、どこにいひ分があらうぞい？　人にあやかりものといはれたけれしャァ、おまい、あゝいふおかたのお嫁だよ。——えゝ、雪子どうだい？　何にも耻づかしくないやね。

浄瑠理。「どうじや〳〵と母おやの一杯氣げんにゆすらるゝむすめが無念さ、うらめしさ。

雪子　（そでをくひ切りつゝ）わたしがそんなにお邪魔なら……
お鶴　何んだと？――
雪子　いつそ、死にたう御坐んす。
お鶴　お死に！　死んでしまいなよ！
雪子　はあゝ！
淨瑠璃。「わつと泣き伏す雪子をば、にが〳〵しくうちまもり。
お鶴　おまいは、いよ〳〵、わたしのいふことを聽かんね？――これから、もう、一切、おまいの身のうへにはかまつてやらんよ、勝手におしな。おまいの爲めをおもつてやるのに。――これ、雪、いよ〳〵だね？――もう知らん。さァ、早やく、あの浪子を追ひ出して、きたないあとを掃除おし。――よし〳〵、をとこにいひつけて、すぐに追ひ出すから。
淨瑠璃。「立たんとすれば、すがりつき。
雪子　すれや、すれや、あんまりな。
お鶴　えゝ、知らん、不孝もの！　あのかつたいのかさうらみ、早やく追ひ出して、掃除せい！
雪子　それでやといふて、まァ？
お鶴　えゝ、追ひ出せといふに！
雪子　はあゝ！

お鶴　泣くらゐならさ、おやのいふことを聽くかえ?

淨瑠璃。「また居なほるうしろより、ふすまをあけて父繁太郎、聞き居たりけん、いで來たり。

繁太　お鶴、もうせめてくれな。これほどいふても聽かぬのは、何にか深かい子細があろ。――雪子、さァ、いまは、もう、何にもかくさず、そちがこゝろをうちあけてくれ。父母のまへで、はゞかるにはおよばん。

淨瑠璃。「さすがてゝ御のうちとけて、慈悲あること葉になみだをぬぐひ。

雪子　お二人さまの仰せにそむき、わたしが氣まゝを申し升のも、これにはわけのあること、そんなら、どうぞ、お聽きなさってくださりませ。まだお話し申しませねど、實は、わたしは、行する一所になりたき人がお坐りまする。

繁太　むゝ!

雪子　宮城さまはそのおかたを、わたしと仲へだてん爲め、お役とはいへ、わざ／＼遠いフランスへ送くられ……

淨瑠璃。「こひしきそらは千萬里、また逢ふまでのかたみとて、ゆび輪!とつをおもひ出の。ゆめにそひ寢のおすがたも、さめてはいつか歸へりこん?いまにもあやういあの浪子さんひとりが、たゞけふあすの友だち、桂さまは御坐っても、いまゝでこちらがうそついて居たやうで、もう、ふたりはかほがあはされませぬわいなァ。

淨瑠璃。「わッと身を投げなきさけぶ、むすめをちゝはいだきあげ。

繁太　雪子、ゆるしてくれ〱。早やくから知ッて居ッたら、こんなことはいはなかッたぞ。

お鶴　わるかッた、わたしが、どうぞうらんでおくれなよ。

（木釣鐘、椽の下より、白刄の賊二人。下手障子を蹴やぶッておどり入る。）

賊一　これァ、宮城にのせられた馬鹿夫婦！　かね出せ。

お鶴　すれァ、おまいはどろ棒？

賊二　だまれ、をんな！

一　（繁太郎の目さきへ刃をつき出す。）これだぞ。だまッてろ。

二　さァ、いのちが惜しけれァ、しばられてしまへ。

（一はそのまゝ立ッて居り、二はお鶴をしばる。この時、一のかぶりものはづれる、雪子見てびッくり。）

雪子　あなたは山口！

山口　だまれ。――勘太、早やくしばッてしまへ。

勘太　これァ、どこへ行く？

（勘太、にげやうとする雪子のくび筋をつかんで、引きもどす。）

雪子　あれえい！

勘太　だまッてろ！

山口　（雪子に刄をつき出す。）いのちが惜しけれァ、しづかになわにかゝれ。

（奥より、宮城。）

宮城　これァ、山口！　卑怯な、待て。

（宮城、二賊を追ふて下手へは入る。）

雪子　あゝ、こわう御坐んしたなァ？

お鶴　まァ、あやういいのちも助かり、ぬすまれたものもなくってすんだ。――しかし、しばられて、手がいたい。

雪子　あゝ、わたしがといてあげませう。――あまりこわくって、手がぶる〳〵ふるへて。（といてしまふ。）

お鶴　あゝ、助すかった〳〵。

雪子　宮城さんのおかげで、――まァ、山口さんがどろ棒？

（奥よりお鍋。）

お鍋　雪子さん、大變で御坐ります、浪子さんが死んでしまって！

雪、鶴　えゝ？

お鍋　何んだか、苦るしいこゑをしたとおもったら。

雪子　かなしいことばかり！　（立つ）

お鶴　早やく行つて御覽。

（雪子お鍋入る。下手より宮城、出て來がしらに人だまを飛ばす。）

宮城　やア、しまつた。とう〳〵にがした。

お鶴　しかし、おかげで助かりました。

繁太　それどころか？　ちよつと行つて見てくだされ．浪子が死んだから。

宮城　死にました？――これや、もう、病院にも居られぬわい。

（は入る。）

お鶴　何んだか、むねが落ちつかぬ。

繁太　おれも手あしがちゞかんで、何んだかなわに（木の頭）かゝつて居るやうだわい。（幕、ちき引ツ返へす）

返へし

（一）　暗夜大淨寺途中の場

（本舞臺、いち面くろ幕、幕明くと、ぢき、下手より桂民子一生懸命にいで來たる。）

民子　あゝ、心配でならぬ吾良さまの身のうへ！　たゞかたきさへお取りあそばせば．父うへのおしかりもなほり、うちへももどつてくださるもの、このごろは、母さまがお寺へ行かしてくださらぬ

故、これもいまゝでおすゝめ申しかねた。うらめしい母さま！「かたきを討てぬやうなものにはそはせぬ」と、毎日ふたりの御意見も、このむねには針をさゝれるやうに苦るしいのに、吾良さまとしたことが何んともおもはぬかいなァ？　それに、宮城は病院をのいてしまふたとのこと、ぐづ〳〵して居れば、またどこへ行ッてしまふか知れぬ。早やくかたきお取りあそばせば、もとのやうにおかほも……居られうもの。父うへさまや母さまのお目をしのんで來たのも、こればッかりが氣がゝりゆゑ。早やく行かうとするほど、なほあしがすゝまぬ、えゝ、しん氣な吾良さまじゃなァ！

（民子上手へ入る、しらせにてぢき幕切ッて落とす。）

（二）　おなじく書齋の場

（本舞臺、上手より寺の一隅室、高き椽がはをまはし、下手あがり段、手洗鉢、芭蕉、そで垣。坐敷、床の間に一劍、桂机上、臺ランプのもとで、おも入れ。）

桂　世のわずらひさけん爲め、こゝに來たがけふあすと、もつれ增さるわがむね。夜はにさめて居るのも、眞にさめては居るまい、さめぬゆめのこの世界、しかし、また、一ところに、よろづ神のおどろき呼び起こすか知れまい。あゝ！　考へて見るほど、見るほどわからずなる。たゞ、夜ふけるばかり。若しもこれで死ぬなら、何にが何にかわからぬ。

（おも入れ、奥より、手燭を以ッて小僧談善。）

誘善　桂さん！
桂　おゝ、誘善さん、いまごろどうしたの？　どうして、そんなにふるへて？
誘善　わたしゃ幽靈見ました！
桂　幽靈を？
誘善　えゝ。
桂　そんなものゝ、おまい、あるものか、馬鹿な？
誘善　それでも、いま、わたしがそこの手洗場出ますと、このあかりが暗らうてよくわかりませんけれど、芭蕉のしたぐらゐで、しろいものがしょんぼりと立って居ました。どこやら、をんなのかほのくづれて、――わたしゃほんとにこわくって！
桂　なァに、おまい、何にかほかのもの見て、さうおもったのだ。
誘善　それでも、わたしゃほんとだもの。
桂　それがこわいことなら、このおてらに居られんよ、うらはいち面お墓で、何にが出るか知れない。卑怯なことはいはないで、早やく寢るがいゝだらう、幽靈なぞ無いもんだから。
誘善　それがほんと？
桂　うン、ほんと。
誘善　（小くびをかたげる。）でも、何んだかこわくって、わたしゃほんとに見たもの。

桂　なァに、おまいが見たとおもったのだ。
誘善　それでも、和尚さんがお好きの芭蕉のしたであったもの。
桂　それャア、もう、どこでもいゝから、早やくおやすみ。
誘善　そんなら、寢ませうか？
桂　ウン、それがいゝ。
誘善　何んだかこわくって。――まァ、あなたもおやすみなさい。
（誘善は入る、桂　矢張りおも入れ。本釣鐘。耳をそばだてるこなし。）
桂　何にかあしをとがする、はて、このまッ暗らの夜に？
（立ちあがッて障子をあけ、すかし見るこなし。どろどろ、浪子の靈、この世を去ッた時のすがた。）
やァ！　なんぢは何ものだ？　月むなしきこの深夜、何にをたより來たのだ、あたりまッくら氣せき寥、くさ木寢むる杢世界、うしみつどきかすめて、何ゆゑまよい來たか？　われを遠き魔界へ引きずり込む大たくみ、看やぶられた鬱げか、但しは、深かきひかりかげにつゝみかくして、わがうたがひ解く爲め、ものに化けて來たのか？　くづれたそのかほったら、――これャ、なんぢ、冥途のつかひ！　身をどうするつもりでしのび來たか、答たへい、これさ、なんぢ、こたへて見ろ！――こたへぬか？　これャ、答たへ！　われをどうするつもりか、こたへて見ろ！――いはぬか？――これさ、こたへて見せよ！

靈　うらめしや、桂さま、上田浪子、幽靈で御坐ります。

桂　やァ、浪子！　死んで、まよふたか！　（椽がはへすゝみ出る。）

靈　うらめしや、桂さま、わたしゃ死んでも、まよふて居りますわいなァ。

桂　浪子、よくいッた。われもまよふは、この世も未來もかはらぬ、さァ、一所につれて行け。

靈　かたじけないお言葉、ほかにわたしゃ怨みは御坐りませぬわいなァ。しかし、わたしゃ血のすぢけがれましたからだで、不甲斐は不甲斐な身とさとってもこゝろよわく、むねのきば破ぶりてしのぶ亂だるわがこひ、身のほどをばわすれて、あなたを兄うへとおしたひ申したわたしは、あのお墓できびしうくやみましたそのとき、ぢきおわび申せばよかッたものを。をんなの念、うまれ升る時より、うらみ深かきもののゆゑ、いふべきこともいはれず、懸くしましたそのつみ、どうぞ、お許るしなされて。たゞ一とこと、桂さま、お聽きなされてくださりませ。――なさけ無いこのなり！　（身づからを見まはす。）

桂　かみあらば、ま守り給へ！

靈　すれゃ、桂さま、決しておそれなさらんでも。わたしがこのすがたで死にましたは、もとより血すぢのやまひなれど、ひとり無事であッたもの、毒以ってだまされましたこのくやしさ、うらめしい！　かたきはまたあなたと一とつなるあの宮城。

桂　えゝ！

あの宮城がわたしの、また、かたきで御坐ります。人のみちも知らずに、たび〳〵くどきに來たすゑ、わたしにくすりやらうと、山口に持たせて來ました。これがこの身をくづすたくみとは、あとでわかりましたが、宮城はいま澁屋でよくもてなすゆゑ、このけがれたわたしが何んぼしたしうまじはッて、いまはのきはまで離れぬ雪子さんにも、どうして、このことばかりはなされませう？ この無念！ どッぞ、あなたが晴らしてくださりませ。かたきはあなたと一とつの宮城で御坐りまする。桂さま、お先きへ〳〵。

（大どろ〳〵、幽靈消ゆ。）

桂　はあ！ ゆめか？ うつゝか？――ばけもの、どこ行ッた？ ゆめなら、早やくさめよ、うつつなら、何んである？ われはすでに魔界に落ち入ッたか？ なほ煩惱天地はなれず、むねのまよひ見たのか？――「かたきはあなたと一とつの宮城」と？ さうだ。

（急におもひつきし如く、障子びッしやり、劍を取り、室の眞中に來たり、立ちながら之を拔いて見つめて、氣の亂だるるこなし。そで垣のかげより、民子、段をあがり、椽のうへ障子ちかう、じッとこゑを飮み込むこなし。）

桂　いかにもするどい！ なんぢ、おやのかたみ、このはでよくかたきを斬るなら、わがこゝろのうたがひ、先づ根からから斬ッて見ろ。（腹斬るまね。）はゝゝ！ばけもの、どこ行ッた、斬り殺ろそか！――あゝ、一寸先きまッ暗のやみ深かく、わが父うへ、魔界のみち迷ふらん。――あなたもうら

みを以つて、悪魔の爲めおなやみなされて御坐りませぬか？——はゝァ！化けもの．どこ行つた？やァ、

宮城．出てこい、ちゝのかたき．殺ろすぞ！

淨瑠璃。「つるぎきつぱり身をかため．またもながむるきつさきのいきもこぼれと靜づまりし．そとに

　民子は椎へかねて、もらせしこゑに耳そば立て。

桂　また化けもの！

　淨瑠璃。「と立ちあがり．ふたゝびあくる障子のもと，民子はかほをうち見あげ。

民子　吾良さま。

桂　やァ．民子！　よくわれをあざむいたなァ！

民子　あれえい．おなさけない！　（肩を斬られて、倒ふる。）

桂　化けもの！

民子　あなた、民子で御坐んす。

桂　なにい、化けもの！

民子　あなた、お氣がちがひましたか？

桂　だまれ．人を——化けもの！

民子　民子で御坐んす。

桂　馬鹿にするな！

民子　[illegible]れ、あなた

桂　だれ！

民子　はあゝ！

淨瑠璃。「わッと泣き出すそのこゑに、和尚はあわてゝいで來たり。

和尚　桂さん、何ごとです？

民子　和尚さま、どうぞ助けて！

和尚　や、お孃さま、斬られましたか！――桂さん、なぜお孃さまを？

淨瑠璃。「誘善またもいで來たり。

誘善　何ごとで御坐ります？――えゝッ！

（誘善びツくり、桂は劍をすててがツくり倒ふれ、まるで氣ぬけしたこなし。）

和尚　桂さん、しッかりさッしゃれ。しッかりさしゃッて、このわけ、これ、よくはなさッしゃれ、これ、桂さん〳〵。これ〳〵。――これャ、氣絶！――誘善、早やく水を。

誘善　はい。（は入る。）

和尚　お孃さま〳〵。――これャ、ふたりとも！　早やく水が入る。誘善はまたぐづ〳〵して居らう。

（は入る。）

淨瑠璃。「うばたまのあやめもわかぬくらやみを子ゆゑにまよふおやごころ、照らすひかりもほのぐ

らくたどりたどりてはせ來たる。

（本釣鐘、向ふより、提灯をさげて定行夫婦。）

瀧子　あれ〳〵、この夜ふけて、あかりがもれて居る。

定行　うれしや、むすめは……

兩人　居てくれたか！

（舞臺に來るまでに、和尚誘善、水を以てもどり、和尚は桂、誘善は民子を介抱する。）

和尚　桂さん〳〵！

誘善　お孃さまァ！

和尚　桂さまァ！

誘善　お孃さまァ！

定行　むすめでゃないか？

誘善　旦那(だんな)さま。

和尚　桂さまァ！

瀧子　え、どうしました？――えゝッ、なさけ無い、斬られたわいなァ！

（民子にすがりつく。）

定行　まァ、しづかにいたせ。

和尙　やァ、森さま御夫婦大變なことが出來ました。
定行　すれゃ、桂も?
和尙　何により。お孃さまを。――桂さまァ!
瀧子　民子よう!
和尙　おゝゝい!（桂氣づく。）
定行　民子よう!
和尙　お氣がつきましたか?
瀧子　民子よう!
民子　（氣ついて、なほ母の膝）はゝさま。
瀧子　これ。氣がついたか?
民子　はい、たしかで御坐ります。――おゝ、父うへ様までが?
定行　桂、これゃどうしたのだ?
和尙　さ、しッかりさッしゃれ。
淨瑠璃。「はげまされて桂吾良、身を起こしてまたひらふかたへのつるぎつらづえに。
桂　これゃ、民子!　いま化けたは貴さまであッたどらう?
民子　すれゃ、あなた?

桂　化けたでャないか？

和尙　何にをいはッしゃる、桂さん？

誘善　それャァわたしもいま幽靈見まして、桂さんに話し、寢たとこ。桂さんは見ちがへて、――お孃さまでャァ御坐りません。

和尙　むゝ、幽靈が出た？

定行　して、それと見ちがへて、……

瀧子　このむすめを斬ッたと？

定行　あゝ、なさけ無い！

定、瀧　なさけない！

瀧子　なさけないはいのう！（また民子を抱く。）

和尙　お孃さま、まァ、どうしたお氣の毒で御坐りませう？

淨瑠璃。「いはれて民子は身を起こす、からだかた手に苦をさゝへ。

民子　いゑ、和尙さま、わたしは、どうせ、死なねばならぬ身、桂さまのお手にて死ぬのは、わたしの本もで御坐ります。父うへさまや母さまの仰せにそむき、こゝまでかくれてまゐりましたも、そのつみは覺悟のうへ。いま聽いて居ましたおひとり言がほんとで、幽靈が出ましたを、それと見ちがへられたわたしは、却ってこれがおうれしう存じますわいなァ。――吾良さま、わたしャこれがおな

ごり、とてものこと、一ことまゐりましたねがひを、どうぞ、お聽きなされてくださりませいなァ。

淨瑠璃。「お聽きなさッてくださんせ。せめてあなたとそはれずとも、父母のいかりのしづまらば、またわがいへに立ち歸へり、御身のすがたをがませてくださるものを、この無殘！　うらみはさらさらなけれども、おいたはしきはおこゝろの解けぬかつらのふし〳〵に。

あなたがいつも〳〵お苦るしみあそばすのも、みなわたしのちちはゝゆゑと存じますれば、どうぞ、早やくあのかたき、――たとへ病院は出たとのことなれど、かげを隱くさぬうち、――どうぞ、早やくあのかたき、あの宮城を討ち取ッて、ちゝうへさまや母さまと、もとのやうによいあいだにおなりなされてくださりませいなァ。

淨瑠璃「さすがをんなのあさはかも、聽いて桂はつッ立ちあがり、萬感むねに立ちふさがり、そろりそろりと氣はかはり。

（ちすどろ、桂、氣のかはッて來るこなし。）

桂　やァ、民子、よくいふたぞ！　なんぢ死なして桂家、われつがねば、以後斷絶、おやのかたきはある、またいへは絕ッてしまえん。たとへ、社會の大法をやぶり脫けて、地獄まで落とさるゝこともあれ！　われはうらみを果たして、なほ生きて居る。――これ、見よ！　このつるきが宮城を斬るつるぎだ。

淨瑠璃。「鮮血淋漓、こほりのやいば！冷えゆく民子は一とたびよろこび。

民子　これで、わたしゃしづかにねむれますわいなァ。

和尙　いや、桂さん、かたきを急に取らッしゃるとな？

定行　桂、ゆるしてくれ、かたきを討て〳〵といッたは、いのちおしんで民子とそふてくれるかとばかり。

瀧子　それを民子はほんとに、さぞうらめしうおもッたろ。

桂　いや、かたきも取る、家も繼ぐ。

和尙　それはまた、出來ぬことで御坐るぞ。

瀧子　これさ、民子！　もういきがきれたか？

定行　えゝ！　もう、きれたか、民子！

和尙　きれましたか？

（定行も和尙も、民子のそばにあつまる。）

瀧子　これ　もう、一とこと！

定、瀧　民子よう！

和尙　お孃さまァ！

誘善　お孃さまはもう死にましたか？

定、瀧　民子よう！

浄瑠璃。「よべどさけべど、なきがらの答ふることもあらばこそ！

瀧子　吾良さま．聽こえませぬわいなァ！

桂　宮城．どこ行ッた？　くそ！

和尙　これ．桂さん、どこへ御坐る？

（桂、劍を以ッたまゝ、下手へ下りるを、和尙、つゞいて下りて、之をとめる。（本釣鐘。）

和尙　必らずお氣をしづめて（木のかしら）

定行　狂るふまいぞ。

（うしろより一人のぞく、見えよろしく、幕。）

四幕目

（一）森子爵門前の場

（本舞臺通してねり塀、上手へよって門、石段。幕あくと、新聞配達りんを鳴らして通り過ぎる、門をあけてお松、氣の落ちつかぬこなし。）

お松　お孃さまはどこへお行きあそばしたやら、もう、新聞も來るころだのに？　あまりといへばお氣のみじかい．父うへさまや母さまのお目をしのび．夜なかにおいであそばすとは。若しものこと

があつたなら、（石段下りる）あゝ心配でならぬ。手わけをして出た人も、まだ誰れももどらぬは、堀へでもおはまりなさりはせぬか、いまごろまで、どこを探がして御坐るやら？　旦那さまや奥さまは、なほ更らおしかりあそばすものを。

（段をあがる、上手より、提灯をさげて家令澤田辰之進。）

澤田さんで御坐りますか

澤田　おゝ、歸いりましたか？

お松　いえ〳〵。どこにもおいでなさりませぬか。

澤田　わたくしは、もう、そこの堀ッぱたから、向ふの松の木の近處、それからまだ、方々こゝろあたりを探がしましたが、下駄一とつ見つかりません。若しやはだしでゞも飛び出したのかとおもひますが、――まァ、大淨寺の方はどうですか知らん。

お松　それで御坐りますが、まァ、おいでなされればよろしう御坐りますが、――どうあそばして御坐るやら？

澤田　どうも、安心が出來ません。もういち度、うちの井戸でも探がして見ませう。

お松　もう、お歸いりあそばしさうなもの。

（澤田入る、お松また下りる。）

一向もどる樣子もない。（またあがりつゝ）若しや大淨寺に御坐ったゆゑ、夜があけてからお歸いりの

ことやら？

（下手より、桂と寺男莊平、民子を乘せた臺のあと先きをかつぎ、定行夫婦提灯をさげて、いで來たる。）

お嬢さまで御坐りますか？

莊平　へエ。

お松　まア、これで安心いたしました。――なぜ、そんなものに？

桂　いや、お松、安心どころでャ無い。

お松　え〻、どうあそばしました？

瀧子　ま、うちへ入ればわかる。

定行　門をよくしめて來い。

お松　かしこまりました。

（お松あとに門をしめる。上手より、山口と入れずみ勘太。）

山口　おい、けふから、あいつのあとをつけて行くんだが、どうか、うまく行けばい〻が。

勘太　行かねエでさ、あの千兩？

山口　町醫になった、宮城めが受け取りに行く、澁屋のかね、……

勘太　どこからどこまでつきまとひ、……

山口　うばひ取らねヤア、こねエだのうらみはしけエせねエ。――けさ早やく出立するといふんだから……

勘太　先づ行つて、うちの樣子を。

兩人　さうだ。

（兩人入る、鳥の笛にて、道具まはる。）

（二）宮城町醫居宅の場

（本舞臺、上手書生部屋、下手玄關、淺見政信、旅荷物をとゝのへて居る。）

淺見　あゝ、寢むたい〳〵。こんなに早やく起こされてちや、目もたまるものでやない。しかし、から、赤木君の世話で、主人が病院につとめて居る時から、書生をしてゐるのだから、いまとなつてもまたお伴もせねやならん。主人と一所に、けさ、信州地方へ出立するが、これは澁屋のむすめが婚姻の料にする金を、賴まれて、受け取りに行くのだといふが。かねがあるところでは、何にをするつて、倉の中を開らかんでも、ちよつと貸してあるのを取つてくれやまに合ふこと、それでも大きいものだ。主人が辭職早々、から立派な町醫になれたのも、澁屋から資本を出してもらつたんだから、すこしやいやな用事も引き受けてやらねやならんだらう。もうおつつけ、時間だらうに、――早やく出立せねばならん。（奥にて手をたゝく）へえ。

（淺見は入る、下手より、警察署長日高秀太郎、巡査一名玄關に來たる。）

日高　頼む〳〵。（淺見出る。）

ちよつと宮城君呼んでください。

淺見　えゝ、いまから旅立つところですが。

日高　それでもいゝからちよつと呼んでくれ。

淺見　はい。（は入る、宮城出る。）

宮城　日高君、そんなに早やく、どうしたんだ？

日高　急用がある。

宮城　急用？　僕はすぐ出發するが、まア、あがらんか？

日高　いや、あがるどころでャア無い、きみに出發の時間をのばしてもらつて、ちよつと行つてもらいたいのだ。

宮城　どこい？

日高　檢屍だ。いま、大淨寺に人殺ろしがあると訴たへて來たものがあつて、……

宮城　人殺ろし？

日高　行つて見たら、早や、斬られたものは運こんで行かれたから、その運こんで行つた先きまで行つてくれ。

宮城　どこまで？

日高　森子爵のやしきだ。
宮城　誰れが殺ろされた？
日高　あすこのむすめだといふが。
宮城　えゝ、誰れに？
日高　誰れか知れゝァ、はじめからさわがない。
宮城　（おも入れ）子爵のむすめが、大淨寺で？それでァ桂が――いや、日高君、僕ァ行けない。
日高　どうして？
宮城　どうしたって、きみ、いま出るところでァ無いか？
日高　なァに、汽車（きしゃ）なら、次ぎので行けァよからう？
宮城　しかし、都合があるからね。
日高　都合たって、きみ、まァ、行ってくれ〳〵。
宮城　それァ、行ったって、いゝやうなものだが。
日高　そんなら、行き給へ。早く〳〵。
宮城　それでァ、ちョッと待ってくれ。（は入る）
日高　あの和尚のいひやうが、すこし曖昧（あいまい）だねェ？
巡査　何んだか、いひにくさうにして居ました。

日高　行ッた様子では、もういち度取りしらべて見よう。

巡査　それがよろしう御坐いませう。

（宮城出て來る。）

宮城　さァ、行きませう。

日高　早く行かねャァ。

（宮城、淺見のおろすはき物をはく。）

淺見　行ッておいでなさい。（下女たばこ入れを以て出て來る。）

下女　たばこ入れをおわすれなすッて。

宮城　さぅであッた。（受け取る。）

宮城　さァ、行かう。

下女　いッていらッしャいまし。

（宮城、日高、巡査、下手へは入る。）

下女　人殺ろしがあッたといふんですか？

淺見　さうだ。

下女　折角早やく起きて、御膳をたいたり、無駄ぼねつかッた。まァ、臺どころでやすみませう。

（下女入る、淺見もとへもどる。下手より山口と勘太。）

山口　おい、こゝだが、手めェ行って樣子ゥ見て來ねェ。
勘太　よし。わかつた。（玄關に來て、うろ〳〵）
　御免なせェ〳〵。
淺見　（出て來て）何に用です？
勘太　へェ。先生御ぜェ宅でげすか？
淺見　いま人殺ろしがあって、檢屍に行って、留守だ。
勘太　お留守でげすか？　それでャア、こっちものばしませう。
淺見　何にをのばす？
勘太　へェ、出立を――いや、病氣を見てもらいてェのでげすが。
淺見　そんなら、先生は歸いれば、ぢき信州の方へ、用事があって出發するから、いま見てやらう。
勘太　とても、書生さんでャア駄目です。
淺見　何んだ？
勘太　いや、これでわかりました。
　（勘太、山口の居るところまで來て、何にか示し合はして、は入る。）
淺見　いや、仕かたが無い（木のかしら）やつだわい。
　（道具まはる）

（三） 森子爵門前の場

（舞臺もとへもどつて、門前の場、男の甚六平助二人、掃除をして居る。）

甚六　おい、平助、ゆふべのさはぎは何んでやつたの。

平助　おれも知らんが、お孃さんが居なくなつたとかで、旦那さんから奥さん迄が、方々探がしに行かしやつたんだとよ。

甚六　それで、あの臺に乘せて來たんだな。

平助　さうとも。

甚六　それだつて、まア、なぜあんなものに乘せて來たんじやア？

平助　おらア知らん。しかし、まア、奥では大さわぎだ。

（また掃除して居ると、下手より宮城、日高、巡査、門内には入る。）

甚六　それ見よ、お役人さまが來たり。

平助　これや、甚六たゞごとでやア（木のかしら）

兩人　あるまいぞ。

（掃除する見えにて、道具まはる。）

（四）森邸内民子檢屍の場

（本舞臺すべて邸の一室、よきところに屏風、民子を寢かし、枕もとに瀧子、桂、お松。）

お松　吾良さまとしたことが、どうお狂るひあそばして、ほんに、まァ、おいたはしい、お孃さまがこの無殘？　どこいおいであそばしてもおつき申したわたしは、おうらめしう存じますわいなァ。

桂　民子、ゆるしてくれよ、民子、決して殺ろす氣でない、おやの遺言に從たがひ、桂家つがしてあったに。あやまったぞ、民子、許してくれ、あやまった。このやさしいくちもと、もう、この世でわらはぬか？　（一心に接吻。）

瀧子　お松、いつまで泣いても、もう、仕かたが無いわ、いまに出入りの醫者が來たら、病氣で死んだ體にして、どうぞこと無くすませたい。旦那さまはどうあそばしてか、見て來てたも。

お松　はい。（立たんとする。）

定行　（奥にて）いや、來るにおよばん。（いで來たる）も早や、病氣もいつはれん、早や警察署に知れて、役人が來たぞ。

瀧子　えゝ！　そんなら、あの、知れまして？

定行　近處のものが立ち聽いて、ぢき訴たへ出たさうだが。

瀧子　それでは、いま、吾良は取られますか？

定行　それだが、何にも心配はいたすな。うまく・それはこと無く、すますつもりだ。――桂・こゝをのいて居れ・早やう。

桂　民子、ゆるしてくれ。

瀧子　早やくおのき。

定行　これ、吾良、こゝへ出て來てはならんぞ。（桂入る。）から知れたうへは、もう、吾良を助けるばかりだ。あれをうまく、こと無くすまさうには、まァ、民子があれへしのび行く途中、何ものか賊に斬られたとして見ろ、それで、何にも、このつみはあれにかゝらう氣づかひはあるまい。

瀧子　仰せの通り、たゞ・斬られたものを入れて、介抱して居たばかり。

お松　どうぞ、それですみますれば・よろしいもの。

定行　どうか、桂は助けてやりたい。（民子の死がほを見て）このかほで、もうものいはぬか？

瀧子　このくたもとわいのう！　おやとおもへばこそ、うらみもいふてくれた、子とおもへばこそ・またとめもした。このやうに殺ろそとは、まァ・天道さま！・お情けない・ゆめにも存じませなんだわいな！（屍にすがりつく。）これ・民子、どうぞうらんでたもんな、うらんでたもんな〳〵よ！

定行　瀧子、お松、もう泣くな。死んだものは、もう、いつまで立っても歸いらん。さァ・早やくそこらをかたづけろ。

お松　はい。（立って、あたりをかたづける。）

定行　役人が來ても、必らず見ぐるしいざまを見せてはならんぞ。
瀧子　こゝにまだ血のあとが、これ、くびに。――このほそいくびすぢわ！
（くちでハンケチをぬらして、之をふく。奥より、家令澤田辰之進。）
澤田　もう、通してよろしう御座いますか？
定行　通していゝ。
澤田　左樣ですか？　すぐ通しますから。
（澤田入る。奥より、家令につゞいて日高警察署長、巡査一名、宮城町醫。）
日高　えゝ、わたくしは警察署長、日高秀太郎と申します。先刻、あるものゝ訴たへで、大淨寺に人殺ろしがあると承はり、早速まゐりましたところ、和尙のはなしでは、こなたの令孃が寺へおいでの途中で、何ものかにお斬られなされたとのこと。
定行　それで御坐る、何ものか、その途中で、この通り斬り殺ろした次第。
日高　それで、わたくしどもの役目として、たゞいま、檢屍にまゐりまして御坐います。
定行　それは御大儀。
瀧子　みなさま、御苦勞に存じまする。
お松　どうぞ、お敷きあそばせ。
日高　はい。――えゝ、して、お斬られなさった傷といふはどんなになって居ります？

定行　そのかたな傷で、ひだりの肩よりずッとみぎのあばらへかけて。

日高　およそいつごろで御坐います？

定行　二時ごろですか？（日高手帳へひかへる）

宮城　先づ、役目をすませばどうです？

日高　それでは、いち度拝見を。（檢屍にかゝる。）

瀧子　この通りで御坐ります。

日高　ひどくやられましたものですなァ？

瀧子　お松、かなだらひに水を。

お松　はい。（入る、宮城檢し終ッて、坐にもどる。）

定行　澤田、すゞりと紙。

澤田　かしこまりました。（入る。）

宮城　いかにも深くやられましたるのです。

（お松水を以ッてもどる、宮城手をあらふ。）

何んとおッしゃりますか、お名は？

定行　民子と申します。

（宮城、澤田の以ッて來たすゞりで檢屍狀をしたゝめる。）

日高　いきはぢき絕えましたか？
定行　間も無く絕えました。
瀧子　まだいひたいこともあッたであらうに、さぞ殘念なことで御坐りませう。
日高　二時ごろに斬られて、それから、こゝへお運こびなされた手つゞきは？
宮城　（したゝめ終はッて）これはきみにお渡し申す。
日高　これで、宮城君、歸いッていゝ、いそぐだらうから。
瀧子　えゝ、あなたが宮城？
定行　いや、あなたが慈善病院の宮城さんか？
宮城　左樣で御坐い。わたくしは宮城純と申します。病院の方はこのごろよしまして、町醫をやッて居ります。
瀧子　あの、あなたがまち醫を。
宮城　左樣で御坐います。
定行　なァに、それはなか〳〵結構。かねて御姓名は聞いて居りました。
宮城　わたくしも、いまは大淨寺に御坐る桂吾良君はよく存じて居ります。
瀧子　くッ！（無念のこなし）
定行　瀧子、向ふへ行ッて、あさの仕たくをさせて置け。

お松　それァ・もう・をなごどもがいたして居ります。

定行　向ふへ行ッて居れ・瀧子。

瀧子　はい。(立つ。)おもへばにくい……

定行　さゝ、早やく。(瀧子は入る。)いや、もう、飛んだ難儀に會ひ、がッかりいたして。

宮城　さぞ・御愁傷で御坐いませう。わたくしはこれから用事が御坐いまして、すこし田舍へ出ますから。

定行　それは、どこへ行くのかね？

宮城　信州地方へ。

定行　それはなか〳〵。

宮城　御免を。

日高　手まをかけて、失敬。

(宮城立つ、奥より桂。)

桂　宮城・待て！　これァ、おやのかたき！

宮城　何んだと？

定行　桂、何にをいふ？

桂　殺ろさずに置くものか？　ちョッと貸せ。(巡査のさあべるを拔かんとする。)

巡査　何にをなさる？（之を押へる。）
定行　桂！
桂　そんなら、これを。（また日高のを取らんとする。）
定行　氣ちがひめ、何にをさわぐ？（桂を捕らへる。）
お松　吾良さま？
澤田　桂さん、こちらへ御坐れ。
（家令桂をつれて行かんとする、奥より瀧子。）
瀧子　吾良さま、まア、どうあそばした、血相かへて？　さア、これ、奥へ御坐れ。（瀧子、桂をつれては入る。）
定行　御無禮をいたしました、宮城さん、すこし氣がちがつて居りますから。
宮城　いや、どういたしまして。――御免を。
お松　御苦勞で御坐りました。
澤田　御苦勞でした。（宮城、家令に送くられては入る。）
定行　あれはすこし氣がちがつて居りますから、貴官のまへもはゞからず、無禮をいたしました。
日高　いまのかたが大淨寺に居られたので御坐いますか？
定行　いかにも。

日高　何んと申されますか？

定行　桂吾良・身どものをひで御坐います。

日高（また手帳にひかへる。）えゝ、して、どういふ工合になされて、ぢきにこゝへお運こびなされました？

定行　それは・われ〳〵夫婦があとを追ふて行ったから・臺にのせてかつがして來た次第。

日高　何んのわけで・夜るひとり出られました？

定行　もとより分別知らぬむすめの不處存・いまの者を慕たって行ったこととおもはれます。

日高　それでは・いまのかたのところへしのんで行く途中で・何ものかに斬られたといふわけで御坐いますな？

定行　左樣で御坐る。（澤田もどる。）

日高　しかし、大淨寺の椽がはに澤山血のついたあとが御坐いますし、またいまのかたの擧動を見ますれば、どうもほかのものとは見られません。

定行　いや・それは、あれへつれてまゐって、とも〴〵に介抱したので御坐る。

日高　しかし・わたくしの方では、役目として、まだうたがひもあり・いづれ、なほ取りしらべますから、たゞいまは、これで御免被ふります。

定行　左樣で御坐るか・――これは御大儀。

お松 御苦勞で御坐りました。
澤田 御大儀で御坐いました。
(日高巡査、家令につれられては入る。)
定行 (おも入れ) これでは、桂はもうのがれられぬか!
お松 どうぞ、桂さまつみに落ちねばよろしう御坐りますが。
瀧子 吾良が急にどこかへ飛び出して行きました。
(奥より瀧子、つゞいて澤田。)
定行 それでャア、宮城のあとを追ッたに相違無い。――どうせつみに落ちればとて、澤田、早やく大淨寺へ行ッて、和尙に賴のんで引もどさせよ。
澤田 かしこまりました。(は入る)
お松 奥さま、吾良さまはあぶなう御坐りますぞ。
瀧子 えゝ、罪に落ちねばならぬと?
定行 なさけ無いが、助すかることは出來まい。
瀧、松 はあゝ!
(見えよろしく、幕)

大詰

林中夜半の場　その一

（本舞臺、いち面のくろ幕、本釣鐘にて、上手より宮城と書生淺見、車二輛。）

宮城　これャ、くるま屋！

車夫一　へェ。（とまる）

宮城　何にを、また、ぐづ〳〵するんだい？　こんなところで夜るになるつもりでなかった。

淺見　しかも、月があるに隱くれて、みちの暗らいこと見ろ。

宮城　いそげ、いそげといふんだ！

車夫一　はゝゝ！　誰れもさういそげるものァ御ぜェやせん。

車夫二　それに、大事の御用がすみ、おけェりなさるみちだから。

車夫一　旦那、安心なせェませ。もう、しめたもんで御ぜェやす。

宮城　何んだと？

車夫二　いやさ、しめたとァ、どろ棒に會ッたときでさァ。

（下手へ引いては入る、上手より桂、劍を提げて、うかゞひ〳〵、下手へは入る。あと、幕切ッて落とす。）

その二

（本舞臺、いち面杉の林の體、賊三人火をもやして居り、眞中の一人は深かくかほをつゝみ、かたわらの二人は喧嘩のこなし。）

一　手めェら、もう喧嘩ァよしねェといふに、つまらねェ。

二　おやかたがそんなことといへァ、こひつゥなほのッて來やァがる。

三　何んだ！　手めェが子どものやうにあまへァがるんだ。

二　くそ、子ども？　べら棒な、おぬしャァ、して、馬鹿か、道理も知らねェ？

三　手めェが道理を知らねェんだ。どろ棒だッて、このくれェのことァ知らねェやつァねェぞ。さけェ食らやァがッて、割りめェよこさねェやつァ天下に手めェひとりだ。

二　何に、誰れがよこさねェか？かねがねェから、待ッてくれェていふんだ。

三　待つにも程があらァ。食ッてャァ寢、飮んでャァ寢、手めェ見た樣ななまけものァ、どこにもねェぞ。

二　何んだい、これャ！　（三のむなぐらをつかむ。）

三　手めェおれをどうするんだい？

二　なげ飛ばすんだい。

三　なげられゝャア、なげて見ろ。（つかみ合ふ。）

一　よせッてャア、よさねェか、手めェらが喧嘩ァして何んの役に立つんだ？

二　おやかた。

三　ほッときね。

一　ふン、何んだ、二兩や三兩、べら棒な！　よせ。おいらァけェしてやらァ。（二人とまる。）

二　そんなら、おやかた、賴(たの)みますぞ。

三　おれだッて欲しいことァねェが、こいつァいめェましいやつ！

一　いめェましいもねェこッた。――さァ、やらァ（かねを投げ出す。）

二　さァ、やらァ。

三　手めェんでャァねェぞ。――おやかた、ありがたう。（ひらひ取る。）

一　まァ、おいらが手めェらのおや分であるあいだは、不滿足にャァさせねェ。

二　おやかたァ豪氣(がうぎ)だわい。

三　さすがァ、いち度軍醫をやッて見たゞけあらァ。

一　おいらだッて、手めェたちのおや分で、毎晩〳〵こんなことをしてェれャア、こんな氣樂な商べェはねェが、考げェて見れャア、軍醫で正直にやってた方がよかッたか知れねェ。四海同胞といふ今日に、まだ子どもや婆々ァの金着をするのァ何んでもねェが、よそのおやぢやかゝァを殺ろしたり、軍人が敵を斬

るとァちがって、――それでも、むごいに、――何んと、まァ、こちとは殘酷な、無情もんだらう？人間と生れて、畜生道を踏んでるんだ、あの世でャァ、地獄のかまァあけて待ってるだらうよ。おまけに、いまでも捕られゝャァ、すぐくびャァねェんだ。――おぼつかねェつなわたりだ。

二　おやかたのいふ通りだ、つかめェられてャァそれッきりよ。

三　のがれまはるがかるわざさ。

一　心ぺェするにャア……

みな　およばんて。（下手より入れずみ勘太。）

一　勘太、まだこねェか？

勘太　おやかた、まだ樣子ァねェや。

二　早やくあみにかゝれャァよからうに、めんどくせェ。

勘太　人を待つといふものァ、をんなに限ぎらず、待ち遠しい。

三　まァ、あたれ。

一　あいつなんぞァ殺ろしてもいゝやつだ。

勘太　しかし、なか／＼油斷は出來ねェぞ。

一　くるま屋せェうまく引ッぱッて來れャァ、もうしめたもんさ。

（本釣鐘、桂、劍をぬいて、うしろの杉のかげよりちョッとのぞく。）

二　來たぞ〳〵。
三　來た〳〵。
勘太　くるまのおとだ。
一　まァ、あたッて居れ。
（向ふ揚幕より宮城と淺見、車二臺、ずッと、舞臺へ引かれ來たる。）
車夫一　旦那、こゝでちョッとやすみませう。
宮城　いや、もッと先きまで行け。
車夫二　旦那、折角こゝまで引ッぱッて來たのでさァ。
宮城　いや、さうたび〳〵やすまれては、こッちが困まる。
勘太　なァに、そッちの困まりャァこッちでふさぎやす。まァ、やすまッせェ。
二、三　あたらッせェ。
車夫一　待ち遠だッたらう。
車夫二　おふたりさん、さァ、こちらへ。
宮城　（車をおりる。）どうぞ、しばらく。
勘太　暫らくでも、何んでも。さァ、あたらッせェ。
宮城　はァ。

二　さァ、こゝへ來なせェ。

宮城　はァ。

三　こッちがいゝ、さァ。

宮城　はァ。

勘太　くるま屋さん、御苦勞だッた。

二、三　さァ、こゝい。

車夫一　御免なせェ。（宮城、淺見、みな火のまはりにしやがむ。）都合よく、月が照ッて來たねェ。

車夫二　あんまり馬鹿にしてやがるな、くらいでャァねェか？

勘太　遠慮にャァおよばん、どうせおめェさんは――いや、おめェさん、どこいおけェりだ？

宮城　わたくしはこの先きのむらまで。

勘太　何んの用で？

宮城　なァに、かねは澤山こゝにあるわい。（以ッて居るかばんを示す。）

勘太　これャァ正ぢきだ、すこしかりやせうか？

車夫一　旦那、くるま賃くだせェ、これで御免被ふりやせう。

宮城　どろ棒に賃も入るもんか？

車夫二　うゝ、ふんだくれといふんか？

宮城　知れたことさ。
一　だまれ、宮城！　おのれャア。よもや忘すれめェ？（かぶり物を取る。）
宮城　やァ。山口？
山口　うン。山口だ。よく聽け。貴さまがはじめ。桂のこひ人をぬすみかねて、（この時、桂またのぞく。）浪子に毒を調合してのまさせ。飮ましたおれが邪魔になるから。ぢき追ひ出し。おのれャア平氣の平左衛門。して。赤木のこひ人雪子をよこ取らん爲め、また乘せた澁屋夫婦、おれがしのび込んで居て、聽いたことァ知って居ろう。貴さまはこひ、おれャアかね、一所に出あったそのとき、不意をうたれてにげャアしたが。いまは決してにげもせん。にがしもせん。さァ。宮城、貴さまが持つ澁屋の雪子赤木が婚姻料、千兩そろへて出せい。
宮城　それでャア。これをまへから……
勘太　知らねェでさ！
淺見　どうぞ。わたしはおかねは御坐りませぬが、まァ、どうぞ、この羽織を出します、いのちだけは、どうぞ〳〵。お助けくださりませ。（羽織をぬいで、出す。）
勘太　馬鹿野郎！　貴さまなぞにャア。用事ァねェや、うせャアがれ。――こんなものァけェしてやらァ。（羽織を投げかへす。）
淺見　あゝ。ありがたう御坐りまする。おどろ棒さま、ありがたう御坐りまする。（腰をぬかして、上手

へは入る。)

山口　これャ、宮城！　世間は、みな、誰れもおどろ棒さまだ。人のこひをぬすまんと、いのち取るのもどろ棒、いのちはいらん、かねせェ取ればいゝのもどろ棒。貴さまもどろ棒なら、おれもどろ棒、どこのどぶのどろか、どいつのぼゝのぼろか知らねェ、いち度破ぶれたこゝろァおなじことだ。わかッたら、早やくかねを出してしまへ。

宮城　貴さまにやるやうなかねは無い。(かばんのかね入れを出して、懷中する)

山口　さァ、ふんだくれ。

五人　はだかになッてしまへ。(五人かたなを差出す。)

宮城　何にを、小僧め！

(仕込みづゑを拔いて、きッとなる。之より、宮城五人と立ちまはりよろしくあッて勘太を斬る。)

勘太　あゝッ！　(倒ふれる。)

山口　やァ、宮城！

宮城　何にを！　(また立ちまはり。)

山口　これャ、宮城！　(斬る。)

宮城　おのれ、山口！　(つゞいて立ちまはり。)

山口　これャ！　(宮城を斬り倒ふす。)　宮城どうぢやァ？

宮城　なんぢ如きやつばらに斬られるのも、わが惡業つもる爲めか、殘念〱！

山口　（落としてあるかね入れを拾ふて、にッとり。）これせェ取れャア、いのちはばらすんでャアなかッた。――宮城、おれを恨らんで、六道のつぢにまよッて待ッて居れ。

宮城　これャ山口！

山口　苦るしいか！

宮城　たとへいまにがすも、おのれおなじ大あく人、いまにあみにかゝッたら、そのときこそ、わが魂魄（こんぱく）まといついたとおもへよ。

山口　うン、そのときにャアお禮申す。――どれ、お別れとしやうか？

（行かんとするとき、桂おどり出る。）

桂　山口、待て！

山口　や、南無三！

桂　卑怯な、これャ！

（山口のにぐるを斬る、同時にかれに斬りかへされる。）

山口　（倒れて）誰れだ、おれを斬ッたは？

桂　おのれ、にがすものか？

宮城　山口、觀念（くわんねん）したか？

山口　しもた！　おのれ、このかね、さア、そのつらに塗りつけェ！

（桂にかね入れを投げつける。）

桂　これさ、宮城！　これァ、山口！　いづれわかぬ大罪人！　桂吾良忘すれたか？

兩人　や！

桂　おやのかたき討たん爲め、宮城、なんぢ待ッたところ、また浪子のかたきづれ、山口にも逢うたとは、なんぢら運命のよく／＼盡いたときと觀念せよ。

宮城　南無阿彌陀佛！

山口　あゝ、しもた！　（兩人落ちる。）

桂　あゝ、父うへ！　父うへ！

（桂劍を落として、倒ふれる。本釣鐘。上手より、大淨寺の和尙、四人の死骸をすかし見、桂にいたってびっくり。）

和尙　ひャ！殺ろされたか、桂！――あなたもまたおなじう斬られまして？　おそかった！――まだおいのち御坐りますか？　桂さまァ／＼！　まだおいのち御坐りますか？　おゝい／＼！

（この時、電氣の月光を照らす。）

桂　や、和尙さん？　（氣づいて、兩手をつえに胴を起こす。）

和尙　うれしや！　まだおいのち御坐りまして、桂さん。

桂　よくも、まア、來てくださつた。――無念！　殘念！　この身がまた山口に斬られたとは知らなんだ、知らなんだ。くッ、ちェ！

和尙　森さま御夫婦にたのまれ、すぐあなたのおあとを追ふて來ましたも、桂さん、こゝでお目にかッたが、も早や、わかれで御坐りますか、さぞ殘念、さぞ殘念で御坐りませう。

桂　この身死ねば、桂家はも早や斷絕、和尙さん、この、このつるぎはあなたに進じまする。（拾ろッて渡す。）またこれは（そばのかね入れを取る）いま山口ぬすまんといたしたもの、このぬしは澁屋、どうぞ、澁屋までとゞけてくださりませ。（渡たす。）もう、いかん、和尙さん。

和尙　桂さん、必らずおまよひなさるなよ。

桂　和尙さま！（本釣鐘。）

和尙　桂さま！

桂　これが最後で（木のかしら）

兩人　御坐ります。

（見えよろしく、幕。）

――（明治二十七年十二月）――

焔の舌

『焰の舌』はしがき

今や我が國の劇界は新思想と新趣味とを與ふべき時期が來たやうだ。徒らに舊套を追つて、また妄りに異國の產物を飜案して足れりとしてはならぬ。

僕は近著『半獸主義』に於いてこれに論及してあるから、理論は今ここに繰り返すには及ぶまい。この悲劇『焰の舌』は、乃ち、僕の意見の一端を實現したもの。メーテルリンクの所謂靜止劇によらずとも、苟も思想劇たる以上は、動作よりも割合に談話の多いのは止むを得ないところ。然し、この作には、かの歐洲現代の一部劇作家にあるが如き、妄りに神秘を强ゐることはしてないつもりだ。

僕の新自然主義を以つて直ちに神秘界にも突入しようとするこの種の自然主義的表象劇は、乃ち、思想と實現とを集中情化するのである。うまくできてるかどうかは世人の批判にまかせることにして、材料の卑近なのを云爲して貰つては困る。僕らの日常生活の悲素にもマクベス又はハムレットのそれにも劣らぬものがあると喝破した佛蘭西人があるではないか？　また局面の發展上、實感の挑發を恐れる勿れ。常に五官と肉感とを經て高遠深刻の生命に合體するものだと云はれる。ましてこの材料は卑俗のやうで而も違つてるから。

或人の意見では、たとへこの劇が世間へ出ても、これを演じられる男女優がなければ駄目だといふ。が、この作にして果して研究的にでも演ずる價値があるなら、これが出演者を特別に振つて訓練させてもいいではないか？

殆んど十年間、劇に關係を絕つてゐて、今回久し振りで三幕物――材料から云へば社會悲劇、思想から云へば自然的表象劇――を書いたには、多少の抱負がないでもないのだ。

明治三十九年六月九日　　作者識す

登場人物

豐田花子（聖書學校生徒）

村田猛（大學生）

中山俊雄（大學生）

花子の伯母

牧師、中學生、商人、小使、

職人、老若男女の會衆。

序の幕

祈禱會の場

（教會の一室、司會者のテーブル、椅子、並に會衆の腰掛、並ぶ。村田猛並に豐田花子、登場。）

花子　おや、村田さん。

猛　花子さん。

花子　今晩はあなたの方がお早いの、ね。熱いぢやアございませんか？

猛　熱いです。もう、夢の樣な夏の愉快も半分以上は過ぎてしまつて、海岸へ行つてる友人なども段々興が醒めて來たかして、ぼつ〳〵歸つて來るものがあるのに、今歲はいつまでから熱いんでしよう？

花子　さうです、ねえ。わたしなどは、まだ卒業もしなかつたのに、傳道の爲めに使はれてゐましたから、熱い盛りにも、どこへも參られませんでして――あなた方はお羨ましい、わ。

猛　僕だつて、中途で呼び返されました、あんまり金を使つたもんですから。

花子　そりやア、あなたがお惡いんだ、わ。――でも、村田さん、わたし、けふ學校をよされてよ。

猛　おからだが惡いので？

花子　何だか、教會の會計がわたしの補助を許さなくなつたッて。

猛　それぢやア、尚更ら中山君に頼らなけりやアならないでせう？

花子　いいえ、もう、わたしはそんな氣はないの、中山さんには棄てられたんですもの。（と、意味ありげに笑ふ。）

猛　ぢやア、どうします？

花子　どうもしない、わ。――ただそれをあなたに聽いて貰ふつもりで來たのよ。さう申すと失禮かも知れませんが、わたし、もう、あなたばかりが手頼りよ。

猛　僕はまた、もう、あなたが來てゐるかと思つて、急いで來たんです。

花子　さうですか？　わたしは、今まで伯母が留守でしたから、歸つて來るのを待つてゐたんで、大變おそくなりましたの。

猛　なに、おそいこともございません、さ。六時半ですもの、七時にはまだ三十分あります。

花子　ほゝ、それはさうですが、何だか早くあなたにお目にかかりたいやうな氣が致しましてよ。

猛　さうです、僕もあなたにお目にかかりますのが、一番この祈禱會の樂みです。――何となく、あなたと僕とは心持ちが同じやうなところがあるんで。

花子　お互にさうです、ねえ。あなたがお出でにならなけりやア、もう、わたし、來られたものぢやアございません、わ。でも、あなたには、高子さんといふお約束のがおありになるではございませ

んか？

猛　そんなことア云はない方がよろしい。あなたとお話するのは、一緒に育つた僕の姉に逢ふやうな氣がしますんで。

（小使、登場）

小使　へ………、今晩は。

（小使、讃美歌を各席へ配布して、退場。）

花子　（あとを見送りて）あの小使ひは少し馬鹿なんですよ。

猛　さうでしよう、あの樣子では。

花子　わたしも、ねえ、失禮な樣ですが、あなたがわたしの弟ででもある樣に思はれますの。昨日お出で下さいました時、伯母があとで申しますには、わたしに二つ位お下だらうツて――よく當りましたよ。でも、あなたには、もう、高子さんと云ふ御約束がございますことを話しましたら『まアお仕合せだ、お前のやうに意氣地なしではない』と、わたしは笑はれましたの。

猛　然し、それは時と場合ひで――あなたの樣に眞面目に思つてゐるのに、向ふの人が動かないのは、向ふが無情なんだし、また、お話もありました通り。一度はあなたに對して、愛するといふことを云つたんですから、いくら伯爵の親類だと云つて、また大學生だと云つて――尤も僕も大學生ですが――今となつてあなたが御病氣にまでなつてゐるのを知らない顏で、他の婦人を求めるやう

なことが許されませうか？　そんな意志の薄弱な者ぢやア いけない、僕が強いと云ふんぢやアござ
いませんが。

花子　でも、中山さんが華族さまの御兄弟だとは存じませんでしたし、他にいいお方が出來たさうですから、わたしの樣な者の心が屆くとは思ひません、わ。醫者は毎朝冷水を浴びよと申しますから毎朝さう致してゐますが、この病氣は、もうわたしの持ち前なんですから——時々、まぼろしが見えていけませんの。わたしはこれで死ぬんでございましようよ。

猛　醫者は何と云ひました。

花子　醫者は、聽いても、笑つてゐるばかりで、何とも云つて呉れませんの。

猛　そりやア然うでしようとも、あなたに遠慮して——まさか、戀病だとア云へますまい。

（猛、花子の手を執る。）

花子　あら、非道い、わ。（と扇子の手を執られたまま、左りの手で猛を打つ。）

猛　然し、それに定つてゐます、まぼろしに中山君が見えて來るんでしよう？

花子　さうぢやアないのよ。もう、中山さんを思つてゐません、わ。

猛　それでなけりやア、ヒステリイなどいふ神經病の一種で、お化けや幽靈を自分で拵らへて、自分でそれを苦む仲間にあなたを數へ入れますぞ。

花子　あら、厭だ！　わたしそんなことを聽くのも、ぞツとする、わ。——わたしがそんなものと同

じに見えて？

猛　なアに、それはあなたにからかつて見たの。あなたのまぼろしは、まさか、そんな病的な、而もよく人に嫌はれる種類のものぢやアないんです、僕、それは受け合ひます。女でも、男でも、一度はこの味はひを味はつて見なけりやア、とても世間の眞相に觸れることが出來ない、失戀の結果ですもの。花子さん、僕もその境遇に落ち入つたことがあるんで、よくあなたのお心は知つてゐます。人が花を見て美しい、星を見て潔よいと思つてる間は、燒き芋なら、ほこほこけむが出てゐる時でしようが、さういふ者の戀は外國の宣教師どもが神さまとして祭つて置くなら知らず、まだ本當に人間の味が出てゐません。そんな淺薄な戀で家を持つた女に限つて、少し苦勞があると、直ぐヒステリイに罹るんです。痩ツこけて、眞ツ青な顏をして、腰を曲げて『わたしはもう男は厭です世間も厭です』と云はんばかりに、しほ〳〵と歩いて行くざまを見ると、僕は唾でも吐ツかけてやりたいんです。可愛味もなけりやア、面白味もない、それこそ丸でまぼろしの亡者でさア、（花子おののく。）然しあなたはそんな神經病ぢやアないでしよう、あなたがそんな病氣と同じで、若しそのまぼろしを見るんなら、僕はけふからお目にかかりません。僕は受け合ひます、あなたのは失戀です、あなたとしては賴母しい戀病です。（花子の沈んで居るのを見て）なぜ、そんなに心配さうな顏をするんです？　ええ、花子さん？　あんまり女の惡口を云つたんで、お氣にさはつたんですか？

花子　そんなわけぢやアございません。

猛　それならいいですが、若しお氣にさはつたんなら、許して下さい。

花子　わたしあなたをたつた一人のたよりとしてゐるのに、今のお言葉が何だかつらいの――わたしの病氣だツて、自分が拵らへたんではないんです。

猛　然し、病氣といふものアみんな人の心から自分で拵らへるんでしよう。――兎に角、中山君は四五日前に滿洲旅行から歸つて來ましたので、今晩はきツと來るでしようから、祈禱會が濟んでから、よく中山君の考べを聽いてあげるつもりです。

花子　高子さんは、もう、話しても駄目だと先刻おツしやつてよ。わたしも、もう、いいの、斷念してしまつたんですから。

猛　高子が知つたものですか？　あなたもいいことアないです。さう一概に云はないでも、當つて碎けろです。よしんば、駄目だと定つたら、それでまたあなたの諦めが附いてしまうんでいいでせう、亡者のやうにただ中有に迷つて居るよりは！

學生の聲　（外より）さうださうだ。

（と、戸口に中學生三名。兩人、驚いて離れる。三名、登場）

中學生一　さうだとも、君の云ふ樣に、神は愛なりと云つてしまやア、愛なるものア無形物だから、神も亦その無形物な靈物であるわけだ、わい。

中學生二　さうさ、君の樣に形を求めて行くから、神なるものが分らなくなるんだ。

中學生三　ぢやア、これから、分らない奴等にやア、さういふ風に辯明してやらうよ。

（三名、猛と花子とに默禮して、席に着く。）

中學生一　然し、それで神に祈禱する氣になれるだらうか？

中學生二　それやア、愛といふ絕對無限の力に手賴るん、さ。

中學生三　さういふ力を持つて居る物があると信じさへすりやア、それに祈つて、援助を乞ふことア出來やう、さ。

中學生一　それぢやア、今夜は一つ祈つて見ようか？

中學生二　君のやうにさう、祈つて見よう位で効驗のあらう筈アない、さ。

中學生三　牧師だツて、さう、每日〳〵、儀式ばつたところで、心から祈ることア少からうぢやないか？

中學生二　そりやア、さういふ時もなきにあらずだらう。

（この時、老若男女、數名。つゞいて中山俊雄、大學の制服にて登場。）

猛　やア、中山君。

俊雄　村田君。

猛　今晩、君も來るだらうと待つてゐたんだ。少し話があるから、會がすんだら殘つて吳れ給へ。

俊雄　さうか？　熱い、なア。――やア、暫らく。

（と、俊雄、ちよつと花子に挨拶して、席に着く。花子、恥ぢて避ける樣に默禮。）

猛　滿洲も熱かつただらう？

俊雄　閉口した。ねえ。

（會衆、皆々、扇子や團扇を使つてゐると、牧師登場。）

牧師　皆さん、今晩は。

（皆々、默禮。牧師、司會席に着く。隣家より三味線の音。）

牧師　（立上つて時計を見ながら）もう時間がまゐりましたから、これより祈禱會を初めます。――讃美歌、第四番の初めの二節を歌ひませう。

（オルガンに合せて、會衆、立つて歌ふ。）

神よ、やさしき御まもりと
なが愛とを認む。
日々のわが糧、わがころも、
みな神より賜びぬ。
わが身、わが友、ちち母も

みな神より賜びぬ。
すべてわが持つ御めぐみは
天より出で來たる。

（會衆席に着く）

牧師　只今、神さまに祈ります。（いのり）永遠より永遠に渡り、無窮より無窮に至る天にいます神さまよ。われらは卑しきもの、低きもの、乏しきものでございます。あなたの廣大無邊なる御惠みによらざれば、一日たりとも、この世に生活することは出來ません。かうして、毎週一回、ここに集りまして、われら兄弟姉妹があなたに祈禱をささげますのも、われらが日々受くる心の苦みと穢れとを取去り、いとも高く、いとも潔く、いとも有難き御惠みの一端にあづからんとするばかりでございます。どうか、只今祈禱會を始めますに當り、われらの上にのぞませ給はんことを、御子エスキリストの御名によりてゞ願ひ奉ります。

會衆　アーメン。

（三味線の音、唄の聲、高く聽えて來る。）

牧師　讃美歌、弟五十番、終りの一節を歌ひます。

（會衆、もとの如く、立つて歌ふ。）

主はわが光ぞ、
　わがすべてなり、
暗きは全く
　御前にあらず。
主はあがなひぬし、
　救ひの君ぞ。
御使ひ、聖徒と、
　われ主をたたへん。

（會衆、席に着く。）

牧師　（説教調にて）今晩は、わたくしは——氣候のせいですか、齒が痛みまして（と、手を頬に當て）出にくいところを出て來たのでございますから、お話をするだけは御免を被りたいので——それで、あなた方のうちで、先づ二三名、お祈りなされたい方は、どうか——（と席に着く。）

商人　それでは、わたくし（と、立ち上つて話。）諸君がお祈りなされます前に、わたくしは一つ懺悔を致したいのでございます。わたくしは弱い者でございますから、兄弟姉妹等のお祈りに由つて、

神のお助けを得たいのでございます。實を申せば甚だお恥かしい次第でございますが、昨日、わたくしは商業上の用事で横濱へまゐりました。用事が直き濟みましたから、早く歸ればよかつたのでございますが――それが弱いところでございませう――時計を見ると、もう、七時過ぎ、暗くなつてゐたのをさいはひ、誰れも知つてゐるものはなからうと思ひまして、わざわざ――申し上げるのも穢らはしいです――淫賣婦の出る町を通つて見ました、さうしてとうとう引ッ込まれたのです。わたくしはなぜ、なぜ、こんなに意志が弱いかと――一度ならまだです、わたくしはこれで二度目でございます。實に神さまに濟まないと思ふと、もう、わたくしはこの穢らはしいからだなど、うッちやつてしまひたいです。わたくしは殘念で堪らないです。なぜ、世間がかうわたくしを誘惑するかと思ふと、何だかわたくしの心の弱いのを世間がからかつてゐる樣にも見えて、わたくしは殘念で殘念で堪らないのでございます。（三味線の音）あの三味線が聽えても、わたくしは今現に引ッ張られてをります。どうか、兄弟姉妹、この弱いわたくしの爲めに、只今お祈りを願ひます。

（商人、席に着く。牧師、立つ。）

牧師　（いのり。）おお、神さま。われらは常に弱きものでございます。然し、特にまた御願ひ申したきは、只今正直なる懺悔を致しました、宮島氏に對してでございます。渠はあなたの惠み深きを知り、またあなたの刑罰の正しきをも存じてをりますけれど、その心弱くして、知識と實行とが伴ひません。どうか、渠の上に特別なる御惠みを下し給ひて、再びかういふことのなきやう、その心を

強め給はんことを御子キリストの御名によりて願ひ奉ります

商人　アーメン。（と、特に大きく應ずる）

猛　（立つて、いのり）　神よ、世の中には惱めるものが多くございます。そのうちにも特にわたくしの友人で、或事の爲めに心を惱ます者のございますのは、あなたの御存じの通りでございます。何卒、その心をあはれみ給ひ、その心のやはらげらるるやうエスの御名によりて願ひ奉ります。

花子　アーメン。（と、特に他人よりも聲高に應ずる。）

俊雄　（立つて、感話）　僕は滿洲へ旅行を致してをりまして、數日前に歸つてまゐりました。慘憺たる戰爭の跡を見るのが旅行の目的でございましたが、行つて見ると、その意外なのに驚きましたのでございます。大連などでは、市街はもう立派になつてをります。ホテルは大きなのがございます、料理屋もございます、酒屋もございます。もう、生活上の必要物件はすでに立派に備はつてゐると申してもよろしい。然し、そこへ行つてゐる日本人はどうです？　軍人は別と致しましたところで多くはごろつきと賤業婦だと云つても差支はございますまい。諸君、こんなことで戰勝の結果を誇れませうか？　僕は非常に感じました、これから滿韓の開拓をやつて行くものは、必らず正義と人道とを一身に了得したキリスト教の青年でなければならないのです――

（と、俊雄、テーブルを打つとたん、擂りばんの警鐘が聽える。）

會衆　（のうち）火事だ！　火事だ！

(皆々、がたつき出す。)

牧師　おお、皆さん、摺りばんですぞ！　さア、これは大變です！

(牧師を初め、會衆、あわてて退場。殘るは猛と花子と俊雄。)

俊雄　(立ったまま)　みんな失敬ぢやアないか、村田君、僕が一生懸命に感話をしてゐるのに、さ？　他の人はまだしも、牧師がこの會を解散もしないで出て行くとア、あきれた奴ぢやアないか？

猛　僕もあきれたよ。

花子　ほんとに、あきれます、ねえ。

俊雄　あんな宗教家ぢや仕やうがないぢやアないか？

猛　本當、さ。——だから、中山君、君の兄さんを雇つて來さしたらよからう、熱心な牧師になれるから。

(と、猛、笑つて花子を見る。)

俊雄　(花子に憚るやう)　誰れのこと、さ？

猛　政子さんの兄さんを、さ。

俊雄　君は降らんことを云ふ男だ、なア。そんなことを僕が知つたものかい？

猛　さう眞面目に出られちや、僕が失敗、さ。

俊雄　時に、豊田さん、この頃はお達者ですか？

花子　はい――まア――

（花子、云ひよどみて、目を猛にそらす。）

猛　やア、見給へ、火事はこの眞ツ下だ。

（皆々窓の方へ行く。）

俊雄　成る程、ここは高臺だから、立派に見える。

猛　あの猛烈な火勢はどうです、面白いでせう？

（と、花子に近寄る。）

花子　（俊雄を憚りながら、窓に倚り）わたし、恐ろしい樣です、わ。――あの大きな二階屋が、もう、直きに倒れますよ。

俊雄　非常に猛烈なものだ、なア。天をも嘗め盡くさうとする勢ひで、大きな焔の舌が動いてゐるではないか？　人間の情慾を野生にしたら、矢ツ張りあんなものであらう。その情慾なるものが盛んに燃えて來ると、今晩懺悔をした男の樣に、自分の周圍が眞ツ暗になつて。あの樣に赤い舌ばかりが、暗闇はおろか、自分の心までもぺろぺろと嘗めてしまうんだ。

猛　然し、それやアどうだらう、中山君？　若し情慾が火なら――火にきまつて居るが――それが燃えてゐる間は、智力も意志も熱してゐるので、活動的自我なるものが眞に自覺の位置に立つてゐるから、その人の熱烈な思想と共に、心は却つて明るいわけだが、それが燃え切つてしまやア、世

の中は丸で闇と灰滓――死の狀態になつてしまうだらう。

俊雄　それは程度問題で、生命のある間は、人の情慾はあらうが、その火の使ひ方に依つちやア、町中を燒くこともあるし、また家々のランプや電燈の樣に、安全なともし火ともなる。そこが靈魂の修養を說くキリスト敎の必要なところではないか？

猛　君が今の演說もそこいらから來てゐるんだが、若しキリスト敎が人間の情をそんなにこわ〳〵使ふものなら、僕等は情を殺すそんな宗敎などア、直ぐ離れてしまはんけりやアならん。人間は人間ぢやアないか？　たとへば、百度の熱に堪へたいものを、わざわざ五十度で滿足して置けと云ふ。そりやア、自然をいつわるんぢやアないか？　人道だとか、正義だとかを標榜して、さ、自然に逆いた理想をかたち作つてゐるのア、趣味のある人生の意義から云つて、つまらない話ぢアないか？實際行なへないことを行なへと强いるんだから、敎會なるものの會員はみんな、眞面目なものア煩悶が增すばかりだし、淺薄なものア僞善に流れてしまうんだ。人間を救ふ爲めに組織された敎會が、實は人間を救ふんぢやアない、ただ一時の自覺をもて遊んでゐるんだ。僕も洗禮を受けときやア、まださうも思はなかつたが、自由な精神をただ空漠たる大きな建て物に壓迫される樣な氣がして來たんで、段々それが厭になつて來た、さ。そんなことならいツそのこと、赫赫たる靑天のもとに、裸體になつて、熱い白砂を浸す海水を浴びて、思ふ存分、身體の體熱を洗つて居る方がいいぢやアないか？　人生は理窟や規則ではない、趣味だ。君だつて、政子さんの關係がない時にやア、

そんなに教會を重しとはしなからう。

俊雄　そりやア、入らないお世話だ。君はあたまから宗教がないんだ。

猛　なアに、僕が宗教と云やア、神が與へた本能のままに動いてもいい宗教だ。花子さんの前ではあるが、女を愛するなら、情慾も愛情もそれ位熱烈になつて來なきやア駄目だ。

俊雄　君は肉慾と靈魂とを混同してゐるんだ。

猛　なアに、君は一人の女を愛することも出來ないで、また他の一人を愛することが出來ると思ふか？

俊雄　そりやア、君なら、二人でも三人でも出來るだらうよ。僕には、多くのうちから、好いた者一人しきやア選ぶことア出來ない。

（この時、物の倒れる大きな音がして『萬歳』といふ聲聞える。花子、窓に倚りて頻りに、外と話とに、氣を配つてゐたが、急に異狀を呈した樣子。）

花子　あら、どうしよう？　どうしよう？　二階が倒れて――

猛　いよう、盛ん、盛ん！　ああいふ時に、どうして肉慾と戀愛とが區別出來よう？

花子　ああ、どうしよう、高子さんが燒け込んで、恨みの姿が攻めて來る？　わたし何もあなたの愛する人を横取りする氣ではございません。許して下さい――ああ苦しい！　（倒れる。）

猛　（花子を抱いて）これ、花子さん、どうしたんです？　花子さん！　花子さん！

俊雄（また近づいて）豐田さん、どうしました？――火事を見てから、何か心に錯亂を起したんだ。
猛　さうだらう。――花子さん！
俊雄　豐田さん！　豐田さん！
花子　ああ、苦しい！
猛　花子さん、しツかりなさい。どうしたんです？
花子　あら、高子さん、許して下さい。あなたのお方を取るつもりぢやア、ございません。どうぞ、どうぞ、許して！　許して！
猛　花子さん、しツかりなさい！
花子　おお、村田さん、どこかに高子さんは來てゐませんか？（じろじろ見まはしながら）わたしを恨んで、わざと火の中へ飛び込んだんでございましよう？
猛　何をおツしやる？　高子さんはどこにも居りませんよ。それが、例のあなたが拵らへるまぼろしでしよう？
花子　ええツ！（と、急にびツくり）あら、わたし、どうか致しましたの？（と、起きて猛の手を離れ、俊雄を見て赤面。）
俊雄　どうなさいました？
猛　僕はびツくりしましたよ。

俊雄　もう、よろしいですか？

（花子、深く赤面、無言で下を向いてゐる。）

猛　もう、いいですか？　よろしいですか？　ええ、いいですか？　ええ？　あなたいいですか？　さア、お直りになつたんなら、お歸りなさい——伯母さんが獨りで火事を御心配でしようから。僕は明日あがります。よろしく云つて下さい——送らなくツてもようございますか？　大丈夫ですか？　あぶないですよ。伯母さんによろしく云つて下さい。よろしいか？　それでは、失禮。明日伺ひますよ。

（花子、云はるるままに頷き、しほしほとして退場。猛、戸をしめて、俊雄の方へ來る。）

俊雄　豐田はあれだから困るんだ。

猛　どうしたんだらう？

俊雄　どうしたツて、そりやア僕は知つてるが——君、今、君が惱んでゐる人があると祈つたのは、誰れだい？

猛　そのこと、さ。君。君はもう花子さんを棄てる氣かい？

俊雄　いや、棄てるも、棄てないもない、さ——別に約束をしたわけでもないから。

猛　その樣に君が冷淡だから、僕は今の樣な議論もしたんだ。詳しいことはをととひ聽いたんだが、君は一度深い話をしたと云ふぢやアないか？

俊雄　そりやア、君、豐田はまま母に育てられて、子供の時は、うしろの綻びてる衣物を着せられたままで、外へ出て遊んでゐた樣なこともあつたさうで――あの年になるまで、をとしまでは家事の手つだひばかりさせられた境遇を氣の毒に思つて、つひ、僕も弱いことを云つたが、それはいつか豐田の伯母に會つて、誤解の殘らん樣に取り消して置いたんだ。――實は、一種の病氣があるんだ。

猛　どう云ふ病氣だ？

俊雄　今の樣にまぼろしを見る神經病だ。夜中など、氣が向いて來ると時々變な樣子があるさうだ。

猛　そりやア、君が心配させて、さうなる樣にしたんだらう。

俊雄　いや、さう云はれると、僕も辯解して置かんけりやアならん。あの麗はしい顏で、二十六までも結婚が出來ないのア、全くその爲めなんだ。尤もあの女自身が惡いわけぢやアない、あの父なる人が大變な大酒家で、――おほ酒を飮んだ時にやア、子が出來ないといふが、たまたま出來たから、あんな神經病を受けたんだ――まア、片輪だ、ねえ。現在、僕の調べたのに據ると、君の四谷の伯母さんが三人の子供を殘して死なれたあとへ、君の伯父さんの細君になる約束で行つてゐたが、三日で歸されたさうぢやアないか？

猛　そりやア、僕、はじめて聽いた。――ああ、それで、花子さんは、交際しない先きから僕を知つてゐると云ふんだ、な。――然し、僕の伯父なら、年も大部違つて花子さんにやア可愛相だ。

俊雄　その伯父さんさへ呆れたんぢやアないか？　兎に角、豐田が學問をして、いつまでも伯母さん

に厄介をかけない様に、獨り立ちで行かなけりやアならんと思ひついたのア、それからのことで——漸く去年から、それでここの聖書學校の女子部へ這入つたんだ。伯母さんが子がないので、今ぢやア養女になつてゐるんだから、本當は養子を取る身分だ。——僕が旅行から歸ると、直ぐ、どこかの子供にまた手紙を持たせて來たんだが、僕は斷然返してしまつた。

猛　ぢやア、どうしても、君は政子さんの方がいゝんだ、な？

俊雄　僕よりも、君自身が注意し給へ、君の高子さんよりは美人だから。而も、君の祈りに大きな聲でアーメンと云つてたぢやアないか？

猛　馬鹿なことを！

俊雄　然し、君を思つてゐなけりやア、今の樣ならは言も云ふまいし、また今晩來られないわけがあるんだ。僕ア、豐田は來てゐまいと思つて來たんだが、來て見ると、君が既にあの女の心を占領してゐる樣子を見せつけながら、どうだい、僕に『棄てる氣か』もないもんだ。向ふは、どうせ、病氣は隱して自分の身の處置を早くつけようとあせつてゐる女だ。君が手を出しやア喜んで受けようがる——豐田の神經病を背負ふ氣は、君だツてあるまい？　如何に君も政治科にゐるたツて、病人を引ツ張る政略はをそけるまい。僕を冷淡と云ふが、君は女にかけちやア殘酷だぞ。

猛　そりやア、君が關係を斷ちやア、同窓の僕が取つたツてさしつかへはなからう——それが何で殘酷だ？　男を持たさないで、女を迷はせて置くのア、却つて殘酷ぢやアないか？　たとへあとで

棄てられたツて、女は男を持てばそれを思ひ出して滿足してゐるの、さ。然し、もう僕が關係してゐると云ふんぢやアない。僕は花子さんがあまり心配して、からだが惡い爲め、醫者に云はれて、每朝水を浴びてると聽いて、氣の毒だから、君に考へさせようと思つたんだ。

俊雄　そのお言葉は有がた迷惑だ。然し水を浴びてるなどとア知らなかつたが、氣の毒はお互がひのこと、さ。――君はまだ知るまいが、けふ、豐田は學校を斷わられたんだぞ。

猛　あの病氣が知れたんでか？

俊雄　さうだ。だから、今夜は來やしなからうと思ふんだが――。然し表面は敎會の會計が豐田の補助を許さなくなつたといふんださうだ。

猛　ああ、無情！　あの美人で、さういふ缺點があるとア、造化も無情だが、これがために豐田を一度も關係してやらないで、見棄てるのア、君も無情だ。敎會も無情だ。神がありとすれば、尙更ら無情の神だ。僕は、もう、そんな神を戴く僞善者の敎會へ來る必要はない。――おまけに、あんな腰拔け牧師が居るんぢやないか？　こんな會堂は、いツそ、燒けてしまふがいい。

（小使、登場）

小使　へへへへ、ランプを消します。

猛　おい、小使ひ、もう、こんな敎會へは來ないと云つて吳れろ。

俊雄　小使ひに云つたツて、わかるもんぢやアない。

猛　なアに、僕の本能神は野天で拜する方がいいんだ。僕ア、はじめから、教會なるものの組織が氣に喰はん。
俊雄　おい、君、見給へ。段々こッちへ燃え移つて來るぞ。
猛　愉快！　愉快！　どうせ、ここへも燃え付くんだ。君の所謂ランプなどア入らない――おれが消してやらア。（とランプの一つを吹き消す。）
小使　へへへへへ！（と、次ぎのランプに行く。）――幕――

中の幕

花子奥座敷の場

（小庭に向ふ小綺麗な奥座敷。花子の伯母、たすき掛けのまま座し、職人二名、腰かけてゐる。）
伯母　あなた方が來て下すつたので、先づやうやう方つきました。けふは本當に御苦勞だッた、ねえ。
職人一　なアに、これ位で濟んだのア結構でげす。燒けた日にやア、あなた樣でも、今ごろア大騒動でげしよう。
伯母　ほんとに、ねえ、ゆふべは大きな火の子が飛んで來るんで、大相心配致しましたよ。それに、また、うちの子が歸るのが遲かつたんだらう――

職人一　そりやア、御心配でごぜいましたらう。
伯母　燒けた人などは、けふは、どうしてゐるでせう、ねえ？
職人二　みんな、ゆふべア野天で、だいだらに布團を敷いて寢たさうで。
伯母　まア、さうだツたか、ねえ？
職人一　近來珍らしい大火事でございました。
職人二　あの、本通りの、大きな二階屋が燒けましたんで、その勢ひが豪勢廣がりました。
職人一　あの高臺の、耶蘇會堂も落ちてしめいました。
伯母　さうだツて、ねえ。うちの子は、丁度、あすこへ行つてゐたんだよ。
職人一　へい、左樣でげすか？
伯母　まア、まア、お蔭で、無事であつたのが仕合せだが、うちの子は、朝から氣分が惡いと云つて、寢てゐるんで、つひ、あなた方ばかりに骨折らして、ねえ。——ああ、竹さん、流し下が痛んでゐるんだが、ね、ついでだから、ちよいと見て貰ひたいが——
職人一　へい。——それぢやア、三太、おれと一緒に見に來い。
（職人二名、上手へ退場。花子、絕望の樣子、湯に行く支度で登場。）
花子　伯母さん、わたし、ちよいとお湯へ行つて來ますよ。
伯母　おや、今まで寢てゐたのに、氣分はいいんかい？

花子　いいわけぢやアないんですが、いつまでくさくさ考へてゐたツて、仕方がないわ。ゆふべの恥はけふになつて取り返しのつくものぢやアないんですもの——このからだのある間は。

伯母　持ち前の病ひが學校へも知れて、もう、斷わられてしまつたあとだものを、ひとりや二人の人にそれを見られたからツて、心配はしないことにおしよ。

花子　もう、夕がただのに、まだ村田さんがお出でにならないのは、あのお方もまたゆふべでお呆れになつたのか知らん？

伯母　呆れたら、呆れさして置きなよ。厭な人に來て貰はないでもいいわ、ね。

花子　でも、若しいらツしやつたら、待たして置いて頂戴。

伯母　あいよ。——あの人だツて、けふは方づけでお忙しからうよ。

花子　然し、伯母さんの樣に心配する人もないことよ。燒けなかつたぢやアありませんか？

伯母　燒けてたまるものか、ね。

花子　それやア、さうでしようが——然し伯母さん。（と、坐わり込んで）わたしもけふ燒けてしまうかも知れませんよ。

伯母　そりやアどう云ふ謎だか、わたしには分らないが、中山さんは政子さんの方を思つていらツしやるんだから、村田さんの返事で、いよいよお前をかまはないことが知れたら、お前はさぞ燒けることだらう。

花子　あら、さうぢやアないのよ。中山さんのことは、わたし、もう、とうに諦らめてゐます、わ。

伯母　ぢやア、何だい？

花子　燒けた跡には、みんな物の形がなくなるんでしよう。わたし、伯母さんを泣かせるのが氣の毒なの。――でも伯母さん、わたしにこんな病氣があるのは、伯母さんも御存じのことで――中山さんがお厭になつたのも、學校がわたしを斷わつたのも、みんなわたしの病氣が因なんですから、誰れをも恨みは致しません。わたしのお父さまがあんまりお酒を飲み過ぎた時に出來た兒ですから、こんな片輪が生れたんです。亡くなつたお母さまが末期の水を呉れとおツしやつた時、わたしがそれを持つて行くと、悲しさうにわたしをしツかり抱きしめて、さう云つて下すつた上、『然しお父さまはお酒を好きであがるのだから、その爲めにお父さまを恨む樣なことがあつてはいけない――どうせ、お前の病は一生の疵、お嫁に行くことも出來なからうから、お父さまにさう云ふ間違ひをさせた神さまに賴んで埋め合せをつけて貰ふより外はない』とおツしやつて、『ああ、神さま、神さま』と、段々息を引き取られてしまつたのは、わたし、子供ながら覺えてゐます、わ。その『神さま』が忘れられないんで、お母さまのとは違ひますけれど、わたし、耶蘇教の神を信ずる樣になりましたが、その神が矢ツ張りわたしのお父さまの身を持ち崩づさして、こんな片輪を生ませたんだと思ふと、何の爲めに神があるんだか、わたし、けふ、寢てゐながら、つくづく考へて、もう、この世が厭になつてしまつた、わ。わたし、もう、賴む神もなければ、賴む人もない身よ。たとへ親切な村

母さんでも――そりやア　わたしと高子さんと並らんでゐれば、わたしの方を可愛がつて下さいましよが、もう、わたしの病氣を御存じになつてしまつたんだから、直ぐわたしが棄てられるにきまつてゐる、わ。わたしは、もう、浮ぶ瀬のない魂よ。わたしの心は、伯母さん、察して下さいましよう？

伯母　そりやア、お前、察するも、察しないもないよ。お前の病ひは、子供の時からどれだけ心配をして、直してやらうと思つたか、知れない程だものを。その爲め神さまや佛さまへ幾度日参したか知れやアしないよ。

花子　それ程伯母さんに御心配を懸けて、この年までもまだ御恩を報いることも出來ないでただいつまでも御厄介になりますのは、いツそ、乞食か癩病の子に生れてゐた方がいいと思ふ程、わたしの身になつては、どんなにつらいでしやう？　なまじつか學問をして、魂の目が明いて來ただけ、わたしの身のあと前が見えて――過ぎ去つた不面目までがわたしの心をかじる樣で……わたし、もうお母さまのところへ消えて入りたいんです。

伯母　そんなことは、お前、今ではわたしと親子の仲だものを。何も心配するにやア及ばんわ、ね。お前は何か考へ出すと、いつも沈んでしまふから、いけないよ。少し氣を持ち直して、浮き浮きする樣におなりよ。

花子　わたしには、それが出來ません、わ。村田さんが、わたしのことは知らないで昨晩、唾を吐き

かけてやりたいとおツしやつたヒステリイ患者も、つまりわたしのことになつてしまつたんで——生きてゐればゐる程、世間に恥を曝らすことになるんですもの。獨り立ちにならうと思つて這入つた學校は急によされるし、ゆふべは、また、本當に、わたし、お二人の前でいつもの癖が出て——もう、わたし（と、身をすくめて）その場で直ぐ死んでしまひたかつた、わ。——歸つて來たのは、伯母さんに氣の毒だと思つてばかり！　然し、その氣の毒と思ふのは、その上にまた氣の毒を重ねるばかりよ。

伯母　そりや、病ひだものを——知れたら、知れたで、仕方がない。お前がそれで嫌はれるんなら、交際をしないばかり。さ。世の中は廣いよ、いくらもつき合つて吳れる人はある——手がないとか目ツかちだとかいふのとは、違つてゐるから、ね。

花子　わたしのやまひはからだの片輪よりもまだ惡い、わ。

伯母　魂のだから、魂は見えやしないよ。

花子　見えない魂が、わたしには、もう無い方がいい、わ。魂がなければ、心配も苦勞もなくツて、そのまま冷えてしまはれる、わ。

伯母　それぢやア、お前のいつも反對する石や木の佛さまや、かた佛さまと同じぢやアないか、ね？

花子　わたしは、いツそ、さうなつてしまひたいんです。

伯母　おや、お前がいつもの御說教とは違ふよ。

花子　さうでしようとも、大きな魂の這入つてゐると云ふ會堂さへ燒けてしまつたんですもの。

伯母　そんな緣喜でもないことはよして、まア、お湯へ行つておいでよ。——お前はけふはよツぽどどうかしてゐるよ。

花子　さうでしようよ、お湯に這入れば、もう、お湯灌は濟みますから。

（と、下へおりる。白猫、かけ來たる。）

玉、玉。（と、猫を抱きあげて、自分の頰に當て）お前を抱いてやるのも、けふツ切りだよ。

（と、悲しさうに退場。伯母、花子を見送つて、また方づけ物をする。さきの職人二人、登場）

伯母　どうだツたい？

職人一　あれは太したことでもごぜいませんから、直ぐ直して置きました。

伯母　さうでしたか、それは御苦勞だツた、ね。まア、もう一つお茶でも飲んでお行き。

職人一　ありがたうございます。

伯母　（茶を出しながら）うちの子も、もう氣分がよくなつたかして、今、お湯へ出かけましたよ。

職人一　それは結構でごぜいました。

伯母　おや、どなたかお出でになつた樣だ。

（伯母、立つて、奥へ這入る。）

職人一　うちの子、うちの子ツて、自慢をするが本當だ。ここの娘さんは、あの器量では惚れ手も多

いだらうが、なぜ婿も取らにやア、方づきもしねえんだらう？
職人二　それが、親方、うはさのまぼろしで――誰でもそれにや呆れてしもふんで、さア。
職人一　それにしたツて、いい娘ぢやあねえか？
職人二　そりやア、この界隈の飛びツ切りだア。
伯母　（奥にて）さア、どうかこちらへ。
（伯母と猛、登場。）
猛　先日は失禮致しました。
伯母　まア、まア、ずツと、どうか――こないだは、折角お出で下さいましたが、何のお愛相もございませんで。（と挨拶して）あなたのお出を待つてゐましたが、ちよつと、お湯へまゐりましたから――お熱うございます、ねえ。
猛　どうも熱くツて――
職人一　もう御用も方づいた樣ですから、お暇致します。
伯母　さうかい？　それぢやア、おかみさんへもよろしく、ねえ。
職人一　畏りました。
職人二　御免下せい。
（職人二名、退場。）

伯母　ゆふべの騷ぎで、けふはごたごた致してゐましたが、今の人などが手つだつて吳れたんで、やうやう方づきまして――
猛　昨晚は、荷物などお出しになつたんですか？
伯母　はい、左樣でございましたよ。花が敎會から、遲く歸つて來ますし、わたし獨りで隨分氣をもみまして、ねえ。
猛　わたくしの方でも、大騷ぎでした。
伯母　左樣でございましたらう、ねえ。お互ひさまに、まア、然し、無事で結構でございましたよ。――あれも、もう、歸りますから、どうか御ゆつくり。あれもねえ、隨分あなたにまで御心配をかけたさうで――
猛　なアに、僕もお氣の毒だと思ひましたから、昨晚、中山君に考へさせて見たんですが――
伯母　どうも、いけませんか、ええ？
猛　中山が全體冷淡なんです。男子が一度云ひ出して置いて――厭になつたんならなつたんで、明らかにさう云へばいいんです。いつまでも、ぐづ〳〵引ツ張つて置いて、こツそり他の女と約束して花子さんばかりに氣をもませるにやア及ばないんです。僕は花子さんの肩を持ちますとも。
伯母　さうおツしやつて下されば、花も喜びましようが、どうせ、あれもこの話は駄目だと思つてゐましたんで――中山さんは大相御身分のいいお方ださうでございますし、こんな家の子では、ねえ

あなた――然し、あれも、今度學校をやめましたし、あの年になつて、いつまでもぐづぐづしてゐるわけにもまゐりますまいから――

猛　然し、伯母さん、身分のことを彼れ是れ云ふなら、はじめから分つてるぢやアございませんか？　薄情な、氣の變り易い人間は、伯母さん、到底當てになりませんよ。

伯母　さうばかり向ふさまを惡く云ふことも出來ますまいよ、こちらにも、また、云はれることがあるかも知れませんから。――實は、花も一度あなたの伯父さんのところへまへつてゐましたが、ねえ――

猛　さうださうで――これはゆふべ中山から聞いて、はじめて知りましたんで――花子さんは一向そんなお話はなかつたのですが。

伯母　なアに、ね、恥かしくツて云へないんでしようよ。うちでは、その時からあなた樣は存じて居るときのふも申して居りましたよ。

猛　僕を以前から知つてゐるといふお話は、おとゝひでございました。僕も何となく花子さんは僕の姉の樣に思はれまして――

伯母　でも、あなたはお仕合せですよ、お若い御立派な高子さんがきまつていらツしやるんですから。

猛　ははは、僕も中山の樣になるかも知れません。

伯母　それはいけませんよ。（と、手を振つて）兎角、お若い時は、氣の變り易いものでございますが、

あなたはなかなかお正直でいらッしやると、花もさう申してゐますよ。――もう、歸りさうなものだに、さぞ、おめかしでもしてゐるんでございませう。――ああ、歸つて來た樣です。（と、奥へ向いて）花かい？
花子　（奥より）はい。
伯母　さツきから待つてゐらッしやるよ。――やうやう歸りましたよ。
（花子、丸めた手拭を持つて登場。）
花子　村田さん、いらッしやい。
猛　お歸りなさい。（と、目は燃ゆる。）
花子　（坐わつて）伯母さん、只今。
伯母　大相磨いて來たと見えておそかつた、ねえ。
花子　そんなに長くツて？
伯母　あの話は駄目ださうだよ。
花子　わたし、とつくに諦らめてます、わ。（と、猛を見る。）
猛　昨晩、あれから頻りに考へさせて見ましたが、あなたもお聽になつた通り、矢ツ張り眞面目くさつてゐて、男の人情も女の人情も分らないです。政子さんのことを云へば、餘計に濟ましてゐて（この時、花子、吹き出す。）その癖、渠は自分の前後を考へるだけ、賢くツて、冷淡です。

花子　いいわ、棄てられたんだから。――人樣を思ふのは、苦勞の種です、ねえ。

猛　そりやア、戀は苦しいものでしようが――あなたの運命がこれを許さない場合になつたんでしよう。

花子　その運命は、村田さん、矢ツ張り冷淡で、殘酷なものでしよう？　たとへその運命が賢い神であつたにしても、わたし、もう、そんなものに支配されたくないのよ。わたしは自分で自分の運命を拵らへる、わ。――村田さんが來て下さつたのだから、けふのお別れに、わたし、今まで胸に持つてゐたことは、みんな云つてしまひますよ。恥ぢも秘密もあつたものぢアないの――どうせ死んでしまふんですから。あなたの知らない――さうして知れば、矢ツ張り、初めから御承知の筈な――戀の爲めに。

伯母　なに、どうせ死んでしまふとは？

（花子、伯母と顏を見合せて、口をつぐむ。）

猛　そりやア、伯母さん、（笑ひながら）花子さんも承知してゐる――さうして其場になれば矢ツ張りちよつと驚く――戀の最後のお祈りを始めようと云ふんでしよう。は、は、は！

伯母　おや、さうですか？

花子　云ひたいことを云うだけでも、氣が晴れて、一時のあつたかみが感じられる、わ。人の魂が活きてゐて、百万年、冷たい石となつて暮らすよりか、その石を一晩に燃して、その過ぎ去るあつた

か味をでも取る方が、少しでも愉快が出來るだけ得よ。――なに、いいのよ、わたしはわたしの物だから、ねえ、村田さん。

猛　（それとしらせるように）そのお説もあとでゆツくり伺ひませうよ。

伯母　まア、けふは、村田さん、御ゆつくり御飯でもあがつて行つて下さいまし――これが（と、花子を指さし）沈んでばかりゐますからね。

花子　どうせゆづくりなさるんですよ、人間はまたいつ遇へるか分らないものですから、ね。この場合を別れてしまつては。あの、伯母さん、おついでにこの手拭ひをかけて置いて頂戴な。（と丸めた手拭ひを出す。）

伯母　あいよ。（と、受けて、花子に向ひ）ねえ、何もないが、わたしは御飯の支度をするよ。

花子　どうか御馳走を澤山。（と、笑ふ。）

猛　別に何も御心配には及びませんから――

伯母　なアに、ね、太したことは出來ないんですよ。

（伯母、退場。）

花子　熱いこと！（と、わざとらしく急に烈しく扇ぎながら）もツと早くいらツしやるかと、待つてゐたのよ。

猛　僕も、昨晩、歸つて見たら、大騒ぎでしよう――けふは、道具などの方づけで忙しかつたもん

ですから。

花子　うちでも、ねえ、伯母が心配して、荷物を出してゐたんですから、けふは、その始末に困つた樣です――わたし、氣分が惡かつたんで、休んでゐましたの。

猛　學校の處置などのことで、心配したんでしよう？

花子　もう、御存じ、ね？（と、赤くなる。）

猛　ゆうべ云つて下さつたぢやアありませんか？

花子　さうでした、ね。

猛　その上、中山も云つてゐましたよ。然しあんなところへ這入つてゐたツて、どうせ仕方がないです。――會堂が燒けて、いい氣味です、ねえ。中山の生眞面目にも困るが、あんな腰拔け牧師に支配されてゐる敎會です。外國人等は何も知らないから、ただ上ツつらばかり嚴格に見せて英語がべらべらしやべれさへすりやア、精神が死んでたツて、それをいいと思つてるんだから。

花子　學校でも、さうでしたの。生徒はみんな世間を知らないから、仲間同志で話すことが、あんまり子供らしくツて、わたしなどはつまりませんでした、わ。

猛　あなたは多少經驗もある筈で、別ですが、世間を知らない馬鹿敎師が、世間を知らない馬鹿生徒を敎へて、それが卒業したからツて、どんないい傳道が出來ましよう？　ただ聖書の文句と敎はつた手段とで、この複雜な、激烈な世間の苦痛を救へるものぢやアないです。

花子　わたしも厭々ながら、ただこれが女の獨立して生活の出來る一つの道だと思つて、這入つてはゐましたが、ね、あんな人達と仕事を一緒にするのかと思ふと、何だか、かう寂しく悲しくなつて來ましたの。

猛　そりやア、あなたが婦人の獨立など、なまじツか考へ出すのが惡いんです。女傳道師はおろか看護婦でも、電話交換局員でも、郵便局や鐵道局の印紙賣りや切符賣りでも、それになつて、どれ程の獨立生活が出來ます？　それが、おまけに中途でやめると、そんな女に限つて、細君として、變挺な、不自然な性格を備へて來るから、もう、男子に愛せられる資格はないんです。

花子　でも、わたし、いつまで伯母の世話になつてゐられませう？

猛　だから、女は思ふ男に早く身をまかせて、さういふ心配のないやうにするのが本當です。

花子　直ぐ死んでしまふつもりでも？

猛　自分の滿足と運命とがさうなつてれば、それでも仕かたがないでしよう。

花子　それにしても、美人で、財産があつて、家柄のいい、さうして又からだに缺點のない人なら、あとあとまでも、その人に思ひ出されていいでしようが、ね。――わたしなんざア駄目です、わ。然し、あなたが昨晩の『情は火』といふお話も、『熱烈になれ』といふ御意見もわたしには、もう、分つてる、わ。あなたよりもツとよく分つてゐるかも知れません、わ。たツた一度の火事で、お酒のやうに跡もなく燃えてしまつてもいいんですから。ただ、自分から思つてゐる人が自分をその場限

りにでも思つてくれなけれア仕方がありません、わ。

猛　そりア、あなたが知らないんです。戀の魂はどこにでもぶらさがつてゐますよ。男の戀は闇の中を飛ぶ蝙蝠の樣なものです。暗やみを飛んだり跳ねたりして、優しい魂の手がいつでも出て來るのを待つてゐます。だから、優しい魂の手に愼しみがあるか、思ひ切りがいいかと云ふことだけが不斷の問題です。つまり、女のはうでさへ、勇氣を出して、メタリンクの所謂『神祕の關門』を出て來ればいいんですから、ね。

花子　女は卑怯ですから、勇氣を出さうとしても出せない時がございます、わ。

猛　そんなときやア、男が手を引いてやります。

花子　でも、村田さん、あなたも見てお厭になつたでしよう？

猛　何をです？

花子　何をツて――わたしの神經病が？

猛　僕は村田猛ですよ――それが伯爵の兄弟中山先生の樣に冷淡に見えますか？

花子　あら、さういふわけぢやアない、わ。でも、あなたのお厭の病人と、實は、わたし、おんなじ仲間でしよう？　然し、わたし、あなたを嫌ひません、わ。――けふツ切りでいいから――過去は無いもの、未來はかまはないの――けふツ切りわたしを好きと云つて置いて頂戴、ね。お願ひですから、さうして、わたしの云ひたいだけのことを云はして頂戴よ。

猛　そりやア好きです。然し、さうなりやア、けふツ切りとは限らないでしよ？

花子　（殊に沈痛に笑ひながら）二度は三度と同じよ。どうせ末長くつづく性質のものぢやアありませんから。だから、わたし、もう・けふツ切りで、教會堂と同じ運命よ。

猛　會堂は、僕、昨晩呪つて置きましたら、果してその通り燒けてしまつたです。

花子　わたしもあなたにさう呪つて貰らはれたいの。わたしは決心してゐる、わ。わたしのきのふまで持つてゐた考へは、敎會なら、矢ツ張り、うはツつらの儀式や掟に過ぎなかつたのです、わ、傳道するには神さまの爲め、また人の爲めだと思つてゐたのは、みんなわたしの病氣と心配とを隱さうとした、僞善の建て物でしたから、ね。こんな家は（と、自分の兩手で自分の胸をしめて）あなたに燒き盡して貰ひたいの。

猛　と云ふのは？（と、からかひながらも、目は据わつて、胸の動悸、高くなる）

花子　何でもいいの。わたし、嬉しくなつて來た、わ。あなた、この本を御存じ？（と、立つて）西鶴には、正直なところがあるの、ねえ。人がこれを猥褻だとか淫亂の書物だとか云ふのは、みんな自分の不德を隱さうとする僞善の心からよ。實際あることはあるんぢやアございませんか？

（花子、床の間の書を持つて來る。）

猛　どれ、お見せなさい。

花子　待つてよ、ここを讀んで御覽なさい。（書物をくり明けて、疊に置く。）

猛　（兩手を疊へ突いて、動悸をまぎらせながら、音讀）『年は七十ばかりにて、成る程、堅固に見えし神樣――』

花子　お內儀さんのことよ、天にましますぢやアないの。

猛　さうですか？　そのお內儀さんが『出でさせ給ひ、我姿を穴の明くほど見させ給ひ、どこも尋常にて嬉しやと仰せける。是れは思うたと格別の違ひ、神樣への奉公ならば、來まいものと悔し。』――何が悔しいんです？

花子　ひとりの女が、目かけ奉公をするつもりで、目見えに行つたのよ。

猛　へえ――『されども――』

花子　それから、ここへ飛んで御覽なさい。

猛　『この家に五七人も召し使ひの女ありしが、それ〴〵の役あり。自分ばかり隙あり顏に樣子を見合せけるに、夜に入りて、御床を取れとありける。是までは聞えしが、神樣と同じ枕に寢よとは心得がたし。是も主命なれば、否とは云はずお腰など摩れかと思へば、さはなくて。――』

花子　もう、いいわ！　（と書を奪ふ。）

猛　その先きを。（と、花子の手を引く。）

花子　もう、分つてる、わ。（と、猛の手を握る。）

猛　まア、お待なさい。（と、片手に書を抑へて）『さても氣の毒なる目に逢ひぬることぞかし。浮世は

慮し種々の所に勸めける。この神様の願ひに、又と世に男と生れて、したい事を仰せける。」――

これは、聖書の所謂「女と女と恥づべきことを爲し」でしよう。

花子　もう、頂戴。（と、書を取り返す。）

伯母　（奥より）花、もう、お膳を出してもいゝかい？

花子　いいことよ。（と、猛に向つて、首をすくめる。）

伯母　（奥より）あかりをお付けよ。

花子　さう、ねえ。――薄暗いのに、よく讀めました、ねえ。

（花子、ランプをともす。伯母、ちやぶ臺に用意の物をのせて、登場。）

伯母　さア、さア、あがつて下さいまし。

猛　これは恐れ入ります。

花子　（手つだひながら）何にもないんですよ。

猛　いや、大變御厄介をかけました。

伯母　（花子に）村田さんとお前とは丸で兄弟の樣だから、まア、これで御許しを願つて置きなよ。（猛に）何もございませんが、ねえ、さア、あがつて下さいよ。

花子　伯母さんは大相氣がきいてるの、ね。このお酒はどうしたの？

伯母　今、買つて來たんだよ。けふは、あんまりお前が沈んでるから、村田さんと御一緒にお酒でも

戴いて、少し浮き浮きおなりよ。

花子　さう?　御苦勞さま。――村田さん、一つさし上げましょう。

猛　(猪口を出して)あり難う。――伯母さんは、わたくしを酒飲みと御覧です、ね。

伯母　さういふわけぢやアないんですが、ほんの御愛嬌に、ねえ。

花子　わたしも飲みたい、わ。けふに限つて、何だかいい臭ひがします、わ。

猛　それぢやア、一つ。(と、飲んでさす。)あなたには桃源の味はひでもにほつて來ますか?

花子　(猛について貰つて)あら、こんなに澤山?――わたしには、地獄の花が一つにほひます、わ。

猛　寂しいにほひ方です、ね。まア、いいでしよう。――伯母さんも召し上りますか?

伯母　いいえ、豐田のうちでは、これ(花子を指して)の父だけで、あとはみんな無調法なものばかりが揃つてゐまして、御酒をあがる方のお相手がみんな下手で困りまして、ねえ。

花子　お返しします、わ。(と、猛に注ぐ。)

猛　少しは、それでもいいですよ。

花子　村田さんは大分あがれるんだ、わ。

伯母　さうかい?

(猛、飲んで、また花子にさす。)

花子　ぢやア、これはわたしが戴いて。村田さんにはこのお茶飲み茶碗であげましょう。

猛　僕もさうは戴けません。

花子　なアに、男の癖に——わたし、もツと飲みます、わ。

伯母　お前も、もう、それでおよしよ、いつも飲んだことはないのだから。お酒と聽けば、身顫ひをして、聽いただけでも、亡くなつたおツ母さんが見えて來ると云ふぢやアないか？

花子　けふはそんなことを云つちやア厭よ。今晩切りだから、いいの。（と、また傾ける）

伯母　醉つたら。どうする、え？

花子　かまはない、わ。

伯母　お前はどうしたのか、けふは、いつもに似合はないことを云ふよ。

花子　どうせ決心があるのですから、ね。伯母さん、わたし、若し死んでも恨んで下さつちやア厭よ。どうせ、活きてゐても、一生御厄介になるばかりだから。

伯母　そんなことを云つて、年寄りにからかふものぢやアないよ。——お酒を飲んだら、死んでしまうと云ふんぢやアないし。

猛　本當に花子さんは急に今夜人が惡くなりました。

伯母　困ります、ねえ。

花子　わたしは、もう、人にも苦勞を掛けたくないし、自分も苦勞をしたくないの。わたし、もう、伯母さんと村田さんとの前で、この先き生きてる面目がないのよ。いツそ、耶蘇教も聽かず、聖書學

校へも這入らなかつたら、わたしはもとの生れたままの杢阿彌で――豚の樣に、穢い不完全なからだに宿つてゐても、そのまま滿足をしてゐられたでしようし、また、乞食や癩病人の樣に、苦勞はあつても、からだの心配だけで濟んでしまつたでしようが、たまたま覺えた學問が暗い魂の目を開けて呉れたんで、――村田さんには冷淡だと云はれるかも知れませんが――わたしも矢ツ張りあと前きを見る力が出來て、却つてわたしの身の置きどころがなくなりました、わ。でも、この呪はれた身が、他の婦人がたと同じ樣に世間へ出て見たいと思つた昔とは違つて、眞實、わたしといふ苦勞のかたまりが讀めたのは、全く宗教のお蔭でしよう。今ではその宗教を踏み倒してまで、あなたのお說に贊成が出來るのは、わたし、それだけ罪が深くなつたんでしようよ。然し村田さん、人が魂を握つてしまひさへすれば、もう、宗教の樣な餘所行きごころもは入らないんでしよう――世の中に居ても、ゐなくツても、泣くやうに出來てるものは、いつまでも泣き通すんですから？　ただわたし、人が惡いから、泣き顏をあなたに見せたくないの――許して下さい、ね。（と、猛に首をかしげる。）死ぬべき時ぐらゐは、わたしでも知つてる、わ。實は、わたし、早く行つて、死んだお母さまに抱かれたいの。

猛　然し、花子さん、死んでも苦勞といふものは盡きないでしようよ――若し靈魂と云ふものがあるとすれば。

花子　でも、一つの苦勞と一つの苦勞との變り目は、丁度、魂から現へ變り掛けの樣に、樂しいもの

でしよう? わたし、その夜あけ心地の樂しい間だけで充分――夢も嘘だ、わ――現も嘘だ、わ。この世を夢といふのも僞善よ。また現といふのも僞善よ、長くつゞくものは、わたし、もう、みんな厭になつた、わ。わたしの病氣は、もう、御存じの通り、まぼろしを見ることでしよう。それが盡きない靈魂の持ち前なら、わたしの苦勞もそれと一緒に盡きないのは分つてゐます、わ。然し、あなた、そのまぼろしも苦勞の種、また正氣な時も苦勞の種なら、寢ても醒めても、死んでも活きても、人間がいつ笑つてゐられるんです? わたし、一ときでも愉快をして見たい、わ。それが出來れば、もう、地獄へでも、奈落へでも行つてかまはないの。正直に云へば、わたし、天國の樣なものがあるとは思へないの。世の中に活きてゐて考へればこそ、慾も出て、樂しい春の國があつて呉れればいいといふ心にもなるんでしようが、それは未練があるからですよ。もう、わたし、今となつては他に何にも入らないの。

猛　いや、僕はまだ御飯が入ります。

伯母　おや、濟みません、ねえ、つい、氣がつきませんでして。

猛　お酒は、もう、充分頂戴致しましたから。

花子　わたしも隨分醉つた、わ。――ああ、熱い! 熱い! (と、烈しく煽ぐ。)

伯母　それで、そんなにおしやべりになつたんだらう――不斷、口も碌に聽かない子が、そんなに村田さんをちツちやつて置いて、さ。

猛　なアに、よろしいのです。

伯母　只今御飯を持つてまゐりますから――

（伯母、退場。）

猛　今一杯どうです？（と、花子にさす。）

花子　伯母さんに内證(ないしよう)ですよ。

猛　勇氣が出ました、ね。

花子　わたし、もう決心してしまつたんで――伯母さんに濟まないけれど。

（花子、飲みほして、猛に指す。伯母、飯櫃を持つて、登場。）

伯母　御馳走でもあるといゝんですが、ね。――

花子　伯母さん、わたしがお給仕致しますから、いゝことよ。

伯母　それぢや、お茶を拵らへて來るから、ね。

（伯母、退場。花子の給仕。）

花子　わたしは喜んでゐると見えますか、悲しんでゐると見えますか？

猛　さうです、ね。今、少し判然しません、ね、人間の樂しい、嬉しいといふのは表面ばかりです。

花子　苦勞もさう表面ばかりになつて吳れゝばいゝのに、ねえ。わたしは、いつも、寂しい樣で、悲しい樣で、つらひ樣で、何だか、かう暗い、大きな石がわたしのあたまの上へかぶさつて來る樣で

――これは、女の心の組織が緻密で、感じが深いから、男よりも、その寂しさを感ずるのも、苦しさを感ずるのもまさつてゐるのでしようか？――男は何だか感じが淺い樣です、わ。それだけ冷淡なの、ねえ憎らしい、わ。

猛　さう云へば、女ばかりがえらい樣に聽えますが、男に賴らないぢやア、その深さも强さもしツかり定まらないでしよう。だから、女はすべて、獨身でゐる時よりも、一度、男の味を知つてからの方が、その肉附きも精神も引き締つて來ます。

花子　あなたの樣に、さうよく御存じぢやア、わたしはもうお婆さんに見えましよう？――でも、わたし、他のことは忘れてしまつて、大變嬉しいことよ。

猛　嬉しいのは一ときですよ。

花子　一ときでもいゝわ、滿足することが出來れば。

猛　僕は滿足など得られないと思ひます。

花子　一分間でも？

猛　僕は、一分間が一秒でも、滿足が出來ればその場で死んでもいゝです。

花子　本當？　えゝ、本當？　（と、猛につめ寄る。）

猛　さうです。（この返事は少し胡麻化しのやう。）

花子　嘘！　（と、また隔つて）あなたはまだそれだけの勇氣はない、わ。あなたにはまだ慾があるの、

高子さんといふ未練があるの。然し、わたし、それでいゝのよ。長く生きてれば、嫌はれる邪魔物ですものを。あなたはあなた、わたしはわたしねえ。村田さん、魂と魂と一度逢つたら、もう何萬里の違ひでしよう——わたしのお墓に苔が生へて、どこの馬の骨だか分らなくなつたその上を、何世紀も何世紀も、知らない人の足が澤山踏みつけて行くでしようが、あなたは、その時どこか遠くの星から之を見て、あはれな女だと思つて下さいましよう？

猛　それぢやア、あなたは、どうしても死ぬ決心ですか？

花子　はい——いゝえ、わたしといふ苦勞のかたまりは若し靈魂が滅びないものとすれば、いつまでも死にません、わ。

猛　然し人間が死んでしまつて、靈魂もくそもあつたものですか？

花子　それなら、それでもいいの。わたしにやア、今夜切りで思ひ殘りはありませんから。

（伯母、茶を持つて、登場。）

伯母　もう、お濟みですか？　村田さんはさぞ御馳走をあがりつけていらツしやるでしように、ねえこんなもので——

猛　なアに、そんなことはございません。

伯母　（茶を注ぎながら）まア、御ゆつくりなさいましよ。昨晩は、火事の騷ぎで、世間がざわ〳〵してゐましたが、ね。今晩は外もしんとして、靜かな月夜でございますよ。

（伯母の注いだ茶を、猛、花子、共に飲む）

花子　伯母さん、もう一杯お茶を。

伯母　おや、お前はお酒に醉つて、喉が渇いたんだよ。

猛　僕にもどうか。

伯母　おや、あなたもですか？——まア、いい月夜ですから、二階へでも行つて、涼みながら、お醒しなさいまし。

猛　大變御馳走でした。

伯母　どう致しまして。

花子　人のいのちは分らないものだから、今、伯母さんのお手つだひをして置きますよ。（と、立つ。）

伯母　なに、いいよ、わたしが方づけるから。

花子　でも、まア、ここまでなりと。（と、ちやぶ臺を次の間へ運ぶ。）

伯母　お前は醉つてるから、あぶないよ。

花子　それでは、もう、伯母さん、あとはよろしく賴みますよ。——村田さん、まア二階へいらツしやい。

（花子、先きに立つて、猛と共に二階の段を登る。）

詰の幕

花子宅二階の場

（花子居間、月、窓よりさし入る。鏡臺、針箱、疊紙等を据ゑる。蓐を延べ傍らに、不斷着の衣服を脫ぎ棄てゝある。低い机に、書物二三册。花子、猛、登場。猛、無言にて花子の手を握る。）

花子　待つて頂戴、あんまり散らかつてるから、方づけましよう。急いでお湯へ行つて、歸つたまゝですの、休んでましたから――こんな物があつては、尙、熱苦（あつくる）しい、わ。月夜で明るいから、あちがよく見えるでしよう――まア、お坐わりなさいな。

（花子、あわてゝとこを戸棚へかたづけ、傍らの衣服を丸め、敷き物を出す。猛、坐わらず、窓をあけて、外をながめてゐる。花子、鏡臺より剃刀を出し、猛に隱して、そツとこれを喉に當てゝ見て、死ぬ氣を示めし、それからそれを机の引き出しへ移す。それより、猛のそばへ行く。）

いゝ月夜、ねえ。御覽なさい、あの月のまはりには、五色の暈（かさ）が掛つてゐますよ。赤が一番はツきりしてゐてよ――それから、黃色――みどり――藤色もありますわ。あれが夜の虹といふものでしようか？

猛　僕は初めて見ました。見てゐると、夢の空に花が咲いた樣で、奇麗は奇麗ですが、僕の燃えて

ゐる考へは、それに引ッ込まれるに從つて、段々冷えて行く樣な氣が致しますよ。何かの前兆でしようよ、は、は、は!

花子　なアに、浮世の見納めに、神さまがわたしに一番奇麗なところを見せて下さるんだ、わ。

猛　天國には、もッと立派なところがあるさうです。(と、ひやかし笑ひ。)

花子　あなたは、そりやア、百花園や妙華園と間違へていらッしやるんでしよう、いろんな花の咲き揃つた中に、立派な貴婦人なども見られますから?――わたしにはわたしの行く處がある、わ。どうせ、苦勞と悲みの魂ですもの――

猛　人が世界に安樂を望むのなら、その魂をへたな宗敎といふ三稜鏡にかけるがいゝです。五色が七色にも見えて、喜怒哀樂の生命を拔き去つた虹が現じます。然し、それは根のない空に浮んでるまよはしです。眞そこの事實ではない、たゞ一ときのまぼろしです。眞そこの事實は、矢ッ張り太陽なら白光――人間なら黑い運命、あなたの所謂『苦勞』ばかりです。

花子　あなたはその苦勞をどうなさる?

猛　除きたい時は除くし、受けたい時は受けます。

花子　どう云ふ風に?

猛　泣きたい時は泣くし、笑ひたい時は笑ふし、醉ひたい時は醉ふし、醒めたい時は醒めるし。

花子　そりやア、自分勝手といふものだ、わ。

猛　然し、自分の外に何が存在してゐます？　世間の宗教は自分を外にして泣いたり、笑つたりするまぼろしの虹です――僕はそんなたわいのない物から生命を取つて來ることは出來ないです。

花子　あなたはそれだから憎らしいんだ、わ。――それだけ氣強いのに、どうして、昨晩、神様にお祈りが出來まして？

猛　なアに、ありやアあなたに祈つたんです。

花子　わたし、あなたを救ふ力はない、わ。

猛　いや、あります、一ときでも自分を忘れさせる程自分を活かせて下さつたらいゝんです。（と、花子の肩を押へる。）

花子　あなたも矢ツ張り御自分を厭なんでしよう――高子さんをさし置いて。わたしがお厭なものを頂戴したツてあり難いことはない、わ。（と、横を向く。）

猛　なぜ然う拗るんです？（と、花子の手を取つて、自分の方を向かせ）あなたも自分が厭になつたんでしよう？　厭な物と厭な物と一緒になつたツて、はじめからプラスマイナスの問題ではないです。魂の熱には、目鼻もないし、手足もないです。

花子　でも、その熱は矢ツ張り苦痛でしよう？

猛　だから、その苦痛をお互ひに忘れ合つたら、一ときでもそれが樂しい親しみの記憶となりましよう。

花子　本當に、この苦しい世界には、永遠のいのちとして、それがわたしの最後の記憶でしようよ——ぢやア、わたし、あなたの神になつてもいゝの？

猛　よろしいとも！　然し、あなたが西鶴にある神さんで、僕がその奉公人ぢやア眞平です。

花子　ほ、ほ、ほ！　それぢやア、本當のいたづらになる、わ、あなたとわたしでは——今晩が過ぎれば分るの。あなた、きツと、あしたの朝いらツしやいよ。わたしはもう口が聽けないかも知れませんが——でも、魂と魂とで話しませう。

猛　そりやア面白いです。あなたが果してそこまで決心を實行おできになるなら、僕は少しもとめません。が、若しそれが女のおきまりの威し文句であつたことがあすになつて分つたとして、夫婦にもなれないあなたと僕とがこんな關係になつてると伯母さんが知つたら、以後はかういふ風にあなたと話しをするのも許して置きますまい。その時ア花子さん（聲は顫へて）悲みは同じことです、氣を強くお持ちなさいよ。僕も魂で來ますから、あなたも魂で受けて下さい。

花子　あるかないかも分らない、魂だけになつたら、然し、もう、伯母にも、高子さんにも、御心配はかけますまいよ。——ああ！（と花子、歎息しながら、窓を離れる。猛、机のそばに來たる。）

猛　何を讀んでるんです？（と、聖書を手に取る。）

花子　聖書ぢやアございませんか？　もう、こんなもので救はれやうとは思はない、わ。（と、書を奪ひ取つて）讀めば讀む程、悲みが増すばかり。（と、これを疊の上へ投げる）

猛　あゝ、醉ツぱらつてしまつた。（と、敷き物の上にあぐら。）

花子　嘘う！　あなたはまだそれツぱかりで醉ふ人でなくツてよ。わたしこそ醉つたわ。（と、坐わつて、猛に向つて、机の上に肱をつく。）

猛　さう僕が飮み手に見えますか？

花子　見えますとも！

猛　なアに、禁酒會の會員が、酒の味はおろか、飮むか飮まないかも分るもんですか？

花子　（少し起き上つて）わたしには分ります、わ。あなたが、去年の末、銀座で禁酒演説をしたでしよう？　その時は、まだ全くあなたに逢つたこともないのに、その顏つきで飮む人だと分つてよ――わたしの父はお酒の爲めに身を持ち崩したので今でも年中お酒に浸つてゐます、わ。今の母も困つてゐますの。わたし、それを見ると、いつも憎い、憎いと思ふまま母でも可愛相になつて堪らないの。わたしの本當の母は、父の酒癖を心配して死んだ位ですから、わたしも小供の時から、赤い色を見てさへお酒の臭ひがして、それがまた良いにほひににほひます、わ。もう、わたし、何にも恥ぢることも、隱すことも、恐ろしいこともないの。父が大變醉ツぱらつてゐる時、わたしをこの世に生みつけたんです、だから、わたしは神の子でも、兩親の子でもないの、お酒の子ですものを――氣違ひ水の子ですものを！　わたしのまぼろし病は魂と一緒に持つて生れたんです、わ。

猛　それぢやア、あなたは話せる。僕が演説をしたいんで。あの時、ちよツと禁酒演説をやつて見

た樣に、あなたも、ただ女傳道師の仲間に這入らうとしてゐたんで、酒をやかましく云つて見たに過ぎないんです。

花子　嘘にも、まだそんなことを戒めてゐられるんなら、樂よ。――もう、わたしの考がきまつたら神さまも入らないの――教會も入らないの――學校も入らないの、禁酒會も入らないの――お酒に醉つて生れた子は、お酒に醉つて歸ればいゝの――あしたは、もう、飲めないの。

（花子、段々體が沈んで行く。）

猛　なアに、一度墮落してしまうなら、毒を喰つたあとの皿です、またあしたも飲みましようよ。

花子　（つく肱をすべらせて）あなたは慾張つてる、わ。あなたがお望みなら、高子さんとお飲みなさいよ。――わたしは、もう、死ぬんですから。

猛　また、『死ぬ』ですか？　もう、そんなことアおよしなさい。いくら苦勞があるからツて、この大宇宙に、僕はそれ相應の大滿足が出來なけりやア死なれないです。あなただつてさうでしよう？

花子　いゝえ、わたしだけではあなたを滿足させることは出來ないから――あなたはわたしが飲んだこの酒の味を本當に御存じないの。

猛　いやア、今度は逆ねぢですか、獰猛です、ね？

花子　ああ、かう云ふ氣持ちになると、もう地獄へ行く道も見える樣だ、わ。あなたには、それが見えますまい？　そうれ（と、指さして）あなたのお顏がくるくるまはつて――障子も、鴨居も、天井も

またまはつてゐる。――それが眞ッ暗なところへ消えて行く。――何だか深い森が見えて來た。――大きな太い並み樹ばかりで――それがうねうねと動いて、あま雲の樣に渦を卷いた木の瘤に人の顏が――お母さま――いや、お父さま――いや、あれは惡魔の顏らしい――右にもだ！　左りにもだ！

おや、うしろの方は、どの枝もみんな手まで出して――足が出來て――あれ、追ッかけて來る！

ああ、逃げても駄目だ！　わたしの行く先きも見える限りの並み樹は、その根からうねくり出して北から湧いて來る灰色雲の樣に――その雲の中からサタンか閻魔の顏が見える。――『墮落者に來い』ッて――あれ、あざ笑つてゐる、――おや、わたしを呼び返すは、エスキリストの聲！　いやもう、わたしは地獄の花子です。あとへは歸りませんの――歸りませんの――

（花子、段々寢入つてしまう。猛、立つて、二階の下り口より下をのぞいて見る。それから、花子の傍に坐わつて、その肩に手を掛ける。）

猛　花子さん、目をお醒しなさい。

花子　（目を醒して）おや、わたし、眠つてゐたの？　何か云つてて？

猛　云つてましたとも、地獄に行く案內をして貰ひました。

花子　（そのまま）でも、わたしはあなたと一緒に行くのは厭よ。

猛　なぜです、墮落するものは皆地獄へ行くんでしよう？（と、花子の手を握る。）

花子　あなたはまだいいのよ、救はれる時もありましよう。わたしは西へ行くの、あなたは東へお行

きなさい。

猛　然し、世界は圓いものです、どちらへ回つても、どうせ一つところに落ち合ひます。

花子　ほ、ほ、ほ！（と、身を起して）では、あなた、（と、手を握り返し）若し人の心が二つになつて、一つは北へ、一つは南へ行つたとすれば、どうなりますの？――そして、その一つは途中で消えてしまつて、別な方が返つて來たとすれば？

猛　消えてしまつたものは、死んだも同前ですから、（花子、身を顫はす）返つて來た方をつかまへてゐりやアいゝでしよう。

花子　然し、死んだものはどうなりますの？

猛　なアに、死んだも同前の中山などに心配する必要はないです。

花子　あなたはわたしのことばかり云ふの、ね。――あなたが若しわたしの身になつて死んだとしてわたしがあなたになつて、平氣でゐたらどうでしよう？

猛　そのときやア、僕がさツきお話の苔の下で、あなたがどこか遠くの星の人でしよう？　人間の魂と魂とが、若しいつまでも感じがあるとすりやア、平氣でゐられるもんぢやアございません――然し、どうせ、人間は一度死ぬんだから、そんなことはいゝぢやアありませんか？

花子　厭、あなたは！（と、少し遠ざかつて）あなたはわたしにからかつて置いて、わたしが死んだ跡では、高子さんと一緒に、わたしの事を云つて笑ふつもりでしよう？――あなたも矢ツ張り冷淡だ

わ。

猛　いや、僕はあなたを愛します。高子一人が何です？　あなたに對する時は、高子はもうをりません。（と、花子にもたれかゝる。）

花子　本當に今晩切りのお別れよ。（と燃ゆる顏を猛に近づける。）

猛　花子さん！

（と、猛、抱きつかうとすると、花子、そのまゝじツとしてゐたが、身體が顫へて、その目に異狀を呈して、きよろ〳〵するので、猛、手を引く。花子、急に立つて、狂亂の體。）

花子　おお、きな臭い！　火事！　火事！――もう、まはりはみんな火になつた。わたしの逃げるところがない。――ああ、どうしよう？　どうしよう？――あの大きな舌！　あの焰の舌！燃えて來る！――ああ、どうしよう？　どうしよう？――あの舌！　あの焰の舌！　わたしを嘗めにやつて來る！――ああ、逃げるところがない！　あれ！　あれ！　あれ！　からだに燃えつく！　あ、あ、あ、あア！

（花子、あちらこちらにかけ回つて、つひに身を辣めて倒れかゝるを、猛、立つて、しツかり抱きとめる。）

猛　花子さん、花子さん！　しツかりなさい！　また、例のが起つたんでしよう？　ええ、花子さん！　花子さん！　困ります、ね。

（花子、氣がついて、猛の手を取る。）

猛　本當に、花子さん、困るぢやアありませんか？

花子　でも、わたし、持つて生れた病氣ですもの――これがわたしの本性ですもの！

（花子、泣き倒れる。）

猛　泣くには及びません、僕は察してをります――火事と見えたのは、然し、あなたの魂の熱ではございませんか？――僕もこの通り熱くなつてゐますぞ。（と、花子の手を自分の胸に當てる。）それよりも、早く伯母さんはどうしてゐるか見ていらツしやい。よう。早く見ていらツしやい。

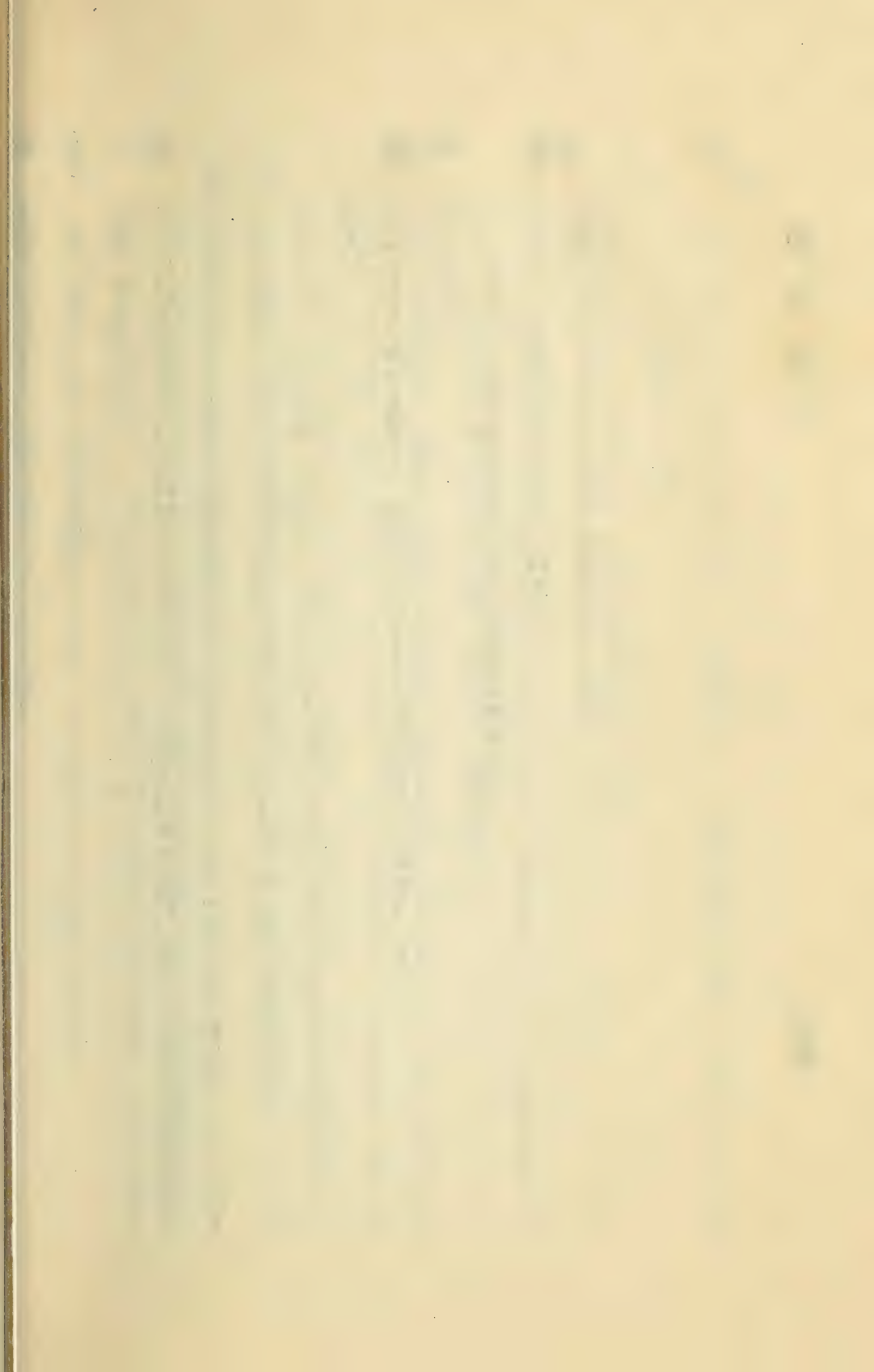
（花子、泣く〳〵立つ。猛、また立つて、段の下り口までかの女を送り、かの女の歸り來たるを待つてもとに戻る。）

花子　（立つたまゝ、顫へる調子で）伯母さんはよくうたた寢をしてゐます、わ。

猛　花子さん！

（と、手を以つて花子を引き寄せる。花子、）猛の膝に倒れる。）

花子　わたし、もう燒け死ぬんです、ねえ！

（花子。泣いて猛にすがる。舞臺、眞暗になつて、幕。）

社會悲劇 斧の福松

登場人物

斧の福松（新平民の强盜）
太　郎　吉（福松の父）
お　　　富（太郎吉の妻）
本野大藏（武道師範）
お　　　靜（大藏の娘）
武田秀雄（巡査部長）
虎　　　吉（福松の子分）

撮影者某

太郎松・福太・梅助・吉松・竹藏（穢多）
巡查數名・村人老若數十名
穢多の大人小兒數十名

場所は江州長濱附近
時は午後より夜中

序の幕

小櫻村穢多道場の場

（舞臺中央に、緣附き板敷の廣間、家根は藁葺き。下手に、門附きの板塀、上手、緣はづれに、大きな石の手水鉢。庭は家の後ろにまはり、高い鐵道の堤防を以て限られ、その堤防の上を穢多の小供あまた、襤褸の姿して、遊び居るのが後ろの窓や下手の外から見える。時は日沒。廣間には、太郎松、福太、梅助、吉松、竹藏の穢多五名、あぐらを組み、一升德利の冷酒を飲んで居る。）

太郎松　おい、福太、もツと飮もや――醉うた勢で、ひとつ、あの寫眞屋をやツつけてやるだア。

福太　それは、太郎松、お前の樣に强ければえいけれど、おれらが醉ひ過ぎては、腕の力は出ろまいがよ、のう、梅助。

梅助　意氣地のないことは云ふまい。かう云ふ時に投りつけて置かねば、いつまでも世間の奴らはえい氣になつて居るので、のう、吉松もさう思うて居るだろい。

吉松　さうよ、全體、この村を寫眞に取つて、どうすると云ふのだろい。また、新聞などに出して、小學校問題の爲めにするのだろいよ。おい、竹藏もしツかりせいよ。

竹藏　しツかりするも、しないもあろまい、かう云ふ穢いところに住んで居る子供だに依つて、とて

も一緒の學校へ入れることはならぬと、世間に知らす種を拵らへに來たのだろい。——その癖、郡長さんからは、せツせと敎育をやらせろい、やらせろいと云ふて來るではないかい？
太郎松　村中で重立つたおれらが奔走したればこそ、この村に小學校も建つて、今度何十名といふもの尋常を卒業して、それが郡立の高等科へ這入らうとするのに、郡民はそれは許さぬといふて反對する——高等小學までをこの小い村で建てる金が出來るといふのだろかい？　あんまり人を馬鹿にして居るだ。
福太　穢多と云ふて、村のものを卑しむけれど、おれらが人並にして居れば、世間はつけあがつて來るばかりだろい。
梅助　全體、巡査からいけないだ、あたまから打てかゝりくさる。
吉松　長い物には卷かれろいだけれど、あの寫眞屋は一つ厭といふ程ぶちのめしてかますがえい。
竹藏　今、おれらが寫して貰ふと云ふて、呼び返しにやつてあるのだに依つて、もう、來るだろいよ。
太郎松　それはさうと、小供らが小學校で習うて來るけれど、あの『つぶれ』——いや、『つ……る……べ……』がのう——
福太　それ、それ！　穢多だからそれが云へぬとは情けない。『つ……る……べ』だろい。
梅助　うちの井戸の『つぶれ』——

吉松　いけない、いけない、おれが云うて見よかい？――うちの井戸の『つ……ぶ……れ』。
竹藏　矢ツ張りつぶれてしまうかい？
太郎松　六ケしいものだ。
皆々　は、は、は！
（と、酒を飲んで居るのを見て、堤防の上から、小兒らの指差しなどするのが見える。上手の奥で汽笛が鳴ると、轟然として列車が通り過ぎる跡に、小兒等の萬歲を叫ぶ聲が聽える。この時、撮影者、寫眞機を以て、巡査二名を從へて、下手より登場。小兒等あまたつき從つて居る。）
撮影者　それでは、寫さして下さいますか？　先刻來た時に直ぐ承知して下さつたらよかつたのですが、も早や、少し時刻が後れましたから、うまく取れるか、どうか――まア、やつて見ましよう。
（と、機械を据ゑて、用意をしかける。）
巡査一　こら、餓鬼供！　たかつて來るのぢやない。出て行け。出て行け。（と、門外へ小兒等を追ひ出だす。）
巡査二　さア、みんなそこへ並べ――そんな穢い德利などは片づけろ。（と、醉つて居る五名の様子を見て不審に思ふこなし。）
太郎松　（立ち上つて）わしらが寫して貰ふのもよろしいけれど、その前に一つ寫眞屋さんに聞きたいことが御座ります。

巡査二　なに！　貴樣達ア、寫して貰ふから來て吳れと、云うてよこしたぢやないか？
太郎松　それは承知で御座りますけれど、聞いてからに致します。
巡査二　何を聞くだ？
太郎松　他でも御座りませぬ、然しこれは巡査さんには關係が御座りませぬ。
巡査一　（門ぎはより來て）　待て！　貴樣達ア、わざわざ酒に醉うて、不都合なことを仕出かすつもりだな？——人に物を聞くなら、座わつて云へ。

（門外に出た小兒等、また、がや〳〵と這入つて來る。）

太郎松　へい〳〵（と、腰をおろして）不都合なことは致しませぬけれど、この村を何の遺恨があつて寫すのか、それをあの寫眞屋さんに尋ねたいので御座ります。
巡査一　このお方は寫眞屋さんではない、から云ふ村のことを研究して、貴樣達の爲めを計つて下さるお方だ。
巡査二　寫すと云うて、人を呼んで置いて、理窟を捏ると失禮だぞ！
太郎松　いや、寫眞を取るのが厭だと云ふのでは御座りませぬ。
撮影者　（巡査に）なに、お二方、私は別に——無理に取るに及びませんから、よしましようよ。（と、機械をたゝみかけて、五名のものに向ひ）　たゞあなた方に云つて置きますが、私は社會の研究者で——別にあなた方に對して遺恨の、惡意のと云ふことはなかつたのですから。

太郎松　（また、立ち上つて）それでは、なぜにあんな小學校を寫したり、小供を集めて取つたのだ？

（と、緣がはに進む。）

巡査一　何をぬかすんだ！（と、頰げたを投りつける。）

太郎松　あ、痛！（と、緣に倒れる。）

福太　あんまり酷いでは御座りませぬ？（と、餘のものと共に立ち上る。）

梅吉　あんまりです。

吉松　酷いです。

竹藏　太郎松、どうもないか？

巡査一　無禮な奴だ！

巡査二　君、よし給へ、あんな分らず屋を相手にしても仕やうがない。

撮影者　さア、まゐりましよう。（と、行きかける。）

巡査一　けふは、このお方に面じて許してやる、以後こんな無禮をしたら承知しないぞ。

（撮影者並に巡査二名、退場。小兒等また之について行く。）

太郎松　あんまり人を畜生あつかひにする――忌々しい奴らだ！

餘の者　殘念だ、のう。殘念だ、のう。

太郎松　飮もや〳〵、燒けツ腹だア。

（皆々、またあぐら、飮む。）

太郎松　學校も屎も入るものかい？　この村から、斧の福松の樣な强盜。大泥棒が出たのは、おれらの恥ではあるけれど、かういぢめられては、あゝ云ふ樣になつてしまふのも尤もだい。

福太　さうよ、あれも今度は大阪の監獄へ行てからどうして暮して居ることだろい？

梅助　大阪の監獄と云へば、嚴しいさうだに依つて今度こそは牢破りも出來まいよ。

吉松　まさか、鼬や籠脱け（かごぬけ）の藝當までは知つて居るまいから、のう。

竹藏　それによ、あの始終持つて居つたおほきな斧だ――あれがなければ、おれらが目玉を拔かれたと同樣、何の仕事も出かすまいに依つて。

太郎松　それでも、えらい奴だ、千鳥に生れ變はつても、白刄一つ提げて通うて來ると、歌うて行たではないかい？

福太　あれは福松が自分で作つた歌よ。おれが一つ上手に歌うてやろい。

餘の者　やれ〱。

福太　泥棒の膽ツ玉を据ゑてからかゝらねば行こまい。（と、居ずまひを直して、醉歌する。）

生れかはらば、
千鳥となりて、
白刄一つで

通ひたや。

梅助　うまいぞ、うまいぞ。おれがやつてこまそかい？

餘の者　やれ〳〵。

（體は直せど崩れながら）

生れかはらば、

千鳥となりて――か？（と、手を拍つ。）

皆々　白刄一つで

通ひたや。

（五名、手を拍つて歌ひ興じながら、醉ひつぶれて、横になるのもあるし、うつ伏すのもある。この時、新平民强盜斧の福松、下手より登場。づかづかと廣間にあがり、足を以つて五名を蹴起す。）

福松　何だ、このへちま野郎めら！ごろ〳〵と轉がつて、何をしてイやがるんだい！起きろい。起きろい。

（五名、驚いて、居直る。）

五名　へい〳〵。（と、平つく張る。）

福松　名乘らねいでも分つて居やうが、大泥棒、斧の福松が牢破りをして出て來たんだ。土産はやるから、暫くこゝを明けて貰はう。

五名　へい〳〵。

（福松、懷中より銀貨の包みを出し、之をばら〳〵と撒き散らす。）

福松　さア、拾つて行きやアがれ。

五名　やア、銀貨だ〳〵。（と、奪ひ合つて袂に入れ、嬉しさうに、また恐ろしさうに、退場。）

福松　むふ、ふ、ふ、ふ、ふ！

（と、獨り笑ひをして、眞中に坐わり、呼ぶ子を鳴らす。上手、下手より、穢多數名、出で來たる。）

子分一同　親分。

福松　手前達ア、よく手分けをして居ればいゝ。さわべるが來たら、合圖をしろい。

子分一同　はあ〳〵。

福松　ぬかるのぢやアねいぞ。

子分一同　はあ〳〵。

（子分一同、兩方へ退場。福松、懷劍を出して、之を拔いて見る。下手より子分虎吉、大斧の包んだのを持ち、登場。福松、劍を隱す。）

虎吉　親分！

福松　來たか、虎吉？

虎吉　今、使ひであつたから、直ぐやつて來たが、大阪はいつ破れたんだ？

福松　ゆふべよ。直ぐその足で運動旅費は出來たから、知れねい樣に、今の汽車に乘つて來たのよ。
虎吉　それぢやア、これから、また一緒に、しこたま稼げらア。
福松　稼ぐつもりやアつもりだが、これからア泥棒はしねい、堅氣だぞ。
虎吉　そりやア、どう云ふ譯だ？
福松　まア、上つて來ろい。
虎吉　この四五ケ月といふものア、親分が居ねいんで大きい仕事も出來ねいし、警察の方では、またこはい者なしの大威張り——皆、親分の歸るのを待つて居たぜ。（と、手拭を以て、衣物の裾を拂ひ、廣間に上り）さア、親分の仕事道具（と、大斧を包みより出し）確かに預つて居たから、讃めて貰ひたい。
（と、之を下に置いて、座わる。）
福松　もう、そんな物ア入らねえんだ。
虎吉　入らねいとは？
福松　手前と違つて、おりやア腹からの泥棒ぢやア無い——たゞ穢多なんだ。
虎吉　そりやア、おれも知つてるが、世間がおなじ付き合ひをして呉れ無いから、その仕返しのつもりで、親分は立派な惡黨になつたんぢやァねいか？
福松　それに違ひねいとも、おれの腹いせとしちやア、まだこれ位で足りやアしねいんだ！（と、激して來た樣子で）おれ達も人間の端くれとア、立派に明治の掟で定まつてるに、それを破つて、非人

呼ばはり――公けの眼から見りやア、そんな社會も强盜、破獄と同罪ぢやアねいか？　おまけに、詐僞や騙りや不人情、ありとあらゆる斉な所業をして、十万兩が百万兩に嵩んでも、その心ア年中暗い穴――なァに、おれにやア、奴等の樣な後ろ暗いところアちツとも無いんだ。おれが三すぢ繩に懸るなら、社會の奴等も終身懲役――それならそれで分つて居るが、右を向いても、左を見ても高が人間一匹のおれさへ癪に障ることばかりだ。藪醫者ぢやアあるめいし、人の脈など彼れ是れぬかすよりやア、先づ自分等のどてツ腹を洗つて見るがよい。無學文盲、强慾非道！　奴等の不德と罪惡ア棚に置きやアがつて、おればかりを責めるにやア及ばねいぢやア無いか？　天下の報いと苦しみとを引き纒めて、おれ獨りに脊負はすんだらう。社會の罪を持つて來て、みんなおれに脊負はす爲め、この身を無理に押し込めやアがつて、强盜といふ鑄型に入れたも同樣――刑罰を受ける元ア、おれぢやアねい、そツちにあるんだ。金や寶に目が暗んでやアしねいのア、親の家の構へを見ても知れる筈――財產で云やア、おれの老爺ア、一國切ての大盡だ。初ツから、おれは惡黨にやア生れて居ねいんだ。憎いのア、現在、手前も知つてる通り、おれの武道の師匠、神道氣狂の本野大藏樣だ――

虎吉　ありやア名打ての頑固老爺よ。

（この時、下手より、穢多二名、酒肴を運んで來て、兩人の前に備へる。穢多二名、退場。）

虎吉　大相な御馳走ぢやアねいか？

福松　なアに、急にあつれいさしたんだ。
虎吉　ぢやア、おれがお酌をしよう。（と、親分と自分との酌をする。）
福松　まア、けふが手前と別れになるんだから、充分飮みねい。おれにも、云ふだけの事ア云はして呉れろい。あのおやぢ――と云やア、濟まねいが――あの大藏がおれに擊劍や柔術を敎へて、さ、質がよかつたところから、おれを一番弟子にして呉れて、娘のお靜さまの婿にすると定めたんだ。おれもお靜さまにやア初めツから心が引かれて居たんだし、向ふからもまたいつも優しくして呉れたから、及ぶだけの事アしてやつて、あの一家の爲めにやアこゝろア盡してやつたが、いよ〳〵緣組みの手つゞきとなつて、さ――ああ、樂しい夢の破れるとア、みなこんなものだらう――向ふからぴたり斷り、以來出入りを差し止める！
虎吉　忌々しいが、親分の素狀が知れたんだ。
福松　それにやア、一番弟子の武田秀雄、今の巡査部長だが、奴が邪魔を入れたんだ。これが一時の夢見なら、目が覺めたら、あきらめも付からうもの――おれも血の湧く人間だ、一度染み込んだ戀の火が、全身五體に燃えて來ちやア、うつゝにも忘れられねいこの苦み。おればかりなら、まだ辛抱も出來やうが、穢多、新平、人非人と、社會からさげすまれて居るものア、どんな素直な人間でもみな、かうされるんだと思つて見りやア、おれ達仲間の爲めに殘念だ。
虎吉　その殘念が積り積つて、親分の様な大泥棒になつたんだから、當時の石川五右衛門だア。

福松　五右衛門にやア子まであつたが、おりやアお靜さまの爲めにまだ女を知らねい位だ。膽ツ玉の太いのア、いつ棄てたつてかまやアしねいが、十年思ひ込んだこの戀は、おれの脈をまはつて居る穢多の血と同樣、この五體から打ちやることア出來ねいんだ。

虎吉　さう云やアさうだらうが、高が女の一匹位、どこからでも拾つてやらうぢやアねいか?

福松　それが手前の泥棒根性——一度、男が思ひ込んだら、何年經たうが、忘れるものぢやアねい。手前にやアもう人情は無いが、おれにやアまだ人間の心が殘つて居らア。お靜さまもそれを知つてるから、これまで獨身で居たんだらうが、今度、ふたりで、どこかへ高飛びしてしまやア、跡は眞面目にこれまでの罪亡しやアするつもり。その手初めに、先づ、手前とお別れだア。充分飲んで吳れろい。おれが一度酌をすらア。(と、酌をしてやる。)

虎吉　ありがてい。(と、猪口を受けて)それぢやア、もう、一緒に稼がして吳れねいんだ、な?

福松　手前が泥棒をよせる人間ならだ——とても見込みやアなからう。

虎吉　見込みがなからうツて、親分、これまぢやア斧の福松の片腕と云はれて來た虎吉だ、矢ツ張り一緒に大きな倉をカイ歩く方がいゝぜ。けふに限つて、親分は生眞面目で、意氣地やア無いや——醉ひなせい、醉ひなせい。(と、歌ふ。)

　　生れ變らば、

　　　千鳥となりて、

通ひたや。

こりやア親分の作つたんぢやアねいか？

福松　こら、虎吉、親分に向つて、意氣地がねいとア何だ？

虎吉　成る程、さう云つたのア惡かつた。然し、親分、親分の出て來るのを待つて居た子分共をどうすると云ふんだ？　女一匹の爲めに、親分の名高い唄も廢つてしまう、わ。

福松　堅氣になりやア、もう、子分は入らねいんだ！（と、短劍を手に取る。）

虎吉　おれを殺す氣だ、な？（と、逃げかける。）

福松　待て！逃げても駄目だぞ！

虎吉　（座わつて）ぢやア、親分、おれも堅氣になるから、一緒にどこへでも連れて行つてくんなせい。

福松　そりやア、手前の心から吐すんか？（と、劍を跡へ引く。）

虎吉　いや、心からぢやア御座いません、おれの聲ア喉から出やアがる。（と、喉を觸つて見る。）

福松　馬鹿！　手前の樣な野郎にやア、泥棒が惡いこととたア分るめい。辛苦のあげくの一粒種、一錢二錢の積つたものア、山ほどあつても、おれにやア手が付けられねいんだ。眞面目な人の家倉を潰すのア、浮かれた町の藝者でなけりやア、手前の樣な泥棒だ。人の辛苦と骨折の値うちを踏み倒すのア、兩方共おんなじことと――三味線こそは彈かねいが、成る程、手前の聲ア喉から出よう。黄い

ろい心でやる仕事にやア、金錢は湯水だ、骨折は無益だ。そんな根性の動物にやア、百姓の鍬や職人の鉋が持てやアしねい。

虎吉　持ていと云やア、持てまさア。

福松　手前にやアそれが重いだけだが、毎日働くその仕事で、煮え湯の様な汗は出るめい。

虎吉　冬の様な寒い日にやア、とても出ますめい

福松　馬鹿もそれ程分らねいぢやア、とても眞人間にやアなれやアしねい。そんな根性ぢやア、素直な家と強慾非道な屋敷とア、區別のつかねいのも當り前だ。おれがこれまで泥棒に這入つたのア、這入つてやつてもかまはねい理由があるところばかりだ。金の欲しい強盗なら、おれの老爺の屋敷へ幾度でも這つてやらア。

虎吉　それで、親分が五右衛門や鼠小僧の樣に、一義盗と云はれる位のことア、おれだつて知てらアな。

福松　知るも、知らねいも、心一つだ。灰を飲み、胃を洗ふと云ふことアあつても、手前が泥棒をよして、改心するときやアあるめい。手前の胴中にやア、善いと云ふ良心もなけりやア、惡いと云ふ良心もねい――手前とおれとア、善惡の分れるところだ。――覺悟しろい！

（福松、再び劍をしかと握る。）

虎吉　親分が改心するなら、改心してもよからうが、その爲めにおれを殺すにやア及ばねいぢやアねへか？　（と、虎吉、逃げ腰になる。）

福松　虎吉、許して呉れ！（と、突き込む。）

虎吉　あツ！（福松、ゑぐる。虎吉、倒れる。）

福松　（劔を抜き取りて）おれが改心しても、おれの仕込んだ手前が生きて居りやア、いつまでもおれの惡業が續く譯――可愛相だが、殺して置くんだ。この馳走を別れの供養と思つて呉れろい。

（と、羽織を脱いで死體の上にかけ、傍らに棄てゝある矢立と紙とを取り、再び座わつて、『斧の福松改心して身づからその片腕を落したり』と書く。それから、之を劔を以つて正面の壁にさし止める。）

穢多數名　（上手と下手より）バア／＼、バア／＼。（と云ふ合圖。福松、きツとなり、大斧を執る。この時、武道師範本野大藏、病氣の體、急ぎ、よろめきながら、下手より登場。）

福松　おゝ、先生、その御病體で？

大藏　おゝさ、貴樣の樣な人非人を、たとへ一度なりとも、弟子にしたのが因果――この本野大藏、老體をかゝへても、貴樣を召し取つて、その筋に差し出さねば、高天ケ原の神々を初め、お上に對して顔が立たぬわい。

福松　いや、先生、その御心配は御無用で御座ります。この通り（と、死骸を指して）立派な證據を御覽に入れて、全く改心致しますからは、天照大神も御照覽！　たゞ一生のお願ひは、先生、元の通りお孃さまを私にお許し下さりませ。

大藏　以つての外の非望、野心！　貴樣如き穢多、非人、强盗、破獄、罪と云ふ罪を犯した件がらに

大切な娘を誰れが呉れやう？

福松　成る程、私は穢多で御座ります。穢多が罪なら、これは親々から傳つた罪で御座ります。然し社會に對する不平と不滿がなかつたら、私は初めから强盜にはなりませぬ。その不平、不滿と申しますのも、私が先生のいつも仰せられた神ながらの眞人間になつて、忘れてしまうことが出來ます。たゞお孃さまさへ――

大藏　默れ！　聽くのも穢らはしいわい！（と、大藏、怒つて、座敷へ飛び上る。福松、斧を棄て、柔術の手を以て、大藏を庭の上手へ投げる。大藏、氣絕。）

福松　先生、お許し下さりませ。まだこの世に希望があつて、出て來たからだ――只今繩にかゝることは出來ませぬ。（また、「バア〳〵」といふ合圖聽える。福松、立つたまゝ、斧を取つて構へる。巡査部長武田秀雄、外三名の巡査、拔劍にて、下手より登場。）

秀雄　福松、改心とあらば、この武田秀雄に面じて尋常に繩にかゝれ。

福松　改心(けいしん)するも、しねいも、おれの勝手だ。貴樣如き者こそ人非人――兄弟子を落し入れて、自分の强欲を滿たさうとした戀の敵！　おれを召し取るのア、たゞその邪魔を拂ふに過ぎねいんだ。

秀雄　いや、福松、その疑念は無用だ。お孃さまは貴樣の爲めに謹愼して、一生獨身の誓ひを立てゝ御座る。老師の御恩を思ひ、またその娘御お靜さまの心を思ふなら、昔からの好み、この武田の手にかゝつて、往生しろ。

福松　入らねい世話だ。おれのいのちやアお靜さまのいのち。死ぬなら、お靜さまと一緒に死なア。

秀雄　それ！（と、秀雄、外三名の巡査、踏ん込む。福松、暫くあしらつて、上手へ退場。巡査一同、また之を追ふて退場。大藏の娘お靜、福松の父太郎吉。下手より登場。）

太郎吉　お孃さま、途々お話し申し上げます通り、困りますのは倅の惡行――牢破りをして出て來れば、直ぐまたどの樣な事を仕出かすか分りませぬ。穢多よ、非人よと云はれますのは、これは先祖代々の血すぢで御座りますので、何とも致し方は御座りませねど、決して根からの切り取り強盜では御座りませぬ。どうぞ、今度は、お孃さまがお會ひ下されて、どうぞ、得心の行くやうにさして下さりませ。

お靜　太郎吉さん、よく分りました。私も福松さんの爲めには、あなたに劣らぬ苦勞をして居るので御座いますから、福松さんに會ひますなら、あなたのお賴みはきつと申します。

太郎吉　どうぞ、よろしうお願ひ申します。世間の人は、誰れも私共を相手にして吳れませぬのに、あなた樣ばかりがいつも御親切になさつて下さりますので、ついお情にあまえる譯で御座ります。

お靜　おゝあれを御覽なさい。（と、正面の文字を指して）福松さんが改心したと書いて御座います。

太郎吉　えゝ、改心した！　改心したと書いて御座りますか？

お靜　『斧の福松改心して身づからその片腕を落したり』と、書いて御座います。

太郎吉　片腕を落したと？　おゝ、成る程、虎吉があそこに斬られて居る樣で御座ります。これが本

統なら、私はもう死んでも本望で御座ります——お孃さま、ああ、本望で御座ります。

お靜　おや、お父さまが！

太郎吉　先生で御座りますか？

お靜　お父さま、どうなさいました？

太郎吉　先生さま！（太郎吉、お靜について、氣絕して居る大藏を介抱しようとしたが、遠慮して、跡へ引く）

お靜　お父さま！　お父さま！（返事がないので、お靜、活を入れる。大藏、息を吹返し、喉の渴いた樣子。）

お靜　お父さま、お氣がおつきなさいましたか？（と、手洗鉢の水を水杓に汲んで、大藏に飮ます。大藏段段正氣に返るこなし。）

お靜　さぞ、喉がお渴きで御座いましよう——もう一杯召し上りなさいませ。（と、お靜、水杓を大藏の口へ持つて行くと、大藏、飮みかけて、ふと氣付いた樣子。手を以つて之を押しのけ、手洗鉢を返り見て、穢いといふこなし。幾度も唾を吐く。しまひには、お靜の手から水杓を奪ひ取り、之をほうり投げる。）

大藏　えゝッ、穢い！

お靜　お父さま、どうなさいました？　御病氣のところを、躍起勃起なさいましては、おからだにお惡う御座います。どうか、萬事は私が引き受けますから、御心配は御無用になさいまし。

大藏　えゝ、口が穢れたわい！

お靜　それでも、お父さまのお生命ては代へられませんでしたから——

大藏　生命までが穢れてたまるものか？（と、御幣を振る手付きして）七里けつぱい。拂ひ給へ、潔め給へ。（と、拍手を拍つ。）拂ひ給へ、潔め給へ、拂ひ給へ、潔め給へ。（と、頻りに唾を吐く。）

太郎吉（おづ〳〵して）お孃さま、私が居りましてはまた先生の御立腹の種――これで、御免を被ります。

お靜　それでは、太郎吉さん、あまり心配しないで、ねえ。

太郎吉　どうぞ、よろしうお願ひ申します。（と、行きかける。）

大藏　お靜、誰れだ？（と、太郎吉の方を見る。）

お靜　いえ、あの――

大藏　誰れだ、お靜？

お靜　あの、村のお方で――

太郎吉　村の者で御坐ります。

大藏　なにッ、村の者？――こら、太郎吉！

太郎吉　へい〳〵。（と、平伏する。）

お靜　どうか、お構ひなく――（と、太郎吉に目くばせする。）

太郎吉　へい――（と、立ちかける。）

大藏　待て、太郎吉！

太郎吉　へい〳〵。（と、また平伏する。）

大藏　（よろめきながら、立ち上つて）貴樣は、全體、何の爲めに來たのだ

太郎吉　へい、伜が牢破りをして歸つて來たと承はりましたので、とツちめて意見をしたいのが胸一杯――それで、探しにまゐりましたので御坐ります。先生の折角の御指南が仇となりまして、あの樣な惡黨になつてしまひましたのは、何とも申し譯が御坐りませぬ。

大藏　わたしは、强盜になれと云うて、指南したのではないぞ。貴樣達ア先祖代々のろはれて居るのだ。

太郎吉　御尤もで御坐ります。

大藏　あんな穢多や泥棒とは、七里けつぱい、遠から師弟の緣は斷つて居るのだ。

太郎吉　御尤もで御坐ります。

大藏　太郎吉！

太郎吉　へい〳〵。

大藏　貴樣はおのれの身分を忘れてあの奇麗な村へ移り來り、昔なら、名族鄕士と同じ格式の門構へを張り、家材から家具に至るまで、分外の贅澤三昧――不埒な奴だ！

太郎吉　成る程、それは惡う御坐りましたけれど、廣い世界に、あればかりが私の蝸牛の殼で御坐ります。あの家が建つてから、もう、十年餘りにもなりまして、今更ら取り毀すわけにもまゐりませ

ぬし、之が爲めには、自分の丹誠を凝らした金を使ひましたので、塵ほども人の世話にはなつて居りませぬ。

大藏　むむ、誰れが貴樣の世話などするものか?――全體、娘に何の用があつて來た?

太郎吉　へい――へえ、何の用もあつたのでは御坐りませぬ。

大藏　そんなら、何で口を聽いたのだ?

太郎吉　別に何も話した譯では――

大藏　何?と?

お靜　お父さま、私が申し譯を致します。

大藏　いゝや、お前に用はない。わしの大切なお前が可愛ければこそ、身を潔めて、神々に御祈禱をしてまでも、こんなに苦勞をするのぢやないか?　お前は、七里けつぱい、穢れに近づいてはならぬ――太郎吉、貴樣の樣な穢多非人、見るのも穢れる!(と、唾を吐きかける。)さがり居れ!(と、蹴る)

お靜　あれ、お父さま!

大藏　娘と話しは一切ならぬ、この人非人!(と、また蹴る。)

お靜　あれ!

太郎吉　いや、御尤もで御坐ります。(と、平伏する。この時、下手より、太郎吉妻お富、登場。)

大藏　その樣を見るのも穢らはしい、わい。

お靜　あれ！（大藏、また蹴らうとするを、お靜、引きとめる。）
お富　（かけ寄りて）爺さん、どうしたのぞい。
太郎吉　いや、お富、おれは何も惡いことはせぬ――心配するな。
お富　惡いことはせぬけれど、この樣に先生が御立腹の體は？
太郎吉　この樣にわし等が耻かしめを受けるのは、外へ出たらいつものこと。
お富　それでも、お孃樣が御坐らつしやるのに――
太郎吉　いや、お孃さまはお孃さま、先生は先生。
お富　お孃さま（と、少し出て）あなた樣にはいつも〳〵お世話になりまして――
太郎吉　しいッ！――お世話になりましては濟まぬこと。この樣なものがふたりも來ては、先生のお目通りを穢すばかり。さア、立てろい。（と、自分も立ちかける。）
大藏　早く下がり居れ！（また、向はうとする。）
お靜　（大藏を引きとめて）太郎吉さんには何の罪も罰も御坐いませんものを――どうか、私に面じてお許し下さいまし。（太郎吉に）太郎吉さん、お富さんも早くお歸りなさいまし。
太郎吉　お情けで御坐ります。
お富　ありがたう御坐ります。（太郎吉、お富、衣物の塵を拂つて、下手へ退場。）
大藏　お靜、お前とわしとは親獨り、子獨り！

お靜　お父さま！（と、二人相抱く見えにて、幕。）

中の幕

第一　穢多屋敷門前の場

（立派な練屏をめぐらした屋敷の外構へ。舞臺中央に、大きな四足門、三升形、破風造り、檜の厚板葺き、定紋つきの棟。締つて居る戸びらは、玉木理(たまもく)一枚板のはめ込み。門の左右に、くゞり戸、左のくゞりだけ、明いて居る。下手寄りに、井戸あり、はね釣瓶、そばに柳の古木一もと。時は夕方。門前に太郎吉、倒れた福松を押へて居る。）

福松　父さん、放(はな)して呉れ。

太郎吉　いゝや、放さぬ。

福松　放して呉れ。

太郎吉　放さぬ――放さぬ。

福松　父さん、今に追つ手が來るから、放して呉れ。

太郎吉　いゝや、巡査が來るなら幸ひだ。お前が本統に改心したのなら、尋常に白狀して出い。

福松　父さん、放して呉れ。

太郎吉　尋常に白狀して出て呉れろい。
福松　白狀して出りやア、父さん、もう、二度と娑婆へは出られねいんだ。改心して歸つて來たからは、思ふ通りにせにやならん。
太郎吉　いゝや、福松、たとへ娑婆へは出られんでも、お前が監獄に這入つて、生きて居つて呉れさへすれば、お前とおれのいのちがある間は、何遍でも會ふことは出來よといふもの、よく聽いて呉れよ、福、たゞさへ穢多、非人、かつたゐ、乞食と、世間からはあらゆる惡名を以つて呼ばれて居るのに、その上斬り取り、强盜――これ、惡業に惡業を重ねようものなら、たとへこの樣な紫檀や黑檀の家を建てゝも、わし等の仲間は、いつまでも。世間の人の仲間入りをすることは出來ぬぢやないかい？
福松　えゝ、やかましい！　世間、世間と云ふが、父さん、穢多が社會の人になるのア、犬から狼に變るばかりだ。犬ツころア、どこにころがつて居ようが、人の害にやアならねい。社會の狼と來ちやア人喰ひだ、女喰ひだ、詐僞師、騙り、かツさらひだ。くすめた金で家倉を建て、着物を飾り、紳士で御座る、眞人間で御座ると、うは邊ばかりやア立派に見せてやがるが、どいつもこいつも心ア畜生――すること、爲すことに、一つとして人情らしいものア無い。其上、奴等の强慾非道を隱す爲めに、少しの犯罪でも見つけ出しやア、おれ達の弱みにつけ込んで、それを責め立てやがる。そりやア、乞食をするものもあらう、明巣ねらひもあらう。然し、然し父さん、お前も知つてる通

り、百人に一人位のこそ〳〵泥棒があるからつて、この明治の世に、新平民がみな人間で無いといふ法律アどこにある？　おりやアそれが殘念で、こんな惡黨になつたんだ、おれを大泥棒と云やア社會の奴等は天下の掟を破る謀反人だい！

太郎吉　尤もだ――尤もだ！（と、涙を拂ひながら）自分の力で自分の屋敷を建てゝ、人の世話にも、お前の世話にもなつて居ないのに、この樣に世間から相手にされず、卑しめられ、馬鹿にされ、ぶたれたり、蹴られたり――何の爲めにこの婆婆に生れて來たのか？――酷い世界にお前を生みつけたのは可愛相だが、また、お前を生んだこの親の心も察して呉れろい。お前が尋常の家に生れて、お靜さまがわしの娘なら、何の苦情も起らないで話は奇麗に纒まつたであらうし、またお前も自棄も起さんで濟んだものを。

福松　えゝ、くどい！　どんなに老いの繰り言を云つたとて、穢多の血すぢやア拔けやアしねい。改心して、社會に對する恨みを忘れてしまうからは、無理にも、お靜さまと一緒に、北海道なり、外國へなり高飛びして、またと再びこの國の奴等にやア顏は合はさねいつもり。死ぬのアいつでも死ねるから、おりやア百までも生きていんだ。おれのいのちを朝晩つないで呉れるお靜さま、一つにならにやア、おりやア、とても、長い間の辛抱は出來めい。樂しいこともあつて呉れにやア、この苦しい世界は人間の生きてるところぢやアなからう。父さんにやア苦勞ばかりさして濟まねいが、許して下され。お前にやアお前の拵らへた財産がある。おりやアこれから腕一本で稼ぐんだから、

かげながら別れに來たんだ。見つかつたのア、却つてお前の歎きを増すばかり。放して呉れ、父さん、繩にかゝりやア、もう、いのちやァねいんだ。

太郎吉　お前がさう云ふ氣なら、それでわしも得心するけれど、まア、うちへ這入つて呉れ。——この村へ移つて來てから、折角、骨を折つて、人情の熱くなるやうにと、印度天竺、暖國の唐木を取り寄せ、紫檀や黑檀の柱をあしらひ、この家屋敷を拵へても、世間には、獨りとして、訪ねて來て呉れるものはないのに、わしの子のお前までが、自棄になつてからは、まだ這入つて來たことはないではないかい？

福松　おれの犯した大罪が人にまでも及ぶときやア、社會に對する新平民全體の謀反をする時だらう——仲間の不平と意氣込みとア、今ぢやア、皆、おれ獨りの身に引き受けてるんだ。たゞせへ世の狼連れに踏み付けられて居る父さんに、この上、おれの犯罪の嫌疑を懸けちやア濟まねいから、なア。

太郎吉　それだけの心がけがあつたので、今、うちへ這入つて隱れて居つても、こゝへ探しに來るものはあろまい。早くお孃さまにも來て貰うて、得心して貰ひましよう。——さア、一緒に這入つて呉れろい。

（太郎吉、無理に福松を引いて、明いて居るくゞり戸を這入り、その戸を締める。下手よりお靜、たすき掛け手拭を姉さん被りにして、兩手に手桶を提げて、登場。井戸のそばに行き、無言にて、水を汲んで居る。武田

秀雄、下手より、驅け來たり、お靜を見て止まる。）

秀雄　おお、お孃さん！（と、あたりを見まはす。）

お靜　武田さんで御座いますか？（と、たすきを外しかける。）

秀雄　福松は通りませんでしたか？

お靜　私は只今水汲みにまゐりましたので、一向存じませんで御座います。

秀雄　お靜さん。（と、そばに寄りて）福松が監獄を脱けて歸つて來ました。今度繩に懸りやア、直ぐ死刑に定つて居ります。死んでしまへば、お靜さん、もう、跡に何の心配も御座いますまい？　どうです、日頃の私の心をその水の樣に汲んで、先生のお言葉通りになつて下さいましよう？

お靜　………………

秀雄　えゝ、お靜さん。

お靜　………………

秀雄　お孃さん。――この井戸は柳の井戸と申して、昔から、淸潔（せいけつ）な水が湧き出るので有名なので御座いましたが、こんな大きな非人小屋が出來てからは、村のものは獨りとして汲みにまゐりませんのに、あなたばかりが、いつも變らず、出て來られますのは、福松の可愛い心を汲みに來られるのも同樣――そのお志はお察し申します。然し、福松は穢多――と申すと、またお氣に障りましょうが――强盜、殺人、破獄、あらゆる罪惡を犯す男で御座います。あんな者の爲めに、いつまでも、

ちいさい時の約束を守つて居るのは、つまらないぢやア御座いませんか？

お靜　不斷からのお言葉では御座いますが、私には私の考へが御座いますので、何も御心配には及びません。そんなことよりも、あなたは只今お役目がら、あの惡人をお召し取りなさい。

秀雄　おお、わたくし事より公務が肝心――このうちへ這入つたに相違ない。

（外の巡査三名、登場。）

巡査一　部長どの、福松は確かにこゝへ這入りました。

巡査二　正面から踏ん込むことは出來ますまいから――

秀雄　さア、裏口へまはらう――來い。

（巡査一同、上手へ退場。左のくゞり戶を明けて、穢多二名、登場。お靜の兩手に手桶を提げて行からとするを、左右より止める。）

穢多一　お孃さま、待つて下さろ。

穢多二　鳥渡待つて下さろ。

お靜　何御用で御座います？

穢多一　用とは、鳥渡來て下さろ。

穢多二　うちへ這入つて下さろ。

お靜　そんな用事は御座いません。

穢多一　あるから、來て下さろい。

穢多二　こゝのおやぢ様の頼みで御座ります。

お靜　あの太郎吉さんの頼みなら、私のうちへ來て云ふがよい。——さう云つて貰ひましよう。（と、行きかける。）

穢多一　まア、さう云はつしやらいで——

穢多二　まア、這入つて下さろい。

（兩人、お靜をとめる。水、桶からこぼれる。）

お靜　水がこぼれます——何をするんです？

穢多一　厭なら、無理にも——

穢多二　引取ろまへらア。

お靜　（手桶をおろし、身構へをして）さア、取るなら取つて御覧なさい！

穢多一、二　えゝ、止むを得ねい！

（穢多兩人）左右よりお靜の手を取る。お靜、之を拂ふ。また寄るを、柔術の手で取つて投げる。福松、無言にてくゞり戸より登場、うしろからお靜を抱き止める。）

お靜　（返り見て）おお、福松さん！　放して下さい！　放して下さい！　あなたは、これまで、私にこんな亂暴をしたことは御座いませんに——私の心も知らいで、この侮辱！

福松　いや、決して手荒いことは――たゞあなたにお願があるばかりに、歸つて來たので御座ります。御心配にやア及びません。

お靜　いえ、放して下さい！　放して下さい！

（お靜、泣きもがく。福松並に穢多兩人、いそいでお靜を運ぶ。お靜、門内に運び入れられる時、大藏、登場。）

大藏　お靜、お靜！

お靜　おお、お父さま！

大藏　お靜！

（お靜の姿、見えずなり、戸は堅く締まる。）

お靜の聲　（奥より）お父さま！

大藏　お靜！

お靜の聲　（奥より）お父さま！

大藏　お靜！

お靜の聲　（奥より）お父さま！

大藏　お靜！

（お靜の聲、段々聽えずなる。大藏、門前を行きつもどりつして、もがく。棄てゝある手桶を見て、之を『えゝッ！』と力一杯に蹴飛ばす。水、こぼれる。また、頻りに本門並にくゞり戸の戸びらを押しつ、なぐりつ

して、殘念のこなし。この時、秀雄、外三名の巡査、上手より登場。）

秀雄　おお、先生！

大藏　これ、武田、今、福松がお靜を手籠めにして這入つたわい！　お前に對する娘の操が破れてしまう、わい！

秀雄　こりや、かうしては居られん！（巡査に）さア、今一方の裏口からだ――來い！

（巡査三名、下手の塀について、退場。大藏、獨り殘りて、氣をもむこなし。そのうち、道具まはる。）

第二　穢多屋敷佛間の場

（舞臺、すべて善美を盡した椽付きの座敷の體。柱や鴨居など、紫檀に黒檀の唐木細工。中央に、厨子あり、兩びらき、白檀の漆塗り、酒置き、中に、黄金の佛像を安置してある。その前面に、太郎吉、お富、福松、並にお靜。お靜は下を向いて泣いて居ると、福松は、その面前を二三步引きさがつて、平伏して居る。時は前場の續き。）

太郎吉　お孃さま、この屋敷へ來て下さりましたのは、勿體なう存じます。

お靜　私が來たのでは御座いません、無理に運ばれて來たのです。私をこゝまで連れて來て、あなた方はどうするつもりです？

太郎吉　どうするのでも御座りませぬ。一つには、まだお見せ申したことが御座りませぬので、この

お厨子（と、指して）を見て貰ひたいので御座ります。お像は金むくの釋迦如來。夫婦、親子の人情が末長く冷たうならぬ祈願の爲め、いつも暖いと云ふ天竺から、わざ〳〵唐木を取り寄せて、この佛間は私一人の力と丹誠――決して悴の朽れ金は、一厘一毛もつぎ込んだのでは御座りませぬ。

お富　この屋敷とても、隅々まで、福松が惡黨にならぬうちに出來たもの――少しも世間から憎まれる譯は御座りませぬ。

お靜　然し、なぜ、この樣なかどわかし同前のことをするんです？

太郎吉　かどわかしでは御座りませぬ、外にまだお願ひが御座りますので――

お靜　何と云つても、私はこゝに居ることは出來ません。――父は神道の熱心家で御座いますから、どんな立派な寶物でも、佛像などには手も觸れさしません。

太郎吉　佛像を私達の身分になぞらへての御立腹、何とも申し譯は御座りませぬ。

お富　實は、お孃さま、うちの爺さんが折り入つてお頼み申したいことが御座りますので、それでお呼び申したので御座ります。

お靜　頼みがあるなら、私の方へ來たがよい。――弱い者とあなどつて、力づくの無謀な仕かた！

太郎吉　それは誠に申し譯が御座りませぬが、私の家倉に代へても、私のいのちに代へても、一つお願ひが御座りますので――

お富　爺さんもそればかりを心配して、毎日、毎晩、心のやすまる寺は御座りませぬ。どうぞ、お孃

さま、お察し下さろ。

お靜　それは私も存じて居ないことは御座いませんが、あまりと云へば、女の身を――こゝへ連れて來られては、現在、今も見て居た上は、父の不興が增すばかり。もう、二度と再びあなた方のお爲めを計らうことは出來ません。

太郎吉　さう云はしやつては、お情けなう御座ります。手荒いことは致しませぬゆゑ、どうぞ暫く――

お富　どうぞ暫くお氣を靜めて下さろ。お願ひと申すは、外の事では御座りませぬ――皆さまのお憎しみに當るあの福松（その方を見て）根からの惡黨では御座りませぬので――

お靜　それは私も承知して居りますから、今度こそお目にかゝり、まことの道理に照らして、ふたりの行きがかりを說き明し、これまでの緣と諦らめて貰つて、昔は昔、今は今――若し人の魂を昔の思ひ出とすれば、今といふからだは、ほんの、目の前を移り行く水鏡の影で御座います。變らぬものは心ならば、この世ばかりのからだに、何の未練が殘りましよう？　これにお氣が付かれたなら、一たび犯した罪は罪として、尋常にお上のさばきを受けるやう、お勸めしたいので御座います。

太郎吉　そのお志はありがたう存じますが、それに就きまして、御相談申し上げたいのは、先生が前からのお約束――それが違うたのが元で、自棄を起し、あんな惡業をする樣になつたので御座りますので――先刻御覽の通り、前非を悔いて改心致しました以上は、お孃さまさへ御得心なら、よそへお方づきになる代りに、元のお約束通り、福松と一緒になつてやつて下さりませ。お願ひで御座

ります。

お富　お孃さま、私も一緒にお願ひ申します。

お靜　お願ひでは御座いますが、不斷のお世話とは違つて、これは私獨りの考へでは自由にならぬ話――お斷りするより外は御座いません。

太郎吉　そりや、どうあつても？

お富　この樣にお願ひ申しても？

お靜　はい、お斷りするより外は御座いません。――どうせ、どこへも方づかないと決心して居りますので、私獨りの身なら、只今、福松さんと斬りちがへて、御一緒に死んでしまつてもかまひませんが、父は御存じの通り潔癖が御座いますので、血すぢのことなど（三人、身振ひする。）やかましく申しますし、近頃は、また、老病で床に這入つた切り、萬事の世話はみな私の手ばかり。獨りの親に、獨りの子――どうにもすることは出來ません。

太郎吉　ああ、もう、浮き世がよく〳〵厭になつた！　折角、悴が改心しても、この話が纒まらねば、矢ッ張り元の杢阿彌――何の甲斐のない劫ざらし！

お富　爺さん、情けないことぢや、なア！　（太郎吉、お富涙を拭ふ。）

太郎吉　卑しい身分を忘れて、人並みのつき合ひをしようと、わしらの素性を隠してまで骨を折り、この樣な知るべもない村に、でかい屋敷を建てたのは、先生の申しやる通り、

ぢや元の古い友達には離れてしまひ、また、世間の人には卑しまれ、今更ら何の面目があらう？　どこへ向いても相手なし――犬ツころ一匹、尋ねて來たことはない、この年月！　佛さまも、わしらを見限つて、御利益はさづけてくらツしやらぬのであらう。ああ、わしが心を籠めて造つたこの家屋敷を燒き棄てゝ、お富、もう、その熱い火のお情けに往生する方がよい、わい！

お富　御尤もで御座ります。その燒ける火をお不動さんと見て、一緒に往生致しましよう。――なんまみだぶ、なんまみだぶ。

太郎吉　なんまみだぶ、なんまみだぶ。

（佛前の香爐、烟を擧げて居る。お靜、この有樣を見て、痛く悲しみのこなし。福松、首をもたげて、歎願の體。）

福松　お靜さま、只今までのお言葉は一々御尤もで御座りますが、今一度、私からお願ひ申します。――私はこれまで公けにこそ强盜は致せ、這入つたところは、强慾非道な家ばかりで御座りますから、世間の人とは違つて、かげにまはつて何の恥づるところも御座りませぬ。手に振る斧が大きいだけ、社會に隱れた不義理と不人情、これをあばいて、私が懲らしめる覺悟も、從つて大きい譯で御座ります。社會の人はうは邊をつくろつて、成る程、穢多の樣にやアきたなく御座りませぬが、その裏は全く慾と罪惡とのかたまり。――潔白なのは、あなたばかりと存じましても、そのお心がたゞ變らぬだけで、ふたりは滿足出來ましようか？　親が私共をこの世に生んだのは、死んで土に

なれと云ふ譯ぢやア御座りますまい？　生きるだけは生き延びて、樂しい夢を實際に現はしましよう。心には手もありませぬ、足も御座りませぬ、あなたは私の手で御座ります、足で御座ります。若し魂が形のあるものなら、私の魂は、もう、あなたのお姿になつて居ります。お靜さま、私はあなたの爲めにこれまで外の婦人は存じませぬ！

お靜　はア――！　（と、涙にむせびて、直ぐ之を制する。）

福松　私は、これまで片腕とも思つて居りました、虎吉を殺したのを證據にして、全く改心致しました――御病體の先生は、如何樣にも、うちの親共が跡を見ておあげ申しましようから、どうぞ、以前の約束を元に返して下さりまして、私と一緒に北海道なり、外國へなり、一先づ逃げて下さりませ。お願ひで御座ります。

お靜　福松さん、それは無理といふもので御座います。あの約束は私獨りで定めたものでもなし、また私が破つたのでも御座いません。

福松　それは充分承知で御座りますが、それをたツてもお願ひ申しますのは、どうぞ、お察し下さりませ。

お靜　たとへどこまでお察し申しても、私のからだは父の物――自分獨りの自由にはまゐりません。

福松　それぢやア、先生のお指圖通り、あの武田風情に行かれますか？

お靜　それもあなたに濟まぬゆゑ――父の言葉では反きますが――一生獨りで暮すつもり。

福松　どうせ、お父さまにお反きなさりますなら、元のお心になつて下さりませ。

お靜　さア、それは――

福松　お靜さま、戀と穢多とは別物で御座りますか?

お靜　…………

福松　穢多と戀とは別物で御座りますか?

お靜　…………

福松　お孃さま、私の心をこの非道な娑婆(しやば)から救ふものは、あなたばかりで御座ります　あなたのお心一つで御座ります。私が强盗なら、社會も大泥棒――私もこの樣な娑婆にいのちを棄てるのは惜しう御座ります。どこぞ、罪も穢れもないところがあれば、どうぞ、お孃さま――あなたより外に。私の心を休める安樂淨土は御座りませぬ。

お靜　お志はお察し申します。心と心は、いつも穢れぬ、柳が井戸の淸水(しみづ)で御座います、あなたも汲んで下さるなら、二つの影は一つに映りましよう。――然し、犯した罪は犯した罪。あなたには、神の許さぬ行ひが御座ります。せめてこの世の禊に、さア、一切の罪業を自白して、お上の繩目におかゝりなさいませ。

福松　繩目にかゝる位なら、牢破りをしてまで出て來たりは致しませぬ。――お孃さま、どうぞ、一緒に逃げて下さりませ。

お靜　今申すことがお分りにならねば、もう、私は用が御座いません。（と、立ちあがる。）
太郎吉　まア〳〵、待つて下さりませ。
（お靜、歸らうとするを、太郎吉、とめる。）
お靜　放して下さい！（と、ふり切つて、庭に下りる。）
太郎吉　お孃さま、お腹立ちは御尤もで御座りますが、そこをよく聽き分けて下さりませ。（と、おりてお靜をとめる。）
お富　お孃さま！（と、立ちあがる。）
お靜　放して下さい！（お靜、ふり切つて、逃げる。）
太郎吉　ああ、これがこの世のお別れで御座ります。
（太郎吉、死ぬといふ決心で、お靜の跡を拜む。この時、四方より『ばア〳〵、ばア〳〵』の合圖きこえる。）
福松　えゝ、まゝよ！（と、福松、立つて、奥より大斧を提げて來る。秀雄、外三名の巡査、登場。）
秀雄　福松、お孃さまを手籠めとア、先生に對して濟むまいが、なア？
福松　手籠めにやアしねい、この靑二才めが！
秀雄　それぢやア、先づ、お孃さまを出すがいい。
福松　お孃さまの心アおれの物――貴樣などにやア、勿體ねい、わい。
秀雄　淸水の樣に潔白な婦人を捕へ、穢しちやア濟むまいぞ。

福松　元から澄んだ戀と戀、散りツ葉一つも穢れアねいんだ。
秀雄　貴樣の脈から調べて見ろ。
福松　心ア恥ぢねい天下の穢多だア。
秀雄　それ！（と立ちまはりになる。）
太郎吉　これ、福、往生して吳れろい。
お富　尋常に繩にかゝろい。
太郎吉　おれも死ぬゆゑ、お前も覺悟しろい。
お富　福松、覺悟するがよい。
福松　こんなものにやア、吳れるいのちやアねいんだ。
（太郎吉、お富、左右よりからまる。福松、その間にあつて、秀雄等をあしらふ。そのうち、道具まはる。）

第三　穢多座敷門前の場

（舞臺、再び第一場に返る。時は前場のつゞき。大藏、石油入りの罐二個を持ち來たり、その一個を本門の戸びらにかけて、火を付け、力一杯、之を押して居る。手には、一本の御幣。燃えるに從つて、貫抜きが折れて戸が開く。お靜、奧よりかけ來たり、行かうとする。帶は半ば解けて居る。）
大藏　お靜！

お靜　おお！　お父さま！

（お靜、あと戻りして、父に抱きつかうとする。）

大藏　えゝ、穢らはしい、わい！　（と、振り拂ふ。）

お靜　そりや、また、お父さま――

大藏　どうしたもないものだ！　お前とわしとは、親獨り、子獨り。その心も知らないで、兼て申し聽けた言葉に反き、こゝの井戸へは近寄るなと申すに、毎日、毎日、水汲みに來るのは、この村中でお前ばかりだ。

お靜　それはさうでも御座いましようが、一番清い水ですものを――

大藏　人非人が住んで居るのが分らないか？

お靜　何がそばに住みましようとも、清い水は清い水――親子の情の樣に、絕えず湧き出て來るので御座います。

大藏　それはわしの胸の裏だ。遺恨の涙が萬斛も湧いて居ようが、一滴もこの老眼には出て來ない程殘念だわい！――えゝ、お前のからだが廢つてしまつたぢやないか？

お靜　いゝえ、私はいつもこの清水、決して穢れて居りませぬ。

大藏　いゝや、穢れたに相違ない！

お靜　いゝえ、穢れは致しませぬ！

大藏　あの福松が無事に歸さう筈はない。お前は親をいつはるまでになつたのか？ えゝ！ 勘當だ！
勝手にしろ！

お靜　そりや、お父さま、神かけてお誓ひ申します！（と、抱きつかうとする。）

大藏　（押しのけて）家の恥辱になつた、わい！

お靜　ああ、情けない！（と、お靜、倒れる。その前から立ち聽きして居た村人二名、登場。）

村人一　先生、何事で御座ります？

村人二　お孃さま、どうなされました？（この時、奥より、福松、飛び出て來る。村人、驚いて、尻餅をつく。）

福松　おお！ お孃さま！（と、踏みとまらうとして、つまづき倒れる。このとたん、手に持つた大斧を落す。秀雄、つゞいて外の巡査、奥より登場。福松をとり卷く。少し立ちまはりあり、福松、斧を拾つて上手へ這入る。巡査等、また之を追ふて退場。）

大藏　たとへ福松は逃げようとも、一生の恨みはこの非人小屋だ。――村の人達。

村人一、二　へい〱。

大藏　娘は親を僞る不淨物――どツかの塵芥溜めへでもうツちやつて下されい。（と、大藏、殘りの石油罐を提げて、奥へ這入る。）

お靜　ちえ！（と、泣きもだえる。）

村人一　お孃さま、お起きなさりませ。先生は御癇癪が御座らツしやるので、一時はかツとおなりな

されますが、直きにまたお直りになりましよう——御心配には及びませぬ。

村人二　どこもお怪我は御座りませぬか？

（村人二人、左右よりお靜を起し、袖の塵などをはたいてやる。お靜、袖を以つて涙を拭き、自分の帶の解けかゝつて居るのに氣がつく。）

お靜　おや、私の風は！（と、赤面して、帶を直す。）

村人一　まア、お宅へ歸つてお出でなされますれば、そのうち、先生のお心はお直りなされましよう。

村人二　さうなさるがよろしう御座ります。

お靜　ありがたう御座います。父の癇癖にも困つてしまひますので——

村人一　御尤もで御座ります。

村人二　手桶の水がこぼれて居ります。どれ、わしが汲んであげましよう。（村人二、井戸に行つて、一方の手桶に水を汲む。）

お靜　どうも、お世話さまで御座います。

村人一　折角、清い水で御座りますのに、この屋敷が出來ましたので——

お靜　左樣で御座いますか？（村人二、水の這入つた手桶を持つて來る。）

村人二　さア、これでお歸りなされませ。

お靜　お世話さまで御座いました——ありがたう御座います。（村人、上手へよける。お靜、兩手に手桶を

提げて、下手へ退場。

村人一　先生の癇癖にも困るであらうが、新平强盜の樣な者に心を立てる、お靜さまも物好きぢやないか？

村人二　惡い子ほど可愛いとは、色男にしても同じであらう。思案の外とは、よく云うたものぢや。

村人一　それはさうと、先生は、門を燒いたばかりでなく、石油の鑵を以つて這入らしやつたは、この屋敷をも燒くつもりであらう。

村人二　燒き打ちのかゝり合ひは眞ッ平ぢや。

村人一、二　さうぢや〳〵。（村人二名、退場）お富、奥より登場。）

お富　火事！　火事！　誰れぞ助けて下さろ！　火事！　火事！

（太郎吉、奥より登場。）

太郎吉　お富、どの樣にわめいたとて、助けに來て呉れるものはない。先生の御立腹も御尤も――おれは、もう、世の中に望みはない。

お富　家が燒けたら、尙更らで御座ろ？

太郎吉　燒けるを幸ひ、一緒に亡んでしまふのぢや。

お富　それが定で御座りますか？

太郎吉　おれは、もう、覺悟した、わい。

お富　ああ、情けないことぢや、なア！

（お富、泣き倒れる。太郎吉、そばに寄つて、涙を拭く。）

太郎吉　ああ、かうして居つては、限りがない。これまでお世話になつたのはお孃さまばかり。かげながら、お禮を云はう。

お富　さうぢや〳〵。わし等が死ぬなら、お孃さまに一言お禮を云はねば濟まぬ。（と、身をつくろふ）

太郎吉　（下手を向きて）申し、お孃さま、私共はあなた樣を神とも佛とも賴んで居りました。お禮はここから申し上げます。このふたりは、先生の火に燒かれて、あの世へまゐりましても、決してあなた樣をお恨み申しませぬ。

お富　お孃さま、これがお別れで御座ります。

（兩人、手を合はして、『なんまみだぶ、なんまみだぶ』と云ふ。この時、奧にて、軒などの燃え倒れる音がする。兩人、きツとなる。）

太郎吉　さア、あの火に燒かれるなら、わし等の身も淸淨潔白――

お富　極樂淨土へ行けるので御座りましよう。（と、兩人、手を取つて、奧を見込む。この見えにて、幕。）

詰の幕

穢多屋敷門前お靜自殺の場

（舞臺面、前幕と同じ穢多屋敷の門前。本門の戸びらは明いて、奥には建物の焼け殘り、なほ火を吐いて居る。時は夜。門前に、村の若者並に老人、手に手に提燈。若者一、二、柳の枝を以つて擊劍の眞似をして居る。）

若者一　お面！

若者二　お小手（こて）！

若者一　お面！

若者二　お小手！

若者一　まだ〳〵。

若者二　そりや、お胴一本！

若者一　お小手だ！

若者二　あ、痛たゝ！

若者一　どうした〳〵？

若者二　どうしたもねいもんだ、したたまおれの腕をなぐりやアがつたぞ。

若者一　失敬した〳〵。（と、さすつてやる。）

若者二　いてい〳〵、こんなに脹れて來たわい。

若者三　なアに、撃劍（げつけん）つかひは少し位いていことは辛抱するんだ。わし等の（と、大藏の口調を眞似て）若い時にやア、腕は瘤だらけであつたぞ。

若者四　いよう、本野大藏先生！

若者五　勝負あり！　身共が審判をしてつかはさう。――福松（と、若者一に向き）貴樣はこれまでわしの一番弟子であつたが、その素性が人非人の穢多であるに依つて――

若者一　馬鹿にしてらア。

若者五　まア、默つて居れよ。――その素性が人非人の穢多であるに依つて、以後、師弟の關係はないと思へ。

若者一　なアる程。

若者五　次ぎに、武田秀雄。（と、若者二に向く。）

若者二　はツ。はアツ。と、わざと堅くるしい禮をする。）

若者四　巡査部長、武田秀雄か？

若者五　默つて居やアがれ。――貴樣はこれよりわしの一番弟子、娘お靜を遣はすぞ。

見物一同　ヒヤ〳〵――は、は、は！（と、笑ふ。）

若者一　火事も濟んだし、褒賞授與式も濟んだ。さア、歸らう〳〵。

若者一同　歸らう〳〵。

（若者、三々五々、下手へ退場。老人組のみ殘る。入れ違つて、序幕の撮影者、寫眞機を以つて登場。）

撮影者　もう、火事は濟みましたか？

老人一　はあ――これで穢多屋敷も退じられてしまうた、わい。

老人二　まア〳〵、これでこの村も元の通り奇麗になつた。柳の井戸もこれから汲み手が澤山出來るであらう。

老人三　水もなか〳〵ありがたいものぢやが、火といふものも結構ぢや。穢れた家や人間が、みんな跡方もなく燒けてしまうた。

老人四　これでおら達や淸々した、わい。

撮影者　それでは、こゝの人達は皆燒け死んだのですか？

老人四　左樣々々。然し、まだ一人大泥棒が殘つて居ります。

撮影者　福松といふ者です、な？

老人　その福松が、牢破りをして、歸つて來ましたので、巡査さん達は今追ひに行て居ります。

撮影者　その追つかける所を寫したいものですが――（撮影者、頻りに機械を据ゑつけて居る。この時、石が飛んで來る。）

老人一　ひやア！　石が飛んで來たぞ。

老人二　もう、この門の中には、人間の畜生が居る筈はない。

老人三　燒け出されの狸か狐の仕わざでがなあらう。

老人四　油斷は出來ぬ。（石、また飛んで來る。）

老人一　ひやア！　また飛んで來たぞ。

皆々　あぶない〳〵。

（村人、すべて退場。撮影者、井戸側の後ろに隱れる。提燈はなくなり、燃えて居た火も烟ばかり、舞臺、おのづから薄暗くなる。門内より福松、假裝、頰かぶりにて、登場。村人の方に向つて、石を拾つて、投げる。）

福松　忌々しい奴等だ！　（また、石を拾つて、投げる。大藏、下手より登場。兩人、顏をのぞき合ふ。）

福松　おお、先生――　（と、云つて、口を塞ぎ、上手へ行きかける。）

大藏　誰れだ？

福松　（跡戻りして、譯を造り）村の者で御座ります。

大藏　まア、この樣を見ろ。朽り金のあるにまかせて、贅澤三昧の穢多屋敷――またゝく間に燒けてしまうたわい。

福松　成る程、見事に燒けてしまつたもので御座ります。立派な玄關も跡方がなくなり、黃金の佛さまも燒けてしまひました――紫檀の柱や白檀の佛壇も、この冷たい娑婆を忌がつて、多分、元のあつたかい國へ消えて行つたので御座りましよう。――して、これは、どうして火が付いたので御座ります？

大藏　こんな非人小屋があるのは、この村の恥辱といふもの。村の爲め、世間の爲めに、わしが焼き拂つたのだ。

福松　え丶、先生が――いや、あなた様がお焼き拂ひになつたので御座りますか？

大藏　若い衆、喜んで呉れ、わしが御幣を振つて焼き拂つたのだ。

福松　して、村の消防組はまゐりましたので御座りましようか？

大藏　どうして、どうして！　消防組が救ひに來るどころか、この屋敷の焼けるのは、誰れ彼れの區別はない、みな待ち望んで居たのだ。

福松　左樣で御座りますか？　それでは、警察からは？

大藏　それも、あの福松が、牢破りをして、けふ歸つて來たので、その方へ總出のさわぎだ――人外の子は矢ツ張り人外、もう、今に繩にかゝるであらう。

福松　然し、こゝの倅が獨り、勝手で惡黨になつて居りましても、この家の親共はたゞ素性がきたないと云はれるばかり――世間を恨みこそすれ、何も世間から恨まれることは御座りますまい。

大藏　恨む、恨まぬは別な話だ。誰れが非人や乞食を相手にしよう？　こゝの畜生共もその身分を悟つたのだ、ふたりとも身を火の中に投げて、現在、わしの祈つて居る目の前で、死んでしまうた、わい。

福松　え丶！　それぢやア、ふたりは焼け死んだのか！――先生！　誰れが私の兩親を殺したのです？

（と、頬かぶりを取る。）

大藏　おお、福松か？　お前の胸中の良心を殺したのは、お前だ。

福松　私の生みのふた親を殺したのは、どなたです？

大藏　それは、世間に代つて、罪潔めの爲めに、わしが殺した。

福松　えゝッ、何をぬかす。この老いぼれ翁めッ！（と、福松、懐に隱して居た長劍を出し、大藏を斬りさげる。大藏、倒れる。）おれの心も知らねいで、村人始め、ふざけた眞似をしやアがる！――武田の奴等を甘く暗まし、山へ逃げて這入つたは這入つたが、火の手を見ると心配で、まさかとア思ひながら歸つて見りやアこの通りだ。――家もなけりやア、ふた親も見えねい。外へ立ちのくところもなからうから、どこかの隅ででも泣いてるだらうと思つて居りやア（と、大藏に向いて）貴樣のやうな老いぼれに燒き殺されたんか！（と、大藏をゑぐる。）あまりと云やア殘忍非道、勝手氣儘な理窟を捏ねやアがつて、素直なものをいぢめ殺すとア、社會も社會だが、之を見のがす政府も政府だ。掟があらうが、法律があらうが、何の役にも立たねい世界？　道德、道德とさわいで居ても、それも口ばかりぢやア仕やうがねい。德義と法律のねい世ぢやア、生殺與奪ア自分で自分の權内だ。善惡生死は胸の裏――生みのふた親はなくならうが、おれにやア、胸中の良心は、生きてる限り、この段平に輝いて居らア。（と、長劍の血を拭く。お靜、提燈を以つて、下手より登場。人の居るのを見て立ち止る。）

お靜　どなた樣で御座いますか？

福松　お靜さま。

お靜　………………

福松　福松で御座ります。

お靜　えゝツ！（と、逃げかける。）

福松　お孃さま、待つて下さりませ。私のふた親も、家屋敷も、みな無くなつてしまひました。

お靜　えゝツ？（と、踏みとまりて）そりや、また、どうして？

福松　あなたのお父さまの爲めにです！

お靜　父が何を致しましたので御座います？

福松　先生がこの屋敷は勿論、ふた親をも燒き亡しましたぞ！

お靜　そりや、まことで御座いますか？

福松　この福松は泥棒こそ致せ、あなたに對してばかりは眞人間――決していつはりの心ア御座りませぬ。

お靜　さあ、こりや、情けないことになつた？――して、その證據は？

福松　只今御覽に入れるに先立ちまして、くどい樣では御座りますが、今一度お話し申します。――先刻申し上げましたお父さまをお世話さすものは亡くなりましたが、若し世話を受けようとしてもその受けるお方もまた亡くなりました上は、どうなさります？

お靜　…………

福松　世話をしようと云ふものも、世話を受けようとするものも、この世の人でなくなつた上は、どうして下さります？

お靜　…………

福松　あなたのお父さまも、私のふた親も、もう、冥途の闇路にある以上は、一緒になつて下さりますか？

お靜　それでは、父は、もう？

福松　私のふた親に、魂の繩を懸けに行かれたので御座りましよう。

お靜　それでは、父は？

福松　之を御覽なさりませ。

（福松、劍を以つて、大藏の死骸を指す。お靜、提燈をさし向け、之を見て、びツくり。）

お靜　ひえー！（と、倒れる。提燈の火、消える。）お父さま、まだお心は御座りますか？　お父さま、もう、お言葉は御座りませんか？　お父さま！　お父さま！

福松　お靜さま、いのちがないなら、社會の掟と同樣、いくら訴たへても、無益で御座ります。死んだものは木像も同樣で御座ります。世間の官吏や巡査どもが、いくらあせつたところで、あや釣り

だこの私の胸のうちに活きて居ります。あなたをお慕ひ申すのは、乃ち、いのちにいのちを重ねたいばかり。（腰をおろして）お靜さま、あなたのお父さまは私のふた親の敵、私はあなたのお父さまのかたき、恨みと恨みをさし引きますれば、殘るはあなたと私の戀ばかり。私はあなたの鳩で御座ります。飛べと仰しやれば飛びます、翔れとあれば翔ります。あなたと私との間には、もう、空氣の外に、何の隔ても御座りませぬ。お靜さま、御決心をして下さりませ――私の盛んであつた血は、葡萄酒の樣に、まだこのからだに泡立つて居ります。お父さまやふた親の跡を慕うて行つてしまへば、もう、ふたりは別々――泡立つ血しほは汲めませぬ。どうぞ、暫く、憎みと恨みばかりの殘るこの國を遠ざかつて、夢の國なり、うつゝの世なり、兎に角、一緒に、戀と樂しみに醉ふて暮す、ふたりの都を拵らへましよう。お靜さま、この胸には不思議な力が宿つて、私の身までも清めて呉れますから――

お靜　はア！

（お靜、泣き伏す。秀雄、外三名の巡査登場。）

秀雄　福松、御用！（秀雄、後ろから福松を抑へる。福松、秀雄を前方にはね返し、跡に引いて、劍をふり上る）

福松　さア、この心ア清淨潔白、天上天下は飛行自在だ！　取るなら、見事に取つて見ろい！

秀雄　強盜、破獄の穢多非人、先生までのいのち取り、罪惡ア貴樣の血にまでこびり付いて居ながらその身が潔白とア愚かなことだ！

福松　おれにやア、お靜さまの心の潔めが備つて居らア。――さア來い！（と、立ちまはりあり、トヾ福松、劍を落す。お靜、之を拾はうとして福松秀雄と三人からみの默劇になる。福松、劍を拾つたが、また秀雄にはたき落される。お靜、つひに之を拾ふ。）

お靜　福松さん、覺悟して下さりませ。ふたりの都へ先づ私が――あツ！（と、喉を突く。）

秀雄　お孃さま、早まりましたぞ！（と、止めにかゝる。）

福松　お靜さま、自殺とはお恨みで御座ります。あなたが月なら、私は小い星。私のいのちは、あなたの清い光に消えて行かねばなりませぬか？――消えるとは、死ぬることで御座りましよう？　あなたも飽くまで穢多といふ者を嫌つて、私に死ねといふので御座りますか？　お志は充分身に染み込みましても、私は戀の爲めに家を無くし、ふた親を無くし、子分を無くし、また强盜の譽れを無くなしました。この上、高い價を拂ふことは出來ませぬ。ああ、不思議の力は破れました！　これまで積つた不平と不滿、これは、寂しい世界の片隅で、矢ツ張り漏らすことに致します。

（この時、撮影者、出で來たり、例の寫眞機を向て、マグネシヤムを燃やす。）

お靜　えゝツ、お情けない！（と、見上げる。）

福松　お情けないとは、あなた樣！（と、恨みのこなし。）

巡査二名　（左右より）福松！（と、押へる。）

福松　えゝツ！（と、兩手に二名を投げる。）

秀雄　さア尋常に縄にかゝれ！（と、構へる。）

福松　なアに、元の破れかぶれの強盗だぞ！（と、向ふ。）

お靜　あッ！　あッ！（と、身づから喉をえぐる。）

（この模様よろしく、幕。）

神樂坂下

登場人物

山田眞藏（工學博士、某省高等官）
富子（博士の夫人）
宮內政治（博士の同僚）
山田忍（博士の弟、大學生）
高須重雄（某廳警視）
探偵二名・書生二名・その他

場所

神樂坂下の電車道

時間

午後十二時前後

（正面は神樂坂のうへの方、商店の軒々の電燈が闇を照らしてゐる。詩吟の聲で幕が明くと、坂下の舞臺中央に書生二名、一人は詩を吟じ、また一人はそれに調子を合せながら、上手へ通つて行く。上手から。一臺の人力車がさき引きをつけて驅けて來て、勢ひよく下手へ這る。下手から警視高須重雄、和服でステッキをつき、同じく和服の探偵甲乙二名を連れて登場。）

高須（時計を出して、光りに透して見て）もう十二時にならうとする。山田は、もう、來さうなものだ、ねえ。

探偵甲　へい、左樣で御座いやす、なア――今夜は、もう來ねいんかも知れやせん。

高須　なアに、あいつのことだから、一晩でも缺かしやアすまい。始末に終へない奴だ、下らないことを思ひつきアがつて、さ。――然し、おい、今も貴樣に話した通り、今晩のことはおれが高須警視といふ名義でやるんではない。獨りの友人が餘り不身持ちで、その結果、藝者買ひや女郎買ひでは面白くなくなり、地獄遊びも通り越して、自分が通行の婦人を引ッ張つて見るなどといふ徒らを始めたんだ。それを一部の社會ではうす／＼知つてるんで、若しその評判でも廣がつたらあの山田の官位と博士といふ名に對して困ると思ひ、おれが、友人の情として、こり／＼するくらゐにいぢめてやるんだから、貴樣にやアおれが高須重雄の一個人として賴むんだ。決して他言してはいかんぞ。その代り、別におれ一個としての賞與はする、さ。

探偵甲　いや、もう、よく分つてをりやす。

探偵乙　甘くぶつかりさへすりやア――御友人の爲めでげすから――。
高須　なアに取ツつかまへて、おどかしさへすりやアいいんだ。
探偵甲乙　わけア御坐いやせん。
（三人、から語りながら、ぶら〳〵と下手へ這入る。電車の音がきこえて後、上手から山田眞藏夫人富子並びに山田忍、富子はひさし髮、美人ではないが、顏かたちを充分によそひ、忍は女裝して島田髷のかづらをつけてゐる。）
富子　忍さん、よく似合つてよ。電車の中でも、誰れもあなたを男とは怪しまなかつた、わ。
忍　そりやア、そのくらゐの素養は不斷つけてゐます、さ。大學でハムレットの劇をやつた時、僕がオフエリヤに扮して、大喝采を博したのでも分りましよう？
富子　それでわたしもあなたに加勢を賴んだのよ。男と一緒では、この趣向が甘く行かないし、さうかと云つて、女ばかりで、若しうちの博士に行き合はないと、また歸りがこわいから――
忍　大丈夫です、僕が附いてるから。
富子　それでわたしも安心なの――それにしても、うちの博士が、丁度わたし達の趣向通り、あなたとわたしとを賤業婦とも、何とでも見て呉れて、わたし達の家までついと來るとよろしいが、初めから若しわたし、富子と分つてしまつたら、詰らないし、また博士に對し何の懲らしめにもなりませんね、ねえ。

忍　ねえさんも、それにやア、上品振つてたら、行けませんよ。（と、碎けた態度になり）旦那取り、とか淫賣とか、兎に角、下等な女に見られたけりやア、にイさんも直ぐ感づいてしまひます。然し（と、腕を組み）餘り下等でも川田工學博士の心は引けまいし（と、右を向き）餘り上品でも淫亂學者眞藏のお氣に召すまいし（と、左りを向き）少しやア斯う（と、女らしい品をしながら）『あなた、遊んでいらつしやい！』

富子　あら、まアそんな眞似（まね）は出來ません、わ。（と、笑ふ。）

忍　なアに、ねえさん、男がすると思ふからをかしいんです、女なら何でもない、さ。そこらの御神燈、酩酒屋の前へ行きやア、みんなやつてまさア。

富子　あなたも行つたことがあるの？

忍　ありますとも。

富子　厭な人、ねえ。

忍　それが厭ぢやア仕やうがない。――ぢやア、かうだ。（と、また品をしながら）『申し〳〵、どなた樣か存じませんが、餘り遲くなりまして、女ふたりでは心細う御坐いますから、どうぞそこまでお送り下さいまし。』

富子　そんなことをだら〳〵と云つてたんぢやアそれこそ直ぐ感づかれてしまう、わ。

忍　ぢやアどうしよう？（と、とぼけた困りかたを見せて）まア、まア、兎に角、僕が甘くやりますか

ら、ねえさんは、今夜の花役者であるだけ、いつもの樣につけ〳〵云はないで、さ、全體、ねえさんは不斷にイさんにつけつけ云ふから、にイさんも目の前ではおとなしくしてゐるが、そとで惡いことをやり出すのだから――まア、けふのお客さんの同情と物好き心を引くにやア、おとなしさうな物腰でついておいでなさいよ。

富子　大丈夫ですか？

忍　やア大丈夫とも、大丈夫！

（と、おほきく兩手を廣げて、兩足を踏ん張る。）

富子　そんな體裁ぢやア、女にはなれやアしない。

忍　さうで御坐んした、ねえ。（と、わざと女の眞似をする。）丸でお芝居だ。然しここは多少芝居がかつた聲で胡麻化さなけりやア、直ぐ地聲が出易いから、ねえ――

富子　誰れか來ましたよ。ふたアりだ、わ。（と、下手に注意する。）

忍　あれかも知れませんよ。あツちへ避けて、樣子を見ましよう。

（兩人、頻りに下手を振り返りながら、坂の方（奧）へ行く。下手から工學博士山田眞藏、うはそり鬚、和服の着流しで、同僚の宮內政治、三ツ四ツ年うへ、背廣の洋服で、少し急ぎながら登場。）

山田　あいつアちよつと素的らしい。

宮內　素的、素的！（と、兩人、舞臺中央に來たり、頻りに目で富子と忍との跡をつけてゐる。）

山田　おい、宮內、あれこそさツきの女の様な劍突くは喰はさないで、引ツかかるか分らないぞ。

宮內　そりやア、山田君の云ふ通り、さ。さツきの大膽な女にやア閉口、さ。よく顏をのぞいて見たら、蛙の様なつらをしていやがつて、つんけん〳〵ぬかして、さ、そツと手を握らうとしたら力強く振り拂ひ、追ツかけて行きやアずんずん澄まして逃げやがつた。

山田　おい、それどころか？　この方は向ふから氣がある様にこツちばかり見ているぞ

宮內　こいつア物になりさうだよ――而もこツちと數が等しくふたアりだ。

山田　おもしろいぞ――やつて來る、やつて來る！

宮內　向つて行かうか？（と、一歩を奥に進めようとする。）

山田　いいや待て、待て！（と、宮內の肩を攫んで）こいつア一つじらしてやらうよ。

宮內　それもよからう。

（兩人、くツつき寄つて下手寄りに行き、くすくす耳語する。富子と忍、その方に注意しながら上手寄りに出る。）

忍　ねえさん、あのざまを御覽なさい。僕等をじろじろ見て、僕等を追つかけて來ようか、どうかと相談してゐる。僕等と知らないで――馬鹿なにイさんだ。一方は役所でにイさんの一等下にゐる宮內政治だ。

富子　あんな工合にいつも女にからかつて行くんでしようか？

忍　さうでしようよ。

富子　わたし、情けない、わ？（と、泣き出しさうになる。）

忍　困つた兄貴だ、なア！ねえさん、ここは、向ふもふたアりだから、斯う申しましよう、わたくし供はふたアり切りの暮しですから、あなたがたさへお差し支へなくば、今からでも話しにいらつしやいツて。

富子…………（にが笑ひで頷く。）

（富子はそこに立つてゐると、忍ひとり下手寄りへ行く。山田、宮内、『來たきた』といふことなし。）

忍（女の聲色で）どちらへお越しになるお方かは存じませんが、わたくし供は餘り遲くなりまして、電車はまゐりませず、女ふたりが闇夜を歸つて行きますのがこわさにまごついてゐるもので御坐いますから、どうか、そこまでお送りを願ひたう存じます。

山田（ちよつと澄まして、また優しく）どこまでお歸りです？

忍　水道橋近處まで。

山田　水道橋はどこ？

忍　實は駿河臺の鈴木町で――

山田　鈴木町といふと、わたくし供もその御近所ですが――

忍　あの、工學博士の山田さんのおそばで御坐います。

富子　……………………………（上手で、横を向いて吹き出す。）

山田　ええツ！（びツくりしたが、そ知らぬ風で）は、はア、あの山田を御存じですか？

忍　はい、存じてゐます——口鬚（くちひげ）の斯う反りました（と、両手で自分の口を左右にはねて見せる。）

山田　（口鬚を押へ隠しながら）へえ——して、向ふのお方は？

忍　あれも一緒に住んでゐる姉で御坐います。わたくし共はたツたふたアり切りで御坐いますから——

山田　（こいつア甘いと云ふこなして）ふたり切りとは、おツ母さんもお父さんもおいでにならないんですか？

忍　はい、御坐いません、兄が獨り御坐いますが、高等官二等にまでもなつてゐるのに、夜遊びばかり致しまして、滅多（めつた）にうちで寝たことがないんですよ。（と、訴へる聲）

山田　そりやアよろしくありません、なア。（と、威たけ高になると）兎に角、お送りしてあげましよう。

忍　ありがたう御坐います——なんなら、おついでに、うちへお寄り下すつてお茶でもどうか——ちよツと御免下さいまし（と、富子のそばへ行き）ねえさん、大丈夫うまく行きますよ。

富子　ほんとに？（と、心配さうなこなし。）

忍　…………………（頷く）

山田　（宮内に向ひ）兄が高等官二等で、その妹等が僕を知つてるとア何物だらう？

宮内　なアに、いい加減なことを云つてるの、さ。女の高等にきまつてらア。僕等を實際の高等官と知つたら、驚いて『あら、さう?』なんてまぎらさア、ね。

山田　さうだらう、ねえ——僕アあツちをもちよツと取調べて見よう。

（と、山田は云つて、のそのそと富子の方へ行く。これと入れ代りに忍は宮内のそばへ來る。）

忍　では、どうかよろしくお願ひ致します。

宮内　あなたはいくつ?　（と、忍の肩を押さへる。）

忍　（押さへられた肩を引きもしないで）十九よ。（と、あまへたこなし。）

山田　（富子の手をじツと握り）あなたがたは鈴木町ですと?　（と、富子の顏をのぞく。）

富子　（手を握られたまま、持ち前と違つた聲で）はい、左樣で御坐います。（と、顏を反らす。）

山田　ぢやア、御一緒にまゐりますから、ちよツと——（と、云つて、山田はまた宮内のそばへもどる。入れ代はりに。忍は宮内の手を離れて、富子の方へ行く。）

山田　もう占めたぞ。

宮内　無論さ。（と、兩人、上手を見る。）

忍　ねえさん、大丈夫。

富子　さう、ねえ。（と、兩人、下手を見る。）

宮内　そりやア、行かん。一方は何だか少しいかつくツて面白くないやうだが、向ふのアさうよささうか、ね――獨斷的に君が先約するにやア？

山田　獨斷でも、なんでも、僕は君の上官だけに好きな方を取つたツていい、さ。君よりも年の若い僕が年増の方を取るのア君に對して恩典だらう。

宮内　困る、なア。

山田　なぜ君は若いのを厭だ？

宮内　なんだか、肩の骨もごつごつしてゐて、さ、をとこ女の様だから、ね。言葉なども芝居がかつてゐて、へんなをんな形の様だぜ。

山田　馬鹿ア云ふな。（と、歩み出す。）さア、あなたがた、まゐりましよう。（と、そツと富子の手を取る。）

宮内　（附いて來て）手を引いてあげましよう。（と、忍の手を取る。）

（四名、上手へ行きかけると、さきの探偵二名、別々に上手から驅けて來る。四名は何物かと驚いた様子で、離れ／＼に舞臺中央に集る。）

探偵甲　ちよツとお待ちなせい、（と、山田を捕へる。）

探偵乙　この引ツ張りめ！（と、富子の横ツつらをなぐる。）

忍　なにようしやアがる！（本當の木地を出す。）

富子　（これも本統の聲を出して）どうしたんです、人をぶつとは！（山田、不思議がつて、忍と富子を見、

それと氣がつくこなし。）

探偵乙　なんだ、なま意氣な！（と、また喰らはさうとする。）

忍　こら！（と、つかみかかる。）

山田　（探偵乙を制して）お待ちなさい、いきなりに貴婦人をぶん投ぐるとア失敬ぢやアないか？

探偵甲　貴婦人とア、――それぢやア、淫賣の別名ですか？

山田　いや、實際の貴婦人です。それをぶつたのア君等の間違ひだ。（富子、山田を見て嬉しさうにする。）

探偵甲　（山田を押へながら）何も間違ひぢやア無い、探偵が職務を執行するんだ。

探偵乙　（山田に）あなたがこの女を買はうとしてゐたのでしよう。

山田　（まごつきながら、探偵甲に）先づこの手をお離しなさい、逃げも、隱れもしないから。（探偵甲、手を離す。つづいて探偵乙に）それは少し違ひます。われわれがここを通りすがると、この女どもが夜が更けておそろしいから水道橋まで送つて呉れと申したので、われわれが今送つてやるところでした。

探偵甲　うそを云つちやア、あなたがたを僞證罪に問ひますぞ。（山田、困つたといふこなしで富子と顏を見合はす。）

宮内　（探偵甲に）僞證罪呼ばはりはあんまりぢやアないか？　女どもを取り調べたいなら、それは勝手に取り調らべなさいだが、兎に角、僕等はここで御免を被りたい。嫌疑はその方にかかるが、僕等

の知らないことだ。

忍　それぢアあなたがたが送つてやらうと云つたお言葉にそむきましよう? ここはどうしても一緒に歸つていただきます。

宮内　かうなつちやア、一緒に歸るも歸らんもない、――大道で遇つた合せ物は離れ物、よしんば夫婦であつても男と女は別々だ。

山田　君、さう、云ふな。この場合、一緒に送つてやるのが本當らしい。(と、富子と顔を見合はす。富子は痛さうに打たれた頰を押さへてゐる。)

宮内　なにも、淫賣の嫌疑あるものに附いてく必要はないさ。

山田　嫌疑はここで晴れるよ。

忍　僕が晴らします。

探偵甲　いや、兎に角、直ぐそこが警察署だから、そこまで行つて貰はう。

探偵乙　さア、來い。(と、富子と忍とを引ッ立てる。)

忍　ちよつと待つて貰ひたい。(と、探偵乙をとめて) 少し公けにして貰つては困る事情があるんですから――

探偵乙　貴樣は全體女か、男か?

忍　實は男です。(と、かづらを取る。山田と富子の外は皆驚く。)

宮内　やア、忍さんか？

忍　さうです。（と、笑ひながら、）にいさん、實に困るぢやアありませんか？

富子　（こらへかねて、山田にしがみつき）あなた、ほんとに情けないことをおしなさいます、ねえ！（と、泣く。）

宮内　いやア、奥さんでしたか？（と、氣の毒だといふこなし。）一體どうしてまたこんな眞似を忍さんにさしたんです？

山田　なに、分つてるよ。この仕組みは僕にやア讀めてるが——

富子　宮内さん、あなたも情けないことを——

宮内　…………（ちよつと横を向く。）

山田　（あたまを掻きながら）いや、どうもお前達にやア何とも申し分けの仕やうがない——許して呉れ。

富子　許して呉れいで濟みますか？　濟みますか？　ええ、濟みますか？（と、山田をさんざんにゆすぶる。）

山田　（富子の手を取り、その肩をなでてやりながら）もツともだ、もツともだ。もう、これからは決してこんなことはしないから——

忍　にいさん、あなたの意識と名譽とに對して、きツと誓へますか？

山田　誓ふとも、忍、お前までに迷惑をかけて、實に面目ない。許して呉れ。

忍　きツとです、ね？（と、山田を見つめる。）

山田　きツとだよ。今晩と云ふ今晩は、おれも、もう、凝り〳〵した。（と、またあたまを掻く）

宮内（探偵二名に）あなたがたは、濟まないが、ちよツとこツちへ來て貰ひたい。（と、甲乙二名を後ろの方へつれて行く。）

忍　きツとだと誓ふ以上は、僕等の趣向と目的とが貫徹したんですから、直ぐこれから、お歸んなさい。

山田　濟まなかつた――許して呉れ――

富子　あなたがこんなことをなさるから、わたし達の心配は絶えやアしません。每晚每晚、うちを明けて、お留守に若し事でもあつたら、どうするおつもりです。わたしがそれほど可愛くないのなら、ないでもいいです。然し、忍さんの手前もあるぢやア御座いませんか？

山田　分つたよ、分つたよ。もう、云ふな――ここではそばに警察の探偵が來てゐるんだから、ね。

富子　どうせ、ああいふ方々にあア分つてしまひました。あなたが取り返しのつかないことをさせたんです。あなたさへこんなことをなさらないなら、人聽きも惡くはなし、家も無事に治つて行くんです。

山田　これから、さうしようとも、しようとも。然し、富子、お前も、これから、つけつけ云ふのを

やめて貰ひたい。

忍　それもさうですよ、ねえさん、あなたがいつもあんまりにイさんにつけつけ云つて、まだあなたはそれほどの年でもないのに、をつとを支配しようといふのが第一間違つてゐますよ。

富子　わたしやさう云ふつもりぢやない、わ。

忍　それが惡いです。ねえさんはいつもつもりぢやアない、つもりぢやアないで云ひ拔けさへすりやアいいと思つてるらしいが、にイさんの云ふ通りに氣風が直つたことがないぢやア御坐いませんか？　たとへば、けさもにイさんが役所へ（と、聲が高くなつたので、宮内、後から『しつ』と注意する。）出る前に、役所の（と、云つて氣がつき）いや、どこかの新築設計書をテーブルの右の抽き出しへ入れて置いてくれい、心おぼえがしてあるんだからと云つたのに、ねえさんは不注意に聽き流して、洋書棚の間へ挿んだぢやア御座いませんか？　にイさんが歸つて來れば、きツとまた行き方が知れないと云つておこるんだらうと、僕は思つた。それも決して惡い氣でしたんぢやアなからうが、にイさんの氣風を呑み込んでゐないから、さうしてにイさんの氣風に合ふ樣に努力しないから、從つてにイさんが面白く思はないんだ。

山田　實際忍の云ふ通りだ。然しおれは一々そんなことをお前に（と、富子に向ひ）敎へてゐる暇がない。暇があつても、いく度もいく度もではうるさいから、お前が自分自身で多少氣をつけて行きやアよからう。さういふ不平は餘りこまか過ぎて一々その場で說明することは出來ないが、この、六

平がつもりつもつて來ると、一つ一つの煉瓦を疊みあげて大きな建て物が出來ると同樣、一大不平、一大不滿足になつて、ついお前のゐる家がいやになつてしまうんだ。

忍　さうですよ。ねえさん、分りましたか？

富子　そりやア分りましたから、これからわたしも氣を付けますが、每晚の樣に斯うちをあけられちやア、わたしやア困つてしまひます、わ。

忍　その困るのが先きか、困らせられる樣にするのが先きか、そこをよく考へて御覽なさい。僕だツて、ねえさんの樣に强情ツ骨の强い女は實際は嫌ひです。

富子　さう（と、ふくれッ面をして橫を向き）お嫌ひなら、お嫌ひでよう御座います。わたしは何も忍さんの奥さんぢやア御座いませんから、ね。

山田　そ、それが惡いんだ、人の忠告や注意を仇で返さうとする！　そんな無學な、低い、さもしい不了見な根性だから、忍にさへその缺點が見えるんだ。

忍　僕ア何もねえさんの缺點を指摘して喜んでるんぢやアないです。さういふ點を直すやうにしなければ、いつまでもにイさんとあなた（富子に）との仲が甘くまとまりやうがなからうと思ふから、老婆心ではあるが、遠慮なく云つたんです。それでなけりやア、わざわざねえさんの味方をして、をんなに化けてまでも、こんな面白くもない眞似はしなかつたでしよう。

富子　ふん、御親切さまでした。考へて見りやアつまらない、（忍に）あなたにつれて來て貰つたのは、

ぶたれたり、小言を聽かせられたりする爲めに過ぎなかつたんです。

山田　小言と思つたら、お前は間違ひだよ。忍にしろ、おれにしろ、お前にもツと女らしくなれと要求するんだ。

富子　何も、わたしは忍さんの女ぢやア御座いません。

山田　馬鹿！

忍　ねえさんはよツぽど分らない人です、ね。僕はにイさんの爲めに云つてるぢやア御座いませんか。

富子　兄弟だから、ふたアりで相談してわたしをいぢめるんでしようよ。

忍　あなたは、すね出したら、仕やうのない人だ。

富子　をつとが大相品行が方正ですから、ね。こんなすね者にされてしまつたんでしようよ。（と、聲が高くなる。）

山田　しツ！　靜かに云つても分るよ。――富子、お前は全體柔順でない。それがもとでおれの身持ちも崩れて來たんだ。共證據には、お前と結婚した當座は、おれも決してこんな事はしなかつた。ところが、お前のすることが段々おれの家風に合はない――家風と云つても、舊弊じみた宗旨とか儀式とか、親類づき合ひの工合とか、そんな老人臭いことを指すんぢやアない。をつとはお前の家だ。そのをつとの氣風は乃ちわれわれの家風である。いつも云ふ通り、お前はそれをおろそかにし

てゐるんだ。

富子　をつとが家風なら、をつとを愛するのは家風を愛してゐることになります。

山田　それが、さ、日本婦人の愛は兎角内部と表面とが和合しない。心で愛がありさへすればいいと思つても、それがこッちへ通じなければ、獨り合點の愛に過ぎない。お前はその獨り合點でをつとを愛してゐるだらうが、その愛を表面にも本當にあらはさない限り、をつとはお前を眞實和合の妻として受け入れることが出來ない。

富子　ぢやア、わたしが今晩の樣な眞似をしてまであなたを愛してゐるのはお分りにならないんでしようか？

山田　そんなことでは、まだ分らない、ねえ。

富子　では賤業婦や旦那取りはわたしよりも滿足な愛を表しますか？

山田　さういふものらは表面の愛を見せるのが餘り甘過ぎて、內部の愛を忘れてゐる。

富子　ぢやア、どうしたらいいんです？

山田　いつも云つてる通りだが、それをお前は實行しないんだ。

富子　そんならわたしがあなたに年中抱き付いてて、內部眞實の愛とかを發表したらいいんでしようよ。

山田　何を云ふ！（と、少しきまり惡いやうで忍を見てから）それにやア、然し今いふ家風だ、如何にお

前が、今夜の趣向通り、賤業婦の眞似をしてまでおれを探しに來ても、それは少しもあり難くはない。おれの家風に從つて、おれの胸中まで這入つておいで。如何に抱きついたからとて、獨り合點獨り呑み込みの愛はわが儘勝手の愛だ。夫婦間の和合には、通用しない。

忍　ねえさん、そりやア實際ですよ。にイさんはいつもそれを僕に話して、ねえさんに對する不平を度々僕に漏してゐたんです。さうして、僕が結婚する時にはさういふことに最も注意してと云つてゐたんです。僕も女といふものは、どうせ、をつとに對しては絕對的な自由はないものだと思ひます。

富子　それぢやア、女は機械もおんなじになります。

忍　直ぐさう云ふ風になるのが間違ひでしようが、ね。それが厭なら、女には——少くとも、人の妻には——ならないがいいんです。獨身生活を送つて、段々人にきらはれるオールドミス、婆々アお孃さんになつてしまうのがいい。

富子　どうせ、きらはれるものなら、その方がよかつたかも知れません。

忍　然しあなたは、現在、工學博士、高等官二等、山田眞藏の妻ぢやア御座いませんか？

富子　然しわたしはをつとから尊敬を受ける、自由な妻でありたいんです。

忍　そんなことを云ふのが、第一博士の所謂家風に合はないんだ。おそらく博士ばかりではない、現代日本の男子全體の家風に合はないでしよう。日本婦人はまた全體に表情が下手です。内部には眞

實な愛があつても、それを充分に表情し得ないから、その愛は骨董品も同様です上品かは知れないが、活氣がない死んでゐます。そんなことで自由もくそもありますか？

山田　表情の解釋もいいが、その表情を完くするにやア、女のわが儘、自由を浚却して、をつとの胸中に這入り込み、をつとの自由を以つて自分の自由とする様にならんけりやア困る。

忍　ねえさんも、今晩の様な眞似をしてまでも、をつとの愛を得ようとしたんぢやア御座いませんか？　今一歩進みやア、にイさんの要求を滿足させることが出來ましやう。努力おしなさい。

山田　さうだ、努力と奮發だ。妻といふ名義さへ出來さへすりやア、わが國の婦人はもう安心してしまつて、積極的にをつとを愛するといふよりも、消極的に心を居座わらせて、をつとに愛せられることばかりを求める。おれはそれが面白くない。自由とはそれだけの義務も伴ふもので、ただ愛せられようとすることが女や女房の自由ぢやアない。男子は常に生活と事業と勉强とにいそがしいものだから、女もそれだけ男子を積極的に愛する努力と奮發とをして貰ひたい。

忍　ねえさん、分りましたか？

富子　分らないことは御座いませんが――

忍　分りました、ね？

富子　………　………（頷く。）

忍　よろしい、ねえさんが分つたら、今度はにイさんです。あなたは今『男子は常に生活と事業と

勉强とにいそがしい』とお御つたが、此頃のにイさんの樣子では生活にやアいそがしいでしようが、事業と勉强とは出來ないでしよう？

山田　…………………（默つてあたまに手。）

忍　夜遊びが事業ですか？

山田　………………。

忍　通行の女を引ツ張るのが勉强ですか？

山田　………………

忍　あんまり馬鹿げてゐるぢやア御座いませんか？　如何に亂行をし出したとは云ひながら、あなたの學位と官職とに對して最も恥づべき、最も卑しむべきことをなさつてたんだ。

山田　いや、もう、何とも早や面目ない。妻を厭になつた心持ちがつい極端に走り、お前達にまでも迷惑をかけることになつた。おれは極端から極端に走り易い性質だから、今度はまた反對の極端に立ちもどつて、家に落ちつく樣につとめようかしら――。

忍　もつともあなたばかりが惡いんぢやアないでしよう、あの宮内さんも（と、大きな聲）よくない。

宮内　（後ろの方から出て來て）僕を呼んだかい？。（先づ山田へ）賄賂をやらうとしたが、あいつらはどうしても取らない。

忍　呼ぶも呼ばないもない、あなたがにイさんをいつでもつれ出すんでしよう？

宮内　（あたまを掻きながら）いや、どうも、申しわけがない。

山田　（宮内に）ぢやア、どうしようと云ふんだらう？

富子　宮内さん、ほんとにあなたも年甲斐がない！

宮内　いや、どうも、恐れ入りました。（と、あたまを下げる）それから、（山田に）、こツちが、ぺこぺこあやまりさへすりやアいいんだらうが、ね。

忍　宮内さんと云ひ、にイさんと云ひ、引いてはねえさんまでが僕にこんなかづらを（と、いまいましさうに見て）かぶせる様な不始末をして、さ、どうして呉れるんです？（と、かづらを投げうつ。）

宮内　どうも、今夜の案外な御趣向にやア全く一杯喰はせられました。

（みなみな一時に吹き出す。そこへ、探偵二名、また出て來る。）

探偵甲　ここで、いつまでもぐずぐずして貰つちやア困る。兎に角、警察署まで行つて貰ひます。

（と、山田を捕へる。）

探偵乙　さア、來い。（と、忍を捕へる。）

忍　あなたがたの云ふことも分らないぢやアないか？　さツきは、こツちの婦人をなぐり飛ばしてまでも引ツ立てようとしたのに、今度はまた男と分つた僕をどうするんです？

探偵乙　どうするも、かうするもない！署へ來たら分る！

忍　いや、行く必要はない。

山田　忍・待て。（探偵甲に）公けになると困りますから、どうか穩便に（と、辭儀をして）わたくし、實はから云ふものだから――（と、名刺を出さうとする）

探偵甲　いや、名刺は出すにやア及ばない。ちやんと、もう・分つてる。

山田　えゝツ・早や分つてますと？

富子　宮内さん、あなた、わざわざお話しなすつたの？

宮内　をかしい、ねえ・僕等は何にもまだ名のりませんよ、奧さんの嫌疑を解いてゐただけで（山田、富子、宮内、忍、ともに不思議がつてゐると、さきの高須重雄、上手から登場。）

高須　（山田の背中を叩いて）山田君！

山田　（びッくりして）誰れだ？――やア、高須君か！

高須　おれだ・どうした？

山田　どうしてここへ？

高須　どうしても・かうしてもあるもんか？　まア、待ち給へ。――（探偵等に）おい、おい、このくらゐいじめたら・もうよからう。御苦勞だツた。さア、これをやるから、飲み給へ。（と、紙幣を分けてやる。）

探偵甲　遠慮ァ致しません。

探偵乙　頂戴致しやす。

（甲、乙、札を高須から受け取る。他のもの等は之を見て、一しほ不思議がる。）
探偵甲　（乙に）ぢやア、この男だけつれて行かう。（と、忍を見る。）
探偵乙　さア、行くんだ。（と、忍を引ッ立てる。）
忍　僕だけがどうしたんです？
探偵乙　男子が女の風をして大道を歩くのア罰金だ。
忍　へえ。（と、詰らないことになつたといふこなし。）
富子　何とかそこは？（と、云ひかける。）
高須　なに、奥さん、心配にやア及びません。――（探偵等に）それもここだけは穩便に賴みたい。
探偵甲　承知しやした。――さア、行かう。
探偵乙　ぢやア、行きましよう。
（探偵甲乙ともに退場。）
山田　高須君、こりやアどうしたんだ？
富子　どうしたわけなんです？　まア、御挨拶があとになりますが――
高須　（わざと悠々と）山田君、以後は馬鹿な眞似はし給ふなよ。君の體面ばかりぢやアない、君の出る官省の不名譽、引いてはわれわれ官吏全體の不名譽だ。
山田　いやア職掌がら、君ア知つてたんか？

高須　知つてたから、今夜今の二名に云ひつけて、友人甲斐に、ここで君をさんざんいじめてやらうと云ふ趣向であつたんだが、隱れて見てゐりやア、奥さんの方にも意外な御趣向があつて、あは、は、は！

富子　おほ、ほ、ほ！　ぢやア、趣向と趣向との衝突でした、わ、ねえ。

高須　如何にも。

山田　そりやア、如何にも面目ない。君にも濟まなかつた。

高須　以後ほんとに馬鹿をするなよ。愼み給へ。

山田　今夜といふ今夜、僕も懲りごりしたよ。君と家内とに一杯づつ喰はされたんだ。

忍　高須さんも來ようとは、僕等ア夢にも知りませんでした。

富子　ほんとに、ねえ。

山田　ぢやア、みんなの和解に一つこれから飲まうぢやないか？　どこか、まだ起きてるところがあらう。――宮内君、紹介しよう。（宮内、高須の前へ來る。）これは警視高須重雄君、僕の親友だ。――（高須に）宮内政治君、僕の同僚だ。

宮内　僕は宮内、初めまして――

高須　高須です。――すると、君が女引ッ張りの相ひ棒だ、ね。

宮内　いや、どうも、お目がねは痛み入る。（と、手をあたまへあげて反り返る。）

富子　ほんとに、宮内さんは、年甲斐もない、仕やうのない人だ、わ。
宮内　さうおこらないでもいいでしよう、もう、濟んぢやツたから。
富子　濟んだツて、この恨みはいつまでも忘れません、わ。あなたの奧さんにも云ツつけるから――
宮内　それだけはよして貰ひましよう。
忍　宮内さん、あなたもこんなことア、もう、おやめなさいよ。
宮内　無論、やめます。
山田　一緒にやり初めたんだから、やめるのも一緒、さ。――さア、諸君、坂の上へ行つて見よう。
（皆々行く用意。）
高須　然し奧さん。（と、富子の肩を叩き）今晩から充分可愛がつてお貰ひなさい。
富子　あら、厭だ！
（富子、身をかはして、恥かしさうに喜ぶ。皆々、かの女を返り見る。鍋燒きうどんの聲にて幕）
――（明治四十二年）――

佐用姫

登場人物

松浦の佐用姫

漁師石足

大伴狹手彦

漁師甲乙二名

場所

松浦潟、虹の松原

（正面、白砂靑松の虹の松原。まばらな松の木々を透かして、奥一面に、高くない山の斜面が見える。すべて領布振山前面の景。上手寄り、浪うちぎはに、大きな巖が立つ。そこから下手へかけて、舞臺前面はすべて浪ぎはの體。時化あとの浪の音にて幕明くと、山のふもとを帶劍弓矢の兵士、兵糧その他の荷物を運ぶ人夫などが、おもに下手へ急がしく通行するのが見える。人夫の下手へ行くのは荷を運び、上手へ行くのは空手、いづれも、繪模樣で、登場人物のせりふには加はらず、往來をつづける。上手、巖の蔭より佐用姫、髮を肩天で三ッ輪に結び、また左右の耳の前後に垂らし、天平式の衣、裳、領布を後ろから腕の兩方にかけ、その兩方を兩手で握りながら、革沓にて、あわただしく出で來たり、心配げに人を尋ねてゐる樣子。下手をのぞいて驚いたになんで上手寄りに來る。下手より漁師石足、みづら、筒袖ごろも、わら沓にて、物思はしげな體。）

石足　（舞臺中央のあたりまで進み）お佐用！
佐用　（踏みとまつて、後ろ向きのまま）…………
石足　お佐用‼
佐用　……
石足　いやだらうが、返事をして貰ひたい。
佐用　（後ろ向きのまま）はい。
石足　お前は人を尋ねてゐるのだらう？
佐用　はい、――然し、あなたでは御座いません。
石足　それは云はずと知れた薄情者のことだ――おれの様な漁師風情の、この石足などは相手にせず。けふ三韓へ出發の遠征將軍、大伴の狹手彥を追ひかけてゐるのは、おれも聽いて承知した、わ。
佐用　（向き直りて）それがあなたに何のかかはりが御座います？　わたしの自由を以つてわたしの自由な行ひ――それが何であなたに？
石足　そりやア、お前にも自由はあらう、然しまた不自由もあらう。
佐用　不自由とは？
石足　不自由も不自由、大の不自由。大將軍の狹手彥と云ふても、旅から旅への渡り者だ――漁師のおれと乘りかへたはよかつたが、渠はお前の思ふ通りにはならず、けふ三韓へ新羅征伐に出發――

連れて行つて貰ふことも出來ず、おまけに、こゝ僅か一二週の時化時の間の樂しみを一生の思ひ出に、別れてしまはねばならぬといふことではないか？——氣の毒でもあれば、笑止でもある。

佐用　笑止でも、氣の毒でも、あなたのかかはつたことでは御座いません。——棄て置いて貰ひましよう。（と、横を向く。）

石足　いや、棄てて置いては、この石足の胸の中が納まらぬ。僅か一週間や二週間の旅やどりで、時化のなぐのを待つ間のなじみであつたのではなし、おれのうらみだけでも充分聽いて貰はう。

佐用　（ふり向いて）わたしにこそ恨みはあれ、あなたに何の云ひぶんが御座いましよう？　十年、二十年の仲ではなかつたにせよ、四年、五年の間は、あなたとわたしとは命ち懸けての戀仲。あなたが漁師なら、わたしもあま乙女——人目を忍んで、毎夜の逢ふ瀨を樂しんだのも久しいこと。親の許しがない爲め、長らくの苦しい相ひ引きでは御座いましたが、人に知られてからは、笑はれながらも、親を棄て、兄弟を棄て、世間を棄ててのわび[illegible]し——あなたを思つてゐたからこそです。

石足　それはおれも同じことだ——お前に對してこの胸の（と、胸を打ちて）愛がなかつたなら、このとし月を村の朋輩から馬鹿にせられはしなかつたらうし、また、けふも、わざ〳〵お前を追ふて來て、薄情者呼ばはりはしないのだ。

佐用　わたしをそれほど憎いと思召したら、なぜ殺して下さいませんでした？

石足　殺すまでもなく、薄情者は浮氣者だらう——少し器量がよいので、佐用姫、佐用姫と呼ばれる

のを鼻にかけ、甲のものから乙のものへ、乙のものから丙のものへ心を移して行くうちには、すべての男には棄てられ、世間からはほうり出され、結局は野たれ死にするにきまつてゐる

佐用　さう思つたら、思つたがよい。わたしには乙とか丙とか云ふものは御座いません。一たびあなたに棄てられてからは、もはや死んだも同前な戀の脱け殼——新たに狹手彥(さでひこ)さまを愛したのは、もとの佐用ではなく、別な女で御座います。

石足　そんな淺墓な云ひ脱けを云ふたとて、戀をするからだは一つ、お前のからだ——それをずた〳〵に切り刻んでも、おれのかけら一つも今は出ては來まい。牡蠣や鮑の磯くさい臭ひがするおれよりも、大將軍の鎧の裾がさぞよかつたらうよ。

佐用（つらいのを押へるこなし）よかつても、惡かつても、この佐用はもうあなたの物では御座いません。數へて見れば（と、考へながら）丸四年のとし月を、わたしはあなたのままになつてゐました。戀を仕かけたのはわたしからではなし——あなたが、あの（と、下手をゆび指し）松浦川の川口でけふの樣な秋の晴天(せいてん)に、さざゐを一つ拾ひあげてその貝の蓋の堅いやうに、自分の心も變らないとおツしやつたのを、どなたの言葉よりもまことが籠つてると信じたればこそ、わたしは、それまでつづけた獨り身をやめてあなたの熱いお情けに從ふたので御座います。

石足　お前も亦、よい春の夜の月のもとであつた、あの（と、下手を指し）玉島川の川上でおれの手を握つて、暫しの間でもかうしてゐれば、海へもぐる苦勞も忘れて、心まで遠い松原の樣に霞むほど

樂しいと云ふた。

佐用　如何にも樂しい世で御座いました。この虹の松原も（と、思ひ出多い樣子して）あなたとわたしとの戀語りに、幾度這入つたか知れません。松のみどりのけむる時は、そのけむりの樣にやわらかな心と心とが末永く結び合ふてゐたい――秋の松露がそこらあたりの松の根に出來る頃は、その松露の樣に淸い戀のしづくに結ぶ子が欲しい――などと語り合ふたのも、今ではみんな覺めた夢です。云ひ寄る人が多いなかを、あの年頃までも無事に切り拔けてゐたのは、わたしがみだらな女でなかつた證據――如何に賤しいわざでも、水くぐりをしてゐれば、人の情けにたよらないでも、女ひとりの暮しは出來ます。あま乙女、あま乙女と云はれる、その『をとめ』で世を送らうとする考へが破れ、あなたばかりに身をまかせたのも、ひとへにあなたを信じたからのこと。

石足　その信じたといふのもうそだ。それほど云ふのがまことならば（と、かの女の言葉につけ込む意味で）なぜ一朝一夜にして旅のものに乘り變へた、この浮氣者め！

佐用　（憤慨のこなし）わたしが浮氣者なら、あなたは薄情者で御座いましよう。海にも神さまはゐますと云ふて、あのおほ風の夜、この松原で、玄海灘の浪のしぶきを浴びながら、あなたとわたし、お前とおれはとこ世までも離れまいと、あれほどわだつみに誓ひ合ふたに、現世だけはおろか、たッた四年や五年のうちに、遊女風情のものに心を移すとは――!?

石足　それはあと先きが違ふ。おれが遊女に棄て鉢となつたのは（と、沈痛に殘念らしく）お前の薄情と

心がはりがもとだ。お前も知つてる通り、おれが遊女がよひをするなどと云ふことはこれまでにないこと——酒も飲まなかつたから、酒に飲みつぶれることも亦これまでにはなかつた。それが七日や八日のうちにかう燒けづくになつたのだから、そのもとはお前の胸にあらう。とツくり考へて見て貰ひたい。

佐用　（決然たる調子で）いいえ、さうでは御座いません。わたしが、村長さまの賴みにより、將軍さまの假やかたへお酌にあがつて急がしい間に、あなたはその僅かな間の寂しさを辛抱出來ず、飲んだこともない酒を飲み——

石足　（憤然として）いいや、さうではない！　お前が假やかたへ行つた切り幾日も歸つて來ないのを不思議に思ふてゐると、果して村のものがお佐用に將軍さまのお手が付いたと知らせて呉れた。

佐用　それはさうでも御座いましようが、わたしが狹手彥さまの御手に就いたのは、あなたの心變りを知つたあとのことです。

石足　いや、何の云ひわけもするには及ばん。

佐用　云ひわけでは御座いません、まことのことでございます。

石足　まことのこととは——馬鹿なことを云へ！　おれはお前をこれほどに愛してゐるのに、おれがお前を棄てる樣なことがあるものか？

佐用　（正直な怒りで）現在、それがあつたでは御座いませんか？——わたしは、おやかたへあがつて

ゐても、あなたを思はない日は御座いませんでした。あがつたのは村長さまの賴み、あなたの御承諾のうへですから、安心して行つてゐましたが、急がしい間にも、あなたがさぞ寂しからうと思へば、早く歸して貰ふ樣にしたいと、時化のなぐのばかりを祈つてゐました——それに、大作さまが毎夜のやうに三韓へ一緒に行つて呉れいとのお賴み——村長さまからをつとがないと聽かされたのを種に取り、親切ではあつたが、そのうるささ。

石足　ふん、それで分つた。（と、おもくるしい冷笑）村長めが、將軍の氣に入らうが爲めお前とおれとの仲がまだ親に許されてないのをよい種にして、をつとがないと云ひまぎらし、お前を將軍の慰み物に取り持つたのだ。憎いはあいつばかりではない、——お前はその時なぜ（と、力のある恨み聲で）おれがあることを云はなかつた？

佐用　（悲しさうに、然しはツきりと）云はないのではない、云ふ必要がなかつたのです。狹手彦さまは遠征大將軍、その人のお手に就くのは、當り前から云へば、女としてほまれでもあり、出世でもある。それをわたしはあなたと特別な、苦しいけれど樂しみな仲であつた爲めに、わたしの心は少しも動かなかつたので御座います。

石足　（熱心に）動かないで、誰れがお前と痴話ぐるふものがあらう？

佐用　石足さん！（と、少し進み寄り）そんな穢らはしい言葉は置いて貰ひましよう。（と、悔しさうに、横を向いて、また離れ行き、半ば獨り言の樣に）お互ひにもとのいさぎよい言葉と言葉とを以つて結び合

つた仲――

石足　（追懷のおももちにて）それは、もう、昔のことだ。（と、横を向き）お前に棄てられたこの石足は、二つの羽がひを射拔かれた鳥も同樣、――もとは、あま驅けるほどな勢ひで、村のもの等のねたみそねみを心よく受けてゐられたが、今では全く地べたに落ちて、それ見たことかとばかり笑はれ、無精者とか、醉ツぱらひとか、ありとあらゆる惡口をつかれた上、きのふけふの樣に度々足蹴にされても、もう、何の敵對も出來ぬわが身だ。――張り合ひもなければ、望みもなし――意氣地もなければ、働く力もなし――手足のすぢがゆるんで、每朝、おれは（と、涙聲で）起きる氣にもならぬ。――ああ！（と、下手へ離れ行き、胸に手を組んで、仰向き）生きてゐるのがうらめしい！

佐用　（顏をそむけたまま）それも飮めないお酒を飮み、買ふたこともない遊女に溺れる報いでしようよ。なぜ、あの（と、舞臺後方を下手へ見て）人々と共に急がしいけふをあの樣に働きません？

石足　（そのまま、頸を垂れ）いや、みんなそれもお前の爲めだ！

佐用　わたしの氣がはりこそあなたの爲めで！

石足　（佐用の方へ向き）それでは、お前の云ふ通り、初めは將軍の狹手彥にも靡きはしなかつたのか？

佐用　ええ！（と、向き直り、訴へる樣に）戀しいあなたがあるのに、何で不足が御座いましようぞ？如何に將軍さまのお賴みでも、わたしにはまたわたしの考へがあつた。それを動かすものは、ただあなたばかりで御座いました。――狹手彥さまのお賴みがうるさいほどな間を、心強く、無事につ

とめてゐましたのに、先づあなたの心變り——

石足　もう、分つた——おれが惡い！　（と、ちよつと手の甲で涙を拂ひ）村のもののおだてに乘つておれが餘り早まつたのが惡いのだらう。おれが先づ心變りをしたのなら、お前がおれよりも烈しい燒けを起して、浮氣をするのは、お前の氣性として、當り前のことだ。

佐用　さう云はれると、わたしも實に——遊女でも、をとこはそれに就けば寂しい思ひは殘りますまいが、わたしが棄てられた以上は、これまでに積り積つた村中の女や男のそねみ、ねたみが烈しいあざ笑ひとかはり、わたしの寂しい獨り寢の夢にまで襲ふて來るにきまつてる。——ただ棄てられたと思ふたばかりに、一方にはわたしの身がもう亡きものになつたも同前とあきらめ、また一方には寢ても寢ざめの惡い、起きても苦しみの思ひでばかりになるこの村に住んでゐたくはないと、どうせ死んだも同前なわたしが、もとの海をとめに返るよりも——どうせ、また、一たび乙女が穢れたうへは、もとの淸さに歸ることは出來ないにより——いツそのこと、あなたの代りの人を——それもあなたより一層ほまれのあるお方を——狹手彥さまと見て、戰地へつれて行つて貰ひ、弓矢の間にわたしの運をまかさうと決心したので御座います。その決心もたツた二日前、おととひの晩のこと——然しそれが（と、聲を顫はせ）あなたのお言葉を承れば、わたしの（と、顫え聲を低め）思ひ違ひ——淺墓な仕わざ——もし、石足さん！　（と、からだを顫はせて、きツとなり）　許して下さいませ！

（と、領布を放し、兩手で取りつきに行つて、また控へることなし。）

石足　おれがうらみを云ふたのは間違ひだ。（と　湧き來る涙を右の手で拂ひながら）　許して吳れ、お佐用！（と、急にこれも取りつかうとして、また離れる。）然し、考へて見ると、お前とおれとの仲には越えにくい大きなみぞが出來てゐる。（と、横を向いて、悲しさうに下手へ一二歩。）

佐用　（赤上手へ離れ行きて、石足に背を向け、悲しみを堪へる樣子）　その大きなみぞが今では二人の隔て――どうすることも出來ません。

石足　（急にふり向きて）出來ないとは、おれに愛想が盡きたのか？

佐用　（ちよツとふり向き、これも早口に）いえ、愛想が盡きるどころか、（と、また聲が遲く、低く、然しシツかりと）あなたの御親切は一生忘れません。

石足　それでは（と、少し乘り出し）お前をちよツとばかりだまくらかしたあの狹手彥を思ひ切つたのか？

佐用　………（返事をさし控へる。）

石足　思ひ切つたか？

佐用　狹手彥さまはわたしをだましたのでは御座いません。

石足　でも、棄てられては、思ひ切つたか？

佐用　………

石足　返事がないのは思ひ切ることが出來ぬのか？

佐用　………

石足　ええツ！（と、胸が煮えくり返るこなし）矢ツ張りおれは獨りだ！　なぜあんな浮氣者、畜生をんなを可愛がつてゐたのだ！　馬鹿め！　このあたま――この手――この胸！（と、多少わざとらしくやたらになぐりまわし、砂上に倒れて、もがく。）

（この時、下手、松のかげより大伴狹手彥、古代の筒袖どろもに胴よろひ、かぶと、帶劍、毛沓にて、弓を以つて登場。後方の兵士や人夫の往來、暫らく絕える。二人は狹手彥に氣がつかず。）

佐用　（溜りかねて、石足に驅け寄り）石足さん、許して下さい！　みんなわたしが惡かつたので御座います。許して下さい――わたしの罪で御座います。

狹手　（近よりながら）いや、その罪はみなわたしの爲めだ。

（二人びツくりする。石足立ちあがる。）

佐用　あなたは狹手彥さま、會ひたかつた！（と、取りつからうとして、今見られたことが恥かしいと云ふこなし。狹手彥と石足に背を向けて、苦痛の體。）

石足　（狹手彥を見つめて、全身に力を入れ）大伴の狹手彥とはお前か？

狹手　（泰然として）わしが大伴の狹手彥だ。

石足　おれからお佐用を奪ふたはお前だ。

狹手　如何にも――

石足（身を顫はせて）この畜生！（と、飛びかからうとするを、狹手彥、手に持つ弓のさきにてとめる、佐用、おぢけづいた樣子。）

狹手　待て！――お佐用の情夫、漁師の石足とはお前のことであらうが、力づくでは、弓矢の手前にはかなふまい。

（石足、狹手彥の弓さきを押しのけて飛び込まうとしても、その弓さきがなかなか動かない。）

待て！――待て！

（と、云へど、なほ石足は押しのけようとするので）

待てと云へば。ええツ、待て！

（と、却つて狹手彥が弓のさきにて石足を押しのける。石足、よろけながら、後ろの方へ行つて）

石足　ちエ！（と、尻もちをつき、悔しがる。）

佐用（ふり向いて、胸のとどろくこなし）もし怪我でもしたら――（助け起しに行からうとして、控へるこなし。）

石足　起きあがりながら、充分うらみを籠めた目つきで、佐用を見て）お前の不埒な爲めに、男一匹がこの業さらし！――軍人ばらの力づくにはかなはんでも、その力づくは人殺しが商買だ。お前もおれも殺されるなら殺されよう――おれは海の魚こそ殺せ、人間を殺しはせぬ――おれも棄てられたものなら、お前も棄てられた身だ――別な男、別な男と追ふて行つても、しまひにはよいことはない。いツそのこと、おれも許すから、お前も許して呉れて、どうせ殺されるなら、ふたりで殺されよう

――さア、いのちに懸けて（と、佐用へ進み行き）一緒に來い！（と、佐用の手を引ッ張る）

佐用　（引ッ張られるままに、下手寄りへついて行き）まア、まア、待つて下さいませ――聽いて貰ひたいことが御座います。

石足　（きッとなつて、踏みとまり、佐用の手を引いたまま）まだそんなことを云ふのか？

佐用　（顏をそむけて）はい、是非聽いて貰ひたいことが御座います。

石足　（佐用の方をにらみつけて）まだ、あの、あんな弓矢に未練があるのか？

佐用　（そのまま）いえ――はい、未練では御座いませんが、今となつては、もう（と、離れた方の手で領布を以つて涙を拭ひ）あなたと一緒には住めません。（と、引かれた手を引き拂はうとする。）

石足　（じッとにらんで、胸の鼓動を激しくしてゐたが）ええッ、この不貞腐れめ！（と、佐用の手をふり拂ふ。）

佐用　は、あッ！

（と、泣きつつ上手の方へよろけ行きて、倒れる。石足、それをうらめしげに見つめて、胸の鼓動を一層烈しくする。）

狹手　（兩者の間に進み出で）石足、さぞ佐用が憎からう、なア？（と、額に暗いかげを生ずる。）

石足　（狹手彦に背を見せて）憎からうが、憎かるまいが、お前の知つたことではない。

狹手　いや、石足、わしはお前を恥かしめる爲めに云ふのではない。――佐用が憎いのは、お前もわ

しも同じだ。

石足　うむ！（と、向き直る。佐用もちよッとふり向く）

狹手　さ、さう云ふだけでは分るまいが、わしもかの女は見限つたのだ。

（佐用、これを聽いて、うらめしさうに起きあがる。）

遠い三韓までも征伐に行くからは、寂しい心を慰めるつれ添ひがあつたらと、村長にその意を含めて置いたら、佐用姫といふ村中での美人があつて、幸ひそれが獨身者だといふので、直ぐ假やかたの酌にあげたところ、不埒にも男持ちだ。（と、佐用の方を見る。）

佐用　（狹手彥の目に出くわして、顏を赤めたが、然しまた不平さうに）それは村長さまがうそを云ふたので御座います。

石足　（躍起となつて）うそとは――矢ツ張り――ええツ（と、身をもがき）ようも、ようもおれをないがしろにする！　このすべッた阿魔め！（と、拳を握つて、打ちに行かうとする。）

狹手　（石足をさへぎつて）こら、云ふことを云はせるがよい。（佐用に）うそとは？

佐用　（石足にはかまはず、狹手彥に）う、うそとは、村長さまが云ふたと云ふので御座います。

石足　（また飛びかからうとして、狹手彥に抑へられながら。）そ、それがうそだい！

佐用　（石足に）あなたは默つて聽いてるがよい。（狹手彥に）石足さんとわたしとのもとの仲を、村のものらと同樣、村長さまもきツとうらやんだり、嫉んだりして――もしさうでないなら、あのお方

も、村のものらがわたし等二人の仲を裂から〳〵としてゐるのをよいことにして――さうとは、何にも知らぬわたしを、假おやかたへあげたので御座います。

石足　う、む！（と、一歩あとへ引いて、うなづく。）

狹手　それで、お前がわたしの云ふことを聽かなかつたわけは分るが、船出も出來ぬ十日餘りの時化が過ぎたあとで、いよ〳〵出發が出來さうになつてから、あのおとゝひの晩、わしに身をまかせて（石足、身を顫はす）心もたましひも皆わしに獻上すると云ふたではないか？

佐用　（はツきりと）はい、申し上げました。

狹手　して、お前の器量と年頃で、獨り者とは疑はしいから、內緣のをつとも云ふべき戀人でもないのかと念を押すと、いさぎよく『それも御座いません』と返事したではないか？

佐用　はい、その時には、もう、わたしにそんな者はなかつたので御座います。

石足　うツ！（と、うなつて、苦痛の體。）

狹手　それでは、この（と、石足をゆび指し）男は何物だ？　この石足は？

佐用　（ちよツと石足を見て、直ぐ顏をそむけ）もとの戀人で御座います。（と、目をしよぼつかす。）

狹手　（うらみを帶びて）いや、もとの戀人どころか、今でも執着が深からう。

（佐用、心持を穿たれて、云ひわけのないこなし。）

わしも、深い、深い心の奧には、お前が一度は取りにもぐつて行つたこともあらう海の眞珠貝の如

く、お前の優しい姿をひそませてあつて、お前を見初めた時から、忘れるに忘れられず、取り棄てるに取り棄てかね、きのふお前にいとまをやつてからも、晝はうつつ、夜は夢ばかり——寢るにつけ、起きるにつけ（と、目をしよぼつかせ）思ひ出すはお前のことばかりだ。——

佐用（訴へる様に）それほど思ふて下さいますに、わたしをきのふおやかたからおさげになつて——（と、泣いて、手を顔に當てる。）

狹手 それには、また、深いわけがある。——わしがお前を靡かせたのは、お前を風のまにまに漂ふ浪の藻くづと思ふた爲めではない。

佐用 わたしも心からあなたをお慕ひ申すやうになりました。（石足、また憎いといふ體。）

狹手 いや、こちらが思はれるにも工合があらう。義理一遍の愛を受けるのなら、わしには都に妻がある。その妻は早くから戀の血が涸れ、愛のなさけも動かず、わしの胸にぴツたりと合ふて來ないので、わしは兼てからもツと若い心持ちの女を得たいと思ふてゐた。その矢さきを、遠征の途中で時化のなぐのを待つ間に、お前を發見したのは、あらしの神の賜物でもあらうと、わしの大事な任務はさて置いて、それを神に感謝してゐくらゐだ。——そのお前はうそつきだ。僞りを云ふた。（と言葉に力を入れる。佐用、おぢける）

わしにどれほど愛されたいとて、言葉に僞りがあれば愛ではない。一たび棄てたものでも、戀人があつたとすれば、それを明して置いて呉れるのが後々のさはりにならぬ。

佐用　明して、それが何になりましよう？

狹手　前以つて明して吳れれば、わしも女をもてあそぶ男ではなし、人の物を奪ふたと云はれる樣なことはなかつた。

佐用　これほどまでにあなたをお慕ひ申してゐましても――？

狹手　それは止むを得ない。（と、斷言したが、憂ひの體。）

石足　こら、お佐用（と、憤激したが、多少冷淡に）默つてゐれば、べら〳〵と都合のよいことばかりぬかしやがる！　この（と、ちよッと狹手彥を見て）大伴氏に棄てられたのを、一つには、可哀さうにも思ふて、おれともとの通りになれと云ふと、つけあがつて、おれを一生愛すると云ひ、今はまたそッちに心が移る――よい加減な出鱈目は置け！　女と云ふものは、たとへ男がすこし間違ふたことをしても、さう短氣にわが儘を仕出かすものではない。どれほど氣性が引き立つてゐても、お前のやうに移り氣が出來ては、棄てられるのが當り前――遊女の樣な情愛なら、二つは入らぬ――新らしい方がよい。ああ、今といふ今、おれのあきらめが付いた！（と、そッ方を向いたが、また狹手彥に向ひ）お前にこの阿魔めがおれのあることを隱しをうさうとしたのは、おれが漁師であるのをさげすんでかも知れぬぞ。

佐用　石足さん、そんなわけでは御座いますまい――あれだけ云ふたのに？

石足　云ふも云はぬも、根本あきらめた――三韓へ行けぬなら、玄海灘の底へでも沈め！

（石足、佐用を尻目にかけて行きかかる。佐用、それに近よらうとして、また上手寄りに行つて、反省する體。）

狹手　石足！

石足　……………

狹手　石足!!

石足　……………

狹手　石足!!!

石足……（無言で、踏みとまり、ゆツくりふり向いて、狹手彥を見る。その目つきは急におそろしみを增す。）

狹手　お前こそ短氣であらう——先づ、さうおこらずに、わしの云ふことを聽くがよい。

石足　いや、お前とおれとは、云はば、色がたき——お佐用の心とからだには、お前がほんとの勝利者だ。

狹手　（憂ひを含んだ微笑で）いや、さうでない。お前を勝利者にしてやりたい爲め、呼びとめるのだ。

石足　（半ば獨り言の樣に）おれを呼びとめたとて、穢されたお佐用のからだがもとの通りに直るものか？

狹手　（佐用に近づき）お佐用、わしが出發する時刻も段々近づいて來る。

（佐用、困つたとあわてる體だが、然し、斷言しかねてゐる。）

ここで會ふたを幸ひ、今いち度、わしはお前にいとま乞ひをしたい。きのふ、お前にひまをやる時

にも云ふて置いたことだが、たツた一夜の縁仲でも、お前の心をわしの胸に刻み込んで吳れたのは滿足だ。若しこの滿足を、お前と共に、ふたりのいのちのあらん限りつづけることが出來るなら、わしも最も結構に思ふ筈だが、悲しいことには、それが出來ぬ。わしがお前を、遠征途中の無聊の餘り、一夜妻にしたのでないことは、お前身づからもよう知つてゐる筈――（と、目に淚を帶びて）然し、約束に背くやうだが、お前をつれて行くことは出來ぬ。――わしも、もう、戀にさわぐほど若くないだけに、若し愛を受けるなら、全心の愛を受けたい。わしばかりに全心を籠めて吳れる愛を受けたい。――今が今まで、松の樹かげで立ち聽きするまで、もう一度お前に逢ふて、それが出來るか、どうか、聽きたかつた。――

佐用　（目を狹手彥の方へあげて）きツと出來ますから、どうか、つれて行つて下さいませ――わたしそれをお賴みしたいと、あなたのおあとを尋ねてゐたので御座います。

狹手　（おもい深い聲で）氣の毒だが、それが出來ぬ。と云ふのは、今の樣子を見ても分る通り、わしがきのふわしの家來の報告で知つたよりも、もツと深い事情つきの戀人がお前にはある。お前達ふたりの今の話と樣子とでも分る通り、お前がわしを愛する事が出來ると云ふのは、お前の心の實地張りから石足に對する腹いせをする爲め、位も位置もある正直なわしをその踏み臺にするも同樣だ。さう意地があるだけ、石足に對してまだ未練が深いことが分る。お前には、もうそれがもとの戀人に過ぎないと云ふたにせよ、お前の新らしい事情はまだ戀を戀するだけで濟むまでの時間を通り越

してはゐまい。まだ實際に戀しい人があるに、わしを愛したり、愛させたりするのは、浮氣なら知らず、精神上、お互ひに間男も同樣――

佐用　くツ！（と、齒を喰ひしめて、泣き聲を隱す。）

狹手　わしにはそれが出來ぬ。石足のあはれな、失望した樣子を現在目の前に見ては、なほ更らそれに忍びられぬ。――然し、お前を、おととひ約束通りつれて行けぬ樣になつた代り、今わしが思ひ付いたことをお前達ふたりに聽いて貰はう。（石足に向ひ）石足、こちらへ來い。

石足　………

狹手　（石足に進み行き、その肩をとらへて）こちらへ來い。

石足　（とらへられた肩を振りはづして）何しやアがる！

狹手　さうおこらずに――おこることがあるなら、あとでいくらでもおこるがよい。（とまた石足の手をとらへ）まア、こちらへ來い。

（と、狹手彥、石足を無理に引ッ張る。石足、いやいやながら、引ッ張られるままに進む。）

お前も少しこちらへ來い。（と、狹手彥、佐用に命ずる。）

佐用　わたしは石足さんのそばへ寄るのはいやで御座います。

狹手　まア、さういふな。（と、佐用の手を引く。）

（佐用も、無理に引かれ、優しい手に引かれつつ顏を赤くして進み、石足と舞臺中央に於いて相向ふ。狹手彥そ

の間に當る後方に立つ。）

わしは今お前達ふたりに同じことを云ふて聽かす。お前達がわしの爲めに久しい間の縁仲を裂かれたのは、わしは如何にも氣の毒に思ふ。若しわが君の使命を帶びてをらぬ身なら、この場でわしが二つ裂きにされても苦しうない。然しわが君の使命はわたくし事の爲めに妨げられぬから、わしは兎も角も寂しいままに、からだだけでも三韓へ渡るが、そのあとでは（悲しみの體で）いつ打ち死にするとも計られぬ弓矢の人などをかたきとも見ず、また戀の目あてともせず。ふたりは元の通り仲よくなつて貰ひたい。

石足　（輕蔑の意を見せて）元の通りにするなら、お佐用をも元の通りのからだにして返せ。

佐用　（石足に）元の通りにならうが、なるまいが、わたしは、もう、あなたの物では御座いません。

（狹手彦に、歎願を含みて）御もツともらしい仰せでは御座いますが、わたしは今更ら石足さんとの仲は直せませんから――

狹手　いや、元の仲にと云ふのではない――元のことは互に忘れてしまひ、今初めて逢ふたものとして、わしをお前達ふたりの仲う人に見て貰ひたい。

石足　（ますます輕蔑の調子で）そんなたわけた眞似事が出來るものか？

佐用　（いよいよ歎願的に）わたしは石足さんを根本思ひ切りますから――

狹手　それでは、わしが困る――わしばかりが罪人てならねばならぬ。

石足　知れたことだ。お前さへなかつたら、お佐用は穢れはせなんだのだ。——お前は浪の藻くづとは思はぬと云ふたが、お佐用は、もう、あくぞ藻くぞだ——三韓までも新羅までも、そのあくぞ藻くぞを拾ふて行け！

佐用　どうせ浮氣をしたも同前な女ひとり——拾ふたと思召し、御一緒につれて行つて下さいませ。

狹手　（深き苦悶の色を見せて、半ば獨り言の樣に）如何に知らずに行ふた事とは云へ、その結果は間男と同じ罪惡——良心が責める！　お佐用が事を隱してゐたのがうらめしい。ああ（と、兩手を廣げて天を仰ぎ）たとへふたりに恨まれても、わしも亦（と、下を向き兩手を胸に當て）心の底には、深い恨みが殘る。——ふたりがさう云ふつもりなら、もう、この上にわたしの力は及ばぬ。——ああ！かうしてゐるに堪へられぬ！（と、石足の前を通つて、下手へ行きかかる。）

佐用　（一步を進めて）狹手彥さま！

狹手　………（無言で、一步。）

佐用　（また一步して）狹手彥さま!!

狹手　………（また一步。）

（狹手彥、佐用、下手へ進むに從ひ、石足は、それをおそろしい憤怒の目つきで見ながら、一步づつ上手へまわる。）

佐用　（また一步。）狹手彥さま!!!

狹手　（踏みとまりて、脊を向けたまま）もう、聽くことも、云ふこともあるまい。（と、うらみを含む聲。）
佐用　いえ、云ふことは澤山御座います。（と、調子を低め、顫はせて）澤山あつて（と、半ば獨り言の樣に）
胸一杯！（と、溜め涙をこぼして、横を向く。）
狹手　（見向きもせず）聽く耳はない！（と、急ぎ行からとする。）
佐用　（あわてて）まア、待つて下さいませ！（と、驅け行きて、すがり付く。）
石足　ああ！（と、上を向き、兩手をかしらにあげ、髮の毛を燒け握りにして）おれの運命もきまつた！
いツそのこと、三韓の奴となつても、あの狹手彦とお佐用とを射殺して見たい！（と、悔しさうに、
よろよろしながら、上手の後方に退場。）
佐用　待つて下さいませ。待つて下さいませ。
（と、佐用、狹手彦の胸に顏を當て、兩手を同人の周圍にまわして、舞臺中央に引ッ張つて來る。狹手彦、情愛
にほだされ、佐用のするがままになつてゐる。）
佐用　（狹手彦を胸から見あげて）わたしの隱してゐたことが惡かつたので御座います。どうか許して下
さいませ。
狹手　……（返事をしないで、上から佐用の顏を見つめる。）
佐用　ええ（と、見あげたまま、歎願的に狹手彦をゆすり動かして）どうか許して下さいませ、そしてわ
たしをも一緒につれて行つて下さいませ。ええ――ええ、ええ。狹手彦さま。

狹手　……（返事をしないで、兩眼に淚――その一滴が下から仰いでゐる佐用の頰に落ちる。）

佐用　（も釣り込まれて）狹手彥さま！（と、情の籠つた訴へ聲。）

狹手　ああ！（と、佐用を兩手で押さへて、天を仰ぐ。淚、その頰を傳ふ。）

佐用　返事がないのは、矢ツ張り、わたしを憎いので御座いますか？（と、淚を目に一杯。）

狹手　（右の手をあげて、仰いでゐる自分の兩眼を拭ひ、下を向いて、左りの手で佐用を押へたまま、右の手の袖を以て佐用の淚をも拭つてやり、急に）ああ、これまでだ！

（と、佐用を右の方へ押しのけ、自分は上手へ離れ、仰向き加減に胸をそらして、佐用に背を向ける。かの女は下手へ來て、自分でも兩手を目に當て、狹手彥に背を向けて、下向きになる。いづれも烈しい苦痛の呼吸。――無言を破る浪の音、舞臺の前面に白浪寄せる。――山麓に、空手の人夫、あまた、上手の方へ歸つて行くばかり。貝の音が下手から響く。）

狹手　（貝の音に氣が付いたこなし）あのほらの音は、出發の第一合圖――第二の合圖が鳴れば、直ぐ船出。――

佐用　（あわて行きて、また狹手彥にすがり）一緒につれて行つて下さいませ！

狹手　（强い聲にて）ならぬ。

佐用　可愛いとは思し召しませぬか？（と、やわらかに狹手彥を見あげる。）

狹手　（わざと見ぬ振りして）可愛ければこそ、この苦痛！　一生の思ひ出！　わしはこれで本望だ。

ただ殘念なのは、石足があつたのを知らなかつたこと――必らずしも意地張りで浮氣ツぽいお前の落ち度には限るまいが、おれを無情とは恨んで呉れるな。君命を帶びたこの身が、使命の途中で、人の女を取つたと云はれるのは、わが君に對して申しわけがない。わしがことはさらりと忘れて、あの石足と元の通りになつて呉れ。――賴む！（と、佐用を誠實な目つきで見る。）

佐用　（左りの手で狹手彥を捕へたまま、右の手で自分の領布の端を握りながら、目を下に向けて）さう云ふ優しいお心を承はりますと、なほ更石足さんに歸れません。

狹手　それは却つてわしの苦痛を增すばかり――

佐用　わたしも苦痛は增すばかりで御座います。

狹手　同じ苦痛を受ける樣になつたのも、お前とわしの戀の運命（うんめい）――たツた一夜が一生の別れ――どうせ、三韓のいくさで死ぬか生きるか分らぬ身を（と、急に早足になり）必らず恨んで呉れるな！

（と、佐用を上手へ押しのけて、下手へ驅けゆかうとする。）

佐用　狹手彥さま！（と、追ひかけ、またすがりつく）つれて行つて下さい！

狹手　放せ！（と、佐用を力強く押しのける。佐用、舞臺中央のところでよろけ行きて、倒れる。）

佐用　はア！（と、泣き崩れる。）

狹手　（あはれみの目つき深く、佐用の方を見て、而も强い調子で）わしの方がさきへ戀を戀する身とならうぞ。

（狹手彥、下手へ退場。山麓を兵士數名、急いで、下手へ行くのが見える。そのあとにつづく人影なし。浪の音。白浪の寄せ。――第二の合圖、貝の音聽える。）

佐用　（そのほらを聽いて、起きあがり、狹手彥のゐないのに氣づき）あのほらの音が、もう、出發？――つれて行つて下さい！（と、懸命の樣子にて、下手へ[illegible]這入る。）

（石足、上手の奧より、苦痛に疲れ切つた樣子、髮を亂だし、半ば狂亂の體にて登場。あとより漁師二名、髮を後ろで藁結びにし、徒足で追ふて來る。）

石足　（舞臺中央に來たり、兩手で自分のかしらの髮の毛を燒けに握り、無念さうに）もう死ぬまでだ！　死ぬまでだ！　おれの爲めには、海も涸れた――松原（まつばら）も消えた！　戀をしたのはこの腕か？（と、右の手で左りの腕をなぐる。）この胸か？（と、兩手で胸をなぐる。）ええッ！（と、身をもがいて、砂上に倒れ、投げ出した兩足で砂に足ずりする。）

漁師甲　それ見たことか、石足、とうとう、あの薄情なお佐用に棄てられたではないか？――とうとう、棄てられやアがつた。

漁師乙　棄てられたも、棄てられぬもない――大伴氏とお前とでは、月にすツぽん、丸で釣り合ひが取れぬ。

漁師甲　お前達はみな因業（いんごふ）もの――お前がお佐用に棄てられたら、お佐用はまた大伴に棄てられた。

漁師乙　お前達夫婦があんまりえい氣になつて、愛だとか戀だとか、――

漁師甲　とこよまでとか潔白とか、——
漁師乙　珍文漢なことばかり云ふて、村のもの等を馬鹿にしたから、——
漁師甲　さう云ふと、お前達はおれ達のそねみねたみだと申しわけをするが、さうではないぞ。
漁師乙　その報いは覿面に來て、お前達からお前達の身を持ちくづして行くではないか？
漁師甲　お前は酒ばかり食らうて、遊女におぼれ、——
漁師乙　お作用は他の男とくツついて、その男からも見限られた。
漁師甲　それも止むを得ない應報——村の名物、お姫さま夫婦がなくなつて、惜しい物だ。——氣味がよい、わ。
漁師乙　氣味がよい、わ。
漁師甲乙　は、は、は、氣味がよい、わ！
（漁師甲乙、こはごはそばへ行つて、石足をからかつてゐる。）
石足　ちェ——あ、あア！（と、聲をあげて悔し泣きをする。）
漁師甲　何を泣くのだ？
漁師乙　何を吼えるのだ？
漁師甲　お前も男なら、村のものと一緒に働らけ。こら！（と、右から石足を蹴り）きのふけふの樣な急がしい日にも、お前ばかりはぐたり、ぐたりとなまけやがつて！

漁師乙　こら！（と、左りからまた蹴つて）男なら、しツかりせい。こんななまけ者があるのは村の名折れだ。

漁師甲　村中での力持ち、眞面目なかせぎ手と云はれたものが、笑止にも、このざまは何だ！（と、右から石足の頸をはねて、左りへ倒す。）

漁師乙　こら！（と、左りからまた石足の頸をはねて、右へ倒し）お佐用に棄てられたのが悔しうて、さうのめのめとなまけるくらゐなら、いツそくたばつてしまうがよい。

石足、漁師兩名のするがままになつて、悔しさと悲しさとをこらへるこなし。

漁師甲　丸で死んだも同樣だ。――つれて行つて、村のものらに見せてやらう。

漁師乙　それがおもしろからう。

漁師甲　さア、しツかりせい！

漁師乙　さアおきろ！

（と、兩名、左右よりおもさうに抱き起す。）

石足　（起されるが早いか、たまりかねた樣子で）もう、おれのいのちもない！（と、あぶなツかしく、踏み出して、浪打ちぎはへ進み入る。浪、石足の裾を濡らす。）

漁師甲　あぶない！

漁師乙　あぶない！

（漁師甲乙、異口同音に叫んで進み行き、石足を左右よりとめる。下手より、貝の音、漕ぎ出した船船より數多く起る樣子。）

石足　（聽き耳立て）お佐用も出たか？――もう、死ぬまでだ、放して呉れ！　放して呉れ！

（石足、兩人の手を振り切つて、浪ぎはをうろつく體にて、下手へ這入つて行く。漁師甲乙も、『あぶない、あぶない』と云ひながら、そのあとについて這入る。下手より、諸船の貝の音、少し遠く響く。）

佐用の聲　（下手より、遠く）つれて行つて下さい！

（貝の音、一段遠く響く。）

つれて行つて下さい！　（と、少し近くなる。）

（貝の音、さらに一段遠くなる。）

つれていつて下さい！（と、また一段近くなる。）

（貝の音、ずツと遠くなる。佐用、登場。）

佐用　（沖の方へ目と心とを奪はれて、血色靑白くなり、兩手で浪うつ胸を押さへ、左りの方へからだを傾け進みながら）つれていつて下さい！

（佐用、息ぐるしさうにして、舞臺中央に來たり、目を沖の方へ据ゑて、なほ上手へ寄つて行く。浪の音、白浪の寄せ。）

石足の聲　（下手より）お佐用、お佐用！

漁師甲乙の聲　（下手より）待て、待て！

（石足、下手より半ば嬉しさうな狂亂の體にて、登場。舞臺中央まで驅けて行つて踏みとまり、じッと佐用をみつめる。漁師甲乙、跡より駈け來たる。）

漁師甲　待て、石足。

漁師乙　つかみ合ひでもする氣か？

（と、兩名、石足を左右より引きとめる。佐用、それに氣が付くと、驚いて、その前方を下手へまわり、石足はまた漁師兩名に引かれて、佐用の行動と同じ速度で、後方を上手へまわり、石足、佐用、ずッと開らき合つて、向ひ合ふ。しばし無言。白浪の寄せ。）

佐用　（石足の様子の變つたのに驚いたと云ふ樣子で、早口に）石足さん、その樣子はどうしたので御座います、秋の景色が急に變り行く樣な？

石足　（少し顔色をやわらげて）お佐用、つれに離れた秋とんぼの樣にゐ殘つて吳れたか、許して吳れ！みんなおれがわるかつた。

佐用　惡いも惡くないも――（と、やわらかに云つたが、氣を變へて、横を向き、あはれむ樣な、悲しむ樣な、然し強い低い聲で）あなたを愛したのは、もう過ぎ去つたこと――今更らわたしの心は動かせません。

石足　（漁師兩名にとめられてゐるからだをもがきながら）では、矢ッ張りおれを棄てたのか？

佐用　（石足の方へ向き、はッきりした悲しみの聲で）棄てたのは、あなたもわたしもつらい同じ事情！　石

とも化したわたしの心、今更ら動くわけは御座いません。（と、沖の方へ注意をやる。）

石足　では、これが最後（さいご）・お佐用！

（と、石足、飛び出して、なつかしさうに、佐用に抱きつかうとして進む。漁師兩名、それをとめながら、ついて進む。佐用、ふり向いて、渠等を舞臺の後方から上手に避ける。石足は、漁師兩名に取り押へられながら下手より佐用を見つめる。佐用、沖の方ばかり見て、足も浮きさうな樣子。そよ風吹き來たりて、佐用のころもを拂ふ。）

佐用　（沖を見つめて）つれて行つて下さい！　つれて行つて下さい!!　（と、叫びながら、上手、巖のそばへ驅け行き、巖の上にのしかかつて、最も熱心な見つめ方をして）狹手彥さま、つれて行つて下さい!!!

（と、顏をうは向き加減につき出して、右の手で領布を振る。石足、砂上に、佐用の方を向いて、足を投げ出し、悔しさうに顏を下手前方に向けて、足ずりする。漁師兩名、氣味がいいと云ふ見え。白浪の寄せ、浪の音にて幕）

（明治四十二年十月）

閻魔の眼玉

人物

貞觀（大德寺和尚）　三十五歲
鈴子（藝者のあがり）　二十七歲
婆アや　六十二歲
　外に、小學生數名

時　は盆の十六日、午後九時から十一時。
場所　新宿大德寺の庫裏。

（寺の庫裏をそとから見た體――その奧、緣がはを離れて、大きな榎の木の立ち樹が一本見える。十疊の間、上手は一間の二枚帶戶で仕切られて、處どころに隣り、下手は矢張り帶戶であるが、あけたての必要なし。その戶に添ふて、本箱の古いのや新らしいのがいくつも並んでゐるが、古いのが多い。古い蓋には『經文』と書いてある、新らしいのには、『法律書』、『經濟書』などある。或本箱の上に置き時計。或本箱の上に小い長方形の桐の箱、これには閻魔の眼玉が二つ這入つてゐるわけだ。大きな机が奧を向けて置かれる。

（上手、戶に添ふて、鏡臺が据わつて、御園お白粉、四季の花、鶴香水の瓶などが載つてゐる。うこん木綿の袋に這入つた三味線がかかつてゐる。衣桁には、派出な女の衣物がかかつて、赤い裏を見せてゐる。

（緣に近く、少し上手へ寄つて、一閑張りの食卓、燗德利と御馳走とが載せてある。そのそばに、小說の雜誌を明けてふせた經机がある。部屋の眞ン中から電燈。

（和尙貞觀、五分刈り頭、背は低く、圓ッこく肥え、白つむぎの單衣に白の四角な帶。食卓の下手でうちわを使ひながら、もう、大分醉つてゐる。それと相對した席に、これもうちわを持つて、立て膝した鈴子。白縮緬に墨繪で浪に千鳥の浴衣を素肌に着て、藍紫の博多の一本どッこの帶を半幅にくけたのを帶あげなしにヤの字に締め、髮は薄手の、下鬢、髱のよく出たいてふ返し、ばらふの鬢櫛、釵は翡翠の金あし。背はすらりと高い方、色の白い、鼻筋の通つた細おもて、少し險がある。

（鈴子、德利を持つて、貞觀に酌をしてゐるところで、猿芝居の太皷と共に幕が明く。）

（一）和尙、鈴子

和尙　（鈴子の酌を受けて）おい、鈴子、お前もッと飮め――さッぱり醉はないぢやアないか？

鈴子　（笑ひながら）あたし、いくら飮んだッて、醉つたりすることはない、わ、ね、あなたのやうに――

和尙　おれだッて酒にかけちやア、さう弱い方ぢやアない、傳通寺も、最明寺もこの大德寺の貞觀に會つちやア、みな閉口（へいこう）するのだ。

鈴子　それでも、直ぐ赤くなるだらうぢやアないか？

和尙　（も笑つて）そりやア、おれのからだが丈夫なせいだ。

鈴子　でも、丸でゆで蛸（だこ）のしやちこばつたと云ふ體よ――背が低くッて、圓ッこいから。

和尚　馬鹿云ふなよ――傳通寺や最明寺はまだ酒のことを般若湯、どぢやうのことを踊りツ子など云つてる不開化な坊主どもだ――酒を飲むなら酒と云やアいい。牛肉を食ふなら牛肉と白狀すりやアいい。おれなどア酒も、酒も、極上々の酒を飲んでるぢやアないか？　肉も上肉、ロースでなけりやア喰はないぢやアないか？　さしみは鮪、鹽燒きは鯛――

鈴子　（少し氣取つて）　猫にかつぶし、犬に骨でしよう？

和尚　さうだ、は、はア！　（と、大きく笑つて、置いてある猪口に手を持つて行く。）

鈴子　（酌をしようとして）あなたはほんとに墮落坊主、ね。

和尚　…………（見とれて出した猪口を落す。）

鈴子　（びツくりしたふりをして）どうしたんです、ね？

和尚　（にこつきながら、また猪口を出し）お前はいつ見てもいい女だよ。

鈴子　（微笑して酌をしたからだを引き）あたしの顏からお酒は出ません、わ。

和尚　酒は出ないでも、愛嬌が出る――まア、もツと飮めよ。（と、自分の猪口を飲み乾して鈴子にやり）おれがまたお酌してやらア、ね。（と、德利を取つてついでやり、鈴子の顏を見ながら）お前は、いくら飲んでも、顏が赤くならない、な。

鈴子　（あまツたれた口調で）あたし、醉はない性ですもの――赤坂では隨分繁盛したでしよう。澤山のお客の中には、面白い人があつて、小鈴を一度醉はしてやれと云つて、無理に飲ますのよ。しまひ

には、いやと云ふのを、無理に口を明けてつぎ込むのですもの――あたしも意地になつて、コップでなまを二三杯引ッかけてやつた、わ、ね。それでも、醉はなかつた、わ、殺して飲むから。

和尚　酒は醉ふものだ、それを殺して飲むなどとは、不經濟極はまる――飲めよ。飲んで、醉はうぢやないか？　醉つたら、歌はうぢやアないか？　歌つて疲れたら、寢ようぢやアないか？　へん、それが當世だ！（と、食卓の上に頬づゑを突き、鈴子を橫目に見ながら）あの糞坊主どもの顏を見ろ、靑菜に鹽と云ふ奴ぢやアないか？

鈴子　ぢやア、あなたはさし當り布袋さんを朱で塗りこくつたと云ふ役割りだ、わ、ね。

和尚　ゆで蛸がまた布袋になつたのかい、お前はいろんなことを云ふ、なア――この貞觀先生が（と、頬づゑを解いて、少し威猛高になり）太つて血色のいいのは、うまい物を喰ひ、上等の酒を飲み、お前のやうないい女の手も握れて、血液の順環がいいせいだ。人間がそれ以上何の望みがある？　どうせくたばつてしまやア、天上天下唯我獨尊などと意張つてもゐられまい――一切空だ。昔の一休も敎へた通り、極樂は死んでから行くところではない、生きてゐる間に出來るだけのことをやることだ。それが當世だ。

鈴子　（一つあくびをして、うちわを投げ、長煙管を手に取りながら）當世ついでに、いツそのこと、あなたが銀行の重役か、大きな商人にでもなつたら、あたしもその立派なおかみさんで結構だが、ねえ。

和尚　（大分舌がもつれて來て）坊主も商賣だぞ――宗敎や宗旨とは、こツちが聽いて呆れらア、ね。（と、

うちわを投じてぐにやりと立ちあがり）何が宗教だ――何が宗旨だ？世間では、おれをくそ坊主など云やアがるが、くそ坊主などとはおれぢやアない――傳通寺や最明寺のことだ――藝者買ひの出來ない坊主のことだ。あいつらは（と、鈴子に向き）お前を引かしてから、おれのところへ來なくなりやアがつたが、あれは燒くからだぞ。結局おれの仕合せだ、な、鈴子、それだけ無駄な酒が入らなくなつて經濟ぢやアないか？

鈴子　（和尙の方を見あげながら、煙管の煙を吹き）なか〳〵勘定高いの、ね。

和尙　さう、さ――おれは商賣人だ。神も佛もあつたものか？おれが一つ踊つて見せる。（と、よろけながら、座敷の眞ン中の方へ歩み）おい、婆アやも來いよ、おれがうまい泥鰌踊りを見せてやらア。

（二）　婆アや、和尙、鈴子

（婆アや、上手、二枚帶戶の前方のを明け、燗の出來た德利を持つて、登場――背の圖拔けて高い、骨格の逞しいおほ女、木綿着だが、前かけだけは鼠色の縮緬。）

婆アや　（つツ立つたまま）大相、はア、御機嫌だア。

和尙　（立つたまま、婆アやをふり返つて）婆アさん、おれが一つ踊つてやらう。（と、ひよろけながら）何がよからう？――まア、そこへ坐われよ。

（と、變な手つき。）

婆アや　へい、へい。（と、腰を後ろへつき出す。）

鈴子　（笑ひながら）婆アや、旦那が『かつぽれ』を踊るのだとよ。

婆アや　（德利を食卓に置いてから、上手へをかしな風で坐わりながら）はア、結構でがす――旦那のはいつも、はア『かつぽれ』でなけりやア、『ゆふぐれ』でがすべい。

和尙　（婆アやに）まだあるぞ。（と、ひよろひよろと膝を碎いて、座敷の眞ン中へ正面を向いて腰を落す。）

婆アや　へい――

鈴子　『すててこ』だらうよ。

婆アや　さうかい？　それを、はア、旦那、婆アさんに一つ拜見させて吳んなさろ。

和尙　それもいいが、けふは閻魔のお祭日で、あの通り、（と、下手奥の方へ左りの手をつき出す。）猿芝居の太鼓も鳴つてゐて、馬鹿ものどもが澤山お賽錢をあげて吳れるのだから、それに免じて、おれはおれの商賣上今夜だけ三味線の音を遠慮してやるのだ。三味線が引けなけりやア『すててこ』も踊れないが――どうだ、婆アや、おれもかけ引きのうまい商賣人だらう。――神も佛もあつたものかい？

婆アや　さうだともよ、――さうおツしやれば、はア、人間は何か可にか商賣をしておらア、ね――奥さんはいきな藝者商賣をしてゐたし、旦那ば、ばア、お寺さんが商賣だア――おらがのはまた下女、臺どころが商賣でがすべい。

和尙　さうだ。さうだ。（上手へ向き）婆アやが臺どころの神さまなら、この（と、鈴子を指さしながら）奥

さんがおれの佛だ。

鈴子　(煙を吹いて)そして、旦那は?　(あくびをする。)

和尙　おれか?　(と、鈴子に向ひ、自分の鼻をゆび指しながら)　このおれさまは――閻魔大王だ。

鈴子　でも、こわくもおそろしくもない、わ、ねえ――(と、首で念を押して婆アやに云ふ。)

和尙　(が、それを引き取つて)　そりやア、おれがお前の色男であつたからだ――お前の好きな旦那であつたからだ。お前が赤坂で勤をしてゐた時は、あツちからも、こツちからも(と、手眞似をして)　引ツ張りだこであつたと云ふぢやアないか?　あツちでも、こツちでも、金を山のやうに積んで(と手眞似)お前を引かせようとしたと云ふぢやアないか?

鈴子　(膝を左りと右と立て直して)ええ、さうですとも。(と、婆アやと顏を見合はして、冷笑。)さう云ふいいお客に肱鐵砲を喰はせてまでも、旦那のところへ來たのですから、あたしも、もツと贅澤をさせて貰はなけりやア詰らない、わ、ね。婆アやにだつて、ねえ――(と、婆アやとまた顏を見合はせる。)

婆アや　(鈴子に調子を合はせる心で)　ええ、ええ、奥さんがお出來になつてからと云ふものア、はア、おらまでも晩には早寢が出來るところへ持つて來て、おらがの商賣も、はア、ちよツくら繁昌して、實入りも大變澤山になつたから、まことに、はア、結構でがすよ。このぞべらぞべらした前かけも(と、自分の膝を見て)　奥さんに戴いたんだ。ならうことなら(と、笑ひながら)もツと旦那が奥さんの御

鈴子　（和尙に云ふつもりで婆アやに）それでなけりやア、坊主なんて、詰らない、わ、ね。

和尙　（鈴子に）そんな可哀さうな事を云ふな――おれだツて、けちな金でお前を引かせたのぢやアない。引かせてからも、お前の仕たい放題にさせてある。婆アやにも、長年この寺に働いてゐるのに面じて、おれの惡事を世間へ云ひふらさない約束で、お前から心づけをさせて置くぢやアないか？

鈴子　あたしもあなたにお酒は飮みたいだけ飮ませてあげてるでしよう。

婆アや　（和尙に）旦那、冗談でがさア、な――この婆々アの慾張りは。

鈴子　（婆アやに）あたしがこんなところにゐるのも冗談よ。

和尙　さうだ（と、正面に向き、醉ひに苦しんで）浮世のことはみな冗談だ。おれが閻魔の大きな木像を閻魔堂にかざりつけて、十六日のお祭日をするのも冗談だ。あの見ツともないざまを見ろ――から兩眼をむき出して、（と、自分の目を正面に見開らき）から口をひろげて、（と、兩手の指で自分の口を廣げ）馬鹿ものどもにから意張りをしてゐやアがる。――おれが本當の閻魔大王だぞ。（と、立ちあがつて、威猛高になる。）

婆アや　では、はア、嘘を云ふと、旦那に舌を拔かれべいか？

和尙　（婆アやに向き）いや、この閻魔は嘘を云ふ――商賣の掛け引きをする。地獄の釜の蓋が明くとは、何のことだ？　それも嘘だ。ありもしない地獄へ行つて、澤山ついた嘘が帳消しになるとは、何のことだ？　それも嘘だ。嘘だと思つても、馬鹿ものどもは氣休めにお詣りをする――それも嘘

だ。嘘の氣休めにつけ入つて、おそろしさうな眼玉をむき出させて、澤山のお賽錢を捲きあげる―
―それも嘘ごとだ、冗談だ。

鈴子　（笑ひながら）　ぢやア、閻魔さんはこわいだけで――丸で藝者、ね。

和尙　（鈴子に向いて）　さう、さ、木像の藝者だ。は、、はア！　（と苦しさうに正面に向って腰を落す）

婆アや　（少し眞面目に）　餘り、それぢやア、はア、勿體ねいぢやアなかんべいか？

和尙　（婆アやに向き）　何が勿體ない？　ぢやア、婆アやはあの閻魔から一文でも貰つたことがあるかい？

婆アや　（笑って）　そりやア、はア、動かねい木像だア――一文でも、手を出して吳れることア御座りましねいが――

和尙　信心なんて、木像にやア――如何に大きな木像でも――聽えもしないよ――見えもしないよ。現在、こないだ、あの木像の眼玉を兩眼とも盜んで行つたものがあるではないか？　閻魔にたましひがあつたら、『どツこい、やらぬ』と（手眞似）　引ツ捕へたに相違ない。この頃は物騷で、――眼玉の方は、鈴子が來てからのことだから、（と、鈴子を見て）お前も知つてる通りだ。――お不動さんの脇立ちの制吒迦童子と衿羯羅童子とを、二ケ月前に、米屋の長吉の荷車に乘せて盜んで行つたものがある。それもまだ見付からないのに、またお閻魔さんの眼玉を盜んで行きやアがつた。――盜む

魔の眼玉と來ちやア、（あたまを下げて）「盗まれました」と警察へ訴へて出ることが出來ない　大徳寺

は榎の木の下と云はれて、あの大きな榎の木と（奥の木を指さし）共に名高いお閻魔さんだ——東京中でも、一、二番に繁盛する閻魔の威光に關するらア、な。いやでも、應でも、これは世間へ知らさないで、こツそりと金細工屋へ云ひつけて、おれが自腹を切る必要があつたのだ。

鈴子　（あくびをしながら）よしんば、訴へて出ても、盗まれたものが返つた例しはない、さ。

婆アや　それでも、はア、どこかでそのお罰が當つてるに違ひねいだよ。

和尙　罰どころか、福があつたらう　——あの大きな眼玉は金むくだ。あれを二つ潰し賣りにしたら、右に新橋の、左りに赤坂の藝者を二人立派に受け出すことが出來る。どこへ持つて行つたか、實に不埒な泥棒だ——鈴子を受け出した金と、盗まれた眼玉を金細工屋へあつらへた金と、おれにこの二重の費用をかけさしやアがつた、このたツた二三ケ月間に、なア。

婆アや　本當に惜しいものだアね。

鈴子　…………（あくびばかり）

和尙　惜しい、さ——おれが鈴子を受け出してからまだ二十日と立たないうちに、——ああ、鈴子——（と、急に鈴子へ向き）おれはまだ疑つてゐるが、お前が二十三歳とは嘘だらう——それだけは、どうもお前の云ふことが信じられない。お前の云ふことはほかのことなら何でも本當だが、歳だけはどうも二十三には見えない——二十六か（と考へて）二十七だらう。

鈴子　（顏をしがめて、とぼけた風に）また、うるさい、ねえ――

和尙　おれはお前が可愛いから、念を押して置くのだ――本當か？（と、鈴子を見てよだれを流し、氣がついて、それを手で拂ふ。）

婆アや　（鈴子を合圖するやうに見て）そりやア、はア、旦那、奧さんは二十三にしても若いだよ。

和尙　（不審らしく）さうか、なア――（と、鈴子の顏を見つめる。）

鈴子　（婆アやの顏を見ながら）それも、ねえ、商賣は見切り時がある、わ、ね――はばかんながら（と、わざと氣取って）二十七までも、八までも、まごついた玉ぢやアないよ。

婆アや　さうだ、さうだ。――おらア、もう六十二だアから、下女の見切り時だア。

鈴子　見切り物に掛け價なしとして置いて、さ――さて、それから？（と、あくび。）

和尙　さて、それからと――えい、話の續きは何であつたツけ、なア？

鈴子　金めツきの換へ玉のこと、さ、お閻魔さんの。

和尙　あ、さうだ。でも、ありやアめツきではないぞ――鈴子を受け出してから、まだ二十日と立たないうちに、またそれくらゐの費用がかかつた。それも重たい中まで金むくの眼玉にしなかつたから、やツとそれくらゐで間に合つたので――今度拵らへた眼玉と云ふのは、大きな純金の玉と云つても、中はがらんどうだ。

鈴子　ところが、ね、（わざと平氣で）ありやア、お氣の毒だが、純金ぢやアないよ。

和尚　いや、金だ。
鈴子　中ががらんどうなのは本當だが、めツきだよ。
和尚　そんなことがあるもんか――現におれがお前にまかせて、さう金細工屋へかけ合ひをさせたのぢやアないか？
鈴子　（一層平氣で）だから、あたしが委せて貰つて、めツきにさせて、金細工屋からも、あなたからも、しこたまコンミツションとやらを取つてやつたの、さ。
和尚　（呆れた樣子、暫らくして）ひどいことをする奴だ！
鈴子　（婆アやに）元の通り中まで金むくにして置きやア、たとへつぶしにかけても、價うちがあつたのに、ねえ――もツと、もツと好きな物が買へて、さ。
婆アや　本當に、はア――でも、無いよりやアましだア、ね。
和尚　（びツくりしたやうな顏をして）馬鹿！　無かつたら、たまるものかい――商賣が出來まい。それにしても、めツきであつたとしたところが、そばへ寄つて調べて見るものはなし、價うちが分るものぢやアない。
鈴子　（大きなあくびをして目をしよぼしよぼさせ）でも、每晚、夜なかにお閻魔さんの目のくり玉をはづして、每朝、また塡めに行くのは滑稽、ね。
和尚　（少し醉ひに弱つて來た樣子で）滑稽だツて、それがおれのたツた一つの仕事ぢやアないか？――

さうしなけりやア、この頃のやうに物騷な世の中に、いつ、また、盜まれるかも分らない。世は澆季、末世になつて來たものだ――生き馬の目のくり玉を拔くと云ふことは昔からよく云ふが、何百年と威光が傳はつて來たお閻魔さんの眼玉を盜むやうな不埒な奴が出るやうになつた。ああ澆季、澆季――末世、末世――『財あれば財を憂ひ、宅あれば宅を憂ひ』と云ふことがあるが、な、おれはあの眼玉の爲めに、毎晩、氣が氣でないのだ。

鈴子　（立て膝のたりを右に直して）あなたの商賣も、なかなか骨が折れますわ、ね。（と、冷笑。）

和尙　骨が折れるとも、さ――朝の看經などは、おれは、もう、面倒臭いから、してゐないが、毎朝、人の出ないうちに閻魔堂へ閻魔の眼玉を入れに行き、毎晩、人の寢靜まつた頃を見て、またそれを拔きに行くのだ。人はみなおほいびきか、氣持ちのいい夢を見てゐる間を、おれは仕事をしなけりやアならない！　まるで泥棒と眼科醫を兼業してゐたやうなもの、さ。けれども、純金でなけりやア、もう、今夜からそんな馬鹿々々しいことはしない――ほんの、めツき細工だと云ふなら。

鈴子　（目をしよぼつかせながら、微笑して）でも、それがあなたの商賣であつたの、ね――何でもなかつたぢやアありませんか？

和尙　（とぼけた眞面目で）それが、然し、氣が氣でなかつた――うかうか寢つかれもしなかつた。

婆アや　御もつともだア、ね――何ぼがらんどうの金でも、奥さんの身受け代に相當すると云やア、大したものだんべい。

鈴子　（婆アやに）まだしも純金なら、さ。（笑ひながら和尚に）でも、あなたは、ゆふべ、あの若いのに人をよひからとこに入れて、さ、けさは、十一時までも寢坊したぢやアありませんか？

和尚　お前が寢坊なんだ――お前はおれが眼玉を拔きさしするのをいつも知りやアしないだらう。あの役目さへ忘れなけりやア、一ン日寢てゐても、かねは獨り手に儲かるのだ。

鈴子　いやな商賣もあつたものだ、わ、ね。

和尚　いやでも、應でも、さ、お前とおれとは、夫婦だ――けふは、一年中の儲け時で、今夜中にあがる金が何百圓、それをみなでもお前に呉れてやらア。

婆アや　結構だア、ね、奥さん。

和尚　それに、あのおほ榎の木も、（と、奥の方を指さし）もう、賣る約束が出來てるから、金が這入つたら、お前の欲しがる指輪（ゆびわ）とブぃーチを買つてやる――は、は、はア――この貞觀は閻魔大王といふ金滿家の商賣人、さ。

婆アや　本當に、はア、この寺は澤山お金があがつて、結構だァ。

和尚　おい、鈴子、（と、にやりと笑つて、ひよろけて、立ちあがり）お前は結局どう思ふ？

鈴子　（あくびをしながら）どう思ふとは？　（と、和尚を見あげる。）

和尚　おれと云ふ（と、自分の鼻を指さし）ものを、さ？　（と、鈴子を見てぐにやりとした風。）

鈴子　（笑つて）矢ツ張り大德寺と云ふお寺の和尚（をしやう）さんよ。

和尙　ええ――（と、右手であたまを押さへて、間のぬけたやうに、自分の立つてゐる姿を見まわす。）

鈴子　おほ、ほ、ほ！（うちわを口に當る。）

婆アや　あは、は、は！（と、胸をそらせて、兩手を後ろに突く。）

和尙（眞面目腐つて）何がをかしいのだ？（と、食卓の方へ向つて歩みながら）いくら說法しても、お前達にやア分らないのだ。（と、もとの席へ返つてあぐら。）おれは經文が餘り好きでないから、法律書や經濟書を讀んだし、あたまだツて、全く（と、あたまへ手を持つて行き、五分刈りを撫でて見て）坊主あたまにしてゐるぢやアなし、衣物さへあの紳士風な方のに着かへれば、どこへ出ても坊主と見える筈がない。

鈴子（あくびをして）『ない』どころか、ね？――あれを着せて、一緒に三越や白木屋へ行つても、無格恰ッたら、ない、ねえ。

和尙　そんなことがあるものか？

鈴子　まア、御覽よ。（と、勢ひづき）こんなに（と、自分の首をすツ込めて）首を引ツ込めて、さ――こんなに（と、自分の襟を兩手でかき廣げて）胸を出して、さ――

和尙（少しいやな顏をして）そりやア、おほげさ過ぎる、さ。

鈴子　でも、見られたざまぢやアないよ――いくら氣を付けてやつても駄目――どうしても、木魚をたたいて、あば、ば、ば、と云つてる圖は拔けない、ねえ。

和尙　餘り馬鹿にするなよ。

鈴子　（延びをしながら）馬鹿だから、馬鹿、さ。——あたし、散步がてら、お祭日のお景氣でも見て來ます、わ。

和尙　ぢやア、婆やア、奧さんの駒下駄を出してあげろ。おれは讀みかけた文藝俱樂部の小說でも讀んでゐよう。（そばの經づくゑを引きよせる。）

鈴子　（うちわを持つて、立ちあがつて）何だか、今夜はいやに面白くない晚だ。

和尙　（見あげて）一年中のかツ込み日だと云ふのに？

婆アや　坐わつてばかりゐるからだア、ね——お閻魔さんのお景氣でも、はア、見て來りやア直るだんべい。（と、鈴子に先き立つて緣へ出る。）

鈴子　でも、猿芝居の太皷や、劍舞の三味線や、にぎやかさうだ、わ、ね。（と、つゞいて緣へ出る。）

（鈴子、婆アや、緣がはから下手へ退場。相變らず猿芝居の太皷が聽えてゐる。和尙、觀客に正面を見せ、机に肱を突いて、雜誌を默讀。）

（三）婆アや、和尙

婆アやの聲　（幽かに）行つてらしやい。（和尙、そツちを向いて、にツと笑ふ。）

婆アや　（下手、緣づたひに登場、笑つて和尙の前へ進みながら）今夜は、はア、面白いお說敎を聽いた、だ

ア。

和尙　（婆アやを見て、酒のいきを吹き、苦しさうに）ああ、醉つた、醉つた――そのお膳を下げて貰はう。

婆アや　へい、へい（と、上手から膳を方づけにかかる。）

和尙　（机に右の手をのせて、その上に半身をもたせかけて、上手前方へ婆アやを見あげながら）暑い、なア――鈴子は見に行つたか？

婆アや　ああ、行つたよ。奧さんの姿は、いつ見てもいきだ、ねえ。

和尙　（だらしなく）さうだ、ね――美人だらう。

婆アや　美人も美人、飛びツ切りの美人だア、ね。丸で天女とやらだア。――そんで、はア、庭や植木が好きだアから、奧さんが來てからは、はア、本堂裏の庭にも丈夫な垣根が出來て、小學校の生徒が梅の實を盜みに來ることも少なくなつただアに――

和尙　あんな生徒にも困る、な。

婆アや　梅の實が勝手に盜めなくなつたと云つて、はア、それを今度來た奧さんのせいにしてよ、かげぢやア、はア、やれ、くそ大黑、やれ、坊主たらしなどと、奧さんのことを、はア、やくたいもくたい云やアがるだア。

和尙　うツちやらかして置けよ。

婆アや　奧さんが別嬪だけに、子供にまで目に立つだア、ね――今夜、並んでる植木屋の店で、青い

物にかんてらの光が映つたところへ、ちよツと奥さんが、はア顔でも出して見ろよ――そりやア、はア、素的な圖だぜ。

和尚　（にこにこして）お前も隅に置けないほど氣の利いたことを云ふ、な――おれの眼玉は閻魔のよりやア確かであつたらう。

婆アや　さうだ――ああ云ふ奥さんを持つて、旦那は、はア、結構だア、ね。

和尚　は、は、はア！

（婆アや、食卓に食器一切をのせたのを兩手に擧げて、上手前方の帶戸へ行き、それを足で明けて這入り、外から締める。……猿芝居の太鼓。和尚、机を押しやり、前向きにころり横になり、下手へ向けたあたまに手枕して、膝を前方へ縮める。）

（四）　和尚、子供の聲、

子供甲の聲　（奥の方から）坊主！

子供乙の聲　くそ坊主！

子供甲の聲　なまぐさ坊主！

子供乙の聲　馬鹿坊主！

和尚　（首をあげて）何だ、やかましい！

子供甲、乙　閻魔の眼玉が、拔けてらア。
和尙　何を惡口云ふんだ！（と、立ちあがり、よろよろと正面へ向いて、腰を落す。）
子供甲、乙の聲　わアい、わアい！
和尙　（また起きあがり）閻魔の眼玉は（おのづからからだをまわして、元の向きで片膝を付き）これだア。（と、自分で目をむき、兩手で口を引きあけて見せてから）わツ、はツ、はツ！
（渠、また元の通りに寢ころぶ。石が飛んで來た音。）
何をする！（半身を起し）石など投げたら、承知しないぞ！　石など！
（和尙、苦しさうに息を吹いてまた手枕をする。やがて、玄關の方でがたがたと駈けあがる音がする。）
何しにあがつて來る！（と、首をあげる。）こら、餓鬼ども！

（五）　鈴子、和尙

鈴子　（下手、椽づたひに登場。）何を獨りで威張つてるのよ！
和尙　お前かい？（調子拔けがして）また、あの餓鬼どもがいたづらをしに來たのかと思つた。
鈴子　（俄かに）ああ、悔しい、悔しい！（と、慳貪に進んで、和尙のそばへべたりと坐わる。しがめた顏には靑筋が立つてゐる。）
和尙　どうしたんだい？（起きあがつて、鈴子と相對して、あぐら）ああ、あたまが痛へ！（ちよツと手

で押さへて、とろんこの眼で鈴子を見ながら）何て、まが悪い顔だい！

鈴子　…………（返事をしない。）

和尚　（机を引きよせて、肱を突き、首をふりながら）キミーガ、ナサケノ、カリネノートコヨ。（と歌ふ。）

鈴子　（睨みつけて）そんな下手くそな端唄などおやめなさい、どん栗坊主！

和尚　（心配さうに）何をおこつてるのだい？

鈴子　（獨りで吹き出して）おこりますとも！（眞顔になつて）大黑、大黑と云はれちやア、あたい、（あまへるやうに）いやになツちヤう！

和尚　（本氣になり）誰れが云つたのだ？

鈴子　植木屋の店で枝ぶりのいい小松の一鉢を買つたと思つて御覽なさい。人込みの中を大事に腕と袖でかばひながら來ると、どこかの絆纏着が『大黑』と云つて、あたしの持つてゐた松の枝をなぐりつけたぢやァありませんか？

和尚　それは怪しからん。

鈴子　「いけ好かない」とあびせかけてやつたら、『畜生』と云つて行つてしまつたが――

和尚　巡査にでもつかまへさせればよかつたのに。

鈴子　それだけなら、まだしもいい、さ――門を這入ると、また大變な人込みでしよう――

和尚　（にこにこして）なかなか繁盛らしい、な。

鈴子　あたしをここの奥さんと知つてるなら、道を明けて呉れるのが本當だらう——

和尚　さう、さ——おれの許しでこそ、緣日商人も店が出せる。おれが閻魔堂を明けてやらにやア、市中の者もお詣りが出來ない。

鈴子　それだのに、ただじろじろとあたしを見るものはあつても、素直に退いて呉れるものはないだらうぢやアないか、ね？　肩で押し退けるやうにして、お閻魔さんの前まで來ると、若い娘さんやお婆アさんなどが入り替り、立ち替り、お賽錢を投げてるそばで——

和尚　おい、（と、にやにやして）澤山投げてゐたか？

鈴子　そんなことが分るものか、ね？

和尚　蔭で聽いてると、銀貨か、白銅か、銅貨か、音でよく分るものだ、おれはしよツちゆう試して見たから、なア。

鈴子　どうせ、けち臭い穴錢の音だらうよ。

和尚　それぢやア、困るよ。（と、不平さうな顏つき。）

鈴子　あたしにぶつぶつ云つたツて、お門が違ふよ。

和尚　お前の小言を云ふのぢやアないが——

鈴子　ぢやア、閻魔堂の入り口に『白銅以下のはした金投げ込むべからず』とでも書いて置く、さ——で、

れ、横丁の小學校の生徒らしい男の子が二人[illegible]

た木像など拜んだツて、何になる』と云つてるの。『うちの商賣を邪魔するな』と云つてやりたくならア、ね。

和尙　そりやア、そうだとも――あの學校は敎師の仕つけが惡いので、みな品行がよくない。人の庭へ這つて、梅の實を盜んだり、おれが外出すると、なまぐさ坊主とか、馬鹿坊主とか冷かしたり――今、婆アやの話したに據ると、お前にも、蔭では、いろんなことを云つてるさうだ。

鈴子　蔭口どころか、ね――

和尙　それに、今も、その（と、手で奧を指さし）庭さきへ忍んで來て、石を投げたりして、『閻魔の眼玉が拔けてらア』などと惡口を云やアがつた。まさか、老いぼれぢぢイの入れ齒ぢやアあるまいし。きツと、さツき、おれがお前達に話してゐたことを立ち聽きしてゐたのだらう。油斷は出來ないぞ――それでなけりやア、閻魔の眼玉が一度盜まれたと云ふことを知らう筈がない。

鈴子　きツと、そいつですよ――あたし、癪にさはつたから、『お前、そんなおせツかひを云ふものぢやアないよ』と叱つたら、ね、『何だ』と、ふり向いて、こわい顏してじツと見てイたが、あたしと分つたからだらう、手を出して、『このくそ大黑』と、突き飛ばしやアがつたのだよ。

和尙　ひどい奴だ。あの學校の餓鬼どもには困る！

鈴子　『あぶない、あぶない』と、みなが道を明けたので、あたし、却つてひよろひよろと倒れかけた、わ、ね。そのとたんに、松の鉢が地べたへころげ落ちて、さんざんさア、ね。

和尙　惜しいぢやアないか――拾つて來たか？

鈴子　（いまいましさうに）そんなけち臭いことが出來るものか、ね、あなたがお布施米のこぼれたのを一粒一粒ひろふやうにやア？

和尙　それで思ひ出したが、お前、駒下駄を脫ぎツ放しだらう。

鈴子　ああ。（と、橫を向いてゐる。）

和尙　そりやア行けない――また、どんな泥的が來るかも知れない、さ。どれ、（と、立ちあがり）おれが持つて來てやらう。

（和尙、よろけながら、椽がはから下手へ退場。鈴子立て膝をして、煙草を喫ふ。やがて、和尙、女の駒下駄を右と左りにかたかたづつ持つて、再び返り來り、座敷の眞ン中まで來て、獨り言のやうに）

鈴子　取られたら、もツといいのを買ふまで、さ。

和尙　これでも（と、駒下駄のかたかたとかたかたを見比べながら）安い金ぢやアない――おととひの晩、一緖に香取屋へ行つて、あれでもない、これでもないと見てまわつたあげくで、これがお氣に召したのだ。

鈴子　（橫目に見て早口に）何しに、こんなとこまで持つて來るんだ、ね？

和尙　（びツくりして）ええツ！　（と兩手に下駄を片々づつ持つたまま、上手から鈴子に向いて兩手をひらく。）おれは婆アやに預けて置かうと思つたんだ。

鈴子 （いらいらして） 下駄箱に入れとけばいい、さ——けち臭い！

和尚 （しよげ返つて） ぢやア、さうして置かう、さ。（と、また下手へ這入り、直きにから手で出てきて）全體、おれの寺の緣日で、おれの女房を突き飛ばすことは、お閻魔さんに糞をひりかけたよりやア罰が當らア、ね。（と、もとの席に着く。）

鈴子 でも、現在、（と、また青筋を立てて）突き飛ばしたものがあるぢやアないか？

和尚 （こわさうに鈴子を見て） そりやア、あの學校のいたづらッ子だ。

鈴子 いたづらッ子でも、何でも、突き飛ばしたのは突き飛ばしたのだ、わ、ね！

和尚 だから、あの學校の生徒は仕つけがよくないと云つてる、さ。

鈴子 學校のことぢやアない！

和尚 （弱く出て） さうおれにおこりつけたツて、それこそお門違ひだ。

鈴子 （いよいよ強く） いえ、あなたです！

和尚 おれがどうした？

鈴子 あなたのせいです！

和尚 おれのせいとは？

鈴子 あなたも餘ッぽど馬鹿坊主、ね——あなたが坊主だから、あたしまでが馬鹿にされるのですよ。

和尚 おれが坊主なのは、商賣だから仕かたがない。

鈴子　そんな商賣なんか、早くよしてしまうがいい、さ。――ええツ、むしやくしやする！（と、からだを顫はせて立ちあがり）お寺なんか、いやだ――いやだ！（と、和尚の前を通つて、けたたましく鏡臺の前へ行き、ちよツと顔を寫して見て）こんな下らないとこにゐちやア、早く年を取つてしまはア、ね。（と、その前で正面の方をあたまにして横になり、和尚にそむけて、上手を向いて手枕をする。）

和尚　（あツけに取られて見てゐたのが、酒も少し醒めたやう。立つて鈴子の脊中のところへ行き、とんと腰を落して坐わり、鈴子の向ふ向きの顔をのぞくやうにして）まア、さうおこるなよ――お前だツて、引かされるまでは、うるさいほど云つてたぢやアないか――『どこのお寺の和尚さんでも、和尚さんと云ふものは奥床しくツて、あたしは好きだ』と？　それから、また、お前が藝者になる前に、お前の旦那寺の和尚さんがお前を貰ひたいと云つて、お前もお寺を好きだから行きたかつたのだが、おツ母さんやお父アんが承知しなかつたと？

鈴子　（腹這ひになつて頬づゑを突き）みんな嘘だよ――それも商賣のかけ引き、さ。

和尚　（驚いて）では、お前の歳が二十三といふのも嘘だらう？

鈴子　（目を正面に向け）知れたこと、さ――あたしの二十七がいやなら、あなたから出て行くがいい、さ。

和尚　（驚きの目を明いて）おれがおれの寺を出て行く法があるかい？

ないよ――制吒迦童子や矜羯羅童子が運んで行かれたのも、閻魔さんの眼玉が盗まれたのも、みんなあなたが野呂間のぼんくら坊主だからだよ。

和尚　そりやア、おれも悪かつた、さ。制吒迦や矜羯羅童子が盗まれたのは、赤坂でお前にうつつを抜かしてゐた時だし、閻魔の眼玉が盗まれたのは、お前とそこで酒を飲んでゐた間だ。然し、お前もさうおこつて呉れるな。ええ、二十三が二十七でもいい――云つたことが嘘であつてもいい。又さ、眼玉のめツきでおれの知らぬ口錢を取つてもだ、おれは矢ツ張りお前が可愛い。

鈴子　さう可愛けりやア（と、そのまま優しい顏を和尚に向け）お酒を持つておいで、な――くさくさするから、醉ツ拂つてやる！

和尚　それもよからう。（と、立ちあがる。婆アや、前かけなしに、下手、縁の方から登場。）

（六）　婆アや、鈴子、和尚

婆アや　（縁がはの下手から）奧さん、おらアちよツぴりお詣りして來るから、なア――（鈴子が下手向きに手枕してゐるのを見て）お、どうかしたかい、奧さん？（と、心配さうに近づいて行く。）どこか悪いかね？

和尚　（立つたまま）なアに、奧さんは別におれを嫌つてるのぢやアない、ほんの、般若湯を――

鈴子　（和尚を睨んで）またそんな抹香臭いことを云ふ！

和尙　さうだ――おれの寺では、そんな野暮臭いことは禁物だ。矢ツ張り酒だ。――（婆アやに）奥さんはお酒を召しあがりたいのだ。

婆アや　（これも突ツ立つて）さうかい？　おらア、はア、また、奥さんが今夜氣持ち惡いと云つたから、また腹ンばいでも惡くなつたかと思つた、だア。

和尙　それよりやア、婆アや、お前はお閻魔さんの景氣を見て來いよ。信心さうに拜みながら、參詣人が穴錢を投げるものが多いか、それともまた白銅や銀貨を投げるものが多いか、その樣子をよく見て來いよ。――おれが出ると、何だか、賽錢をもツと澤山投げろと强制するやうに見えて面白くないから、なア――（上手前方の帶戶を明けながら、棄てぜりふのやうに）般若湯は、いや、酒はいつものところだ、ね。

（と、戶を明けツ放して、退場。）

鈴子　（また腹這ひになつて）餘りくさくさするからお酒を飮んでやるの、さ。――婆アやはゆツくり見ておいでよ。

婆アや　へい、ありがたう御座います。――なかなか大相なお景氣だんべい。

鈴子　さうだとも。

和尙　（貧乏德利を提げて登場、戶を後ろに締めて、鈴子の上手に立ち）お燗をしてやらうか？

婆アや　お燗なら、はア、おらアやるべい。

鈴子　いいから、婆アやは行つておいでよ。
婆アや　ぢやア賴みますべい。（と、下手へ向ふ。）
鈴子　（笑ひながら）あたし、冷で飮むのよ。
和尙　ぢやアコツプだ。（和尙、また上手へ退場。婆アや、下手へ退場。鈴子腹這ひのまま、頰づゑ。）

（七）　和尙、鈴子

和尙　（コツプを持つて、上手から登場、戶を締めてから、鈴子の上手にしやがみ、コツプに酒をつぎながら）お祭日も上天氣であつたから大繁盛で、もう、占めたもの、さ。心配しないで、醉つて見ろよ。もう、寢るだけのことだ。――おれも少し醉ひが覺めて來たやうだから、飮み直してもいい、さ。
鈴子　飮みたけりやア、いくらでもお飮みよ――その代り、あとで介抱させられるのは眞ツ平だよ。（と、腹這ひのまま目をつぶつて、一口にコツプの冷酒を飮み初める。和尙、默つて、その顏を見惚れ、鈴子が飮み干すに從つて、顏が上向きになると、和尙も亦顏をうは向きにする。）
もう、一杯。（と、笑ひながらコツプを出す。和尙、それに酒をつぐ。）
これでも、きツと、醉はないだらうよ。（と、また目をつぶつて、ぐびぐび飮む。鈴子の顏が上へ向くに從つて、和尙の顏もまた上へ向く。）
もう、一杯。（と、コツプを出す。）

和尙　よく、そんなに行ける・なあ。（と、酒をつぐ。）

（婆アや、下手緣づたいにあたふたと登場。）

（八）　婆アや、和尙、鈴子

婆アや　（顏色を變へて、下手緣がはから座敷へ這入り）大變だア、旦那――（と、息をはづませる。）

和尙　（しやがんだまま、貧乏德利を左りの手に持つて、少し怒つた氣味で）どうして、そんなに出て行くものも、出て行くものも、あたふた歸つて來るのか？

婆アや　（座敷の下手から）大――大變だア、閻魔さんの眼玉が這入つてゐねいだ！

和尙　（ぎよツとして）えツ！　（と、德利を持つたまま立ちあがり、下手、本箱の上の桐の箱を見て）けさ、早くお前に（鈴子を見て）起して貰つて、嵌めに行つた筈だが・なア――

鈴子　（つッけんどんに）よく調べて御覽なさい！

和尙　（箱の方へ行きながら、まだ不審さうにして）鈴子が無理におれの手を引ッ張り起して、おれに眼玉を二つ持たせて呉れたぢやないか？

鈴子　（腹這ひのまま、和尙の後ろ姿に）あたし、そんなおぼえはないよ。

和尙　（ふり向いて）おぼえがないわけはなからう――お前がおれの枕もとへあの箱をしとやかに持つて來て、ちやんとおれに持たせてくれたぢやアないか？

鈴子　夢ぢやアなかつたの？
和尚　そんなことはない――確かに夢ぢやアない。おれはちやんとおぼえてゐる。
鈴子　まア、早く調べて見たら分るぢやアありませんか？――德利など置いて、さ。
和尚　（手にした德利を見て）さうだ。（と、あと戻りして、それを鈴子のそばへ置く。）
婆アや　こればかりやア本當のことだア――嘘ぢやアねいだ。
和尚　では、また、盗まれたか、な。（と、箱のところへ行つて、明けて見て、眼玉の殘つてゐるのに身づから呆れ果て）やア――これは？（左りの手に箱の實を、右の手に蓋を持つたまま、正面を向いて腰を拔かす。箱の中には、綿に載せた鍍金の玉が二つ並んでゐるのが見える。）
鈴子　（急に飛び起きて）それ、御覽――あたしが云つてる通りぢやアないか？――道理でさツきから、何だか氣持ちが惡いと思つた！
婆アや　（呆れて）嘘ぢやアねい――こればかりやア本當のことだア。
鈴子　（上手から和尚を見つめながら怒りを含んで）なまくら坊主だから、仕かたがありやアしない！（と、横を向き、聽えるやうに）商賣も商賣も頓馬な商賣だ、わ、ね。
和尚　（箱の蓋を投げ棄て實の方を持つて立ちあがり）さうして見ると、ありやア矢ツ張り夢を見てゐたのか？
鈴子　さうだらう、さ。（と、尻目にかけて、また横を向き）へまな夢、さ。

和尙　（間を置いて）ぢやア、入れて來よう。（と綠がはまで急いで出る。）だが、（踏みとどまり）考へて見ると、をかしい、なア。（中央へ戾つて來る。）

鈴子　あなたこそ、よツぽどをかしい、わ、ね。

和尙　この二つの眼玉が實際のであつて、夢のまぼろしでなけりやア、なア。（箱を下に置いて兩手に半圓の玉を一つづつ持ち）まア、見て見るがいい――たとへ圓い中はがらんどうで（と、兩手の玉の裏が觀客に見えるやうにして）而も半分づつしかないものでも、から云ふ風に（と、手でおのれの兩眼へ持つて行き）閻魔の眼の穴へ入れて置けば、ぴかり、ぴかりと光つて、立派な本物に見えるのだが――

鈴子　そんな講釋なんかあとでもいいよ。

和尙　さうだ、な。（兩手に玉を持つて、また行きかけて）然し待てよ。（と、考へながら、あと戾りして、正面に向き）これを今入れに行くと、人出が多い時だから、見付かるに相違ない。然しまた入れて置かないと、これから出て來る參詣人が笑ふだらう。（間）はて、どうしたらよからう、なア？（と、鈴子を返り見る。）

鈴子　（和尙より少し奥の上手に立つたまま）いツそのこと、眼玉と一緒に閻魔さんも、しやうづかの婆々アも、不動さんも、みんな賣つておしまひなさい！

和尙　（鈴子にふり向き、心配さうな顏で）そんなことが出來るものか？

鈴子　（和尙を見て）止ようとすりやア、出來ない……

なさいよ！　待ち合ひなり、藝者屋なりを！

和尚　馬鹿を云ふな。（と、箱を拾ひ上げて玉をそれにしまひながら）これほど樂な商賣がどこにあるかい？

鈴子　抹香臭い商賣なんて、あたし、いやだ、わ、ね。

和尚　（鈴子にふり向いて、つらさうな顏で訴へるやうに）さう嫌ふなよ。

婆アや　（下手から、少し和尚に近づき）ここは、一つ、おらがの智慧を聽いて貰ひますべい。

和尚　（婆アやにふり向いて）どうすりやアいいんだ？

婆アや　まだ今夜の商賣をしまふ時刻ぢやアねいだらうが、今夜は、直ぐ閻魔堂を締める、だアー眼玉を入れるよりやア、おらがの入れ智慧の方がよかんべい。

和尚　さうだ！（急に心配顏を直し）それがいい。（と、にこつき出し）今からでもまだ少くとも小百圓は儲かるこの商賣道具だが、なア。（と、箱を左りの小脇にかかへて、腰をおろし）鈴子。（と、上手少し奥の鈴子にふり向き）今、何時だ？

鈴子　（上手から、下手の置き時計を見て未練ありげに）まだ十一時少し過ぎぢやアありませんか？

和尚　殘念だが、今夜は、おれ達がから珍らしく遲くまで起きてた代りに、あの閻魔さんを早寢にさせよう。

婆アや　それがよかんべい。

鈴子　（馬鹿にしたふりで）ふん！（と横を向く。）

和尙　婆アや。（下手を向く。）

婆アや　へい――

和尙　ああ、頭痛がして來た。（と、片手でちよッとあたまを押さへて）閻魔堂を締めて來い。

婆アや　へい、へい。

鈴子　（上手を向き）うツかりしてヱて、醉つてしまつた。（と、その場に倒れる。）

和尙　（鈴子の方を向き）おれもあたまが痛い。（と、その場に横になる。閻魔の眼玉、箱からころげ出る。）

子供大勢の聲　（奥から）わアい！　わアい！

（和尙、鈴子、婆アや、共にびツくりする體、猿芝居の太鼓――幕。）

――明治四十三年――

「魔の夢」

登場人物

外山信吉（現在は新聞記者、三十七歳）
同　初子（信吉の妻、四十歳）
同　進（信吉の子、九歳）
三澤露子（信吉の愛婦、二十二歳）
無言の點燈夫
通行人數名

時は春の日沒前から夜。
場所は日比谷公園、壽泉池の亭。

（中央に、四角な屋根の、四本柱建ての亭――少し細工をほどこした柱の各々を起點として、十字形に組み合されたベンチ、長い坐は仕切りを挾んで背中合はせについてゐる。その十字ベンチの九十度對角線の一つは眞正面に開いてゐる。この亭の後方並びに左右は池。亭の後部、池にのぞみて、右（上手）に、二本の丸太に支へられた青柳。左り（下手）に低く枝をはびこらした松。松の根もとに瓦斯燈。池を隔てた後部、細長い藤棚――瓦斯燈三つ、そのまた後ろに隔つて、高い白熱瓦斯燈一つ（いづれも、まだ點ぜられてゐない。）右手、池の中に鶴の噴水――その後部に當つて、遠く日比谷圖書館の二階が見える。左側、池を渡つて、小、藤棚、[illegible]

銀杏の大木などの葉蔭に、松本樓の瞥見。亭の前面、右手は池にめぐらす針がねの柵に添ふて、篠竹茂り、芽をふいた梧桐四五本。左り手、針がねの柵に添ふて小徑あり、行く手は夾竹桃の繁葉に隱れてゐる。

（噴水の方に開らけたベンチの直角の隅に近く、上手前方の柱に歸する坐に、後ろ向きにもたれて、右の手をベンチの仕切りにかけ、外山信吉——縞羅紗、背廣の間服、ダブルカラ、鼠色の中折帽——痩せぎすの顔、その血色は惡い方——右の手に洋書を開らいて、熟讀してゐる。）

（左り手 奥の方から、音樂堂で奏してゐる軍樂隊の『越後獅子』の曲が幽かに聽えてゐる。

（幕が明くと、上手から信吉の子進——まだ姿は見せず、『もし〳〵龜よ』の調子で、別な六ケしい意味の歌を歌つて來る。）

（一）進、信吉

進の聲（上手から）

思ひに　またも　なやむ　日(ひ)が

來たる、板戸(いたど)の　ひま　漏れて——

（信吉、書見をやめて、その方へ顏と注意とを向ける。進、登場——小さッぱりした筒袖綿入れの木綿着、羽織なし、荒い立て縞の袴を短く穿き、素足にまだ新らしさうな下駄——道で拾つたやうなきたない竹の棒を右の手に持ち、銃の如く右の肩に擔いで、兵隊の歩調を眞似てゐる。）

進　（人のゐるのに氣がつかず、歌の句をつづけて）

このまま　いつそ　死ぬる　なら、
死をも　知らずに　濟む　ものを――
覺める　心は、苦しみを
人の　知らない　男泣き――

（信吉の前を通り過ぎると、信吉、右向きにからだをその方へねぢ向ける。進、ふと人のゐたのに氣づき、踏みとまつて、竹の棒を肩からおろし、恥かしさうに躊躇する。然し目を見合はして、それが父だと分ると、下手寄りから上手後方を向いて、ふるひつきたい樣子で）

お、お父アん！

信吉　（下手寄りにゐる進の方に全身を向き直り、父らしい、然し餘り愛情を湛へてはゐない態度と口調で）進か――お前の手に持つてるのは何だ？

進　（苦笑ひして）今、そこで拾つたの――犬が吠えて來たら、ぶツてやる爲めに。

信吉　（顏をしかめて）犬をぶつのはいいが、ね、きたないから、棄てておしまひ。（進、直ぐ棒を棄てる。）どんな者が持つてたのか知れやアしない（進、棄てた棒をきたなさうに見る。）――お前は遊びに來

進 （嬉しさうに信吉を見たが、少しおづおづして）ええ。

信吉 お前ひとりでか？

進 ええ、今ここへ來たのはひとりよ――けども、ね、おッ母さんもあすこの（と、首を動かして）音樂堂のそばへ來てゐるの、音藥を聽きに。

信吉 （冷淡に）おッ母さんとか？（と横を向く。）

進 ええ。（と、信吉の横顏を見てゐる。）

信吉 （少し間を置いて、またふり向き、やゝうち解けて）今、何か歌つてゐたが、お前は初め嫌ひであつた音樂を好きになつて來たのかい？

進 お父アんがうちにゐなくなつてから、あたい、音樂が段々好きになつたの――けども、あたい學校で先生におそはる唱歌だけで――ねえさんにおそはつたんなんか、六ケしくツて、よく出來ないの――あすこで（と、左りの手を下手奧の方へ出し）してゐるのなんか、みんな分らないんだもの。

信吉 それで、おッ母さんのそばであの音樂を聽かないで、お前はひとりで遊んでゐるのか？

進 ええ――あたい、お父アん（と、思ひ出したやうに）、ゆふべ、ね、夢を見たの、死んだ姉さんの――けふここへ來るのは、ゆふべから、おッ母さんと約束して分つてたんだから、姉さんが、ね、夢で、その音樂が濟んだら、おッ母さんに默つて、花壇のところへお出で、一緒に薔薇の花を見ましようツて云つたのよ。

信吉　（輕く）夢でかい？

進　（無邪氣な熱心で）えゝ――夢だけれど、本當よ。死んだけれど、まだ、つい、こないだのことだから、まだ夢では生きてるのよ。――それでなければ、出て來ない筈でしよう？

信吉　お前はさう思ふか、ね？

進　あたい、よくねえさんと一緒に見に行つたでしよう、それ、あすこの（と、左りの手で下手の方をゆび指し）花壇へ？

信吉　（深い溜め息をしたが、何げない風で）さうか、ねえ――お父アんは、もう、二三年このかたお前と一緒にゐないから、お前達、三人の兄弟がどう云ふことをしてゐるか知らないのだ。

進　（少し乘り氣になつて）あたい、よく知つてるよ、あの花壇には、西洋花や、水仙や、すみれや、薔薇や、いろんな花がありますよ。

信吉　お前はよく知つてる、ねえ。

進　あたいよりも、ねえさんがよく知つてたの――ねえさんは唱歌と花を大相（と、この語に力とこなしとをつけて）好きであつたのよ。さうして死んだあとでも、學校中で評判よ、十二にしてはなかなか利口であつたツて。試驗もよく出來て、いつも滿點であつたのよ――（首を傾げて）可哀さう、ねえ。

信吉　[illegible]

いから、今度は、お前がねえさんの代りによく勉强して、えらいものにならなければいけないぞ。

進　あたいもさう思つてるんだけれど、ねえさんのやうに死んだら、詰らないわ、ね。

信吉　（重い聲で）誰れでも人間は死んでしまうのだ（やや輕い聲になり）どうせ死ぬにしても、だから、生きてる間（あひだ）にえらいことをしなければならない。

進　（分つたやうに）ねえさんは利口であつたから、生きてる間はえらかつたわ、ね。

信吉　（微笑して）さうだ、さうだ――然しお前は姉さん、姉さんツて、そんなに姉さんを好きであつたのか？

進　（寂しさうに笑ひながら）ええ、あたい、姉さんが一番好きであつたの――おツ母さんよりも、弟の諭鶴（ゆづる）さんよりも、誰れよりもよ――だから、夢に見るのだ、わ。

信吉　さう好きであつたのか？

進　おツ母さんは癇癪持ちで、あたい達を直き叱るから、姉さんもいやがつてゐたの――おとなしいのは、諭鶴さんばかりだと、おツ母さんが云つてるのよ。おこり出すと、ね、おツ母さんは寢ころんで諭鶴さんに乳を飲ませながら、いつでも、お父（とつ）アんのことを惡く云つて、お父アんの子ならみんな死んぢまへ、死んぢまへと云ふんだもの――だから、ねえさんも死んぢまつたのか知れないわ。

信吉　お前達が云ふことを聽かないんだらう？

進　だけど(と、首を傾げて)おツ母さんの云ふことを聽きたくないんだもの——先生が人の惡いことなんか、本當は惡くツても、云つたらいけませんとおつしやつたんでしよう——それに、おツ母さんはお父アんのことをいつでも惡く云ふのよ。

信吉　そりやア、おツ母さんがよくない。——然し、(と、考へるやうに)お父アんも、おツ母さんから云へば、惡いところがあるんだらう、おツ母さんがお父アんから見れば惡いやうに——

進　(不審らしく)ぢやア、お父アんやおツ母さんは嘘つきなの?

信吉　(輕く笑つて、然し重い調子で)いや、お父アんなどは嘘はつかない。

進　ぢやア、泥棒をしたの?

信吉　泥棒もしない。

進　(一層不審らしく)ぢやアどうして惡いの?

信吉　それは、ね(と、胸に押へ切れないわだかまりがあるやうに地上に立ちあがり、首を垂れて、坐のそばを行き來しながら)お前のやうな子供には、まだ分らないことだ。

進　(目だけで父を追ひながら)さう——大きくならなければ、分らないの?

信吉　(靴音をさせて、行き來をつづけながら)さうだ。

進　お父アんはねえさんのお葬式に來なかつたの、ね。

進　向島の叔父さんや叔母さんも來たよ。横濱の叔父さんや叔母さんも來たよ、麻布のも、牛込のも、みんな來たよ。お父アんだけ來なかつたの、ね。

信吉　あア。

進　さうして、もう、うちへは來ないんだツて、ね――さうおツ母さんが云つてるよ。

信吉　あア。

進　あたいもお父アんのところへ行つたらいけないんだツて、ね。

信吉　あア。（と、動きながら、進の方を見て）いつかはまた來ていい時になるかも知れないが今のうちは來ない方がいいんだよ。

進　（熱心に）なぜ――どうして？

信吉　（立ちどまつて）それも、お前が大きくなつてからでなければ、分らない。

進　さう――だけど、あたい、ねえさんが死んでから、寂しくツて仕やうがないの。

信吉　さうだらうとも。（と、また、もとの場所に、後ろ向きに腰かける。）

進　（急いで行きたくなつた樣子で）もう、ねえさん來てゐるでしよう、ね、音樂はまだ濟まないけれど。

信吉　（進を顏だけでふり向いて見つめながら）音樂が濟んだツて、死んでしまつたねえさんが出て來る筈はないよ――おツ母さんの方へお歸り。

進　だけど（と、無邪氣な反抗を口と態度とに顯はし）おツ母さんに默つて來たら、花壇で待つてゐるからと云つたもの――いツそ、お父アんも一緒に行きましよう。（と、誘ふやうにからだを動かす。）お父アんは、ねえさんの死んだ時見なかつたから、丁度いい、わ――さア、行きましよう。

信吉　（少しも動かないで）お父アんは人を待つててやるのだから、ここを離れることは出來ないよ――それに、また、お前の云ふことは夢ぢやアないか？

進　（にこ／＼して）夢だけれど、本當だ、わ。

信吉　またかい？（と、面倒臭い顏をして）夢などは嘘だ。

進　（向ふへ行きたいやうに、もぢもぢしながら）でも、ねえさんは嘘つきではなかつたの。

信吉　如何にも、なア――（と、子供を推したやう）。ねえさんは嘘をつかなかつたらうが、死んだものは嘘も本當も云へないよ、幽靈でもなければ。

進　（肯定的態度で）幽靈ツて、ない物でしよう――先生がさう云つたよ。

信吉　さうだ、ね。（と、重苦しい微笑で）お父アんがまた云ひ込められた、わい――子供の考へてるやうなお化けや幽靈は、まア、ない、ねえ。

進　（また落ちついて來て）けれども、ねえさんは矢ツ張り海老茶の袴を穿いて來るでしようか、學校の本を持つて？――あたい、いつも、ねえさんと一緒に、學校の歸りに、花壇を見に行つたの。

信吉　もう姉さんの話は

は見えやしない——そんなことよりやア、お前、（と、からだを進の方へ向け直して）今唱歌を歌つてゐた、ね。

進　ええ。

信吉　あれは誰れにおそはつたのだい？

進　（得意げに）ねえさんによ——それ、お父アんが拵らへた新體詩の本があるでしよう——その中のをねえさんが讀めるやうになつたツて、それを『もしもし龜よ、龜さんよ』に合はして見たの。

信吉　さうかい、よくおぼえてる、ね。——もう一度、歌つて御覽。

進　…………（はにかんで、ぐづぐづしてゐる。）

信吉　（言葉を優しくして）歌はないでもいいから、文句を暗誦して御覽。

進　（恥かしさうに、早口で）

思ひに　またも　なやむ　日が
來たる、板戸の　ひま　漏れて

信吉　（見つめながら）さうだ、さうだ。

進　（少し調子づきて）

このまま　いつぞ　死ぬるなら、
死をも　知らずに　濟むものを。

覺める　心は、（と、ばツたり、あとを忘れたやう。）

信吉　（哀れむやうに笑つて）

——苦しみを

進　（また、早口に）

人の　知らない　男泣き。

信吉　さう早く讀んぢやア——

進　（父の云ひ終らないうちに）男泣きツて、男が泣くことでしよう——？

信吉　（何の氣なく）さうだよ。

進　でも、おツ母さんは男が泣くものぢやアないと云つてよ。

信吉　（ぎよツとして）それもさうだ。男は不斷泣かない。が、ね、大きくなると、また泣く程の悲しいことにも會ふ。——それはさうと、ね、さう早く讀んでは、何にもなりやアしない——もツとゆツくりお讀み。

進　（少し口をゆるめて）

臥し戸を　消える　魔の　夢の——

信吉　もう少しゆツくり。（と、充分ゆツくりした例を示めしながら）

「臥し戸を　消える　魔の　夢の——」

進　（信吉に習つて）

後ろ姿　に　湧く　憂ひ。

信吉　春の　あした　の　寝ごこち　を

進　生れぬ　さきの　身で　見たい。

信吉　（感心さうに）さうだ、さうだ、よくおぼえてる！　それが分るやうになれば、立派にお父アんのお弟子になれる。この詩は（と獨言のやうに）題を『春曉』と云つて、お父アんの心が、話し相ひ手もなく獨りで人生といふものを考へて、一番苦しかつた時の寂しさを歌つたものだが、（と、また調子をもとの通りにして）ねえさんがそれをお前に敎へたのかい？

進　ええ、ねえさんよ。

（三澤露子、赤毛の大きな廂髪——寸の詰つた額は肥えて白いが、眼は小くぎろりとして、額に二本の太い横皺——紫矢がすりの銘仙の袷せに、黄八丈の被布——丈は高いが、どこか、まだ多少の田舎じみたところがある。紫紺色の蝙蝠傘をつき、黒塗りの駒下駄を穿いて、下手、夾竹桃の蔭から登場。）

信吉　（露子を見て態度を改めたが、進にはさう見せないで）お前も段々大きくなれば、この時のわけも分つて來るだらうよ。——（半ば獨り言のやうに）お父アんには先生がない。先生がない代り、弟子もな

い。お父アんの子だから、お前が、その氣なら、お父アんの持つてゐる考へをも相續することが出來るのだ。（と、調子を改めて）よく勉强して、ねえ――

進　あたい、勉强して、さうなれば、いいわ、ね。

（二）　進、露子、信吉

進　（露子の來たのに氣がついて、今まで立つてゐた下手の場所を、初めて、少し露子の方へ動き）お、三澤さん！

露子　進さん、來てゐたの（と、餘り進には頓着しないで、正面から信吉の方へ進み行き、仕切りを隔てて、後ろ向きに腰かけた信吉と背中合せに、正面を向いて坐わり、上手なる信吉と下手から目を見合つて）西洋音樂なんて、聽いてゐたツて、詰らない、わ。

信吉　（左りの腕を仕切りへかけたまま、露子を可愛がるやうに見て）露子、そりやア詰らないんぢやアない、分らないんだ――今、やつてゐるのア西洋の曲ぢやアない、日本の『越後獅子』ぢやアないか？

露子　（あまへるやうに）あれ、『越後獅子』？

信吉　さう、さ。（と、また目を書に注ぐ。）

露子　あたい、何だか分らなかつた、わ。

進　（心丈夫になつたやうに、露子よりも下手前方から三澤さんの音樂を聽

露子　（母親のやうな態度で、進に向ひ）ええ、進さんも來たの？

進　ええ。

露子　ひとりで、感心、ね。――ここへお出で。（と、手で自分の膝を叩く。）

進　（はにかんで）ひとりぢやアないの、おツ母さんも來てるのよ。

露子　さう（と、急に顏をしがめて、目を信吉に轉じ）あなた歸りましよう、會ふたら面倒臭いから――

信吉　……（眼を書物から離さない。）

露子　歸りましよう。（と、荒い息づかひ。）

進　（心細さうに）三澤さん、歸るの？

露子　（進には返事しないで、信吉の肩を仕切り越しにゆすり）もう、歸る云ふのに！

信吉　（書見のまま）これを讀むところまで讀んだら、歸る。

露子　歸つてから、讀めます！

信吉　今、興が乘つて來てるんだ。

露子　そんなこと云ふて（と、一層烈しい呼吸をしながら口を意地惡く曲げて）本當は、呼びにやるつもりだろ。

信吉　誰れを？（と、書から轉じて露子の顏を見る。）

露子　（眼を三角にし、額の皺を強めて）あの婆々アを、さ！

信吉　（わざと平氣で）　誰れに？

露子　あなたのちツぽけなお弟子に。

信吉　何を云ふんだ！　（と、目をまた書に轉ずる。）

露子　（溜らなくあせつて、立ちあがり、蝙蝠傘を地に突いて、からだを顫はせながら）　もう、歸るのだ、歸るのだ！

信吉　……（書見をつづける。）

進　（寂しくなると思つて）　三澤さん、歸るの？　（と、情けない樣子。）

露子　（進にはかまはず）　歸る！　歸る！

信吉　（書から、目を露子に轉じて）　やかましい、ねえ――ちやア、進を人質に連れて、花壇でも見て來るがいい。

露子　（少し間を置いて、常の調子で）　花壇ツて、どこにあるのよ？

進　（音樂の方へ頻りに耳を傾けてゐたが、少し勢ひづいて）　花壇ツて、あツちの方に　（手とからだとを下手の奥へ向け）　あるのよ――一緒に行きましょう　（と、露子が立つて自分の方へ向いてゐるそばへ歩み行き、かの女の手を執る。）

露子　（手を進に許して）　進さん、知つてるの？

進　ええ――あたい、よくねえさんと學校の歸りに來たのよ。――（にほひのするすみれら、薔

薇や、いろんな西洋花が澤山ありますよ。音樂はまだ濟まないけれど、もう、ねえさんも來てゐるかも知れません。

露子　（不審さうに）姉さんツて、誰れ？

進　靜子さんよ、三澤さんも知つてたでしよう。

露子　死んだものが來るわけがないぢやないか？

進　それでも、あたい、夢で見たのよ。――さア、入らツしやい。

露子　（をかしさうに）夢で見たこと？（と、進に手を引かれて歩み初める）あなた、おツ母さんに云ふたら、いやよ――ここに來てたことを。

進　（露子の手を引きながら、かの女の顏を仰ぎ見て）あたいも、おツ母さんには云はないの――ねえさんがおツ母さんには默つて來いと云つたから。

露子　（輕く）さう――

進　お父アん（と、ひとりあと戻りして來て）あたい、三澤さんと一緒にゐると、ねえさんの代りのやうに思ふの――

信吉　（進を見て）さうかい？

進　おツ母さんはおとなでしよう――三澤さんは、どツちかと云へば、まだ子供の方に近いわ、ね。

露子　（信吉の微笑に釣り込まれながら、少し戻り來て、進の顏を上の方から見おろし）あたい、進さんのお友

達？

進　（仰ぎ見て）さうでしよう――（この時、音樂の聽え止む、進、勇みを增して）さア、行きましよう、音樂が濟んだから。（と、また露子の手を執る。）

露子　（手を引かれたまま、顏を信吉の方へ向けて）あたい達をおッ拂つて置いて、あいつに會ふのぢやないの？

信吉　馬鹿を云ふな！（と、ちよッと露子を見て、また目を書に移す。）

露子　（優しく）きッと？

信吉　（露子を見ないで）くどいよ――分り切つてらア。

露子　ぢやア（と、進に）行きましよう。

進　行きましよう。（露子、進、下手、夾竹桃の蔭へ退場。）

進の聲　（『もしもし龜よ』の調で）

　臥し戸に　消える　魔の　夢の

　うしろ姿　に　湧く　憂ひ。

（信吉その方へ耳を傾けて、悲痛の體。）

（三）　初子、信吉

（信吉、もとの場所で、右の腕を仕切りへかけて、書を耽讀——二三の通行人があつてから、信吉の妻初子、舊式の束髮、紫紺のリボン——じみな風通の小袖に、綿繻珍と黑繻子との晝夜帶、年よりも若づくりに空色紋羽二重の羽織——白木の駒下駄——薄化粧をしたヒステリ顏の頰はこけて、額の兩端に青筋が立つてゐるのが見える——子を探す樣子で、上手から登場。）

初子　（自分の所天と顏を見合はせて、顏色を變へたが、上手からづかづかと亭の上手前方の柱そばなる雨垂れ落ちのところまで進み、無理に結んだ口もとに少し大きな前齒を二本見せて。）外山先生ですか？

（と、あざけるやうなお辭儀をする。）

信吉　………（動かないで、瞰んでゐるばかり。）

初子　（冷笑の内に、恐れを含んで。）外山信吉先生で入らツしやいますか？

信吉　………………

初子　有名な詩人でいらツしやつたが、今は喰ふ爲めに新聞記者をして、あのいやな惡魔の露子と好きなやうに暮しておられる先生で御坐いますか？

信吉　（堪へ切れないで。）默れ！

初子　（少し横ずさりして、目は信吉に向ひ。）先生と云つたのが惡かつたのですか？

信吉　（怒りの聲が顫へて）お、お、おれが先生と云つたり、云はれたりするのを嫌つてゐるのは、以前から承知してゐる筈だ——精神上、實際におれの妻であつた時から、お前は承知してゐる筈だ……

初子　それでも、あなたは先生でしよう、ひとりよがりの、自分ばかり勝手氣儘な眞似をして女房や子供の苦しみを返り見ない、自我主義の。

信吉　（初子を瞰みつゞけて）自我主義が何だ——手前などの知つたことぢやアない！

初子　わたしが知つても、知らなくツても、人があなたを先生と呼んでゐますから、いいでしよう。

信吉　おれは、おれだ——この信吉は信吉だ——人から、先生とも、ヘツぽことも、呼ばれることはない！

初子　それがあなたのうぬ惚れですよ。（と、少し足を進めて、教訓的な口調で）あなたはもツと人のことや、女房子のことを考へなければなりません——自我主義は自我主義でもいいでしようが、世間で笑はれるやうな放蕩や薄情をして見せるものではないでしよう。

信吉　聽いた風なことはよせ、初！　それがお前のいやな癖だ——いつも人を教訓するつもりでいやアがる！

初子　聽いた風でも、事實は事實でしようが——世間ではあなたのことを放蕩者だとか、薄情おやぢだとか云つて、笑つてゐます。

信吉　（わざとゆツくり）お前がさう云ふんだらう。

初子　（早口に）いいえ――

信吉　（さへぎつて）お前がさう云つて、世間へ吹聽するに過ぎないんだらう。

初子　いいえ、いけません、そんなことは！

信吉　默つてゐれば知れる筈もないことを、お前が氣違ひじみてしやべり立てるから、世間はまたそれをいいしほに、おほげさに云ひ傳へるのだ――

初子　いいえ、さうぢやアありません！

信吉　さうに違ひない――おれは世間一般の所謂放蕩とか、薄情とか云ふことをしてゐるおぼえはない！

初子　現在してゐるぢやアありませんか？

信吉　それは放蕩でも、薄情でもない――所天に惡感をいだかせる妻は、實際の事實上、もう所天を離れたものだから、おれは別に愛する女を持つたのだ。

初子　あれが、（と、口を引き釣らせ、冷笑して）あんな赤毛の、くしやくしやした女があなたの愛する女なんですか？

信吉　（少しきまり惡さを感じたが、澄し込んで）美醜はその場合でどうとも仕かたがない、さ――おれがあれを愛し、あれがおれを愛する以上は、お前なんぞに口ばしは入れさせない。

初子　わたしもあなたを愛してゐますよ。（と、顏を赤くする。）

信吉　（冷淡に）ふん（と鼻さきであしらつて、横を向き）そんな形式的な感情ではおれの心は動かなかつた。

初子　では、どこがあなたのお氣に召さないのです？

信吉　第一、お前はおれよりも年うへだ。

初子　あなたより年うへなのは、初めッから分つてゐます。――それは承知の上で、あなたがいいからと云つたので、わたしもその氣になつたのです。

信吉　（初子を見て）然しおれは、お前がさう早く婆々アじみることは承知しなかつたぞ。もし年うへと云ふことが鋭敏に分つてゐたなら、なぜ、それだけ遠慮をしなかつた？

初子　いつも（と、訴へるやうに、然し口調は相變らず强く）遠慮してゐたから、世間の人と同じやうにあなたを先生とも呼びます、わ。

信吉　（もどかしさうに）分らないことを云ふな！　お前の云ふ意味は違つてゐる――おれを教訓しようとするやうなことは――それが年うへのせいだが――僭越だぞ。遠慮をして、いつも、素直に、所天よりも若々しい、生々した心を持つてゐる筈であつたのだ。

初子　（こともなげに）そんなことが出來ますか――雇はれたおめかけぢやアあるまいし、毎日の暮しのことから、子供の世話までしなければならないのですもの。

き切り拔けて、人の妻たるものは、いつも、若々しい心を持つやうに努力すべきものだ。――よぼよぼおやぢでない限りは、男といふものは、年を取るに從つて、若い女のあツたか味を欲しくなる。若しさうでなく、老いぼれ易い女と共に早く老いぼれて行つたら、四十歲前後から、やうやうしツかり働き出さうとする男子の、ついに働く時期がないではないか?

初子　働くのは結構ですとも。(と、氣を折られたが、負けないつもりで)然し女も子を產む苦勞がありま す。その苦勞を三度もさせられて、年を取らないわけがないでしよう。男でも戰爭に一度行つて歸つたら、急に白髮が生えると云ふくらいでしよう――わたしは、これでも、戰爭同樣な苦勞を三度して來てゐますよ。

信吉　(眞面目に)何度戰爭をしようが、それこそ承知の上だ。所天が老いぼれない間は、妻は精神だけでも生々してゐる努力が必要だ。

初子　さう云へばさうでしようが、(と、冷やかな微笑をして)女は男よりも弱いものです――精神だツて、早く疲れてしまひます、わ。

信吉　(相變らず嚴格に)はきはきした努力は、女の武器だ。

初子　(早口に)わたしの武器は、子供です。

信吉　お前は畜生のやうにわけもなく子供を可愛がつてゐるが、その子供に(と、橫を向き)知らさないでもいいことを知らすから、お前が却つて馬鹿にされるのだ。

初子　馬鹿にされようが、どうしようが、（と躍起となり）あなたのお世話にはなりません！　うちの子供は、みんな、あなたに似て、わが儘一方です。畜生のやうに見えようが、見えまいが、わたしは母として嚴しく仕つけてゐます。

信吉（初子を見て）氣違ひじみてがみがみ云つたツて、子供は決して心服しないよ――子供もさうらしいが、おれもお前のヒステリ面が見たくもない！（と、横を向く。）

初子　ヒステリイに（と、口をいらいらさせて、目を怒らして）誰れがさせたのです？（と、一歩を進め）みんなあなたでしよう。あなたは子供も産みツ放しですよ！　あなたの方が餘ツぽど畜生のやうです。靜子の死んだ時にも、顏も見せなかつたぢやアありませんか？

（通行人があつたのでちよツとあひを置いて。）

信吉（初子にふり向き、沈痛に）子供とおれとの間をさへぎるものはお前だ！

初子（燃える眼の顏を信吉の方へ突き出し）馬鹿をおツしやい！（と、右の足を踏み鳴らす。）

（露子、ひとり、下手から戻つて來る。）

（四）初子、露子、信吉

初子（露子が亭の下手前方の柱の手前にしよげて、立ちどまつてゐるのを見て）あの女がついてゐる爲めに、（と、自分の後方なる信吉を見返り）あなたは馬鹿なことばかり云ふんでせう。

露子　（わざと冷笑して）へん、おほきにお世話だ！

初子　お世話とは何です、めかけ風情で？（と、つかつか下手の方へ露子の前に迫り行き）あなたが二度目に田舎から東京へ出て來て、下女にも行けずまごついてた時は、わたしのうちで世話をしてあげたのぢやアありませんか？

露子　（顫へてはゐるが、顔に怒りの色を見せて）あれはお前のうちぢやない、外山さんのです！

初子　お前とは何です？（と、一層近く露子に迫り行き）所天の家はわたしの家ですよ。

露子　（怒りを成るべく抑へるやうにして）それでも、わたしはあなたの世話になつたと云ふほど世話になつてはをりません。

初子　ぢやアこの衣物は（と、手でさはりながら）どうしたのです――この被布や蝙蝠傘は（と、さはりながら）どうしたのです？　うちの子供にはいつもおんなじ衣物を着せてゐても、（と、信吉をふり向いて）あなたの『愛するもの』には、（殊にいらいらした聲で）よく買つておやりになります、ね！

露子　わたしの知つたことぢやない！（と、亭の前面を上手へまはつて信吉の方へ行かうとする。）

初子　（露子を亭の前面でふさいで、その左りの袖を右の手で捕へて）お待ちなさい――あなたに聽かなければならないことがあります。

露子　聽く耳は持たん！（と、行きかける。）

初子　（早口に）行けません、行けません。（と、袖を捕へたまま露子を上手にまはつてさへぎり）あなたは、

なぜ初めにさう相談して下さらなかつたのです？

露子　……（握られた袖がほころばないやうにゆるめてゐる。）

信吉　（兩人の樣子をじつと見てゐたが）そんなことを相談したツて、（と、あざ笑ひながら）お前が承知する筈はない。

初子　いえ、（と、信吉を見ながら）さうぢやアありません。話しの具合に由れば、わたしだツて、許さないことはありません。

露子　ふん（と、鼻で笑ふ）

信吉　（立ちあがつて）　お前はおれに相談しかけられるだけの資格があつたか？

初子　ありますとも――わたしはあなたの正當の妻です。

露子　許すと云ふなら、もう、何も云はんでもよい！　（と、初子の手から自分の袖を、上手へまはつて、じわりとふり拂はうとする。）

初子　（高い癇癖になつて）放しませんよ！　（と、露子の袖を一層しツかり握る。）

信吉　外形では正當だらうが、精神的には不正當になつてるのだ。

初子　不正當ですと！　（血相を全く變じて、左り向きに信吉を見て、恨めしさうに）ではさぞ、この女が（と早口に叫んで、）正當なのでしようよ！　（と、露子をゆすぶる。）

信吉　こら、初子・（と、持つてゐた書物を投じて、亭の上手前方の柱を急いでまはつて來て）どうすると云ふんだ！（と、初子の手を放させようとする。）

初子　（一生懸命に）放しません――この女があやまるまでは決して放しません！

信吉　握つてゐたツて、何の役に立つんだ？

初子　あやまらせます――あやまらせます。あなたも一緒にあやまらせなさい。

露子　（初子の機を見てゐたが、ここだと力を入れて）畜生！（と、兩手を以つて袖をうまく引き放す。）わたしがあやまるわけはない。（と、柱をまはつて、信吉の腰かけてゐたところに行き、立つて、こちらをこわい顏をして向いてゐる。）

初子　（露子の逃げたのを瞰みつけ、それから泣き出しさうな目つきをして、下手から上手へそばの信吉に向ひ）あなたの妻たるものが馬鹿にされるのを見てゐて、あなたは恥ぢとは思ひませんか？

信吉　馬鹿にされるやうな女だから・（と、亭の前面を、初子と入れ替りに、上手から下手の方へ二三歩進みながら）馬鹿にされるのだ。

初子　（信吉の跡をついて行き）あなたが馬鹿なのです。

信吉　馬鹿なら馬鹿でもよい――（と、また一二歩下手へ歩んで、からだごとふり返り、ついて來た初子を見て）どうせ、お前とおれとは・肉體的にも、精神的にも・なほ更ら又肉靈合致的にも無關係だ。

初子　（信吉に向つて、立ちどまり）無關係ですと?!（ただ恨めしさうに又悲しさう。）

信吉　(正面に開らいて三角に引ッ込んだベンチの左りがはの坐に、前向きに腰をおろし、卷煙草を出しながら)無關係なことをがみがみ云ふまに、まだお前に關係ある進が、今、向ふの花壇に行つてるから、連れて來て、早く歸れ。

初子　(下手寄りから信吉の方へ向き)進に會ひましたか？　(と、少し顏を和らげる。)

信吉　(仕切りへもたれ、卷煙草を吹かしながら、冷淡に)あア。

初子　けふは靜の初七夜をしましたが、うちにばかり考へ込んでゐると、氣がくさくさしますから、論鶴をお婆アさんに賴んで、進にせつかれた音樂を聽きに來たのに――あの子はほんとに困りますよ、あなたのやうに大膽だが、勝手に遊び歩いて――もう、音樂も濟んでしまつたまでも。

露子　(上手前方の裏坐にうしろ向きに腰かけ、下手前方を向き、前向きに腰かけてゐる信吉を見ながら)　進さんは何だか變なのよ、狐にでも化されたやうに、花壇のまはりをまはり歩いて、まだねえさんが見えない、見えない』ッて――

初子　(露子に、喰ひつきさうな口つきで)あの子はそんな馬鹿ぢやアありませんよ。

信吉　(半ば獨り言のやうに)あいつ、まだ夢を見てゐるんだ。(露子に)　さうして、どうした？

露子　(初子には頓着せず)　さうして、度々あたいをつかまへて、『あなたがねえさんになつたのぢやアないの』と、云ふんだもの――あたい、何だかおぞ毛立つたから、さきへ戾つて來たの。

初子　(冷笑しながら)　いいねえさんです、ね。

信吉　（初子に）下らないことを云ふなと云ふに！　（下手、花壇の方を氣にして落ちつかない樣子で）困る、なア、あいつ、夢と現在とを自覺無しに一緒にしてゐる！　（また初子に向き）お前、早く進を連れに行け。

露子　（信吉に）まだあすこにぐづぐづしてる、わ――もう、直き、日が暮れるのに――靜子さんの幽靈に引かれてでもゐるのぢやないか知らん？

初子　（少しびツくりして）ほんとに、さうですか？

露子　……（返事はしない）

初子　（不思議さうに信吉に）ほんとでしようか――そんなことを云つて、あなた方が逃げるのでしよう。

信吉　（少しあせり出して）さうぢやアない――實際、をかしなことを云つてもゐたから、早く連れて來い。

初子　では、早く見て來ます、わ。（初子、半信半疑の體で、下手へ退場。）

（五）　露子、信吉

露子　（信吉が下手前方前向きの坐に腰かけ、右の腕を仕切りへかけ、通行人に頓着なく初子を下手へ見送つてゐるのを、上手前方後ろ向きの坐から、左り手を仕切りへかけ、左り向きにじツと見てゐたが、初子の姿が消えると直ぐわざと澄まし込んで）

ふん（と、鼻で一つ冷笑して）まだあんな糞婆々アに氣が引けてるんだ！（と、顏を右へそむける。）

信吉　（露子の方へふり向いて、重苦しい聲で）誰れが氣が引けてる――下らない！

露子　（また信吉を見て）引けてるぢやないか？（立ちあがつて）またあの鬼婆々アの來んうちに歸りましよう。

信吉　まア、もう、少し待て。

露子　矢ツ張り、氣が引けてるのだ。（と、燒け氣味でまた腰かける。）

信吉　（露子を見ながら）分らないことは云ふな――おれは、お前を知る以前から、あいつとは精神上でも、肉體上でも、全くの絶緣をしてゐるんだ。――どいつでも、（と、露子にも數へるやうに）おれの主義と思想と精神とに這入つて來ないものは絶緣だ。

露子　（信吉を見て）ぢやア、あたいも絶緣して貰ひます。

信吉　急に、また、どうしたんだ？

露子　ちエ、むほん人！（と、横を向いたが、暫らくしてまた信吉の方へ向き）めかけなど云はれて、あたいの身が立たん――あたい、めかけなど云はれるつもりぢやない。

信吉　（意外さうに身を起して）そんなことを云つてゐないぢやアないか？

露子　（目を怒らして）今、あいつが云つたぢやないか？

信吉

露子　（迫るやうに）早く、約束通り、正式の夫婦にしてお呉れ。

信吉　（眞面目な平氣で）そんなことを氣にするにやア及ばない、さア――そんなことを氣にかけてゐちやア、この分らず屋ばかり多い世間に立つて行くことは出來やしない。目くら千人と云ふが、世間は千人が千人、万人が万人、この日本國中五千万の人間は、殆どみんな目くらだと云つてもいい。たとへば、世間からあいつは（と、手眞似をして）泥棒したと云はれる――詐僞をしたと云はれる――ひどくなつては、惡魔だ、逆賊だと云はれる――然し自分は實際に公明正大であつて、自分の信じた通りを實現してゐるなら、何の恥ぢるところもない。世間が分らないのだ――社會が目くらなのだ。目くらが何千万人騷いだツて、目明き一人の實際が分る筈はない。

露子　あんたばかりえらい、なア――むほん人！

信吉　（露子の言葉にはかまはないで）たとへば、闇と光とのやうなものだ。社會は丸で闇だ。闇では仕やうがないから、あの（と、後方、池の向ふを返り見て）電氣や瓦斯をつけて（この時、丁度藤棚の瓦斯燈一つともる。）明るくしてやるところが、精神上の眼が惡いものには、光が明る過ぎても邪魔になるのだ。もぐらもちを知つてるだらう――あのもぐらもちと云ふやつは、卑劣なもぐらもち根性があつて、自分の見すぼらしい姿を見られまい見られまいとして、結構な太陽の光を避けて、地べたの中を逃げまはつてゐる。だから、いつまでも、明るい地上に出ることが出來ない。世間のやつ等はみんなそのもぐらもちだ――おれは、その反對に、太陽だ。（また一つ、藤棚の瓦斯がともる。）

露子　（忍び切れず）そんなえらさうなことを云ふて、（と、呼吸が荒くなつて）あんたも暗いことをしたむほん人です。

信吉　分らない奴だ、なア――何がむほん人だ？　むほん人とは、裏切りをしたものを云ふのだ。

露子　裏切りをした、裏切りを！

信吉　（面倒臭さうに）そりやア、何を云ふんだ？　（また一つ、藤椅の瓦斯ともる。）

露子　（我慢してゐた不平を、我慢し切れないで）きツと、會はないと云ふて、（と、烈しい呼吸で）會ふたぢやないか？

信吉　（冷かに笑つて）わざ／＼もとの妻に會つたのぢやアない――向ふも知らずにやつて來たのだ。

露子　（聲を高めて、早口に）分るもんか！

信吉　それがお前ももぐらもちたる證據だ。（左りの腕を仕切りへかけて露子を見ながら）向ふがふらツとやつて來て、おれと話をするのは、おれの光を見て、近づいて來たのだ。おれの光に近づいて來るものは、あいつに限らず、すべてまたおれの意識の範圍內に登つた影だ。その影のうちで、お前が最もおれに接近してゐるのだ。

露子　（少し心が落ちついて）それでも、影ぢや詰らない。

信吉　つまらないどころか、その影が、さ、おれの光に接近すればするほど、おれと同化して、一緒になつてしまうのだ。影が影でなく、いつのまにか光その物になつてゐるのだ。おれから見ればお

前と云ふ影はたしかに、もう、おれの光の中に消えてゐる——これがおれのお前に對する眞實の愛だ。

露子　ぢやア、あたいがないのも同じぢやないか？

信吉　（優しく）然し、この外山信吉はお前を最も熱心に愛してゐるぢやアないか？　おれがおれの家族から自由になる爲め、おれはおれの家をあれ等に渡して、面倒臭い新聞記者などになつたのは何の爲めだと思ふ？　みんなお前と一緒に住む爲めぢやアないか？　三澤露子は、精神上この信吉の正當な妻だ。

露子　（嬉しさうだが、半信半疑で）そりやさうか知れんけれど、あたい、めかけなど思はれるのはいやだ。そのつもりでもないものを、今のやうにがみがみと、あの氣違ひ婆々アに世間に吹聽されてはいつまでも世間體が惡い。

信吉　世間で何と思つたツて、かまはない、さ——そりやア、初子が反對する爲めに、法律上の手つづきが濟まないうちは、氣の毒だが、お前は法律上の妻になることは出來ない。然しおれの精神では、もう、公明正大に、初子は先妻だと云へる、して進は先妻の子に過ぎない。

露子　（微笑しながら）進さんは、あたいをねえさんのやうに思てるやうだから、可愛いけれど——

信吉　（確信の態度を持して）進が可愛けりやアこツちへ取つてもいいが、まア、この（と、自分の胸を左りの手で輕く叩き）精神に信頼してゐるがいい、さ。

露子　（思ひつめて、仕切りへもたれたからだを信吉の方へ延ばし）ぢやア、いつ、あたい法律上正式の妻になれるの？

信吉　（明確に、冷靜に）向ふが離緣屆に捺印するまでは、法律上の手續きは出來ない。（下手の方を見て）進はどうしたらう、ね？

露子　（失望したやうに）もう、歸りましよう、進さんはえいけれど、またあいつが來たらうるさいから――

信吉　（露子を見て）もう、少しお待ち。

露子　（信吉の書物とステッキとを持つて、亭の上手前方の柱をまはつて來て、あまへるやうに渠のそばに立ち）さア、歸りましよう。

信吉　おれは今一度進に會つて置きたい。――何と云つても、お前の次ぎにおれは進が可愛い。初めはさうでもなかつたが、けふ久し振りで會つて見ると、なかなか面白い子だ。夢と現在とをごツた交ぜにするなど、天才的なところがある。段々敎へ込んで、自覺を與へれば、そのままおれの主義を繼ぐことも出來るかも知れない。

露子　（信吉を粗外すやるうに見て意地惡い相を現はし）そんなこと云ふて、矢ッ張り、あの婆々アに會ひたいのだろ。

信吉　（澄まして、仕切りへもたれ）また下らないことはよせ。

露子　（急にまたあまへて顔をしがめ）歸る云ふのに！（と、からだを信吉に押しつける。點燈夫登場。露子、信吉から上手へ飛びのく。點燈夫、無言、じろじろ見ながら上手から後部へまはり、池のふちの瓦斯燈をつけて、下手へ去る。入れ代つて下手から進、寂しさうに登場。）

（六）　進・信吉・露子

進　（前面のベンチ、中央の角から左り手の仕切りに左りの腕をかけ、露子の方を向いてもたれてゐる信吉のそばへ驅け行き）お父アん、（と、うつたへるやうに）音樂が濟んだのに、まだねえさんは出て來ないよ。

信吉　（ふり向いて右の腕を仕切りへかけ、進を愛する目つきで、上手から下手へ見ながら）ねえさんは、もう、いつまでも來ないのだよ。

進　（信吉のそばにつッ立つて）ぢやア、嘘をついたんでしようか？

信吉　嘘ぢやアないが、ね、（と、ちよッと首をひねり）どう說明したら、分るだらう――まア、お前がさう云ふ夢を見ただけだよ。

進　夢だけれど、（と、叱られないかと遠慮して）あたい、どうしても本當のやうに思ふもの。

信吉　夢は夢で、あとになつては本當でも、嘘でもない。

進　（不審に思つて）本當でも、嘘でもないものは何でしよう、ね？

信吉　（云ひ含めるやうに）それが夢と云ふもので――おとなでもよく見ることがあつて、――

進　見たことは矢ッ張り本當でしよう。

信吉　それが、さ、（と、露子と顏を見合はして、說明に苦しむ樣子で）その場だけでの本當であつて、お父アんのやうなおとなは、夢をその場だけで握ることが出來るが、子供はまださうは出來ない。子供の見た夢などは、ただ見ただけのことで、あとになれば、本當にさう云ふことがあるわけのものぢやアない。お父アんの歌でも、お前が、臥し戶に消える』と歌ふぢやアないか――見ても、直ぐ消えてしまうのだ。直ぐ無くなつてしまうのだ。

進　（辨釋に苦しむ樣子で）ぢやア、矢ッ張りねえさんが三澤さんになつてしまつたでしようか？

露子　（亭の上手前方の柱に右の手をかけて）ほ、ほ、ほ！（と、笑ふ。）

信吉　（眞面目に）うん、お前には、さうかも知れない。

進　（露子を見て、きまり惡さうにして）でも、あたい、さう思ふんですもの。ねえさんも三澤さんを知つてたんでしよう――さうしてあたいがねえさんを尋ねて來たら三澤さんに會つたんですから、ねえさんが三澤さんになつて、お父アんのそばにゐるのだか知れません、わ。ねえさんは、生きてた時から、おッ母さんのそばよりもお父アんのそばにゐたいと云つてゐましたから。

露子　（ほほゑみながら）では、進さんもお父アんの方へお出でよ。

進　あたい、さうしたいんだけれど、おッ母さんに叱れるから――

信吉　おッ母さんと云やア、お前がねえさんを探してゐるやうに、今お前を探して、向ふの方へ行つ

たが・會はなかつたかい？

進　（首を傾げて）あたい・おッ母さんに會ふのはいやだ。

信吉　いやだッて、毎日・毎日・育てて貰つてるんぢやアないか、お父アんのゐない代りに？

進　さうだけれど――

信吉　ねえさんのことなど・もう・いつまでも出て來ッこはないから、早くお母ッさんと一緒にお歸り。

進　…………（情けない様子。）

信吉　ね・さうして、ねえさんの代りに、正直に、よく勉强して、お父アんの書いたものを――哲學でも・新體詩でも――どしどし讀むやうにお成り。

進　…………

露子　進さん・（と、上手から近よりて、右手で進の左りの肩を押へて）さうおしよ――日が暮れると、お化けが出るよ。

進　（一層情けなささうに）だけど・あたい、おッ母さんは嫌ひだもの――

（初子、下手から登場。露子、之を見て、進から上手の方へ離れる。）

（七）初子、進・露子・信吉

初子　（險相な顏をして）進！　（と、下手から進のそばへ驅け寄る。）

進　……（いやさうな顏をして、下手、母の方へふり向くと同時に、上手へ二三歩、露子の方へすさる。）

初子　（進を下手から睨みつけて）何を云つてるんです、おツ母さんを嫌ひだなんて？

進　（顏を眞ツ赤にして、申しわけなささう。）…………

初子　おツ母さんをさう嫌ひなら、お父アんの方へやつてしまふよ。

進　（からだを振つて）いやだア！　いやだア！

初子　ぢやア、なぜ、そんなことを云つてるんです――いろんな云つけ口をしたんだらう。

進　さうぢやアない、さうぢやアない。

初子　今からそんな惡い事ぢやア、お父アんと同樣、末はどんなになるか分りやアしない。（と、亭の下手前方前向きのベンチにもたれて、煙草をすつてゐる信吉を見る。）

露子　（上手からそれを見て、輕蔑するやうな顏つきをしたが、然しわざと進に優しく）進さんはあたいのうちへ來たらえいぢやないか？

初子　（露子にふり向き、憎々しさうに）それこそ、おほきにお世話ですよ！

露子　（橫を向き、獨り言を聽えよがしに）ふん、碌に教育も出來ない癖に――

初子　（聽きとがめて、あざ笑ひながら）さぞ、あなたは教育がおありになるでしよう、ね――矢板裁縫學校を出たくらゐで！　わたしは、これでも、今で云へば、女子大學相當の教育を受けてます。

露子　（横向きのまま）そんなら、それだけの品格を持つてるがえい。

初子　品格ですと？（と、怒りと冷笑で）人の所天をだまして取るやうなお人柄で、品格が呆れます。

露子　（初子にふり向いて）だましたのぢやない！（と、また横を向く。）

信吉　（腰かけに、煙草をすひながら、二人のいさかいを知らないふりで聽いてゐたが、初子に向ひ）おれも決してだまされたんぢやアない。

初子　ぢやア、（と、あざ笑ひながら）定めし、お氣がお合になつただらうよ、馬鹿々々しい！

露子　（ふり向いて）默れ、くそ婆々ア！

初子　（露子の方へ少し迫り行き）くそ婆々アとはあまり失敬ぢやアありませんか？

露子　くそ婆々アだから、くそ婆々アだい！（と、信吉の方へ近よらうとする。）

初子　お待ちなさい！（と、迫り行きて、露子をさへ切り、その袖を執らうとする。進、初子と入れ代りに下手へまはり、露子は、初子を避ける。）

信吉　（立ちあがつて、巻煙草のすひ殻を棄て）今更ら初が下らないことを云ふにやア及ばない。（と、初子を引きのけて、かの女と露子との間へ這入り）なんと云つても、（と、初子に）お前は敗北者だ――敗北しないうちに、所天の心を不斷占領し置くことに氣がつかなかつたのはお前の落ち度だ。今になつて、今までうつちやつて置いた顏の化粧をやり直しても、もう、遲い。

初子　（ちよッと顏を赤らめて）それは勝手です。

信吉　（憎いほど冷靜に）おれの勝手はおれに自由な心熱的行動を與へるが、お前の勝手はおれには絶緣の證據だ。

初子　（信吉の言には頓着しないで）くそ婆々アでも、何でも、（と、露子の方をにらみて）あなたはお若いから、信吉先生のお氣に入りでしようよ。（露子、横向きから直つて、じッと初子を見る。初子の目が露子の目と合ふと、初子は一言、投げつけるやうに強く）惡魔め！

露子　………………（わざと無言で横を向く。）

信吉　（露子を見て）露子、お前はちよッとどッかへ行つてゐな。

進　（手持ち無沙汰に下手でつッ立つて、おづおづしてゐたのが、活路を見つけたやうに）三澤さん、一緒に行きましよう。

初子　（進を返り見て）いけません、一緒に行つちやア！（と、睨みつける。）

進　（露子が默つて、初子、次ぎに信吉の前から進み、進のそばを、いやさうに、下手へ退場するのを見送りながら、もぢもぢして）あたいも一緒に行つちやアいけないの？

初子　（眼を怒らして、口を引き釣らせ）いけません！　また、『あたい』なんて云つて！

信吉　（進を見て）お前には云ふことがあるから、こッちへお出で。

（進、おづおづして、信吉のそばに行きかねるこなし。露子、退場。）

初子 (上手の方から、下手の進に向ひ)進、あんなものと一緒に歩いちやアいけないよ。

進 (無邪氣に) なぜ？

初子 (信吉が初子と進との間の後方に立つてゐる顏を瞰むやうにして) いやな女ぢやアないか、ねー

進 (殊に無邪氣に) あたい、いやぢやアないのよ。

信吉 (進を見て) ふ、ふん。(と、微笑し、それから初子に向ひ) お前はおとなに云ふことと子供に云ふことの區別を知らない——進は子供ぢやアないか？ まだ何も分らない子供にそんなことを云ふから、子供は、さツきもおれ達に云つたことだが、おツ母さんはお父アんのことを惡く云ふんだもの、などと不思議がるんだ。

初子 (進をおそろしく見つめて) きツとそんな蔭口でも云つたのだらうと思つたのだ。(進、初子の顏を見つめて、おそれてゐる。)

信吉 蔭口ぢやアない、それは——子供は正直なものだ。泥棒をしちやアいけない、嘘をついちやアいけない、惡口を云つちやアいけないと、學校の先生におそはつた通りに思つてゐるので。それを親が却つて反對の手本を見せるなどとア——

初子 (信吉に喰つてかかるやうに)それはあなたのことですよ——あなたが反對の手本を見せるのです、

墮落女などと一緒に音樂を聽きに來たりして！

信吉　墮落してゐるのか、ゐないのかと云ふ問題も、子供にやア分らない。

初子　分らないから、今聽かして置くのです。

信吉　（說得するやうに、丁寧に）それが違つてゐる――

初子　（半ば夢中で）いえ、違つてません！

信吉　まア、聽け！（と、聲をとがらしたが、直ぐまた丁寧な口調で）聽かせたツて、どうせ分りやアしないのだ。分る時が來なきやア分りやアしない。分る時が來たら、或はおれの唯一の弟子として、おれの心熱的人生觀をそツくり受け繼ぐやうなことも出來るかも知れない。その時が來れば、自分で自分が親のことを――父のことでも、母のことでも――明かに判斷するやうになるのだ。それまでは、父の惡いことなど、實際惡かつたとしても、云つて聽かす必要がないではないか？

初子　（いらいらして）惡いから惡いと云ふんです。

信吉　よしんば、實際惡かつたとしても、それをしやべつて何の役に立つ？

初子　見せしめの爲めです――子供をよく仕つける爲めです。

信吉　駄目な奴だ、なア！（と、卑しむ様子。）分らないことは、云つても、仕つけにやアなりやアしない。

初子　（早口に）

の、直きあなたのやうにあんな女を拵へることは、目に見えてます。

信吉　（少し冷笑して）　それは杞憂といふものだ――（ベンチに行つて、もとの場所に腰をおろし）　杞人が天の落ちるのを憂へてるのだ。丸で男の子に對する賢母良妻主義だ。（失望したやうに横を向き）　お前には子供の仕つけは出來ない！

初子　（憤激して）　出來ないでもよう御座います――『碌に教育も出來ない癖に』など云へるあの女に、どれだけ子供の教育が出來ます？　わたしはわたしで立派に育てあげて見せます。

信吉　（また初子にふり向き）陰口を云はせるやうにかい？　（この時、進、母の顏をこわごわ盜み見る。）

初子　だから、嚴格に、嚴しく仕つけて見せます。

信吉　（横を向いて）分らない奴だ、なア――そんな嚴格はつまり不嚴格だ。（間を措いて、また初子に向ひ）おれはあの露子が墮落してゐるとは決して思はない。

初子　墮落ぢやア（急に足踏みして、信吉を見つめながら）ないか、人の所天を寢取つて！

信吉　（また横を向き、わざと冷淡に）　おれが誠實に愛を向けたから、一緒になつてゐるのだ。

初子　それが（また足踏みして、一歩を進め）　墮落です、誠實も何もあつたものか！

信吉　（またふり向き、目を初子に向けて、その血相が變つた顏を冷靜にながめながら）　おれ自身も決して惡いことをしてゐるとは思はない。

初子　（溜りかねて）　よくそんな圖々しいことが云へたものです、ねえ！　（と、信吉に突き進む）　ああ、

くやしい！（と、兩手で信吉に武者振りつく。）

信吉　何をしやアがる！（と、チョッキの胸に鼓動をあらはして立ちあがり、初子を突きのける。）

進　おッ母さん！（と、泣き聲を出して、初子がよろめいて亭の上手前方の柱のわきへ倒れたのに抱きつく。）

初子　（信吉がまたもとの亭の下手前方前向きのベンチへ腰かけに行くのを恨めしさうに見つめながら）あの惡魔に魅入られてるんだ！（と、起きあがる。進、はらはらして初子にすがり付き、信吉の方を憎むやうに見る。信吉はもとの座に戻り、目をじッと初子の目に向けてゐる。通行人がある。電車の音響く。）

信吉　（言葉を表面では和らげて）どうせお前とおれとは永久に一致することは出來ない――一致出來ないものは夫婦とお前が思つてゐても單に法律上のことに過ぎない。して、お前には、おれとの仲に出來た子供が三人あるけれど、お前がさうがん張つてゐては、さツきも云つた通り、おれが子供に對する愛情までも無くなしてしまう。お前にはおれが所有してゐる家を自由にさせてあるのだから、それをお前に全くやる條件で、度々云つたことだが、今度こそは、おれが頼むから、離緣して吳れ。

初子　（早口に）離緣なんか、永久に出來ません！

信吉　（矢張り和らかに）それでは、いつまでも、それが子供に對する愛情をさまたげられるのだ。

初子　あなたは、ね（と、實地づくで念を押すやうに）わたしと離れたら、子供に對して都合がいいか知れませんが、わたしはそれでは子供に對する權利が（また早口に）無くなりますよ！

信吉　（飽くまで和らかに、半身を座から少し突出して）權利などはまた改めて法律で求めることも出來る。

――で、さうすれば、お前もおれの友人もしくは兄弟として、潔白に、またおだやかに交際することも出來るし、また子供も直接におれの愛を受けることが出來る。つまり、一擧兩得だ。

初子　何と云つても、わたしもいつも云ふ通り、離縁は致しません。

信吉　（顏に段々怒りの色を見せて、少し間を置き）これほど云つても、お前の神經は愚鈍で、分らないのか？

初子　はい、愚鈍で分りません！（と、横を向く。）

信吉　（初子の方を睨みつけて）勝手にしろ！（と横を向き）その代り、進はおれが連れて歸る。

進　（つらさうに初子にすがつたまま、信吉の顏を見て）いやだア！　いやだア！（と、からだを振る。）

信吉　（こわい顏をして立ちあがり、然し聲はわざと優しく、進に）お父アんには、先生もない――また弟子もない。おれがお前だけをえらい弟子に育ててやらうと云ふのに、お前はいやだと云ふのか？

進　（おそろしさうに、然し遠慮勝ちに）あたい、ねえさんのとこがいいんだもの――

初子　（勝ち誇る顏つきで）世間は勿論、子供までも、あなたの味方などをするものア御座いませんよ。――あなたの味方はあの露子ぐらゐでしよう。この進は、わたしの一生樂しみにしてゐる子ですから、行かうと云つても、わたしが決して行かせません。

信吉　（どかと腰をベンチにおろし、呼吸を段々烈しくして）どいつも、こいつも（と横を向いて、強い顫へた聲で）勝手にしろ！　みんな闇に消えてしまへ！

初子　あんな馬鹿なお父アんはほうつて置いて、さア、進（と、進の手を執り、からだを上手へ向け）歸りましよう。

進　（初子の手を下手の方でふり切つて）あたい、いやだア！

初子　（進にふり向いて）また『あたい』なんて！――もう、日が暮れますよ！

進　（訴へるやうに）でも、あたい、ねえさんのとこへ行きたいんだもの！

初子　（それを露子のことだと思ひ違ひ）お前もあの惡魔に魅入られてるんか？（この時、露子、憎さうな顔で蝙蝠傘をついて、からだを曲げて、下手、夾竹桃の蔭から、こちらを窺ふ。）

進　（横に下手の方へあとずさりしながら）ねえさんは惡魔でも、幽靈でもない――惡魔でも、幽靈でもない！

初子　（進を追ひ行きて）いけません、いけません！

進　（そろ〳〵逃げながら）いやだア！　いやだア！　あたい、ねえさんとこへ行くんだ。

初子　（口を釣りあげて）いけません、いけません！（進、横向きで逃げそこねて、亭の下手前方の柱のそばに行き、雨垂れ落ちの敷き石につまづいて倒れかける。しまつたと云ふやうに母の顔と父の方とを一度に見て、石を亭の眞ッ下手へ越えて踏みこたへたが、急に一生懸命になつて、初子を避けて亭の後方を上手へまはり、初子が追ふてまた上手へ來た時）

進　ねえさんが待つてるんだ！（と、亭の前方を疾風の如く走つて、下手へ消える。）

初子　（上手に立つて、進の消えるのを見てゐたが、渠が消えてしまうと、さきの勝利顔もどこへやら行つて、持ち前のヒステリ的な暗雲を浮べ、横向きの信吉を見つめながら）あいつも親の子ですよ――第二の信吉先生ですよ！　さぞ、いいお弟子が出來るでしよう。――所天を取られ子を取られ、あんな家を貰つたツて承知出來るものか？　（と云つて、初子が身を轉じて上手へ退場すると同時に、夾竹桃の蔭から、露子はからだを延ばして、信吉の方へ歩み出す。）

（九）　露子、信吉

露子　（ちよこ〳〵と進み、亭の前方のベンチに横向きになつて、左りの腕を仕切りへかけてゐる信吉に近づき、ふり向いた信吉と目を見合はすと、いきなり、憎々しく）弱蟲！――意久地なし！――法螺吹き！――馬鹿野郎！　（と、信吉をじツと睨みつける。）

信吉　（まだ納らない動悸を納めようと努めながら、無言で立ちあがり、右手にステツキ、左りの手に洋書を取りあげ、上手からまた露子に向いて）　さア、歸らう。

露子　（燃えるやうな眼で、下手から信吉を見つめながら）　歸るなら、向ふへ（と上手を顎で示めして）お歸り！

信吉　（まだ胸に動悸を打たせながら）　何を云ふんだ？

露子　みな聽いてた――みな聽いてた！　嘘つき！――　法螺吹き！――弱蟲！　離縁をようしないぢやないか？

信吉　（息苦しさうだが、確信を以つて）あれは、ほんの形式上の問題に過ぎない。――（ふと不確かさうにお前はまだ分らないのか？

露子　それでも、あたいの世間體が惡い。

信吉　（急に飜然として）お前も矢ッ張り形式家の一人か？（明確に）ぢやア、お前がおれに對する約束も違ふ。

露子　ちごても仕かたがない！

信吉　（呼吸を計るやうにして）手、手前も、ぜ、絶縁だ！

露子　（兩手を延ばして）畜生！（と、信吉の胸ぐらを捕へる。信吉、ステッキと書物とを持つたまま一二歩よろめく）

信吉　（ステッキをも書物と一緒に左りの手に持たせて）何をする！（と、ゆるい然し强い聲を以つて右の手で露子をねぢふせるやうにする。兩人は暫らくもみ合つたが、信吉、露子の手をふり切ると同時に、露子、亭の前方左りがはのベンチへよろけ行きて、そこに腰を落す。信吉、ステッキをまた右の手に持ちかへて、上手、雨垂れ落ちのそとに出で、自然に大きく呼吸をしながら、露子を見つめる。）

露子　（同じく呼吸を烈しくしながら、信吉と怒りの目を見合せて）無事に生かしては置かんぞ！

信吉　手前のやうな不誠實な奴は、あいつ等と同樣、闇に消えてしまへ！（と、叫んで顏を上手前方へそむけて、まだ呼吸は大きい。）

露子　（腰を落したまま、下手を向いて）どうせ、こんな目に會ふて死ぬんなら、お前の身の立たん死にざ

まをしてやる――それをお前の新聞に出すがえい。（暫らく無言。信吉はその見えのままでゐる。露子はまた首を垂れて、考へ込む。――間――突然、露子は立ちあがり）死ぬ！（と、決然たる態度で、下手へ向いて一歩踏み出す。）

信吉（ふり向いて）死ね！（と、一歩上手へ横にあとずさりする。）

露子　死ぬ！（と、また下手へ一歩。）

信吉　死ね！（と、露子の後ろ姿を睨みながら、また上手へ一歩横ずさりする。）

露子　死ぬ！（と、また下手へ一歩。）

信吉　死ね！（と、踏みとどまつて、露子の離れ行く後ろ影を見つめる。露子、退場。通行人あり、電車の響――藤棚の瓦斯燈の後方なる電燈、明るくなる。上手、後方の圖書館の二階、各窓にも點火。やがて下手から進、しほしほとして登場。）

（一〇）進・信吉

進（泣き出しさうな顔で、亭の下手前方の柱のそばまで來て）お父（とつ）アん。

信吉（亭の上手前方の柱のそばから）…………（ただ進にふり向く。）

進　眞ツ暗になつて來たの、ね。

信吉　…………（無言、努めて情を動かさない。）

進　夢で見た時のやうに、眞ツ暗になつて來たの、ね。——おツ母さんは、もう、歸つたの？

信吉　（冷靜に）おツ母さんは闇へ消えたよ。

進　三澤さんもどうしたの？

信吉　あれも夢と闇とへ消えたよ。

進　（少し考へる樣子）三澤さんがゐなければ、ねえさんもゐないのか知らん？——あたい、三澤さんと一緒にゐると、ねえさんと一緒にゐるやうな氣がするのよ。

信吉　（なほ冷靜に）お前がさう思つたばかりだ。

進　（心配さうに、然し泣き顏は直つて）だけど、ねえさんはおツ母さんが云ふ通り惡魔や幽靈でしようか？　だから、嘘を云つたのでしようか？

信吉　（冷やかに同情して）おツ母さんやお前の考へゐやうな惡魔や幽靈などはない。

進　（笑みを漏らして）ぢやア、嘘も云はない、わ、ね。

信吉　嘘ではない——然し、闇へ消えたものは、みんな死んだものだ。

進　けども、（と、心配と悲しみとを忘れたやうに）死んでも、まだねえさんは夢で生きてるんでしようね。——夢のやうに暗くなつた花壇には、ねえさんの好きな薔薇の花のいいにほひがしてゐますよ。

信吉　お前は飽くまでも無邪氣だ。（と、釣りこまれて）それが乃ちお前が『魔の夢の後ろ姿』と歌ふ、その後ろ姿のにほひだ。

進　（嬉しさうに）あたい、もう、一度。（と、下手をふり返つて、獨り言のやうに）行つて見よう、ねえさんが後れて來たかも分らないから。（と、行きかける。）

信吉　（腰のポケトに手を入れて）ちよツとお待ち。（と、ポケトの五十錢銀貨を出し）さア、これをお前にやる。（と、進の方へ一二歩。）

進　信吉の方へ向つたまま、あとずさりして）貰つてもいいか知らん、おツ母さんに叱れない？

信吉　なアに、かまやアしないよ。

進　さう？（と、嬉しさうに右の手を出して受け、それを堅く握り締めて）あたい、これで學校の物を買はう。

信吉　ああ、さうしてしツかり勉強するんだ。（と、上手へ一步離れる。）

進　（信吉を離れたまま仰ぎ見て）もう、お父アん、歸るの？

信吉　ああ。（と、横向きにまた一步離れる――間。）さうしてあすから、新聞記者をやめるのだ。

進　さうして、あたいのおうちへ來るの？

信吉　（沈痛に）いや、お父アんはいつも獨りぼツちだ。

進　あたいも今獨りぼツちだから、犬が吠えたら打つ棒を（と、銀貨を左り手に持ち變へて、右手でさきに棄てた棒を拾ひ取り）持つて行くよ。

信吉　それもお前の勝手だ。（と、また一步離れる。）

進　(信吉が離れるに從つて花壇の方へ氣を取られて) 行くよ。(と、下手へ向ふ。)

信吉　(急にふり向いて)もう、行くのか? (と、もう一度進の顏を見たいやうに、二三歩ばかり下手へ運ぶ。)

進　(向ふを向いたまま足を運び、獨言のやうに) 今度はねえさん、きツと來てるだらう。

信吉　(進の後ろ姿を、舞臺中央からやや下手まで行つて、追ひながら)お前も闇に消えるよ——『魔の夢』がいつ自覺出來るだらうか、なア? (と、また冷靜な態度に返へる。電車の響——)

——幕——

——明治四十四年二月——

スケチ劇　停電

人物

ケープを着た婦人
筒袖外套の老人
インバネスの親方
煉瓦建築業者
洋服の男
姐さん
官吏風の男
同じくその細君
アンペラ袋を持つ印絆纒

商人體の男
インバネスの煉瓦屋
勞働者第一
同　第二
同　第三
同　第四
同　第五
同　第六
同　第七

勞働者第八
老　婆
小　僧
子を負つた婦人
車　掌
運轉手
其　他

場所

中澁谷終點

時

冬の夕方

（普通の電車々臺の長さに舞臺を引き締め、下手から上手に横たはつた電車の中の出來事である。觀客の目をさへ切る方の窓枠、腰掛け等は全く取りはづし、舞臺の後方に當る側がよく見えるやうになつてゐる。その後ろはまばらな冬樹立。電車の呼ぶ子で幕が開くと、山の手電車の出發するボウと云ふ音がする。上手、車掌臺を前面へ少し離れたところに、車掌と運轉手とが立つて、いづれも寒さうに、兩手を外套の兩袖にさしかはせたまま、からだをゆすつてゐる。車中には、乘客三名——一人の商人體の男は車掌臺を這入つたところに、他の官吏風の男は、八字髯をはやし、和服だ。）

車掌　山の手は通じてるが、なア、こツちのアどうしたのだらうか？

運轉手　どうしたも、かうしたも、あるもんかい、かう度々停電しやがつて？

官吏風の男　（六ケしい顏をして、車掌臺の上まで出て來て）おい、車掌、いつ出る？

車掌　（じツと見あげたまま）……

官吏風の男　この頃のやうに停電（ていでん）が多くツちやア困るぢやアないか？

車掌　（餘り取り合はないやうに）もう、まゐりましよう。

（この時、中年の丸髷婦人、上手より、ケープをまとつて登場。車掌と運轉手とは道を開いて、婦人に注目する。）

官吏風の男　（も、かの女を見おろしたが、矢張り、また車掌に）毎日のやうに停電してゐて——

（ケープの婦人、あがり口に近づきながら、じろりと男を見あげたが、そこを退けと云ふかのやうに立ちどまつ

た、停電と知つても頓着しないで。）

車掌　（同じく冷淡に）然し、もうまゐりましよう。

官吏風の男　實に不都合千萬だ！

（かう云つて、渠はもとの席へ向ふ跡から、ケープの婦人はあがつて行く。夫婦は並んで坐わつて、その前を通るケープをじろ〳〵見てゐると、かの女は運轉手臺の方の隅に腰を据ゑ、ちよツと夫婦の方を見たツ切り、横を向く。）

細君　ほんとに、不都合です、ねえ。

官吏風の男　（なほ怒りを含んで鬚をひねくりながら）實に、不都合極まる、さ！

（ケープの婦人、『何を云つてる』と云ふ風に夫婦の方を見てから、懷中時計を出して見る。）

車掌　（身をゆすりながら）寒い、なア。

運轉手　寒い、寒い！（これも亦身をゆすりながら）運轉中はさうでもないが、とまつてると、却つて寒い。

車掌　さうだ、なア。

運轉手　いつ來るか、まだ分らんぜ。

車掌　さうだ、なア、きのふも今頃であつたからなア。

（ケープの婦人、詩集めいたポケツト形の書を開らいた。上手より登場者——大きなアンペラ袋に仕事道具を

入れたのを重たさうにさげてゐるしるし絆纏、その跡からインバネスを印絆纏の上に着た何かの職人の親方並にその小僧。この小僧は、圓い眞鍮の機械で一つ毎に三つづつ穴の明いたのを三個、荒縄でゆはへて持つてゐる。)

アンペラの印絆纏(のツそりあがつて)また待たされるのか、なあ?

インバネスの親方(その跡から押して行つて獨り言のやうに)停電か、な?

商人體の男　また停電ですよ。

(アンペラの男はぐづぐづ進んで、書物に目をそそいでゐるケープの婦人のそばに腰をおろし、袋を兩膝の間にはさんで下に置く。かの女は『きたならしい』と云ふ顔付きをして、ケープの裾を引きよせる。)

インバネスの親方(商人體の男の隣りに腰をかけたが、そのまた隣りへかけた小僧が機械を股の間へ押し込んだのを見て)また忘れないやうにしなよ。

商人體の男　うふ(と笑つて)電車と云ふ奴アよく物を忘れさせますさア。

インバネスの親方　こいつア少しうすのろですから、な。

(ケープの婦人、こちらを見る。)

商人體の男　いや、誰れと申して限ツたものぢやア御座いません――わたくしも、こないだ、或物を置き忘れましてて――尤も少し醉つてをりましたが――大門の車庫へ行け、いや、三田の車庫へ行け、どこへ行け、かしこへ行けと云はれましたて。それが爲めに半日かかつてしまひました、て。

インバネスの親方　こいつア、また、きのふ、鑿とのこを忘れて、それを探して來るに一日がけでさア。

小僧（あまへるやうに）一日もかかりやしない――六七時間だ。

インバネスの親方　生意氣云ふな、矢ッ張り、一日も同樣ぢやア無いか？

（ケープの婦人、ちよッと微笑する。）

商人體の男　冬の日は惜しいやうに立つて行きます、な。

インバネスの親方（ほんの、おつき合ひに）全くです、な。

官吏風の男（その細君に向ひ）困る、なア、かう待たせられちやア――！

細君（所天を返り見て）よしましようか？

官吏風の男　さア、どうしようか、ねえ――

商人體の男（思ひ出したやうに立ちあがり）わたくしは歩きましよう。近いところですから――御免下さい。

（この挨拶を、インバネスは無言で受ける。前者は車掌臺を下りる。上手より、若い勞働者の連中が八名。入りまじつて、襟に『東京・築業』と看板書いたしるし絆纒の少し親方じみたのが、提燈を以つて、軍艦羅紗の筒袖外套を着て、兵隊靴をはいた老人。新聞記者か著述家らしい若い洋服男が、雜誌を一つ手に丸めて持つて。つづいて、ぶら提燈のつつんだのを提げた老婆一名。）

第一の勞働者　（商人體の男の下りて來たのを見て）停電だぞ

第二の勞働者　また停電かい？

第三の勞働者　停電か？

第四の勞働者　停電でも何でもいいや、な、押し込め、押し込め！

筒袖外套の老人　（太い聲で）さうだ、押し込め、押し込め！

第五の勞働者　（老人の太い聲を眞似ながら）さうだ、押し込め、押し込め！

第六の勞働者　わッしよい！わッしよい！

第七の勞働者　押し込め、押し込め！

第八の勞働者　わッしよい、わッしよい！

第一の勞働者　いよう（と、ケープの婦人のこちらを見てゐるのを見て、ちよッとびッくりしたやうに冷かして、アンペラのしるし絆纏のつぎに腰かける。）

第二の勞働者　いよう（と、同じくかの女を一瞥して、夫婦のつぎに。）

第三の勞働者　いよう（と、また眞似を云つて、商人體の男の棄てた席に着く。）

第四の勞働者　（第二の勞働者の次ぎに腰をおろしながら）學者か、なア、本など見て？

第二の勞働者　さうだらうよ、へん！

（ケープの婦人、横を向いて聽かない振りをする。この時、洋服の男、第一の勞働者と夫婦との間に行く。）

筒袖外套の老人　（インバネスの親方を見て）や、今日は。
インバネスの親方　今、お歸りですか？
筒袖外套の老人　へい。

（渠はから簡單に答へながら、押されて第四の勞働者の頭上にある釣り革を握る。第五、第六、第七の勞働者はさきの方へ通り、第五のはアンペラの前、第六のは洋服の前に立ち、第七のは洋服と夫婦者との間に入る。煉瓦建築業者は又第四の勞働者と小僧との間に入り、第八の勞働者はその前に立つ。老婆は一番あとから這入つてまごまごしてゐる。）

第三の勞働者　（立ちあがつて）お婆アさん、ここへ掛けなよ。
老婆　ありがたう――年寄りやさかい、なア。
（老婆、腰をかける。）
インバネスの親方　大阪ですか、お婆アさんは？
老婆　へい、さうだす。
第七の勞働者　（眞似をして）へい、さうだす。
第八の勞働者　さかい、なア。
老婆　へ、へ、へ、へ！
第五の勞働者　おい、立ちんぼだぜ。

第六の勞働者　電車も立ちんぼだい。
第七の勞働者　獨り者のおれ達も立ちんぼだい。
第三の勞働者　よせ、人前があらア、な。
第四の勞働者　何が人前だい？——おれだツて、女房のひとりや二人は持つてらア、な。
筒袖外套の老人　おほきなことを云ふ、なア。
第八の勞働者　女房があるなら、もう、浮氣はよしねい。
筒袖外套の老人　よすも、よさねいも、あるものかい——どうせ、金はありやアしなからう。
煉瓦建築業者　は、は、はア！
第一の勞働者　金がないから、かうして素ツぱだかでかせぐんだよ。
第三の勞働者　勞働は神聖だぞ。

（ケープの婦人、洋服の男と同じくその方に注意の目を向ける。）

筒袖外套の老人　生意氣に神聖など云ふが、それぢやア神聖とはどんなことだか知つてるかい？
第六の勞働者　知らねいでかよ？
筒袖外套の老人　知つてるか——おほかた、大道演説のやうな、何とか主義の演説屋の口眞似をどこかで聽いて來たのだらう？
第七の勞働者　そんな惡口こそ大道演説も同樣だぜ。

第五の勞働者　耳がありやア、聽いて來らア、な。

第二の勞働者　演說をしろ、演說を！

筒袖外套の老人　でも、演說ぢやア雷車は動かねいぜ。

インバネスの親方
煉瓦建築業者　は、は！

第八の勞働者　ぢやア、矢ッ張り、立ちんぼかい？

官吏風の男（細君を返り見て）出ようか？

細君　まア、もう少し待つて見ましようか、折角ですから？

（この時いてふ返しに結つた二十四五の姐さんが、上手より登場。つか〳〵と車掌臺をあがる。）

第四の勞働者（第三のを越えて立つた姐さんをちよッと見てから）段々大入りになつて來たぜ。

姐さん（無遠慮に）大入りはいいが、誰れか一つあたしを腰かけさせておくんなさいな。

筒袖外套の老人（よくその姿を見つめて）實際、腰つきが少しをかしいぜ。

姐さん　ええ、をかしいでしようよ、病人だから。

筒袖外套の老人　あんまりいい病氣でもなささうだぜ。

姐さん　そりやア、もう、隱さうたツて、あたし達のやつてることは直ぐ分るにきまつてらア、ね。

筒袖外套の老人　あんまり矢鱈に男を喰ひ過ぎて、ばちが當つたのだ、な。

姐さん　そりやア、さうに違ひないが、まア、誰れか、一人でいいから、席をあけておくんなさい

な、ね。

インバネスの親方　二人分のがらぢやアない。

筒袖外套の老人　（第四の勞働者に）立つてやんなよ——病人だア。

（第四の勞働者、その通りになる。ケープの婦人は、それとなく、誰れよりも、よく注意の目を向けてゐる。）

姐さん　ありがたい、ねえ（そこに腰をおろして）苦しくツて、苦しくツてたまらないから、今晩は、商買を休んで、今、醫者へかけ附けるところなんです——ああ、痛い！

（から云ひながらあたりにかまはず、片手を袖の中から、他の片手を帶の下から入れて、下ツ腹を痛さうに押さへる。勞働者等は默つてそれを見てゐる。）

筒袖外套の老人　可哀さうに、なア

煉瓦建築業者　どこです、な、姐さんは？

姐さん　（あごをつき出して）つい、そこの踏切りのそばの銘酒屋なの。

筒袖外套の老人　ぢやア、なんだ、な、どン百姓出の軍人なんかを相手にばかりしてイたんだ、な、

姐さん　まア、そんなもの、さ。

洋服の男　（少しからだをその方にのり出して）あんな方面へも、姐さん、兵隊は遊びに行きますか、ね？

姐さん　たまにやア、來ないこともない、ね。

筒袖外套の老人　どうせ、兵隊なんぞに碌（ろく）な奴アない、さ。

姐さん　兵隊はおろか、男にやア、どうせ、碌な奴アない、さ。

インバネスの親方　わツは、は！

筒袖外套の老人　かさツ氣のない奴アねいから、なア。

煉瓦建築業者　は、は、は！

洋服の男　そこへ又色氣が付くから、たまらない。

男子連と老婆　は、は、は！

筒袖外套の老人　色氣に、喰ひ氣に、かさ氣だ。――おい、勞働者諸君、素ツぱだかの[illegible]づく[illegible]神聖なら、この姐さんほど神聖なものはねいんだ。――からださへほうり出しやアいいんだから　な

インバネスの親方　如何にも、なア。

第一の勞働者　ヒヤ／＼か、ね？

第三の勞働者　ぢやア、おれも女に生れて來りやアよかつたのに、なア。

煉瓦建築業者　さうして、銘酒屋でごろツちやらしてイるか、ね？

筒袖外套の老人　さう、さ、ごろツちやらして、ね――どうせ、人間はうじ虫も同樣だア、ね。土から生れて土に歸る(けえ)んだ。男にならうが、女にならうが、勞働者にならうが、總理大臣にならうが、僅かの間の下らねい骨折りだ。おれなどア生れて來なかつた方がよツぽどえらかつただらうよ。

インバネスの親方　全くです、な、けふ日　どんなにかせいだツて、日に十圓になるものは少いでし

よう。

煉瓦建築業者　どうして――十圓が五兩にでも？

第四の勞働者　みんな人間を生みやアがツたおツかアが惡いんだ。

第五の勞働者　ちやんも出來そくなやがつたんだ。

姐さん　人間は皆出來そくない、さ、ね、おツかアも出來そくないなら、おやぢも出來そくない、殊に、あたしなどア出來そくないの出來そくない、さ。

（ケープの婦人輕侮の樣子をする。）

筒袖外套の老人　だが、ね、出來そくないが出來そくなやア、うそを云つたのが本當に成つたと同樣、もと〳〵通りだぜ。

姐さん　お父さんもまだ世間を知らない、ねえ――たとへば、色戀のことにして見たところが、ね、一度出來そくなつたものアもと〳〵通りによりを返して見たところで、とても長續きやアしないだろうぢやアないか？

筒袖外套の老人　それもさうだ、なア。

洋服の男　では、姐さんはどんな面白い意氣さつがあつたと云ふのです？

姐さん　そりやア、一朝一夕にやア云へない、ね。

（この時、一人の洋服男、車中に入り來たり、眞ン中頃へ來て、前面に當るシイトに腰かける體になつて、消え

る。）

インバネスの親方　澤山關係した男の中でだらうから、なア。
姐さん　男にやア、變はりはない、さ。
筒袖外套の老人　女にも變りはなからう。
姐さん　そりやア、男から云ふこと、さ。何だツて、一人のあたしを目的にして來る男だらうぢやアないか？それがみんな助平根性より何も持つて來ないよ。
男子連　は、は、は、は！
（この時、假定前面のシイトから、隱居婆さんとそのハイカラ娘とが立ちあがり、逃げるやうに車中を車掌臺から出て、やがて退場。）
姐さん（隱居と娘とを見送りながら）逃げないでもよからうぢやアないか？
第六の勞働者　謹聽〳〵！
第八の勞働者　生意氣云ふない。
筒袖外套の老人　だが、それもうじ虫の商賣にやアならア、ね。
インバネスの親方
煉瓦建築業者　は、は、は！
姐さん　知れ切ツた金などア何でもない、さ。金づくぢやア、とても、こんな馬鹿々々しい商買は出來ない、ね。

洋服の男　では、いいんでも見付けるつもりか、ね？

姐さん　ふん（と、侮蔑の様子を見せて）男はどいつもこいつも、色戀の狼だよ――性慾の我利我利亡者だよ。

筒袖外套の老人
インバネスの親方
煉瓦建築業者
勞働者の二三　は、は、は！

姐さん　あたしなどア、ただそんな奴らの饑ゑた慾を滿足させてやるだけのことさ、ね。

筒袖外套の老人　例の神聖だから、なア。

男子連　は、は、は、は！

姐さん　笑つたツて、それが實際だア、ね。立派な奥さんで候ふの、お孃さんで候ふのと澄まし込んでゐたツて、（ケープの婦人の方を見てから）少しおさしつかへがあるかも知れないが、本を讀んだり、お化粧をしたりするだけぢやア、旦那さんや花婿さまが滿足しよう筈がないだらうぢやアないか？

（ケープの婦人、侮蔑の色を見せたが聽かないふりをする。）

筒袖外套の老人　でも、お化粧や勉强家の女房がいいと云ふ人もあらう、さ。姐さんのやうにかさツかきでも困るから、なア。

男子連皆々　わツは、は！

姐さん　どうせ、行くところまで行つて見たの、さ。出來そくないは承知の上だから、ね。

筒袖外套の老人　誰れも皆行くところまで行きたいのだが、な、電車が動かないので、仕やうがないのだ。

洋服の男
インバネスの親方
煉瓦建築業者　は、は、は？

姐さん　何でもいいから（少し泣き聲になつて）早く醫者のところへつれてツて貰ひたい、ねえ。

インバネスの親方　おれアまた早くかかアの飯にありつきてイや。

親方連と勞働者の二三　は、は、は？

インバネスの親方　太陽も、もう、晩飯の席に坐わつたのだらうよ、少しうす暗くなつて來た、な。

筒袖外套の老人　（上を見て）二三燭の豫備電球ぢやア電車の腹ン中も充分ぢやアねい。

煉瓦建築業者　この提燈でもつけりやア、多少の多足になりましよう。（とマッチをすり初める。）

筒袖外套の老人　そりやア、いい考へだ。

第一の勞働者　蠟燭代は電車から取つてやらア、な。

筒袖外套の老人　それもいい、なア。――や、お婆アさん奮發し出したぜ。

老婆　あかい方がようおまツさかい、なア。

筒袖外套の老人　（假定前面のシイトを出た體で）あすこにも出たぞ。

インバネスの親方　つけましようか？（から云つて、渠は老婆のほどいた提燈へ煉瓦建築業者の火を借りて火をつける。）

煉瓦建築業者（火のついた提燈を持つて立ちあがり）こいつア眞ン中の方だ、な。

筒袖外套の老人　よし、來た。

（渠がそれを受け取つて、夫婦者の上へかける。夫婦者、少し迷惑さうな樣子をする。）

インバネスの親方（立ちあがり）こいつアこツちで占領しよう。（と、小僧の上のところへ、老婆のぶら提燈をさげる。）

職人體の男（假定前方の席より現はれ、看板提燈の火をつけたのを持つて）こりやア、ここへ寄附するんだな。

（渠はから云ひながら、ケープの婦人の上あたりへむける。ケープ婦人、迷惑さう。職人體の男はもとへ消える。見える席から立つたものも、もとへをさまる。）

姐さん（心細い聲で）まだあかるいぢやアないか、ね？

煉瓦建築業者　なアに、これでとツぷり暮れて大丈夫だ。

筒袖外套の老人（見まわしながら）丸で、俄か作りの、それこそ出來そくないのお茶屋のやうだぜ。

インバネスの親方　如何にも、なア。

筒袖外套の老人　これで、ちんばの金棒引きでも出て來て見ろ――いい田舍芝居の圖だらうぜ。

第三の勞働者　芝居の金棒どこぢやアねい、おれ達の足が棒になつてしまはア。
第一の勞働者　それがほんとの立ちん棒だアな。
第二の勞働者　（第三のに向つて）ここへ來い、ここへ――おれが抱いてやらア、な。
第四の勞働者　ぢやア、おれが行つてやる。
（から云つて、渠は第二の勞働者の膝の上へ後ろ向きにかける。）
第二の勞働者　重たい野郎だ、なア。
第四の勞働者　氣持ちがいい、なア。
第六の勞働者　おれも手前（てめえ）の厄介にならうか？（から云つて、渠は第七の勞働者の膝にかける。）
第七の勞働者　よせ、人前があらア、な。
第六の勞働者　あいつの眞似しやアがるねい。（と、首をそらせる。）
第七の勞働者　（横あごに第六の後腦がぶつかつたので、手をそこへ持つて行き）あ、痛い？
第五の勞働者　どれ、おれも――（第一の勞働者へ行きかける。）
（ケープの婦人、見て微笑する。）
第一の勞働者　（兩手をそとへ向けて突き出しながら）眞ツ平だ、手前（てめえ）の臭（くせ）い尻などア。
第五の勞働者　（手持無沙汰に笑ひながら）馬鹿ぬかせ。（と、もとのままに立つ。）
第四の勞働者　（のツそり立ちあがりながら）何だか、むづ／＼すらア。

筒袖外套の老人
洋服の男
インバネスの親方
官吏風の男
姐さん
は、は、はア！

（ケープの婦人、澄まして目を書物におとす。）

第七の勞働者　ちく〳〵（と云ひながら、第六の尻を抓める。）

第六の勞働者　痛い！（跳びあがつて、第七の勞働者の膝を立ち退き、自分の尻をさすりながら。）痛い、なア

第二の勞働者　どうしたんでい？

第六の勞働者　こいつアはさみ虫だぜ。

夫婦者　ふ、ふ！（と吹き出し笑ひ）

筒袖外套の老人　うじ虫よりやアまだましか、ね？

第八の勞働者　ひねりつぶしてやれ！

第三の勞働者　握りつぶしてやれ！

第一の勞働者　（わざと力み返つて）ひねりつぶすなら、ひねりつぶして見ろ！握りつぶすなら、握りつぶして見ろ！へん、はばかんながら、これでも江戸ツ兒だい！

筒袖外套の老人　江戸ツ兒のはさみ虫か？

第一の勞働者　へ、へ！（と、氣を奪はれた樣子。）

（この時、假定前面のシイトから立つた體に和服の紳士が現はれ、車中を出る、そして退場。）

アンペラの印袢纏　（車中の上なる電球を見まわしながら、獨り言）一向來やアがらねい。

煉瓦建築業者　（インバネスの親方に）困ります、なア。

インバネスの親方　實際です、な。

筒袖外套の老人　毎日のやうだから、たまらないや。

姐さん　（相變らず下腹をおさへながら、泣き聲で）早く來ないか、ねえ、じれツたい！

筒袖外套の老人　おい、車掌さん、早く出してやんなよ、姐さんが泣いてらア、な。

車掌　（下から車臺に近づいて）わたくし等の力では致し方がございません。

姐さん　（顏をしかめて）じれツたい、ねえ！

筒袖外套の老人　泣いたツて、仕やうがねいや、な――もう、暫らくの辛抱だ。

姐さん　ふン（と、顏を下に向けて、目をうるませる。）

（ケープの婦人、姐さんの方をいい氣味だと云ふやうに見る。洋服の男は、手帳へ頻りに何か書きつけてゐる。

下手より一人の老人、登場。車掌臺をあがつて、假定前面のシートに消える。）

第八の勞働者　おれも泣きたくなつたぞ。

筒袖外套の老人　泣くがいい、さ――どうせ、人間と云ふものア泣き死にヨウするんだア、ね。涙が出なけりやア出ないほど、一段とつらい思ひをしてイるんだ。

煉瓦建築業者　御もツともです、な。

（洋服の男、老人を見て、また手帳に書く。）

姐さん　じれツたい、ねえ。（一しほ泣き聲を出す。）

第五の勞働者　（釣り革にぶらさがりながら）おい、車掌、いつまでお客をかツ込むんだい？

第二の勞働者　もう、滿員だぜ。

第三の勞働者　全體、いつ出るんだい？

第一の勞働者　出る時ア出らア、な。

第四の勞働者　あいつア腰ぬけの軟派だぜ。

第七の勞働者　裏切りする奴アぶん投つてしまへ！

第一の勞働者　馬鹿云へ、おりやアちやき〳〵の民黨だい！

第二の勞働者　ぢやア、この電車を押して見ろ！

第五の勞働者　押すくれゐなら、いツそのこと、ぶち毀してしまへ！

第六の勞働者　さうだ、こんなやくざ電車はぶち毀せ！

第八の勞働者　わツしよい！わツしよい！

第三の勞働者　わツしよい！わツしよい！

第一の勞働者　どんどこ、どんどこどん！（と云ひながら、窓枠を兩手の握り拳で叩く。）

第七の勞働者
第二の勞働者　どんどこ、どんどこ！（同じく。）
（勞働者全體で車臺の床を踏み鳴らす。ケープの婦人、『さわぐな』と云ふ振り。）
姐さん　（一段と泣き聲になつて）うるさい、ねえ。
車掌　（臺の上へあがつて來て）どうも、停電のことですから、わたし等には何とも致しかたが御座いませんので――
第一の勞働者　そんな車掌では仕様があるもんか？
第二の勞働者　電氣の代りになつて見ろ！
車掌　（笑ひながら）車掌は車掌ですから。
インバネスの親方　運轉手は運轉手だから、なア。
筒袖外套の老人
煉瓦建築業者　は、は、はア！
車掌　今にもまゐりさへすれば、動きますから。
洋服の男　（怒つて）分り切ツてらア！
官吏風の男　（も、調子に乘つて）電氣が來たら、動くのア當り前だ！
姐さん　（痛みがひどさうにして）早くよこしておくれよ！
筒袖外套の老人　姐さんの景氣が急にどこかへ行つてしまつたア、ね、早く鬼怒川まで飛脚でも立てなよ。

洋服の男　は、は！

第四の勞働者　一體、全體、どうして吳れるんだい？

第三の勞働者　一體、全體、いつまで立たせやアがるんだい？

第七の勞働者　いつまでおれを坐わらせやアがるんだい？

第五の勞働者　人に晩飯を食はせぬ氣かよ？

第八の勞働者　手前にやア食はしてやるめいよ。

第六の勞働者　晩飯よりやア、早くかかアの顏が見ていや、な。

第二の勞働者　早く歸らねいと、間男されてゐるかも知れねいから、な。

第一の勞働者　手前らア野呂間だから、なア――へん、その癖、誰アれにもまだかかアはねいや。

第三の勞働者　（俄かに）來た、來た！

（皆、ちよツと嬉しい樣子。）

第五の勞働者　電氣が來たかい？

第七の勞働者　なアに、山の手電車よ。

第四の勞働者　人を馬鹿にするない！

第二の勞働者　出た、出た！

筒袖外套の老人　（ゆツくりと）お月さまがだらう。

第六の勞働者　どうせそんなこと、さ。

（皆々窓から後方を見ると、疎林の間から十一二日の月が白く出てゐるのが見える。ケープの婦人、書物をたたんでその方にばかり氣を取られる。）

姐さん　早く來て吳れないか、ねえ！

アンペラの印絆纏　（獨り言て）どれ、山の手で行からうか、な？　（から云つて、立ちあがり、運轉手臺の方からおりる。）

第五の勞働者　（アンペラの跡を占め、隣りのケープ婦人と顏を見合はせ）アンペラさんのお歸りだ。

（婦人は、ふンと橫を下手に向く、アンペラの印絆纏、電車の前を上手へ行きかけ、じろりと上を見返したが、何も云ひ返さないで、上手へ退場。二三名の人が、上手より、登場。車掌臺からあがり、前面のシイトに消える。）

姐さん　ああ、待ち遠しい！

筒袖外套の老人　圓ッ切り、この姐さんは弱つてしまつた、な。

（ケープの婦人、姐さんの方を見る。）

姐さん　（ちよッと老人の顏を見あげたが、苦しさうに、直ぐ下を向き）ああ、痛い！

第八の勞働者　一體、全體——おい車掌！

第一の勞働者　おい、運轉手！

第三第八第五の勞働者　どうして吳れるんだい？

筒袖外套の老人　歩いて歸らうか、な？
第四の勞働者　とツつアんと一緒に歩いて行からうかい？
筒袖外套の老人　それが利口だぜ。
インバネスの親方　待つと云ふ奴ア待ち遠しいものさ、ね。――姐さんのやうに病氣でなくツたツて、な。
姐さん　（相變らず泣き顏をしかめて）つらい、ねえ。
筒袖外套の老人　姐さんも歩いたら、どうだ、な？
姐さん　ここまで來たのがやう〳〵のことだのに――歩ける位なら、こんな耻ざらしはしない、さ。
筒袖外套の老人　でも、耻を知つてるか？
姐さん　人を！（と云つて、老人をにらみかけたが、直ぐ痛い方に氣が取られて、すすり泣きになる。）
筒袖外套の老人　（姐さんを見ながら）もう、我慢がし切れなくなつたぞおい、勞働者諸君、君等も泣いて氣を休めるか、ね、それともおれと一緒に歩くか？どうか？
第六の勞働者　（第七のに）どうだい、おい？
第七の勞働者　歩かうか、な。
第二の勞働者　おりやアいやだ！乘つた以上は、電車が腐つてしまうまでもがん張つてやらア――おい、車掌、お月さまも顏を出したぜ。

第三の勞働者　おれのかかアだツて、おれの顏を見たからうぜ。
筒袖外套の老人　誰アれにもかかアはねいと云つたらう――？
第三の勞働者　あることにして置くの、さ。
筒袖外套の老人　そりやアいい儉約法だ。
インバネスの親方　は、は！飯を喰はないかかアがありやア、誰れでも取りかへます、な。
煉瓦建築業者　その上、うぢや〳〵子を產まないのがありやア、なア。
（ケープの婦人、微笑して見てゐる。）
筒袖外套の老人　それよりやア（ケープの方を見ながら）　學問でもさせて、學校の先生か女優（じよいう）にして置く方がよからうよ。
第四の勞働者　（ケープの方に向きながら）女優なら、おれが買つてやらア。
（ケープの婦人、知らぬ顏）
第一の勞働者　金もねい癖に、生意氣云ふない。
第八の勞働者　だから、お腹をへらせてかせぐんでい！
姐さん　しやべる間に電車でも押してツてくれりやアいいのに、ね！
第五の勞働者　そんな勢ひは出ねいや、お腹がぺこ〳〵だい。
第六の勞働者　諸君、お腹ン中がぺこ〳〵です。

第七の勞働者　ぺこ〳〵でも、勞働は神聖だい！

第三の勞働者　（演說口調で）勞働者をただその日暮しの貧乏人だとけなしてしまうものがあるでしようか、諸君！

第一の勞働者　商人の如きは、申して見れば――だらう。

第二の勞働者　商人の如きは、申して見れば、自分の腕を以つてかせいだ物で生活するので御座いませんから、申して見れば――

第四の勞働者　また『申して見れば』かい？

第二の勞働者　ええ、つまり、人のふんどしで相撲を取つてをるやうなもので御座いまして、勞働者はそれと事かはり、勞働者はわれとわが腕の力で生活してをります。

（ケープの婦人、感心さうにこちらを見る。）

第五の勞働者　だから、勞働は神聖で御座います。

第八の勞働者　（大きなとん狂聲で）神聖がどうしたと云ふんでい？

筒袖外套の老人　車掌は車掌、神聖は神聖ですから――だらう。

インバネスの親方　わッは、は！

第六の勞働者　神の如く聖いと云ふことだとよ――（調子を荒くして）卑屈になるに及ばないんだい！

第七の勞働者　もツと演說をやれ、やれ！

第一の勞働者　おい、皆見ろよ。（腹がけのどんぶりから、笑ひながら、アルミニュムの辨當箱を入れてあるらしい袋を出し）わたくしは勞働者ですから、毎日、こんな辨當を持つて（ケープの婦人、熟視する）仕事に通ひますが、これで腹ン中は（兩手で遠くから腹の方をさし示めし）極々奇麗な男で御座います。

第二の勞働者　身持ちのやうなざまアしやアがるぜ。

第一の勞働者　默つてやアがれ——その日、その日を、毎日、自分の神聖な腕づくでかせいできゐりまして、儲けた賃金を以つて自分の腹ン中もこやします、またア、ええ（暫く氣取つて首を傾けてゐたが）妻子をも養ひます。

（ケープの婦人、初めて吹き出しさうにしたが、微笑にまぎらせる。）

第三の勞働者　それが手前の演説かい？

第一の勞働者　演説ぢやアねい、變說だい！（態度を急に輕くして）おい、手前らア安心しねい、決してわれ〳〵は泥棒ぢやアねいぞ。

第四の勞働者　泥棒であつてたまるもんかい？

筒袖外套の老人　なアに、人間はみんな泥棒だア、ね——人のぬけ目へつけ入つて、何かうまいことをしようとする奴らばかりだ。

第五の勞働者　でも、貴さまア、（と、第四のに向ひ）きのふ、おれのふんどしを盜みやアがつたぞ。

第七の勞働者　ありやアあいつが思ひ違つたんだよ。

インバネスの親方
煉瓦建築業者
夫婦者
洋服の男
ケープの婦人　ふ、ふ！

（姐さんは忘れられたやう。）

インバネスの親方　ふんどしなどア、成るほど、大勢同居人の中ぢやア、間違ひッこになるだらう、な。

筒袖外套の老人　よく、それでも、人のと自分のとの區別が出來たものだ。人のおかみさんだッてどうかすると、間違ひッこがある世の中だが、な。

インバネスの親方
煉瓦建築業者　は、は、は！

煉瓦建築業者　みんな、うぢ虫の、出來そくないばかりだから、なア。

インバネスの親方　おまけに、泥棒と來ちやア、ね。

第六の勞働者　月も出た。演説も出た。この次ぎやア電車の出る番でありまアす。

第八の勞働者　ところが、一向出ねいや。

姐さん　（たまらなくなつたやう）ああ（泣き聲を擧げる。）

（皆々、それに注意を向ける。）

第一の勞働者　おい、車掌、どうして呉れるんだい？

筒袖外套の老人　（特に太い、强い聲で）　停電だぜ！
第五の勞働者　（それに報いる怒り氣味で）　停電ぐらゐ知つてらア！
筒袖外套の老人　（やさしい聲になつて）　何だぜ・かうして待つてゐるよりやア、おれの云ふ通り歩いた方が早からうぜ。
第二の勞働者　歩くとしようかい　つまんねいから？
第三の勞働者　さうだ・なア——
第四の勞働者　歩くか？
第五の勞働者　さうしようか？
第六の勞働者　さア——
筒袖外套の老人　さア、揃つて——ワン、ツウ、スリ！
第七の勞働者｝
第一の勞働者｝　歩け、歩け！
第二の勞働者｝
第八の勞働者｝　歩け、歩け！
他の勞働者　出たり、出だり！
（第一、第七の勞働者は立ちあがつて、第五、第六のと共に運轉手臺の方へ。第三、第四、第八のが車掌臺の方へ。そして、第二のがまたそれに從つて動き出した。ケープの婦人、誰れよりも一番すうツとした樣子。）

筒袖外套の老人　（笑ひながら）うんとこしよ！

（と云つて、第二の勞働者の跡にかける。）

第二の勞働者　（あやしみて）とツつアん、どうしたい？

筒袖外套の老人　おりやア老人だから、なア。

インバネスの親方
煉瓦建築業者
小僧
　うふ！

（ケープの婦人、その場のをかしさを見守る。）

第二の勞働者　ええ、強腹（がうはら）だい、早く出ろ、出ろ―

筒袖外套の老人　無事に行きなよ。

（勞働者等、わざと押し合ひながら、兩方の口から下りて、車臺の前面を下手に向ふ。）

第二の勞働者　馬鹿ア見た、なア。

第八の勞働者　どうせ、いつ動き出すか分らねいや、な。

第六の勞働者　（一番さきに立つて）早く來い、早く來い。

第四の勞働者　（一番あとから）ワン、ツウ、スリだらう。

（勞動者、すべて退場。）

筒袖外套の老人　厄介拂ひをしてやつた、わい。

インバネスの親方　よくしやべる奴等です、な。

煉瓦建築業者　如何にも、な。

筒袖外套の老人　あいつ等ア口からさきへ生れて來たのだから、なア。

運轉手　（車掌を見て）もう、來さうなものだ、なア。

車掌　さうだ、なア。

（運轉手、車掌の前面を通つて、運轉手臺に行く。二名のもの、上手より車掌臺をあがり、前面のシイトに消える。）

洋服の男　（車掌の方に出て行つて）どんな故障があるのだ？

（ケープの婦人、その方を『またか』と云ふやうに見る。）

車掌　さア、わたくしには分りません。

洋服の男　鬼怒川水電がまだ不完全極まるせいぢやアないか？

車掌　さア――斷線なら、直きなほる筈ですが、山の手も來ないのを見ると、新宿の發電所に何か故障があるのかも知れません。

洋服の男　そんなこツちやア仕やうがないぢやアないか？

（渠はかう云つて、もとの席に復する。その假定面から、一名立ちあがつて、車掌臺を下り、上手へ退場。ケープの婦人、時計を出して見る。）

官吏風の男　（洋服の男に）困ります、ね。

洋服の男　鬼怒川水電が無理をしてゐるのでしよう――如何にも不都合です！

（渠はポケットから卷煙草を出してゐる。）

車掌　（それに氣が付かず、臺を下りて）もう、一服、しようかい？

運轉手　さうだ、なア。

（渠も亦臺を下りて、上手前方のところで一緒になる。）

煉瓦建築業者　（インバネスに）なか／＼念入りの停電です、な。

インバネスの親方　如何にも、念入りです、な。

煉瓦建築業者　わたくしはこれから本所まで行くのですが、夫婦喧嘩の仲裁にです。

（ケープの婦人、聽き耳を立てる。）

インバネスの親方　へー。

煉瓦建築業者　兄貴と云ふ奴が仕やうのない奴でげして、その妻から早く來て呉れないと困ると云ふ知らせがありました。飯をかッ込んで飛び出したのでげすが、かうぐづ／＼してゐちやア、喧嘩も樂に濟んでしまひましよう、て。

筒袖外套の老人　喧嘩も、氣を利かして停電してゐるかも知れねいぜ。

インバネスの親方　夫婦喧嘩ほど面倒臭くッて、また方の付き易いものも御座いますまい、て、な。

煉瓦建築業者　實際・馬鹿々々しいものでげさア。

筒袖外套の老人　（洋服の男の卷煙草を吹かしてゐるのを見て）どれ、おれも御免を被むらうか、な。（かう云つて腰から煙草入れを出す。）

インバネスの親方　煙草も飲みたいが、腹も減つて來た、なア。（と、小僧を見る）

小僧　（はにかんで）減つて來たやうだ。

インバネスの親方　さうだらう、さ——うちぢやア、さぞ、あのしじみ汁がぐつ〱云つてるだらうぜ・もう、歸る頃だと思つて、なア。

筒袖外套の老人　おれのかゝアも、待ちどほしがつて、おはちの蓋を明けたり、蓋したりしてゐらアな。

煉瓦建築業者　は、は！

（ケープの婦人、その方を見て微笑してゐる。）

細君　もう、よしましようか、今晩行くことは？

官吏風の男　さうしよう。

（この二名、立ちあがつて車中を上手へ出る。）

筒袖外套の老人　（手の平に煙草の火をころがしながら、新たに火を付けつつ）今まで待つてゐたのなら、いツそ、おれ達と一緒に行けばいいのに——あの八字鬚は女と云ふ電氣に引ツ張られて行つたのだ。

（官吏風の男、聽えたやうだが、澄まして、細君と共に上手へ退場。）

車掌　（煙草を飲む客に氣が付いて、臺の上にあがつて來て、云ひ難さうに）車中で煙草を飲んでは困りますが――

筒袖外套の老人　なアに、進行中でないから、かまうまい。

車掌　進行中で御座いませんでも、車中では――どうか下に下りてから、飲んで戴きたいのです。

筒袖外套の老人　下りてるうちに、この席がなくなるかも知れないから、な。

インバネスの親方
煉瓦建築業者　は、は、は！

筒袖外套の老人　やツと占領した席だぜ、うまくおだて込んで、さ。

洋服の男　（煙を吹きながら、强い聲で）車掌、くど〳〵云はないで、早く出す算段をしろ！

（車掌、まごつく樣子。上手より、インバネスを着た男（あとで煉瓦屋と分る）が登場。車掌臺にあがり、外套老人の前面に腰かけた心持ちで消える。相變らず、二名は煙を吹かす。さきの勞働者第一、第二、第三、下手より登場。）

第一の勞働者　（運轉手のゐる近くまで、上手へ進んで來て）まだ來ねいか？

運轉手　（その方へふり返つて）へい、まだ――

第二の勞働者　（下手をちよツとふり向いて）あいつ等ア行つてしまやがつた、た

第三の勞働者　行く奴ア行かして置けよ、這入れ、這入れ！

（第一のは車掌臺より、第二、第三のは運轉手臺より。）

筒袖外套の老人　（最後の煙を吹いてから）氣の毒だから、やめてやらうか、な。（煙管を筒に納め、煙草入れを腰にさした時、第一の勞働者が這入つて來たのを見て）また來た、な。姐さんにでも未練があるのかい？

（姐さん、じろりと老人を見て、たゞ苦しさう。）

第一の勞働者　歩いたツて、馬鹿々々しいや、ね。

筒袖外套の老人　それだから、少しおとなしくしてゐなよ。

第一の勞働者　（他の仲間が反對の口から這入つて來るのを見て）おい、こら、貴さまらア少しおとなしくしろとよ。

第二の勞働者　しるとも、さ、電車さへ早く動いて吳れりやア、な。

第三の勞働者　電車は出ねいでも、このぺら〳〵云ふ口をふさいで吳れりやアいゝ。

（第一のは外套老人と洋服の男との間に、第二、第三のは洋服の男とケープの婦人との間に腰をおろす。）

姐さん　（勢ひのない、あはれな聲で）いつ出るんだ、ねえ、じれツたい！　（と煉瓦建築業者の方をかしらにして橫になる。）

筒袖外套の老人　（少し下手へ退いてやりながら）つらいものさ、こんな病氣は、なア――察しられるよ。

（と、かの女の腰を、賴まれもしないのに、さすつてやりにかかる。）

インバネスの煉瓦屋　（前面の席から立つた心持ちで、老人の前に現はれ、煉瓦建築業者に）あなたも煉瓦屋

さんですか？

煉瓦建築業者　へい。

インバネスの煉瓦屋　わたくしもかう云ふものですが（と云つて、名刺を渡し）どうかよろしく。

煉瓦建築業者　（受けた名刺を光に照らして見て、おほやうに）さうですか？わたくしは澁谷の熊田です。

インバネスの煉瓦屋　多分さうだらうとお見受け申しました。――近頃はいかゞです？

煉瓦建築業者　お話になりません。

インバネスの煉瓦屋　どこも不景氣のやうで――

煉瓦建築業者　昨年の末からと云ふものア、全くいゝことが御座いません――この頃は、無いよりやアましだぐれゐなところで、つい、このさきの工事を引き受けてゐますが――

インバネスの煉瓦屋　お互ひに何とか致したいもんです、な。

煉瓦建築業者　さア。

インバネスの親方　（後ろを向いて、頻りに見てゐたが、小僧ににこ〳〵微笑しながら、財布を探り）おい、あのしるこ屋へ行つて、何かうめえ物でも買つて來ねい、お前も腹が減つて來たらう。

小僧　へ、へ！

インバネスの親方　いやに笑つてるぢやアねいか？

（金を渡す。小僧それを持つて車中を飛び出す。インバネスの煉瓦屋、もとの席に返つて、消える。その跡へ、

さきのアンペラのしるし絆纏、さきと同じくアンペラの袋を重たさうに提げて登場。）

アンペラの印絆纏　山の手線も停電だ。

（から云ひながら、車掌臺よりあがる。）

第三の勞働者　アンペラさんも歸つて來たぜ。

アンペラの印絆纏　なんだ！（と、さう强くはなく云つて、入り口を這入つたところから、きつとその方を見る。）

第二の勞働者　（無造作に）あのアンペラかい？

アンペラの印絆纏　（じつと立つたまま、そちらをにらみ、今回は强く）何だと！アンペラが何でい？

（ケープの婦人、こちらを見たが、少しも恐れた色はない。横になつてる姐さん、老人に腰をさすられてゐながらびツくりして顏をあげる。）

第一の勞働者　アンペラだから、アンペラだい！

アンペラの印絆纏　人を馬鹿にするない！

第二の勞働者　誰れが馬鹿にしたい――やツ付けるぞ！

第三の勞働者　（動かないで、ただ犬をけしかけるやうに）うし〱、うし〱！

筒袖外套の老人　（姐さんの腰をさすりながら）よせよ、喧嘩などア。

第一の勞働者　あんまり生意氣ぢやアねいか？

アンペラの印絆纏　どツちが生意氣でい？

第一の勞働者　何だ？もう、一遍云つて見ろ！

筒袖外套の老人　（第一の勞働者に）さう意張るなよ。勞働は神聖だア、ね。

ケープの婦人
煉瓦建築業者
第二、第三勞働者　ふ、ふ！

アンペラの印絆纏　人間にやアそれ〳〵名が付いてらア。

洋服の男
ケープの婦人　ふツ！

第二の勞働者　おほかた熊公か、八公だらうが、分んねいぢやアねいか？

アンペラの印絆纏　（はき〳〵しない口調て）分らねいなら默つてろよ。

筒袖外套の老人　さうだ、默つてりやア一番おとなしくつていいや、ね。（アンペラに）まア、かけな。

（アンペラの印絆纏、のつそりと、外套老人の前面にかけた心持ちで、消える。小僧、買ひ物の袋を持つて來たり、もとの席について、それを渡す。）

インバネスの親方　（袋を改めて見て）なアんだ、大福かい？

小僧　それツきやなかつた。

インバネスの親方　けちな店だ・なア——でも（と、煉瓦建築業者を見ながら）無いよりやアましだらう。（一つを取り出して）さア・先づ・お婆さんに一つ。

老婆　わたし・よろしゆおます。さう云はないで。

インバネスの親方　まア、さら、ありがたう。

老婆　さよだすか――ほたら、ありがたう。

インバネスの親方　さア、一つ。（と、煉瓦建築業者に。）

煉瓦建築業者　こりやア、どうも。（と、受け取る。）

インバネスの親方　（姐さんに）君もどうだ、ね？

姐さん　（寢たまま、見もしないで）もう、結構――

インバネスの親方　ぢやア、君に。（と、老人に向ける。）

筒袖外套の老人　僕もお召伴か、ね。（と、姐さんから手を離して、それを受け取る。）

姐さん　それよりやア、早く電車を出させて頂戴よ。（と、情けない而もいら〳〵した聲）

筒袖外套の老人　そりやア無理だア・ね――これで姐さんの介抱もなか〳〵大抵ぢやアねいぜ。

姐さん　（やけ氣味で）年寄りと云ふものア、それ位のことアして呉れていい、さ。

インバネスの親方　（小倚にも一つ與へた後、自分の口へも持つて行きかけたが、姐さんの言葉を聽いて、そちらへ向き）こりやアひどい。

筒袖外套の老人　は、は、は！そんなに云はれりやア、却つて可愛いものさ。（笑つて、無頓着に大福を口に入れる）

インバネスの親方　(喰ひながら)　これでも少しやア腹の多足にならうぜ。
煉瓦建築業者　(口に入れかけて)　無論です、な。
筒袖外套の老人　(微笑しながら)　割合にうめえぜ。
老婆　おいしおまん、なア。(と、口をもぐ〱させる。)
(ケープの婦人、車臺の天井を見まわして、少し心が落ちつきを失つて來た樣子。)
第一の勞働者　おい、とう〱日が暮れてしまつたぜ。
第二の勞働者　もう勘辨出來なくなつて來た。
第三の勞働者　おれは勘辨出來ても、腹ン中が勘辨しねいや。
筒袖外套の老人　(外套の端へ手をこすりつけながら)　電車にかけ合つて、晩飯を出させようか、な?
インバネスの親方　(笑ひながら)　おい、どうだ、車掌、かけ合つて來ねいか?
車掌　(微笑して)　結構です、な、お互ひですから、腹の虫が段々承知しなくなつて來たのは。
老婆　オサカにも、よう停電がおまッさ。
インバネスの親方　(二つ目の大福にかかりながら)　さうでしよう、な――全體、どうしてから度々停電するのか、なア、この頃ア?
洋服の男　鬼怒川水電が無理をしてゐるからでしよう、な。
インバネスの親方　左樣ですか、な――して見ますと、東京中の全線が動かないでしようか?

洋服の男　さう云ふわけもないでしようが――

筒袖外套の老人　燒き打ちの晩のやうでも困るから、なア。

洋服の男　まだ、それで、停電だから我慢も出來るのですが、ね。

インバネスの親方　へ。（大福を、小僧にまた一つ渡す。）

洋服の男　わたくしが昨年大阪へ行つてゐました時、全く停電ではない停電に會ひました。

（ケープの婦人、注意を向ける。）

インバネスの親方　へい。（自分もまた一を袋から出す。）

洋服の男　と云ふのは、軍隊の通過ですな――一師團が通過するにやア、何と云つても、先づ一時間ばかりはかかりましよう。

インバネスの親方　へい、さう云ふもんでげすか、ね？

洋服の男　その間、電車を兩方からとめて置いたのです。

インバネスの親方　へい、軍隊ではさう云ふことをさせますか、な？

洋服の男　なアに、無常識なのです。

筒袖外套の老人　明治天皇の御葬式の時でも、そんなことはなかつたのに、なア。

インバネスの親方　成るほど、不都合と云やア不都合です、な。（ハ手に持つてゐた大福を口に入れる。）

第一の勞働者　そりやアあんまり人民を馬鹿にしてイらア、な。

第二の勞働者　なアに、上方贅六どもが馬鹿なんだ。反對すりやア、いいぢやアねいか？
第三の勞働者　さうだ、さうだ！
洋服の男　その師團長は今東京の方面へ來てゐますが――
筒袖外套の老人　江戸ツ兒等の眞ン中ぢやア、よもや、そんな眞似は出來まい、て。
第一の勞働者　無論、さ。
インバネスの親方　（また一つを小僧に渡しながら）全體、これまで、人民がすべてにあんまりあま過ぎましたわい。（と云つて、自分も一つを出し、袋をもみくちやにする。）
筒袖外套の老人　まさか、大福ぢやアあるめいし。
インバネスの親方　その癖、いざ戰爭となれば、第一に必要な物ですが、なア――
第三の勞働者　なアに、おれ達ア平和の戰爭で勝利を得てやらア、な。
筒袖外套の老人　さう、さ、江戸ツ兒に限る、限る！
第一の勞働者　上方贅六なんてな、あまい骨頂だ、な。
老婆　（むツとして）上方をあまり惡う云はんやうにして欲しい。
インバネスの親方
洋服の男
煉瓦建築業者　わツは、は！
インバネスの親方　おばアさんがおこツてやはるぞ。

老婆　へ、へ、へ！あまり悪う云はれると胸くそ悪うなるさかい、なア。

筒袖外套の老人　それもさうだ――が、もう、舊くからの上方だがら、なア。

（この時上手より子をおぶつた丸髷の婦人、わさ〳〵と登場。つか〳〵車掌臺をあがつて行く。）

インバネスの親方　おかみさん、停電だぜ。

子を負つた婦人　（ちよつとふり向いたが、かまはず、つか〳〵とさきの方へ進み、ケープの婦人に）停電ですか？

ケープの婦人　（微笑しながら）ええ。（初めての發言。）

子を負つた婦人　もう、餘ほどの間ですか？

ケープの婦人　え（と、時計を出して見てから、はつきりした目さめるやうな聲で）一時間ほど。

子を負つた婦人　へい（と、驚いたやうにして進み、そこに來てゐた運轉手の方に行き）まだなか〳〵ですか？

運轉手　（ふり向いて）まだなか〳〵でしよう。

子を負つた婦人　困つた、なア。（と獨り言を云つて、そこから下に下りる。）

第三の勞働者　なアんだ、通り拔けかい？

ケープの婦人　は、は！（と、思はずあざやかに笑ふ。）

（子を負つた婦人、車臺の前を上手、もとの方へ退場。）

車掌　（臺に立つて）來た來た！
筒袖外套の老人　（上を見て）おう、いい兒だ、いい兒だ！姐さん、來たぜ。
姐さん　ありがたい、ねえ。（と、力づいて、起きあがる）
インバネスの親方　かうなつちやア、たまらねい――もう、死んでも離れねいや。
洋服の男　は、は、は！
（皆々、嬉しさうに見あげたところに、假りの電燈が消え電氣が來たしるしに大きな電球がぴかぴか光つたが、
直ぐ消えてしまう。）
筒袖外套の老人　何だか、心細いぜ。（と、見まわす。）
煉瓦建築業者　さうだ、なア。
インバネスの親方　ほんの、思はせ振りかい？
第の一勞働者　來た、來た！
洋服の男　今度ア本統（ほんとう）だらう。
（電光、また心細くぴかぴかする。）
筒袖外套の老人　あぶなツかしいが、なア――もう、提燈は入らなからう。（眞ッ中の提燈へ行く。）
第三の勞働者　（立つて、その上の提燈を）これも用なしだい――持ち主に返さうよ。
インバネスの親方　（小僧の上のを）こいつも、はづしてあげますよ。

老婆　おそれ入ります。

（いづれも取りはづす。そして、勞働者と親方とのはづしたのは、直ぐ吹き消される。）

筒袖外套の老人（だけのはまだ消さないで持つたまゝ、電光のただほんのぴか〳〵するのを仰ぎ見て）然しこいつも長持ちやアしなからうぜ。

第三の勞働者　いいや、な・消してしまつたものだ。（と云つて、前方の持ち主に渡す體で、下におとす。）

インバネスの親方（坐わつて、老婆にそれを渡しながら）電氣にあぶらをさしてやんなよ。

第二の勞働者　お月さまにも、なア。

第一の勞働者　それが『月と提燈』と云ふのかい？

筒袖外套の老人（提燈を大事さうに持ち、坐わりながら）それぢやア、『すツぽん』と『釣り鐘』の相手がなくならア、ね。

煉瓦建築業者　わツはツは！

第二の勞働者　月にすツぽん、提燈に釣り鐘だアな。

第一の勞働者　さうか？

筒袖外套の老人　そこへ電車に停電と來ちやアどうだ？こいつア釣り合ふのか釣り合はねいのか？

洋服の男　不都合な電車にやア釣り合ふ、ね。

車掌　どうも、をかしいなア。

運轉手　心配入らん。

（電光、また消える。）

筒袖外套の老人　云はねいことか？この提燈がたツた一つのいのちだぜ。――どうも、車掌・電氣にまだあぶらが足りなさうだぜ。

第二の勞働者　石油の儉約などア眞ツ平だア、な。

筒袖外套の老人　石油なら、まだいいが、ね――

インバネスの親方　なたねぢや困るぜ。

第三の勞働者　しツかりしろ、運轉手！

第一の勞働者　早く驅けなよ、車掌、一貫增してやらア、な。

煉瓦建築業者　今度ア人力車になつてしまつた、な。

インバネスの親方　かうついたり、消えたりするのを考へて見りやア、うちでもおんなじことだぜ、かかアが亭主の歸る（けえ）のを待ちこがれてゐて、さ、もう歸る（けえ）か、もう歸るかと思つて、ぐつ〳〵云ふ鍋をかけたり、おろしたりしてイやがらア、な。

（ケープの婦人の目ざめるやうな笑ひが聽える。）

筒袖外套の老人　まだそれだけならいいが、ね、あんまりぐづ〳〵してゐちやア、そのたんびに段々喰はれてしまはア、な、おれンところのかかアなどア、殊に喰ひ辛抱と來てやがるから、なア。

煉瓦建築業者　は、は、はア！

インバネスの親方　そして、歸つた時ア、みんな平らげられた跡かい？

筒袖外套の老人　あんまり氣が利かなさ過ぎるぜ、冗談ぢやアねい。

インバネスの親方　けれど、これで見りやア、電車もわれ〳〵とおんなじやうに七轉八倒してゐるんだから、この苦しみは――姐さんの苦しみとは違ふだらうが――かかア連にも通じるだらうよ。

第一の勞働者　かかアのねいものにやア、どうする？

第二の勞働者　おツ母アにでも通じるだらうよ。

第三の勞働者　便所にでも通じるだらうよ。

姐さん　（にが笑ひして）人を馬鹿にしてイる、ねえ。

筒袖外套の老人　それぢやア、丸で、守りツ兒の墮胎流産だア。

インバネスの親方
煉瓦建築業者
老婆
洋服の男　は、は、はア！

（電光、ぼツと輝く。）

車掌　さア、いよ〳〵まゐりました。

筒袖外套の老人　大丈夫か、な？

車掌　今度こそア大丈夫です。

インバネスの親方　これでやツと晩めしにあり付けるか、な。

洋服の男（雑誌を丸め直して）　また消えるのぢやアないか？

筒袖外套の老人（提燈の火をふき消して）蠟燭が大分喰はれたが、電車もさぞ腹が減つただらうよ。

煉瓦建築業者（老人から消した提燈を受けながら）夫婦喧嘩は、もう、疾くに納まつただらう、て。

姐さん　早くやつておくれよ。（と、苦しさにじれてゐる。）

車掌（大きな聲で）ええか？

運轉手　おう！

（ケープきツと書物を握り、腰をかけ直す。車掌、鈴の紐を引くと、運轉手も引き返す。）

男子皆々（嬉しさうな聲で）萬歳！（幕、速かに下る。）

――大正二年三月――

解剖學者

登場人物

間宮友定（四十六歲）　大學の解剖學者
間宮八重子（四十一歲）　友定の妻
間宮常雄（二十五歲）　友定の息子、新歸朝者
間宮マリヤ（十九歲）　常雄の花嫁、英國人
老母（六十歲以上）　友定の母
末子（三十二歲）　八重子の妹

時所

時は現代、或日の夕方前後。場所は東京、間宮邸の書齋。

（絨毯を敷いた西洋室――眞中に圓テブルを据ゑ、その周圍に椅子三脚。向つて左りの奥に、大きなデスクが左り向きに置いてある。右の方に、人骨の完全に組み立てられたのを一つ、猿のをまた一つ、立ててある。窓と左右の入り口とを外れた壁は、すべて書棚になつて、書物が一杯つめ込まれてゐる。（幕が明くと、不斷着の友定はデスクに向つて書物を見てゐる。やがて、白髮まじりの髯つらを、考へ込んでゐる樣子で、正面から右へふり向け、それから立ちあがつて、壁の書物をあちらこちらから引き出して見ては、小首を傾

ける。

（そこへ、八重子、丸髷姿、スリッパをはいて、左りのドアから登場。）

八重子　（あまり感激はなささうな顔つきで）あなた。何をなすつてゐらッしやいます？

友定　（右の方から、一册の本を持つたまま、不思議さうにふり向いて）何をッて――わしは、いつも、考へごとをしてゐるにきまつてる。

八重子　そりやア、存じてをりますが、（と、圓テブルまで進みながら）只今この八重がお願ひ致したことはお考へ下さいましたか？

友定　うん、常雄のことか？（無雜作に云つて）ありやアどうしても行けない、ね。

（また、渠は書物の方へ氣を取られる。）

八重子　あなたは、どうしても、親ごころがお出なさいませんのですか知ら？――しよッちうう ちにゐる子供をだッてお叱りなさいまして、この書齋へお入れなさいませんから、子供はみんなお父さまと申せば、ただびくびくしてゐまして。

友定　どうしても親ごころは出ない、ね――お前のやうなのが親ごころであるとすりやア。

（から云つて、渠はデスクへ行く。）

八重子　（眼で追ひながら）でも、十六年ぶりで英國から歸朝して、直ぐあなたにお會ひしたいと申してをります常雄には、あなたもお父さまでは御座いませんか？

友定　（書物へ向いたまま）わしは、親なればこそ會ひたくないのだ。
八重子　なぜで御座いましよう、ね――（わけが分らない風で）あなたはさうばかりおツしやつて、この十六年間をお考へ詰めてお暮し遊ばしたので御座いますが、今度は事情が違ふでは御座いませんか？
友定　違はない、ね。
八重子　でも、常雄は、可愛さうに、九つの時から――それ、あの目を無くなしてから（友定ふり向いてをののいた様子をする）――英國へ留學させられまして、向ふの小學からオクスフオルド大學までを卒業致し、それでもまだあなたのお許しが御座いませんので歸朝致しませんでしたのを――
友定　（殊におもおもしく怒つて）わしは、向ふへ云つてあるぢやアないか――わしの眼の黒い間は、決して歸朝しちやアならんと！
八重子　でも、子供に致しましたところが、親は戀しくなりましよう――『お父さまは冷酷でも、僕が會ひさへすりやア、僕の心持ちが分るから』ツて。殊に、歸つても、生活上お父さまの世話にはならないつもりだツて、向ふの仕事をまで一つ引き受けてまゐりました、わ。
友定　（嬉しみを押さへて）何をだ？
八重子　モーニングポストとかの學術通信員で御座いますさうです。
友定　（もとの通り嚴格になつて）それでも、ならん。

八重子　なぜで御座いましよう、ね？（間）では、あなたはどう致しても常雄にお會ひ下さいませんとおッしやるのですの？

友定　さうだ、（と、思ひ込んで）わしの眼の黒いあひだは。

八重子　（微笑になつて）あなたと申す方はほんに――御自分はいつも『眼の黒い間は』、「眼の黒い間は』とばかりおッしやつて、御自分のお父さまは『眼が茶色であつた』、『茶色であつた』とおッしやいます。

友定　さうだとも！（少し熱心になつて）それがわしの年來の研究の根本である。大學教授の地位などアいつ、ほうり投げてもいい。この研究だけは、わが日本民族の爲め、またわが國家の爲めに、わしは一身を賭してやり通すつもりだ。

八重子　それは、學者と致していいお心がけで御座いましようが、ついでに申し上げて置きますが、あなたのお父さまのお墓をお掘りになる事だけはお思ひとまり遊ばした方がおよろしう御座いませんか？――あすこを御所有の叔父さまの方では、『友定は下だらない研究の爲めに氣違ひになつたのだ』とおッしやつてゐられますし、うちのお母アさまも大層おきらひなすつていらッしやいますし、警察の方ではまたどうせ許されさうもないので御座いますから――

友定　いいや、あのうす暗い上野の森の奥に日本人種の秘密があるのだ。この間宮友定は老いて來たかも知れないが、解剖學者としては、まだ一方の旗がしらである。人は過ぎ去つた歴史や地圖や言

語學を以つて、なまぬるく黄白兩人種、乃ち、歐米人と東洋人との異同を辯じてゐる間に、わしは現在の日本人に白人種の、また都合によると、白人種以上の骨があり、血が循環してゐることを證明しようとするので――わしの父は、どうしても、そのいい證據であつたと思ふ。鼻はロマンノーズと云つて鷲鼻で、髮は赤い方で、而もわしの血統には日本人以外の血液は一滴も這入つてないのが分つてる。わしの父のその父は純粹の水戸人で、わしの今ゐる母の父と頑固な攘夷黨として親密になつたと云ふ位だ。――

八重子　それに、ね、あなた、（と云ひにくさうにおづおづして）實は――若し――あれが、あなた――若し外國人とでも結婚致したとして見ますと、――（そのあとを、云はうか云ふまいかと云ふ風に、困つてゐる樣子を見せる。）

友定　そんなことア（と、斷定的に）前後や原因結果を顚倒したと同樣、わしの研究の材料にやアならん――けれども、あの父の目は茶色と碧眼とであつた。

八重子　あなたは目のことをさう氣になさいますが、若しあの目の不具な常雄の身に致しましたら、どうで御座いましよう――可哀さうでは御座いませんか？

友定　だから、會ひたくないのだ。

八重子　でも、もとはと申せば――

友定　…………（おそろしいことを聽かせられるやうな待ち受け。）

八重子　あなたから起つたことで御座います――あのやうにかたかたの目が眞ツ白に――

友定　ああ！（と、堪らない心持ちで立ちあがり）よして呉れ、よして呉れ！

（こつこつと音がして、末子。ひさし髮、向つて左りのドアから登場。）

末子　おねえさま、お許しが御座いまして？

八重子（矢ツ張りのんびりしたまま）お許しが御座いませんの。

末子　あなたは（と、はがゆさうに額をしがめ）ただ生まじめに子供が、子供がとばかりおツしやつてるのでしよう――親子が一つの日本國にゐて、どうせ會はないでゐられよう筈がないぢやア御座いませんか？

八重子　ですから、お願ひしてゐますの。

末子　そのお願ひのなさりかたが――（つかつかと、八重子のそばへ行き）あなたは、まア、あちらへおいであそばせよ。（と、入れかはりの位置になり、姉を押しやり）わたくしが改めてお頼みします、わ。

八重子（押しやられながら）では、どうぞ、ねえ、末子さんから。

末子　わたくしがお引き受けします、わ。

八重子　あ、さうさう。（と思ひ出したやうに）あなたは、今晩フライはどちらがおよろしう御座います？――お海老になさいますか？　それとも、蠣か――

末子（いらいらとして）おにイさまには、そんなことにやア好き嫌ひはおあんなさらないぢやア御座い

ませんか？——さア、あちらへ！

八重子　（疑ひのない笑ひを見せて）でも、ねえ——（と、また眞面目くさつて）では、あれの爲めに、どうぞ、ねえ——

末子　分つてゐますよ。

（八重子、まじめな顏で、正面からぐるりと左りへ向いて、退場。）

末子　（まだ姉の後ろ姿が見える時から）おねえさまは、なんでも、子供と云へば、理窟が立つやうに思つておいでだから行けない——舊式です、わ。——ねえ、おにイさま（つかつかと友定の勉强椅子のそばへ行き、渠の顏を少し隔てのぞき込むやうにして）わたしにはあなたのお心がよウく分つてゐますのよ。

友定　（書物に目を注いだままで）末さんもどうだか、ね？

末子　でも、日本人種が白色人種であるとわかりますれば、カリフオルニヤの排日運動などはなくなつてしまうので御座いましよう？

友定　そりやアさう、さ。（末子の方を見て、椅子に左りの腕をかけ）カリフオルニヤ一洲どころか、世界中の白色人種の偏見（へんけん）が打破せられてしまふわけだが——

末子　そりやア、さうです、わ、ね。

友定　わしの研究の見當は、然し、それだけぢやアないやうだ。

末子　さう致しますと——それはさうと、御書見には、もうお暗くはなくツて？

友定　少し（と、デスクの前の窓を見て）薄暗くなつたやうですが――さうすると、ね、（と、巻煙草を下へ置き本出しかける。）

末子　あ、（と、それを見て）わたくしにお火を付けさせて下さい、ね。（中央の圓テブルに行きマチを取る）いツそあなた、こちらへいらツしやいましよ。

友定　一服しようか、な。

（友定、デスクに添つた椅子を立つ。末子、三つの椅子をどちらでもと云ふやうに整へ、自分は向つて左のにかけて、マチを摺る用意をする。渠はそれとさし向つた右のに行き、口をつけた煙草のさきを以つて、かの女から火を受ける。）

友定　（微笑しながら）あんたはわしをあやつることがいつもうまい。

末子　ほ、ほ、ほ！（笑つて）わたくしも、ね、血を分けたおねえさまよりは却つておにイさまの方が好きです、わ。――で、さう致しますと――

友定　（巻烟草をゆつくりふかしながら）さうすると、かうだ、ね――物質的に日本人が白人等と同等になれるばかりでなく、精神的文明に於いても、何の憚ることもなく日本人の特色を發揮して行ける。

末子　（感心したやうに）さうです、わ、ねえ。

友定　今の狀態ぢやア、全體、歐米の白人種が日本人をあたまから馬鹿にしてゐるばかりぢやアない――日本人自身も、身づから自分を卑しむやうな傾きがあつて、戰爭だけにやア强いが、思想上の

問題となれば、世界的にとてもその特色は維持して行けないもののやうに思つてる――わしも教授の一人になつてゐる大學の先生達からしてさうだから困る。
末子　矢ツ張り、舊式なんでしよう。
友定　舊式でもいい、さ――若しちやんと、その思想に世界的根柢が置ければ。
末子　それが置けません、わ――たとへば、おねえさまのお考へのやうでは――
友定　まア、お待ちなさい――子供のことなんぞア、ほんの、わたくし事のやうなものだが――國家と云ふものは、また國民と云ふものは、これから世界的根柢を得て、世界的發展をしてゐなけりやア、世界の大勢に落伍してしまう。今までの愛國主義などア、どれもこれも、ただ小い日本國でがん張らせて行けると云ふ迷信のもとに行はれてゐた。が、然し、それは實際のところ、研究が足りない爲めに身づから卑しんでゐたのであつて――わざわざ白人等に侮蔑の材料を供してゐたのだ。
末子　そりやアさうで御座いましたらう、ね。
友定　まア、お待ちなさい――白人等はおのれの思想だけが世界的で、黄色人種の思想はほんの地方的だと輕斷してゐるから、日本人の特色をも認めないで、或は白人を了解しないからとか、或はまた白人に同化しないからとか云ふことを、排斥若しくは侮蔑の正當な理由になると思つてる。が、向ふへ同化などが出來る特色なら、眞の特色とは云へまい――？
末子　さうです、わ、ねえ。――でも、ね、おにイさま、何もあなたのお說のやうに黃白兩人種が同

一人種でなくツたツて、矢ツ張り、日本人は日本人だと思はれます、わ、わたくしには。

友定　そりやア知れ切つてらア、ね。（善意の侮蔑を向けてから）然し、ね、白人等に日本人の特色を尊敬させるにはあいつ等と同一人種だぞと云ふことを實際に證明してやることが一番早道だし、――

末子　それもさうで御座いましょうが、（別に話があると云ふ風で）ねえ、おにイさま、おねえさまが――

――

友定　（それに構はず）現に、この頃になつては、わしの意見と同じことが古代の言語學や歴史地理の方面からも論じられて來た。然し、（と、末子のもぢもぢしてゐるのを落ち付いて見ながら）そんな生ぬるい研究では駄目だ。――日本人は賢明だから、白人等の特色は疾くにから認めて、寧ろそれを崇拜する時代さへあつた。ところが、白人等は馬鹿だからこツちの特色を特色とは知らないで、ただ侮蔑したり排斥したりしてゐるのではないか？

末子　それはさうで御座いましようが、おねえさまが――

友定　まア、お待ちなさい――それを手ツ取り早く反省させるには、わしの研究が確かめられるに限るのだ。白人も日本人も同一人種だと分れば、向ふとこツちとの特色は、おのづから、各々別々に世界的である筈だ。どうせ人種と國家とを離れちやア、向ふにも、特色も世界的もあつたものぢやアないから、ね。

末子　おにイさまの御說はよウく分りました、わ。それで、おねえさ――

友定　まだまだ――つまり、さう云ふ主義からわしの解剖學を應用して日本人と白人種との骨組みなどを比較研究し、もうすツかり斷定の準備は整つたので――人はそれを偏見からと云ふが――あの薄暗い上野の森の、わしの父のお墓をいよいよ掘つて見ようと思ふ――その中の骨をわしの黑い目でちよツと見さへすりやア、それで直ぐこの研究の結論が實證(じつしよう)せられるにきまつてゐる。

八重子　…………（ドアのそとでこつこつ云はせる。）

末子　（ドアの方へ向き、一生懸命になつて）まだよ！　まだよ！

八重子　（ドアを明けて、のんびりと）まだア――お食事を御一緒に戴かせたいのですから。

末子　（にらむやうに）そんなことをおツしやつたツて！

友定　…………（可愛らしさうに末子の眞面目に怒つた顔を見てゐる。）

（ドアがそとへ締まる時、おづおづ室内をのぞいてゐた常雄の紳士らしい洋服姿が、ちらと友定にも見えたので、ちよツと飛び行きさうな風を見せる。）

末子　おねえさまは子供のことばかしだ？　――電氣をつけましようよ。（立ちあがつてテーブルの上の方の電燈へ手を延ばしながら、あまへるやうに）何だか氣味が惡くなります、わ、薄暗い森だの、お墓だのと伺ふと、ね。

友定　（かの女をうは向きに見ながら）そこに、然し、日本人の尊い秘密が葬られてゐるらしい。

末子　（坐わつて）そのわけはわたくしにもようく分りました、わ。で、今一つ常雄さんのことで御座

いますが、ね、——宅のかたは、みんな、あなたが常雄さんに冷酷だと思つておいでですが、わたくしは却つてさうとは存じませんの。

友定　…………(不思議さうに)

末子　おにイさまは、常雄さんのことをお聽きになると、直ぐお避けなさいますが、今日は一つ、御辛抱なすつて戴きたいので御座いますよ。あのお方もこの國に永住するおつもりで、御生活の出來るだけの仕事はあちらで御關係を付けていらしつたのですから、ね——よろしう御座います?

友定　あ、辛抱して、ね。

末子　時々御返事も願ひますよ。

友定　あ。(力なささうに。)

末子　あなたは、全體、お子さまをお仕つけなさるのに、あんまり嚴格過ぎはなさらなかつたでしようか?

友定　嚴格ほどいいぢやアないか——なまぬるくして置くよりやア?

末子　それが今でもお姉さまとお心がお合ひなさらないところで——お姉さまのやうに子に目がなくツても困りましようが、またあなたのやうに嚴格すぎても、ねえ。

友定　——嚴格過ぎるのは、いくら過ぎてもいい——外形ばかりではなく、精神的にそれが行はれればだ。

末子　そこで御座いますよ、あなた！（と、ちよッと反り身になつて見せ）あの常雄さんが八つの時、あなたは云つてお聽かせなすつたさうです、ね――誰れにからかはれても決して負けて來るなと？

友定　あ。

末子　さう致しましたら、お隣りにゐたおとなの西洋人が可愛がつて〳〵くれますつもりであたまを撫でたのを、常雄さんはおこつて棒でぶち返したさうで御座います、ね。

友定　それで惡いことはなかつた。

末子　それだけなら、まア、よいと致しまして――九つの時になつて――

友定　ああ、聽きたくない、ねえ。（と、顏を傷持つもののやうにしがめる。）

末子　まア、おきき遊ばせ――九つの時になつて、また、あなたは常雄さんのあまりおいたをなさるのをお叱りになつて、今度からは、決して人をぶつてはならん！　人をぶつから、自分も泣かされるのだから、ぶちもぶたれもしないやうにしろ！　さうして若し向ふがえらくツて、こツちがぶたれても抵抗するな、さうしてぶたれても泣いて來るな――それが却つて強い子だ、とお敎へなさいました。

友定　そ、さうです！（苦しさうに。）

末子　さう致したら、どうで御座いましよう――常雄さんは、お向ふのいたづらッ子に右のお目を釘でお怪我をお受けなすつて、泣き出しもしなさらないで、『かアさま、定ちやんが目をぶちました――

とおッしやつて　歸つて來られたぢやア御座いませんか？

友定　（同じやうに苦しさをこらへて）　そ、そりやア、あんたも御覽の通りでした。

末子　そのお目が眞ッ白になつて、今度常雄さんが十六年目で英國からお歸りなすつたのですよ。――あなたは、それでも、お會ひなさらうとはおぼし召しませんの？

友定　會ふことだけはしたくない！

末子　でも、それだけ、あなたは常雄さんに對する愛がお深いのでしよう――？

友定　（目をしよぼつかせながら）　そ、さうです――いかにもさうだ！

末子　ぢやア、（と、テブルの上から額を渠に近づけ）お會ひなすつてもよろしいぢやア御座いませんか？

友定　わしには（と、涙を隱すやうに正面でうへを向き）　會つてやるよりも、もッと深い愛情がこの胸にみなぎつてゐる！

末子　それで、あの時から、（と、同情的に）　常雄さんをずッとあちらへやつてお置きなすつたのでしよう？

友定　うん、さうです！　（立ちあがつて、向つて右の方へ歩きながら、苦しみをまぎらせる。）

末子　（目で渠を追ひながら）　でも、ねえ、おにイさま、わたくしの一生のお願ひですから――おねえさまもこれまでこればッかりを心配してゐなすつたのですから――

友定　（かの女に背を向けて）八重子にやア、ほんとに子を愛する心が分らないのだ。

(左りのドアが明いて、八重子、さきに現はれる。その後ろに、また、常雄が見えてゐる。)

八重子　もう、おすみになつて?

末子　(その方へふり向いて)今、あなた、いらしツちやア、駄目ですよ。あちらへ行つていらツしやい
——お知らせしますから!

八重子　さう——

(八重子の退場と入れ代りに、老母登場——あたまはつるりと禿げ、腰はずツと曲つてる。)

老母　(末子の後ろの方まで進んで、ちよツと腰をのばし)のう、あんた、——まア、會うてやつたら、どう
ぢやな? 八重さんも常雄も心配してるので、た——

友定　(なほ歩きながら)おツ母さんなどの御存じなことぢやアありません!

老母　存じてをるか、をらんか、何にしろ、親子のことぢやないか?

友定　だから(と、强い聲でふり向き)またお父さんのお墓を掘るなとおツしやるのでしよう?

老母　いや、お墓はお墓、孫は孫ぢや。

友定　わたくしにやア、それが別々でない——一つの決心しきヤないのです!

老母　では、その決心をしたら、どうぢや、な?

末子　まア、お婆アさん、おかけ遊ばせ。(と、自分の椅子を立つて渡す)おにイさま(と、友定のそばへ
行つて)どう? 常雄さんは、もう、英國へもどこへもおいでにならないとおツしやつてますよ。さう

して日本に永住して、あなたの老後をもお世話してあげたいと――

友定　（かの女の左り手で、かの女に脊を向け）わしは子供などの世話を受けようとは思つてゐない。

末子　それから、ね――どうせ、僕は不具な人間で、日本へ歸つてもいい妻が貰へるかどうか分らないから、丁度氣が合つたのを幸ひ、向ふで約束して來たのだからツて――それもあなたにお引き會はせなさりたいと――

友定　（かの女へふり向き嬉しさを押さへて）英國婦人でもつれて來たのか？

末子　（叱られるかと、おづおづしながら）ええ。

友定　（またそとの方を向き）それにはわしも異存はない。

老母　（腰をかけたまま）して見ると、何にも會はないわけがないぢやないか、な？

友定　（老母に向き）あなたにやアありますまいが、わたくしにやア十分の理由も愛情もあつてのことです。

老母　そりやまたをかしなことぢや。

友定　（左りの方へ行きながら）分らないものにやアをかしいでしようが、ね――

末子　おにイさま（ついて行つて）わたしにやア分つてますから、どうぞわたしだけにお免じなすつて、お會ひなすつて下さいまし。そして、ね、あなたの御精神を常雄さんにお傳へなすつたらいいでしよう、これから政治家にならうとおツしやつてますから。

友定　（ふと考へをきめたやうに立ちどまり）末さんのお言葉にやア・何だか、從はなけりやアならんやうな氣がします——ぢやア、會ひましよう！

末子　（嬉しさうに）ありがたう、おにイさま——お婆アさん、（と、老母のそばへ驅け行き）いよいよ會つて下さいますツて。

老母　それが當り前のことぢや。

友定　（半ばひとり言のやうに）その代りわしの用意がいる！（二人の方を見て）少し待たせて置いて下さい。

末子　ぢやア、（と、二三步渠を追つて）成りたけお早く、ね、おにイさま！

（友定、決心の色を見せて、右のドアを排して退場。左りのドアから、常雄、右の目の眞白なのを見せて、驅け込むやうに登場。）

常雄　（直ぐ右の方に立つてる末子に行き、兩手をその肩にかけ）お、おばさん、ありがたう！

末子　（立つたまま、じツと渠を見詰め）あなたは泣いてるの、ね。

常雄　泣きました！（兩手をかの女の肩から外して、半ば正面に向き、左りの手で涙を拂ひながら）僕は全く思ひ違ひをしてゐました。お父さんに對して滿腔の恨みを懷いて來たのは濟まないと思ひます。全體、どうしてこんな濟まない思ひ違ひを十六年間もしてゐたのでしよう？　僕はお母アさんの手紙ばかりを信じて、お父さんは全く冷酷で僕て少しも愛情がないのだと思つてました。お父さんの手

紙に——無論あツちにゐちやア、手紙をたよりにするより仕かたがないのですが、——いつも、勉强しろとか、眞人間になれとか云つてあるだけで、あツたかい情愛などは樂りにしたくも見えなかつたのでしたが、ねえ。愛情をこれッぱかりも出せないほどに、お父さんは僕の目のことを氣の毒がつてゐたのです。今あすこから立ち聽きしてゐたので、もう、すツかり分りました。僕はお父さんの無言の愛情でこれまで、肉體的にも、精神的にも、育つてゐたのです。僕を英國へやつたのは、お父さんの言葉に出せない愛情でした。決して日本へ歸るなとあつたのも、お父さんの愛情の極でした。お父さんは、愛情の極、死ぬまで僕を見ないつもりであつたのです。

老母　さうぢやろか、な——それにしてもをかしいわけぢや。

常雄　いえ、お婆アさん（と、勢ひよくそのそばへ行き、左りの手で椅子の脊を抑へ）何もをかしなことはないのです——すッかり僕は思ひ違ひをしてゐたのです。

末子（右の椅子にかけて）そりやア、あなたのおツしやる通りよ。お婆　さまやお母アさまにはそれがお分りにならなかつたのですとも！

常雄　全くです。（また、末子へ飛んで行き、その椅子の脊中にもたれ、正面を向き）お父さんは僕を目ッかちにしたのを非常に後悔して、その後悔と愛情とを一緒にして、深い深い胸の奥で僕をお母アさんの愛情——これがお父さんを殘酷で困る／＼と手紙に云はせてゐたのですが、——その愛情以上に育てて呉れてゐたのです。でも、なアに、（と、かの女の椅子を離れて無雜作に）僕の目ッかちなどは本人

がちやんと諦めてゐます、さ——お父さんが惡かつたと云ふわけではなし、また今更ら取り返しがつく筈のものではなし。

末子　そりやア、さうだわ、ね——目の不自由ぐらゐが、これから若々しく働からうと、きのふからおつしやつてるあなたのお考へを頓挫させるやうなことは御座いませんから。

常雄　僕はこれから、お父さんのお許しさへあれば、政治界に出るつもりです。目ツかちの政治家たど云やア、却つて人の注意を引いていいでしよう。獨眼龍で。

末子　そりやア、丸で見えなくツてもえらかつたかたがあるのですから。

常雄　けれども、僕は目ツかちをしほに世人の同情を求めるやうなことは決してしないつもりです。英國では、人の同情にたよるを許されるのは、孤兒院に行くみなし兒か——それでなけりやア、もう、老いぼれた後家さんだけです。

末子　日本も、段々さうなつて來ます、わ。孤兒院や癈兵院からの訪問でさへ、もう、わたし達にやア、うるさくなつて來ました、わ——わざとらしい同情を求めに來て！

常雄　それが一番下劣な行爲でしよう。

末子　それにやア、ね、あなたのお父さまの主義が一番いいと思ふ、わ。第一、書生を置くのがおきらひで——まア、あなたもおかけなさい、な。（かう云つて、立つて、今一つの椅子をかの女の椅子の前方に置く。）

常雄　僕はいいのです。腰をかけちやアゐられないほどからだ中が嬉しくツて、嬉しくツて――もう
お父さんに對面してしまつたやうに滿足なのです。
老母　ほんとに、な（と、同じやうに嬉しがって、孫の樣子を見ながら、目をしよぼつかせて）こちらも會ひた
かつたのぢやが、お前もさぞあちらにゐた時から、毎日、毎日、歸つて來たかつたぢやらう。
常雄　そりやア、お婆アさん（と、そのそばへ行き）僕はお婆アさんとお母アさんとには勿論、お父さん
にやア、僕を冷酷に考へてゐられると云はれれば云はれるほど、非常に――たまら無く――會ひた
くなつてゐたのです。
老母　（孫のからだに手をかけながら）わたしは、まア、きのふがきのふ迄、まだ九の時の樣子ばかりを
夢に見てゐたのに！
末子　今でも、お婆アさまはさうでしよう。お年寄りは皆子供のおほきくなつた心持ちがお分りにな
りませんから？
老母　まア、そんなことぢやらう。な――ほんとに、夢のやうで。
常雄　おばさん（と、またそッちへ行き、さきに出された椅子へ後ろから兩手をかけ）その今のお父さんの話の
つづきをして下さい――僕はお父さんのことで知らないことをすッかり聽きたいのです。
末子　（立って他の二者の樣子を見てゐたのが、復椅子にかけて）第一、書生さんを置くのがお嫌ひで、ね――

末子　置いたツて、どうせ碌なことにやアならないの――主人の缺點を吹聽して歩くか、そこの奥さまと喧嘩をするか、ね。

常雄　そりやア、日本人の惡い缺點です。英國へ來て、皿あらひや何かする日本人はみなそれで失敗します、約束の時間を働きもしないで、澄まアして書物など讀んでゐて――その意味は、こんなに勉强心があるのに、ここの主人も奥さんも、無同情で、一向に取り立てて呉れないツて！

末子　矢ツ張り、それとおんなじ手でしよう。書生なんて、自分のことばかりしたがつて、その同情だけを人から求めようとしますから。

常雄　（頷きながら）　お父さんもよく分つてゐられる！

末子　まア、それだけならいいのですが、ね。これから働かうと云ふ立派な青年が、學者とか、政治家とか、實業家とか、いい人、いい人と頼つて行つて、乞食のやうに同情を得て、ほんの情實からその立身出世を求めるのを、あなたのお父さまは日本青年の恥辱だとおツしやつてゐるの。

常雄　（言々に嬉しみを表してゐたが）それです？　それです？　（と、椅子から離れてくるりと身をまはして、また末子に向ひ）僕も日本の情實政治や情實ばかりの社會のことを、向ふにゐても、新聞や書物で讀んでゐました。僕は、英國の土を最後に踏んだ時、日本へ歸つたら、直ぐにあらゆる方面に於ける情實打破の運動を起さうと決心しました。

末子　あなたのお父さまも、ね。書生に對する同情や情實をさへ排斥おしになるのですから、政治上

の情實は勿論のこと、わたし達のことに就いても、一厘一毛だツて妥協や讓步はなさらないのです。

常雄　それです？　それです――（と、右にふり向いて步きながら）『カイザルの物はカイザルに返し、わが物はわが物とせよ』です。――それでおばさんは（と、またそッちへふり向き）わたしのお父さんに喰ひぶちを拂つてるのです、ね。

末子　（微笑しながら少し沈んだ色）わたしもなかなかおにイさまにやア負けない氣です、わ。

常雄　結構です！　結構です！

老母　わたしは、また、どうせ緣つづきの兄弟ぢやから、お金など取つたり、出したりしないでもえいと、いつも云うてるのぢやけれど――

常雄　お婆アさんにやア、まだ人間の誠實な活動、實力發展の意氣込みは分らないでしようから――お父さんとおばさんとがお金を取りやりしたりするのが目的ぢやアないのです。人を煩はせないで自分のことは自分が處分する！　また、人にもさうさせる！　これが僕等の主義です！　精神です！

老母　さうするに越したことはなからうけれど――

常雄　それはさうと、おばさんが未亡人になつたのはいつからでした、ねえ？

末子　（沈んだ色を深めて）去年ですよ。

常雄　（つり込まれて）氣の毒でした。おぢさんと云ふ人も、折角、政治家として立派になり出してゐられたと云ふのに！

末子　まだ若かつたのでしたが、もう、解剖學者としてのあなたのお父さまほど、政治界にやア認められてゐたのです。

老母　見込みのあつた人ぢやツたが、な――

常雄　氣の毒でした、ねえ――でも、財産だけ殘して貰つたのはあなたのまだしものお仕合せでした――もう、おばさんは結婚しないのですか？

老母　（末子を見て）よいとこがあるのぢやけれど、な――

末子　…………（下を向いて考へ込む。）

常雄　（そッぽうへ歩きながら）いいとこなら、再婚（さいこん）したらいいぢやアありませんか――再婚反對說なども一つの情實に過ぎないのです。（こちらを向いて末子の沈んでゐるのを見てそばへ行き、心配さうに）けれども、おぢさんも氣の毒でした。

（間）

老母　常雄も歸つて來たことぢやし――今一度この子とも相談して見たらどうぢやらう、な？

末子　わたくしのことは（と、少し顏をあげ、以前とは違つた低い調子で）矢ツ張り、わたくしにまかせて置いて戴きましよう。

常雄　おばさんも氣の毒でした、ねえ。（氣を換へて、そこを離れ）僕も、おぢさんに代つて、政治家になります。けれども、おばさん（と、またそばへ行つて、わざと滑稽を云ふつもりで少し脊をかがめて、目ツ

かちは仕方がありませんよ。

末子　（すツと顏をあげて、常雄を見、微笑を浮べ出し）わたしは――また――常雄さんの片腕になつてあげますよ。

常雄　片腕よりやア（と、これが今度は、横を向いて、沈んだ聲になり）片目だけ呉れるものがあればいい！・

末子　常雄さん（と、聲を顫はせて、目をしよぼつかせ）御もツともです、わ！

（老母、默つて涙を拭ふ。間。八重子、左りのドアから戸を叩かないで登場。）

八重子　（別に喜んでる樣子も見せず）まア、これで安心が出來ると云ふもの――（皆の樣子に氣が付き、怪訝な顏。）

老母　（八重子に向き訴へるやうに）この子の片目を直してやりたいものぢや・な。

八重子　（あきらめ切つてゐる而も弱い樣子で）今更ら、そんなことを！――もう・御食事のお支度が出來ましたが――

末子　おねえさまは（と、つづいた感情を破られたのを怒つたやうに）子供と喰べる事とばかりおツしやつてる！

八重子　（何とも知らず微笑して）でも、ねえ――

（とんと、右のドアに物がぶつかつた音がした。皆々驚いて、その方へ顏をへける。末子は椅子を右へ遠く離れて立つ。常雄、テブルの前を左りの方へ行き、舞臺前方のところで、出て來るものを最も熱心に待ち受けて

ゐる。）

（そのドアを明けて、友定、その息子と同じ方の目に繃帶し、片手に自分の拔き取つた眼玉を持つてよろよろしながら登場。）

八重子　あなた！（立つたまま、俄かに驚いた樣子で）お目をどうなさいまして？

常雄　お父さんですか――お父さん！（飛び行きたいやうな嬉しさにまたぐツと胸にこたへた悲みを表する。）

（友定、立ちどまつて情ありげに息子を見る。）

老母　（不思議さうに）目をどうしたのぢや？

友定　（母に向ひ）拔き取りました！（痛さうだが、嚴格にしツかりした聲を出す。）

（皆々びツくりして、暫らく無言。）

末子　おにイさま！（右の方からかけ寄つて）あなたは、思ひ切つて、あなたのお考へ通り實行なさる御方です、ね。

友定　うん（と、ほほゑみながら、眞ン中のテブルに行き、その後方の椅子に正面を向いてもたれる。そして眼玉をテブルの上に置き、手であたまの痛みを落ちつける樣子。）

老母　（少し怒つて、眼玉を熟視しながら）なんでこんなことをするのぢや、馬鹿々々しい！

友定　おツ母さんにやア馬鹿々々しく見えるでしようが、（と、十分落ち付いて）間宮友定は解剖學者です。

老母　解剖學者なら、アイノや猿の（と右手の骸骨にちよッと目をうつして）骨などを調べたらえいので――何も自分の目を（と、友定の顏を見て）拔かないだッて。
友定　わたくしの解剖學は、おッ母さん、死んだ物の骨や肉をばかりいじくッてるのぢやア御座いません。人間の精神や靈魂までも解剖致します。
末子　（矢張り、立ってるまま）それがあなたの所謂言行一致の學問です、わ、ね。
友定　（かの女に向いて）さうです。
老母　それにしても、わざわざ自分の目を拔いて見ないだッて――
八重子　（左りの後方に立ってたのが、少し進んで卓上の眼玉をあきらめたやうに見、それから所天に）あなたは隨分向ふ見ずのお方で御座いますよ――そのわけは、今、わたくしにも分りましたが、ね。
老母　分つたとは？（と、八重子へふり向く。）
八重子　（生眞面目に、母にとも所天にとも付かず）常雄に申しわけの爲めでしよう。
老母　へえ――たださへあれの不具なのを心配してゐるのに！
友定　常雄！（と云って、眼玉を右の手に持つ。）
常雄　はい、お父さん！（と、どうしていいかに迷ふ。）
定　わしの、この眼玉は、わしがお前への久し振りの對面料として、お前にやる。
常雄　はい。（と、二三歩進んだが、悲しさうに）けれども、お父さん、それでは僕にも見えません！

（友定、眼玉を引ッ込めて、自分の左りへ横を向く。常雄、その反對に横を向く。共に、情の籠つた悲しみを表する。他の三人はそれぞれ釣り込まれる。）

友定　だが、常雄――

常雄　はい。（涙をふく。）

友定　親子の情愛はこれで五分五分だ――もう、わしはお前に負債はないぞ。

常雄　はい、どう致しまして、お父さん、（また涙になつて）僕の爲めにお父さんまでがまた僕のやうにおなりなさつて！（泣き出す。）

友定　（叱り付ける口調で）昔から泣くのは禁物の敎訓を忘れたか？

常雄　はい！（涙を拂つて、ちやんとなり）十六年間お目にかからないで、あなたばかりをお恨み申してゐたのも、僕があなたの御敎訓を忘れてゐたからでした。

友定　その話は今聽えてゐた。

常雄　お父さん、僕の心もお分り下さいましたか？

末子　そりやア、常雄さん、わたしから十分申しあげたつもりです、わ。

常雄　おばさん、ありがたう御座います。

老母　この目を、八重さん、（と、卓上からかの女へ向き）どうかしたら、どうぢや――わたしはむごうて見てをられん。

八重子　今更ら、そんなものを――（横を向く。）

老母　わたしから生れたものはまたわたしに歸るのぢやろか、な。（と、ふところから半紙を出して眼玉を包み）でも、また何かの參考品にでもならう。（かう云ひながら、右の方へ歩み行き、包みを猿の骨のところへ置く。）

友定　（常雄に）對面の挨拶（あいさつ）などはいらん。早くその花嫁をつれて來るがよからう。

常雄　はい――はい。（嬉しさうに左りへ引き返す。）

友定　（常雄を見送りながら）お前達を見るのは、今限りだから、ね。

（常雄、ちよツとふり返つたが、直ぐ左りのドアから退場。）

八重子　あなたはまだ何か、この上にも、突飛なことをなさいますおつもりですか？

末子　わたくしにやア分つてるやうですが、おにイさま。（首をかしげて）そんなにまでお思ひ切りなすつても――

友定　（かの女へ向いて）いいとも――それでわしの事業は完成するのだ。

老母　（もとの椅子について心配さうに）事業ツて？

友定　（母に向き）わたくしの、こツちの目をも拔き出すのです。

老母　なんでぢや、また？（老母びツくりする。）

友定　あなたがたに今一つ申しわけの爲めであります。

末子　薄暗い森の一件でしよう。

友定　さうだとも。

八重子　薄暗い森ツて――ぢやア、あなたはいよいよお父さまのお墓をお掘りになるのです、ね？

友定　無論。

八重子　どうでしよう――（と、あきれたやうに老母を返り見る。）

老母　（きツぱりと）そんなことは常雄からとめて貰ひます。

友定　常雄に對してでさへわたくしは對面料を拂ひました。あれのおぢイさん、乃ち、わたくしの父に對しちやア、なほ更ら解剖料を出さないではゐられません。

老母　（怒つた口調で）そんなことは御無用です。

（常雄、にこにこして、左りのドアより、これもにこにこしてゐる洋裝のマリヤをつれて登場。）

常雄　（母の後ろから父に近づき）お父さん、これが僕のマリヤです。よく見てやつて下さい。

友定　（嬉しさうにそれに向つて）マリヤと云ふのか？

常雄　（マリヤに向つて父を指さして）僕のフアザ。

マリヤ　（手を出して）O our father!（かたことで）はじめて、お目に、かかります。

友定　I'm glad to see you.（握り合つた手を上下に振る。）

老母　は、は、は！（可愛ゆさうに見とれて笑ふ。）

子供の聲　（奥から）かアさま！　かアさま！
八重子　あいよ。
子供の聲　（奥から）かアさま！
八重子　（落ちつきを失つて）あいよ。
友定　（それにはかまはず）How old are you?
マリヤ　Nineteen.
友定　おゝ、十九歳か？　（老母を返り見て）釣り合はないこともなからう。
子供の聲　（奥から）かアさま！
八重子　お父さまがお叱りですよ。（いそいで、左りのドアから退場。）
末子　（姉の後ろ姿を見送つて）ちよツ、また子供のことを！
友定　Take chair. please.
マリヤ　Thank you, our father.
友定　（見まわして）お前、（常雄に）椅子を持つて來なさい。
常雄　はい。（見まはしても、他に椅子はなかつた。）
米子　これをおあげ申します、わ。（と、自分のを持つて行きかける。）
八重子　（左りのドアから顔を出し）お婆アさま、ちよツといらしツて――坊たちがむづかりますから。

老母　はい、はい。

末子　おねえさまは、いつも、人の手でなければ、子供を靜めることがお出來でないの、ね。

八重子　（誰れにとも付かず）あとのお話は、いかがです、お食堂で――？

末子　また、喰べること！　（八重子、聽えたとも聽えないとも分らず引ッこむ。）

老母　では、これにおかけ。（かう云つて、立ちあがり、椅子をマリヤの方へやる。）

マリヤ　（かたことにて）あり、がたう。（かける。）

（老母、退場。）

末子　（常雄に）おぢやア、これをあなたにさしあげましようか？

常雄　僕はいいです、おばさん。

末子　さう――（と云つて、その椅子をテイブルに引きよせて、義兄の、向つて右手にかける。）

友定　（椅子について）You must study Japanese, I think.

マリヤ　Yes, father. わたし、日本語、少し、おぼえました。

友定　それは結構であります。日本語ができませんと、家庭のことでいろいろひがみが出ます。

マリヤ　さうです――ひがみ――Suspicion であります。

友定　イエス、イエス。

末子　餘ほどお稽古なすつたのでしよう。

常雄　そりやア、おばさん、隨分熱心に僕が敎へたのです。――それに、お父さん、僕も日本へ歸りたいので、毎日、毎日、日本へ歸つたと思つて、日本のことを硏究しました。

友定　道理で（と笑ひ聲で）お前はお前の國語を忘れちやアゐまい。

常雄　そりやア無論ですとも。

友定　然し、まだ、日本人が歐米人と同樣に白色人種だと云ふことは知つてはゐまい――？

常雄　お父さん、（と、わけもなく）そんなことはどうしても間違ひでしよう。

友定　いや、決して間違ひぢやアない。（マリヤを見て）Mary, the Japanese race has the same origin and feature with that of Europe and America. これはわたしの解剖學上からの硏究の結果であります。

マリヤ　Oh, father!（嬉しさうなことなしで常雄を見る）

末子　お父さまの御硏究の行きがかりが、つまり、さう云ふ結論になるのですの。

常雄　いいや、（と、疑ひの餘地がないやうに）結論は空論です。日本人が歐米人と同人種だなんて――世の中に空論でない結論は實際の現實その物より外にないのです。

友定　お前も世界の大勢に觸れて、現實主義だ、な――いい傾向だ。わしもその立脚地に立つてゐるのだが、現實主義は一般平俗の人々や獨特のない形式學者等の考へてゐるそれよりやア、もツと範圍が狹い。さうして、又もツと意味が深い。

末子　…………（獨りで頷く。）

常雄　と申しますと――

マリヤ　ゲン――ジツ――シユギ？　（と、云つて、常雄に聽いて見る樣子。）

常雄　さうです、マリヤさん、僕のいつも云つてるアリズムまたはナチユラリズムです。

マリヤ　おう！（かた言で）おとう――さまも――さうですか？　（と喜ぶ。）

友定　イエス！　（と、マリヤに）わしは一種のナチユラリズム、乃ち、自然主義から出發して、わしの專門の學術なる解剖學に思想的な深刻の根柢を與へたのだ。その結果が（と、目を常雄に轉じ）乃ち歐米人と日本人とが人種的關係上同一であり、同時に又、同一人種から日本人のやうな獨特な思想――文明――從つて、これに伴ふ獨特な生活――が實現せられるのは、一層尊ぶべきことである所以を了解出來るやうになつたのだ。

常雄　お父さんの、その御確信が實際なら、無論、僕等は日本國中ばかりでなく、英國へ行つても、佛蘭西へ行つても、向ふの人々と交際する時、これから決して一歩を讓つてやるやうな必要もなくなつて――實に、最も結構ですが、ね。

友定　無論、さ。（と胸を廣く反らせ）わしは一國內に於ける政治に就いても、妥協や讓步を日本人の恥辱だと思ふ。ましてこの尊い日本人の血が循環するわれわれ共が他國人に對しちやア一步たりとも、半步たりとも、この主義に於いて引けを取るにやア及ばないのだ。

常雄　（父の熱心に釣り込まれ）議論の眞僞はまだ別と致しましても、僕はそんな立派な思想や主義が、世界から見ちやア極地方的なこの日本に、發生してゐるとは夢にも知らなかつたのです。

友定　お前はまだ（と、テブルの上に兩肱を突き）解剖學をよく理解してゐない。世界的根柢は世界の局部、局部の特色から成立してゐる。地方的と云やアわが日本に限らず、英國でも、佛蘭西でも地方的だ。その地方的な一國、一國がその誠實な特色を發揮する以外——にもツとも、その特色が優等なので、日本はこれから世界中を、少くとも精神的に、吸收統一する使命を持つてゐるのだが——その特色を發揮する以外に、世界的なものは何があらう？（間。）あの（向つて右の人骨をながめゆび指し）骸骨を見るがいい。あれは、わしが曾て小笠原島を研究的に巡回した時たツた一つ指の關節を拾つて歸つて來たのだが、わしが研究を加へて、關節また關節、一肢また一肢と組みあげて見れば、あの通り（と、少し反り身になつて骨を生きた物のやうにながめ）完全なアイノ人が出來た。

常雄　して見ると、（驚いたやうに）アイノ人種は、あんな小い丸木舟を漕いで、あんな太平洋の離れ島までも行つたのですか？

友定　離れ島にアイノどころか、わが日本人の血と精神とはこれから世界中に生き還るのだ。（立ちあがつて步き出し。）Where there is a will, there is a way! 意志のあるところ、乃ち、道ありとはよく云つた金言だ。

マリヤ　…………（分つたやうに頷いて、父の橫顏と所天とを見比べてゐる。）

末子　『精神一到何事か成らざらん』と同じでしよう、常雄さん（と、これも微笑してゐる。）

常雄　さうです、さうです。して見ると、お父さん（と、その方へ一二歩を進め）日本人の先祖がメソポタミヤから陸つゞきでアフガニスタンや印度やマレイ半島の熱帶地を經て、この島へ到着するぐらゐは、何でもなかつたのです、ね。

友定　うん、さう云ふ風にやつて來たものとすりやア、な。

常雄　舊約聖書に據りますと、ユダヤの十二族中、その二族だけは行くゑ不明になつてゐますが、或はそれが――

友定　常雄、（ふり向いて）わしは歷史や傳說のやうな――過ぎ去つて現存しない――そんな物を根據にした空理空論こそ拒絕するのだ。

常雄　（疑はしい樣子で、末子と顏を見合はせてゐたが、父から反對にからだを向けて半ば獨り言のやうに）お父さんのお說が本當になつたら。マリヤさんと僕との結婚も歐米人間に同等と見られ――不自然な雜婚者などと云はれないで濟むが、なア。

友定　（その方へふり向いて）お前達の結婚を不同等若しくは不自然と誰れがきめた？

常雄　（分つてると云ふ風に）そりやア歐米人の社會です。

友定　そんな無責任な歐米人の放言に對しちやア、日本人が決して義務を負ふに及ばん。

末子　（また憂ひの色が出て）常雄さんは、どのみち、これからマリヤさんと幸福な生活をおつゞけなさ

ることが出來ます、わ。

常雄　それに引き換へ、おばさんはお氣の毒でした、ねえ。（マリヤに）このおばさんは、ね、立派な政治家、ステイトマンの未亡人です――去年、その所天を失つて。

マリヤ　（喜びに滿ちた顏に悲しみを表し切れないで）I'm sorry――お氣の――毒――です。

末子　（憂ひのうちに微笑して）でも、ね、わたしも――あなたがたのお父さまの爲めに、――少しでも――お爲めになれば仕合せだと思つてます、わ。

友定　常雄は今（と、立ちどまつて）ここで、おばさんと、情實打破のお話をしてゐたやうだ、な。

常雄　（勢ひづいて）さうです、お父さん！　――僕もあなたの御精神だけは、あなたがおばさんとお話をなさつてたのを聽いて、十分分りましたけれども、（横を向いて、半ば獨り言のやうに）黄白兩人種が同一なんて云ふことは――

友定　白人種を優等だと思ふ偏見、――先入見も、世界の文明界、思想界に於ける一種の情實だぞ。

常雄　（ぎツくりして、暫らく頷き）はい、如何にもその點だけは分りました。

友定　（喜びを押さへて再びテブルに向つて腰かけながら）それでこそわしの立派なあと繼ぎだ――わしはお前の希望通りお前の政治家になるのを許し、わしの解剖學を政治界に繼承させる。

常雄　お父さん、（と、かけ寄つて、右の手をテブルに當て、左りの手を父の背にかけて）ありがたう御坐います。（テブルを離れて末子の方に）おばさん、喜んで下さい。（それから、マリヤの肩に手を置いて）マリヤ

さん、お父さんが僕のポリチシヤンになるのを許して下さつた。

マリヤ　（これもにこついて）ありがたう、フアザ。常雄さん――は――立派な――政治――家になります。

末子　おふたアりとも、嬉しいお顏を十分見せておあげなさいよ――お父さまは、これツ切り、お目が見えなくおなりになるのですから。

友定　さうだ！（思ひ出したやうに、立ちあがり、決心の色を見せて繃帶した方の目を押へながら）わしは最後の事業に取りかからなけりやア。

常雄　お父さん、（と、急に湧き出る涙を隱して）僕はあなたの――學說は別として――きツと御精神は受け繼ぎました。

友定　（きツと息子を見つめて）さうだ――お前の母やお婆アさんがわしの事業を邪魔するやうなことは決してすなよ。

常雄　はい。（と下を向いて、こツそり涙を拭く。）けれども、お父さん（と、少しおづおづして）念の爲めに伺ひますが、誰れがから云ふえらい思想の發頭人でしよう？

友定　このわしだ。學界に於いても、又家庭に於いても、この孤獨を守つて來たこのわしが發頭人だ。

常雄　はい――はい。（と、二度に段々あたまを下げる。）

末子　世界のおほびらな公理公道は、却つて、薄暗いところにあるのです、わ。

友定　勿論――これッ切りお前達を見ない。（と、常雄夫婦から末子を見まはし）また世界をも見ない（と、うへを向き）――けれども、（と、また常雄に）このわしに今一つ殘つてゐる眼が拔き出された時は、（また手を廣げて、力づよく）世界中の目がさめる時だ　――わしの父の死骨は、これから、（と、テブルを末子の後ろからまはつて、その前方へ來ながち）活き返つて、日本人に尊い現實の立派な證據を提供するのだ。（友定が末子の後ろをまはつた時、かの女は椅子を離れて立つ。）

常雄（悲喜兩極の表情で）お父さん、（と、マリヤの後ろをまはつて、父に近づく。マリヤもその少し後ろに立つて父に向ふ）今一度僕等をよく見て置いて下さい！

末子（向つて右から友定にすがり付き）おにイさま――明日から、この末子が――あなたのおつきになるお杖になりますよ。（ばたばたと、八重子と老母と、左りのドアを排して登場。）

老母（怒つた聲で）間宮家の當主にお父さんのお墓掘りを勸めるとは何たることぢや――その嫁、嫁入りの口をいやがつて！

八重子（多少は激してるやうに）常雄も常雄だ、とめもしないで！

常雄　主義の權化を、おッ母さん、（と、ふり向いて、その方へ近づき）とめられるなら、とめて御覽なさい。（マリヤに向いて）O Mary, 僕らのお父さんは主義の爲めに最後の斷行をするのです。

マリヤ　最後の斷行！（分つたやうな分らないやうなやうす。）

末子（友定をつかまへたまま）わたくしはおねえさまのお代理をつとめてるばかりです、わ。（八重子、

息子と妹とを見比べて、ただをののいてゐる。）

友定　おッ母さん。（と、その方を向き）この申しわけは——いづれ——わたくしが闇になつてから。（向つて右を向く。）

老母　（あわてて）友定！

八重子　（聲を顫はせ）あなた！

常雄　（テイブルへ行き、手をかけて熱心に）お父さん！

末子　（ふり向いて友定を目で追ひ）おにイさま！

（友定、決然として歩み、右のドアに行く時、四人は以上の聲を一齊に出す。マリヤ、不思議がつた樣子をする——幕）

附記　これは議論の多い脚本であると云ふ非難は甘んじて受ける。が、その議論は、殊に日本人白人種說はこの劇の主人公なる解剖學者の特別な說として、その性格と共に描寫されてゐるのであるから、そのままを作者の持說だなどと思ひ爲しては、讀者は却つてこの劇としての意味を取り違へる恐れがあらう。これは發表するに當り先づ以つて斷わつて置く。大正二年十一月。

三、角畑

登場人物

百姓甲（四十歲前後）
女房甲（三十五六歲）
百姓乙（五十歲以上）
女房乙（四十七八歲）
通行人細君風（二十三四歲）
同　老母（五十歲以上）
巡　査
　その他に、無言若しくは有言の仕出しの御用聽き並に牛乳配達各一名

場　所

東京の郊外

時

六月の初め、曇天の午後

（鐵道線そばの畑地で、舞臺向つて右の方は鋭角の三角形に迫り反對の方へは開いてゐる。この鋭角の方に電

柱が立つて、倒れぬ爲めに針がねが引ッ張つてある。それから畑の向ふ側に細い眞ッ直ぐな道路があり。人の丈ほど延びた檜葉の苗木の僅かな植ゑ込み。その後ろから見える二階の裏手。こちら向きの小い平家。これに隣つての、これは小い二階家。かかる景が舞臺中央の奥の方で切れて、眞ッ直ぐな道路のあなたは青葉の桃畑、そのまた向ふの方から、山の手線の鐵道シグナルのあたまが見えてゐる。

(向つて左り手の奥に、檜葉の間から二階家の横手が見える。そのこちらも、後ろも、すべて畑の體。舞臺向つて左り手の前方にも、枳殼の生垣で圍んだ小い平家の裏手の隅なる便所のところが見える。この家の横手から、奥の方の道へ、直角に道路がついてゐるので、正面の畑は不等邊三角形になつてゐる。)

(一)　百姓甲・酒屋の御用聽き

(酒屋の御用聽きらしいのが、物を肩にかけて、自轉車を、向つて右の三角點から乘り入れ、あぶなツかしさうに舞臺の前方を眞ン中ごろまで來る。)

百姓甲　(今氣が付いたやうに鍬の手をやめて、舞臺中央少し奥から暗鬱な痩せた顏をその方へ向けて、とがつた聲で)通るない!　(御用聽きは無言で驅け拔ける。)畜生!　(暫らく瞰んでゐてから、また鍬を動かす。)

(二)　百姓甲・牛乳配達

牛乳配達　(奥から左り前方への道路を、配達車をがらがら云はせてやつて來て)今日は。

百姓甲　……(ふり向いた時には、もう、配達は知らぬ顏でずんずん行つてしまうので、またいまいましさうに暫

らく瞰んでから、鍬を動かす。この動かし方が焼け氣味であつた。）

（三）　百姓甲・その女房

女房甲　（これも瘦せた方で、血色のよくない顔で薩摩芋の芽を入れた籠をかかへて、向つて右の三角點に現はれ）お父（とつつ）アん、まんま喰はねいか？

百姓甲　……（ふり向きもしないで、鍬を使つてゐる。）

女房甲　（奥への道路から渠の方へ近づきながら）腹が減（へ）りやアしねいかよ？

百姓甲　……（矢張りふり向きもしない。）

女房甲　（その道ばたに近いところを渠がうなつてるのを見て、立ちどまつたが）もツとよくおうなひよ・いつものやうにやア行つてゐねいぢやアねいか？――もう・ドンも餘ツぽど前に鳴つたがよ。

百姓甲　（見向かないで、低い獨り言のやうに）おらアめしも喰ひたくねい！

女房甲　そんなことを云つたツて、腹が減るがよ。ちよツくら行つて來なよ。そのうち、わしやアそこまで植ゑ付けて置くが――

百姓甲　（同じ態度のまま）うちへも行きたくねい。

女房甲　そんなに嫌はねいで、さ、わしの娘は父（とつつ）アんの娘ぢやアねいか？　ゆふべからあんな怪我をして足が立てねいのに、可哀さうでねいかよ？　ちよツくら行つて、ちよツとでも愛相云つてやんなよ。親でもねいやうに――まだ痛（いて）いツて、寢たツ切りぢやアねいか？

百姓甲　（まだ同じやうに鍬を動かしながら）あいつも天罰を受けやがつて——もう、どうせ一生寢たツ切りだらう、さ。見たくもねい！

女房甲　（多少引き入れられた樣子で）天罰ツたら、天罰だらう、さ、父アんが行くなと云ふのに毎晩、夜這ひに行きやアがつて——歩けもしなくなつた片輪に、若し子でも出來たらどうするだらう？　あの久原の旦那も物好きな、人の娘を毎晩あの（と、自分の右手前方をちよツと見やつて）廣ツぱで自由にして、さ——早く金にでもしてやんなよ、いい療治も出來ねいぢやアねいか？

百姓甲　（矢ツ張り鍬の手を休めないで）いい療治が出來ねいから、一生片輪、さ——おらア都會の人にやア一文でも世話にならねい。あいつ等の屎でも小便でも、禮をして買つてらア。

女房甲　それだから、世間から馬鹿正直だと云はれるのだよ。矢澤の作兵衛ぢぢイを見なよ。近處のお屋敷へへいへい云つてあたまを下げて行く代りにやア、そこいらの肥はただで貰つてるし、おもちやのやうな畑をうなつてやつても一圓や二圓にやアなるし、たまにやア下手な庭つくりや植木屋の眞似もしてゐらア、ね。

百姓甲　（初めて鍬の手を休めて、女房の方を睨むやうに見て）おらア作兵衛のやうな、出來合ひの植木屋などアしねい！　今は小作でこそあれ、これまで親代々から正眞正銘の百姓だ！

女房甲　百姓は百姓に相違ねいが——

百姓甲　だから、おらア都會くせい奴らア嫌ひだ！　鐵道が引けるツて土地をへずられ——屋敷が立

ツて地面を削がれ、——賣り地にするツてもとの畑に草を生やしツ放しにして、——電氣が來るツて大きな柱などを立てて、さ、おら達のいのちやア段々變挺になつてしまはア！　おまけに、道でもねい道を付けアがつて——どうせ踏まれるから、そこだけ明けて置くものの、たださへ減つた地面がまたそれだけ使へねいんだ。

女房甲　だから、作兵衛なんか商買換へをしねいぢやアと云つてるさうだ。

百姓甲　馬鹿野郎！　あいつらア植木屋にでも、乞食にでもなつてしまへ！　（と、投げ出すやうに云つてから）おらアつちくれ一つにかじり付いても、百姓をすらア！　（手につばを吐いてまた鍬を持つ。舞臺正面を、向つて左りの方へ、すぢかひにうなひ下つて行くので、かの女からは段段遠ざかる。）

女房甲　そりやアさうだとも、さ——だが、行つて來なよ。

百姓甲　…………

女房甲　まんまを喰はねいと毒だア、ね。

百姓甲　…………

女房甲　いいか、ね——？　（心配さうに。）

百姓甲　（獨り言のやうに）かまうもんか？

女房甲　でも、ちよツくら行つて來なよ。それに、あの兒も何か父アんに話があるツてがよ——隨分利かねい兒であつたが、ゆふべから急に氣が弱くなつて、さ。

百姓甲　（矢ッ張り獨り言のやうに）天罰だア、ね、——親の苦勞も知らねいで！

女房甲　（渠の鍬のあとを見ながら）もツとよくうなつて行きなよ、去年ほど根がつかないと困るぢやア
ねいか？

百姓甲　どうせ年々身入りは減つて行くの、さ。

女房甲　そりやア、畑が段々狹くなりやア、せめて深くでもうなはねいと、さ——

百姓甲　高が芋畑だ！

女房甲　外の物だツて、何ほど出來ようぞ？

百姓甲　…………（正面向きになつて、今度はさくを一つ、向つて右手の方へ、後ろ下がりにうなひ初める。）

女房甲　ちよツくら行つて來なよ。

百姓甲　うるせい！

女房甲　天罰ツても（と、何だか考へてるやうに）——でも、父アんが惡いんだぜ、あんなところに大き
な穴など掘つて、さ——

百姓甲　…………

女房甲　うめて置きなよ。あぶねい。自分の兒に限らねい、誰れでもまた落ツこちるかも知れねいか
ら。

百姓甲　（ますます燒け氣味になつたのが鍬の使ひ方に見えてたが）ええツ！（と、鍬を引き拔いて）もツと深

くしてやれ！（つかつかと畑のおもてを渡つて、向つて右手の三角點の方へ進み角の針がね押さへの横から、の針がねが引ッ張つてる電柱のところまで、舞臺正面に添つて掘れてる長い穴を、一層深く掘り起す。）

女房甲　（半ば呆れ、半ば心配さうにやつて來て、掘れる穴をのぞくやうにして）あの兒が落ッこちたばかりだやアねい――外に誰れかもやつたか知れねいツて！　よしなよ。あぶない。

百姓甲　なアに（と因業な顔つきと口調とを以つて）人の云ふことを聽かねいやつ等ア、みんな足でも手でも挫いてしまふがいい。さ！　ここはおらんとこの借りた地面で、道路ぢやアねい。

女姓甲　でも（と、のツそり渠の横顔を見あげて）やつたかも知れねえ――あぶねい。

百姓甲　（鍬を左りの手に頑固に引ッさげたが、かの女の方は見ないで、心持ち正面を向き）かまうもんか！（向つて左り手の方へ、畑の中を、暗鬱な樣子で一二歩あるく。）

女房甲　（掘れた穴をあぶなツかしさうにのぞいて見るやうにして、三角點をまはつて、穴のそとを正面の道へ來て）ちよツくら行つて來なよ。

百姓甲　（かの女が正面前方の道へ來たのに氣が付いて）手前まで這入りやアがつて――道路ぢやアねい！

女房甲　（立ちどまつて、少しきまりが惡さうに）でも、どうせ踏まれてしまうところだ。（から云つてまた後ろの道へもどる。）

百姓甲　踏むやつ等が不埒なんだ！

女房甲　（渠がまたもとのうなひ場所に行かうとするのを見やつて）いいか、ね――腹がへつても？　蟲だに

よ。

百姓甲　考へても見ろ・鐵道が敷けるやうになつて、あッちが（と、右の手で後ろ向きで舞臺右手の方をさし）引裂かれたのが初めで――あすこにも（と、舞臺左り手の方を自分の右手でさし）家が建つ。こッちも（と、顔を正面から自分の左りへ十分に向けて、檜葉の植ゑ込みの方をさして）敷地に取られ。とうとうこの前も（と、正面を顔でしやくつて見せ）こんどまた家になつた。百姓の賴みとする畑を都會攻めにして、おらの命までも今にここから追ッ拂はうとするのアどいつだ・畜生！　この畑のざまを見ろ！（舞臺の中央に正面を向き、左りに持つてた鍬を右に持ち換へると同時に、土の上に置いて、鍬の柄を杖に突き、左右を見まはしながら、餘ほど感に入つた聲で）狹くッても、四角ならまだしもゆとりがあらう――出來そくねいの三角とア、お前――

女房甲　三角だッて――四角だッて――（輕く獨り言のやうに云つたが、多少釣り込まれたかのやうにしほしほと、舞臺左り手の方へ、畑へ觸れないで歩きながら）正直にかせいでゐりやア圓くなつて行かア・ね。

（かの女は舞臺左り手なる前方の隅から起る道路に添つた第一のうねに行くと、奧の方から初めて畑へ這入つて、正面に向つて、第一うねのあたまを跨ぎ、持つて來た籠なる芋の芽を植ゑ初める。電車の過ぎる音。）

百姓甲　……（正面向きに鍬を突いてつッ立つてゐたまま、舞臺向つて右手の奧をきッとふり向いて睨む。）

女房甲　（第一うねを半分ばかりさがつて行つたところから、渠の横向き姿をぢッと見て、芽を持つた手を忘れたやうにして）お前は・けふは、餘ッぽどどうかしてるんだよ――こんなうなひ方ぢやア困るぢやアねい

か？（また下を向いて土くれを手でこわしながら）もツとこまかにしねいぢやア――（一つ、あとずさりをする。）

百姓甲　文明開化とア人のいのちを縮めたり、人の娘を夜這ひさせたりすることけい！

女房甲　（一心に土くれをこわしながら）それでも電車などが出來て、近頃ア便利になつた、さ。

百姓甲　便利過ぎておら達にやア不便だ！

女房甲　お父アんは出て見ないから、さ、ね。

（百姓甲も元のところへ納まつて、不精無精に鍬を續け初める。）

（四）　百姓乙、百姓甲、女房甲

百姓乙　（肥桶をおもさうにかついで、穴のある方に現はれ、穴の外がはを穴の長さの半分ばかり來たところで踏みとまり、百姓甲の方をぢツとおそろしさうに見やつて――これはふとつた顏付きだ）通らして貰ひます。（また進み出

百姓甲　………………（休めた鍬の柄を固く握つて、からだを延ばし、ぢツと乙を憎々しさうに見詰めてゐる。）

女房甲　………………（これも意地惡さうに見詰めて、立ちあがつたが、第二のうねに渡つて、直ぐ奥のうね先きを舞臺に尻を見せて跨ぐ。）

百姓乙　……………（その道を半分以上も來たところで呼びとめられる。）

百姓甲　おい、植木屋！

百姓乙　（踏みとまつて、顔だけをその方へ向けて）おらア何も植木屋ぢやアねい。

百姓甲　百姓が植木屋のやうな手間取りをするのが文明開化けい？

百姓乙　そんな因業なことを云ふな――お互ひにこんな世になつたから、百姓してゐるばかりぢやア喰へねいんぢやアねいか？

百姓甲　そりやア、お前のやうな都會ものにへいへい云つてくやつ等の云ふことだ。

百姓乙　それでなきやア喰へねい、さ――お前のやうに強情でも困るぢやアねいか、あすこにあんな大きな穴を掘つて、さ――？　夜など歩くにあぶなツかしいツて、お屋敷がたでこぼしてゐるぜ。

百姓甲　通るべき道路ぢやアねいんだ！

百姓乙　それが、さ、どんなところだツて、人が通り出しやア仕方がねい。おらの畑などア、大事な眞ン中を突き拔けられたア、な。

百姓甲　お前のやうな、都會ものの世話になるやつ等にやア仕方がないだらうが、おらア都會は怨敵だ！

百姓乙　それでも、あんまり因業だから、お前のわなにお前の娘がかゝつたぢやアねいか？

百姓甲　そんなことアお前の厄介にやアならねい――二度とそこを通るな！

百姓乙　そりやア、然し、無理だぜ。

女房甲　作兵衛さん（と、立ちあがつて、その場に正面へ向きなほり）おらんとこの娘のことを云つたが、

ね、お前んとこの娘のざまを見ろよ――どこへ奉公に行つても、氣儘で勤まらねいからまた歸つて來てるぢやアねいか？

百姓乙　（むツとしたが、わざとおとなしく出て）あれにも困るが、――まア、あの穴を埋めて置くがいゝぜ、功德にならア。

女房甲　うちのことなど云つて貰はねいでもいゝ！

百姓甲　二度と通るな！

百姓乙　…………

（乙はあとをかまはないで、舞臺向って左りの方へ這入る。あとの二人は暫らくその方を見詰める。）

（五）　女房甲、百姓甲

女房甲　なんていめイましいぢゞイだらう？

百姓甲　今度通つたら、ぶんなぐつてやるがいゝ。

女房甲　人の娘のことばかり云やアがつて、あいつのうちのアどうだ――ざまだけでも見やアがるがいゝさ。――でも、ほんとにお前、ちよツくら行つて來ねいでもいゝかよ？

百姓甲　かまうもんか！

（二人はまた仕事にかかる。）

（六）　通行人若い細君風、老母、百姓乙、甲、女房甲

細君風　（若い作り、舞臺奥から、向つて左り手前方への道路を、老母のさきに立つて、ちよこちよこと出て來て、百姓乙のあとを呼ぶ。）作兵衞さん――作兵衞さん！

百姓乙　（また同じ樣子で出て來て）へい、今日は。（舞臺向つて左り手の三角點のところに立つ。）

細君風　（奥からの道にゐて）今出て行くところで、見えたから呼んだのだが、ね、娘さんの奉公口は――聽いてあげたが――駄目ですとよ。

百姓乙　さうですかい？

細君風　折角いゝとこだと思つて聽いてあげたんだが、ね、あの兒なら、氣まゝでどうせお尻が落ちつきツこがないツて、ほかさまへもよく分つてるが、ね――そんな兒ぢやア仕やうがないぢやアないか、よく云つて聽かさないぢやア？

百姓乙　へい――あれにも困つてをりますので――

細君風　よく云つて聽かせておやりよ、本人の爲めにもなるまいから――誰れだツて、そんなぢやア使ひ手はない、わ、ね。

百姓乙　へい――

老母　（横柄に）ほんとに、本人の爲めにやアならないよ、よく云つて聽かさないぢやア。

百姓乙　へい――

百姓甲　（いい氣味だと云ふやうに、女房甲と共に、じろじろと見てゐたのが、獨り言のやうに）ざまア見ろ！

細君風　（ちよツとその方へ氣を向けてから）それに、あの、うちの垣根はいつ直して吳れるんです、ね、旦那がぶつぶつ云つて困るぢやアないか、ね？

百姓乙　へい、きのふ、けふ、少し茄子苗の方でいそがしう御座いますので――

老　母　早くしないと、いけないよ。

百姓乙　へい。

女房甲　ほんとに、植木屋か庭造りさんだア、ね。

細君風　ぢやア、賴みますよ。

老　母　あの兒にも云つてお聽かせよ――今どき、そんな氣まゝぢやア人の信用が置けないわ、ね。

（細君と老母とは前方の道へ出る。百姓乙はもとの通り退場。）

（七）　老母、細君風（百姓甲、女房甲）

老　母　（先きに立つて行く細君風に）實に、あんな兒だとは思はなかつたが、ね――ちよツと見るといい兒だが――

細君風　（穴のところまで來て、のぞき込みながら）おツ母さん、また深く堀りましたよ。（斯う云つて百姓甲の方を見る。）

老　母　（も、そのそばへ行つてから、のぞきながら百姓甲に當て付けるやうに）ほんとに、ひどいんだ、ね――村役場の方で時々見まはりに來ないからいけない。誰れが落ツこちないとも限らないのに！

細君風　思ひやりのないものがあるからいけないのだ、わ。

老　母　さうだとも、ね。

（ちよツとまた二人は百姓の方を見る。百姓甲も、女房甲も、段々、向つて右の方へ仕事を寄せて來てゐた。細君風、續いて老母、退場。）

（八）　百姓甲、女房甲

百姓甲　（二人退場の方を苦々しさうに見てから、獨り言のやうに）自分の娘がちんばになりやア、もう、これ以上どうしたツてこツちに罪ア來るもんか？

女房甲　あんないゝ奥さんを持つて全體、あの旦那はどうしたと云ふんだらう――百姓の娘なんかに手を付けて？

百姓甲　（女房の言葉には頓着せずに）おらア喰へなくなつたら、東京中を焼き拂つてやらア！

女房甲　金にしてやんなよ――今のうちに――もう、いよいよ片輪になりやア、あの兒も嫁にやア行けねいや、な、可哀想に！

（九）　女房乙、百姓甲、女房甲

女房乙　（でつぷり肥えた方、籠に茄子の苗を入れて、それをかかへながら、穴のある三角點に現はれて）通して貰ひます。

（この時、また電車の響きがする。）

百姓甲　（響きの方を蹴んでからだを延ばした勢ひが、女房乙に對する荒々しい返事になつて――もう、穴のある三角點の近くを前向きにうなつてゐた）通ることは無用だ！

女房乙　（穴の長さ以上に歩いて來たのが、踏みとまつて）さうか、ね――

女房甲　（後ろ向きのままその方を見て）まごまごしねいで、まはんなよ！

女房乙　（あと戻りしながら）今まで便利に通して貰つたのに、な。お竹さんが落ち込んだのがいけなけりやア、穴を埋めたらいいぢやアねいか、ね――わけもねいこツたのに、な。

女房甲　大きにお世話だ！

百姓甲　道路ぢやアねいんだ！

女房乙　（三角點から曲つて、舞臺向つて左り手の奥へ通ずる道を、怒つた樣子でつかつか歩み行きながら）通して呉れたツてよからうに、な――

女房甲　（後ろ向になつてたので、直ぐ女房乙の方へ目をやつて）通さうが、通すまいが、こツちの借りてる地面なら、こツちの勝手だ。――お前んとこのお初は、な、氣ままで奉公が出來ねいほど結構なお姫樣だとよ。

女房乙　それこそ、大きにお世話だ――まだ片輪などにやアならねいから、な！

女房甲　さぞ立派な奥さまにお成りなさらう――あのお顏で、な。

女房乙　お前んとこのは何だ――おかめとひよツとことを突きまぜたやうで？

百姓甲　（前向きに鍬を使つてるまま、自分の右から顏だけちよツとその方へふり向けて）畜生！　とツとと行きやアがれ！　おかめでもひよツとこでも、な、手前等のやうに都會ものの世話にやアならねいんだ！

女房甲　さう、さ、ね、馬鹿！

（またうつ向きになつて、芽を植ゑながら、舞臺の前方へあとずさり。）

女房乙　（奥の三角點から舞臺向つて左り手の前方へ道をまはつて來ながら）へん、斯う通つてゐりやア、何とも云へめい、さ――菱餅のやうな畑など通して貰はねいでも。

百姓甲　かちやりと云つたと思つたら、おい（と、女房甲に向ひ、左りの手は鍬に着け、そして右の手に拾つた物を見せながら）こんな石があつたぞ。

女房甲　（返り見はしないで）また通りすがりの子供でも投げてツたのだらうよ。

（電車の音。）

百姓甲　また來やアがつた、な！　（石を持つた手を擧げる。）

女房乙　…………（わざと横を向いて舞臺向つて左り手の前方まで出た時、渠の突差の叫びを聽いたので、自分に向つて發せられたのだと思ひ込んだやうに、浸場眞ぎはを驅け出しながら、渠の方を見る。）

百姓甲　えい！　（聲にも右の手にも力を入れて、正面から、舞臺向つて右手の方へ石を投げる。女房乙、浸場）

（一〇）　女房甲、百姓甲

女房甲　（後ろ向きだが、顏を心配さうに百姓甲の方へ向けて）　お前・電車に石を投げたんぢやアねいか・ね？

百姓甲　（前向きに鍬を働かせながら）　投げたくもならア、な。

女房甲　でも、罰金（ばつきん）どころぢやアねいと云ふぜ。

百姓甲　（輕く）　誰れが知つてるもんか？

女房甲　でも、ね――（なほ心配さうに）

百姓甲　………………

（渠は無言で、さア濟んだと云はぬばかりに、自分のそばの三角點の向ふ側の道に出て、女房甲のまだ植ゑ殘りの分を急いでるのを見ながら、鍬を立てたその上に自分の兩手を置いて、からだをずツと延ばす。）

女房甲　（植ゑ付けを急ぎながら）　わしも直ぐ濟ませるが・な――

百姓甲　（ふと思ひ出したやうに、立てた鍬を離れて三角點のそのさきへ行き、土堤下の線路をのぞいてることなしでぎツくりしたが、何氣ない振りをして、鍬の立つところまで來て）　電車が・と・とまつてらア。

（聲が顫えてゐる。）

女房甲　え！　當つたんぢやアねいか・ね？　（心配さうに渠の顏を見る。）

百姓甲　（わざと落ち付いて）當つたツて・かまふもんか・誰れのせいとも分らねい以上は？

女房甲　さうかも知れねいが――（また植ゑ付けをしながら）　道理で何だか胸騷ぎがしてイたんだらう。

ゆふべから日が悪いのか、あの兒はおほ怪我をするし。お前はうなひ方がうまく行かねいし。わしまでも亦あんなかみさん等と喧嘩をするし。まさか、辛しの交ぜツこをしてイるんぢやアあるめいし。さ、この芋ばたけもどうせ碌なことアねいぜ。二度あることア三度あると云ふし、な。

百姓甲　（鍬を肩にかけて、少しからだを豫期の恐怖に顫はせながら、その道を向つて左りの方へ進んで、女房の植ゑ付けたあとを見まはりながら）人間は、どうせ、病氣でなけりやア、喰へねいで死ぬんだ！

女房甲　（手をちよツと休めて、渠の方を向き――この時は、かの女のからだは前向きにしやがんでゐる）またいつもの燒けくそになつて、さ――しツかりかせがねいと、あの兒にも可哀さうぢやアねいか、ね？

百姓甲　なアに（と、意地惡くまた憤慨の樣子で、奥の三角點を反對の道路に曲つて、前方に歩きながら）あいつまでが都會くさくなりやアがつて――とうとうおらの心までも三角畑にしやアがつたんだ！

女房甲　三角だツて、四角だツて――（また一心に手を働かせる。）

百姓甲　（向つて左り手の道路の長さの眞ン中ごろに立ちどまつて、肩から鍬をおろし、それを杖について、女房の方へ）去年は立派な屋敷の奥さんが女中と一緒に、あの多吉の畑を掘つて、赤い芋を盗んだことがあつた。ことしやア今からおら達の娘が掘り返された。都會ものと云やア、まるで、泥棒か色事師だ。

女房甲　だから、今のうちに金にしておやりよ――どうせ、折れた芽は二度と物にやアなるまいから。

百姓甲　（鍬の上に兩手を乘せたまま、からだをゆすつて）ああ、もう、燒けだ――おらア世の中がいやに

なつた！（少し間を置いて、半ば獨り言のやうに）金(かね)があつたツて、百姓が圓くなり四角なりに落ち付けるところがあるけい？

女房甲　わしもやツと濟ませたが、な――（とツ先きの三角點外で、明き籠の中をはたき落し、兩手をもはたいてから、立ち上つた。）

百姓甲　（かの女の立てるところまでを自分の方から見渡して）何だツて、お天道さんはおらの畑をこんなに三角がたに縮めて來たんだ？

女房甲　でも、けふは照らず降らずで結構だア、ね。

（かの女もちよツと、渠がしたやうに道路の方をのぞいて見たが、びツくり、あわててふり返り、舞臺前方の道を畑に觸れないやうに、眞ン中ごろまで小走りにやつて來て）今の奥さんがハンケチで繃帶をしてやつて來るが、ね――

百姓甲　…………（更らにぎツくりして、暗欝と忿怒と恐怖との混亂。）

女房甲　（云つて聽かせるやうに、そして腰を曲げて顏だけを渠の方へ突き出し）默つて、ね――感づかれちやアいけねいよ。

（かの女はもとの三角點をまはつて、奥へ通る道路の端へ立つ。）

（一一）　老母、細君風（百姓甲、女房甲）

老　母　（先きになつて、細君風の左りの手を引いて、女房甲の顏を睨みつけるやうにして出て來て）またあぶな

いよ――例の落し穴だから、ね。

細君風　（白のハンケチをつないだので頭を額の方まで繃帶してゐるが、なほその額を繃帶の上から右の手で抑さへて、引かれながら）はい。

老　母　電車に石を投げたりして、さ――どいつだか大抵分つてる、わ、ね！

細君風　（いたさうな樣子だが、氣のないやうな聲で）さうですとも！

（百姓と女房とは、兩方につツ立つたまゝ、靑ざめ　、ぢツとその方を見詰めてゐる。）

老　母　（舞臺向つて左りの方を見て、氣がついたやうに）あ、巡査が來るよ――直ぐ云つて置かうよ。

細君風　…………

（この兩人はその方へ退場して行く。百姓夫婦はどうしようと云ふやうに、畑を隔てて、顏を兩方から見合はせる。）

（一二）　女房甲、百姓甲

女房甲　（聲に顫えを帶びて）　いい氣味だが、な――

百姓甲　（これはまた一しほおぢけづいてるが、わざとにも强さうに）　天罰覿面だア、ね――あいつの淫亂亭主の罪が報つて、おらの娘のかたきがひよツくら取れたやうなものだ、わ！

女房甲　でも、巡査が來たら、どうする？

百姓甲　（舞臺向つて左りの方を見込んで）へん、畜生！　（少しゆツくりした口調で女房の方へ向き直つて）おら

が投げたとアきまつてねいや。

（一三）　老母、巡査、女房甲、百姓甲、女房乙、細君、百姓乙

老母　（今退場した方から、細君風の手をもとの通り引いて、他のもの等の先きに立つて出て來て、遊んでゐる左りの方の手で穴の方をゆび指しながら）兎に角、あのやうな穴が明けてあるのですから、ね。

巡査　（おほ股に歩き拔けて、前方の道を一杯に進み行き、穴をのぞきながら）成る程、大きなやつを明けたものだ。

女房甲　……………（青くなつてたが、巡査の目の落ちるところへ、自分のも落してゐる。）

巡査　（かの女に）これはお前とこの亭主が掘つたのか？

女房甲　（おづおづして）へい。

百姓甲……………（向ふの方で、舞臺へ後ろ向きて、巡査のゐる方とは反對に顏を横向きにしてゐる。）

巡査　不都合なやつだ！

女房甲　でも、うちの畑を通られて困りますので――

巡査　然し、今聽くと、お前とこの娘がゆふべ落ちておほ怪我をしたといふぢやアないか？

女房甲　へい――

巡査　こら、鶴松！

百姓甲　……………（その聲の方へちよツと振り向いたのが、自分の方へ巡査がまはつて來かかつたのを見て、立て

た鍬を置き去りに、あわてて奥へ逃げ出さうとした。)

巡　査　こら、待て！

百姓甲　へい。(おづおづ答へて、踏みとまる。)

女房甲　(巡査が畝を踏みたくつて行くのを見て)今植ゑつけたところでございますが、な。

巡　査　(百姓のおづおづ立つてる道へ出てから、渠に)貴様は今何をした？

百姓甲　(少し返答にまごついてから)芋の植ゑつけをしてをりました。

巡　査　そのあひだに電車に石を投げただらう――？

百姓甲　(白ばツくれて)いえ、そんなことは致しません。

女房乙　(これもこの前から百姓乙と共に出て老母並に細君風の後ろにゐたのだが、この時巡査のあとに驅けて行つて百姓甲に)わしが今見たんだよ。

巡　査　ふといやつだ！(一つ横ツつらを喰らはせてから)こツちへ來い！(と、肩のところをつかまへて、引ツ張る。)

百姓甲　………………(からだは引ツ張られても、腹には少なからず反抗のおもみがある様子。)

巡　査　こツちへ來い！(またぐいと引ツ張る。)

百姓甲　………………(引ツ張られながら、踏みこたへる。)

巡　査　來い！

（引く、こたへる、この兩勢の中心がそれて、巡査が先づ畑の中へ踏み入つたが、百姓甲も一二步踏み込んだのが最後の燒けッ腹になる初めで、巡査の力を一二步引き戻して、もとのまゝに立つてる鍬の柄の中ほどを右の手に攫むと、また巡査の方へ引ッ張られる。）

百姓甲　…………

巡　査　來い！

（いよいよ二人とも畑の中へおのづから踏み込んだことになる。）

女房甲　（穴のある三角點を前方の道へまはつて來て、顏に怒りを帶び）なんぼおまはりさんだつて人の畑を踏みくちやにして、さ――（少しおだやかな口調になつて）うちのア電車に投げたんぢやア御座いません。

巡　査　（かの女に）現に、あの方の（と、細君風のゐる方を見せて）顏に當つたぢやアないか？

女房甲　どこかの子供でも――

巡　査　馬鹿を云へ！

女房乙　（奧から舞臺向つて左り前方への道から、半ば獨り言らしく）それこそ子供のやうなうそを云つてらア！

巡　査　（百姓甲に向き直り）貴樣はもとからこゝいらの注意人物だ。一度は引き上げられるにきまつてたのだ。

百姓甲　なんだと！（いよいよ暗鬱な不平家の本性を顯はして、鍬をしツかりと握つて）警察までも、もう、都會もの等の氣ままや淫亂を手つだふまわしものけい？

巡　査　何を――無禮な！（とツつかまへようとする。）

百姓甲　えい――どけ、どけ！

（渠は鍬を兩手に握つて、巡査の足もとを拂はうとしたので、巡査は二三歩とび退く。）

老　母　（もとの場所に立つて見てゐたのが、細君風に）おそろしい男だ、ねえ。

細君風　（手を取られてゐるまで）さやうです、ね。

女房甲　お父アん、手荒いことはしなさんなよ。

百姓甲　おらア、もう、覺悟だ――この畑までこんなに荒されるほどなら、いツそのこと、自分でみんな荒してやらア！

女房甲　そんな無茶苦茶云つたツて――

百姓甲　なアに、かまうもんか！　ええツ――ええツ！　うん――うん！（と鍬を左右にかたみがはりに振つてらなりがら、畑のおもてを荒し崩す。）

女房甲　父アん！（飛び込んで行つて、中央に荒れる渠の、向つて右の方から、とめようとする。）

百姓乙　（かの女とは反對の方から、これも飛び込んで行つて、あまり惜しいと云ふやうな風で）おい、あんまりむごいことはすなよ――あんまり。芋畑に罪アねい、わ、な。（とめようとする。）

老　母　（段々おち氣づいて來たやうに）まるで氣違ひだ！
細君風　（聲が顫えて）さう、ね。
女房甲　父アん！（思ひ切つてとめようとして、鍬で足をすくはれる。）あ、いてい！（倒れる。）
百姓乙　あぶねいぢやアねいか？（思はず、とめに飛び込んで行く。）
百姓甲　この密告め！（鍬をあげ百姓乙の胴ッ腹をなぐり付ける。）
百姓乙　いてい！（倒れる。）
女房乙　なにしやがるんだ、うちのを？（畑にとび込んでから、途中にまごつく。）
百姓甲　（百姓乙をぢッと瞰みつけて）おらの事を密告させやアがつて！いッその事、なぜ娘の夜這ひの密告をしねい？
細君風　行きましよう。
老　母　あぶないから、ね。
巡　査　久原さん、ちよツと待つてゐて下さい。（と、最後の二人が退場しかけるのをとめる。）
老母、細君風………………（共に默つてだが、顏を見合はせながら、迷惑さうに、また氣味が惡さうに踏みとまる。）
巡　査　鶴松！　貴樣は電車妨害、官吏に抵抗、人身傷害、二重にも三重にもの犯罪者だぞ！
百姓甲　（巡査をまた瞰み付けて目は燃えてゐる）それでも、な、おらア都會もののやうにやア人の畑にも踏ん込まぬ！　人の娘を無斷で盜みもせぬ！　あの繃帶をしたかみさんの（と、細君風の方を注意させ

て）亭主なんかを見ろ――おらの娘を無断で呼び出しやがつて、毎晩、あの廣ツぱで（と、舞臺へ向つて左り手の前方を見やつて）自由にしやアがつてたぢやアねいか？

女房乙　お前んとこのア締りがねいんだ――それであの穴へ落ツこちやアがつて！

百姓甲　（それに頓着せず）その天罰がとうとうかみさんに報つて、あのざまア見ろ！

巡　査　そりやア、人の娘を無断で呼び出すのもよくないが――まア、その鍬を置け。

細君風　…………（突然、泣き崩れかける。）

老　母　（細君風に向つておもおもしく）何を泣きます？

細君風　…………（なほ默つてだが、姿勢を直す。）

老　母　（かの女を引いた手を放して、少し前へ出て巡査に）うちの主人にそんなみだらなことは、家名に誓つて、御座いません。

百姓甲　（今度はその方を睨みつけて）何も知らねいで、畜生！それがみんな都會もののうそだぞ！

巡　査　（も渠の勢ひをおそろしがつてるやうだが、聲だけは命令的に）まア、鍬を置け。

女房甲　（足が痛む樣子で、半身を起し）おまはりさん、娘の手つけ料をあのかみさんに貰つて呉んねいぢやア、とてもあの兒とわしの療治代は出ません。

女房乙　（少し進んで）それよりやア。うちの人は死んでゐるのか――生きてるのか？

百姓甲　どうでもいいや！

女房乙　………………（渠ににらまれて、またあとずさりをする。そして遠くから）お父アん！　お父アん！

百姓乙　（倒れたまま、うなる）ううん――とても、助かるめい。

女房乙　ええツ！　（びツくり。）

老　母　（今少し進み出て、愛相笑ひをしながら、巡査に）念の爲めにあなたに申し上げて置きたう御座いますが、ね、うちの主人に於いては決して――

巡　査　（おもおもしげに）いや、お宅の御主人はその點では評判がよくないのが、警察にも知れてゐます。

老　母　でも、そんなことは――

巡　査　ぢやア、此間、神社の森で探偵に見つかつたのはどこの御主人です？

老　母　………………（ぎツくりして、一二歩あとずさり。）

細君風　わツ――（と、こらへ切れないで泣き出す。）

百姓甲　………………（ぢツとその方を横向きに見つめてゐたのが、正面を向いて、暗欝な顏でにツたりと笑ふ。）

女房乙　父アん、しツかりしなよ。

百姓乙　………………（返事をしない。）

女房甲　お前、人を殺して濟みますかい？

百姓甲　人の死ぬ、生きるをおらが知つたことけい？

巡　査　兎に角、鶴松、鍬を置け。

百姓甲　よく分つた警官に免じて、おらは、もう、あきらめてやる――えい！（と、鍬を力一杯出して後ろの方へ投げる。それから、畑の眞ン中に、正面向きにどッかりあぐらをかいて、あまり氣張らないで）さア、殺すなり、縛るなりして貰はう。この畑の眞ン中で取られりやアおらア本望だ！

巡　査　…………（默って用意の綱を出してほどき初める。）

老　母　（巡査に）では、只今お呼びとめになつたのは――？

巡　査　（かの女に）もう、大抵分りました――いづれ、また改めて――

老　母　左樣で御座いますか？（また愛相笑ひをして、細君風の手を取つたのが、何だか心殘りがする樣子。）

女房乙　うちのをどうして呉れるんだ？

女房甲　ひよんなことになつた、なア！

百姓甲　…………（ちッと下を向いてゐる。）

巡　査　…………（無言で、綱を以って百姓甲に近づく――幕）

――大正四年六月――

勞働會議（一幕）

登場人物

第一の若い男（增田、溫情派的）
第二の若い男
第三の若い男（木村）
第四の若い男（手塚、過激派的）
（第一〜第四の若い男）……孰れも勞働者

第一の若い女（お蝶、第一の男を思ふ）
第二の若い女（お花、無節操）
第三の若い女（無節操）
（第一〜第三の若い女）……孰れも勞働者

第一の四十男（病人）……勞働者の果て
第二の四十男（尺八の名人）……職人風
四十女……女工取締り
群衆（多勢）
巡查（一名）

（ちよツとした森林の明き地。中央に長い腰かけが二つ置いてあり。その前面の左右には、腰かけとなる石がころがつてゐる。そして後方からは、『諸　場聯台寄附』とあり〳〵と書いてある柱の上に百燭光の電氣が輝

いてゐる。或郊外の工場地に於ける私設公園。）

（時代は現代。）

（時は夏の午後九時頃から。）

一、第一の若い男、第一の若い女

第一の若い男（勞働服を著て、腰かけに在つて少し不平さうにきッとなつて）ぢやア、これほど相談するのに、あなたはいやだと云ふんだ、な？

第一の若い女（これも勞働服、悲しさうにして）いやだと云ふんぢやアありませんけれど――。

第一の若い男　ぢやア、わたしの賴みを聽いて呉れたらいいだらう――？

第一の若い女　だツて――今、申し上げた通りですから。

第一の若い男　おツ母さんの病氣は病氣、さ。あなたが結婚したからツて、ながねんのわづらひがよくなるわけもなからうが、惡くなることもないでしよう。

第一の若い女　そりアさうでしようが、わたしはまだ結婚と云ふことを初めてこないだからあなたに考へさせられたばかりで――

第一の若い男　わたしだツてさうです。あなたならと見込んで初めて結婚して見ようと云ふ氣になりました。あなたが親の腹からの勞働者でない通り、わたしも決して勞働者として生まれて來たものではありません。然し中途半端な學問なんかくその役にも立たぬことを發見し、思ひ切つて直接の

勞働界へ這入つて見ると、わたし位の持つてゐる貧しい學力をでも應用させて吳れる餘地が澤山あります。早い話が今の社會主義をおも立つて唱へてるやつらです。大杉だツて、堺だツて、少しも直接に勞働なんかしてゐないくせに、それが勞働者ぶつて社會主義を唱へる。そんな主義がほんのただ西洋の危險な燒き直しに終はらないですみましようか？　資本家から出た勞働問題が當てにならぬやうに、ほんのただ書物の上から出た社會主義も詰りません。斯う云ふ問題は、もう、今日では工場内で云ひ合つてることですから、あなたも多少はお分りでしようが――わたしは飽くまで勞働者となつて、勞働階級の爲めに、然しまた資本家にも利益になるやうに、力を盡さうと思つてをります。

第一の若い女　（感心した目つきで渠を見ながら）結構なことです、わ。

第一の若い男　それにしても、わたしの結婚慾は別です。あなたが不治の病人をしよつてをられるやうに、わたしはまた病人も同樣の今の社會を――わたしの考へから云へば――男としてしよつてると云つてもいいでしよう。お互ひのことぢやアないか？

第一の若い女　それにしても――わたしは――結婚する以上は、立派に立ち合ひ人があつて――さうですよ、みんなのやうに、お互ひに直ぐ勝手にくツついて直ぐ別れたりしたくないんですから。

第一の若い男　それがあなたの病人と何の關係があらう？　矢ツ張り、いやなんでしよう――よろしい！　（立ち上つて獨り言のやうになり）　ぢやア、何の爲めにおれの云ふ通りここまであひ引きしに來

たのだ？　詰らねい！（しも手、前方へ離れて行きながら）あなたは矢ツ張り資本家とでも結婚したいのでしよう？　勞働者なんかいやなのだ！

第一の若い女（溜らなくなつたやうにして、これも腰かけを離れて行つて）わたしはお花さんやお倉さんのやうなんぢやアないんですから――ね、もう少し待つて頂戴。どうせおツ母さんは長くもないんですから――

（この少し以前から、第一の四十男は杖をついて、しも手から。第二の男と第三の男とは勞働服のまま醉つて、左右から第二の女の肩に手をかけて、かみ手後方から。いづれも無言で登場。）

二、第一の四十男、第二の若い女、第二第三の若い男、第一の若い男

第一の四十男（病人のやうによぼ〱して中央の方へ進みながら）さうだ！　人間は皆死ぬのを待たれてゐるんだ。

第二の若い女（男どもの手から早く離れて、腰かけの後ろまで進み）お花さんやお倉さんのやうぢやアないツて？　へん！　わたしはお花ですよ。あなたはさぞお人がらでしよう・ね、どこかの落ちぶれお孃さまが男とあひ引きしてイて！

第二の若い男　さう、さ。あのお蝶め、おれが口說いたツて相手にもしやアがらんでよ。

第三の若い男　おれにもだぜ――あいつア。

第二の若い女　なか〱お堅いお孃さまにも好きな男はあるのだとよ！

第一の若い女　…………（默つてかみ手前方へ行つて、顏をそらせて泣いて居る。）

第一の若い男　下らねいことアよせ、お花！　手めへよりやアいくらかましだか知れたもんか？

第二の若い女　さうでしようよ、わたしやアおたんちんですから、ね！　お蝶さんよりやア下司な女ですから、ね！

第一の若い男　さう、さ。さう自分が云つてりやア間違ひツこアねいや。（かみ手の石へ行つて腰をかける。）おれだツて、働らくばかりぢやア溜るもんけい？　少しやア樂しみもして見てイや、な。けれども、おめへらのやうに、あれにもこれにもと云ふやうな女はきらひだ。

第二の若い男　なアに、この公園だツて共有だア、な。

第一の若い女　增田さんは自分ばかりを色をとこか何ぞのやうに思つてるんだ、わ。さうしてお蝶さんばかりが色をんなのやうに。（腰かけをかみ手からまわつてそれへかける。）

第二の若い男　（かの女のあとに付いて腰かけの前へ行きながら）さう、さ。さう自分が云つてりやア間違ひツこアねいや。

第三の若い男　何でい、人の眞似ばかりしやアがつて！（かみ手の腰かけをしも手からまわつて前に出る。）

第二の若い男　眞似をするのア手めへの方ぢやアねいか？　おれがお花のあとをついて來りやアおめへもついて來たし、おれが腰かけにかけりやアおめへもまたかけやアがつて！　なア、お花（と云つて、かの女とふざけながら）毎日十二時間も十五時間も働らいて、酒のにほひとをんなのにほひでも

かがないぢやア、この世の中に生き甲斐があるもんかい。こりやア皆おたげひだア。
第二の若い女（こちらからも手を以つてふざけながら）さう、さ、ね。お蝶さんのやうに氣取つてゐたツて、若いときやア二度とア來やアしない、さ。
第三の若い男　なアに、この公園だツて共有だア、な。
第二の若い女　そりやア、さうと、ね、あなたは知つてて――隣りの工場で、きのふか、おととひ、若いをんながひとり殺されたのを？
第二の若い男　そりア耳よりな話だが、な、殺す前におれなら一と晩でも二晩でも可愛がつてやるのに。
第二の若い女　自分で井戸へ身を投げて死んだのだけれど、わけを云つて見りやア、まア、殺されたも同前、さ、ね。
第三の若い男　自殺かい？　女が自殺するくれゐなら、それこそおれがふところに入れて大切にしてやつたのに、な。
第一の若い男　そりやア、ほんたうかい、お花？
第二の若い女（第一の女の方を見ながら）誰れかぢやアあるまいし、うそなんか云ふもんか、ね？
第一の若い女（この時その方をふり向いて）わたしはうそを云つたおぼえなんかありません。
第二の若い女　入らないことをおしやべりするのア、うそも同樣ぢやアないか、ね？

第一の若い男　そんな云ひ合ひどころぢやアねいんだ。早くわけを云つて見ろ。

第一の若い女　…………（また顔をそらせてしまう。）

第二の若い女（第一の男に向き直つて）ひよツとすると、その女がほんとうに泥棒したので申しわけなさに死んでしまつたのかも知れやアしないが、ね——印刷のでき上つたおかねを盜んだと女工の取締りから云はれたのださうよ。さうしてはだかにされてしらべられたの、さ。

第二の若い男　そりやアおもしろい！

第三の若い男　もちろん、氣の利いた取り締りが、畜生！　いたづらツけを起したのだらうが——そんなことをしねいだツて、物をまたがせさへすりやア——

第二の若い女　それが、さ、金貨や銀貨なら、さうすりやア落ちるにきまつてるだらうが、紙幣と來ちやア、さうは行かなかつたらう、さ。

第二
第三の若い男　わツはツは！

第一の若い男　下らねいことアよせ！　一體そのかねがその女から出たのか？

第二の若い女　それは知らない、わ——あの顔、增田さんはわたしでも取つたかと思つてるんだ、わ！

第一の若い男　おめへたちやア獨りのむく無罪の娘が死んだのだとア思はねいか？

第二の若い男　今どきの娘に、そんなことア分るもんかい？

第一の若い男　無謀にもそんな恥かしめを受けて——？

第三の若い男　夫婦喧嘩にだツて、然し、井戸へはまつて死んでしまうものアあるから、な。
第一の若い男　馬鹿野郎！
第一の四十男　（この前からしも手の腰かけにゐたのだが、苦しさうな息をしながら）死なせりやアまだしも結構だ——死なせないで困るものがある。
第一の若い男　勞働者に對してこんな虐待をこの會議が問題にしねいでどうするんだ？
第二の若い女　遠慮なく問題におしよ。その代り、その前にわたしたちやアもツとらくになりたい、ね——お前さんたちの氣取つて云ふ生活を、さ。
第二の若い男　それにやア、かねと女を共有するんだ。
第三の若い男　矢ツ張り公娼にかい？
第一の若い男　へたな洒落なんかよせ！——————、共有にしていいものもあらうが、惡いものも澤山あらア。
第二の若い男　でい一、増田にやアお蝶の共有はいやだらう。
第一の若い男　默れ！　おれにやアまだ約束もできてゐねいんだ——病人がある爲めに。
第二の若い男　おやア、病人がなくなりやア、おれたちにも許すのかい？
第一の四十男　さうだ、人間は誰れかの死ぬのを待つてゐるもんだ。
第三の若い男　緣喜でもねいことア云ふな、そこの病人！　けれど、おれたちが他人の死ぬのを待つ

てると云やアほかでもねい、資本家どもだらう。さうだ・おれたちやア過激派でもいいんだ。——生活が今よりやア惡くなりツこアねいから、な。

第一の若い男　馬鹿云へ！　ぶち毀わしになつてたまるもんかい？　資本家をぶツ倒せア勞働者も一緒にとも倒れだぞ。おれたちやアよくならうとしてゐるんだ。資本家を倒してしまうのぢやアねい、勞働者も段々資本家の仲間入りをしようと云ふんだ。

第二の若い男　ぢやア・どうしたら仲間入りができると云ふんだ？

第一の若い男　働らくの、さ。なまけないで働らくの、さ。

第三の若い男　少しおれの方へも來いよ（と云つて、第二の女をその右から引ツ張つて自分の方へ向かせる。）

第二の若い男　馬鹿々々しい！　これよりも働かせられて溜るもんかい？　さうしておれたちの取る賃金を考へて見ろ——一時間の六錢から十錢が日に十時間で六十錢から一圓、一ケ月で十八圓から三十圓。夜業を五時間づつ續けたツて、これに月々たツた九圓から十五圓しか附かないぢやアねいか？

第二の若い女　をんなぢやアそれがもツと少くツて、一時間に四錢から八錢、日に十時間で四十錢から八十錢、一ケ月で十二圓から二十四圓。夜業を五時間づつ續けたツて、たツた六圓から十二圓しか増さないぢやアないの？

第一の若い男　だから・働らくのだ。

第三の若い男　よせ、下だらねい！　これ以上十八時間も二十時間も働らかせられちやア、眠る時間もなくならア。

第一の若い男　だから、働らくのだ――おめへらの考へとア反對に、十五時間が十二時間ですむやうに、十二時間が八時間ですむやうに！

第二の若い女　をかしいぢやアありませんか？

第二の若い男　それぢやア賃金がへるばかりぢやアねいか？

第一の若い男　分らねいやつだ、なア――一時間の働らきの中身と分量とがそれだけ多くなるんだから、時間はへつても、それだけ一時間の賃金が增して來るんだ。

第三の若い男　そんなことが今の强慾な資本家どもにできるもんか？

第二の若い男　自分らばかりが利益の配當を出たら目にしたたかじやアがつて、資本家と勞働者とア主從の關係だなんて！

第一の若い男　それでもいいぢやアないか、若し資本家がおだやかによく分つて來りやア？　今ぢやア勞働者もまだ勞働者として本氣に働らいてゐねいんだ。だから、勞働者がもツと本氣に働らき出して、而も資本家が分らなけりやア、そのときやアおれだツて蠻勇を振ふかも知れないんだ。

第二の若い男　そのつもりなら、おれも贊成だア。――まア、おれの方へ來てゐなよ（と云つて、第二の女をまた引き寄せる。）

第二の若い女　わたしも賛成だ、わ。

第三の若い男　おれも賛成だい！

第一の四十男　然し、働けなくなつては、どうして呉れます？

第一の若い男　おれは資本家ぢやアねいから、そんなことにやア答へることアできねいが――一體、おめへさんはどこから來たんだ？

第二の若い女　あの人はさツきから變なことばかり云つてるよ。

第一の四十男　まづ、どなたでも少し水を飲ませて下さい。息切れがして話ができません。（皆、きッとなつて、四十男の方へふり向く。）

第一の若い男　ぢやア、水を――お蝶さん。

第一の若い女　わたし、貰つて來ます、わ。（前面をかみ手からしも手へ少し急いで行く。）

第二の若い女　（第一の女をじッと見送りつつ）あの人にばかり『さん』づけをして――お孃さまですから、ね。

第三の若い男　わたし貰つて來ます、わ！（と、そのこわ色をつかつて、また第二の女を自分の方へ引き寄せる。）

第一の若い女　…………（默つてしも手へ退場。同時に、第三の若い女驅け出して登場。）

三、第三、第二の若い女、第二、第一、第三の若い男、第一の四十男

第三の若い女　わたしの人をどうしてんだ、この尼！　（一直線に第二の女へ行つて、むしやぶり付く。）

第二の若い女　（ふり切つて立ち上り）木村さんが何もあなたの人とアきまつてゐやしないよ。

第三の若い女　きまつてゐます！　憚りながら約束までしてきまつてます！

第二の若い女　わたしも、憚りながらだい！

第二の若い男　ぢやア、畜生！　おれもおめへを承知できねいぞ！　（立ち上つて、いきなり、第二の女をこづきまわす。）

第二の若い女　もう、斯うなつちやア、野暮を云ふのアおよしよ――それこそお互ひのこツたから……

第二の若い男　よし、畜生！　（第二の女を睨み付けてから、第三のに向ひ）おめへはどの工場の女[illegible]！

（第二の男の手をふり切る。）

ねいが、今度アおれに來い。

第三の若い女　行きますとも！　（第二の男に肩を引き寄せられながら、第三の男を見つめて）あんな助平なんか惜しいもんか？

第一の若い男　（横を向いて）これも共有のお互ひツこかい？

第三の若い男　（第二の女を引き寄せて矢ツ張り腰をかけてゐながら）おりやアどいつだツて一匹、女のにほひがしてイるのを取ツつかまへてやりやアいいんだ。

第一の四十男　（半ば獨り言のやうに）病氣になつてないだけでもまし、さ。

第一の若い女の聲　（しも手から）增田さん、增田さん、早く行つてあげて下さい、喧嘩のやうですから！

第一の若い男　喧嘩？　（直ぐ立ち上る。）

第二の若い男
第三の若い男　待つてた！　待つてた！

（四十男を除いては、第一の男が驅け出したあとから、第二の男は第三の女と、第三の男は第二の女と手を取り、肩を押さへ合つて、しも手へ退場。四十男は見棄てられたてい。）

四、第二の四十男、第一の若い女、第一の四十男

（第一の若い女はしも手から、水を入れたコップを持つて。第二の四十男はかみ手から、職人の腹がけ、絆纏すがた、尺八を手にして。いづれも同時に登場。）

第二の四十男　………………（物を云はないでかみ手腰かけのそのかみ手のはじに腰をおろすと直ぐ、人のゐる方とは反對に向いて『鶴の巣ごもり』を吹き初める。その調子、わざと高くなく、然し低いところに何か物を云つてるやうに。）

第一の若い女　（水をこぼさないやうに歩いて行きながら、尺八が少し鳴り出してから）さア、水を持つて來てあげましたよ。

第一の四十男　ありがたう。（受け取つてぐツと飲みほしてから）つべたい水の勢ひで話をしようと思つたのに、みなどこかへ行つてしまつて――

第一の若い女　おツつけ、また集まつて來ましようよ。
第一の四十男　さうでしようか、な？（ふと尺八の方へ氣を取られて、暫らく聽きほれてゐる。それから、第二の四十男に向つて）おう、キ、君も子どもをどうかしたんぢやアありませんか？
第二の四十男（尺八をやめて、その方へ向ひ）僕は娘とふたりツ切りであつたが、その娘が井戸へ身を投げて死んで、なア――。
第一の四十男　そりやア紙幣を泥棒したと云ふ無實の罪を着せられた子ぢやアねいか、ね？
第二の四十男　どうして――それを？
第一の四十男　なアに、今、ここで皆がそのうわさをしたのを聽いてたんだが――
第二の四十男　ぢやア、もう、分つてゐようが、な、その爲めにおりやアやる瀨ねい思ひを諦らめて、この好きな尺八で死んだ娘の供養をしてやつてらア、な。
第一の四十男　成るほど！
第二の四十男　尺八ぢやア弟子も多く持つてゐて、この界隈で僕に及ぶものアねいんだが、うちで吹きやア思ひ出が多い爲めか、あんまり滅入つちまうんで、な、仕事の手があくとア、斯うしてそとを吹き步いてるんだ――が、どうしてまた君がそれを云ひ當てたんだか？
第一の四十男　それは一體何と云ふ曲であつたのだか？
第二の四十男『鶴の巢ごもり』と云つて、な、鶴が子どもを育てる心持ちを吹ツ込んであるんださう

で――そのまだちよツと初めのところをやつたんだが――。
第一の四十男　不思議と云やア不思議なもんだ。な。僕にやアそんなことは少しも分らなかつたけれど、何となく君が子どもを悲しんでるやうに聽えたので――と云ふのは、實は、僕も今自分の娘を可哀さうでたまらないんだ。
第二の四十男　へい！　そりやアまた？
第一の四十男　まア、聽いて貰ひたい。君のは死んだからまだしも結構だらうが、な、僕の娘は死に切れないで困つてるんだ。これも勞働の結果だ。人間が生きる爲めにする勞働ぢやアないか？　それが斯う人間を殺すやうぢやア――！　僕も勞働者だが、勞働の爲めにこの通り心臟病にかかると、もう役に立たないと云つて、やとひぬしは僕を棄ててしまつた。娘も同じやうなわけで、これは肺病でそのいのちが旦夕に迫つてる。斯うなると、たよりになるものア神ほとけのほかにやアない。まだ足の利く僕の方が初めのうちは可哀さうな娘だけは助けて貰ふやうに毎日神さまへ參詣して祈願を込めてゐた。が、どうしても直らぬ！（いつのまにかうるみ聲になつてゐる。）
第一の若い女　………………（默つてたが、しも手腰かけのしも手のはじに手をかけて聽いてたのが、涙をふいてゐる。）
第二の四十男　それでも、死んでしまつちやアかた無しだから、な。
第一の四十男　いや、早く死んだ方が本人に取つてもどれだけましだか？　――娘はそれを知つて、却つて恨んだ。この苦しみから早くのがれさせて貰ひたい。神さまへも祈るなら、いつそのこと早

く息を引き取るやうに祈つて吳れいッて！

第二の四十男　尤もだ！

第一の若い女　わたしのおッ母さんも病み付いてますので同情します、わ。

第一の四十男　さうだ。お前さんもさツきそんなことを云つてた、な――僕はとう〳〵法度(はつと)がないもんなら、娘を殺す方が人情だと思ひ出した。さうかと云つて、まさか、殺しもできねいんで、この頃ぢやア僕は早くわが娘の息が絕えるやう――これはちよツと聽くと、不人情に見えようが――神さまにさう祈つてるんだ。

第二の四十男　實に、尤もだ。それに比べりやアおれの方のアまだ思ひ切りがらくだ――突然のできごとで突然に死んだんだから。（また尺八のつづきを吹き初める。）

第一の四十男　如何にもさうありていもんだが――その勞働の爲めに病氣になつたり、死んだりする家族のあはれさに就いて、少しそれをこの會議とかでみんなに聽いて貰ひたいんだ。

第一の若い女　ほんたうに詰りません、わ、ね――あなたがたも安い日給で働らいて、病氣になつて直ぐ棄てられるばかりぢやア。

第一の四十男　一體、この勞働會議と云ふのアどう云ふ趣向だか？　一つの工場でまじめに働らいてたものがその爲めに病氣になつて働らけなくなつたら、養老金なり何なりを貰へると云ふやうな話にして貰ひていもんだが、な――これは自分ばかりの爲めぢやアねい、勞働者と云ふ勞働者のすべ

ての爲めだが――

第二の四十男　（尺八をやめて）なアに、そんなまじめなことを相談するんぢやアねいやうだぜ。巴里の媾和問題中の萬國勞働會議になぞらへて、ただ遊び半分に寄り合ひをしてゐるんで――云はば、まじめのときやア喧嘩で、冗談のときやア若い男と女のあひ引きだア。

第一の若い女　…………（前方からしも手へ向いて、少しきまりの惡いやうすをする。）

第一の四十男　それぢやア馬鹿々々しいぢやアねいか？　僕はまたまじめな會議かと思つて、この苦しい息切れを辛抱（しんばう）してわざ〳〵遠方から出て來たんだが――

第二の四十男　どうせ今どきのやうな世の中ぢやア、かねのねいものが何と頑張つても駄目だア、た〻諦らめるより仕かたがねい、さ。（また尺八をつづける。）

第一の四十男　それもさうかも知れねいが――考へて見ると、娘を殺すのア如何にも殘念で、なア。

（しも手より、ばた〳〵と、もとの人々が戻つて來る。その間に、第四の若い男勞働服を着て、これも勞働服の四十女を尺八で以つて追ひ立てて出る。そのあとからまた多くの男女の勞働的群衆が從ふ。第二の四十男は尺八をやめる。第一の若い女はかみ手の方へ逃げる。）

五、第一の若い女、第一、第二、第三の若い男、第二、第三の女、第四の男、四十女、第二、第一の四十男

第一の若い女　（かみ手から）どうしたんですの、增田さん？

第一の若い男　（かの女の方へ進んで）なアに、あいつが今の話の娘を殺した女だ。（それから、この二人は別組のやうになつてこなしだけでささやき合ひ、四十男の第一や第二を見まわす。その間に次ぎの會話が進む。）

第二の若い男　（その相手と相變らずからんでゐながら）　乙なことをしやアがつた、女工取締りと云ふから、どんなに氣の利いたいろ男かと思つてたら、をんなで、而もこんな婆アさんだア。

第三の若い男　（これもその相手とからみ合つて）　こんな婆々アなら、もツとこつぴどくやツ付けろ！やツ付けろ！

第二の若い女　（その相手の右の手を自分の肩から胸に取つて）　若しわたしたちもこいつの工場にゐたら、矢ツ張りひどい目に會はされたかも知れやアしないよ。

第二の若い男　（第二の女に）　おめへなんかどこにゐたツてだア、な。

第二の若い女　何を云やアがるんだ、この助平！

第三の若い男　（第二の男に）　ぢやア、手めへの女だつておんなじだらう。

第三の若い女　（その相手の肩に左りの手をかけて）はばかりながら、わたしは井戸なんかへどんぶりツこはしませんから、ね。

第三の若い男　圖々しいから、さ。

第二の若い女　わたしだツて、腐つても鯛のお孃さんぐらゐならいつでも眞似をしてやらア、ね。

第二の若い男　そのときやアおれが増田になつてまた可愛がつてやらア。

第二の若い女　おほきにお世話だ。

第四の若い男　（まだ怒りが納まらぬやうすで四十女に）もツと眞ン中へ出ろ！　眞ン中へ！

四　十　女　…………（勞働服の着つけを取りみだしてゐながら、まだ息づかひを荒くして舞臺の中央へ出る。）

第二の四十男　おい、手塚、おめへはどうしたんだ？

第四の若い男　師匠、おめへの娘を殺したのアこの女だぞ！

第二の四十男　ほう！（立ち上つて、少し進み出で四十女と憎々しさうな顔を見合はせる。）

四　十　女　（第二の四十男に向つて）あなたがお常さんのお父さんでございましたか？　この度はまたお常さんが飛んでもないことをなさいましてまことにお氣の毒で――

第二の四十男　…………（それには返事もしないで殘念さうに横を向く。）

第四の若い男　おのれが殺して置いて氣の毒だもねいもんだ！

四　十　女　よして下さい、人ぎきの惡い！　わたしがいつ人を殺しなどしました？

第四の若い男　とぼけるねい！　おれは、な、おめへにそとで出ツくわしたが最後、この恨みは晴らさずにやア置かねいと思つてたんだぞ。いや、今夜はおめへの出て來るのを待ち伏せしてゐたん
もう、ただぢやア歸れねいと思へ！

四　十　女　いきなり、尺八でぶつたり、叩いたり人のお尻をまくつて砂を投げたりすりやア、もう、それで十分ぢやアありませんか？

第四の若い男　おめへはそれ以上のことをしてイらアー　若いむくな娘はくそ耍々アとア違ふ。おめへならそんなことをされても洒々してゐられようが、な、若いものアそれが爲めに恥づかしがつて死んでしまつたんだ。

四十女　けれど、わたしが殺したんぢやアありません。

第四の若い男　なんだと！　でい一、盜みもしねいお常にその嫌疑をかけたのアどいつだ？

四十女　皆がさう云ひましたからです。

第四の若い男　馬鹿云へ！　そんなことをぬかしたのアおめへの機嫌を取る馬鹿ものばかりだ。勞働者をうら切る馬鹿勞働者どもだ。やとひぬしと云やア、な、たとへ官吏でも資本家だぞ。その資本家の機嫌を取るおめへの機嫌をまた取るやつらがゐるんだ。そんなやつらは皆かたツぱしからぶツ倒すんだ。

四十女　そりやアあなたの勝手でしようが、ね。

第四の若い男　それに、また、おめへはおれが砂をぶち込んだのをひどいと云つたが、それよりひどいことをおめへはなんでやつたんだ？

四十女　規則ですから。

第四の若い男　なま意氣云ふな！　（尺八を以つてかの女の尻をなぐる。）

四十女　いたい！

第四の若い男　いてい位はまだ〳〵でい。おめへの爲に死んだものがあるんだ。こん畜生！（今度は足を以つて蹴飛ばす。）

第二、第三の若い男
第二、第三の若い女　わツはツは！

四　十　女（その場に倒れて）誰れかほんたうに早く巡査を呼んで來て下さいと云ふのに！

第一の若い男　巡査もくそもあるもんか？　そんなやつア早く會議にかけろ・會議に！

第四の若い男　そりやア、むろんだア。その前におりやアもツとやつ付けてやるんだ。――こら、婆アア！　規則なんかは資本家の爲めになるやうにばかりできてるんだぞ。その規則をだツて、おめへのやうなむごいことをしねいでも應用できる。そんなにひどいことをしねいでもだ。おまけに盜まなかつたことが分つたぢやアねいか？　結果はどうだ、無實の娘をひとり殺してしまつて！

第二の四十男（矢ッ張り諦らめた樣子でもとのところへ腰かけに行きながら）ぢかに手をかけたのでもねいから、許してやれ。

第四の若い男　師匠はまたそんなことを云ふが、おりやア承知ができねいんだ――おれの好きな女を殺されたんだから。な。

第二
第三の若い女　………………（冷笑の目を見かはす。）

第二の四十男　そりやア、生きておさへすりやアおめへの女房になつたかも知れねいが、今ぢやア好きでも何でも。もう、死んでしまつちやア――（顫えるその低い聲を直ぐ尺八に移して吹き初める。）

第一の四十男　（杖によつて立ち上つて）わたくしも一つこの會議へわざ〳〵問題を持つて來ましたのだが――

第一の若い男　お前さんの事件は今これ（と、第一の若い女をさして）から聽いておれが承知してゐるから。

第一の四十男　さうですか？　それぢやアおまかせ致します。（また腰をかける。）

第四の若い男　やい、貴さまは溫情派のくせに、もう、今夜の議長ぶつてるんけい？

第一の若い男　（かみ手から中央の方へ進んで行つて）溫情派がどうしたと？　おれが溫情派なら、貴さまは過激派だぞ！

第四の若い男　過激派がどうした？　（これも少しその方へ近づいて行つて）貴さまアなまぬるいことを云ふ資本家のまわし者ぢやアねいか？

第一の若い男　馬鹿ぬかせ！　おれがまわし者なら、その婆アさんやあの男のことを、問題にするかい？

第四の若い男　貴さまらにそんなことを問題にされたかアねいや！

第一の若い男　無學なくせに、なま意氣云ふな！　（ふたりはちよッと睨み合ひになる。）

第二の若い男　さう云やア、增田は働らけ、働らけツて、やとひぬしの云ふやうなことばかり云ふぜ。

第三の若い男　おれたちやア資本家などにならねいでもいいんだ――かねさへもツ[illegible]

第一の若い男　馬鹿野郎！　資本家がなくツて勞働者があるか？　さうして勞働者もかねが儲かりやア、資本家の仲間入りをしねいで向上して行けるかい？

第四の若い男　そんな心配は入らねいや、社會の制度さへ――改革すりやア。

第一の若い男　そんなことア聽きかじりの空想だ。出直して來い！　おれたちやア、今の社會の實際問題として實際に行はれることを考へさへすりやアいいんだ。今の間違つた社會主義者のやうな、無政府黨や過激派の眞似をするばかりが勞働者でもねいぞ。共産主義や共有主義で社會の秩序が立つと思ふか？

第四の若い男　立たねいでどうするかい？

第一の若い男　それが空想の夢だ。社會はいろんな階級のあひ持ちだから、な。

第三の若い男　それも尤もだらうかい？　男がなけりやア女もねいわけだから、なア。

第二の若い男　は、は、はア！　女がゐねいぢやア、酒もうまくはねいか？

第二の若い女　増田さんのやうないろ男がなけりやア、お蝶さんも生きてゐられないでしよう。

第三の若い女　お蝶さんて誰れ、さ？

第二の若い女　（第一の女をさして）あのお孃さん、さ。（ふたりの女はまた冷笑し合ふ。）

第一の若い女　…………（知らぬ顏をしてゐる。）

第四の若い男　兎に角、今夜はおりやアいのちがけで議長になつてやる――この婆々アを殺す決議を

する爲めに。少しどけ、どけ！（と云つて、中央正面に當たる腰かけの部分へ進んで行く。第二の男と第三の女とはそのかみ手へ第三の男と第二の女とはそのしも手へ立ちよける。その前から起きることをもしないで尻をさすつてゐた四十女はびく付き出す。）

第一の若い男　さうはさせないぞ！（これも進んで行つて、第四の男を引きもどし）おれが議長になるんだ。

第四の若い男　なにようしやアがるんだ、こん畜生！　資本家のまわし者！

第一の若い男　ぢやア、貴さまアロスケの犬か？

第四の若い男　なんだと？

第一の若い男　さア、來い！（ふたりは取ッ組み合ひを初める。第一の女がとめに來る前に第一の男は一度投げられる。）

第二の四十男（尺八をやめて）よせ〳〵、また喧嘩なんか。

第一の若い女　あなた、あぶないからよして頂戴、ね。（と、第四の男に頼む。）

第一の若い男（起き上るが早いか、また飛びかからうとして）畜生！

第一の若い女　あなたもおよしなさいよ。（かの女は第一第四の男の間に這る。第二第三の女は默つて第一の女に對する悪感のやうすを示めしてゐる。このあひだに四十女は這ふやうにして起きあがつて、おづ〳〵と逃げて行かうとする。）

群衆の一人　婆々アが逃げる、逃げる！
第四の若い男　この野郎！（ふり向いてかの女の方へ驅け行き、かの女を引きもどして）逃げようたツて、逃がすもんか？
第二の四十男　なアにかまはねいから許してやれ、許してやれ。
第四の若い男　おりやア會議にかけて、なぶり殺しにしねいぢやア氣がすまねいんだ。
第二の四十男　馬鹿なことを云へ、手塚！　そんなことをすりやア、おめへもおかみの法律で殺されるばかりだぞ。
第四の若い男　かまうもんか！
第二の四十男　（考へに沈んだ聲で）おめへがさう熱心なら據どころねいとしても、だ、おれはおめへがさう無駄な熱心をするのを見れば見るほど、死んだ者が可哀さうに思ひ出されて――（また、尺八に移る。）
第一の四十男　そりや尤もだ――おれの娘も早く死んで呉れりやア――。
群衆の一人　議長は選擧だ。選擧だ。
群　　衆　（まち〳〵に）それがいい。それがいい。（群衆も進み來て他のものらと入りまじる。）
第四の若い男　（四十女を中央正面の前方に引き倒して）觀念してイやがれ！
四　十　女　（おど〳〵して）わたし、殺されるわけはございません。

第一の若い男（かみ手の石の上に立ち上つて）おれは、諸君、勞働者の實際的向上を目的とする增田と云ふものだ。穩和に着實におれたち勞働者をよくして行かうと云ふんだ。突飛なことを新らしがつて、足もとを忘れるやうなことはしないぞ。議長に選んで呉れ給へ。

群　衆（のうちより）よし〳〵、おめへを選んでやる。

第四の若い男（中央四十女のしも手に突ッ立つて）諸君、おれは過激派だ。名は手塚と云ふが、――着實だなんてなまぬるいことア嫌ひな男だ。議長はおれにさせて呉れよ。

群　衆（のうちより）よし來た。それもよからう。

第一の若い男　おれを選ぶものはみな手を擧げろ。

群　衆（のうちより）さア、擧げた。

同　じ　く　擧げたぞ、よく見ろ。

同　じ　く　先生、分りました。

同　じ　く　なんだ、小學校の生徒かい？

第四の若い男　そんなことをしたツて分るもんかい？　おれに投票するものアおれのところへ集れ。

群　衆（のうちより）それがいい。それがいい。

同　じ　く　さア、集まれ。集まれ。（群衆は第一の男と第四の男との兩方へ別れ初める。第一の女は勿論、

第二、第三の男、第二、第三の女すべて第一の男の方へ行く。第一の四十男は立たず。第二の四十男は見えないが、尺八をつゞけてゐたのがやむ。）

群　衆（のうちより）巡査（じゆんさ）が來たぞ。

同　じ　く　そら、巡査が來た。

同　じ　く　おまわりさんだ。

同　じ　く　警察官だ。（みな、わツしよい、わツしよいと云ひながら、ばた〳〵と逃げ初める。）

第二の若い男（四十女の左り手へ出て）この助平婆々ア！（と脊中を蹴る。）

第三の若い男（これは右手から）このあまツ！（かの女の胸を蹴る。）（この二名もそれから逃げて行く。）

第一の若い男（も亦四十女のそばへちよツと立ちどまつて）おめへのやうな女はおれが天下を取つたツ許して置かねいぞ。

第四の若い男（これは最もいま〳〵しさうにかの女を睨み付けて）婆々ア！　いのちびろひをしやアがつて――おぼえてゐやアがれ！（尺八で今一度撲ぐり付けてから、渠も第一の男と共に優々と退場。あとに殘つたのは第一の四十男と四十女。）

六、四十女、第一の四十男

四　十　女（起きあがりながら、半ば獨り言のやうに）殺しもしないのに人を殺したなんて――おそろしい人間どもだ！

第一の四十男　隨分亂暴は亂暴だが――お前さんも決していいとア云へねいや、な、荷しくも取り締まりをするものがさう無慈悲なことをしちやア。

四　十　女　（立つて渠に向ひ）わたしはただうわ役から云ひ付かつた規則を守つて取り調べをしたのです。それをわたしのせいだと恨んで、わたしにつら當ての身投げなどされちやア、こツちこそおほ迷惑で――その爲めに踏んだり蹴たり、投ぐられたりは、いかにわたしだツて溜りません。賃金を貰つて働らいてる以上は、わたしも勞働者ぢやアございませんか？

第一の四十男　だから、これから少し氣を付けなよ――資本家の機嫌ばかり取らねいやうに、さうしてお前さんのうわ役にもさう無慈悲をさせねいやうに。

四　十　女　そんなことアわたしなんぞの力ぢやアとても――

第一の四十男　いいや、できねいことアねい――みんながその氣になつて團結すりやア、おしまひにやアうわ役だつて資本家だツて無理は云へなくなりまさア。無慈悲なことなんて、とどのつまりの據んどころのねい時にばかり出す奥の手だ。

四　十　女　（中央に立つたまま、また獨り言のやうになつて）そんなことを云つたツて――？

第一の四十男　（これも獨り言のやうだが、俄かに悲みに堪へぬやうすで）おれは――娘の――死ぬのを――神さまに――祈つてらア、（この時、巡査かみ手から登場。）

七、四十女、巡査、第一の四十男

四　十　女　（巡査を見るが早いか、兩手で自分のからだを押さへて、わざとらしくぶッ倒れるまでに）あ、いた――た、た、た！

巡　　査　（つか〳〵とかの女の倒れたそばへ行つて）どうした？

四　十　女　蹴られたり、ぶたれたりしたんです――今、からだ中を！

巡　　査　（第一の四十男の方へ進んで）貴さまにか？

第一の四十男　どう致しまして！　わたくしは今夜ここの勞働會議とかへ問題を一つ持つて來たものですが――わざわざ來まして、みんなが逃げ出してしまつたので當惑してイるところです。

巡　　査　ぢやア、貴さまも社會主義か？

第一の四十男　いいえ、わたくしは勞働にはぐれてしまつた者ですが、別に社會主義でも何でもありません。

巡　　査　うそを云へ！　社會主義でないものがどうしてこんな冗談らしい寄り合ひへやつて來たんだ？

第一の四十男　ですから、一つ問題を持つてまゐりました。

巡　　査　それがいかん！　不都合な奴だ！　貴さまだけが逃げもしないで殘つて、いい加減な申しわけができると思つてるんか、圖々しい！

第一の四十男　わたしは心臟の弱くなつてる病人です。

巡　査　病人のくせに、なほ更ら圖々しいやつだ――警察まで來い！

第一の四十男　そりやア、來いとおツしやればまゐります。別に訴へるところもないから、一生の思ひ出におまわりさんたちにでもこの苦しい事情を聽いて貰ひましよう。

巡　査　ぐづ〳〵云はないでも行けば分ることだ。

第一の四十男　さうでしよう。分る人には多少でも同情(どうじやう)して貰へばそれでいいんです。さうだ（と杖によつて立ち上り、半ば獨り言になつて）もう、自分も長いいのちぢやアない。たツたひとりにでも、ふたりにでも同情の聲さへ聽けば、その聲が娘にもいい念佛だ。

巡　査　何を云ふのだい？（矢ッ張り、四十男に向つて）ゆふべは若い女のことで飛んでもない喧嘩を起すし、今夜はまたどうしたと云ふんだ？――（四十女の方を見て）お前さんも兎に角一緒に來て貰はう。

四　十　女（起き上りながら）まゐりますとも。二度とこんな目に會はせられては、溜りませんから。（巡査に從つて、あとの二名もしも手へ退場。第一の若い女、またコップに水を持つてしも手から。第一の若い男、人を探すやうすでかみ手から。この二名登場。）

八、第一の若い女、第一の若い男

第一の若い女（第一の四十男のゐた席のところからその右左を見まわして、その目がかみ手へ向くと直ぐ）おう、増田さん、あの病氣の人も逃げて行つたのでしようか？　苦しさうだと見えましたから、わた

しは二度目の水を持つて來てあげたんですのに。
第一の若い男　（かの女へ近づいて行つて）ぢやア、わたしが頂戴致します。（コップを受け取つてぐッと飲みほしてから、コップを奥の方へ投げ飛ばす。）
第一の若い女　あら！　借りて來たのです、わ。
第一の若い男　（にが笑ひに情慾の寂しみを見せながら）かまうもんですか？　――然し、あの男はどうせ長いこッアありません。あのやうすぢやア、可哀さうに、その寢てゐると云ふ娘と前後して死んでしまうにきまつてます。
第一の若い女　（も渠の動く方へついて行きながら）さうでしようか？　さうでしよう、ね。して見ると、氣の毒ぢやアありませんか？
第一の若い男　それも仕かたがない、さ。從前通りの少しも希望がなかつた勞働社會に對しちやア、恐らく最後の代表的な犧牲でしようよ。
第一の若い女　わたし、勞働がおつかなくなりました、わ――井戸へはまつたり、死ぬやうに祈つて呉れいと頼んだりする人のことを思ひ出しますと。
第一の若い男　わたしには然し勞働をよくしようと云ふ希望があります。
第一の若い女　でも、また、勞働の爲めにあの人のやうな病氣になつては――
第一の若い男　恐らくなりますまい。その代り、わたしは勞働社會の新らしい希望に對するまた別な

意味の犧牲にはなるかも知れません。
第一の若い女　ぢやア、それが矢ツ張り社會主義と云ふのでしようか？
第一の若い男　さう云へる點もありましよう。また、云へない點もありましよう。
第一の若い女　それにしても、何だかおつかない。わ――うちには病氣が出たり、そとでは警察の手がまわつたり。
第一の若い男　そこがまた然し面白いぢやアありませんか、若い血の湧く男子が自分の好きな友人やをんなにも誇ることができて？
第一の若い女　でも――
第一の若い男　おつかなけりやア早くやめるだけのことです。
第一の若い女　でも、おツ母さんの病氣の爲めですから。
第一の若い男　それは分りました。――然し（と俄かに聲と共に右の手をふるはせて突き出し）結婚の話だけはきめて置きましよう。
第一の若い女　…………（耻かしさうにしてだが、默つて男の出した右の手をかの女は左りの手でそツと受ける。男は喜んで、またその左りの手で女の右の手を握る。やがて男は自分の肩へ女の兩方の手を持つて行き、自分の兩手で女の肩のあたりを抱く。女はされるままになつてるので、からまつた二名はおのづから腰かけの方へよろめいて行つて、そこに腰をおろす。そしてちよツと離れて手を引ツ張り合ひながら。）

第一の若い男　いつから夫婦になりましよう？

第一の若い女　おッ母さんの病氣がかた付きましたら。

第一の若い男　まだそんなことを！　ねえ・そんなことを云はないで、さ。（男が女に抱き付からうとする時奥の方から例の尺八が突然のやうに聞え出す。兩人は思はずかみ手しも手へ立ち離れる。それから、人の姿は見えて來ないのを見すまして、先づ男がかみ手から腰かけに行き、しも手に立つてる女を來いと云ふこなし。その間にもあはれな尺八の音は續きつつ幕。）

（編者申す）　文中にある――――の印は當局の注意に依り削除したる箇所なり。讀者諸彥の御諒恕を乞ふ。

（大正八年六月）

附録

メテルリンク作

モナヴナ

はしがき

『モナヷナ』(Monna Vanna)は、メテルリンクが四十歳の時(千九百二年)にその作風に一轉化を來たしたと云はれる史劇である。作者の憧憬する夢幻に個人の運命を結び付け、それにまた史的現實を添へたものだが、缺點を云へば、相變らず同作者の夢幻癖ばかりが勝ち過ぎてゐることだ。

然し形が神秘的で華やかである爲め、歐米至るところで、少くとも、一二回は興行せられないところは無く、わが國でも、さきには川上一座が飜案したことがあり、後には藝術座の連中によつて原作通りに上演せられた。

大正三年六月　泡鳴識

第一幕

十五世紀の末、ピザ市が、フイレンチェ共和國の軍に圍まれた。フイレンチェ軍の總司令官はプリンチヷルレと云つて、戰かへば必ず勝ち、攻むれば必ず取ると云ふ評判の勇將であつた。さすがに勇敢なピザの人民も籠城三月の惡戰苦鬪のため、一オンスの火藥も、一切れのパンもない程の危急の場合になつた。さうして、彼等の只一つの賴みであつたヹニスからの援軍も、二軍ともフイレンチエ軍のために支へられたと云ふ悲報が、ピザ守備軍の司令官ギドコロナのもとにまで傳つた。其上ピザ人民の中には、絶望のあまり政府を怨んで矛をさかしまにしようとするものがある、と云ふ怪しい噂さへ立つてゐる。政府は到底勝算のない事を知つて、三度學寮の長老を派遣して條約を締結させようとしたが、其三人ともまだ歸つて來ない。

かういふ折も折、絶望と恐怖に、常識をうしなつてゐたピザの人民が、敵の副官アントニオレノの捕へられてゐたのを、引出して、市街で虐殺してしまつた。

ギドコロナは、父のマルコを、敵將プリンチヷルレに送つて、哀悼の意を表させた。

ギドは今、副官ボルソ。トレルロ。の二人と共に殿中の一室で、父の歸城を待つてゐるのである。

『我軍は孤立になつてしまつた。政府からの報告によると、ヹニスからの援軍は、一軍はビビエナで圍まれ、一軍はエルチで圍まれたと云ふ事だ。ガゼンチーネの谷間も、アレツゾの山道も殘らず敵に

占領されてしまつたさうだ。ピザ三萬の人民もこんな事をきいたら、絕望の極何をしだすか分らない。彼等が饑と困難を今日まで忍んで來たのも、只此望みがあつたためなのだ。彼等の怨みは政府や我々の上に向つて來る。彼等はきつと眞先きに我々を犧牲にするだらう。我々はもう手の出しようがない。』

ギドはから絕望して云つた。

『我軍には穴倉のすみ〴〵まで探しても一オンスの火藥もございません。』と、ボルソも同じやうに絕望の聲で云つた。するとトレルロも、二日前から大砲の丸も打ちつくして、誰一人砦の守備に立つものもないことを力のない聲で話した。

『アルバニヤ人、ロマニヤ人、スクラヴオニヤ人などは、今夜中に條約でも調はなければ逃走するかもしれません。』とボルソは云ふ。

『フイレンチエ人と云ふ奴は、もう大丈夫となると、少しも容赦はしない。敵は此機に乘じてピザを亡ぼしてしまふ。ピザがヱニスの爲めに信義を守つてゐるのはフイレンチエの小さい町々には危險な手本だ。だから、フイレンチエはどうしてもピザを亡ぼさうかとかかつてゐるのだ。政府が今日まで度々長老をやつて、條約を締結させようとしてゐるのに、今だに一人も歸つて來ないのはその爲めだ。』

ギドがから云ふと、トレルロも

『プリンチヷルレは、アントニオレノがピザの人民に虐殺されたのを口實にして、條約締結をこばむでせう。』

『だから、私は現在の父を送つて、我々の哀悼の意を表させた。餓と絶望のために狂氣のやうになつた暴民を、我々の力で取り鎭められなかつた次第を說明させたのだ。併し父はまだ歸つて來ない。』

ギドは、それらこれらを思つて不安と絶望とが胸にみなぎつてゐた。『それに敵將プリンチヷルレは、フイレンチエの軍人の中で、一番野蠻な男だとも聞いてゐるし、プラチエンザの奪略で、五千人の普通の女子を奴隷に賣つたり、武器をもつてゐた者は、悉く斬殺したのも、プリンチヷルレの差金だと云ふ噂もある位の惡い評判の男だから。』と心配して云た。と、ボルソが、

『さう云ふ噂もございました。併し私の兄弟で、よく彼を知つてゐるものが申すのを聞きますと、プラチエンザのことは、フイレンチエの辨務官等の差圖だと云ふことでございます。彼れは、生れは卑しいのは事實ですが、さう野蠻な男ではないと申しました。空想な随分危險な人物ですが、信義を守る點は、安心して劍を渡される男ださうでございます。』

『併し劍を渡すことは、お前の腕で持ち切れなくなるまで持つ方がいい。其うちあいつがきつと本性をあらはして來る。只我々の取るべき最後の道は、死を屠して突進する事だ。とにかく我々はすべて打明けなくてはならない。軍隊にも人民にも、條約の申出はまだ受けてゐない事も、ヹニスの援軍の敵に圍まれてしまつた事も、……我々は戰ごつこで遊んでゐるのではないからな。二大軍が朝から晩まで死ぬか生きるかの猛烈な爭闘なのだ。其の間に慈悲などは少しもない。』

ギドが、かう云つてゐる所へ、マルコが歸つて來た。ギドはとても無事には歸られまいと思つてゐ

たのであるから、飛びつくばかりに走りよつて熱心に抱いた。
『お父さん！　どうした仕合で、どうした不思議で、あなたは歸られました。どうしてお遁れなすつた。手疵を負ふては入らつしやらないか？　私はもうとても無事にお歸りにはなれまいと絶望してゐました。足を引きずつてお出になるのは、敵に害をおうけになつたのではありませんか。』と、言葉せわしく問ふた。處がマルコは、
『何うもしないよ。私が足を引きずつてゐるのは、遠い路を歩いたせいだ。敵は野蠻人ではなかつたよ。彼等は私を名譽ある賓客として好遇して呉れた。本當に思ひもよらなかつた。と云ふのは、プリンチヷルレは私の著述をよんでゐた。私の發見して飜譯したプラトンの對話篇。あれの話もした。實に愉快だつた。まあ私がプリンチヷルレの營所で誰れに會つたとおもふ？』
マルコが、何の爲めに敵陣に行つたのか、丸で忘れてゐるやうな呑氣な事を話すのでギドはいらいらしてゐた。
『無慈悲なフイレンチエの辨務官どもでせう。』
『私の逢つたのは、マルシリオフイチノだつたのさ。あの、プラトンを始めて世界に紹介した男さ。プラトンはあの男のために生き返つたやうなものだ。私は、あの男に逢ふためなら、十年かかつても尋ねてみたいと思つてゐた位だからね。まるで永年會はなかつた兄弟にめぐりあつたやうだつた。』
それから、マルコは、その男と、アリストテレスや、ヘツオドやホーマーの話をした事や、フイチ

ノが、アルノ河の岸の近くの、橄欖の森の中から、女神の像を掘出した事など長々と話し出すのであつた。

『それは砂の中に埋れてゐたのださうだ、惜しい事には胴ばかりだつたので、私たち一緒になつて又其近所を掘り起したのさ。あの男は腕を一本見つけたが、私は手を二本見つけた。一本は鏡の柄を摑んだままの形で、一方は、女の胸にでもかけてゐたものらしい。其の手の精巧な事と云つたら、まるで幸福と美を愛撫するために造られたといはうか。實に美妙な細工だつたよ。』

マルコの話はいつ終るのかはてしがない。ギドはとう〳〵たまりかねて、

『お父さん！』と父の話をさへぎつた。『人民は今、饑ゑて死にかかつてゐるのです。あなたは、何のために敵陣へいらしつたのか、其大事の任務をお忘れなさらないやうに。胴ばかりの女神のお話や、美妙な手の御說明を伺つても何の役にも立ちません。』

併しマルコは、

『それは、大理石像でね』と、又其話の方へもつて行きかけるので、ギドは癇癪を起して、

『結構です！　そんなものがどうあらうと、私達には關係のない事です。あなたが先方へお出かけになつたのは、そんな體ばかりの石像や、折れた手を掘出すためではなかつたのです。御らんなさい。みじめな人民等は、饑ゑのために、石の間に生えてゐる草を奪ひ合つてゐます。我々の急務は三万人の饑ゑてゐる人民どもを、どうしたらいいかと云ふ事です。早くきかせて下さい。敵は何と申しました？

フイレンチエは、プリンチヴルレは……」と、追ひ迫るやうに訊ねた。

『さうだつた。私はあんまり自分の事ばかり話してゐた。私はすぐ聞いて來た報道を、傳へなければならなかつた。人間がお互同志軍をしてゐる間に、いつか世の中は春になつてゐる。地には草が嬉しさうに笑つてゐる。海は、天女が神々に捧げる杯のやうに輝やいてゐる。併しお前にはまたお前としてのつとめがある。さうして私達は戰爭をしてゐるのだ。私はそれをすつかり忘れかけてゐた……私の持つて來た使命は、三万人の人々のためには救ひであるが、或る一人に取つては重いくるしみだ。併し、それがために、其人は、戰爭で得る光榮よりも、もつと貴い、もつと偉大な光榮を荷ふことになるのだ。私はさう思ふ。一人を愛することも善い事だ。私はそれからうる幸福も其人にとつては偉大に違ひない、併し多數を愛し助けるのは、もつと偉大で、もつと美くしい。ギドや、私のこれから話すことをよく覺悟して聞いて呉れ。私が恐れるのは、私の口を開く第一の言葉が下手な爲めに、お前の理性の力を縛つて、喜んで思ひかへす動機をうしなつてしまひはしないかと思はれる事だ。」

ギドは、副官等に立去るやうに命じた。然しマルコはそれを止めた。

『是れから話すことは、私たち皆の運命なのだ。私は、これから救つてやらうとするピザ三万の人民達にも、聞いてもらいたい。さうしていつまでも記憶してゐてもらいたい。私は救ひをもたらしたのだ。たゞ理性がそれを承知すれば……』

ギドは、マルコの謎のやうな言葉をばかり多くつひやしてゐるのに待ち切れなくなつた。

『お父さん。どうか謎のやうなことをばかりおつしやるのは止めて下さい。只一言です。私のうかがひたいのは……早く聞かして下さい。何も恐れることはありません。』

『私は最初あの男へ出かける時は、戰爭をすることより外何の能もない、のんだくれの、野蠻人の所へ行くつもりで……から云ふ風にあの男の評判をしてゐたものだから……丁度、昔、プリアム王が、アキリスの陣營へ行つた時のやうな氣持でゆきました。』

『その通りの奴です。只謀叛人でないだけです。』

ギドは、如何にも、さげずんだ調子で口を入れた。と、副官のボルソは、

『プリンチブルレは、まつたく謀叛人ではございません。』と眞顏になつて辯護した。

マルコは、何れにもとんぢやくしないで

『あの男は、私の弟子でもあるやうに、私の前に頭をさげた。さうして、私を先生と云つて尊敬した。私は、仲の好い友達の家に行つて話をするやうな氣持で愉快に話した。あの男は中々の學者ですよ。それに頭腦も聰明だ。私は話してゐる中に、それが分つた。研究心にも富んでゐるし、其上熱心に人の說もきく、寛大で眞率で、人情も篤い。境遇の行きがかり上、軍人にはなつたが、本來戰爭などはあまりすかない。それを惡んでゐる。時機が來れば、いつでもよろこんでなげ捨てると云つてゐた。其時機と云ふのは、實はあの男に、一つの願ひがあつて、それは、たとへば、手も達かない、無類な、高大な愛に對する、人間の最も熱烈な、止み難い願ひ、とでも云ふもので……』

マルコの話が、又まわりくどくなつて來るので、

『お父さん、お父さん、あなたは餓ゑて死にかかつてゐるものどもを、お忘れなすつたのですか？あなたの救ひだとおつしやつた、それを早くきかして下さい。プリンチヷルレの性質がどうであらうと、我々に何の役にも立ちません。』

マルコは、うなづきながら、

『もつともだ。お前がさう云ふのも當然だ。たとへ其事が、私にとつて最も大切な二人のものに、殘酷なことであつても、此場合を長びかすのは、私が惡かつた。實は、此室に這入つた時、何とも云へない堪へ難い悲しみにうたれた。けれども、「救ひ」と云ふことを思ひ出すと、その方へ氣をとられてしまつたからだ。フイレンチエは、我々を皆殺しにしようと決議した。軍總督も、議政官も、それが必要だと云ふことに一致したのだ。けれども、フイレンチエも、自分等の國が、みだりに虐殺を行つたと非難されては、文明國として、世界に對して不得策だから、表面は、フイレンチエが、寛大な條約を提出したにも拘はらず、我々が、ピザが、拒んだと宣言して、此町を總攻撃をさせる計畫なのだ。スペイン人や、ドイツ人の雇兵どもを押し寄せさせる。其中には、掠奪もするだらう。虐殺もするだらう。彼等は機會さへあれば、さう云ふ事を必ずする。フイレンチエ人は、只其口輪をゆるめて待つてさへすればいいのだ。彼等は、統御力を失なつたのだと云ふ振りをする。見て見ぬ振りをしておくのだ。さうして此紅百合の都のものどもは、一圖に外國の雇兵どもの仕業だとしてしまふ。そこへフ

イレンチエ人が代つて、始めて驚き悲しむと云ふ様子で、是等の雇兵どもを解散してしまふのだ。併し、其の時は、此の町が亡びてしまつてゐる時さ。雇兵どもの力をかりる必要もなくなつてしまふのだ。是れが我々に對して計畫された運命なのだ。』

マルコは、なほつづけて、

『かう云ふ内命を、プリンチヷルレは、本國の辨務官から受けてゐる。この一週間と云ふもの、毎日毎日最後の攻撃をするやうに迫られてゐるのだ。然しあの男は、他に考へることがあるので、一日延ばしに延ばしてゐる。この様子を見た辨務官どもは、あの男が、謀叛をくわだててゐるのだと云つて、さま〴〵に讒誣して議政官に訴へた。それは、プリンチヷルレが取り押へた手紙で分つたのだ。ピザは亡びる。戰爭は終る。フイレンチエには、プリンチヷルレの力をかりる必要がなくなる。だからプリンチヷルレを、おとしいれる口實を、つくらうとしてゐるのだ。昔から、危險と思はれる大將はみんなさうであつた。プリンチヷルレは、此運命を覺悟してゐるのだ。』

『分りました。それで、あの男はどうしたいと申すのです?』とギドは言葉せはしく問ふた。

『で、あの男の云ふには、あの男が取り立ててやつた弓の兵で、あの男のために、命を投げださうとまで、心服してゐるものが、信じられる範圍内で、たしかに百人程ある。その者どもを引つれてピザへ投じよう。ピザの爲に防戰しようと云ふのだ。』

ギドは、父が、あまり手輕に、プリンチヷルレを信じてゐる事を、不快に思つてゐるのであるから、

『そんな危險な援兵など求める必要はありません。そんな危險な援兵に心を動かしてなるものか。糧食と彈藥をよこさせませう。』と、一言もなくはねつけた。

『それはあの男も、此條件は、多分お前に拒絶されるであらうと云つてゐました。だから、軍用品と食物を、三百輛の貨車に積んで送らうと言ひました。それはフイレンチエから輸送されて來たばかりのものださうだ。』

かういふマルコの話をきいて、ギドには、プリンチヷルレが、何のためにそんな事をするのか、ピザを救つて、彼はどんな報酬を得ようとするのだらうと疑がつた。

『どうしてそんな事をするのでせう？』

『政治や戰爭の道は私には分らないが、フイレンチエの辨務官どもにしても、勝利を眼前にひかへてゐる間際に、あの男の司令權をはぐ勇氣もなからうから、その前にあの男は、自分のしたいと思つてゐることを、しようといふのだらう。』

『分りました。あの男は、自分の復讐のために、我々を救はうと云ふのですね。併し敵を救つてあの男に、どんな利益があるといふのでせう。ただそれだけのためなら、もつとほかにやり方がありさうなものだ。』

マルコは、自分の齎らした報告を、一刻も早く知らせなければならない事は、分つてゐるのであるが、それが、ギドの爲めに、どんな苦痛を與へることになるかと思ふと、それを口にするのが躊躇さ

れるのであつた。

『ああ、私のこれから云はうとすることは、それを受けるものに、殘忍な運命を押しつける。私はそれを思ふと戰慄しずにはゐられない。』

『なぜさう遠まわしにものをおつしやる。どんな殘忍な言葉でも、此の不幸に比べれば何でもありません。』

『いよ〳〵時が來ました。私は話さなくてはならない。人間と云ふものは、如何に美人でも、心に一點不正な慾望も持たないと云ふものはない。我々の理性は不斷に、此慾望と戰ひ、狂熱と戰かつてゐるのだ。それが人間の身の上なのだ。プリンチヷルレは聰明な男だ。理性もある。人情もわきまへてゐる。然し、如何に聰明でも、理性があつても、止みがたい慾望の前には、理性も冷やすことの出來ない、愚かな點がないとはいへない。お前には、今一つの悲しみが待つてゐる。然しお前が正しく考へてさへ吳れたら、或は悲しみにならないかもしれない。私は愚かな約束をして來ました。だが私は、この約束を理性の名で守つてゆかうと思ふ。若しお前がこの條件を拒むなら、私は敵の營所へ歸つて行きます。私の世間並はづれた信義の報をうけるために……』

マルコは最後の言葉を、どう云つてギドに告げようかと苦心した。併しどうしても云つてしまはなければ、納まりがつかないので、とう〳〵思ひきつて、ヷナを、今夜唯一人で外套を着ただけでよこして吳れるなら、穀物、葡萄、及數十頭の牛や羊の群と、彈藥とを、今夜ピザへ送らうと約束した事

を打明けた。
ギドは、プリンチヴルレが、ピザにそれだけのものを送らうと云ふには、どうせ高い要求をするだらうと豫想してゐたのではあるが、自分の妻を一夜借せと云ふ申出には、激怒しずにはゐられなかつた。
『私の妻を……ヴナを?……』
『さうだ。お前のヴナをだ。』とマルコは答へた。さうして、ギドが若し拒んだら? と云ふ不安の色を浮べてゐた。
『しかし、どうしてヴナを? 女は他に幾千人もあるではありませんか?』
『あの男は、ヴナが誰れよりも美しいと云ふ事を知つてゐる。さうしてあの男はヴナを愛してゐるのだ。』
『あいつは、どこでヴナを見たのでせう? 知つてゐる筈はない!。』
『プリンチヴルレは、ヴナを見たと云つてゐる。けれども何處で見知つたかは言はなかつた……』
『何處で? どうしてあれらは會つたのでせう?』
マルコは、然しヴナはプリンチヴルレを知つてゐない事を話すと、
『どうしてそれを御存じです?』と、ギドがいぶかしさうに訪ねた。
『あれが自分でさう言ひました。』と答へたので、ギドは憤怒の顔をみはりながら、

一まさか、こんな不名譽な條件を、あれにおすゝめなさりはしますまいね。』と、叱責するやうに問ひつめた。

『すゝめました。』

『ヴナは何と云ひました？』

『何にも言はなかつた。顏色をかへて、だまつて出て行きました。』

ギドはうなづいて、

『さうでせう、さうなくてはならない。こんな不名譽な條件を罵しるよりは、むしろ云はないで、其人に自分の愚をさとらす方がましです。ヴナらしい仕方です。天女だつてさうするでせう。私達も何も云ひますまい。諸君さあ守備につかう。そして死なう、どうせ死ななくてはならないわれ／＼だ。』

ギドは憤然として、副官等と共に去らうとした。

『ギド、まあ待つて呉れ。お前が今、どの位つらい境遇に立つてゐるかと云ふ事は、私もよく知つてゐる。』

マルコはギドを引とめて、義務のためには、私情のかなしみは、犧牲にしなければならないこと、感情のために、正しい理性の眼をくらましてはならないことを、熱心に說きさとした。ギドは然し耳にも入れなかつた。

『私の義務は只一つです！　只あなたが、強ひて奇怪な義務を押しつけるのです。私はそれに對して、

思ひ直す必要はありません。」と斷然言ひ放つた。

『お前は、自分の幸福をおしむために、幾萬の人民を、犧牲にする權利はありません。自分の悲しみのために、幾萬の人をかへりみないのは、あんまり高い價ではないか。私はこれまで人生の悲しみを澤山見て來た。然し、どんな悲しみも、死と云ふものに比べれば、みんなまさつてゐる。只お前が一狂人の愚かしい慾望をさへ忍んで許してやれば、幾萬の人の、最も尊い生命を、救つてやることが出來るのではないか。さうして後の人は、正しい冷靜な心で、お前の悲しみを拭つてくれるだらう。勇敢な事柄として稱讚するだらう。お前は此苦境(くきやう)を自分を少しも汚さずに、通過したいだらう。けれども、そのために死をえらぶ事より他を考へないのは、あまり單純な仕方だと云はなければならない。』

マルコは、くり返し、繰り返し說きすゝめたのであつたが、ギドの一徹短慮の心には反省を與へることが出來なかつた。

『あなたは私の父上でせうか？』

ギドは、自分が命よりも尊重し、愛護(あいご)してゐるヷナを、人民どもの生命に代へて、犧牲にせよと强ひるのを、卑しみ、憎み、呪はなくてはゐられなかつた。

『あなたは、先程から、私に理性を以て判斷しろ、考へ直せとおつしやるが、理性を缺いてゐるのは却てあなたです。あなたは、智慧のために勇氣を失つておしまひになつたのです。死を恐れてお出になるのです。もうこれ以上申上げたくもありません。伺ひたくもありません。あなたの、其卑怯な樣

を、私と二人の副官とだけしか見なかつたのは、せめてもの幸ひでした。私はあなたの名譽のために此事を秘密にしておきます。然し、それももう長く守る必要もなくなるでせう。さあ最後の奮闘にかからう。我々の道は只一つだ。』

『いや、それは葬られません。理由は何とあつても、人一人の生命を葬るといふことは、決して正當ではない。私は、私の今一つの義務を果さうと思ふ。』

『それはどんな義務です?』

『私は人民どもに、プリンチヷルレの申出と、お前が拒んだ次第を知らせるのだ。』

ギドは、ピザの名譽のためにも、父の卑怯な考へを、人民どもに知らせたくなかつた。

『私は、父の迷つた良心がさめるまで、子供の義務として保護します。ボルソ、トレルロ、君等二人は父上を監視して呉れ。誰れにも此事は知らすな。』

『お前は私を監禁する事は出來るだらうが、併し、私の心を監禁する事は出來ない。』

『何をおつしやる?』

『政府では、今頃もう此事を議してゐるだらう。』

『誰れが政府へ知らせました?』

『私が通知しました。』

ギドは、昨日までも、今日までも、自分が尊敬もし、愛しもしてゐた父が、さうしてまで、自分に

犧牲を強ひようとは信じられなかつた。

『私には信じられない。いくらあなたが怖氣づいたからと云つて、あの町人どもの手に、私達夫婦の美しい愛を賣りはなさるまい。もしそれが事實だつたら、あのプリンチヷルレの惡魔に劣らないあなただと思ふでせう！』

『お前には私と云ふものが分つてゐないのだ。私は老の波が身によせてから、人生の哀樂について學びました。私の心はだん〳〵虛榮からさめて、眞理に近づいて來ました。私のかう云ふ心の變化を、もつと早く話しておいたら、今日お前から、斯くきらはれる事もなかつたらう』

『私も早くあなたのことに氣がついたのを、よろこびます……政府がどう決議するかは分りきつた話だ。あいつらは自分等を救ふために、一人を犧牲にする位のことは考へるまでもない。私はあいつらのために出來るだけのことはした。苦勞も忍耐もした。併しヷナは私のものだ。あいつだつて此只一つの愛を要求する權利はない。』

マルコは市民等の、今日まで勇敢に働いたこと、ギドとしても、自分一個の幸福の安全のみ計つてはならない事を述べた上、

『あの人々はピザの運命を、ヷナに委ねました。』とも話した。

『私のゐない所で、あの獸の言ひ條を、あいつらの口からくり返したのですか！　あいつらはふだんヷナを神聖なもののやうにしてゐた。その奴等が「行け、裸で、あの野蠻人の所へ一人で行つて、そ

いつの云ふままになれ」と云つたのだらう。ヅナは私のものぢやないか。一體誰が私の承諾を求めようとするのだ？』

『それは、私が、求めたではないか。それで從がはれなければ、あの人達が來るだらう。』

ギドは、自分の信じてゐるヅナが、こんな憎むべき條約を、無論承知する筈はないと思つてゐた。

『來させて下さい。ヅナは私達の意志を云つたでせう……』

『お前も、どうかあれの答へに同意してくれ。』

二人がかうして論じ合つてゐる處へ、群集に送られたヅナがここへ歸つて來た。これを見たギドは走りよつてヅナを抱くのであつた。

『ああ、ヅナあいつらはお前に何を云つた。あの馬鹿な奴等が……そんな事はもう云はないでいいお前の眼をお見せ。ああ、まだみんな純潔な、貞節なままだ。少しのくもりもない。天の乙女が浴てゐる泉のやうに……あいつ等は望むべからざるものを望んだのだ。石を投げて天までとゞかせようとしたのだ。私の、世界の何物にも替へられない、只一つの愛を奪はうとしたのだ。何と云ふ大それた奴等だらう。併し、矢ツ張り私の愛をどうする事も出來なかつた。お前の眼を見た時、あいつらは唇がちゞんで何も云へなくなつたらう。お前は、きつと只だまつてあいつらを見てやつたらう。それであいつらはお前の心とはとても近付けない大きな、廣い、海のやうなへだゝりがあるのをさとつたらう。けれども、ここにまだ一人、白い髮の毛を垂れて、うつ向いてゐる老人がゐる。父と呼んでゐる

人がゐる。……惡魔の使ひをした……併し彼は老いてゐる。眼も見えない。理性の眼もくもつてしまつたのだ。だから私達は此老人を許してやらなければならない。私達には、今迄は緣もゆかりもない人になつてしまつてゐるのだ。私達の愛には、關係のない人だ。私達二人とは、離れた人なのだ。私達の愛が、どれ丈の力を持てゐるか、理解する事の出來なかつた人なのだ。だから、今お前の口で說明しておやり、私達が愛と云ふ言葉の意味も知らないで愛し合つてゐるのではないと云ふ事を。』

ギドはヴナの心持を一人でのみ込んで、自分の心は直ちにヴナの心だとして少しも疑ふ餘地なくかう云つた。併しヴナはそれには答へずに、マルコに近づいて『お父さま、私は今夜まゐります。』蒼ざめてはゐるが、併し決心を示した、崇嚴な顏色でかう云つた。マルコはヴナが自分の思つてゐた通りなのを喜んで、ヴナの額に接吻しながら、

『娘！　私は知つてゐました。』

ギドは驚愕した。

『ヴナ、お前は、何と云つてゐるんだ？』

『私は行かなくちやなりません。あなた、私はまゐります。』

『行く？　お前はどこへ行かうと云ふのだ！』

『私は、プリンチヴルレの營所へ、今夜まゐります……』

『それは、プリンチヴルレを殺すつもりでか、さうだ、そのために、行くと云ふのだらう！』

『あの人を殺さうとしたら、ピザの町は救はれますまい。』
『では、お前は彼奴(あいつ)を愛してゐるのか！』
『いいえ、私は其人を一度も見た事はありません。大層年寄りだと云ふ事を、今誰れかから、聞いたばかりです。』
『いやさうぢやない。私よりは若い、さうして綺麗だ。ああ、これが他の望みであるなら、どんな事でも私は甘んじてする。手と膝で這ひつくばひもしよう。ヷナと二人で、流浪(るらう)してもかまわない。名譽も地位も捨てよう。併し此事だけはどうしても私には承知出來ない。』
ギドはヷナを兩腕で抱いて、ヷナに今の言葉を取消して呉れ。行かないと言つて呉れと賴むやうに云ふのだ。でもヷナは決心をひるがへさなかつた。
『あなた、つらいでせう。苦しいでせう。察してゐます。でも、私は行かなければなりません。』
『お前は、私を愛してゐなかつたのだ。』『さうして今、お前はあの男を愛してゐるのだ。ああ私はどうすればいいのだ！　私は今それが分つた。』
ギドは、ヷナを冷たい穴牢に入れる事を命じたが、誰一人、ヷナを連れて行くものは、なかつた。
ギドは又、自分の不名譽にかへて、ヷナを切らうとして劍を拔いたがヷナは動かない。
『愛の力でなさるのなら……』
『ふむ、愛の力！　さうだお前には、今まで愛と云ふものが、なかつたのだ。愛と云ふ言葉の意味も、

分つてゐないのだ。お前の眼には、涙がない。まるで砂漠のやうだ。お前にとつては、私は宿を貸してやつたゞけに過ぎなかつたのだ。それだけなのだ。』
『私の今の感情は、とても、言葉には現はせません。何と云つたらいいでせう……私は、あなたを愛してゐるのです。私は、あなたのものです。でも、私は行かなくてはなりません。』
『勝手におし、もうお前は私のものぢやあない。行け！ 私はお前と緣を切る。もう私の傍へもよつて吳れるな。お父さん、かうなつたのもあなたの細工です。今思へば、矢ツ張りお父さんはヷナを知つてゐたのです。ヷナを、彼奴の營所まで連れてお出なさい。けれども、私はヷナに替へた肉やパンを、一切れでも食はうとは思つてゐませんから……』
『あなた！ 私の眼を見て下さい。』さう云つてヷナは、ギドにすがりついて、今の感情を、言葉にもあらはせない感情を、ギドに理解させようとした。
『私には、もうお前が分らなくなつた。出ておいで、日は暮れかかつて來た。時刻はせまつて來る。あいつが待つてゐるだらう。私には、もう何も云ふ事はない。私はもう、愛と貞操の、どん底まで見通してしまつた　萬事終つた。さうだ、その純白な手の指、その唇、その清淨な唇、私も一度は信じたのだつたが、今は……全く何もかも、すんでしまつたのだ……行け、何を恐れてゐるんだ。お前は私が自殺でもするかと思ふのか。馬鹿な。私は狂人ぢやない。理性のぐらつくのは愛にもえてゐる時ばかりだ。ああ、いくら摑んでゐても消えて行く愛は、引き留められるものぢやあない。お前の手を、

おはなし。愛は亡びた、亡びてしまつたんだ。さやうなら、ヷナ、さやうなら。もう歸つては來まいね。』

『いいえ、歸つて來ます。』

『お父さん！　ヷナを知つてゐるのは、矢ツ張り、あなたでした。私は見てゐよう……』

ヷナは、けれども、とう／＼出て行つてしまふ。ギドはそれを目で見送つて、絶望のあまりよろめいて、大理石の圓柱にあやふく支へられた。

第一幕終り

第二幕

プリンチヷルレは、武器や高貴な毛皮などの取り散らしてある、自分の幕營の一室で、今武器や書類を整理してゐる。さうして、マルコに申し出した、條約の成否をきづかつてゐた。所へ、エディオが這入つて來て、國の辯務官のツリヴルチオから手紙が屆いた事を報じた。で開いて見ると、あすの未明から總攻撃をかけろ。もしさうしなければ、直ちに捕縛するといふ最後の命令だつた。

「一鬪かなければ直に捕縛する。そんな嚇かしが、今の、私の歡喜の前に、何のききめもない。誹謗、捕縛、何でもするが好い。併し今夜は、、少なくとも今夜一夜は、私のものだ。私は今人生の最高の望に胸がをどつてゐるのだ。」

プリンチヷルレの心の中には、多年待ちに待つた、只一つの望みが、今夜實現されると云ふ、歡喜

た事を告げた。

『あの、萎びた小さい役人先生、とう〳〵決心したんだな。ふむ、彼等は何も知らないのだ。私を死ぬより恐れてゐる男が來る？　何か重大な命令が來たに相違ない。』と思つた。さうして此會見の結果が、何を自分にもたらすか、も豫感出來た。プリンチヷルレは更めて、誰れが入口を堅めてゐるかをヹデイオに訊ねた。

『あなた樣の、ガリシア隊の古參兵が二人で、固めてをります。』

プリンチヷルレは、『あれらなら大丈夫だ。フエルナンドにデイエゴか。あれならたとひ、天の尊者をでも、おれの命令なら縛るだらう』と、滿足さうに笑つた。

『もう何時だ？　マルコ老人はまだ歸らないか？』と云つて、ヹデイオにランプを燈させた。ヷナが、若し自分の提議をきかなければ、マルコがプリンチヷルレの陣營に、歸つて來る筈になつてゐた。

『マルコ老人の、歸つて來ない處を見ると、かの女は、承知したのだらう。』

プリンチヷルレは、かの女が承諾したら、合圖のしるしに、烽火をカムパニーレの塔にたく約束なので、ヹデイオと共に、天幕の外に出て眺めた。烽火は、彼の望んでゐたのにそむかず、明々ともえてゐた。

『あゝ、おれの望、少年の頃から、待ちに待つたおれの望は、成就した。かの女は來るのだ。自分の

身を捨てて、他人を生かす爲に、人民を救ふと共に、私も救はれた。』

併し、彼はまもなく、そこをどかなければならなかつた。それはヱデイオが、ツリヴルチオが來た、と告げたからだ。

「あの男からの三通の手紙はどうした。ここには二通しかない。今夜來たのは?。』

「あなた樣が、手で揉んでおいでになる、それではございませんか?』

からヱデイオが答へた時、丁度ツリヴルチオが這入つて來た。

『ふむ、とう〳〵やつて來たね。』

ツリヴルチオは、さぐるやうな眼で、

『君は、あの怪しい烽火を見てゐましたね。カムパニーレの塔からの合圖のやうですね。』

『君はあれを、合圖だと思ふのですか?』

『疑ひもなく……ところで、私は、君に話がある。』

プリンチヴルレは、ヱデイオに立ち去るやうに命じた、『でも、用があるかもしれないから、あまり遠くへは行くな。』とつけ加へた。

『君にも、分つてゐるでせう。私が、君に對して、今迄どれだけ盡してゐるか。私は、君を選出するに就て、隨分骨を折つた。のみならず、常に多大の尊敬をはらつてゐる事も、事實の上から御承知の筈だ。君の若い時の系圖が、明らかでない爲に、隨分反對もあつたに係らず、こんな、壯大な出軍に

度のやり口に就いては、なまけてゐる、果斷に乏しい、と云ふ非難が起つてゐます。中には、君の忠義心を疑ぐつてゐるものさへあるです。幸に、議會で、君を捕縛して吟味しようと云ふ時、私にも相談があつたから、私は、君のために、わざ〳〵フイレンチエへ出掛けて、反證を擧げて、辯護しておきました。私は、矢ツ張り、忠實な君の味方なんですよ。だから、君が働らいて下さらないと、私は君を推薦した事を悔いるやうになるかもしれない。世間では、フイレンチエの政策には、權謀術數だと云つてゐるが、それは、用意周到なからで、つまり、最高智識の發現なのだから、お互に、この重大な秘密政策を助けなくてはなりません。とに角、君が明朝總攻擊を開始して下されば、すべて好都合になるんですからね、さうすれば、君への非難攻擊も稱贊の聲に替つてしまふし、今日までの君の敵も熱心な君の味方になるでせう……』

『君の云ふ事は、それだけですか。』

『まあさうです。尤も、私は法律上、君等を牽制する位地――尤もこれはフイレンチエの秘密政策に從つてだが――に立たされてゐましたからね。併し君に對する友情は日を追うて增しました。』

『此の命令は、――私の落手した、――これは君がお書になつたのですか? 君御自身で?』

『其通り、なぜそれをお尋ねですか?』

『では、此二通の手紙は?』

『さうかも知れません。とにかく、中を見なければ……』

『それには及びません。分つてゐます。』

『それは君が差押へたと云ふ手紙ですか。私の望み通りに……試驗がうまくいつたね。』

『此の會見を早く切り上げたいから、こんな子供じみた、愚劣な小細工の事などは云ふまい。此の手紙は、君の所謂る重大なフイレンチエの、秘密政策から出た狡猾な、扉大將たる私の勝利を値切らうと云ふ下ごしらへか、或は君の惡意から揑造した纔誣か知らないが、私には、今日、そんなことは何の嚇しにもならない。フイレンチエの凱旋などより、もつと幸福な報酬が得られる事になつたのだから、君が私をいかに誣ひても、卑劣なものだと云つても、君の僞證をいひ說かうとは思はない。いや、私は、今日君の纔誣を事實にしようと思てゐる。私は機先を制してやる。私は今夜君や議政官を賣つてやる。』私は今迄謀叛人になつた事はない。併し私は、君の愚劣な手紙が手に這入つて以來、眼が明いた。で、君等には殘酷な痛手を喰はしてやる。さうして、奸惡な或る一都市を懲らしてやる。』今夜私はピザの町を救つてやる。今一度抵抗する力を與へてやるのだ。君はもう私の手の中にある。フイレンチエの運命は、私の手の中にあるやうな者だ。』

ツリヴルチオは自分の計畫が、すべて、裏をかかれてしまつた事をさとつて、急に短劍を拔いて、プリンチヴルレを切りつけた。プリンチヴルレは、腕で搏擊を外し、ツリヴルチオの短劍をもつた腕を高く上げさせた。共拍子に、プリンチヴルレは顏に負傷した。プリンチヴルレはそれにはまだ氣が

つかなかつた。

『さあ、もう摑まへた。此短劍を下ろしさへすれば、君の命をたつ事も出來る。もう君の喉の方に劍が向つてゐるやうだ。君は恐ろしくないか。何も云はないのは？』

『私の命はどうせないものと思つてゐたのだ。君は短劍をつかふがいい。』とツリヴルチォは冷やかに云つた。

『軍人でも、それ程平氣で死の手に向ふものはたんとはない。その小さな弱い體に、こんな氣力があらうとは思はなかつた。實に不思議だ。』

『君等のやうな武人は、刀の切先より外に、勇氣はないものだと思つてゐる……』

『さうかもしれない。結局、君と私とは、違つた神様に仕へてゐるのだ。君を放つ譯にはゆかないが、害は加へないよ。』

プリンチヴルレは、頰に血がたれて來たので、明いた方の手で、顏の血を拭つた。

『ああ血が出てゐる。だが此の場合君が僕だつたらどうする？』

『容赦はしない。』

『ふむ、君はよほど變つた人だ……私はこれまで、フイレンチエのために、三度大戰爭をしたが、少しも自分の身を惜しんだ事はない。私はフイレンチエの忠實な僕だつた。併しそれは、みんな君等の爲めになつたばかりだ。君はよく私を偵察してゐたから、分つてゐる筈だ。處が君の手紙は私を讒誣

し曲解してゐる。』

『私は、刻下の急務を防がうとしたのだ、その爲めには、虚僞でも讒言でもする。フイレンチエの人民は、一體君を大事にしすぎた。私はそんな夢をさましてやるのが急務だと思つたからね。だからフイレンチエに、警告を與へてやつたのだ。僞りの意味はフイレンチエには分つてゐる筈だ。』

『君の讒誣の手紙さへなければ、私もこんな決心はしなかつたのだ。』

『いや、したかもしれない。』

『何！　罪もないものを「かもしれない」だけで犧牲にするのか？』

『フイレンチエの安寧のためには、一人を犧牲にする位何でもない！』

『私には君が分らなくなつて來た。それも私に國と云ふものがないからだらう。私も時々自分の國のない事を悔いる事もある。併しその代り君等のもつてゐないものを、私は持つてゐる。私等はお互に遠く隔たつた人間だ。我々は別の道をゆくのだ。さあ別れよう。握手して別れよう。』

『まだ〳〵。私が君と握手するのは君の刑罰の日だ。』

『どうでもいい、今日君が負けたが、明日は君が勝つかもしれない。』

プリンチヴルレはヱヂオを呼んだ。ヱヂオはプリンチヴルレの額に血の流れてゐるのを見て氣づかつて尋ねたが、『何でもない。』と答へて、ツリヴルチオを、二人の番兵に連れて行かせるやうに命じた。「私の命令が行くまで害を加へないで、安全に保護するやうに」と云ひつけた。

プリンチヷルレは、彼等の去つた後鏡の前に立つた。傷口を見てゐた。ヱテイオが間もなく歸つて來た。

『言ひつけた通りにしたか。』

『はい。あなた樣、まだ血が流れてをります。お顏をまきませう。併し是れが、破滅の本にはなりは致しませんか?』

『破滅! から云ふ正當な復讐をして、こんな幸福も共に得られるなら、死ぬ日まで日日破滅を受けて行きたい。私の永い間待ちに待つた幸福が、今運命の力で、いよ〳〵私の手に落ちて來たのだ。私は今、人生の最高潮に立つてゐるのだ。此の外の事はどうでもいい。がお前はかはいさうだ。ヱヂオお前は何うなるだらう。』

『私はどこまでもあなた樣にお伴してまゐります。』

『おれは何所へ行くか、どうなるか、自分にも分らない。だから、お前はお前で逃げるがいい。』

プリンチヷルレは尙、貨車や、家畜の用意が出來てゐるかを尋ねて、金貨を殘らずヱヂオに與へてゐると、突然砲聲が遠くで一發聽えた。プリンチヷルレは、萬一ヷナを射擊したのではないかときづかつた。で、プリンチヷルレは、ヱヂオを見に行かした。

間もなく、ヱヂオは帷帳の所迄ヷナを連れて來た。ヷナは長い外套に身を包んで、閾の所に現れた。

『私は參りました。お差圖どほり。』

ヴナは押しつけた聲でから云つた。プリンチヴルレはヴナに近づいた。彼は歡喜に震えてゐた。

『あなたは傷を受けたのですか？　あなたの手に血がついてゐる。』

『營所の近くへ參りました時、丸が肩をかすつたのです。』

『誰れが擊ちましたか？』

『存じません。其男はすぐ逃げてしまひました。』

『痛みますか……』

『いいえ。』

『傷を卷かせませうか？』

『それには及びません。』

『あなたは、決心していらつしつたか？』

『はい。』

『ギド君は承知しましたか？』

『はい。』

『あなたがもし後悔してお出なさるなら、さうおつしやい。まだ遲くはありません。』

『いいえ。』

『私の信ずる所では、あなたを貞節な婦人だと思つてゐますが、忠實に夫を愛してゐる……』

『はい。』
『では、どうしてあなたは斯んな事をなさるのです？』
『ピザの人民を救ふためかうしなければ、あの人たちは餓ゑて死ぬるのですから……』
『あなたは外套を着てゐらつしやるだけですか？』
『はい。』
『あなたは、天幕の前の家畜や貨車を御覽でしたか？』
『はい。』
『あれらは、みんな、ピザの町に這入らうとしてあなたの命令を待つてゐるのです。出發させませうか？』
『ええ。』
プリンチヷルレはヷナの目の前で合圖を與へ、それらの出發するのを見せた。
『あなたのおかげで、ピザは今救はれました。もう敗れる恐れはありません。あなた滿足しましたか？』
『ええ。』
『あなたは毒藥を持てはゐないでせうね？　武器を隱してはゐないでせうね？』
『私はお差圖どほりにしました。御心配ならお探しなさい。』

『それは、あなたの爲めにです。』

プリンチヴルレは、あたかも女王に對する僕のやうに叮重にヴナを、側の長椅子に招じるのであつた。さうして自身はヴナの足もとに膝まづき其手を取り、

『ジオヴナ。』と呼んだ。ヴナは驚いて立ち上つて、じつとプリンチヴルレを見つめてゐた。

『おお、ヴナさん、私はかうして、毎日毎日あなたの名を呼んでゐたのです。私はその名をよぶと、心が震へるのです。其の名は、私の持つてゐる凡てのものです。私のいのちです。私は、あなたの面前でたゞ一度でも言つて見たいと、的もなくあこがれてゐたのでず。この願ひのためには、私はどの位の思ひをしたか。女もそれを聞いたら、私の戀の懊惱を知つてくれるでせう。それ程思つたものが、今見ると只影に過ぎない……』

『誰れです、あなたは？』

『私が分りませんか？　思ひ出せませんか？　ああ、あなたにとつては……もう何も望みますまい。悔いもしますまい。一生の目的であつたものを、ほんの一瞬間しみ〴〵と眺めてゐる。哀れな男だ。不幸な男だ。』

『あなたは誰です？　私には思ひ出せません。』

『かうして、あなたを生命と喜びその者のやうにながめてゐる私を、あなたは思ひ出せませんか？』

『私にはどうしても……第一信じられません。』

『あなたはお忘れなすつた……ああ疾くの昔にお忘れなすつた。あれ程の大事を時は拭ひ消してしまふ……あなたは八ツでした、初めてお目にかかつた時は。私は十二でした。』

『何處で?』

『ヱニスです、六月の日曜日でした。私の父はあなたのお母さんの眞珠の頸輪を持つて行つたのです。父は飾り屋でした。私は何の氣なしにお庭を歩いてゐると、池の傍のてんにんくわの茂つた中で、あなたが泣いてゐらしつた。あなたの金の指環が水に落ちたと云つて……私は直に池に飛び込んでひろつて、あなたの指に差して上げました。其時あなたは接吻して下すつた。』

『あれはジアネルロと云ふ、金髮の美しい子供でした。ぢやあ、あなたはジアネルロでしたか?』

『さうです』

『あなたが? どうしてさう見えませう。お顏が繃帶で隱れてゐて、見えるのはお眼ばかりですもの。』

プリンチヴルレは繃帶をわきへ寄せて、

『私と云ふことがおわかりになりましたか?』

『ああ、あなたのお笑ひ顏でわかりました。おや、あなたは手傷をうけてゐらつしやる。』

ヴナはプリンチヴルレの繃帶をまきかへてやりながら、

『さう〳〵、私思ひ出しました。月桂樹や石榴が庭に澤山ありましたね。私たちはよくあそこで遊びましたね。』

『さう、みんなで十二度……』

『あなたは、私を小さい女王のやうに大事にして下すつた。私は或る日あなたを待つてゐました。あなたを思つてゐたのです。けれども、あなたはあれきり來て下さらなかつた。』

『父にアメリカへ連れて行かれたからです。私達は其大砂漠で、とう〳〵はぐれてしまいました。それから私は、トルコ人やアラビヤ人やスペイン人に囚へられました。さうして私は流浪しました。私が思ひ思つてヱニスに歸つて來た時は、あなたはもうゐらつしやらなかつた。私は的もなくあなたを尋ねました。それでもとう〳〵あなたを尋ねあてました。あなたの美くしさのお蔭です。一度あなたを見たものは永く忘れられないからです。』

『あなたは、それ程深く慕つていらしつた女に、なぜ逢はうとなさらなかつたのです？』

『私はあなたを尋ね歩いた時、あなたがおちぶれたこと、トスカニアの貴族と結婚なすつた事を聞きました。あなたが其の女王として敬愛されてゐる、と云ふことも聞きました。ああ私は、あなたに逢ひたさのあまり、幾度城壁のまわりをさまよひ歩いたかしれません。けれども運命は私に犧牲を求めました。私は愛のためにあなたの折角の、戀と幸福とを妨げてはならない、と思ひました。それに、私は家も國もない一冒險者でした。一方は勢力もあり、富んでゐるピザの貴族です。私にはどうする事も出來なかつた。其内私は雇はれの軍人になりました。二度三度の軍功で私の名は揚りました。併し望みは無くなつてゐました。でも私は時の來るのを待つてゐました。さうして、とう〳〵ピザに派

遣される日が來ました。』

『どうして男は、戀をすると、さう臆病になるのでせう！　誤解してはいけません。私はあなたを戀してゐるのではないのですから……あなたが二度目にヱニスへお出になつた時は、まだ遲くはなかつたのです。さうして戀に見すてて行くものではありません。私がもしあなた程の戀をしたら……ええ屹度運命の力にでも、私の幸福をもぎ取らせません。私は運命に向つて「おどき、私がそこを通るのだ」と云つてやります。愛する男のためになら、どんなに高い犧牲でも拂つて見せます……』

『あなたは、あの男を愛してはゐらつしやらないのでせう？』

プリンチヴルレはヴナの手を取らうとした。

『私の手を取つてはいけません。此の手はあなたに取らせられない。私と云ふものを明らかにしておかなくちやなりません。ギドが私と結婚しました時は、私は貧乏でした。一人ぼつちでした。一人で貧しい女はすぐ世間の誹りに落ちてしまふ。中でも美しい女と、手管や僞はりを卑む女は……其の誹りをギドは少しも氣にかけないで、私に眞實をつくしてくれました。私はそれが嬉しかつた。私は幸福でした。今日では私はギドを愛してゐます。あなたが御自身の上に想像していらしやる愛よりも、もつとしつかりした、信實な尋常な愛です。運命が私に授けてくれたのです。他にはもう何にもいりません。私が申すのは、あなたの事でも私のことでもありません。私は只、愛のためにさう申したのです、あなたはそれを誤解なすつた。愛のためです。あなたのものでも、私のものでもない愛のため

です。あなたは愛の取るべき道もとつていらつしやらなかつた。』

『ああ、ヴナさん。あなたは私を過酷に、いや私の戀を、過酷にお捌きなさる。私がこの戀のためにどんなに苦しんだか、あなたは御存じないからです。胸にこの戀をもつた私は、人間の、すべての榮譽も喜びも、うばはれてしまひました。たとへ其戀は、何もせず、何も企てなくとも、有ることは疑へない。私の生命は、それに捉へられてゐました。私が犧牲でした。信じて下さい。あなたは今、私の天幕の中にいらつしやる。どうしようと、私の心の儘にする事が出來る。それに拘はらず、私の戀は他の物をもとめてゐる。世間の戀する人が求めてゐるやうなものでない他のものを……それは、あなたにもお分りでせう。あなたの手を取つたのも、私を信じて下さるだらう、と思つたからです。私は二度とあなたのおからだにさわりますまい。だからどうか私を信じて下さい。併しここでお別れしたら、もうお目にかかれますまいから、せめて、私の戀がどんなものであつたか、知つてだけは頂きたい。到底出來ない戀だときまつた時、始めてふみ止まつたのでした。』

『私は、疑ぐつたからと云つて、決して、人間以上の試しや、恐ろしい障害を越せといふのではありません。私はそんな證據が欲しいとは思つてゐません。私は信じたい。斯ういふ高大な愛には、何かしら神聖なものがある筈です。さうしてそれにはどれ程冷たい女でもきつと動かされるでせう。動かされずにはゐません。あなたは、私を一時のあひだ、此の天幕の下に連れて來たいばつかりに、あなたが此世に持つていらつしやる、すべてのものをお毀しなすつた。私は信じます。』

『あなたは私の最後にやつた事を大きな犧牲だとおもつていらつしやるやうだ。併し私は何もこのことでは犧牲になつてはゐません。』

『何故です？　私には分りません。あなたは國にお叛きなすつたぢやありませんか。これまでの功勞を棄てておしまひなすつた。名譽も、未來も、……さうしてあなたの手に殘つたものは何でせう？追放か、死罪です……。』

「私は、たゞ雇はれの軍人だと云ふだけです。私はフイレンチエの辨務官どもの爲めに讒言されて罰せられる事になつてゐるのです。あなたの事がなくとも、どうせ私は亡びるのです。あなたは「國に叛いてまで」とおつしやる。併し私に國はありません。若私に國があつたら、如何に私の戀が大きくても、其の爲めに國に叛きはしなかつたでせう。』

『私の爲めに犧牲にして下すつたのは、そんなに僅かなのでせう。』

『まつたく、それが事實なのです。僞はりで買つた笑は、私に何の喜びにもならない。』

『ああ、あなた、それが却つてどんな愛の證據よりも私には嬉しいのです。さあ私の手を……』

『私は、出來るなら、愛で此手がとりたい！　が、それはどうでもいい。ヷナさん、私は斯うして、私の兩手の間に、あなたの手を摑んでゐます。もう私のものです。私はその香りに醉つてゐます。私と一體になつてゐます。ああ此のなつかしい手。私はこの手に接吻する、あなたはそれをこばまない。あなたは、苦しい地位にあなたをおとした私を、許して下さいますか？』

『私だつて、あなたの地位にゐたら、きつとさうしたでせう。』
『あなたは此の天幕へ來るのを承知なすつた時、私が誰れだか御存じでしたか？』
『いいえ、只非常に美しい若い王子だ、いや物凄い老人だ、と云ふやうな取りとめもない噂をきいただけでした。』
『そしてあなたは、恐ろしいとお思ひなさらなかつたか、夜お一人でこんな見ず知らずの野蠻人の營所へ來て？』
『犧牲は覺悟してゐました。』
『私を御覽なすつた時は？』
『繃帶をおよせなすつた後は、私にも分りました。あなたは、私が最初ここへ參つた時、どうしようと考へてゐらしつて？』
『私は私の戀の苦しさにあなたを憎いと思つてゐました。一切を私と一緒に引き倒してやらう、と思つてゐました。もしあの時、あなたがああでないそぶりや言葉をお出しになつたら、私の狂妄な野獸性は何を仕出したか想像できません。けれども一目見た時、それがすつかり變つてしまひました。』
『そのあなたのお心持は私にも分つてゐました。お互に解し合つたのです。そしてあなたのお話をきいてゐる間に、私は自分の心持を自分で話してゐるのぢやあないか、と思つた位です。』
『私もさうでした。私は私自身が一變したのです。』

『私も變りました。自分でも不思議でならない。私はこれまでこんなに人と語りあつた事はありません。あの人はめつたに私と口をきかない。父のマルコとは少しは話すこともありますが・それでもこんなにではありません。あなたの目は他の人々のやうに私を嚇かさなかつた。一目見てあなたがすつかり分つたやうな氣がしました。』
『運命がもしあなたと私を引分けなかつたら、あなたは私を愛して下すつたでせうか?』
『私にそれが出來ない事だと云ふのは、あなたにもお分りでせう。さうだつたら愛したでせうと云ふのは・今愛しますと云ふのと同じ事になりますから……けれどもからして二人で語り合つてゐればああ私が世界に一人ぼつちだつたら……でもギドのあの時の嘆きを思ふと……私はからしてはゐられない。夜明にまもないでせう。』
二人がから話し合つてゐた時急に、天幕の外がざわめいて來た。と、ヱヂオがプリンチヷルレを呼びかけて、辨務官のマラドラが・六百の兵を引きつれて、プリンチヷルレを捕縛しに來てゐることを告げた。
『ヷナさん。もう一瞬間の猶豫もありません。信用の出來る兵を二人つけて差上ますから……』
『そしてあなたはどうなさる?』
『世間は廣いからどこかに隱れ家を見つけませう。』
『ピザへいらつしやい。』

『あなたと？　それは出來ない。』
『ほんの幾日か……行衞をくらますために。』
『ギド君が何うするのでせう？』
『ギドだつて賓客に對する禮は守りませう。』
『信じて呉れませうか。あなたがお話しなすつたら？』
『信じませう。いいえ信じなくちやなりません。でも若し信じて呉れませんでしたら……そんなことはない。さあまゐりませう。』
『いいえ、どうしても、私は……』
『なぜ？　何を恐れてゐらつしやるの？』
『あなたのために……』
『私にとつては、一人で歸らうと、あなたをお連れ申さうと、危險は同じ事です。あなたはピザをお救ひなすつた。ですから、こんどはピザがあなたを救はなくちやなりません。救ふのが當然です。私が誓つて保護します。』
『では御一緒に行きませう。』
　プリンチヷルレがヷナと天幕の外に出た時、ピザの町の祝賀の大篝火が見えた。鐘の音もきこえた。
『御覽なさい、プリンチヷルレさん。あなたのなすつた事を輝さうと思つて、ピザの人達は大篝火を

たいてゐます。ピザの人達の喜びの光りです。お聞きなさい。あの叫び聲を、あの喜しさうな聲を……ああ私は幸福です、幸福です。これもあなたのお蔭です。本當に私を愛して下さるあなたのお蔭です。』

ヷナは感極つて、プリンチヷルレを熱心に接吻した。

『それが、私のあなたに上げられる只一度の接吻です。』

『おおヷナさん！　戀に、これより美しい接吻がありませうか？』

『ああ、何と云ふ美しさでせう。今宵の曉の覺めぎはは！　あの喜びの消えない前に、さあまゐりませう。』

プリンチヷルレは、ヷナに伴なはれて、ピザへと急いで出かけたのである。　第二幕終り

第三幕

此處はピザ城の大廣間である。ギド、マルコ、ボルソ、トレルロの四人は曉の光りと共に歸城する筈のヷナを待つてゐるのであつた。

『私は、あなた方の食物を買ふために、高い價をはらはされました。私の屈辱で、あなた方は腹一杯食つておしまひなすつた。私は出來るだけの事はしてしまいました。だが今度は私の番です。今まては、あなたも、ヷナにも一歩を讓つてゐました。併しもう私は自由になつた。私は自分の恥辱を投げ

棄てます。』

ギドは、今夜の思ひがけない屈辱に對する忍び難い悲痛を顏にあらはし、マルコにかう話しかけたのである。

『ギドや、お前の言葉では慰められない苦しい胸は充分に察してゐます。ピザは救れた。其の代りお前にはそれが隨分高い代價になつてゐる事も分つてゐます。ピザに與へた幸福が大きいだけ、お前の悲痛の深いことも分つてゐます。お前が此復讐にどう云ふ事をしようと思つてゐるか想像出來ないが、これだけの負擔を我慢させられたお前に對して、私達はそれに口を入れる權利はありません。併し昨日の事に、やつぱり、ああするより外に道はなかつたのです。どうかもう一度だけ私の言葉に耳を貸してお吳れ。ヷナは間もなく歸るだらうが、どうかあれを叱らないでお吳れ、今日あれを所置するのは待つてお吳れ。人間が過度の悲しみに支配されてゐる時は、取返しのつかない程殘酷なことをしたり云つたりするものだからね。そんな危險な時刻を通りこすまで……避け難い自然の力に弄ばれる哀れな我々は、生涯に幾つかの樣々な悲しみに出遇はなくてはならない。只、我々がさう云ふ不幸に眼の曇つた時、守らなくてはならないことは、十分に理解し容赦することの出來る時、愛の還つて來る時まで待つことだ。』

『あなたの云ふ事はそれですみましたか。あなたは、私のこのきたなく恥かしめられ、壞された一生を、どんな言葉であなたが償なはうとなさるかきいてみたかつたのです。だから、これ限り、と思つ

てあなたの言ひたい事だけ言はせたのです。併し、今はそんな甘い言葉で、この恥辱に云ひ譯をつけようとしたつて駄目です。だれがそんな言葉でだまされるものがありませう。忍耐しろ、忘れてやれ、許せ、ふむ、私にはそんな言葉では滿足できません。私はこの恥辱をぬぐはなくてはなりません。私はヷナを奪つた男に、此恥辱を償なはせなければなりません、ヷナはもう私のものではない。ふみにじられたきたない死骸です。さうして其のふみにじつた男は其のままでゐる。私がどうして忘れられませう。あなただつて四五年前なら、私のしようとすることを、おとめなさらなかつたに違ひない。ピザはもう食物を得ました。武器を得ました。私はするだけのことをした。ピザに對する義務は果しました。これからは私の得べきものを求めます。ピザの兵卒は、私自身で高い價で買つたものです。私のものです。私の要求をみたさない中は此等の兵卒は返しません。ヷナは、プリンチヷルレを亡ぼした後に、許してやります。ヷナは惑はされたのです。けれどもあれのした事には、義に勇む心がある。只、正當に利用されなかつた。私はヷナのした事を忘れることは出來まい。が、少くとも愛の力で、うすくはなるでせう。たゞプリンチヷルレだけは……思つても恥と戰慄を感ずる。又ここにも、幸福の案內者維持者であることを天職だとしてゐながら、惡魔に力をそへた人がある。そのため今に恐ろしい事が起るだらう。併し恐ろしいけれども正義だ。子が父を呪ふ、憎む、ああ何と云ふ世の中の轉倒だ……』

『私は呪つて吳れ、併しヷナはゆるして吳れ。もしヷナに許しがたい過ちがあつたとすれば、それは

私のせいだ。義勇はヴナの功だ。私は助言はしたが、犧牲にはあづからないのだからね。私はお前の捌きを爭ふ權利はない。私は今日、此の世で一番大事にしてゐたものをみんな失なつたが……それでも、よい助言だつたと信じてゐます。お前の怒も尤だ。私としても若かつたら、お前と同じことをしたらう。お前がどんなに私を憎んでゐるかもよく分つてゐます。もう二度と顏を見せまい。私は出て行きます、斯うして出て行く以上、またお前を見に來ることはあつても、お前の目にふれないやうに氣をつけます。人間が、人生の盛りに立つてゐる時は、他の罪を赦すと云ふことは、出來にくいものだからね。お前が私を赦す時まで生きてゐる望はない。私は年を取り過ぎてゐる。私は何も言はずに出て行きませう。どうか、お前の憎みも恥辱も、みんな私が持ち去つたと思つて呉れ。只、最後に、今ここへくるヴナがお前の腕に寄りかゝるのを見せてくれ。人間の愁は、一番年をとつたものが荷つて行くがいいのだ。どうせ、其の重荷を荷つてゐるのも、もう長くはあるまいから……』

ボルソと、トレルロも、續いて露臺に走せよつた。

『おお、あの町を御覧、屋根も、木の葉も、群集のふつてゐる腕や手で、まつ黑だ。そら喝采してゐる。喝采してゐる。』

マルコは、餘りの嬉しさに、から叫びつゞけるのであつた。

併し、ギドは、にがにがしい顏をして、柱にもたれたまま身動きもしなかつた。群集の聲はだんだん近づいて來た。さうして絕えずマルコが言ひ終らぬ中に、何の音ともしれぬ騷音がきこえたが、そ

れが段々近づくと、ピザの人民が歡喜の聲でヷナを迎へてゐるのだと云ふ事が分つた。

『ヷナが歸つて來た。ヷナだ。ヷナだ』マルコはかう云つて露臺にかけよつた。喝采のこゑをひびかせた。マルコは露臺でじつと待つてゐられない程心がおどつてゐた。

『おお、ヷナはどこにゐる！　何と云ふ哀れな事だ。あれ程待ち受けてゐたヷナを見ることが出來ない。涙が、涙が、それをみせない。ボルソ、あれはどこにゐる。ヷナはどこにゐる。どう行けばあれに逢へるか？……』

『人民どもは熱狂しております、下へお出なさいますな。』ボルソはかう云つてマルコを引きとめた。

『人民どもは興奮して全く統御を失なつてをります。さうして、あの方はどうせこちらへ御出でになりますから。もうあそこにお見えになりました。急いでこちらへお出でになつてゐます。頭をお上げになりました。こちらを御覧になつてお笑ひになりました。意氣揚々として歸つてゐらつしやいます。人民の上に照り輝やいてお出になります。』

『私には見えない。私には見えない。今となつて待ちにまつた一つのものを私に見せない。私は今こそ老といふものを呪ふ。』

『だが、お傍に一緒に歩いてゐる男は誰れだらう？』

トレルロは突然かう云つた。ボルソも其方を見た。

『分らないね、ついぞ見た事のない男だ。それに顔をかくしてゐる。』

『歡喜の聲で御堂中が震へるやうだ。ああ私にも見えて來た。もうみんなが門の近くへ來た。群集は二つに分れた。

マルコは吸ひよせられるやうに群集の方へ目をやつてゐながら叫び喜んでゐた。

『はい。あれはヷナ樣に道を明けてゐるのでございます。御覽なさいまし、母親達は子供を差出してヷナ樣にさはつて貰つてゐます。男どもはお踏みになつた石に接吻しようとして屈んでをります。みんな嬉しさで狂喜してをります。お氣をおつけなさいませ。あれ等が此階段まで來ましたら私どもははね飛ばされてしまひませう。あの番兵が入口を固めようと突進してゐます。門を閉ぢるやうに命令いたしませう……』

ボルソはかう云ひながら、階段の方に行かうとした。

『いや、思ふ存分にさせてやるがいい！』とマルコはそれを止めた。

『あれらも隨分苦しんだ。あれらの歡びを關門を設けてせきとめてはならない。ここにも歡びの花を咲き盛らすがいい。ああ氣の毒な人民だちよ、勇敢な人民たちよ、私も喜びに醉ふてゐる。』

マルコは自ら群集の方へ進んだ。ヷナは此時もう階段をのぼつて來てゐた。プリンチヷルレと並んで、名譽に對する滿足の笑を顏にみなぎらしながら群集に送られて來た。これを見たマルコはヷナの方に突進しかけた。併しそれはボルソとトレルロとに引止められた。

『おおヷナ！　ヷナ！　お出で、皆で私を引きとめてゐる。此の壯大な喜びに驚かされたのだ。さあ

ヷナ、昔のジュデイスよりも美しい、リュークリースよりも潔い娘！　私も花を持つてゐる。お出。ここへ、私も月桂樹と百合と薔薇の花でお前の共榮光の冠りを飾りませう。』
ヷナは階段を登りきると、走りよつてマルコに身を投げかけた。
『お父さま、私は幸福です……』
マルコはそれをしつかりと抱いた。
『おおヷナ、私も幸福ですよ。御覽、天もお前の歸るのを歡呼してゐる。お前の身は輝やいてゐる。如何に恐ろしい敵も、お前の光明をお前から奪ふことは出來なかつた。お前の唇からただ一つの笑も奪ふことはできなかつた……』
『お父さま、お聞き下さい。』
ヷナは急にあたりを見まわした。第一に自身を迎へて呉れなければならないギドを目で尋ねた。
『けれども、ギドばどこにゐませう？　私は第一番にあの人に話さなくてはならない。』
『ギドはそこにゐますよ。』マルコは、まだ一言も發しないで、じつとヷナを見つめてゐるギドを指さして示した。
『あれが私を遠ざけたのは尤もだ。併し、お前は許される。お前の光榮ある罪は赦される。どうかお前がギドの腕に抱きとられる所を見せてお呉れ。それがお前の愛を見ることの最後になるだらうから……』

ギドば少しヴナの方へ進んだ・ヴナも進んでギドの腕に身を投げかけようとしたが・ギドはそつけなくそれをさえぎつた。

さうして周圍を取まいてゐる群集に向つて、『行け！　みんな！』と鋭い聲で云つた。

『いいえ待たせて置いて下さい！』とヴナはそれをさえぎつて、

『あの人達にも聞かせなくてはなりません。あなた、よく聞いて下さい。』

ギドはヴナに怒りの聲で、

『私の近くへ來るな、私の體にさはるな。』と押しのけて、更に群集に向つて、

『行けと云ふのが聞えないか！』

群集は恐れて後へ下つた。併しまだ立去りはしない。

「ボルソ、トレルロ、番兵を呼べ。番兵を。』

併し二人の副官がまだ命令を傳へない中に、ギドは怒りの聲で云ひ續けた。

『貴様等は食物を得たから、これから此のおもしろい觀せもので、眼を娯しませようと云ふのだな。行けと云ふのに、おれは貴様等に食物を與へてやつた。それで澤山ぢやないか。出て行け、一人も殘ることはならないぞ。』

ギドは又マルコの腕を捉へて、

『あなたもです。この罪はあなたにあるのだから、眞つ先にあなたが出て行つて下さい。』と、階段の

方へつき出した。そこにはプリンチヴルレが石の樣にじつと立つてゐた。
『誰だ！　君は？　顏をつつんで石像のやうに立つてゐるのは、行けと云つたのがきこえないのか。』
ギドは、それでも男が動かうともしないのを見ると、いきなり番兵の戟をとつてつき出さうとした。
プリンチヴルレも、劍に手をかけて身がまへをした。
『劍に手をかけたな。ふむ、私にも劍はある。然し、これはある一人の男に對して使ふのだ。君は何故顏を布でつつんでゐるのだ。』
かう云はれても、プリンチヴルレは堅く口を閉ぢてゐる。ギドは近づいて繃帶を剝がうとした。と、
突然ヴナが飛び込んでギドを支へて、
『さはつちやいけません。此の人は私をたすけた人です。』
『ヴナ、何したと云ふのだ！』
ギドは言葉が意味をなさない程怒りにふるえてゐた。
『あなたお願ですから！　聞いて下さい！　一言、ただ一言！　此人が私を助けてくれました。尊敬してくれました。だから私は保護して玆まで連れて來たのです。保護すると私は誓ひました。あなたの代りにも誓つて置きました。よく聞いて下さい。私の言ふことを……』
誰れだ！　此の男は？』
『プリンチヴルレです。』

『此の男がプリンチヴルレか！』

『さうです、あなたの賓客です。私を救つたのは此の方です。その方があなたの手に身を委ねたのです。』

ギドは餘り思ひがけない事なので、暫く驚いてプリンチヴルレを見つめてゐた。何故ヴナが彼を連れて來たのかを、考へてゐるやうだつた。

『ああ、お前の戰略が分つた。さうであつたか、すつかり分つた。私はそこに氣がつかなかつた。ジユデイスがホロフエルニスを殺したやうに敵を殺す女は多かつたらう。けれどもプリンチヴルレの罪はもつと大きい復讐がいる。其の爲めにお前は此の男をここへ連れて來たのだ。ああ美事な勝利だ。』

ギドはヴナの心持をかう解釋したのである。ギドはかう云ふと直に露臺に走つた。

『プリンチヴルレを捕へて來た。敵がここにゐる。』と叫んだ。

『いけません。さうぢやあない、あなたは聞きちがへていらつしやる。聞いて下さい。』

『構はないでおゐで、今に分る。みんなにすつかり知らさなくてはならない。』

ギドは再び群衆の方へ叫んでよびもどした。

『それからあなたも』とマルコにふりむいて『お父さん、あなたは柱の後に蹲まつて、神にでも祈つてお出なさるのか、あなたのために生じた恥辱を償なつて、私の幸福を恢復するやうに……』

此の間に人民等は段々露臺の方へ集つた。ギドはそれを引きずるやうにして廣間に連れて來た。

『めでたい事だ。不思議な事が起つたのだ。ああ、今こそお前達はヴナを喝采して呉れ。私はもう、隅へ寄つてこそ〳〵あるく必要はなくなつた。今度こそ、お前達に見物させてやる。かう容易に結果があらはれようとは思はなかつた。私はこれから、長い間敵を尋ねて歩かなければならないと思つてゐたのだ。その敵が私の眼の前にゐるのだ。此の部屋に、あの段の上に。これを爲しとげたのはヴナだ。』

ギドは又マルコの腕を捉へて

『あなた、あの男が見えますか？』

『ああ、誰れだ？』マルコはさう云つた時プリンチヴルレと顏を合せた。

『おお、プリンチヴルレだ。』

『さうです。プリンチヴルレです。あなたはあの男の使番をなすつた。』

ギドは皮肉な笑をうかべて、

『もつと近くへおいでなさい。話をなすつたらいいでせう。何かまた、あなたに、新らしい使番を頼むかも知れません。あいつは卑劣な策略で、私のただ一つの寳を奪ひ取つた。私の世界の何ものにも代へられない大事の寳を。併しあいつには、もうもとの威權はない。何も恐れるには及びません。もつとあいつの近くへお出なさい。お前達を虐殺し、お前達の妻子を賣らうとしたのは此の男だ。お前達に、あれ程の苦痛を與へたのは此の男だ。よく見て御覽、それが今私のヴナの戰略にのせられて、

のめ〳〵と連れて來られたのだ。我々の手に這入つたのだ。どうしようと私の心のままだ。私は長く苦しめてやらう。私の承知出來るまで。そしてお前達にくれてやる。みんなよくきいて置いてくれ。此の男が私のヷナを奪つたのだ。そしてお前達はヷナを賣つた。私は途方にくれて、どうすることも出來なかつた。併し私のヷナは、其壞された愛を、建て直す道を知つてゐた。復讐をして我々の恥辱を雪がうと云ふのだ……』

ヷナはギドの思ひ違つてゐることを知らせなければならないと思つた。

『私が話します。けれども、まるで違つた話ですよ……』

『お前達もお聞き。さあヷナお話し。いや其前に接吻させて吳れ。』

から云つてギドはヷナの胸に身を投げかけた。

『いえ、いえ、まだいけません。』ヷナはギドを押しのけて、

『私の言ふ事をお聞きなさらない中は……よく聞いて下さい、あなた！　あなたの信じてゐらつしやるそんな幸福よりも、もつと、もつと、大きな幸福なんです。みんなも聞いてください。眼の暗んでゐるあなたよりも、あの人達の方が先に理解してくれるでせう。分るまで私にさはらないでゐて下さい。』

『分つてゐるよ、分つてゐるよ。』ギドはから云つてまたヷナを抱からうとしながら、

『併し何よりも先に接吻を……』

『お聞きなさい！　私の言ふことを！　私は眞實を話します。これまでも私は僞りを云つた事は一度もありません。けれども今日は、一生の中に二度とない眞實を話します。私は、夫婦一緒に住んでゐた私の生涯を誓ひに立てます。よく私の言ふことを聞いて下さい。信じられないと思つても信じて下さい。私は此人の手に渡されました。私は犧牲になるのだと覺悟してゐました。此人は私を思ひ通りにしようと思へば出來る力をもつてゐたのです。けれど此人は私のそばへも寄らないで、手さへふれませんでした。私は兄弟の家に居たと同じ淸い體で此人の天幕から歸つて來ました。』

『どうして……』

『此人は私を愛してゐたからです。』

『私もお前の最初の言葉で少し變だと思つたが、併しほんの少しだつたから、私は氣にもとめなかつたが……では、あの男はお前をどうもしなかつたと云ふのか、抱きも、さはりも……』

『唯一度……私の接吻を返しました。』

『何だ、お前があいつの額に……お前は私にそんな事が、どうして云へるんだ。お前は氣が狂つたのか？』

『私は眞實を云つてゐます。氣なんぞ狂つてはゐません。』

『眞實！　さうだ、私もそれを求めてゐる。併し人間の眞實でなくてはならない。私にはそんなことは信じられない。あの男は國に叛いたではないか。戰爭できづきあげた名譽も、地位も棄てたではな

いか。只お前を天幕の中に呼びたい爲に……それ程にしてまで得たものが、只一度の接吻で滿足した？　お前に手もふれなかつた？　私には信じられない。若しそれがあの男の求めたすべてであつたら、なぜ、私をこんな苦しい絶望の淵に沈めたか？　私はこの苦しみのためにどれ程の思ひをしたか！　あいつが眞實にそれだけしか求めないのなら、こんなにしないでも、ピザを救ふことは出來る筈だ。さうだつたら、私はあの男を神とも救世主とも思つて歡迎するだらう。』

ギドは群衆に向つて、

『お前達はこんな事を信じるか？　ヷナはああ云つた。お前方も聞いたらう。だから、お前達これを判斷してくれ。お前達はヷナに救はれたのだから、信ずることが出來るかもしれない。信じるものは前へ出てこい。さうして、小さな人間の理性をあざけつてくれ。』

『私はそれを信じる。』マルコはさう云つて前へ出た。併し群集は一人も出て來なかつた。只低くつぶやいてゐるばかりだつた。

『あなたは、あの男の味方だ。併し誰れか他に信ずるものがあらう。信じられない事だ。ヷナ御覽、御前の救つてやつた人民は、一人も出て來ない……』

『人民には、信じなければならない義務はありません。けれども、私を愛して下すつたあなたは、信じなくつちやなりません。』

『愛したものの云ふことは、僞りをでも信じなくてはならない、と云ふのかね。まあ私の云ふことを

おきき、おそれることはない。私はもう怒つてはゐないからね。私は今氣がついた。人民の前でお前に眞實を話させようとしたのが惡かつた。恐ろしい眞實を。お前が人民の前でこんな恥辱を公言するのが、お前にとつて、つらいことだと云ふことに氣がつかなくつてはならなかつた。それを私は氣がつかなかつた。私達は二人ぎりで話さなければならなかつた。さうしたらお前も本當のことを話してくれるだらう。併し私にはもう分つた。人民も知つてゐる。もう時が遲れてしまつた。かくす必要はなくなつたのだ。』

ギドはヴナが、公衆の人民どもの前で、恥辱(ちぢよく)の事實を云ひたくない爲に、ああした僞りを云つたのだと思つた。自分のために、又ヴナ自身のためにも、名譽をきづつけまいとするヴナのにはかに作り上げた苦心の僞りだ、と解釋したのである。

『あなた私を見て下さい。私の眼をよく見て下さい。ありつたけの私の眞心も、眞實もこもつてゐます。ね、どうか信じて下さい。ほんとうです。ほんとうにあの人は私の體に手をかけませんでした。』

ヴナは熱誠に、嚴肅(げんしゆく)な態度で云つた。

『いいよ、もう分つた。大へん結構だ。お前はあの男を救はうとしてゐるのだね? 眞實! さうだ。眞實に違ひない。いいや戀なのだ。お前はあの男を愛してゐるのだ。併し私は救はせない。あゝ私の愛した女が、かう急に變心しようとは思はなかつた。』

更に群集に向つて、ギドは強い調子で一語一語力をこめて云つた。

『みんな、よく聞いて置け、私はお前たちの前で誓ふ。最後の誓ひをする。もつと近くへ寄れ。さうして此の女とあの男を見て吳れ。あの二人は愛しあつてゐるのだ。私はあの二人をこゝから出て行かせる。お前達は害を加へてはならない。私はあの二人を自由に、安全に出て行かせる。私が承知だ。お前達は道を明けてやれ。二人共、欲しいものがあれば、もつて行くがいゝ。二人は愛の導くまゝに、どこへでも行くがいゝ。だが、其前に私は一つの報酬を求める。それは此女が眞實を話すことだ。それが私の、此の女に持つてゐる最後の愛だ。私は此の女にそれを話させる。私の與へたものゝ報酬として……ヷナ、お前も分つたか？　只一言、本當のことを言へばいゝ。こゝにゐるものらが證人になる。』

ヷナは矢張り前と同じくプリンチヷルレが、自分に手をふれなかつたことを、繰り返すばかりだつた。

『よろしい。お前は明言した。それがあの男に對する宣告だ。もう此上、私は二人をゆるすことはない。』

ギドは番兵を呼んで、

『あの男をふん縛れ、そして此の下の一番底の穴牢へ押し込んで置け』と命じた。

『お前は二度とあいつに逢ふことはならない。只、私が歸りがけに、あいつの最後の言葉だけはきいて來てやる。』

番兵はすぐ樣プリンチヴルレを捉へようとした。ヴナは突然、其番兵等をさゝえた。如何に云ひ聞かしても、到底ギドが信じてくれないと覺つた彼女は、こゝに苦肉の策を思ひついたのである。

『私は嘘を云ひました。さうです、あなたのおつしやるのが本當です。此の人は、私のどうすることも出來ないのに乘じて……この卑怯ものが！　だから私はあの男を私が懲らしてやる。復讐をしてやる。だから、誰れもあの男を連れて行つてはなりません。此の人は私のものです。私の自由にします。』

『それは僞はりです。』

プリチヴルレはヴナの聲を打消した。

『私を救ふために、僞はりを云つてお出なさるのです。それよりも私は刑罰を受けます……』

ヴナは自分の窮餘に出た苦肉の策をプリンチヴルレがさとつたのを見て、あわてゝおしつけるやうな調子で

『おだまんなさい。』と一喝した。それから又、群集に向つて『恐れてゐるのですよ』と云つた。さうして憎惡に堪えられないやうな樣子で、

『繩をおよこし、手錠か鎖をおよこし！　本當に憎い奴です。此度こそ私は本當に白狀します。復讐しようと思つて、私が連れて來たのです。だから私が縛る。』

ヴナはから云つて、プリンチヴルレの兩手を縛りながら、他の者に聞えないやうにささやくのであつた。

『默つて、何もいつてはいけません。私は決心しました。私はあなたのものです。あなたを愛します。私はどこまでもあなたを保護します。鎖をかけるのは、私がかぎをにぎつてゐなければならないからです。分りましたか？　二人一緒に逃げませう。』

ヴナは自分がプリンチヴルレにささやいたのを疑はせないため、わざとプリンチヴルレを制すふりをして、

『お默り！』と云つて置き、群衆に、『助けて呉れと云ふのです』と云ひながら暴々しくプリンチヴルレの顏の繃帶をはづした。

『みんな！　此の顏を見ておやり、恐ろしい夜の紀念を、私にも痕がある。』から云つてヴナは自分の肩を露出してみせた。

『此の男が私をうつたのです。此の卑怯な惡魔が！』

ギドば、にはかに變つたヴナの言葉を聞いてゐたが、

『それなら、なぜ初め、私にあんな嘘を言つたのだ？　どうしてあいつはお前について來たのだ？』言葉せわしく問ふた。これにはヴナも本當らしい口實が考へ浮ばなかつた。

『私はあんまり恐ろしかつたものですから氣が轉倒したのです。なぜあんな嘘を云つたのだらう。私にも分りません。だけど、私はこんどこそ、すつかり落付きました。本當のことを云つてしまひませう。どうせ、何もかも分つてしまつたのですから。私は、只あなたを失望させたくなかつたのです。

公衆の人達の前で、曝露したくなかつたのです。こんないま〳〵しい恥辱を……あなたに對する愛のために……私は、あの人をゆる〳〵嬲り殺しにしてやらう、と思つたのです。暗い中でだれにも知らさずに、この一夜の想ひ出で、二人の中を不愉快にするのが嫌だつたのです。あなたの愛を、減らされるのが心配だつたからです。……あゝ何と云ふ憎い奴でせう。あの人を私が滿足するまで、段々と殺してやりませう。血を一滴々々づつしぼつて、さうしなければ、私の腹がいへません。さあみんなもお聞き！　さつきあんな嘘を云つたのは、ギドの爲にしたのです、我達の愛を傷けたくなかつたからです、私はもうすつかり言つてしまひます。本當は私はあの男を殺さうと思つたのです。私は武器を外套の下にかくして、あの男に近よつてきりつけたのです。けれども、あの男はとう〳〵私の武器を奪つてしまひました。私は仕方がないから、欺してやりました。私はあの男に接吻してやりました。それから、愛しますと云つてやりました。さうしたらあの男はすつかり信じてしまつたのです。馬鹿な奴ぢやありませんか。こちらが深い復讐をするために、欺してゐるのも知らないで……それから私は、「ピザへいらつしやい保護してあげます」と云つたら、うか〳〵其手にのつて、ここまでついて來たのです。この馬鹿ものが……もう逃しはしない。もう私の手に摑んだ。私は勝利を得ました。神と世界に誓つて、私のものになりました。』

ヷナはだん〳〵興奮して來て、思はずプリンチヷルレに取りすがつた。ふと氣がついて、急にはね退きながら、

『あゝして私は抱いてやつたのです。プリンチヴアルレさんあなたを愛します」ツて……』

ヷナはプリンチヷルレに對する熱情が胸にみなぎつて來た。さうして、彼女はほとんど倒れさうになつた。彼女は圓柱にからうじて身をさゝえながら、

『あゝ私は倒れさうだ。あんまり嬉しいからなのです。私は嬉しい。復讐が出來るのですので……』

と云ひ足した。

『お父さま。』ヷナはかう呼びかけて、

『あの人の事はあなたに願つておきます。あの人を、一番深い底の底の穴牢へ入れて置いて下さい。誰れも來ない所を……あなた責任をもつて引き受けて下さい。あの人は、私の生け贄なのですから、私のものですから、私一人で處分します。だから牢屋の鍵は私が持つのです。鍵はすぐ私に下さい。誰れもあの男に近よつてはならない。さわつてもならない。あの男を連れて來たのは私なのだから、私の自由にします。私が氣分が直つて行くまで、其ままそつくり番をしてゐて下さい。』

かう云つてヷナはマルコにプリンチヷルレを渡した。

『お父さん、分つたでせう。』ヷナは眼に心をこめてぐつとみつめた。さうして兵卒どもに暴々しく引き立てられて行くプリンチヷルレを見送つて、

「さよなら、あなた、あゝ、また逢ひませう。』ヷナはよろめいて又倒れかけた。これを見たマルコは、彼女のそばに走りよつて彼女を兩腕にいたはりながら抱いた。さうして低い聲で早口に云ふのであつ

た。

『おお、ヴナ、私にはお前の心はよく分つてゐます。お前の僞りが私によく理解出來る。正義であると共に正義でない事をする。人間はみんなさうだ。さあ氣をたしかにおし。また僞はりを云はなくてはならない時が來るだらう。ギドはまだ信じないやうだから……』

云ひ終るとマルコはギドに『ヴナが呼んでゐる。』と告げた。ギドは走せよつてヴナを抱き取つた。

『ヴナ、ヴナ、私は決してお前を疑はなかつた。もう一切すんでしまつた。みんな忘れておしまい。めでたい復讐で拭ひさつてしまつたのだから。ああ、惡い夢だつた。』

かう云つたギドの顔は全く晴々としてゐた。先程までの暗い憤怒の色はなくなつてゐた。過激な興奮にすつかりつかれはてたヴナな、此時やうやく正氣づいた。そして弱々しい聲で、

『あの人はどこにゐます?』と、云つたが、急にはね起きて、

『さう、さう、思ひ出しました。もう分りました。鍵を下さい。牢屋の鍵を……』

『番兵が歸つて來ればお前に鍵を渡すよ。お前の望み通りにするがいい。』とギドはやさしくいたはりながら答へた。

『鍵は私自身で持たなくてはなりません。間違のないために、私一人で保管します。ああ、惡い夢でした。本當に惡い夢でした。けれど、これから美しい夢が始まるでせう。』

かう云つたヴナの顔には、プリンチヴルレに對する愛の熱情と動かない決心の色とがあらはれてゐ

た。

第三幕終り

——大正三年七月——

女優ナナ

はしがき

この『女優ナナ』は佛蘭西寫實小說家の泰斗と云はれたゾラの作であるが、これまでわが國に飜譯若しくは縮譯される度毎に發賣禁止となつた。

で、編者は十分の注意を加へてすべて禁止になりさうな箇處を避けて紹介することにした。編者の基づいたのはシカゴ出版の英譯であつて、これが既にひどいところはすべて避けてあるのであるから、それをまた縮少したこの編に於ては禁に觸れるやうな點は全くあるべき筈でないと思つてゐる。だから、如何に道學的見解を以つて、この原作を非難する人々でも、この縮少編は安心して讀んでいゝのである。たゞこの作者の寫實の材料となつた時代並に社會並に諸人物が頽廢してゐるので、讀者もその頽廢の狀態に接することになるのは、止むを得ないことである。つまり、かかる間から人生の考察と生活上の反省とをかち得るやうにすれば、この小說を讀んだことが無益でなく、否、十分の利益をその人に與へるのだ。

最後に、この作者ゾラの短評を加へて置くが、渠は一般に絕對的な寫實家と云はれるが、その寫實的傾向はたゞ材料の取り方に在つたばかりだ。そして材料の並べ方、進め方に於ては、あまりに都合のいいやうに、いいやうにとばかり行つてる。これ、渠がいまだに羅曼的派の惡弊を脫してゐなかつた證據である。一般の寫實主義が自然主義に進んだのは事實だが、ゾラの如きはまだ寫實的羅曼的派の一人であつて、正當な意味の自然主義から云へば、ほんの初步を踏み得たに過ぎなかつた。

編　者　識

一

九時になつて、まだ、ヴリエテ座は殆どからであつた。棧敷や平土間に僅かの人がゐて、深紅色の天鵞絨の坐席に沈んで、半數は消してある瓦斯燈のぼんやりした光を受けてゐた。大きな赤い幕が垂れてゐて、その後ろの舞臺からは一つの音さへもしなかつた。脚燈はまだつかず、音樂師どもの席には人が這入つてゐなかつたが、三階棧敷ばかりは勞働者風の男や女で賑はつてゐた。

そのうち、二人の若い男が土間へ現はれ、

『僕等はあまり早く來過ぎた』とこぼし、九時には間違ひなく幕が明くと云つてたのにと云つた。ヘクトルラフアロアズとフオシユリとで、後者はこの芝居に出るギナスが近頃のおほ評判で、これを興行させるボルドナヴは人氣を取ることが上手だと語つた。

ラフアロアズは僅かに三週間前に巴里に來たばかりなので、まだ巴里のことはよく分らなかつた。

『その評判のギナスをやるナナと云ふ女優はどう云ふ素情のものか』と尋ねると、

『君までがそれを聽くのか』と、フオシユリはおほげさに云つて、けふも、もう、二十人ばかりにそれを糺かれたと答へた。そして二人がまた廊下に出ると、支配人のボルドナヴがゐて、

『場席はもう一つもありません、二週間も前から賣り切れてます』などと、場席要求の人々に語つてゐた。が、フオシユリを發見すると、芝居の吹聽をフイガロ新聞に出して呉れないことをなじつた。

一方は、そんなに急いだツて駄目だ、まア藝を見てからにすると答へた。そして自分のいとこに當るラフアロアズを紹介した。

『あなたの劇場は――』と、渠が物慣れない風で語り出したのを冷淡に見て、支配人は云つた、

『劇場なんて――寧ろ女郎屋とお云ひなさい。』

『ナナは美しい聲ださうで――』

『なアに、あの女が聲なんかあるものか――人間の屑です――手足の動かし工合さへ知らないのですよ。』

自分で自分のしてゐることを馬鹿にしてゐるのにも程があらうと思はれた。

『人氣役者をさう云つては拙い』と、フオシユリが注意したのに答へて、

『さうか、ね――女ツてものは藝が上手で無ければ駄目か、ね？　ナナは藝以上の物を持つてますよ、藝以上の――まア、見ていらツしやい。』

支配人は何でもナナの事をもとから知つてたので、出演さへすれば、きツと儲かると思つてゐた。果してこれまでの人氣女優ロズミニヨンはひどい嫉妬を起して、支配人をいろ〳〵脅迫したので、渠は腕力を以つて壓服させた。

ロズの旦那に銀行家のスライネルと云ふのがあつて、この人の愛顧を取りはぐすまいと云ふ考へから、ロズの所夭なるミニヨンはいつもくツ付き歩いてたが、けふも亦一緒にやつて來た。

『あなたは、きのふ、僕の部屋であの女を見ましたよ』と、ボルドナヴが云つた。
『あれがさうか』と、ステイネルは殘念さうに答へたので見ると、その時入れかはりになつたやうなものだから、ナナの輪廓さへもはツきり捕へてゐなかつた。
『さア、あツちへ行きましよう』と、ミニヨンはやきもきして引ツ張つたが、ステイネルは動かなかつた。
そのうち、群衆とその聲とが多くなつて來て、『ナナ』と云ふ言葉が方々から繰り返されるやうになつた。その癖、ナナがどう云ふ素性の女かを知るものは殆どなかつた。ただ評判の上に評判が重なつてた結果が、雜踏に雜踏を加へて、婦人の裾が踏まれて破れたり、紳士の帽子がころがつて行くへが分らなくなつたりした。
ボルドナヴは自分のまわりに詰め寄せた多くの人々に向ひ、
『そんなにたて續けに尋ねられても仕かたがないではありませんか、どうせ直ぐその女を御覧になれば分ります』と答へて、姿を隱してしまつた。
ミニヨンは少し渠の態度に反抗の氣味を見せてゐたが、ステイネルを促して、ロズが序幕に着て出る衣裳に就いて意見を聽きたいと云つてるからと告げた。が、ステイネルが應じなかつたと云ふのは、ロズに少しいや氣がしてゐた爲めだ。
この時、さきのフオシユリとラフアロアズとが噂さしてゐたルシスツワルと云ふ美人ではない女

が、二名の婦人をつれて馬車でやつて來た。ナナの情夫で、既に三十万フランを蕩費したダグネの姿も見えた。伯爵ザヸエドヷンドヴル等もだ。

『ナナ、ナナ』と云ふ聲がます〳〵盛んになつた。やがて幕あきのベルが鳴つた。急に目がさめるやうに場内があかるくなつた。脚燈は紫に金絲のぬひをした幕の裾を奇麗に照らした。音樂師どもはその器樂場から諸樂器の調子を合はせた。

樂長の指揮、――觀客どものオペラグラスののぞきかはし、――新聞記者、文學者、實業家、相場師・貴族・裁判官、變り目毎の定連等が、互ひに近くから、また遠くから挨拶や默禮を取りかはしてゐるうちに、俄かに上の棧敷から、

『しツ！　しツ！』と云ふ聲がした。それでもなほがや〳〵と入場者が絶えなかつたが、段々とすべては一切に注意を舞臺の方に向けるやうになつた。

そして器樂團の輕快なワルツの曲につれて、觀客の盛んな拍手と共に、おもむろに幕があがつた。

『美女神ヸナス』の第一幕は、オリンポス山の場である。先づイリスとガニメデスとの二神が現はれて、これを取り捲く天の使ひと共に合唱しながら、あとから出る神々の爲めに席を整へて退場する。と、續いて現はれたのは、女神ヂアナと軍神マルスとで、前者に扮した女優ロズミニヨンと、後者に扮した男優プルリエルとの歌ふ渡りぜりふは、いづれも巧妙な人氣役者だけに大喝采であつた。おほ神ジユピテルが出て來ると、その前に幾人かの人間――すべて妻に見棄てられた人々――が訴へを爲

し、このひどい目に遇つたのはヸナスの爲めで、ヸナスがすべての女をそそのかして、逃げさせたのだとこぼした。

では、そのヸナスを呼びつけようと云ふことになつたが、次ぎの場はわざとだれ氣味に作られてゐて、なか〳〵かの女は出ないのだ。

『ます〳〵下だらない』と、ミニヨンはスティネルに云つた、『おきまりのだれ場に相違ない。』

この時、雲が舞臺の背景から二つに分れて、ヸナスが現はれた。乃ち、ナナはまことに脊高く、まことに發育のいい十八才の娘で、女神としての白い衣を着け、美麗金色の髮をその兩の肩に垂れ、脚燈の方へ進み出て少しも落ち付きを失なはず、目の前の聽衆に向つて微笑した。かの女の口びるは分れた、そしてその大きな歌を歌ひ初めた、――

『ヸナスが夜中の散歩をする時――』

その次ぎの文句にかかつた時、人々は互ひに目を見合はせて、この座の支配人ボルドナヴは人を馬鹿にしてゐるのかとあやしんだ。聲も惡いし、こなしもよくない。が、器樂場そばの特別席から熱心らしく叫んだものがある。

「素敵だ、なア!」

觀客は一切にその方へ目を向けたので、斯く呼んだ一少年は顏を赤くした。ナナの特別な意味での親友なるダグネはその隣りにゐたので、微笑をもらした。

『さうだ・素敵だ！』また、青年どもから猛烈な贊成があつた。

ナナは人々のあざ笑ふのを見て、こちらからおとなしく笑つて見せた。すると、一しほ美しく見えたので、いつのまにか觀客の不平と非難とは消えて行つた。かの女は樂長に續いてやれと合圖して、再び拙いきしるやうな聲で第二句を歌つた、――

『夜中に、ヰナスが通つて行く時――』

それツ切り聲が出なくなつた。が、臆することもなく、オペラグラスを方々からさし向けられながら、微笑をつづけて、手をひろげたり、からだを前にかがめたりして、自分の美しい樣子を見せた。そして引ツ込む時には、自分の和らかいうぶ毛が生へてるくび筋を見せた。

觀客はただそれだけに魅せられて、この一幕の終りをも――面白くないのに――無事にすまさせた。が、廊下に出てから、氣が變つて、皆馬鹿を見たやうだと云ひ合つた。

『然しあの女を僕は知つてるよ。』スティネルはフオシユリを見ると直ぐから云つた、『確かにどこかで見おぼえがある。多分、カシノでだらう。醉つ拂つて、あばれるので、とう〳〵手錠をはめられたツけが――』

『僕も君と御同樣確かでないが』と、記者のフオシユリも聲をひそめて云つた、『多分、老夫人トリコンの家ででしよう。』

トリコン夫人の家とは一種の曖昧屋だ。

『無論、そんなことだらう。』ミニヨンは憤慨したやうに叫んだ。『そんな曖昧な成りあがり者を歡迎してゐちやア、やがて尊敬すべき婦人は舞臺からかげを隱してしまう。僕の女房にも云つて、もう、出演をことわらせなけりやア――』

フオシユリはこれを聽いて私かにあざ笑つた。そしていとこと一緒に運動場をさして行つて見た。が、人いきれで溜らなかつた。光のない露臺へ出ると、たツた一人でダグネが煙草を吸つてたが、お互ひに先づ口を出し難いやうな氣であつた。が、フオシユリがとう〳〵思ひ切つて、

『今度の女優は散々な目に會ひました、ね。』

『いや』と、ダグネは答へた、『僕の考へでは、あの女が人々を冷淡に取り扱つたので、その復讐を受けたのです。』

ラフアロアズはナナをプロヴンス街の隅で或夜會つたことのある女だと考へながら、聲がよくありさへすればと、心で氣の毒がりながら、下なる巴里の夜更けの繁華を驚歎してゐた。

第二幕は或小いさな酒場で神々が變裝舞踏をするところで、そのみだらな歌が觀客の顏をそむけさせながらも、馬鹿々々しく面白いので大成功であつた。それにもナナはただにツと笑つて拍手喝采を湧き返らせる外、何の役にも立たなかつた。そして幕は下りたが、皆の男女俳優が一緒に手をつらねて挨拶した時は、花形としてナナとロズとが中央にさしはさまれてゐた。

ラフアロアズがミユフア伯爵夫人に挨拶して來ると云ふので、フオシユリは自分をも紹介して呉れ

ろと賴んで、一緖にその二階の棧敷へ行つた。

ラファロアズはいとこを先づ伯爵ミュファドボ丼イに紹介すると、伯爵は冷淡であつたが、その夫人はフオシュリの名をフイガロ紙上で知つてたので、丁寧に持て爲した。

『私どもは次ぎの火曜日に、あなたにお目にかかりたいと思ひます』と、夫人はラファロアズに云つて、フオシュリにも一緖に來いとつけ加へた。フオシュリがそこを出ると、階段の下り口でルシスツワルに呼び留められた。かの女は、いきなり、なぜ自分にも挨拶に來ないとなじつてから、

『ナナはうまくやつたと思ひますが』と云つて、ここで一緖に終りの幕を見よと賴んだが、渠は幕がすんでからお目にかかると答へて、いとこと共にそこを逃げた。

が、渠はまたステイネルにカフエで呼びとめられた。

『ここへ來て、一緖にビールをどうです？』

ミニョンがそばにゐた。ステイネルはナナに贈るとて花束を注文してゐたが、ミニョンのけわしい目つきを見て、また一つの注文を加へて、二名の花形に同じ物を贈ることにした。

ダグネはフオシュリの姿を見て、近づいて來て、もう少しも遠慮するに及ばないかのやうにナナの成功を語つた。

ダグネの見物席の隣りにゐる少年は、全くかの女に魅せられたと見え、渠に向つて、

『あなたは今の女優とおちかづきのやうですが――あの住所を御存じでしようか？』

『知りません。』ダグネは妙な氣がして、脊中を向けた。

幕があがると、エトナ山の洞窟の場で、後ろには鍛冶の神ヴルカンの工場があり、女神ヂアナがこの神と旅の支度をして退くと、入れ代りに、ヰナスが現はれた。肉づきのいい體格を以つて薄い紗一重で、所謂『海から出たヰナス』だ。觀客はみんな肉感的だが嚴肅な氣分に打たれてしまつて、一言も發し得なかつたところへ、かの女は色氣たツぷりと微笑を見せた。

それから、マルスとヂアナとヰナスとのいきさつがあつて、三部合唱になつた。この終りに、ナナとロズとに贈られる白い丁香の花束が二つ舞臺にあげられた。人々はスティネルの席を注意した。

直ぐヂアナは去り、ヰナスは男優プルリエルの扮するマルスの首に抱き付いた。すると、フオンタンが出て來て、鐵の網を二人の上にかぶせた。何とも云へぬつぶやき聲が場内にあふれて、オペラグラスはナナにばかり向けられた。支配人ボルドナヴの預言はおほ當りに當つたのであつた。

フオシユリが見渡したところでは、かの魅せられた學生はじツとしてゐられない樣子だ。伯爵ドヴンドヴルは壓迫を受けたやうに青い顏をしてゐた。銀行家スティネルはその卒中じみた顏が破裂しさうだ。ダグネはその耳まで熱して、賞嘆にからだが顫えてゐた。ミユフア伯爵の棧敷では、夫人は青くなつて六ケしい顏をしてゐる後ろに、伯爵は口をあけて赤くのぼせてゐた。ナナはそのやうにして、千五百名ばかりの觀客を感激させたのだ。

『ヰナスが夜中の散歩をする時』と云ふ文句はすべて歩くもの等の口にのぼつた。

ボルドナヴはフオシユリを呼びとめて、特別の好評をするやうに賴んだ。

『今度の劇はきツと二百日間は續けられましよう。巴里の人がかたみにあなたの劇場へ詰めかけて』

と、ラフアロアズが愛相を云ふと、

『あなたもまだ分らないお方だ』と、ボルドナヴは怒つたやうに、『劇場ではない——なぜわたしの女郎屋と云はないのです?』

二

翌朝の十時までもナナは眠つてゐた。

かの女の住ひはオスマン廣小路の或大きな新建築の二階であつた。巴里に一冬を送らうとして來たモスクワの商人が、六ケ月の前金を拂つてかの女をここに置いた。が、今や九ケ月の家賃が溜つてゐるし、馬車屋、服屋、石炭屋、その他からも借金の催促を受けてゐるのだ。目が突然さめると、寂しかつた。相並んで寢てゐた女中は今しがた起きて行つたと見え、その枕にさわつて見るとまだあツたかい。

枕もとのリンを押すと、女中のゾエがやつて來た。

『ミミさんは來たの?』

『はい、奥さま、十分ほど前に、』然し奥さまの疲れてゐるのを見て、あす、また來ると云つて歸つた

と告げた。それから、皆に會ふ日が變つたので、渠や黑んぼやあのしみツたれやがかち合はないやうにしなければなど語り合つて、借金の始末を相談した。が、ナナの最も心配なのは十六才の時に生んで里子にやつてあるルイと云ふ子供の事だ。引き取つて、叔母のルラ夫人に賴むにも金は入る。
『それはあのしみツたれおやぢにお委せになれば』と、ゾヱは注意した。ナナは重々承知のことだが、事情があつて、渠には一ケ月一千フラン以上は出せない。黑んぼもカルタの失敗で行き詰り、ダグネのミミさんも株の暴落で自分が借金したいと云つてるほどだ。そしてけふ、どうしても子供引き取りの爲めに三百フランの入用があつた。
　そこへトリコン夫人が四百フランのお客を三時に會はせるから來いと約束して歸つた。またうとうととして十二時になつた時、ルラ夫人がナナの子を受取りにランブイヱに行く爲めにやつて來たが、肝心の金は三時でなければ出來なかつた。ナナは食堂でがつ〳〵と食事をしてから、ルラ夫人とマロアル夫人とがカルタを熱心に遊んでゐるのを見てゐたが、三時が鳴つたのでいや〳〵支度をして——借金取りが二三名來てゐるのに顏を合はせたくないので——裏口のはしごから、長い裾を取つて出た。
　そのあと少年が一人、ナナの爲めた花束を以つて來たのをゾヱは物置きのやうな室に招き入れて置いた。
『こましやツくれた奴だ、中學生の癖に』と、ゾヱは打ちのめしてもやりたいと云つた。
『花束ばかりか』と、二人のカルタ熱心家は繰り返しながら、勝負をつづけた。スティネルが來て客

間に、黑んぼは勝手に寢室に、入れられて待つてゐた。

　ナナがせか〳〵して歸つて來ると、

『お客さまが幾人も待つてるのに』と、やき〳〵して叔母が云つた。

『奧さまも少し早く歸つてらツしやればおよろしいのに』と、ゾェは責めるやうに云つた。

『あたしやア好きでぐづ〳〵してイたんぢやアないよ、『相手を投つてやるところであつた、それに馬車が途中まで生憎なかつたので』と云つて、先づ氣を落ちつけてから、叔母に四百フランのうちから三百五十フランの金を渡してかの女を歸した。

『けふは、もう、十分――客は蹴飛ばしておしまひ』と、まだいら〳〵してゐたが、また侯爵ドシュアルと伯爵ミュフアドボヰイとが名刺を通じたので、貴族と云ふので少し機嫌が直つた。が、なほ客どものことを『あいつ等は皆豚だ、そして好きでさうなつてるのだ』と云つてゐた。先づ二の貴族に應接間で會つて見ると、貧民救助會の寄附金募集であつた。かの女はまんざらいやな氣もしないで、殘金をみんな出してしまつた。そして渠等が歸ると、『鮫どもめ、あたしの五十フランをうまく取つて行つて』と考へた。伯爵ミュフアがナナから寄附金を受け取る時、思はずかの女の和らかい手に觸れて、一しほかの女を戀し出した。

　名刺や手紙がまた澤山來てゐたが、ナナは見るのもいやな氣がして、客をもみな斷れと命じた。黑んぼはゾェがうまく歸してあつたが、ステイネルをもかと女中が念を押すと、

『さうだとも』と、ナナははツきり答へて、『あの人を段々わなに掛けようとするなら、今、突ツ返して置く方がいいの。』

　應接室には、もう、人がゐなかつた。食堂にもだ。が、物置きをのぞくと、一少年がゐて、ナナを見るが早いか突ツ立つて、眞ツ赤な顔をした。初めて見るのだか、ジョルジュゴンと云ふ十七才の少年だ。かの女は然し、何だか氣の置けない、母のやうな氣分になつて、尋ねた、

『むちで打たれに來たの？』

『はい』と、渠は固くなつて答へたので、かの女は却つて面白がつた。そしてかの女が花束を受けた時、渠は貪ぼるやうにかの女の手に接吻した。可愛らしい美少年だ。

『また遊びにいらツしやい』と告げて、かの女は渠を歸した。それから化粧室へ行つて、フランシに今夜の髪を結はせ初めた。鏡に向ひながら、燒きはだんきやうの袋を膝の間にはさみ、そこからそれを出してむしや〱喰つた。

　その間にでも、電氣じかけのベルは度々鳴つた。

『奥さま、どうしても歸つて行かないのが一人御座います』と、ゾエが云つた、『それに、ひとり歸ると、また別なのが來て。』

『うツちやつて置きなよ。お腹が減ればひとりで歸る、わ、ね。』ナナは氣をかへて、男を待たせて置くのが面白くなつた。床屋のフランシから、借金を返す一百フランを借りた。そこへ、ラボルデツが

案内された。この男は婦人どもの世話やき役になる外、それ以上を何も要求しないので、ナナも喜んで迎へ、一緒に食事をして一緒に芝居へ行かうと云つて、

『さうしてまたきツとうちまで送つて呉れる？　さうすればあたしはおほ助かりよ、誰れにもついて來させないで、一人でぐツすり一晩眠りたいんですもの。』

三

ナナは女優としての大成功を記念する爲め、夜、遲く、晩餐會を催した。かの女はしみツたれの商人と黒んぼとには、もう、會はないと決心したが、芝居から自分の馬車にのせてダグネと少年ジョルジとをつれて來た。衣裳部屋の椅子に自分の衣物を引ツかけてほころばせたので、ぢれにぢれてそれをぬいだが、別なのがないので、再び忍んでそれを着た。ダグネとジョルジとは一緒にかの女の衣物のほころびを縫つた。

客間へは、先づ女優クラリスベスニュをラフアロアズが伴つて來た。ラフアロアズはナナに初對面の挨拶をした。次ぎに、ロズミニヨンが來た。その後ろにはスティネルとミニヨンとがついてゐた。次ぎに、一對のやうに、伯爵ドヴンドヴルとブランシュドシヴリとが――次ぎに、また、フォシュリとルシスツワルとが――

ナナは伯爵ミュフアを物にしようと思つて、フォシュリから招待の言葉を云はせてあつたのだが、

見えないで心配した。

『來て——あの方も？』かの女はフオシユリに近づいた時、低い聲で聽いて見た。

『いや、來ません、斷わりました。』フオシユリはつい無頓着に斯う云つたが、かの女がいやな顏をしたのを見て、言葉の體裁をつくろつて云ひ直した。『來ることが出來ないのです——今夜、內務大臣の夜會があつて、伯爵は夫人をそれへつれて行かなければならぬさうです。』

『よう御座いますとも』と、ナナはつぶやいて、渠がこの招待を告げなかつたのだらうと云ふ意を見せた。『わたし、つねりますよ。』

『もう、まツ平です、そんなお使ひは。』フオシユリは威しを受け流して、『今度からそんな役目はラボルデツにお命じなさい。』

ナナはつンとしてしまつた。

フオシユリも脊を向けた。

ミニヨンはステイネルをナナの方に押しやりなどしてゐたが、かの女が客どもから少し離れた時、かの女に耳うちして、ステイネルのことを、

『あの人はあなたを死ぬほど戀してゐます。ただ心配してゐるのは僕の妻をです。どうです、保護してやつちやア？』

ナナはわざとその意味が分らなかつたふりをしたが、やがて銀行家に向つて、

『ステイネルさん、あなたはあたしの次ぎへ座つて下さい・ね。』

俄かにラボルデツが見え、そのつれた女優はガガ、カロリンエケ、レアドオルン、タタンネネ・並に十五歲のマリブロンドだ。支配人はくるぶしを痛めたので來られまいと云ふ噂さをしてゐると、矢ツ張り、そのボルドナヴもやつて來た。渠は自分の情婦なる女優シモヌカビロシユの肩によつてゐる。

『閉口だ！　閉口だ！　でも、胃ぶくろが大丈夫なのは、直き御覽に入れます。』

その外、いろんなつてを以つてやつて來たものがあつた。客のうちに一人、脊の高い、綺麗な白髮の、立派な顏つきの老紳士が寢室の方から這入つてたが、伯爵ドヴンドヴル以外の人々は誰れもその人を知らなかつた。

食堂は却つて狹いので、應接室を食堂にしたのだが、そこに皆は勝手に席を取ることになつた。ナナは主人として食卓の中央に坐わり、その右に例の老紳士を、そしてその左にステイネルを据ゑた。

『やくざ馬・どうした』と・客間でどなる者があつた。ボルドナヴが自分を置き忘れたシモヌを呼んでゐるのだ。女どもは氣の毒がつて連れて來た。

『司會者はあなたでなければ――ナナと相向つてお坐わんなさい』と、皆々が云つた。

『ひどいぢやアないか』と、ボルドナヴは云はれた坐についてから呻るやうに云つた、『お前がたはもツとお父ちやんを大切にしろ。』

女優どもは一緒に笑つた。

アスパラゴスのズートプが出てから、ルイズ丼オレンと、ドヴンドヴルが招待して置いた海軍士官フカルモン並にその友とが來た。ナナはクライスにつめて貰つて、その餘地へ渠等を坐わらせようとしたが、ルイズとフカルモンとは隅ツこの方に、そして今一人は皿から少し離れて、隣人の肩から手を出さねばならぬやうに坐わつた。そしてボルドナヴがプルリエル、フオンタン、並に老ボスクをもつれて來ようと思つたと云ふのを、ナナは躍起になつて押さへて、

『あんなよッ拂ひどもは呼びたくなかつた』と云つた。

『そりやア、ほんとだ』と、ミニヨンが調子を合はせた。

次ぎに、ラインの鯉と鹿の肉とを英國風に料理したのが出た。皆の話は子供のことになつた。ナナは自分のルイが毎朝十一時に叔母につれて來られて、愛犬ルルと面白さうに遊ぶ話をした。ロズはまた、その九歳をかしらの子供二名を學校からつれて來て、芝居を見せてやつたことを語つた。

『ところが、面白いことを云ふぢやアないか』と、ミニヨンがあとを受けて、『ロズの役を熱心に見てゐて、おツ母ちやんはなぜ衣物を着てゐないツて、ね。』

皆々はこれを聽いて笑つた。そこへかわつて出たのは、鳥の肉、ひらめの厚片、スチュ煮の肝臓だ。葡萄酒はこの時までモルサウル製ばかりであつたが、ここでシヤンペルタンのやレオ丼イのもまわつた。一番しやべつてるのはボルドナヴで、痛い兩足をなげ出してゐるからでもあらう、トルコの王さまのやうに反り返つてゐて、肉が切れにくかつた。

『おれの爲めに肉を切つて呉れるものはないか――食卓は一哩も隔つてる』と云つたので、シモヌはその役を勤め、時々渠の口をふいてやると、ロズとルシとは渠の皿やナイフを取りかへ役だ。

　オレンジ入りの清涼劑が出た。燒き肉のあツたかいのは牛肉のフイレ、その冷たいのは朱雞のガランチンだ。話は諸國の現代の王さまのことに移つて、女優どものうちに謁見や恩顧を得た時の感じを云つたものもある。そして皆、自分からのひいきびいきがあつた。獨逸の宰相ビスマルクをおそろしい人だと一般に云ふが、會つて見ると面白い人だとシモヌが云ふと、

『きのふもその話をしたのだが』と、ドブンドヴルは口を出して『誰れも信じない。』

『ビスマルクツて、誰れ?』若いタタンネネがこツそりとラボルデツにもたれて聽くと、渠はかの女に出鱈目のうそを云つて、ビスマルクと云ふ人は生の肉を喰ひ、自分のお城近くで出會ふ女をば自分でかつぎ込んでしまうから、まだたツた四十歳だのに、もう、三十二匹の子供があると。皆がおほ笑ひをしたので、ネネはむきになつてラボルデツの冗談を怒つた。

　ラフアロアズはクラリスからガガに、ブランシユはドブンドヴルから老紳士に、いづれも氣を移してゐる樣子が見えた。ステイネルは、無論、ロズからナナに移つたのはあり／＼としてゐた。ロズは新聞紙上でフオシユリの書いたナナの紹介賞讃文を見た時は泣いて怒つたのだが、その埋め合せをしようとして、今やフオシユリをルシから奪ふつもりらしい。

『あいつも女にくツ付いて、それを自慢に自分の世間體をよくして行くつもりだけなのですから』と

激してゐるルシを、ドヴンドヴルはなだめてゐた。ロズとルシとがわきへ行つたので、ボルドナヴは餓ゑてしまうではないかと不機嫌に叫んだ。それから、皆は無禮講になつて、女どもが肱を食卓につくと、男どももすまひをゆるめた。

フカルモンはどんな酒でも自分には利き目がないと自慢しながら、その癖、酒くせが惡いので、ラフアロアズをフアラモアズ、ラマフオアズ、マフアロアズなど呼びかへて怒らせ、また男のラボルデツを『マダム』と名づけて不機嫌にさせたが、フオシユリがラフアロアズを、ドヴンドヴルがフカルモンを鎭めた。ボルドナヴはやツと腹が十分だと見え、今度はまた誰れよりもさきに珈琲を請求した。

ナナは直ぐに還事はしなかつた。料理屋では面白くないと思つて、わざ〳〵自分の家で開いた宴會が、あまり無作法になつて、矢ツ張り、料理屋も同樣なので、かの女は殆どがツかりした。銀行家と老紳士とに私かに不平を漏らしてゐたが、立ちあがつて、

『珈琲にしたいお方はどうか次ぎの室へ』と公告してから、どこかへ消えた。人々が珈琲に集つてからも、男女間の戀の取り引きは段々歩を進めたが、フカルモンはまた、婦人連に取りまかれて珈琲を飮んでるラボルデツに喧嘩を吹ツかけて行つて、泥醉の爲めに却つて自分がぶツ倒れた。

スティネルはナナがゐないので、老紳士がかの女をどこかへつれてツたのかと心配したが、ドヴンドヴルは渠に老紳士は今獨りで歸つたと告げた。ドヴンドヴルはダグネのかしらが見えたのでナナの寢室へ行つて見ると、ナナは泣いてゐた。そしてダグネとジヨルジとがそれを慰めてゐる。かの女の

考へでは、この會を斯く無作法にされたのが大不平ばかりでなく、ロズが肝心なロベル夫人の、またフオシユリが伯爵ミユフアの、來會を妨げたのだ。ドヴンドヴルがそんなことは無いと辯じても、かの女は再び客席へもどらなかつた。

『ミミさん、パウル、あなたのやうな人はない』と云つて、かの女はダグネの腕に抱かれた。『女ツて、なぜ皆こんなに不運な物でしよう？』

ジヨルジがそのそばで顔を赤らめてゐたので、かの女はこれにも接吻した。が、おほいびきの聲が聽えたので、ナナは飛び立つて愉快さうになつた。ボルドナヴの滑稽な寢すがたを想像したからで、人々に驅けて行つて、先づ、

『まア、いらツしやい』と叫んで、今までは敵と思つたロズと抱き合つた。そして皆々を珈琲室につれて行くと、ボルドナヴはその大きな圖體を椅子二脚の上に横たへて、たわいも無かつた。

午前四時であつたが、カルタ臺が持ち出され、それを急いで取り捲いたのはドヴンドヴル、ステイネル、ミニヨン、並にラボルデツだ。その後ろに立つてルシとカロリンとはかけ事をした。ブランシユはねむいので、五分と置かずに、皆はまだ歸らないのかとドヴンドヴルに尋ねた。舞踏の組はあまり勞れて來たので振はなかつた。

この時、内務大臣の舞踏會を引き上げて來た十一名の青年が到着し、ナナと押し問答の末入るを許された。かの女は心で、ひよツとしたら、同じ會の歸りから伯爵ミユフアも來るか知らんと思つてた

が、そのうち五時が鳴つて、こちらの舞踏も既に濟んでゐた。
だらけた氣分が女どもをしてのろけ話をさせてゐた間に、マリブロンドは自分のお向ふの金持ち露西亞人のことを語り。自分に果物を贈つてくれたのは嬉しいと思つたところ、その中に一千フランが這入つてたので突ツ返したと無邪氣に云つたので、他の年うへの女優どもはお互ひに顔を見合せした。夜が明けかけた時、アルサス方言の歌を歌つた紳士もあるが、その歌の言葉は皆に碌に分らなかつた。最後に押しかけて來た十一名のもの等は、別に面白いことを思ひ付かないので失望した結果、ピアノにシャンパンをつぎかけて、
『おい、ピアノ君、君も少し醉ひ給へ』などと駄洒落れた。
『あら！　どうしてピアノにシャンパンを注ぐの』と、タタンネネが怪しむと、
「知らないの』と、ラボルデツはとぼけて本統らしく云つた。『調子がよくなります。』
マリブロンドは、レアと二人で、互ひに美貌であるかないかを爭つてゐた。顔の見ツともないルシがその仲裁をした。
夜が明けたので、多くは昨夜來の不安と惡意とを含んでの別れをした。ナナは少しもねむたくなかつた。
『ね、牛乳を飲みに行きましようよ』と、かの女はステイネルを促した。そして化粧室に眠つてたゾエを呼び起して、自分の外套や帽子の世話をさせ、『お前の云ふ通りだ、あたしは銀行家をも他のもの

同樣に好き』と告げた。

ボルドナヴは相變らずいびきだし、ジョルジはこツそり寢臺の上の一つの枕に顏を埋めてゐたのが、自分でいつのまにか熟睡してしまつてゐた。臺所の方に待つてゐたダグネをかの女は氣の毒に思つたので、

『またあすいらツしやい、ね、會ふ時間をよく定めますから――心配しないで、ね、少しも二人の間は變りはないのよ』と云ひ含めて、飽くまで接吻させた。伯爵ドヴンドヴルとアルサス方言を歌つた紳士とはまだカルタをやつてゐた。

この伯爵を待つてるブランシユが、ちよッとでも眠らうとして、無理に身を安樂椅子に丸めてゐるのをナナは發見して、

『あなたも行きましよう、牛乳屋へ』と引き立てた。そしてスティネルがそれを邪魔さうにした時は、もう、ナナはスティネルの手を引ツ張つてゐて、渠とブランシユとに向つて云つた、『牛の乳をしぼるのが見えるのよ。』

四

『美女神ヸナス』の第三十四日目の夜、第一幕がすんで第二幕がまだ明かないうちの樂屋では、男優女優がつぎ幕に出る假裝の服裝をすませて、勝手放題な話をしてゐた。ナナをひいきであの殿下がま

た來てゐることを云ひ出した者があると、皆々はナナの幸運をうらやんだ。そして順番に舞臺の方へ出て行くのだ。

そこへフオシユリがミニヨンを伴なつて這入つて來て、ロズに接吻し、殿下のそばにゐる人は伯爵ミユフアだと說明した。ロズはミユフアの養父侯爵ドシユアルも來てゐると語つた。ステイネルが來てゐないのは、きのふから市外へ行つたからだが、多分、ナナの爲めに一邸宅を買ひ求める爲めだと云ふ者があつた。ボルドナヴが合唱隊の娘二人をどなり付けてゐる間に、その幕はまた終つたかして、大喝采の聲が聽えて來た。

やがてボルドナヴがペコ／＼あたまを下げながら、

『どうぞこちらへ――おあぶなう御座います――お氣をお付けになつて』など云ひ／＼、フエルナンド殿下を導いて來た。それに、伯爵ミユフアと侯爵ドシユアルとが從つてゐる。道具かたは、第三幕のエトナ山の書き割りを上から引きおろした。舞臺の傾斜が皆の足もとをあぶなツかしくしたり、落し戶の明きから下のガスのあかりが見えるのが皆に地下の世界かと思はせたりした。

ボルドナヴは先づ化粧部屋の扉を案內なしに明けた。すると、ナナの頓狂な聲がしたと同時に、かの女が湯あがりの半裸體で戶張りのかげへ隱れるのが見えた。そしてかの女のつき添ひ女は、タオルをひろげたまま、ぼんやりと立つてゐた。

『ひどいの、ね、案內もなしに這入つて來て』と、聲ばかりがした。

『心配すな。』ボルドナヴは平氣で云つた、『殿下はお前をお取り喰らひはなさらない。』

『いや、どうだか分るまいよ』と、殿下は微笑した。人々は朝廷へ出入するもののやうに笑つた。侯爵ドシュアルが化粧臺から兎の足を手に取り、これで以つて女優どもはこなお白粉を塗るのだと云ふことを殿下に說明した。

『御免遊ばせ――不意打ちですもの』と、ナナは決心して現はれて來て、こんな樣子で殿下を迎へる無禮を謝した。

『無禮なのはわしぢや』と、殿下は機嫌がよかつた。

ナナはミュフアのゐるのを見て、それと握手し、自分の晩餐に渠が來なかつたのを責めた。そこへフオンタンがシャンパンの壜をかかへて這入つて來て、自分の聖別日だから飮んで呉れろと强ひた。

『おれだツて、貧乏人ぢやアねい。シャンパンぐれゐは――』突然、殿下のゐるのに氣が付き、急にわざとらしい直立の姿勢になり、『ダゴベル王がそとにゐらせられまして、殿下と酒宴の榮を得たいと望んでゐらせられます。』

渠はプルリエルが或王としての假裝をしてゐるのを指したのであつた。殿下は悅に入つて、皆と祝盃を擧げた。

『早く！　早く』と、老優バリヨが皆の出場を促しに來たが、

『なアに』と、ボルドナヴは冷やかに云つた、『見物を待たせて置けばいい。』

殿下はなほとどまつてナナの化粧を見てゐながら、明年は英國へも來いなどと云つた。そしてミユフアはかの女を鏡の中に見込んで、うツとりしてしまつた。

ナナの丼ナスの登場前に、ロズのヂアナが出なければならぬが、その所天ミユヨンとその情夫フオシユリとがつかみ合つて、板の間を二人でころがつてたので、暫くそこを立ち去りかねたが、ボルドナヴに促されて、この喧嘩の音を脚燈の近くに聽きながら、舞臺ではヂアナの妖艶な笑ひを見せ、あツたかい美聲を以つてヴルカンとの二部合唱をやつた。

ナナが『海から湧出』すがたの上に毛ごろもをあをつて登場口に出の時間を待つてるところで、殿下はかの女と頻りに話をした。かの女はいよ〱きツと身がまへして毛ごろもをはねのけたと同時に、登場した。すると、場内の沈默の間に、遠くおほ向ふの甚深な歎息とつぶやきが聽えた。ミユフアは書き割の穴から始終ナナの行動をのぞいて、心を動かした。が、フオシユリが渠をシモヌ並にクラリスの化粧部屋へつれて行くと、伯爵は自分の養父なる侯爵が若くなつたやうな顏つきで椅子に倚つてたのを見て、少しきまりが惡かつた。フオシユリはクラリスを强ひて伯爵に接吻せしめたが、かの女は伯爵に

『これはあなたの爲めではありませんよ、フオシユリが無理におツつけさせるのです』と云つて、登場しに出た。シモヌに付いて侯爵はそこを出て行き、フオシユリも笑つて從つて行つたので、伯爵もあとで獨りそこを出て、階段を降つた。

丁度幕が下りたところであつた。通路でナナは殿下に『では、承知致しました――もう、直き』と告げた。殿下はボルドナヴが待つてる舞臺の方へ行つたので、伯爵ミュフアはナナを追つて行つてその化粧部屋の入り口で後ろからその襟もとに接吻した。かの女は誰れかと怒つて手を擧げかけたが、伯爵であつたのでただにツこりした。そして今晩もあすも駄目だが、自分の屋敷へ來い、自分はオルレアンの近くに一つ、新らしい屋敷を持つたからと告げた。伯爵は辱かしさうに喜んで、殿下の方へ引ツ返さうとして樂屋を通ると、侯爵のシュアルは丁度サタンを接吻しようとしてはね付けられてゐた。侯爵は誰れも適當なのがないので、かの女に打ち込まうとしてゐたのだ。

ラフアロアズその他の若いもの等が外で待つてる方へ女優どもは急いで行つたあとで、ナナは殿下と共に一つ馬車に乗つた。『馬鹿な奴だ』と、ボルドナヴは殿下のことを侮蔑した口調でつぶやいた。そこにロズは自分の所天と共にフオシュリの手を取つてたが、自分の家へ行つてから、この二人を再び仲直りさせるつもりであつた。

ミュフア伯爵は獨りでぼつねんと歸つて行きながらも、ナナの踊り姿を目の前に浮べて、新らしい希望を持つやうになつてゐた。

五

ミュフアはその夫人並に娘をつれて、一週間ばかりの豫定でユゴン夫人の賓客となり、田舍へ來てゐた。その近處にナナの別莊が出來たのであつた。そして食事の時ナナの噂さが出ると、ミュフアはそんな女優のことは知らないと云ふ振りをした。このとぼけ方を見て、ユゴン夫人の息子ジョルジ——乃ち、ナナの初日を見て、その翌日、ナナに花束を送つた少年は驚いた。

ジョルジはナナが別莊に到着すると云ふ日に、母にはあたまが痛いと稱して自分の室にとぢ籠つたと見せ、窓から飛び出して行つた。

ナナは別莊が出來てから、毎日のやうにそこに行つて見ようとしてゐたのだが、ボルドナヴが許可を與へなかつた。で、突然、二日の見込みで、ゾエだけをつれて巴里を出發した。ステーションで初めてステイネルにその趣きを知らせる手紙と、叔母へは愛兒ルイをつれて來いと云ふ命令とを書いた。

かの女はゾエに笑はれたほど田舍の風景を珍らしがり、汽車を下りてからも馬車のうへで子供のやうに飛びあがつてゐた。そして伊太利風に建つた自分の別莊に入ると、番人などは相手にしないで部屋々々を獨りで驅けまはつた。また、暴風雨になつたのもかまはず、野菜園や果樹園の間をまわり歩き、キャベツもある、ほうれんさうもある、果物もあると云つて、白い絹のパラソルが黒く見え、長い裾がびしよ〳〵になるのも平氣であつた。

『ゾエ、お皿を持つて來な、お皿を』と呼んで、かの女がパラソルを横に置いて、夢中で、いちごの實をむしつてゐると、その藪の中で動いた物がある。びツくりして飛び退いたとたんに、ジョルジの濡れ鼠が現はれた。

『あら！　あなた？』

『僕です！』渠はただ眞面目ににこ付いてゐた。

『どうしたのよ――づぶ濡れになつて？』かの女はいちごの事など忘れて、家に火を澤山おこさせた。そして寒さに顫えてゐるジョルジの衣物をぬがせ、かの女自身の新らしい衣物を着せた。そして自分も別なのに着かへて來てから、渠の姿を

『女のやうだ』と云つて、手を打つて喜んだ。

『僕は腹が減つた、御飯を喰べて來なかつたから』と、ジョルジはやがて安樂倚子にからだを延ばした。

『馬鹿だ、ねえ』と、かの女は叱つたが、自分も空腹を感じてゐた。番人にキャベジスープを作らせ、自分の持つて來た袋からは鵞鳥の腸づめやその他のうまい物を出した。そしてかの女とジョルジとはジャムを一つの匙でかたみ代りに甞めた。かの女はこんなに食事がうまかつた事は十年間なかつたと云つた。遲くなるから歸れと命じたが、ジョルジはかの女にまとひ付いてそばを離れなかつた。かの女も、この時、駒鳥の聲を聽いたので、昔を思ひ出し、ルイを生んだ初戀の少年と慣れ合つた時が矢

ツ張りこんな工合であつたと考へてゐた。』あたいあなたのおツ母さんよ』と口には大人ぶつたが、顔にはくれなゐを潮した。そしてその夜の別れを告げる時は、また眞面目くさつてゐた。

翌日、ユゴン夫人の晝食にはフオシユリとダグネ、伯爵ドヴンドヴルと侯爵ドシユアルとが集つた。夫人がナナの別莊のことを話すと、紳士連は皆々とぼけて知らない振りをした。が、ゆふべナナが到着したのをその番人から聽いたと夫人が語つた時は、皆々思はず驚いた。紳士連が何の爲めに珍らしくもここに集つたかと云ふ說明は避けたが、皆ユゴン夫人訪問を出しにして、こツそりナナに會はうとしたのだ。

そのゆふ方、ミユフアが先づ外出したのを見て、ジヨルジは渠を橫みちから追ひ越してナナのもとに驅け付け、嫉妬の情を發表し伯爵と約束した時間があるのだらうと責めたので、かの女はこれを宥めて、ステイネルが來てゐるその次ぎの室にひそませた。そのあとへまたミユフアがやつて來て、殆どいきなり狂氣の如くなり、この三ケ月を待ちに待つた接吻をしようとしたのを、ナナは渠の口に手を當てて靜かにしろと命じた。

ステイネルが段を下りて來たのであつた。室に這入つて來たのを見て、かの女は何げない振りで渠に告げたには、

『あなた、伯爵ミユフアさんがここを通りすがつて火が見えたので、あたし共を訪問して下つたのですよ。』と、二人に握手をさせた。十五分ばかりでミユフアはいとまを乞ひ、ステイネルは寢室へ行つ

た。ナナはやツとジョルジに會つて、間もなく渠を家へ歸らせた。そのまた翌日から、かの女は十五歲の感情にもろい娘となつて、ジョルジと手を取り合つて、皆が寢しづまつてから、そこら當りを月のもとで散步したり、ジョルジの腕によつてすすり泣きをしたりした。

『ほんとに可愛いのはあなたばかりよ』と云つて、渠に永久の愛を誓はせたりもした。子供のルイが到着すると、また母らしい情が起り、それに王さまのやうな衣物を着せて自分と一緒に草の上にころがつて見たり、太陽の光の中にその子ばかりをのたくらせて見たりしたが、ジョルジの若々しい且信實の愛に反く氣は起らなかつた。が、ミュフアも每晩のやうにやつて來た。

六日目に誰れも來まいと思つて、わざと多くの人々を招待して見たら、ミニョン、ラボルデツ、ラフアロアズ、並に女優のルシ、カロリン、タタンネネ、マリブロンド、ガガ等が來た。渠等の話によると、ボルドナヴはナナのちよツとした脫走を怒つて、巡査の手で呼び返すと云つたが、少女優丼オレンに代理をさせて、丼オレンは成功したさうだ。

女どもはよそ行きの衣物で、手に澤山の指輪をはめたまま、畑から、面白さうにポテトを堀つた。ミニョンは父としての殊勝げにその子二名に向つて、ポテトの輸入者パルマンチエの歷史を語つてきかせた。ナナは調子に乘つて、皆でシヤモンの廢寺を見に行くことを發議し、その翌日五臺の馬車を備つた。その眞ツさきには、最も若いマリブロンドとタタンネネとが乘つて、兩公爵夫人の如く氣取つた。第二のには、ガガとラフアロアズ。第三のには、カロリンとラボルデツ。第四のには、ルシとミ

ニヨン父子と。最後のには、ナナとスティネルが乘つて、ナナと同じ車に向ひ合つてジヨルジがゐた。
この一行が或橋のきはを通過する時、向ふから、これは徒走で散歩に出たユゴン夫人等の一行に出會して行き過ぎた。女優連は進行して行く馬車の窓から首をつき出しながら、互ひに大きな聲で、今見たフオシユリやダグネ、ミユフアやドヷンドヷル、その他ミユフア伯爵夫人等のことを噂さし合つた。ナナは、ジヨルジが母に見付けられたことを頻りに氣にしてゐるのを見て、
『あたし、あす、あなたのおツ母さんに手紙を出さうか――スティネルさんが初めてあなたをけふ紹介して來たのだと、ね？』かの女はスティネルのゐるのにもかまはず、ジヨルジの手をいぢくつてゐた。
『いや』と、ジヨルジは暫らく考へてから、『僕は自分で何とか云つて置きます。そしていけなかつたら、飛び出して來て、二度とうちへは歸りません。』
シヤモンへ着して、皆々が見て感に打れたのは、アングラル夫人のことだ。ナポレオン第一世の時に有名な情婦であつたのが、その後熱心な宗教歸依者になつて、こゝの屋形の持ち主になり、今は九十歲の高齡だ。顏にはなほ、公爵夫人として革命の騷ぎをのがれた時の威嚴があつて、眞ツ白な衣を纒つて、手には祈りの本を持つてゐた。それがしづ〳〵と步いて行くと、村の人々は女王に對するやうにうや〳〵しい禮をした。やがてかの女は寺の入り口の石段をあがつて、門內に這入つて行つた。
女優どもは皆目をそば立てて見てゐたが、自分等もやがてお婆アさんになるのだと考へて、嚴肅な

氣分になり、暫しおしやべりをやめてしまつた。殊に、ナナは、その歸り途に於ても、スティネルやジョルジが自分のそばにゐるのも忘れて、かの門內に消えて行つた女王の氣高い後ろ姿をばかり思ひ浮べた。

ミュフアは自分の色がたきはスティネルよりも寧ろ少年のジョルジだと感づいてから、その夜、枕に抱きついてすすり泣きをした。その間にも、自分の妻がフオシュリと段々仲よくなつて行くのを氣が付かなかつた。

ナナはまた皆の友達から、あすはきツと一緒に巴里へ歸れ、自分等が初めから當て込んでゐた博覽會も終りに近づくからと勸められたが、ジョルジのことを思つて、强情にも應じなかつた。ボルドナヴからは手紙が來てゐて、ナナは勝手に保養するがいいけれども、もう、少しも入用はない、非オレンが評判を取つてるからとあつた。ナナは不機嫌の極に達して、叔母ルラの言葉をも聽かなかつた。そして自分はルイに宗敎的敎育を施し、自分もこれから潔白な生涯を送りたいと語つたので、皆のものはおほ聲に笑つた。

溜らないほど可愛いジョルジの愛をも、かの女は、若氣沙汰だから當てにならぬと疑ふ氣が起る時もないではなかつた。そこへまたミュフアがこツそり訪ねて來たので、いつもの顏で迎へはしたが、うるさくなつた。いツそ自分で自分が巴里へ歸ると決心して、

『ゾエ』と、女中を呼び、『あす歸るからその支度をしてお置き！』

六

それから三ケ月ほど經つた頃には、伯爵ミュフアはナナに逃げられるやうになつた。渠は少年ジョルジを心配するに及ばなくなつたのは、ジョルジがその母に監禁されてゐるのを知つてるからだが、それだけまたミュフアは自分がナナの唯一の思ひ物として顏や頰ひげにあまた度接吻されたことを思ひ切れなかつた。

かの女は子供のルイが病氣だから會へないと云つたが、或晩渠が辛抱し切れなくなツて訪ねて見ると、芝居へ行つたとのこと。けれども、今回の芝居にはかの女の役はなかつたのだ。が、待ち伏せしてゐて渠はかの女に會つたので、かの女は止むを得ず――然しばらす機を見ながら――二人で町をぶら付いた後、蠣が喰べたいからと云つて、カフエアングレイに這入つた。

『やア、ナナ！』叫んで一室から出て來たのはダグネであつた。ミュフアは見られないやうに、他室へ隱れた。『うまくやつてる、ね――宮人などを友だちにして！』

ナナは微笑したが、自分の手を自分の口びるに當てて、渠に舌を控へよと命じた。それから、親しげに、渠に、

『どうしてるの、近頃？』

『僕は新生涯を初めようとしてゐる。實際、まじめに、結婚をしようと考へてる。』

かの女はこれを聽いて肩をすくめ、裏を憐れむやうに見た。

「誰れとゐるの？」

『おほ一座だが――レアが自分のエヂプト旅行の話をして皆を笑はせて、さ。』

『御免下さい』と、ボーイは二人の前を皿を運んで行つた。

ナナは、ダグネから、ミユフア夫人が所天をフオシユリに乘りかへてゐる話を聽き、自分もさうだらうと思つたことを語り、

『間男される男なんか大嫌ひ、さ』と云つて、『また會ひにいらツしやい――あたしは相變らずあなたを愛してますから。』かの女はダグネに別れて、ミユフアと共になり、十五分間ばかりでカフエを出た。ミユフアはナナの家までついて行つた。時は十一時であつた。

かの女はフオシユリがフイガロ新聞に掲載した「金蠅」と云ふ比喩文をミユフアに見せた。或娘の話で、家代々酒飲みであつた家族から生れ、娘その人の性も廢頽して、丁度ごみ溜めから生れた金蠅のやうに、害毒を巴里の上流社會に生み付けてると云ふのだ。これがナナをさしてゐるとすれば、かの女はその筆者に復讐する必要があると思つて、ミユフアにその妻がフオシユリと今夜、テイブ街とプロヷンス街との角の家で密會してゐることをあばいた。ミユフアは自分の夫人を實際に田舍へ行つたので、あすの朝、汽車で歸ると思つてるので、

『そんなことは無い』と怒つて、恥辱のあまり、かの女を投げ倒し、足で蹴らうとまでした。かの女

も云ひ過ぎたと思つたので言葉を和らげ、自分はその噂さを聽いただけだから、事實かどうか分らないと云ひ添へたが、それだけでは氣がすまなかつたので、また少しおだやかにだが、斯う云つた――

『女と云ふものは、上流のでも下流のでも、みなおんなじことですよ。』

ミュフアはナナに對する怒りと妻に對する疑念とに夢中になり、そこを飛び出した。そして雨の中をナナの告げた場所へ懸けつけた。午前二時だその角の家の門に身を寄せて雨をよけながら、あかりのついた一つの窓に人かげが見えたりするのをも嫉妬してゐるうちに、冬の夜があけた。

渠は心の苦しみを神に助けて貰はうとして、教會堂に這入り、神に祈つて見たが、しるしがなかつた。そしてまたナナの家に逆もどりしたら、かの女は直ぐ前室に出て來た。

『あの二人を見付けることが出來なかつたのでしようが』と、實際は人のいい女はわが事のやうに怒つて、『でも、ここへはとめられませんから、出て行つて貰ひます!』

『いかない』と、ミュフアは答へて、目に涙をたたへてゐた。今、金のことを云へば、渠の財産はすべてかの女の物になつたかも知れないが、そんなことは、もう、遲いとかの女はぶし付けに云つた。ステイネルでさへ一千フランを持つて來なければこの家に入るなと云はれ、ここ二三日を奔走してゐたのだが、間に合はなかつたのだ。

ナナとミュフアとが出て行け、行かないの押し問答をしてゐるところへ、ステイネルが這入つて來て、それだけの金を得意らしく渡したが、かの女はその包みをステイネルの顏に投げつけた。そして

『すツかりおほ掃除をする』と云つて、前室の奥の戸を明けッ放すと、フォンタンが控へてゐたのである。

『それ！』斯う云つて、渠の方をゆび指し、かの女は悲劇的なこなしをした。そしてその室へ驅け込み、そのあとに扉をしめてしまつた。

スティネルとミュフアとはすご／＼外へ出て、無言で握手して別れた。

ミュフアは濡れた衣物、よごれた靴で自分の家の入り口へ近づいた時、夫人が旅の勞れでよわつた顔つきをして歸つて來たのに出會した。かの女は一夜を汽車の上で眠られなかつたのだ。

七

ナナはすべての物を賣り拂つて一万フランを手にし、債權者の誰れにも知らさないでオスマン廣小路を逃げ出し、フォンタンと共にモンマルトルのヹロン街で二室の借り住ひをすることにし、自分の金と渠の所有金七千フランとを一緒にした。そしてかの女は餓ゑて死んでもフォンタンをだますやうなことはしないと誓言した。

その三日目の晩がクリスマス第十二夜に當るので、僅かの友人を招待した。ルラ夫人、マロアル夫人、ボスク、並にプルリエル。その間に子のルイをもまじらせて、ナナとフォンタンとは皆に夜ふけるまでいちやついて見せた。かの女は再びもとの娘ごゝろに歸つてゐた。そしてそれから三週間ばか

りは無事であつた。
魚を買ひに行つた途中で出會つた床屋のフランシから、自分が姿を隱してからの紳士連の失望や婦人連のその噂さや、ステイネルの失敗、ダグネの投機に成功、ミュフアの氣ぬけ等の話を聽き、歸つてからは、直ぐそれをフオンタンに語つたりしたが、或日渠と共に一女優の初舞臺を見に行き、美人だ、いや美人でないと云ふ爭ひをしてから、元來性のよくない男は女を何かに付けてなぐつたり、締め殺すとおどしたり、カルタに夜をふかして歸つたりするやうになつた。ナナはただ愛の爲めに何ごとも辛抱した。
或日また途中で出會つたもとの知己サタンと共に、久しぶりでカフエに行き、それから歸つて見ると、まだと思つたフオンタンがさきに歸つてゐたので、また怒られてはと遠慮して、マロアル夫人のところへ行つてたと說明した。
『これを見ろ』と、渠は威だけ高に突き付けたのは、まだ母の監禁中にあるジヨルジからナナ宛の手紙であつた。渠は勝手に封を切つてそれを讀み、おれが返事を書いてやらうと云つた。
『およろしいやうに』と、かの女は答へた。一時間もして出來上つた文句を渠は十分に舞臺に於けるやうなこなしを添へて讀んで聽かせたが、ナナはいつものやうに喜んで、渠の首に手をかけに來ないので、渠は不機嫌であつた。そしてまた喧嘩が初まつた。
渠はかの女に引き出しから金を持つて來させて勘定して見ると、もう、七千フランばかりしか殘つ

てゐなかつた。

『たツた三ケ月にしかならないのに、もう、一万フランを使つてしまつたとはひどい』と云つて、渠はありツたけの金を自分で取り込み、これは自分の分だから、けふからは毎日の生活費を毎日半分だけ渡すと宣告した。

「それはあんまりひどい！』かの女の怒つての說明によると、最初、家を持つ爲めの家具や道具などに既に大分費やしたのだ。けれども、渠は承知せずに、

『無駄づかひ屋！』ぴしやりと一つ、かの女の横ツつらをぶつた。それに、こんな手紙が來るだけでも、おれには不快で溜らないと叱り付けた。渠はかかるいさかひや手出しをして、まだ寢るには早い時間を過すのであつたが、かの女は本氣に悲しんで、すすり泣きをしてゐた。

かかる事が度重なり、平手うちの音が毎日のやうに聽えるやうになつてからは、かの女のおとなしく受けてゐる顏の皮膚などが、却つて、鍛はれたやうにいい色を帶びるやうになり、渠から見ると、かの女の美を一しほ增したのである。

『あたしも働きますから』と云つて、かの女はフオンタンから金の爲めに從順にしてゐるのだと思はれないやうにした。結局、かの女がまだ十五歲の頃うろついた怪しい町を、再びサタンと共にうろ付くやうになつた。オペラの建つてるところからジムナス劇場までを十回も往き來すると、またフオブルモンマルトル街を步いて、夜中の二時頃にも至つた。ナナはまだ愛の殘る家庭を破りたくなかつた

が、その家の維持費に窮してゐた。

或夜、巡査の姿を認めて逃げてゐるところを老優ブルリエルに見つかつて助けられた。また、ラボルデツに行き會つて、說教じみたことを聽かされ、今やロズが伯爵ミユフアを捕りこにしてゐるが、氣があれば今一度、自分が仲に這入つてナナの方へ取り返してやる道もあるがと云はれたが、かの女はそれには頓着しなかつた。が、今度、ボルドナヴか興行するフオシユリの作には、丁度ナナに適する女主人公があると注意されたのは、かの女も心がかき亂された。と云ふのは、フオンタンがそのうちの一役を受け持つことにはなつてゐながら、ナナにそんな詳しいことを話さなかつたからである。

かの女は歸宅してフオンタンにこの適當な役があつたのにとなじると、

『役？』と、フオンタンはわざと惚けた。『お前はまだ天才だと思つてるのか？　笑はされらア！』

或夜、ナナは十一時頃に歸つて來ると、戸はうちから締つてゐた。叩いても、叩いても、明ける者がなかつた。その癖、フオンタンが廊下をあちこち歩いてるのが聽えた。かの女は兩手がこわれるほど叩いたので、明けて吳れたことは吳れたが、フオンタンは敷居の上にふさがつて叫んだ。

『畜生！　出て行け！　それとも、締め殺してやろうか？』

かの女は暫しすすり泣いたが、この時ばかりは自分からそこを離れた。そしてあのミユフアを殘酷に取り扱つた自然の報いでもあらうと考へた。さし當り行くところがないのでサタンを訪ねると、サタンも家主から追ツ拂はれたところであつて、ナナをつれて行つて、一夜をラヴル街の曖昧屋に明か

すことにした。が、二人が一緒に蓐へ就くと巡査が押し込んで來て、サタンを見つけ、
『手を見せろ！　指に針を持つたしるしは無からう？』
『あたしはお針女ぢやア御坐いません、物みがきです』と、かの女は大膽にいつはつたが、とう〳〵つれて行かれた。ナナは窓から外へ逃げ隱れてゐたのだが、手をはりがねなどで傷つけただけで、やツと隱れおうすことが出來た。
その夜はそこに眠つて、翌朝叔母のルラ夫人を訪ねると、夫人とゾエとが朝飯をたべてゐて、ナナをやツとこちらの物になつたと喜んだ。
ナナも亦、この數ケ月の間、見たい見たいと思つてたが、フオンタンが惡感を抱くので呼び寄せることが出來なかつた子のルイの寢がほを見て、最後の涙にむせんだのである。

八

ヴリエテ座ではフオシユリの作『小公女』の本讀みをした。俳優どもが——殊にフオンタンが——云ふ通りにしないので、ボルドナヴやフオシユリが怒つてしまつたりした。これをナナは傍聽席から見てゐた。と云ふのは、ジエラルヂンの役を引き受けようかどうかと、先づ傍聽に來たのだ。
ところが、伯爵ミユフアはラボルデツの手引きで、座の化粧室でナナと面會し、かの女のそばに膝まづいて再び熱心に愛を要求し、承知すれば自分の財産をかの女にやると誓つた。がナナは答へた。

『巴里全體を頂戴しても、あたしの望みには叶ひません。』そして今回の劇の公女ヘレンを受け持ちたいと云つた。ミユフアは絶望的に出來ないことだと斷つたが、ナナはボルドナヴが金に窮してゐることを告げ、金さへ出してやれば出來るとし、その力づけにかの女はミユフアの顏や手を幾たびも接吻した。

ミユフアが交渉の結果、ロズミニヨンの受け持ちであつた公女の役が――いろんな故障があつたに拘らず――ナナの手に落ちた。

かの女は高貴な婦人にも扮して、自分の資格を世間に見せてやるつもりであつたが、いよ〳〵初日があくと、あまり出來はよくなかつた。が、それからと云ふもの、かの女の寫眞は至るところに持てはやされ、貴婦人どもまでがかの女を標準にして流行を廣めた。

ヸリエおほ通とカルヂネ街との角に、かの女の邸宅は出來て、あらゆる裝飾品を備へ付け、もとからの侍女ゾエの外に、馭者、料理番、門番等を傭ひ込み、ミユフアから毎月一万二千フランを受け、貞實を誓つたかはりに、一家の主婦としての信用と自由とを得たので、かの女は渠をさへ規定の時間でなければ自分の室に入れなかつた。

すると、或時突然ジヨルジが訪ねて來てから、また度々來るやうになつた。ナナは渠を單に友だちとして歡迎してゐたのだが、それがまた渠の母なるユゴン夫人に知れたので、渠の兄なるフイリプが談判に來た。かの女はこのフイリプをも友だちにしてしまつた。そして毎日を、マロアル夫人と共

にカルタを遊んだり、また他の人々と芝居に行つたり、メイゾンドレエやカフエアングレイに行つたり、朝晩の化粧に耽つたりしてゐた。そしてそれでもあくびばかりが絶えなかつた。

外出の途中でサタンに會ひ、ナナはかの女を自分の馬車に乘せてつれ歸つたが、四日目に姿を隱したので、うちのめしもしてやりたい氣になり、多分ゐるだらうと思ふカフエなどをわざ〱尋ね當てて、再びつれて來た。そしてミユフアの許しを得て、ナナはサタンをも一般の婦人と同樣に持て爲し、ドヴンドヴルやユゴン兄弟のやうな紳士連の間に立ちまじることを得しめた。ところが、或食事の時、渠等の面前で、ナナはサタンと昔のことを思ひ出し、

『おツ母さんは洗濯をんなで、お父さんはお酒飮みで、それが爲めに死んだ』のだと語り合つたので、ミユフアは聽き兼てさし控へしめようとしたが、ナナは『うそを云つて胡魔化してるのは嫌ひ』だと云つて、話をつづけた。そしておしまひにはサタンと一つの梨を口でかじり合ひ、最後の小い切れを取る時には口びると口びるとが相接して接吻までした。女同士のことではあつたが、男どもは少しむツとしたので、皆でサタンをいぢめ泣かせた。

ジヨルジは兄のフイリプさへ立てば、自分も立ち去るに未練はなかつた。ドヴンドヴルも、ミユフアをあとへ殘して行くのは當り前だと思つた。ミユフアはナナと二人でさし向ひになつた時、かの女の手を取り、それを接吻した。ナナはこの機だと思つて、渠の首に抱き付き、渠の娘エステルをダグネにとつがせよと勸めた。が、次ぎの室からサタンが嫉妬深い目を投げてゐたので、ナナはミユフア

から離れて、渠を歸らしめた。

で、サタンは喜んでナナに抱き付き、踊り歌ひながら、窓に走り行き、ミュフアのすご〳〵出て行く後ろ姿を見て、

『あのうすのろさんを御覧よ』と云つて、ナナをかへり見た。

九

ナナは自分の運命を賭するつもりで大競馬へ出かけた。ミュフアから贈つた立派な四輪車に乘つてだが、同伴のフイリプとジョルジとに向つて、ミュフアとはこの數日間喧嘩をして會はない、あの伯爵は實にいやな人だなどと語つた。子のルイも一緒であつた。

競馬場へは、ミニヨン夫婦、ミュフア伯爵夫人なども出てゐた。ダグネは、エステルと結婚がきまりかけてゐるので、伯爵夫人に特別な挨拶をしてゐた。ガガ、クラリス、ブランシュなど女優連の馬車からは、ラボルデツも下りた。ナナは渠にどの馬がどうだかと云ふことを詳しく聽いた。

『あたし、愛國者だから、英國馬には賭けない』などと、ナナが云つてると、ラフアロアスがやつて來た。渠は叔父の財産を受け繼いで、今や立派な紳士になつてるので、ガガその他の女優連が引ッ張らうとしたが、ナナを認めて眞ッ直ぐにこの方へやつて來て、

『あなたが僕のジュリエトです』などと云つた。

ステイネルはシモヌと一緒に來た。
『おや、あの泥棒ちぢイ、また株で儲けたんだよ』と、ナナは語つた。
女皇に從つて、ミュフアが這入つて來た。スコトランド王チヤルスも見えた。ナナはジョルジをしてロズミニヨンのもとへシヤンパンを運ばしめた。かの女はまたボルドナヴが興行失敗の爲めに見すぼらしい風をして來たのを呼びとめて歡迎した。ボルドナヴはナナの組が段々盛んになるのを見て、『おれも女になりたい、なア』と云つた。『然しどうだ、ナナ、今一度舞臺に歸らないか――おれはゲイエテ座を經營するが？』

ナナの脊を叩く者があつた。それはミニヨンで、ミュフア伯爵の夫人がフオシユリに送つた手紙をロズが一つの武器として持つてるから、いつそれを伯爵に見せてあの一家を破滅させるかも知れない、注意せよと忠告した。

この時、皆々が立ち騷いだので、ナナも馬車の上に立ちあがつて見ると、皆の最後の目的なる取り組みが初まるのであつた。コシヌ、アザル、ブム、スピリ、ヴレリオ二世、ルシニヤン等のあとから、ナナと名づけた馬が現はれた。その毛色がナナその人の髮の毛そツくりなので、ナナは『これはあたしの誇りだ』と喜んだ。ボルドナヴも大きな圖體を立ちあがらうとして、おほかたルイを踏みにじるところであつた。夢中な母はこの子を忘れてゐたので、渠はこれを抱きあげて、『お前のお母さんを御覽』と云つて、最後の馬を見せてやつた。

皆は互ひに懸けをしてゐながら、やれフランギパンはやくざ馬で初めから汗をかいてるとか、ルシニヤンは脊が長過ぎるとか、ヴレリオ二世は神經質でかしらを上げ過ぎるとか、互ひに他人の懸ける馬を惡口した。

馬の出達は二度やり直しがあつて、三度目に立派に出た。ラフアロアズがあんまり英國馬に肩を入れてゐるので、ラボルデツは馬車から突き落すぞと威し付けた。多くの馬のうち、スピイ、ナナ、ルシニヤン並にヴレリオ二世の競爭となり、またナナとスピイとの決勝になり、遂にナナがスピイの一頭地を拔いた勝利となつた。

『ナナ！ ナナ！ ナナ！』かう云う叫びが四方から起つた。『ナナ萬歳！ フランス萬歳！ 英國駄目！』

馭者臺につツ立つて狂氣の如く見てゐたナナは、自分自身を譽められてゐるかのやうに喜んで、からだをずツと延ばし、シヤンパンを拔かせた。

ステイネルもシモヌを離れてやつて來たし、その他の男子連も亦集つて來て、萬歳を呼ぶのはナナと云ふ動物の爲めか、それとも娘の爲めか、どツちとも分らないほど盛んになつた。そしてミニヨンが來て告げたによると、ロズはこの景氣を見て怒りを加へ、例の手紙をいよ〳〵伯爵に與へると云つてゐた。

『さうすればいいでしようよ』と、ナナは前後も考へないで答へた。が、氣が付いて、『まア、まア、

あたしはどう云つたのでしよう？　丸で醉つてしまつて。』そしてルイがボルドナヴの肩に在るのを見て、それを抱き取り、嬉しさのあまりこの子の頰ツぺたへぺた〳〵と接吻した。

この競爭でドヴンドヴルは、二年間も骨を折つてゐた企てが失敗したので、泥棒同樣の胡魔化しをしたのが發見され、競馬會員名簿から除かれ、失望の餘り自分の馬屋に火を付けて馬と共に自分も死んだと云はれた。然しまた或人の說では、火を付けてからわれに返り、馬屋の窓から逃げ出したのを見たと云ふ。

一〇

午前の一時頃であつた。ナナはミュファと相對して語つてゐながら、

『あたし天國へ行けるでしようか』と尋ねた。そして眞面目にからだを顫はせて、淚にむせんだ、『死ぬのがおそろしい！　死ぬのがおそろしい！』そして鏡に向つて自分の顏を寫して見ながら、『人が死んだら、どんなに見にくくなるでしよう、ね？』

かの女は兩の頰を引ツ込め、目を大きくあき、下あごをあげて見たが、その樣子を伯爵は見て怒り、そこを出た。

それからナナは醫者を呼ばねばならぬ身となつた。ゾエとジョルジとでかの女を一晚中介抱した。肺勞で死ぬのではないかと、ナナ自身は心配した。サタンだけは別室安樂椅子にもたれて天井を見な

がら、ミユフアが突然やつて來た時でも、
「當り前のことだ、飲み過ぎたのだから」と云つてゐた。
ナナは伯爵を見るとにツこりしたが、青い顏で、
『もう、お目にかかれないかと思ひました、わ。あたし、わづらつて生きてゐたくはない』と云つた。
然し渠が目を泣きはらして來たのを見て、かの女は直ぐそのわけを知つた。ロズが伯爵夫人の戀文を送つたのだ。それとなく問ひ詰めて、伯爵に白狀させてから、フオシユリとの決鬪や夫人との離婚やは決していい手段ではないから、じツと辛棒して、こツちへ通ふ度數を少くせよと忠告した。或女になると、男にかかる新聞沙汰を起させて、却つて自分の評判を高める手だてとするものもあるが、ナナはそんなに惡人ではなかつた。そして、たとへこちらへ來る度數が減つても、決して自分の愛は變らないからと誓つた。
『それに、あなたが奧さまと喧嘩をなさつては、金の出どころも御座いますまい』と注意した。ナナも金はなかつた。伯爵も、なかつた。また伯爵夫人も、かのユゴン夫人の別莊訪問以來贅澤をすることを覺えて、段々家庭の窮迫をおぼえるやうになつてゐた。伯爵家は娘のエステルをダグネに結婚させて持參金を二十万フランに減ずるか、夫人がその叔父から受け繼いだ邸宅を賣るかしなければならなかつた。この邸宅は五十万フランの時價があつたのだ。
エステルとダグネとの結婚披露の日に、ミユフア伯爵と夫人とが入り口で迎へた人々の中には、ユ

ゴン夫人とその二兒ジョルジとフイリプ、ステイネル、ラフアロアズ、フカルモン、侯爵ドシュアル、並にナナとフオシュリもゐた。

『ドヴンドヴルがゐないのは氣の毒だ。』

『この結婚は不釣り合だ、――ダグネはただの投機者ではないか？』

『いや、これから生活を改めるだらう、少くともエステルがさうさせよう。』

『なアに、エステルにはそんな腕はない。』

『ナナがたくらんだ仕事だぜ。』

こんな話があちこちに持ちあがつたあげく、

『伯爵夫人はその娘より十歳も若く見える』と云ふ者があつたので、

『それは、君』と、ラフアロアズがフカルモンに向つて云つた、『君の解釋を聽かうか、ね？』

『いツそのこと、君の』と、フカルモンは皮肉に返答した、『いとこに聽くが早みちだ。』

丁度記者のフオシュリが近づいて來たのであつた。

『あれを見給へ――あれを』と、誰れかがゆび指した方をフオシュリは何げなく脊のびをして見ると、伯爵夫人がゐるのであつた。

『ああ』と、渠はそらとぼけて・他の紳士連と握手の挨拶をした。

その夜、伯爵は夫人の寢室へ二年目で這入つて行つた。そして互ひに自由の行動を默認したことに

なつた。そしてまた夫人の叔父の遺產を賣つて、互ひに窮した現狀を救ひ合ふことになつた。
ダグネはまた結婚式を教會で擧げた日に、ナナを訪問し、寶石の贈り物を手渡した。かの女は何の意味だと尋ね返すと、渠は今回のコンミションだと說明した。
『ああ』と、かの女は思ひ出したが、この結婚を成立させて見せるから』『その時はたんまりと、ね』などと冗談を云つたことがあつたのだ。笑ひながら、また病氣の爲めに淚をたたへながら、かの女は渠を兩手で抱き寄せた。『あなたは感心、ね。接吻して頂戴。これが最後の接吻でしようから。』

一一

或日のたそがれ時に、ミユフアはナナの家を訪づれると、召し使ひどもは臺どころの方でわや／＼騷いでゐて出て來るものがなかつた。で、自分で這入つて行つて、二階の居間の扉をあけると、赤い窓かけ、立派な椅子、うるしで塗つた家具、その他の飾り／＼がうす暗い中に僅かに見えた。
ふと氣が付くと、ナナがゐた。そしてその派出な衣物の光りで、ジョルジがかの女に寄りかかつてゐるのが見えた。伯爵は喉を締められたやうな驚きの叫びをあげた。
ナナも驚いてすツくと立ちあがり、渠を次ぎの室に押して行き、時間をはづれてなぜ來たかと責めたが、渠の無言で心を痛めてゐる樣子が可哀さうになつたので、
『あたしが惡かつたのです、許して下さい、ね。痛手になつてから、皆が同情して來てくれるのです

もの』と云つた。渠もナナの哀願に少し氣を取り直したが、かの女の貞實を疑はずにはゐられなかつた。

この時がナナの全盛時代で、巴里の社交界でのおもな紳士連を殆どすべて引き付けた。贅澤の限りを盡し、金錢を全く侮蔑し、かの女の口から出る一呼吸は黄金をもその場に灰として、風が來れば直ぐ飛び散つてしまうありさまであつた。が、なほ最後の出來心として、寢室を飾り飾つて神壇の如く、王座の如くし、そこに自分の威ある美貌を据ゑて、巴里全體が來たつてこれを拜むやうにしようとした。ラボルデツと相談して二名の金細工屋を傭ひ、寢室の爲めに五万フランをかけ、これはミユフアが新年の贈り物として自腹を切つた。

でも、かの女は黄金を湯水の如く費やしながら、たツた十圓の金にも困つてゐた。時々は召し使ひのゾエから借りたり、出しさうな友人から出させたりした。

この三ケ月間は、かの女はフイリプの懷ろを絞つてゐた。そしてこの大尉がたまには澁い顏をしても、かの女の優しい一目が直ぐ渠をしてわれを忘れしめた。

或夜、ナナは自分の耶蘇名はテレサで、その聖日は十月十五日だと發表すると、紳士どもは皆かの女の爲めに祝ひの贈り物をした。フイリプも黄金をちりばめたサクソン燒きの瀬戸物に金平糖を入れて持つて行つた。

『氣をお付けなさい、もろいから』と、渠が云ふ口の下から、かの女は手に取るが早いか毀わしてし

まつた。渠が折角の心つくしを云ふ風にしよげたのを見て、かの女は自分の腕を以つて優しく渠の首を捲き、

『馬鹿、ねえ、あなたは――毀われたツて同じやうにあたしはあなたを愛してる、わ。』そして別な人の贈つて來た絹の扇子をばり／＼と引き裂いて見せた。『ねえ、あなた、あす百圓ばかし持つて來られない？――パン屋の附けが氣になるのですもの。』

フイリプは不精無精に出來るだけ持つて來ると答へた。ナナは湯あがりであつたので、髮を解かし初めた。渠はそこへ行つて聲を顫はせながら、

『僕と結婚して下さい』と云つた。

『いけませんよ、あなた』と、おほ聲に笑つて、『たツた百圓であたしを釣るつもり？』

ジョルジはこの樣子を、こツそり家へ這入つて來て、室の入り口の鍵の穴からのぞいて見てゐたのであつたが、すすり泣きをこらへて自分の家へ逃げ歸つた。そしてその夜一夜は兄をねたさとナナを戀しさとの爲めに眠れなかつた。

ユゴン夫人が突然驚きあきれたのは、わが子フイリプが聯隊の金を一万二千フラン費消した爲めに獄裏へぶち込まれたことだ。

ナナは朝からパン屋に怒鳴り込まれて、晩まで待てと云つて歸した。フイリプがまだ約束の物を持つて來ない。いやな不愉快な顏をしてゐたところへ、ラボルデツが寢臺の圖面が出來たと云つて持つ

て來て、金細工屋の話では、こんな立派な寢臺には女王だツて橫たはつたことがないと云つたと告げたので、一時かの女は愉快で溜らなくなつたが、パン屋のことを思ひ出して、

『時に、ラボルデツさん、百圓の持ち合せはないか』と尋ねた。

『そりやア閉口だ、な――伯爵を呼んで來ませうか』と、ラボルデツは答へた。男女の間の世話燒きは喜んでする男だが、渠は女には金を貸さないと云ふことを一生の座右銘にしてゐた。ナナはまた二日前に伯爵から五千フランをねだり取つたところだから、暫く駄目だと思つてるのだ。ふと老トリコンのもとへ行つて賴まうと決心した。

かの女が室を出ようとすると、ジョルジがやつて來たので、

『兄さんの用でしよう』と聽いた。

『ちがふ！』少年は、もう、嫉妬のうわ塗りをされて眞ツ靑になつた。が、かの女はそれに氣づかないで通り過ぎてから、ふり返り、

『あなた、お金を少し持たない？』

『持ちません。』

『さう、ね、あなたはあかちやんだツた』と云つて、行きかけると、ジョルジはかの女をつかまへて、『兄さんと結婚するつもりだらう』と泣き聲になつた。『結婚するなら、僕とです――僕とです！』

『あなたも亦うるさくなつたの、ね、お放しなさい。誰れかに二百圓ばかし借りに行くところだか

ら。』

ナナは直ぐどこからか金を借りて來て、ゐずわつてたパン屋に拂ひ、自分の居間にあがつて見ると、まだジョルジは待つてゐた。

『僕と結婚する？え、僕と結婚する？』

かの女は何も答へないで肩をすくめた。そしてそこを出て寢室へ這入り、ぴしやりと扉を締めた。ジョルジはそれをあとから半ばあけて、かの女の留守にかの女の鏡臺から出して用意してゐた髮剃りを以つて自分の胸につき込んだ。

『ゾエ！ゾエ！』びツくりして女中を呼んでるところへ、ユゴン夫人がぬツと現はれて來た。

『奥さん、あたしのせいでは御座いませんよ、あたしに結婚を要求して、いやと云つたら、自殺したのです。』

夫人が近づいて見ると、ジョルジであつた。ナナは矢張り同じ辯解を繰り返した。そしてまた云つた、

『ジョルジの兄さんがゐたら、分ることです。』

『…………』夫人はただ目をきら付かせて、『あれは泥棒をして入獄しました――あなたは私どもに大變な損害をかけました』と云つて、ジョルジをつれて歸つたところへ、ミユフアが來た。ナナは渠にもすべて自分の罪ではないと辯解して涙にむせんだ。實は、かの女ばジョルジの無垢で愛らしいのに

惚れ込んでゐたのであつた。それでも、死んでしまへば、もう、妬みそねみもない筈でしようと伯爵に語つた。が、ジョルジの生命にはまだ望みがあると云ふ報告を受け取つた時は、喜んで踊りまわつた。

或朝フカルモンがナナの家を出て行くのを見て、ミュファはまたかの女に説明を求めた。すると、かの女は怒つた。もう、嫉妬を聽くには勞れてゐたのだ。

『あたしはフカルモンを友だちの一人にしてゐます。それがどうしたんです、このとんちきさん！』

とんちきとはこれまで伯爵に對するかげ口であつたが、面と向つて云つたのはこれが初めてだ。伯爵は怒つてこぶしを握つた。

『それで分りました』と、ナナも大膽に渠に迫り行き、『お氣に召さなかつたら、どうか出て行つて下さい。』

それからと云ふもの、渠とかの女とは金錢のことで度々云ひ合ひをするやうになつた。かの女はまた自分の召し使ひどもと喧嘩をした。召し使ひのうち、ヸクトリンとフランソアとはダイヤモンドを盜んだのが發覺して追ひ出された。ジュリアンや馭者のカルルもゐなくなつた。

ナナは燒け氣味になつて、或音樂隊の歌手と戀中になり、自殺しようとしたが、死ねなかつた。伯爵はそのあと始末の介抱をしながら、かの女ののろけ話と男子罵倒とを聽いた。

ナナとサタンとは女同志の戀をしながら、二人が喧嘩をした時などは、ナナは途中で遇つたいい女

を誰れでもかまはず馬車に乘せてつれて歸つた。また、男子に假裝して、安芝居やその他の刺戟ある場所をぶらついた。

伯爵はフカルモンに對して決鬪を申し込まうと云ふ氣になつて、ラボルデツに相談して見ると、ラボルデツは笑つて答へた、

『ナナに關して決鬪ですか？巴里中が笑ひますよ。』

フカルモンは十年間の海軍々役中に溜めた三万フランばかりの金を、ナナの爲めに、みんな吸ひ取られて、殆ど素寒貧になつてゐた。スティネルもまたはだかにされて、召し使ひに拂ふ金をナナから返して貰つたことも出來た。ラフアロアズの財產をもナナは少しづゝ喰ひかじつて行つた。伯爵夫人と爭ひ別れ、ロズにつツけんどんにされたフオシユリも、またナナに吸はれた。

或日ラフアロアズが

『僕と結婚おしなさい』と云つたので、ナナは渠に向ひ、それは男子どもの合唱歌だと答へて、その唱歌手としてジヨルジ、フイリプ、フカルモン、スティネルその他の名を擧げて見せた。

かの女は熊の眞似をして吠えたり、かみ付いたりして見せてから、ミユフアにもさうせよと命ずると、ミユフアはまた吠えたり、かみ付いたりして見せた。渠がノルマンヂに行き、破產の殘物を賣り拂つて、四千フランを持つて歸つて來ると、ナナの室には伯爵の義父なる侯爵ドシユアルがゐた。扉を半ばあけて驚いてゐる伯爵を、ナナは締め出じてしまつた。

伯爵は絶望のあまり、そこに顫える膝を落して、

『神よ、助け給へ。然らざれば、私を殺して下さい』と祈つた。そこへ偶々信心家のヴノがやつて來た。二三日渠を尋ねてゐたので、渠を見るが早いか同情しながら、また別な苦々しい事件を語つて聽かせた。ミユフアの夫人が或呉服商の青年とかけ落ちしてしまつたのだ。そして娘のエステルは父に向つて六万フランの訴へを起した。これは持參金をそれだけ割り取つてあつたからだ。ミユフアはヴノに導かれて、再び嚴格な宗敎生活に入ることになつた。

ゾエはミニヨンの賴みによりやがてロズの世話かたになることを承諾した。サタンは二週間ばかり見えなくなつた間にラリボアシエル病院で死にかけてゐた。ジヨルジもとう〳〵死んだことが分つた時は、ナナはむせび泣きをして、

『あの子ばかりではない、萬事です。すべてです。あたしは不仕合せだ。皆がまたあたしをおそろしい女だと云ふだらう――けれどもあたしは道理を知つてゐた。皆が皆結婚して呉れろと云つて來るのだから、それを承知してゐたら、十度も二十度も男爵夫人や伯爵夫人にはなれたのに、あたしは決して承知して來なかつた。』

かの女は社會の組織が惡く出來てゐるのだと人に語つた。

ボルドナヴが殆ど一錢も持たないで乘ツ取つたゲイエテ座で、ナナはプルリエル並にフオンタンと再び舞臺に登つた。今回はかの女の役は物を云はないでいいのだが、それでゐて大當りを取つてゐた。ところが、何かちよツとしたことからボルドナヴといさかひをして、かの女は姿を隱してしまつた。家、屋敷、家具、衣服等、すべて立派な物を殘らず賣り拂ひ、六十万フラン以上を持つて、どこか外國へ行つてしまつた。

數ケ月經つうちには、ナナはエヂプトへ行つたとか、露西亞にゐるとか、いろんな噂ばかりが立つてゐた。

或七月のゆふかた、八時頃に、ルシは馬車を驅つて行く途中でカロリンエケが徒歩してゐるのを見たので、

『カロリン、カロリン、もう、食事をして？まだなら、一緒にいらツしやい。ナナが歸つて來てよ。』

『ほんと?!』カロリンは信ずるやうな、信じないやうな樣子をして、ルシの馬車に同乘した。

『かう話してゐる間にも、死んだか知れやアしない――グランドホテルで、天然痘で。』

『えツ、ほうさうで？』

『全くお話のやう、さ、ね。』かう云つて、馬車のうへでルシが物語つたによると、ナナは露西亞の或王子と結婚して、女王になつてゐたが、何でも喧嘩をした結果、再び巴里へ歸つて來た。荷物をステーションに預けたままで、先づ叔母のルラ夫人を訪ふと、愛兒のルイが天然痘にかかつてゐた。その

翌日、ルイは死んで、ナナは叔母と怠つてゐた送金のことで喧嘩をして、或ホテルへ出て行くと、そこでミニヨンに會つた。ナナはからだに顫えをおぼえて、加減がよくなかつた。ロズは所天からこのことを聽き、もとは互ひに反目してゐた間であつたが、泣きながら驅けつけて、ナナをグランドホテルに移し、そのそばを離れないで三日三晩看護してゐたのだ。

ホテルに着くと、ミニヨンがゐたので、

『樣子はどうです、ね』と、ルシは尋ねた。

『知らない』と、渠はふくれツ面で答へて、この二日間ロズは二階から下りて來ないが、何て馬鹿だらう、自分までもかほにあばたが出來たらどうするつもりだと云ふやうなことをこぼした。そこへフオシユリがまた樣子を見に來たので、ミニヨンは渠にあがつて行つてロズをつれ出して來ようではないかと相談したが、誰れも行くものはなかつた。

フオンタンはほろ醉ひ加減で或室から出て來たので、皆がナナの病氣でゐることを告げると、直ぐ見舞ひにあがつて行かうとしたが、ほうそうと聽いて渠も足を引き返した。渠は五歳の時にそれになりかけた。ミニヨンの話では、自分の姪が一人それで死んだ。フオシユリはまた自分の鼻のさきに三つばかりあばたが殘つてるのを示めした。ルシとカロリンとは群集が外に段々密集して來るのを驚いて見てゐた。

『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』と叫んでゐるのであつた。

『勝手に行つてあたまでもぶち毀わせ』と、ミニョンは軍隊のことなど無頓着であつた。が、フォンタンは軍籍のことを大事さうに語つた。

然しまだ誰れも進んでナナの病室へ行かうとするものはなかつた。

ホテルの前の腰かけの一つにミュファはその顏をハンケチに隱してかけて、二階の窓の一つを頻りに氣にしてゐた。渠は朝の六時から來てゐたのだ。半時間毎にボーイに就いて二階の病人の樣子を糺き、また腰かけへ返つたのだが、宣戰の布告や群集には少しも氣が付かないで、最後にボーイに就いて聽くと、

『ナナは今死にました』と云ふのであつた。

ミュファは腰かけに返つて顏をハンケチで埋めた。他のもの等にも皆打撃であつたので、皆は異口同音に叫びをあげたが、また他の叫び聲の爲めに壓倒されてしまつた――

『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』

かかる時、かかる病氣でナナが死んだとは、皆々に殆ど信じられなかつた。かの女が最後にゲイエテ座で、水晶洞の中に現はれた時は、物は一つも云はなかつたが、それか却つて一しほの奧ゆかしさをかの女の美しい肩、美しい姿、美しい腰付きに加へたのであつた。皆々は今やその時の美をばかり思ひ浮べてゐた。

『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』街路にはまた一段と群集が大きくなつて、帽子の浪

うつ海であつた。その間を息せき切つて、ブランシュが驅けて來た。

女連は、――新着者と合せて三名――好奇心もまじつて、二階へ冒險することに一致した。そしてナナの病室へ這入ると、既に五名の婦人がゐた。ガガ――シモヌ――クラリス――レアドオルン――これ等は然し見舞ひ客ではないかのやうに、帽子や手袋を着けたままであつたが、ロズとミニヨンだけは、三晩の看護に勞れて、顏は眞ツ青に、髮も亂れてゐた。そして、

『ナナは變つてしまつた！　變つてしまつた！』

シモヌとクラリスとは死人の持つてゐたダイヤモンドはどうなつただらうと語り合つた。そればかりでなく、もツと立派な物がふえた筈だと云つたものがある。ルシはステーションにとめ置きになつた遺産を誰れが繼ぐだらうと質問した。あの死にそくなひの叔母は果報者、さ、ねと誰れかがつけ加へた。

『可哀さうに』と、また一人が、『可愛いルイも死んでしまつて！』

『死んだ兒は却つて仕合せ、さ』と、ブランシュは云つた。

『ナナだツてさう、さ、ね』とカロリンは云ひ加へて、

『つまり、この世はさう面白いものぢやアない、ね。』

『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』この叫びに、安樂椅子に眠つてたガガは目をさました。ルシはブランシュとカロリンとを窓に招いて、おほ通りの群集の上に夕陽が火事のやうな色を投

げてゐるのを眺めた。すると、ミュブアがなほ例の腰かけでハンケチに顔を埋めてゐるのが見えた。
　マリブロンドはスティネルと一緒に乘つて來たが、二階へは一人で來た。
『あいつ等は一ダスばかりも集つてながら、煙草ばかり吹かしてる』と、マリは來ると早いが云つた。
實際、下にはまたボルドナヴ、ダグネ、ラボルデツ、プルリエル、その他が加はつた。そして渠等に對してフオンタンは五日間でベルリンを占領する策戰計畫を演說した。
『ナナは變つてしまつた！　變つてしまつた』と、ロズはマリにも悲しさうに告げた。この時、タタンネネとルイズ丼オレンとが這入つて來たが、この二名は三四百も間數のあるホテル中を二十分間もまごついてゐたのだ。
『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』焚い松行列はまだつづいてゐた。
『一體、どうなるのだらう、ね』と窓の外を見てゐたルシはふり返つて云つた、『あたし達は？』
『あたし、あさツて』と、カロリンは落ち付き拂つて答へた、『ロンドンへ行つちまう――お母さんが、もう、家を一つ用意して呉れたんだから。巴里にゐて、殺されたくないから、ね。』
『國賊！』マリはぷり〳〵怒つた。『あたし、男なら、出陣してプルシヤの豚どもを打ち殺してやる！』
『さうブルシヤ人を惡くお云ひでない！』ブランシュは反對に激した。『プルシヤ人だツて、人間だ、わ、ね。それに、佛蘭西の男どものやうにやア女をいぢめないよ。』かの女は自分の世話を受ける、一

プルシヤ紳士が、きのふけふのこと、國外に追ひ出されたのを追ツかけて行つて、獨逸で一緒になりたいとも云つた。

『もう、おしまひ、さ』と云つて、ガガは折角、たツた一週間前に、ジュヸシに買つた家をプルシヤ人の爲めにうち毀わされることが心配であつた。

『しツ!』ロズが皆を制した。が、また叫びが聽こえた。

『ベルリンへ! ベルリンへ! ベルリンへ!』

女どもはまたどこにゐるかを忘れてしまつた。共和政府の賛成説や、帝國維持論などが出た。また、獨逸のビスマクを毛だ物と罵しる者や、まさかそんな分らず屋ではないと辯護する者などもあつた。

『しツ!』ロズはまた段々大きくなる皆のおしやべりを制した。つべたい死骸が再び皆の心を引いた。

『ベルリンへ! ベルリンへ! ベルリンへ!』

『ロズ! ロズ!』廊下でミニヨンがその妻を呼ぶ聲がした。フオシユリは扉をあけて、またロズに出ろと告げた。男連は皆室のそとまで來てゐた。

『もう、あたしも出ましよう――ナナが死んでしまへば、用がない――尼さんを賴んで來るだけのことだから』と、ロズは云つた。そして今一度新らしい蠟燭を死人の枕もとへつけかへた。ぱツと火があかるくなると、死人の顏が皆によく分つた。『ナナは變つてしまつた! 變つてしまつた!』

他のものにも、最後の一目に、ナナに對する今までの美しいまぼろしは消えてしまつた。巴里中を魅した眼は力なく窪み、高い鼻や艶のよかつた頬は膿んだ出來物だらけになり、その有名な金髮は水の涸れた川底のやうに光りもなくなり、からだ中から毒々しい臭氣を發してゐた。女神ヸナス・全くの解體であつた。

皆がその室を出た時、また叫びが聽えた。

『ベルリンへ！　ベルリンへ！　ベルリンへ！』

泡鳴全集第十三卷終

大正十一年四月十五日印刷
大正十一年四月十八日發行

泡鳴全集　第十三卷
（非賣品）
個製本

著作者　岩野美衞

國民圖書株式會社代表者
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
發行者　中塚榮次郎

東京市麴町區山元町二丁目十四番地
印刷者　長谷川美麿

印刷所　國民圖書株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地
發行所　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
振替東京五二二九八番